青森県埋蔵文化財発掘調査報告書　第276集

畑内遺跡 Ⅵ

－東北農政局八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う遺跡発掘調査報告－

２０００年３月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財発掘調査報告書　第276集

畑内遺跡 Ⅵ

－東北農政局八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う遺跡発掘調査報告－

２０００年3月

青森県教育委員会

C捨場出土縄文時代前期土器群

大木系土器群

北陸系土器群

序

青森県の南部に位置し、岩手県と境を接している南郷村には新井田川流域を中心として現在232箇所の遺跡が確認されています。青森県教育委員会では、平成４年度から、八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）の実施に伴い、事業地内に所在する畑内遺跡の発掘調査を実施していますが、今回の報告書は平成５年・６年・７年・９年度の４カ年にわたって調査された縄文時代前期の捨場の報告となり、畑内遺跡の報告書としては６冊目となります。

調査では大量の土器・石器などが発掘されましたが、地元の土器に混じって他地域の土器が発見されるなど、当時の広域的な交流の実態に迫る資料が注目されます。

今後、この調査成果が、地域の歴史の研究・解明や地域社会の歴史学習に活用されることを心から期待してやみません。

最後に、平素から埋蔵文化財の保護に対しご理解を賜っている農林水産省東北農政局八戸平原開拓建設事業所、南郷村及び同村教育委員会、並びに調査の実施、報告書の刊行にあたって種々御指導・御協力をいただいた関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

青森県教育委員会

教育長　　**佐藤　正昭**

例　　言

1　本報告書は、平成５、６、７、９年度に実施した南郷村畑内遺跡発掘調査報告書の捨場出土遺物編である。

2　本遺跡は、平成10年３月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番号65002として登録されている。

3　本報告書の執筆者は第Ⅲ章を木村が担当し、残りは茅野が担当した。

4　資料の分析、鑑定、実測については、以下の方々に依頼した（敬称略）

出土石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山　力
出土石器の実測委託（剥片石器）	（平成８年度）	フォトショップいなみ
	（平成10年度）	株式会社シン技術コンサル
出土剥片石器の実測及び分析	（平成11年度）	株式会社アルカ
出土土器の実測委託（一部）	（平成11年度）	株式会社シン技術コンサル

5　本書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、建設省国土地理院発行の５万分の１の地形図「三戸・階上岳」を複写したものである。

6　挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。

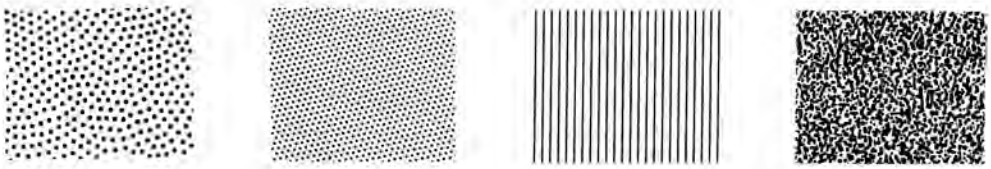
7　調査要項・調査の方法と調査の経過については「畑内Ⅰ」～「畑内Ⅴ」と同様であるのでここでは省略した。

8　遺構・遺物の分章・挿図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。

(1)　遺構内外の堆積土の注記及び遺物の色調表現には、「新版標準土色帖」（小山、竹原；1994）を用いた。

(2)　遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は土器類cm、石器類mm、重量はｇである。

(3)　図中で使用したスクリーントーンの表示は指示のない限り以下の通りである。



凹み　　敲打痕 われ口　　スリ面　　打れ面のミガキ みがき

9　引用・参考文献については本文末に納めた。

10　発掘調査及び報告書作成における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

11　本報告書作成に際して、下記の諸氏より御協力、御助言を受けた（順不同、敬称略）

稲野祐介、伊藤隆三、高田秀樹、藤沼邦彦、谷口康浩、角張淳一、高見俊樹、山崎忠良、杉山武、池谷勝典、山口博之、黒坂雅人、齋藤主悦、三宅徹也、小笠原義範、秦　光次郎、村木　淳、森　　淳、

目　　次

巻頭カラー図版
序
例　　言
目　　次

第Ⅰ章　周辺の遺跡…… 1
第Ⅱ章　C捨場出土遺物…… 2
　第1節　C捨場の層位…… 2
　第2節　遺物の出土状況…… 3
　第3節　C捨場出土縄文土器…… 7
　　1　縄文時代早期から前期初頭の土器…… 7
　　2　縄文時代前期中葉から中期初頭の土器…… 9
　　3　縄文時代中期中葉から晩期の土器…… 87
　第4節　弥生時代以降の土器…… 91
　　1　弥生時代前期初頭の土器…… 91
　　2　弥生時代後期以降の土器…… 104
　第5節　C捨場出土石器…… 107
　第6節　土　製　品…… 169
第Ⅲ章　B捨場（西捨場）出土遺物…… 174
　第1節　B捨場（西捨場）の調査…… 174
　第2節　土器について…… 174
第Ⅳ章　ま と め…… 195
遺物観察表…… 196
引用・参考文献…… 221
写 真 図 版…… 223
報告書抄録…… 275

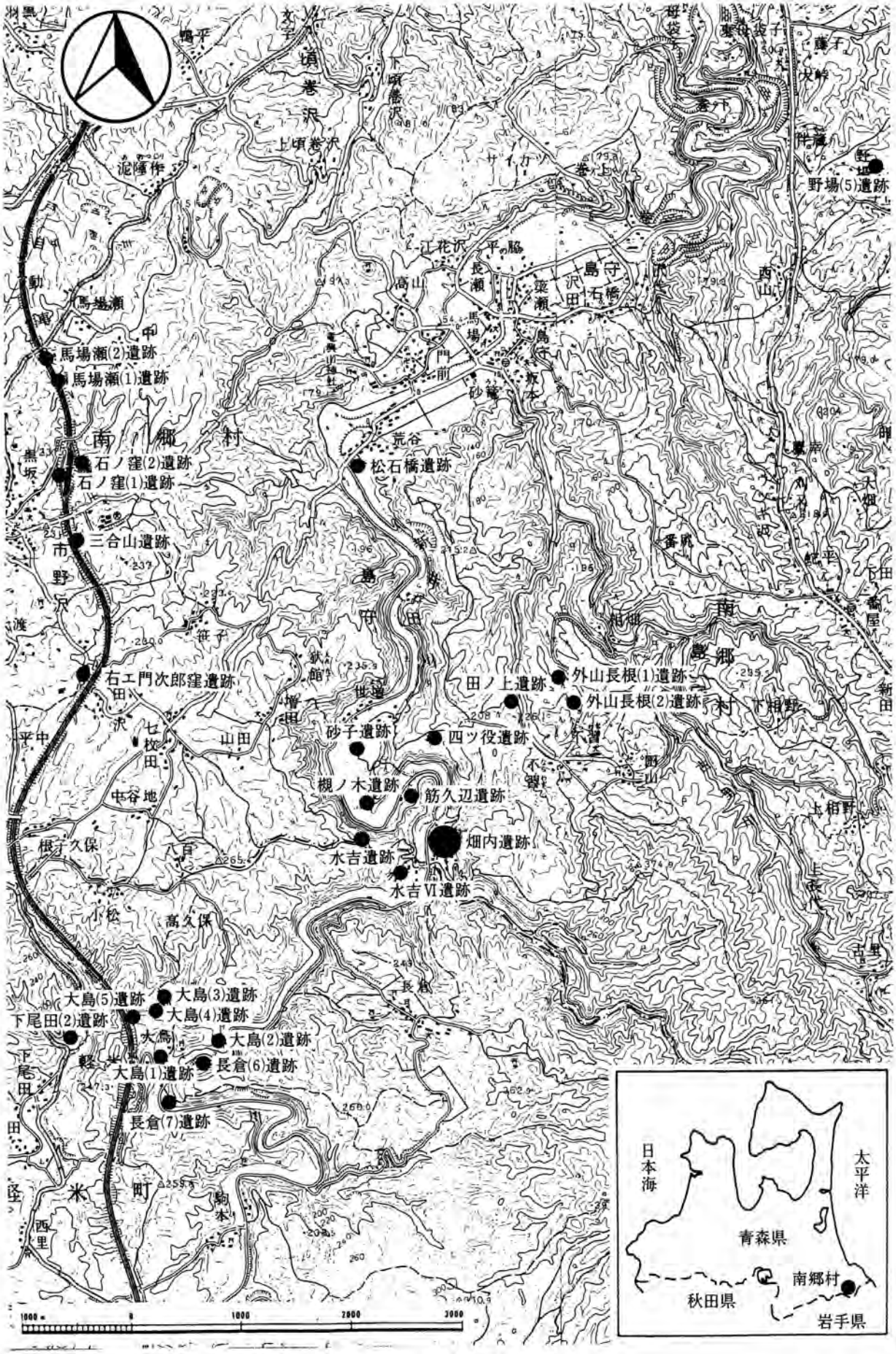

野場(5)遺跡
馬場瀬(2)遺跡
馬場瀬(1)遺跡
石ノ窪(2)遺跡
石ノ窪(1)遺跡
三合山遺跡
右エ門次郎窪遺跡
松石橋遺跡
田ノ上遺跡
外山長根(1)遺跡
外山長根(2)遺跡
砂子遺跡
四ツ役遺跡
槻ノ木遺跡
筋久辺遺跡
畑内遺跡
水吉遺跡
水吉Ⅵ遺跡
大島(5)遺跡
大島(3)遺跡
大島(4)遺跡
大島(2)遺跡
大島(1)遺跡
長倉(6)遺跡
長倉(7)遺跡
南郷村
日本海
太平洋
青森県
秋田県
岩手県

図1　遺跡位置図

第Ⅰ章　周辺の遺跡

畑内遺跡は青森県南東端に位置する南郷村の岩手県との県境に位置する。遺跡の西側には岩手県に源を発する新井田川が流れており、遺跡はその右岸の河岸段丘上に営まれている。新井田川は岩手県内では雪谷川と呼ばれ、九戸村を源流とし、軽米町大鳥付近で岩手県山形村を源流とする瀬月内川と合流し青森県にいたり新井田川となり、南郷村、八戸市を経て太平洋に到達している。

この地域では1980年代の東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴い発掘調査が大規模に行われるようになってきたが、そのほかにも八戸平原開拓建設事業関連などで多くの遺跡が発掘調査されている。特に八戸市、南郷村、軽米町は遺跡の宝庫であり、平成10年３月現在で八戸市では274箇所、南郷村では232箇所、軽米町では実に484箇所の遺跡が登録されている。その多くは現在の人間が居住している場所とほぼ場所を同じくしており、新井田川やその支流添いの平地、丘陵地に残されていることが多い。畑内遺跡周辺の遺跡についての概要は、すでに発刊されている『畑内遺跡Ⅰ』～『畑内遺跡Ⅴ』に詳しいので、ここでは本遺跡に関連する時代の遺跡について概観してみたい。

畑内遺跡からはこれまでに縄文時代早期中葉、早期末～前期初頭、前期中葉～中期初頭、中期後葉～後期初頭・後期中葉、晩期前半、晩期終末～弥生時代前期初頭、弥生時代後期（続縄文時代）、平安時代の各時期の遺物が出土しているが、その中で遺物量、遺構数の多い時期は縄文時代前期中葉～中期初頭までと縄文時代前期末から弥生時代前期初頭までの２つの時期である。前者は円筒下層式土器群を主体としており、後者はいわゆる砂沢式に並行する時期としてとらえられている。

新井田川流域沿いの縄文時代前期～中期の主な遺跡としては八戸市是川一王寺遺跡・軽米町大日向Ⅱ遺跡・田代遺跡・大鳥遺跡などがあげられる。特に大日向Ⅱ遺跡とは直線距離で約６㎞しか離れておらず、出土している遺構・遺物量ともに畑内遺跡に匹敵するような遺跡である。縄文時代前期に関係する住居跡は85軒確認されており、土坑（フラスコ状土坑）は60基確認されている。特に住居跡の中には大型住居跡が数軒含まれていることが注目される。遺物についても、遺構内・外から畑内遺跡のものに非常に似ている遺物が出土している。田代遺跡、大鳥遺跡からは遺構は確認されていないが、包含層より多量の遺物が出土している。八戸市是川一王寺遺跡では山内清男により円筒下層式土器が層位的に発掘されており、それを元に現在の円筒下層式土器の編年の骨子が組み立てられている。青森県南部地方では畑内遺跡調査以前は円筒下層式土器がまとまって出土した遺跡は福地村館野遺跡と階上町白座遺跡のみであった。平成４年度から開始された畑内遺跡の調査ではこれまでに多量の遺構・遺物を発見している。今後、この地域の中での遺構、遺物・集落形態等の比較研究を突き詰めることにより、岩手県北部地域から青森県南部地域での円筒土器文化のあり方が徐々に明らかになることと思われる。

弥生時代前期の遺跡で主なものには、南郷村内では遠賀川式系の被篭土器を出土した松石橋遺跡、八戸市内では是川中居遺跡・是川堀田遺跡、該期の竪穴住居跡を数棟検出した牛ヶ沢(4)遺跡、軽米町内では大日向Ⅱ遺跡、君成田Ⅳ遺跡、君成田下野場遺跡、などが挙げられる。すべての遺跡ではないが、この地域には在地系の土器に伴って、いわゆる遠賀川式系土器が出土することが知られている。この地域で出土するこれらの他地域の土器は、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の在地系土器と伴出しており、当地域のような山奥深い地域にも、西日本の弥生文化の一端が早い時期から到達していたことを窺わせる。

第Ⅱ章　C捨場出土遺物

C捨て場は平成6年、7年、9年度の3カ年にわたって約3,500m²が調査された。出土遺物はトロ箱で約640箱を数える。なお、C捨て場という呼称は平成6，7年度に調査された南捨て場と下層d捨て場を総称したものである。位置的には遺跡北側の台地南西縁辺部の斜面、グリッドでいうとAT～BJ－15～26の付近にあたる。現地表面では勾配約5～7度の緩斜面であるが出土遺物の大半を占めている縄文時代前期末葉の時期には勾配約10～20度のやや急な斜面であった。

第1節　C捨場の層位

調査は中振浮石層直下の層まで行った。台地平坦部の基本層位では第Ⅴ層にあたるが、斜面地という地形的な要因から、平坦面とは若干層位が異なるため、以下に捨て場の層位と周辺の層位との関係について説明する。

畑内遺跡は平成11年度までの調査で遺跡の約半分にあたる3万3千平方メートルの調査が終了している。これまでの調査の中心は遺跡北側にある尾根上の台地とその周辺である。また、平成7年、9年、11年度には北側台地と埋没沢を挟んだ南西側に位置する尾根周辺に形成された縄文時代前期（円筒下層a式期）の集落に調査範囲がのびている。遺跡の基本層序は北側台地平坦面の層位を基本としているが、E・F捨て場付近の比較的標高の低い位置においては基本層の各層の間に平坦面では見られない層が挟まっている。このことは『畑内遺跡Ⅴ』で若干触れているが（青埋文報第262集）、今回報告するC捨て場は台地から低地へ向かって傾斜する斜面地に存在しており、両者の中間的な層位となっている。図3に土層の断面図を示す。

第1層　10YR4/1　灰褐色　耕作土であり、地表から約30～40cmの深さでほぼ均一に層を成している。1～3cm大の小礫を中量含む。

第2層　10YR2/2　黒褐色土　草根を含むきめの細かい土層。耕作土と第3層の中間土層。

第3層　10YR1.7/1　黒色土　火山灰（十和田、白頭山火山灰）を含む土層。

第4層　10YR1.7/1　黒色土　3層より多く火山灰を含む。下部には十和田a火山灰の浮石を含む。十和田b浮石も中量含まれる。3、4層は縄文時代後晩期から弥生～平安時代の生活面と考えられる。

第5層　10YR1.7/1　黒色土　中振浮石、南部浮石を含む。遺物を大量に含む層でもある。

第6層　10YR2/1　黒色土　a層とb層に分離される部分がある。中振浮石を濃密に含む部分（6b層）と中振浮石層を中量含み、遺物も含む層（6a層）とである。遺物はこの層より下からはほとんど出土していない。

第7層　10YR1.7/1　黒色土　やや粘性がある。南部浮石を中量含む層である。南部浮石層の含まれる量で上下に分離しているところ（上・7a層、下・7b層）がある。縄文時代早期中葉～前期初頭の層と考えられる。

第8層　10YR6/8　明黄褐色土　南部浮石層である。

第9層　10YR4/3　鈍い黄褐色土　粘性・しまりのあるロームに似た土層である。

台地上の層位との対応関係であるが、1層がⅠ層に、2～4層がⅡ層に、5層がⅢ層に、6層がⅣ

層に、7層がV層に8層がVI層に9層がVII層にそれぞれ対応している。

ほとんどの遺物は5層～6層より出土している。時期による層位的な上下関係などは残念ながら認められなかった。なお、遺物が多量に出土したBE～BH－18～22グリッド付近の斜面北東上方部では重機などによる大規模な攪乱が確認されており、表土中から多量の遺物が出土しているような状態であった。（図版1トレンチ内の遺物出土状況参照）

第2節　遺物の出土状況

図4にC捨て場のグリッドごとの遺物出土量を示した。なお、土器については遺物出土量と整理期間とのかねあいで個体数の把握は不可能であったため、箱数（トロ箱）と重量分布、石器については器種ごとの個体数のみの記載となっている。

遺物はおおよそ等高線に沿って北西－南東方向に帯状に投棄されているようである（図4）。土器だけで総重量約4,774,400ｇである。BF－19グリッドあたりが一番出土量が多く（300,700ｇ）、そこから離れるに従い出土量も少なくなっている。捨て場の下層には第72号竪穴住居跡が構築されているが（未報告）、おおよそ長軸10ｍ弱の大型住居跡であり、覆土中に多量の土器が廃棄されていた。それらは文様的な特徴より円筒下層ｂ式に比定されそうなものであり、はっきりと捨て場の遺物と上下差を持っていることが発掘時に確認されているが、詳しくは次回以降の報告で述べることとする。なお、捨て場に廃棄されている遺物のほとんどは円筒下層ｃ式～ｄ式・円筒上層ａ式にあたるものである。出度量では円筒下層ｄ式でとらえられる破片がもっとも多く、次いで円筒下層ｄ式後半～上層ａ式にかけての土器と、下層ｃ式にあたる遺物が多く、円筒下層ａ式に相当する遺物も少ないながら出土している。捨て場の斜面上方には縄文時代前期のフラスコ状土坑や住居跡、弥生時代前期の住居跡などが密集している。縄文時代の住居跡については概ね円筒下層ｃ～ｄ式であり、土坑についても円筒下層ｃ～ｄ式の土坑が多いようであり、捨て場の時期とある程度一致していることがわかる。また、台地を挟んで反対側には1000箱以上もの遺物を出土したＢ捨場が存在しているが、Ｂ捨場とＣ捨場は規模の違いもさることながら、主体となる遺物の時期に差がありそうである。Ｂ捨場の遺物については『畑内遺跡III』・『畑内遺跡Ｖ』に掲載されており、概観すると、円筒下層ａ式からｄ式まで、時期の切れ目無く遺物が出土している。特に、下層ａ～ｂ式、ｄ１式はまとまって出土している。また、縄文時代中期に属するような遺物は掲載されていない。それに対し、Ｃ捨場では、円筒下層ａ～ｂ式に属する遺物はそう多くなく、出土しているのは、72号竪穴住居跡に関係する遺物が多いと考えられる。ｃ式からｄ式に相当する遺物に関しては、Ｂ捨場同様多量に出土している。しかし、円筒上層式はＢ捨場では確認されず、Ｃ捨場ではある程度まとまりを持って出土している。捨場周辺の遺構については、詳細な時期やセット関係について、検討の余地が多分にあるが、台地上の遺構との時期的な関係と遺物の廃棄方法など、次回以降の報告で検討することにしたい。

捨て場の北西端部には遺物の出土範囲からややずれて住居跡が発見されているが、これらの住居跡は出土遺物より縄文時代中期から後期のものと考えられている。今回報告する遺物の中にも縄文時代前期と比べると微々たるものではあるが、中期中葉～後期初頭の土器群が含まれている。おそらくこれらの住居跡を残した人々の廃棄した遺物であると考えられる。弥生時代の遺物の分布については図137に示している。

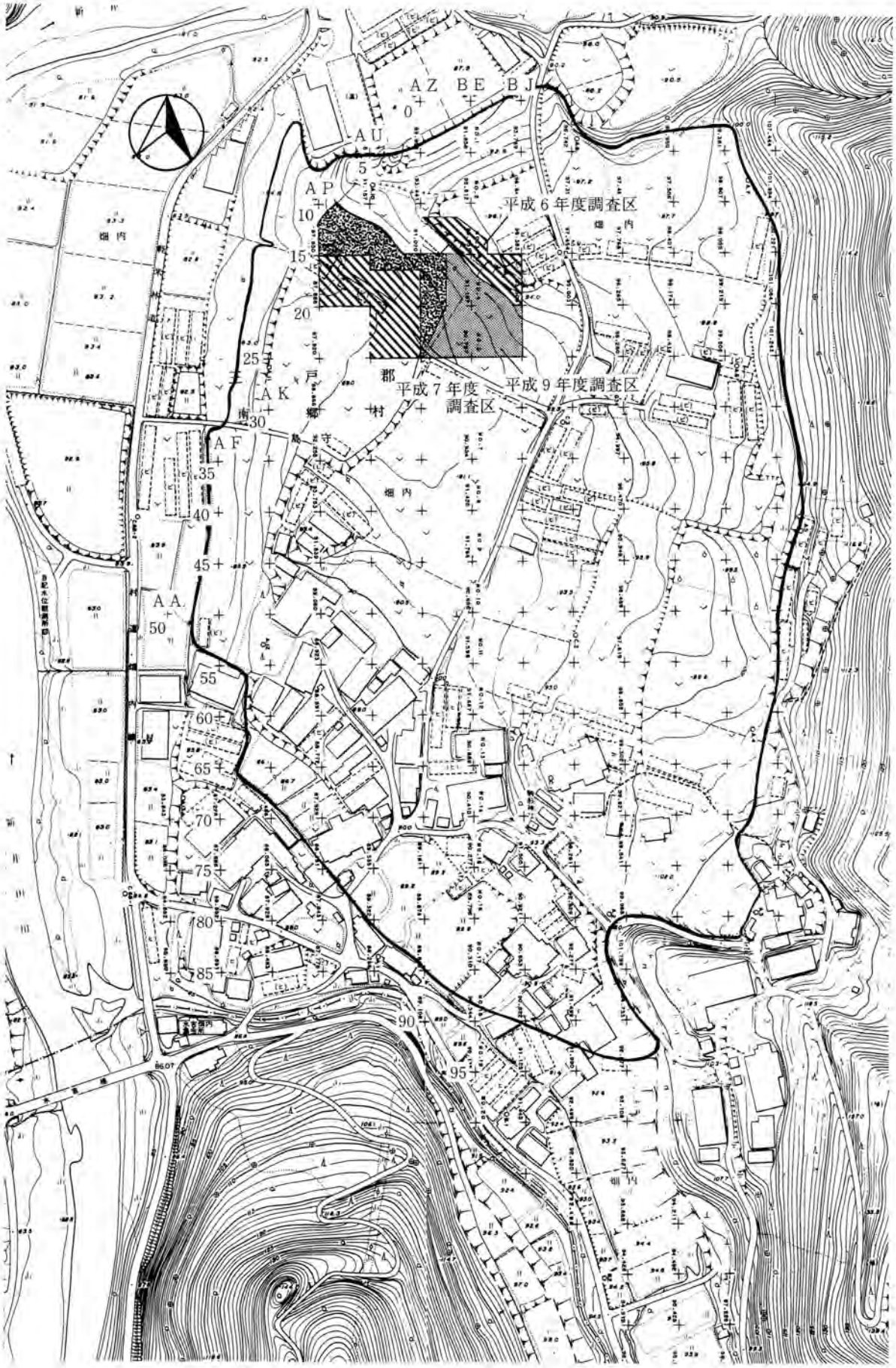


図２　遺跡の範囲と調査区（太線は遺跡範囲）

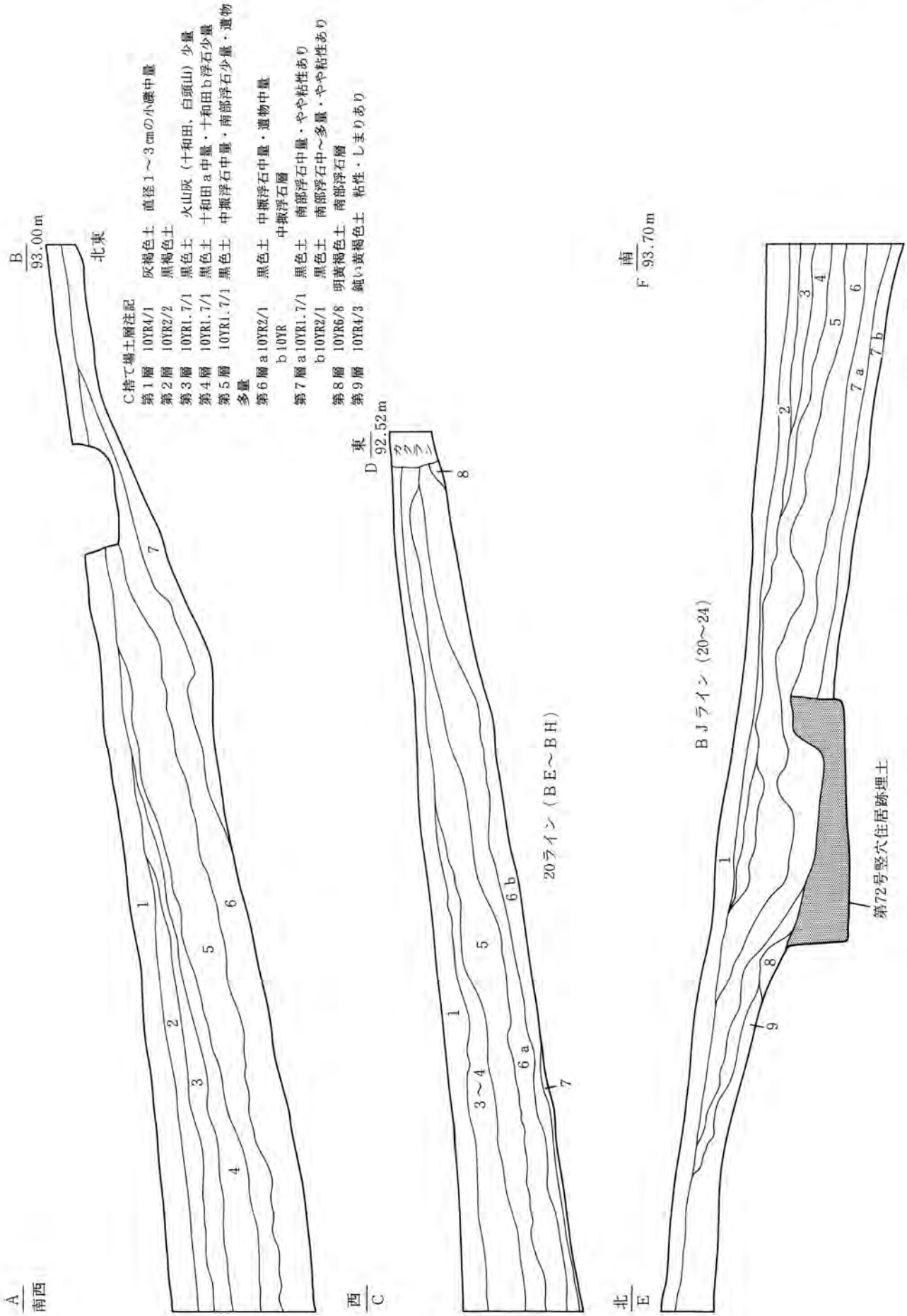
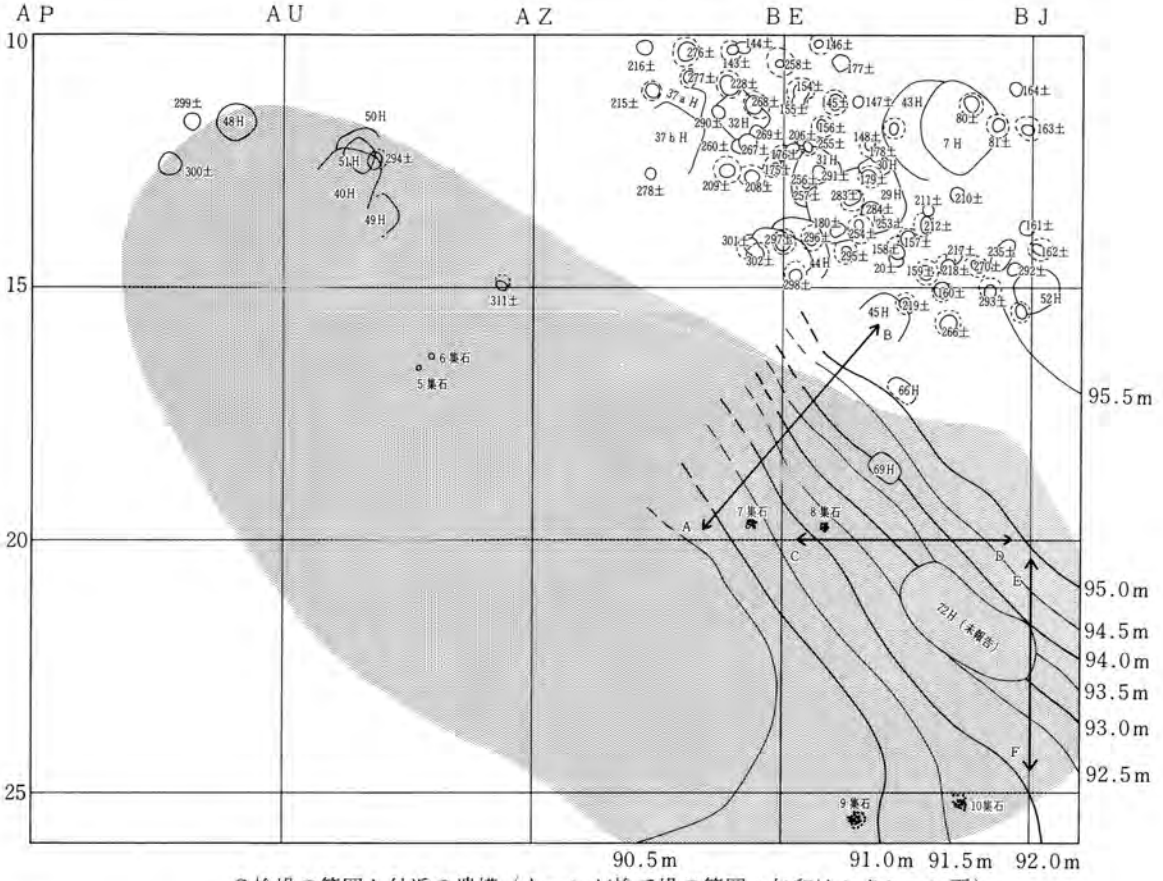
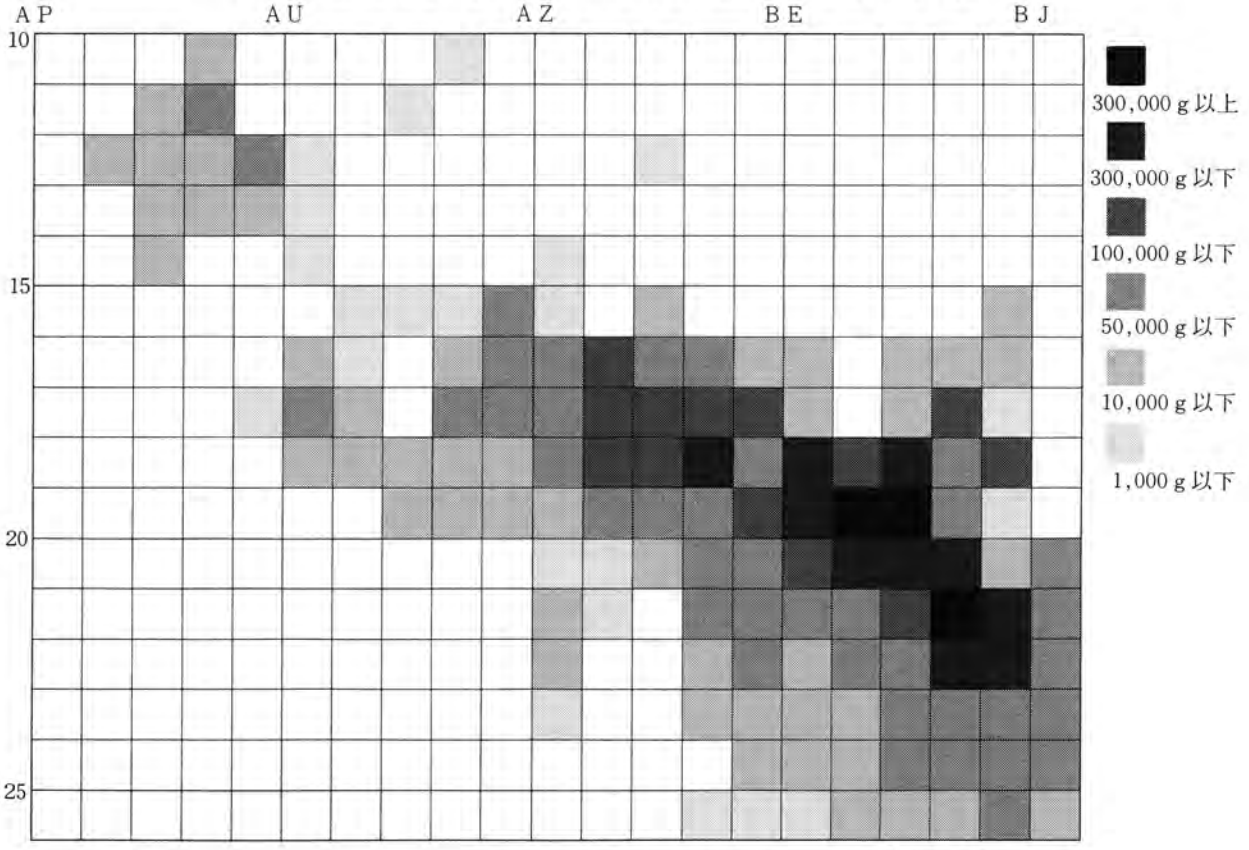

A
南西
B
93.00m
北東
C捨て場土層注記
第1層　10YR4/1　灰褐色土　直径1～3cmの小礫中量
第2層　10YR2/2　黒褐色土
第3層　10YR1.7/1　黒色土　火山灰（十和田，白頭山）少量
第4層　10YR1.7/1　黒色土　十和田a中量・十和田b浮石少量
第5層　10YR1.7/1　黒色土　中振浮石中量・南部浮石少量・遺物多量
第6層a 10YR2/1　黒色土　中振浮石中量・遺物中量
b 10YR　中振浮石層
第7層a 10YR1.7/1　黒色土　南部浮石中量・やや粘性あり
b 10YR2/1　黒色土　南部浮石中～多量・やや粘性あり
第8層　10YR6/8　明黄褐色土　南部浮石層
第9層　10YR4/3　鈍い黄褐色土　粘性・しまりあり
西
C
D
92.52m
東
カクラン
20ライン（BE～BH）
北
E
F
93.70m
南
BJライン（20～24）
第72号竪穴住居跡埋土

図3　C捨場の層位



C捨場の範囲と付近の遺構（トーンが捨て場の範囲：矢印はセクション面）



C捨場出土土器重量分布図

方位は上が北

0 20m

図4　C捨場付近の遺構と遺物出土状況図

第3節　C捨場出土縄文土器

1　縄文時代早期から前期初頭の土器

1～5は爪形状刺突文が施文される土器群である。1・2は口縁部破片、3・4は胴部破片、5は底部付近と考えられる。1は口唇部に板状工具による刻みが施文され、口縁部には口唇部と垂直方向に施文された爪形状刺突文（以下縦爪）が5段施文される。口唇部の刻みは外面→内面方向に斜め上方から施文されており、工具を押しつけた後に右方向に少し倒している。口縁部の縦爪は左方向からの刺突である。内面は丁寧に磨かれている。2は口唇部に板状工具による刻みが施され、口縁部には貝殻腹縁圧痕を横位に施文後に約4㎝の間隔で縦爪を左方向から施文している。口唇部の刻みは外面→内面方向にほぼ水平の方向から施文されており、1同様に工具を右方向に倒している。内面は丁寧に磨かれている。1・2ともに口唇部上面はいったん平坦に作り出した後に刻みを加えている。3は口縁部文様帯の下部から胴部にかけての破片である。横位の貝殻条痕文で器面を調整した後に爪形状刺突文を口唇部に平行に施文（以下横爪）している。施文方向は上方からである。内面は丁寧に磨かれており、胎土は5と似ている。4は口縁部文様帯付近の破片である。斜位・横位の沈線を施文した後、横爪を上方から3段施文している。内面は丁寧に磨かれている。5は底部付近の破片である。外面は貝殻条痕文が横位に施文されている。器表面は条痕施文前に磨かれている。内面はやや粗雑なミガキである。なお、内面は黒色で光沢を帯びている。6・7は貝殻腹縁の押し引きにより文様を施文するグループである。6は口縁部破片である。口唇部には外面→内面方向に斜め上方からの刻みが施される。口縁部には貝殻背面の押し引きが斜位に施文されている。口唇部上面は概ね平坦である。器面は内外面ともに磨かれている。7は胴部破片である。貝殻背面の押し引きが斜位に施される。器面は内外面ともに丁寧に磨かれている。8～11は底部の破片である。8は乳房状の突起に近い形状を持つ。尖底部から浅い角度で膨らみながら立ち上がると思われる。内外面ともに磨かれているが、胎土はもろい。9は表面に縄文が見られるが、風化が激しいため原体の判断は不可能である。胎土には繊維を含み、もろい。10は底部先端に平坦な面を持つ。そこには縄文が押圧されている。表面には単軸絡条体第1類が縦位に施文されている。内面はきれいに磨かれており、炭化物の付着もみられる。胎土には繊維が少し含まれる。11は尖底と丸底の中間的な形態を持つ。器表面にはＲＬが縦位～斜位に回転施文されている。胎土中には繊維を含み、もろい。

畑内遺跡のこれまでの報告の中で、遺構の覆土に縄文時代早期の土器が若干含まれることがわかっている。図6に主なものを集めた。これらは縄文時代前期の人々が遺構などを掘削したときに、土中に包含されていた土器が掘り起こされ、排土として遺構の埋まり切らない窪地に投棄されたものと推察される。時期的にはC捨場から出土したものとほぼ同一時期であるものが多い。また、第13号竪穴住居跡からは、縄文時代前期初頭に属すると思われる尖底深鉢形土器がまとまって出土している。

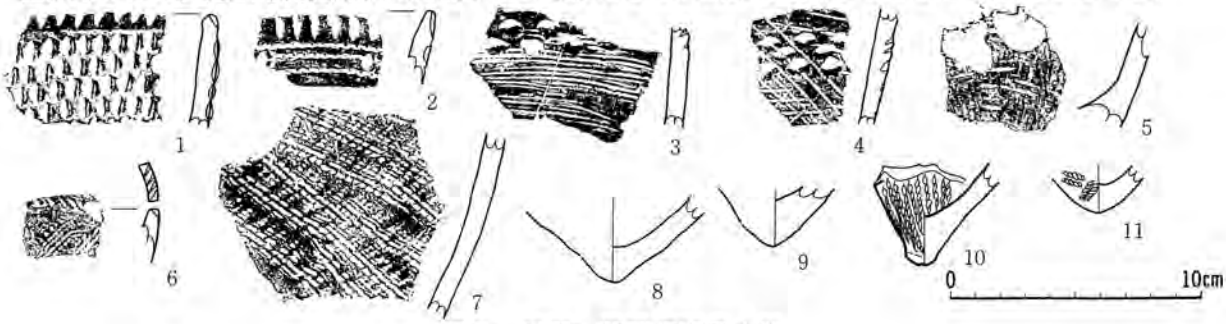


図5　早期～前期初頭の土器

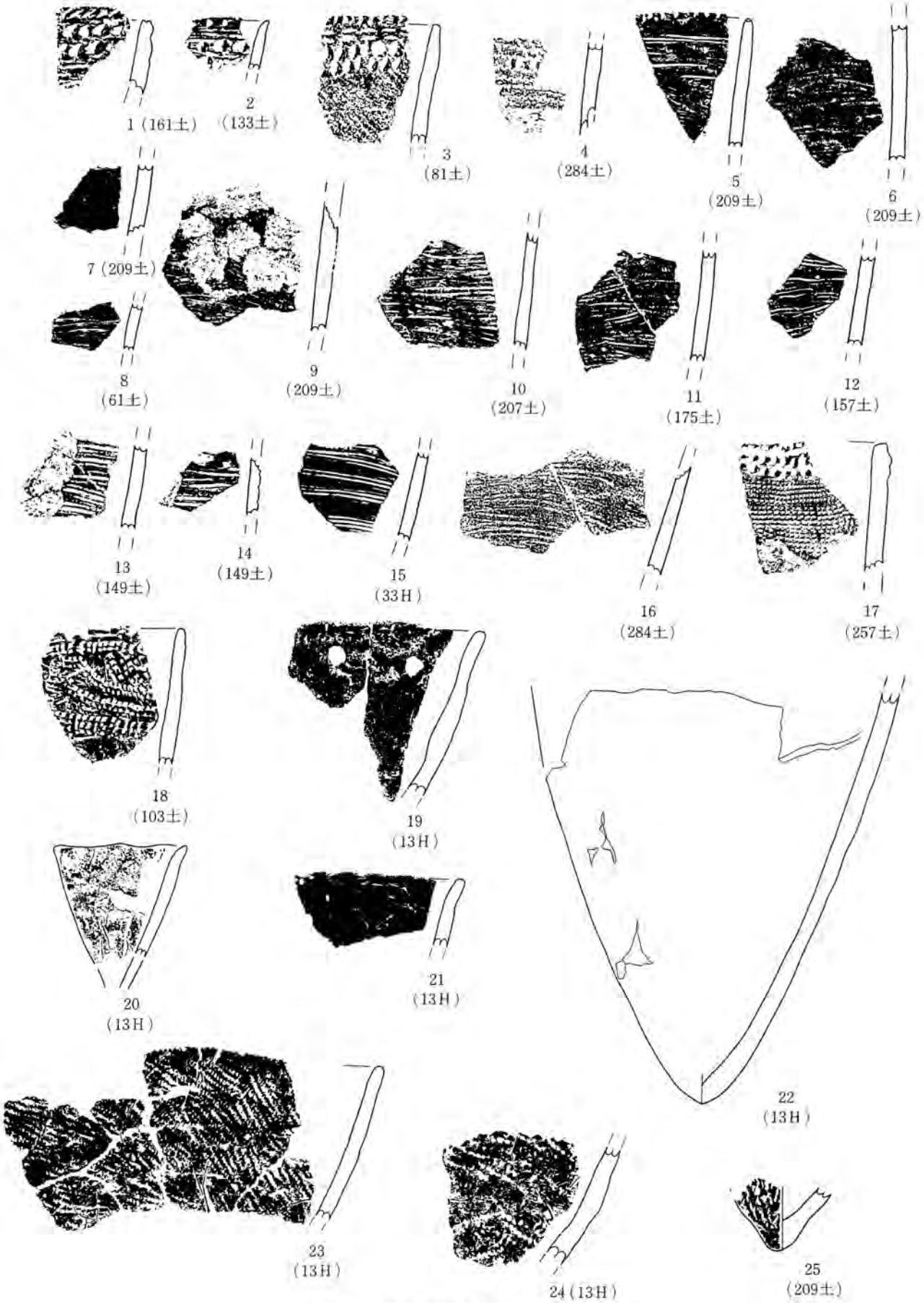


図6　縄文時代早期の土器集成図

2　縄文時代前期中葉から中期初頭の土器

1　土器の分類方法について

分類はまず口唇部の形状と器形、胎土と器面の色調などによりA群からE群まで大きく分類し、次にその中で文様等による分類を行うという手法をとった。従来円筒土器の分類に関しては、その形態上の変化の乏しさと、装飾が縄文を中心とすることなどから、器面に施される文様（縄文原体の種類や施文方法）を主体とした分類手法が主流を占めていたが、文様に関しては、ある文様が施文されるからといってそれがそのままメルクマール的なものになるとは言い難く、文様の変化にのみとらわれていては違う時期のものを同時期のものと誤認するおそれがあると考えられる。しかしながら、胎土や色調・口唇部の形状などが、端的に時間の変化を表すかというと、そうではなく、両者の変化は独立するものではなく、常に一体化したものであると考えられる。したがって、両者の変化を有機的に組み合わせることにより、土器群の変化が段階的に追えるものと考える。そこで考えるのは、土器表面の文様、胎土・色調、口唇部形状、器形等の諸属性のうち、どの属性が土器群の時間的なまとまりをもっとも特徴的に表しているのか？ということである。もっとも変化が著しいと考えられがちなのが、土器文様などの可視的な属性であるが、これまでの研究史を見る限りその変化をうまく表現できている例は少ない。したがって、文様以外の属性についてC捨て場の土器を分類してみると、器形については検討の余地が多分にあるが9つの種類に、胎土・色調、については7つの種類に、口唇部については9つの種類に分類できることが分かった。なお、実測図中の範囲指定は炭化物の付着部位である。

2　土器にみられる諸属性について

器形

C捨場出土土器のうち実測したものについて器形分類を試みた。口縁部から底部まで、完全に器形をうかがえる個体が少なかったため、過去に報告した類似した個体の器形等を参考にして分類を行った。分類の参考図を図7に示す。

器形1　底部から口縁部までほぼ一直線に立ち上がるもの。

a　口縁部と底部の直径の差が大きく逆台形状の器形になるもの。

b　口径と底径の差があまりなく、ほぼ円筒形をしているもの。

c　aとbの中間のもの。

器形2　底部から胴部までやや膨らみを持ちながら立ち上がるもの。胴部最大径の位置で3つに分類した。

a　口縁部付近で胴部最大径になるもの。

b　胴部中位で最大径になるもの。

c　胴部下位で最大径になるもの。

器形3　口径に対して器高の値が大きくなるもの。プロポーション的にいえば器形1と2を縦に長くのばしたような形である。

器形4　胴部下位が円筒形で口縁部が外傾するもの。

器形5　胴部下位が円筒形、上部が球状の形になるもの。球状の胴部の位置によってaとbに分類される。

器形6　胴部下位が円筒形で頸部で外傾し、口縁部で直立または内傾するもの。

器形７　浅鉢形のもの。台付とそうでないものがある。

器形８　台付きのもの。

器形９　その他の器形

口縁部形状　正面形と断面形について以下のように分類した。

正面形状１　波状口縁のもの。

正面形状２　平担口縁のもの。

正面形状３　２と３の中間のもの（弱波状）。

口唇部形状

形状ａ類　口唇部上面が平坦であり、断面形が四角くなるもの。厚手である。

形状ｂ類　先端部が外側に傾きながらやや尖るもの。厚手のものが多い

形状ｃ類　先端部が丸いもの。

形状ｄ類　端部の平坦な部分が外側を向き、やや丸みを帯びるもの

形状ｅ類　先端部がやや外側に傾いて尖るもの。やや薄手である。

形状ｆ類　先端が角張り、口唇部付近でやや外反するもの。

形状ｇ類　形状ｅをやや厚ぼったくした感じのもの。

形状ｈ類　形状ｇより内面がやや外反し、さらに先端部に厚みと丸みを持つもの。

形状ｉ類　頸部で外傾し、先端部は平坦であるもの。

内面調整

１　丁寧なミガキ

２　荒いミガキ

３　指または刷毛目状工具などによるナデ

胎土・色調

１　胎土に多量の繊維を含み、色調が橙色～肌色を呈するもの。全体に軟質な胎土である。

２　胎土に多量の繊維を含み、色調が赤褐色に近い赤みを帯びた色調を呈する。胎土には粘板岩等の細片が混入するものとそうでないものがある。

３　胎土に大量の繊維を含み、色調は灰色から黒褐色を呈するものが多い。

４　３の胎土に似るが、やや明るい色調である。胎土にも黄色粒子を含むものがある。

５　胎土に大量の繊維を含み、色調は暗褐色から黄褐色まで色調の濃淡に幅があるが、概ね褐色形の色調である。胎土に直径１㎜に満たない黄色の粒子を含む。

６　胎土に混入する繊維の量が少なく、１～４に比べ、よくしまった硬質な胎土である。色調的には明黄褐色系の色調が大半であるが、中には赤みを帯びるものもある。

７　胎土に繊維を全く含まず、砂粒を多めに含む胎土である。全体的に硬質であり、色調により３つに分かれる。

ａ　浅黄橙色などの明るい色調を呈するもの。内面の色調は褐灰色である。

ｂ　灰色系の暗い色調を示すもの。

ｃ　色調が赤みを帯びるもの。

以上が文様以外の諸属性の分類であるが、これらにより出土土器は大きく７群に分類された。以下

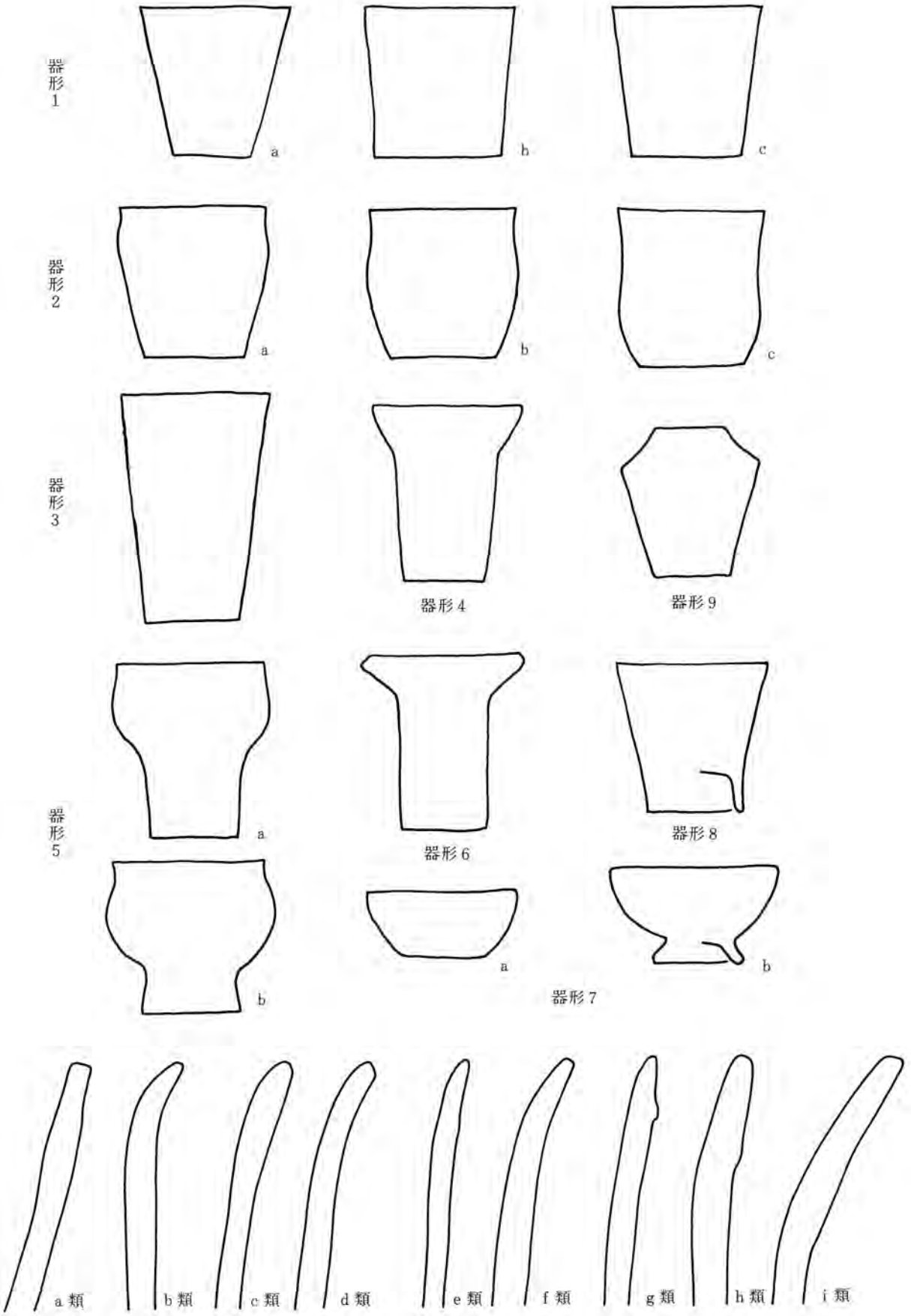


図7　器形及び口唇形状参考図

に記述する。

A　群　（1～3・280～284・292～296・317）器形は1a・3類化した1aを基本とし、区画帯から上部が外傾する器形も存在する。口唇部形状は圧倒的に形状aが多い。口唇部上面には縄文原体の回転・刺突・刻みなどの文様がみられるものが目立つ。全体に厚い作りで、繊維の混入が激しい。隆帯を持つものは両者に存在する。これらが同時存在なのか時間的な差を持つのかは今のところ不明である。胎土・色調は1類がほとんどである。内面調整の種類は2と3が多い。以下に文様による分類を示す。

1類　口縁部文様と胴部文様の間に区画帯が用いられないもの。（1～3・280～284）

口縁部文様帯には結節回転文が施文されるものが多い。その他には沈線による文様が展開されるもの・地文のみのもの等がある。結節回転文については石岡憲男氏や杉山　武氏等の論考が知られるが、本遺跡の結節回転文としたもので、本群に相当する土器に施文されるものについては、単軸絡条体第4類の変形したものが相当量含まれている可能性があることを示唆しておく。胴部文様はＬＲの横位回転がほとんどである。

2類　口縁部文様と胴部文様の区画に隆帯等の区画帯を持つもの。（292～296・317）

区画帯には隆帯が使用されている。隆帯の特徴としては次のようなものがある。幅広である・胴部器面との比高差がある。等である。292・293の隆帯上には刺突が施されている。胴部文様はＬＲの横位回転が多い。また、器厚や、残存している口縁部から推定される口径などより、大きめの個体が目立つ。

B1群　器形は1aが若干残るものの全体的に細長い円筒形に近いものが多くなる。つまり、器形1bの口径と底径の値を小さくしたものや、器形2aや2bの器高が高くなったもの（3類化したもの）である。口唇部形状はaが若干残るものの、多くはbである。また、口唇部形状aの先端部が丸みを帯びるものも少なくない。胎土・色調は2類であり、赤みを帯びた色調と粘板岩の細片が混入することが特徴的である。なお、口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画するのに隆帯や沈線などの区画帯を用いるものが多いのも特徴的である。

1類　口縁部文様帯と胴部文様帯との間に区画帯を持たないもの、

a　口縁部に結節回転文が施文されるもの。（13・284・290・291）

b　口縁部に縄文原体の側面圧痕が施文されるもの。（5・311・320）

2類　口縁部文様帯と胴部文様帯の間に区画帯を持つもの。区画には隆帯・縄文原体の側面圧痕等の種類がみられる。口縁部文様の種類により以下のように分類された。

a　縄文原体を回転施文するもの。

1　結節回転文が施文されるもの。（21～28・285～289）

2　1段及び2段の縄が横位に回転施文されるもの。（14～17・305～309）

b　縄文原体の側面圧痕により文様が展開されるもの。（4・18～20・319）

3類　口縁部文様帯を持たないもの。（7～12・299～304・310）

胴部文様の種類はＬＲの横位回転・ＲＬＲの横位回転・単軸絡条体第1類の縦位回転などがある。口縁形状は平縁のものが多いが、11のように2単位の波状形を呈するものもある。なお、8は全く違う時期のものであり、おそらく大木9～10式に並行するような時期に属するものと

考えられる。口縁部と胴部中位に最大径を持ち、文様はＬＲの縦位回転である。胎土には繊維を全く含まず、硬質な感じの胎土である。内面は丁寧に磨かれている。また、一部に輪積み痕がみられ、内面から外面に向かって傾斜しているのが観察される。

Ｂ２群　この群は胎土、色調においてはＢ１群に類似するが、やや外反気味な口縁形態と、口縁部文様帯の文様構成等から、Ｂ１群とＣ１群の中間的な様相を示すものと考えられる１群である。口縁部文様は縄文原体の側面圧痕を主体としており、鋸歯状や菱形のモチーフを基調としている。また、区画帯にはＢ１群に類似した隆帯を用いるものがある。破片を中心とした断片的な資料のみであるため、確実に分離されるか今後検討を要する１群である。（69・321～369）

Ｃ１群　口縁部が外反する器形を基調とし、胎土には繊維を多量に含む１群である。内面調整もミガキが顕著になってくる。口唇形状はｃとｄがよくみられるが、ｃは胴部が膨らむ器形に多くみられ、ｄは円筒形の胴部を持つ器形によく見られるという差異が観察される。胎土・色調は２のうち粘板岩粒を含まないものと、３である。

１類　口頸部から胴部まで同一の文様が施されるもの。（32・33・35・38・41・42・337～340）

胴部の原体には結束第１種羽状縄文・単軸絡条体６ａ類の縦位回転施文・単軸絡条体５類等が見られる。結束第１種については、原体の上下を反対にして回転することで、菱形文様を表現している。

２類　隆帯や縄文原体の側面圧痕などのような区画帯を持つもの。口縁部文様帯の文様構成により以下のように分類される。

ａ　縄文原体の側面圧痕により文様を構成するもの。

ａ１　平行・山形あるいは鋸歯状のモチーフが意識されているもの。（36・46・47・49・50～53・342～343・348・349）

ａ２　菱形が意識されているもの。（54・56・344～347）

ｂ　縄文原体の回転により文様が構成されるもの。（37・39・40・43）

使用される原体は、結束第１種羽状縄文である。

Ｃ２群　口唇部の形状、口縁部文様帯の施文具・文様構成、胎土などの点でＣ１群・Ｄ１群の中間的な様相を持つ１群である。（31・34・48・55・59～68・70～73・183・340・341・350～356・366）口唇部の形状はｆのような先端部が丸みを帯びる平坦な形が多く、口縁部は区画帯の部分からやや外傾するものが目立つ。胴部は底部からほぼまっすぐか、やや外傾しながら立ち上がっている。口縁部文様帯の原体は縄文原体の側面圧痕もあるが、絡条体の側面圧痕・回転施文が特徴的である。側面圧痕により表現されるモチーフはＣ１群とあまり差異はないが、口縁部文様帯の幅がかなり狭まることから、ややつぶれた菱形や、山形の文様が多く、これらの特徴はＤ１群と類似するものである。また、73・341のように、口縁部が二またに分かれるものがあるが、先端の形状はｆであることから、本群に属するものと思われる。

Ｄ１群　口唇部の形状、内面調整、器形などに強い共通性がみられる１群である。口唇部形状はｇ類、内面調整は器面が平滑な非常に丁寧なミガキ、器形は底部より口縁部がやや広く、概ね１ｃが３類化したものととらえられる。以下のように分類した。

１類　平口縁のもの。文様構成により以下のように分類した。

a　口頸部から胴部まで同一の文様が施文されるもの。

無文のもの（74・75）と、縄文原体を回転施文するもの（76～78・360～362・364～367）がある。

b　口縁部文様が刺突により施文されるもの。（79）

口縁部に施文される刺突はやや斜めの方向から施されるものであり、この特徴はＤ１群の刺突によく見られる。

c　口縁部文様帯が縄文原体の回転により施文されるもの。（80～84・368）

使用される原体は結束第２種、結節、結束第１種などである。単独で用いられることはなく、必ず縄文原体の側面圧痕や刺突列などの間に施文されるのが特徴である。

d　口縁部文様帯が絡条体の側面圧痕により施文されるもの。（86～87・369）

使用される原体には、単軸絡条体第１類・単軸絡条体第５類・等がある。平行を基調としたものが多い。

e　口縁部文様帯が縄文原体の側面圧痕により施文されるもの。（88～106・370～375）

使用される原体は１段の縄と２段の縄の他に、撚りの違う２本の縄を束ねたものなどがあり、両端を縄で結び、閉じているものも見られる。表現されるモチーフは１類ｄとあまり変わらないが、山形のモチーフもみられる。また、押捺した縄文の間に刺突を施すものもある。

２類　波状口縁のもの。弱波状口縁のものも含む。使用される原体や文様モチーフなどは１類と大差はない。

a　口頸部から胴部まで同一の文様が施文されるもの。（107）

b　口縁部文様帯が縄文原体の回転により施文されるもの。（108～117）

c　口縁部文様帯が絡条体の側面圧痕により施文されるもの。（120～125・127～130・132）

d　口縁部文様帯が縄文原体の側面圧痕により施文されるもの。（118・119・131・133～141・144・146・148～158・161～178・180～182・184・185・187・188・383・384・386）

e　その他のもの。器形が特殊なもの・底部破片などを集めた。（159・160・190～205）

これらは器形においてＤ１群の基本である１ａから３の形状を飛び越えているが、口唇部の形状は、140に顕著にみられるように、どんなに器形が変形しようと、頑固に形状ｇを保っているのである。

Ｄ２群　（85・126・143・145・147・179・181・186・206・207・378～382・388～403）胴部がやや膨らみを帯びる２ａや２ｂのような器形を基調とし、口唇部形状はｈが特徴的であるが、出土点数があまり多くないため、普遍化できるような属性がはっきりとつかめなかった。口縁部文様帯はＤ１類に比べると広めのものがやや多い。口縁部には、Ｄ１類に引き続き縄文原体の側面圧痕が使用される。胎土はＤ１類に類似するが、断面の内部の色調が、Ｄ１類に比べやや黒みが少なくなるような感じがうかがえる。繊維の混入度合いが少なくなったためであろうか？

Ｅ　群　口縁部で外傾する、器形４を基調とし、口唇形状は先端部が平坦になるｉが特徴的である。口縁部文様の構成により以下のように分類した。

１　口縁部文様帯に縄文原体・絡条体の側面圧痕で平行基調の文様を構成するもの。

a　口縁部から垂下する隆帯を伴うもの。（211～214・215・218）

b　隆帯を伴わないもの。（208～209・406～413・415・416）

2　口縁部文様帯に縄文原体の側面圧痕により、山形モチーフの文様を構成するもの。（216・217・219・221・417・429～436）

3　浅鉢形土器　破片であるが1点出土した。（437）

4　その他228は、櫛歯状の沈線が縦位に施文されている。

F　群　異系統の土器群　器形・胎土・文様等で在地の土器にはみられない属性が観察されたものを集めた。およそ32個体が確認されている。時期的には縄文時代前期末葉～中期初頭にかけてに相当する。胎土は大きく分けて3つに分類され、aは北陸系の土器に、bは大木系の土器ほとんどに、cは関東や北陸、東北南部の要素が入り交じったような土器にみられる。（B捨場の6のような土器）なお、大木系の土器はBE－20付近にまとまって出土している。

F1群　東北南部の影響を強く受けた大木系の土器群で、器形により以下のように分類される。

a　深鉢

a1　口縁が外反し、胴部が下膨れになるもの（222）。

222は口縁が波状形をなしている。口縁部は外傾しており、頸部にはやや段差が見られる。器表面には同一原体による結束第1種がほぼ段状に施文されるが、はっきりしないほど薄く施文されているところが多い。また・口縁下部と頸部には刺突が施される。また、241～243は破片資料であるため断言できないが、本類に属する可能性がある。3点ともに口縁部破片である。口縁は波状形を呈するものと思われる。口縁部には半裁竹管による2本同時施文の沈線が描かれ、波頂部直下では渦巻き状に施文されている。口縁下部には三角形の彫刻が施文され、胴部にはＬＲが回転施文される。

a2　上半が金魚鉢のような形、下半が円筒形のもの。（226～232）

6個体確認された。227・228・231は色調が黒っぽく・胎土に砂粒を含んでいる。その他は226と230が赤みを帯びた胎土であり、B捨場の6に胎土が類似している。229は肌色に近い色調であり、胎土的には在地系の土器に近いようである。それぞれについては観察表に記すが、頸部内面の屈曲部が明瞭であるという特徴や、文様構成などから、大木6式～7a式にかけてのものがほとんどであると考えられる。

a3　円筒形のもの。（223・225）

223は胎土に砂粒を多く含み、結節を縦に回転している。225は口縁と底部を欠失している。口縁部付近には太めの沈線が縦方向に施文され、その直下には縦・横に沈線で区画された内部に半裁竹管による2本同時施文の沈線で渦巻き様のモチーフを描いている。方形区画の沈線上には、一部に楕円形の突起が付されている。地文はＬＲの横位回転である。

a4　胴部が円筒形で、口縁部で外反するもの。（224）

b　浅鉢　233～237

4個体確認された。236は台付き浅鉢と思われる。237を除いてすべて無文であり、色調は赤みを帯びている。器形的には底部から内湾しながら立ち上がるものが多く、この点で在地系の浅鉢と一線を画している。237は器形は大木系、文様が在地系という折衷的様相を持つ土器である。

c　器形の不確定なもの。（238・239・244～247）

F２群　北陸地方の影響を受けた土器群

小破片の資料がほとんどであり、器形全体を窺うことのできるものは無いが、可能性のある器形に分類した。

a　胴部が円筒形で、口縁部は外傾するもの。（260・270）

表面に細い粘土紐を貼り付けることにより文様を構成している。270は口縁部破片であり、口唇部は肥厚している。粘土紐を平行に貼り付けた間に、短い粘土紐を鋸歯状に貼り付けている。262は同一個体の可能性が高い。器形的には球胴形の深鉢の可能性もあるので、北陸地方の土器かどうかははっきりしないが、細粘土紐の様子などから、北陸地方の影響を強く受けている土器であるといえる。

b　胴部は円筒形で、頸部で強く外傾し、口縁部付近で内傾あるいは直立するもの。（261・263～269）

261は口縁部破片である。口縁部から１段目の屈曲部までの破片である。器形は６になると思われる。口唇部には頂部から外側にかけて、縄文が縦位に押捺されている。その下位には上下を竹管による沈線により区画された中に格子状の集合沈線が施文されている。口縁部の区画には微隆帯が用いられ、縄文には竹管が押し引きされている。胴部は縄文が回転施文されている。胎土的には赤みを帯びており、Ｂ捨場の６に似ている感じである。

263～269は同一個体か非常に似た２つの個体の可能性がある。器形は６であり、263は口縁部直下の破片と思われる。文様は半裁竹管による２本同時施文の沈線であり、大木系の個体に見られるものとの違いは、沈線間が太く、沈線自体がしっかりしており、いわゆる半隆起線のような状態になっているところである。口縁部には三角形のモチーフや、流水状のモチーフが横位に展開している。頸部には区画帯を持つものがあり、267は竹管の押し引きによるもの、269は刺突によるものである。胴部には結束２種が縦位に回転されている。内面はきれいに磨かれている。胎土には大きめの砂粒を含み、器表面は小石が浮き出たところから放射状のひび割れが観察される。色調は内部がグレー系の色調・外面が黄橙色系の色調である。

F３群　上記のどちらに属するのか判断しにくいもの。

248～252は同一個体と思われる。252に見られるように口縁部の区画帯付近で湾曲していることから、球胴形の深鉢の可能性もある。沈線により文様が描かれるが、どちらかというと、半隆起線的であり、北陸地方の影響を感じさせる。253・254は同一個体である。胎土的にはＢ捨場出土の６に類似し、文様の施文方法などもそっくりである。隆線上に棒状工具を押しつけるところ等は、関東の五領が台式の影響を想起させるものである。258・259は同一個体である。おそらく下部が円筒形で、頸部から外傾する器形であると思われる。口縁直下は無文帯であり、その下位の、横位沈線で区画された内側に縦位の集合沈線を施文し、後に鋸歯状の沈線が施文されている。区画帯には隆帯が用いられ、上面には刺突が施される。

G　群　その他の土器　どの群に分類するべきか判別しづらいものをまとめた。（273～279）

まとめ

1　C捨場における在地系土器群（円筒下層式土器群）の変遷について

前項においては捨場より出土した土器の分類について述べた。本項では各群の時間的な関係について簡単ではあるが説明したいと思う。

図71にC捨場から出土した、在地系土器群の変遷図を示した。この変遷図を作るにあたっては、第1項で触れたとおり、文様を中心に分類をするのではなく、主に口唇部の形状・胎土・色調について分類した後、器形や文様などについての要素を附加し、最後に各群について他の群との比較検討することにより前後関係を想定したものである。したがって、厳密な層位的上下関係に基づいたものではないことを明言しておく。

A群とB1群の関係について。

A群とB1群は器表面の文様において共通するところが多い。それは結節回転文を口縁部に施文することや、胴部に単節または複節の縄文を回転施文するというところに現れている。相違点は口唇部形状・器形、胎土などに現れる。A群の口唇部形状はa類を基本としており、器形は1aを基本としている。それに対し、B1群の口唇部形状はa類を部分的に残しながらも主体はb類であり、口唇部上面の加飾も激減する。器形も長胴形のものが増え、口縁部がややくびれるものも多くなる。区画帯としての隆帯はA群に比べ数は多くなるものの、幅や高さなどにおいて規模を減じている。また、胎土・色調においても、B1群は色調が赤みを帯び、粘板岩の砕片が混入するという特徴がある。

B1群とB2群について

B1群とB2群は胎土・色調や器形などにおいては非常に類似している。しかしB2群は、口縁部がやや外反気味な点と、口縁部文様に縄文原体の側面圧痕によるいわゆる幾何学的な文様が施文されるというところにB1群との差異が見いだせると考えられる。この幾何学的な文様はB1群においてみられる縄文原体の側面圧痕による鋸歯状の文様構成から派生したものととらえられる。また、口唇部形状においても、b類というよりd類に近いものや、b類の先端部がやや厚くなるものなどがみられ、C1群に近いものに変化している様子がうかがえる。したがって、B2群については検討の余地が多分にあるものの、C1群とB2群との中間にあたるグループであるといえる。

C1群とB2群について

C1群は器形的には口縁部が外反する器形を基本としている。器形は大きく分けて、胴部が膨らみを持つものと、円筒形のものの2種類がある。口唇部形状は、cとdが多く。cについてはやや明るい色調のもので胴部が膨らみを持つ個体と、dについては、暗い色調のもので、円筒形の胴部を持つものとの結びつきが強い。もしかすると両者は分離される可能性がある。文様については基本的に縄文原体の側面圧痕によるいわゆる幾何学的な文様構成を持つものが多いが、口縁部に羽状縄文を回転して菱形文様を表現するもの、地文のみのものなどもみられる。

C1群とC2群について

C2群は口縁部がやや開く円筒形の器形を基本とし、全体的にD1群に近い器形になる。口縁部が区画帯付近から外傾するところなどはC1群との共通性がみられる。口唇部形状はeやfが

多くなる。ｆの口縁部はＣ１群のものに近い雰囲気を持ち、ｅの口縁部はＤ１群のものに近い雰囲気を持っている。文様についていうならば、単軸絡条体や多軸絡条体などの側面圧痕や回転施文が口縁部文様帯にみられるようになる。縄文原体は非常に細やかなものになり、細いものは太さ１～２㎜のものもある。各種原体の側面圧痕間に円形の刺突を多数施すのも特徴である。

Ｄ１群について

口唇部形態に強い共通性を持つ群である。口唇部はほとんどが形状ｅで占められており、それは、たとえ器形が変化しようとも変形したりすることはない。器形に関しては１ｂの縦にのびたもの等がほとんどであり、まれに台付きやその他の器形が混入する。また、口縁部文様帯が狭くなるのも特徴である。文様は、胴部に結束第１種羽状縄文や単軸絡条体１ａ類などが多く、口縁部は縄文原体の側面圧痕により平行基調、山形基調などの各種モチーフが表現されている。Ｃ１群と決定的に違うところは口唇部形状であり、全体的な雰囲気においてもやや洗練された感じを受ける。

Ｄ２群について

器形の面では頸部にくびれを持ち、胴部がやや膨らみを持つ器形が増えること、口唇部形状はｇを厚ぼったくしたような感じのものがほとんどである。また、文様の面では、口縁部の文様帯が広がりを見せるようになる。文様構成や施文に使用される原体などはＤ１群とほとんど変わらない。口縁部を縦に区切るような隆帯状の高まりが出始めるのも本群である。

Ｅ群について

器形は４類を基本とし、４単位の突起が口縁部に付くものが多くなる。口唇部は、より外反度を増したｈ類とｉ類を基本とする。ｈ類についてはＤ２群の名残と考えられる。胎土には繊維の混入が目立たなくなり、全体的に硬質な感じの胎土に変化する。口縁部文様は、縄文原体の側面圧痕により構成されるが、平行基調のもの、山形基調のものなど、Ｄ群の伝統を受け継いでいる。また、横位に平行施文される側面圧痕の間に、縦位に短く縄文原体を押捺するのも特徴的である。口縁部文様帯の下部には弱い隆起が確認され、その上面には縄の端部が押捺されることがあり、区画帯を意味するものと思われる。

以上に各群の関係について述べた。

ここでは、どの群が従来のどの型式にあたるかは深く触れないが、先学がこれまでに論じてきたように、円筒下層式土器はａ～ｄの４段階を細分することが可能である。今回は下層ａ式から上層ａ式に至るまでを８段階に分離した。特にＢ群からＣ群、Ｃ群からＤ群の間に中間的な様相を持つ土器群が存在することが明らかになったのは重要である。また、そのことで、円筒土器の変遷が、強い連続性を持った、切れ目のない変遷を見せることがより浮き彫りになったと思われる。

今回筆者が行った分類は、個々の文様要素の変化で変遷を語るのではなく、文様以外の特徴をベースとして変化を説明しているため、これまでの考えと若干あわないところもあるが、今回は畑内遺跡Ｃ捨場出土土器のみの変遷を考えただけであり、これから周辺の遺跡や他地域の遺物等との関係を探らなければならないと思う。また、他遺跡との比較の前に、本遺跡の遺構出土遺物や、捨場・遺構外から出土した遺物などを、詳細に比較検討して、畑内遺跡における円筒下層式土器の変遷を明らかにする必要がある。今後の課題としておきたい。

2　畑内遺跡における異系統土器群と在地系土器群の接触について

C捨て場からは、在地系の縄文前期土器群に混ざって、東北南部及び北陸地方との関係を窺わせる土器群が出土している。このような土器群が県内の遺跡から出土するのは珍しいことである。図72に青森県内から出土した縄文時代前期末～中期前葉の異系統土器を集成した。集成漏れがある可能性は多分にあるが、主なものだけでも10遺跡からの出土を確認した。しかしながら、他遺跡の資料についてはここで述べる準備も余裕もないので、ここでは畑内遺跡から出土した異系統の土器についてすでに報告した分を含めて述べることにする。

図73に、すでに過去の畑内遺跡の報告書において報告されている異系統土器の実測図を集成した。1～5は土坑内から、6はB捨場からの出土である。1・2は半截竹管状の工具の破砕面を使った二本同時施文の沈線により文様が構成されている。1の口縁部には円形の凹みが一つ観察され、さらに、三角形の印刻が口縁部に並んで観察される。2は口縁部で外傾する器形であり、口縁部形状は波状形を呈する。波頂部の下には、俵状の突起が貼り付けられている。3は口縁部直下に橋状把手が見られる。把手表面及び口縁部には竹管状の工具による断面半円状の沈線が施文されている。4は口縁部が強く外反している。口縁部には竹管状の工具による矢羽根状の沈線が施文されている。胴部には単軸絡条体1a類が施文される。口唇部形状は在地系土器群の口唇形状gに類似している。5は口縁部の小破片であるが、外面が無文で、口縁部内面に粘土紐を鋸歯状に貼り付けている。6は器形・口唇部形状ともに在地系土器群D1類に類似している。しかしながら、口縁直下に縦位に沈線を施文し、その下位に平行沈線を施文し、その一部に刺突を施している。以上のような土器がこれまでに出土しているが、今回報告する土器もあわせて、在地系土器群と異系統土器群との関係を見てみると、次のようなグループに分けることができる。

1　文様・器形等の特徴が他地域の土器そのもののグループ

2　器形が他地域・文様が在地系のグループ。

3　器形が在地系・文様要素に他地域の影響を受けているもの。

4　器形・文様ともに他地域の影響が弱くしか見られないもの。

1のグループに属するものはもっとも数が多く、異系統土器群の主体である。実測図の222～225・227・228・230・231・233～236・246～270等が相当する。図73中でいうと1～3が相当すると思われる。特に、北陸系の土器については、そのほとんどがこのグループに属する。すなわち他地域から直接的に入ってきたと考えられる土器群である。

2のグループに属するものは226・229・232・234・237等が相当する。226については大木式土器によく見られる球胴形深鉢の器形をそのまま採用し、文様には口縁部に絡条体の側面圧痕、胴部には単軸絡条体1a類という在地系土器群の要素を取り入れている。229・232は同一個体であるが、器形は球胴形の深鉢を採用し、文様構成も渦巻き状のモチーフを採用するなど、他地域色の強い個体であるが、文様自体はすべて縄文原体の側面圧痕を採用するという、詰めの段階で在地色をにおわせる個体である。237は器形は浅鉢で、口唇部形状が233に類似しており、他地域色をにおわせるが、文様には縄文を多用するなど、最終段階で在地系の要素を採用している。234に関してはやや複雑である。器形のアウトラインは北陸地方の朝日下層～新保式に見られる形であるが、口唇部形状は在地系土器群のg類である。また、文様に関しても、口縁部に鋸歯状のモチーフを描いている

が、施文具は縄文原体であり、全体的に見た目は在地系の特徴が強く現れている。

3のグループには240などが相当する。縦方向の隆帯を持っており、器形的にはE群に属する深鉢になると推定される。しかし、本来縄文原体の側面圧痕で施文されるはずの文様が沈線に置き換わるという現象が起きている。

4のグループには図73の4が相当する。器形の面では口縁部が外反する点、文様の面では沈線を使用する点において他地域の影響が若干見られるが、直接的な影響を受けているとはいえず、基本的には在地系土器群の中での特異な例として判断される可能性が高いものである。

以上のことをまとめると、畑内遺跡において異系統の土器は次のような様相を示していると考えられる。

1　在地系の土器群と融合するものよりは直接的に他地域から入ってくるものが多い。

2　在地系土器群と融合する場合には器形が変化し、文様は在地系の要素を採用する場合が多い。

3　在地系の器形に他地域の文様がそのまま採用されることは少ない。

以上から、畑内遺跡は円筒土器文化圏の南端に近い場所にありながらも、円筒土器文化の伝統ともいえる縄文による文様施文をかたくなに守っている遺跡であるということができる。

さて、これまでは他地域からの畑内遺跡への影響について、すなわち大木式土器あるいは北陸系土器の円筒土器文化への影響について論じたが、最後に円筒土器文化の他地域への影響について、畑内遺跡出土資料からいえることを述べることとする。

図73の6は『畑内遺跡Ⅲ』において、西（B）捨場出土土器の中の、異系等の土器群の一つとして報告されている。諸特徴に関しては先に述べているが、この土器は非常に異色な土器である。それを説明するために、図73の下段に山形県吹浦遺跡出土土器を掲載した。吹浦遺跡からは東北南部地域の在地の土器である、大木6式土器に伴い、北陸地方の朝日下層式土器や信州系の土器、円筒下層式土器に類似した土器などが出土している。その中で円筒土器に類似するものは第Ⅱ群土器として位置づけられているが、胎土に繊維を含まず、焼成堅緻なものが多く、第Ⅵ群土器とされる中部・北陸系の土器群に類似しているという。文様の特徴としては図73の9や10にみられるように口唇部に縦位に縄文を押捺することと、口縁部に縄文原体を数条平行に押捺することが挙げられる。畑内遺跡B捨場出土の図73の6は吹浦遺跡において口唇部に施文された縄文が沈線に置き換わったものと考えられる。また、実物を見ることができなかったので胎土の状態がどうかわからないが、報告者によると、色調的にはやや明るめな感じであったという。また、写真を見る限りでは、かなり堅そうな胎土であり、器表面もかなり滑らかであることがうかがえる。このように焼成堅緻な胎土は在地系土器には珍しく、吹浦遺跡例と同様な個体であると考えられる。ここで注目すべきは、円筒土器の影響ととらえられている土器が実は他地域の胎土、施文技法により作られ、畑内遺跡に存在している点である。このような土器は吹浦遺跡に限らず、新潟県長者ヶ平遺跡等で出土している。円筒土器は、北陸の朝日下層式成立に様々な影響をもたらしていると先学は論じているが（高堀1965）、この土器は北陸地方において円筒下層式の影響を受けて作られた土器が、その故郷に戻ってきたということもいうことが可能であると思われ、C捨場から出土している北陸系土器群と併せて、当時の、物だけでなく、土器文様等の情報のネットワークの広さが窺え、さらに円筒下層式土器の影響の広さをも窺わせるものである。

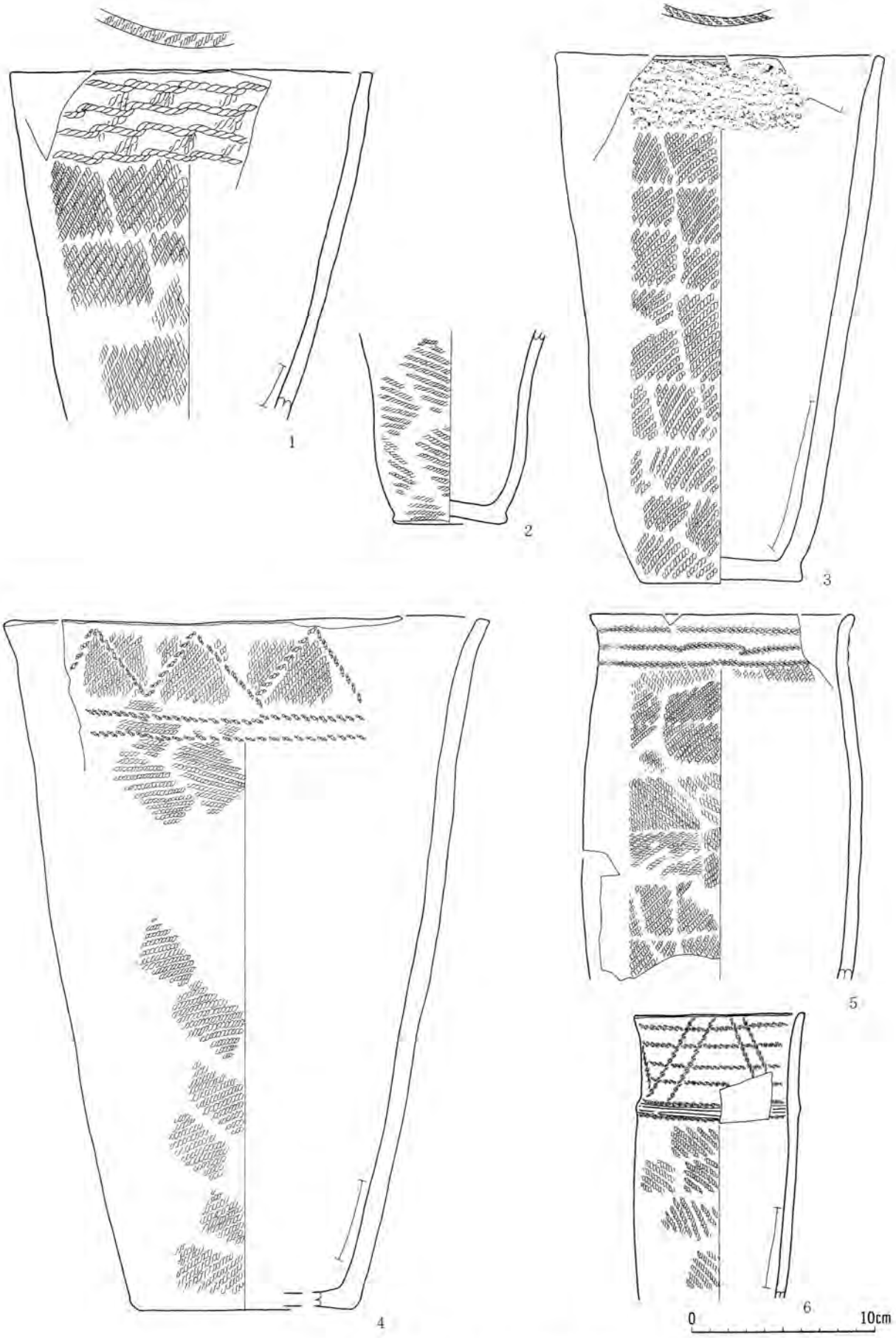
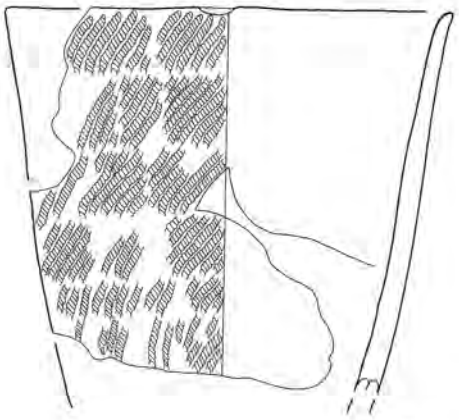
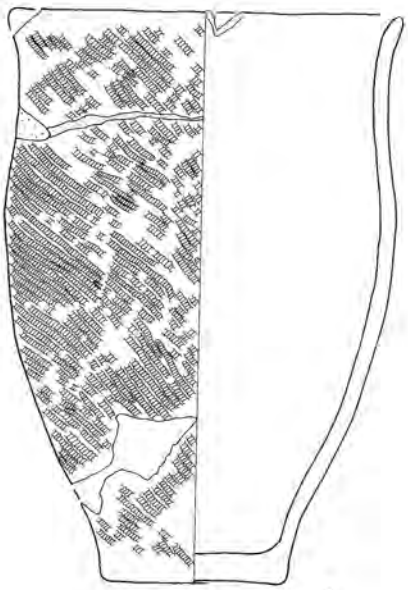
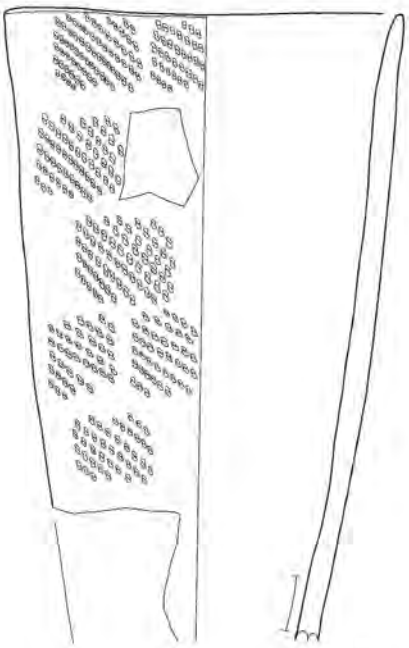
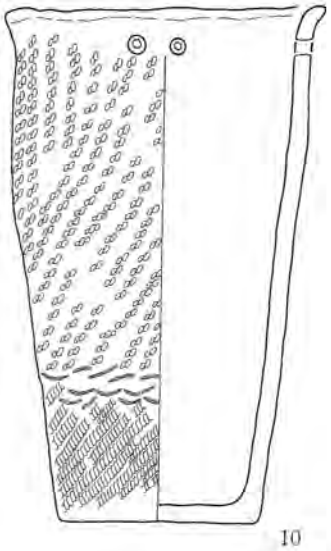


図８　縄文時代前期～中期初頭の土器(1)









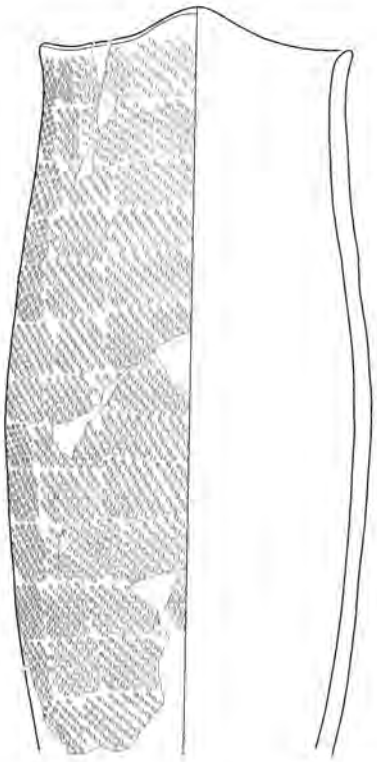


図９　縄文時代前期～中期初頭の土器(2)

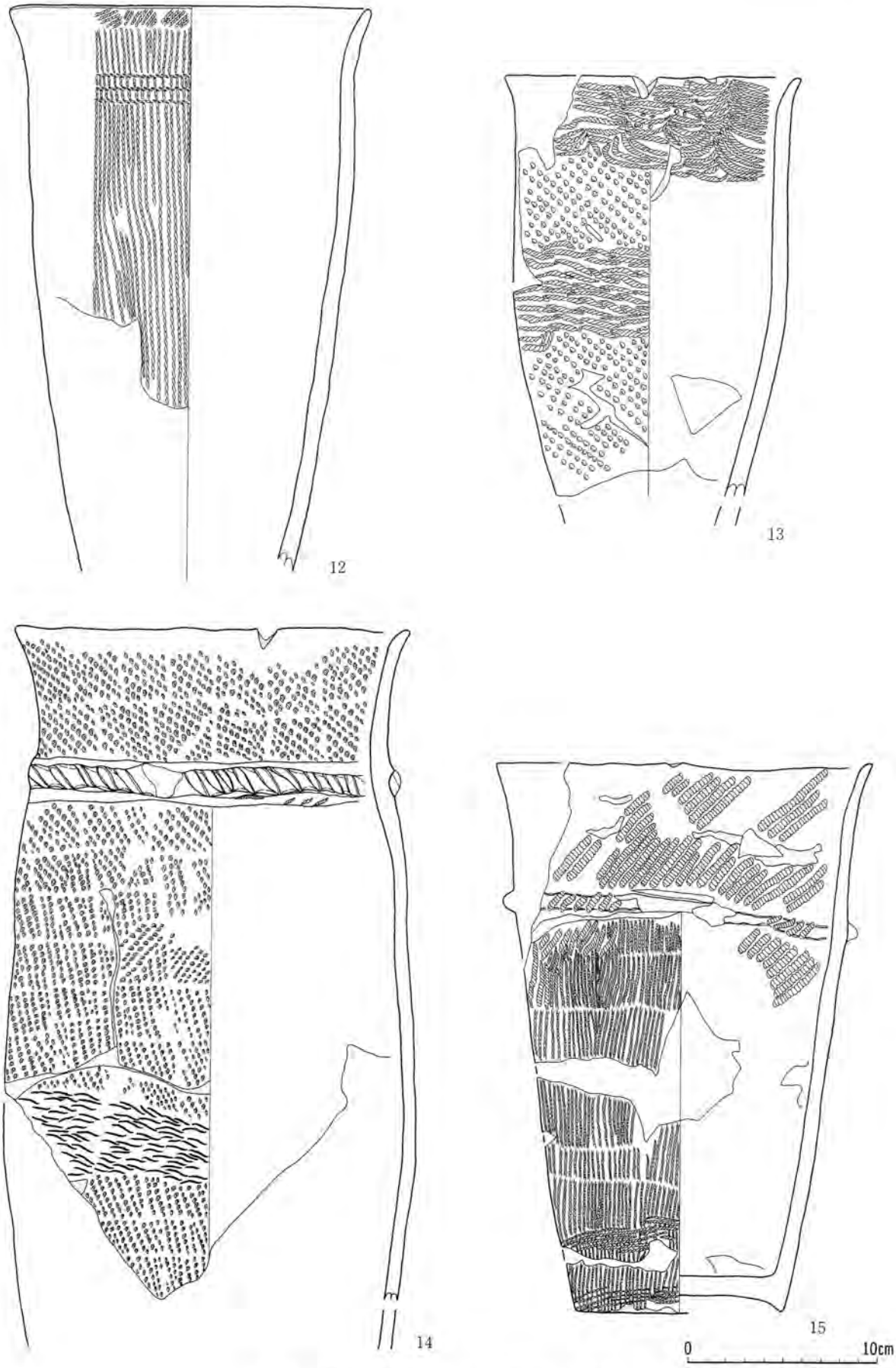


図10　縄文時代前期～中期初頭の土器(3)

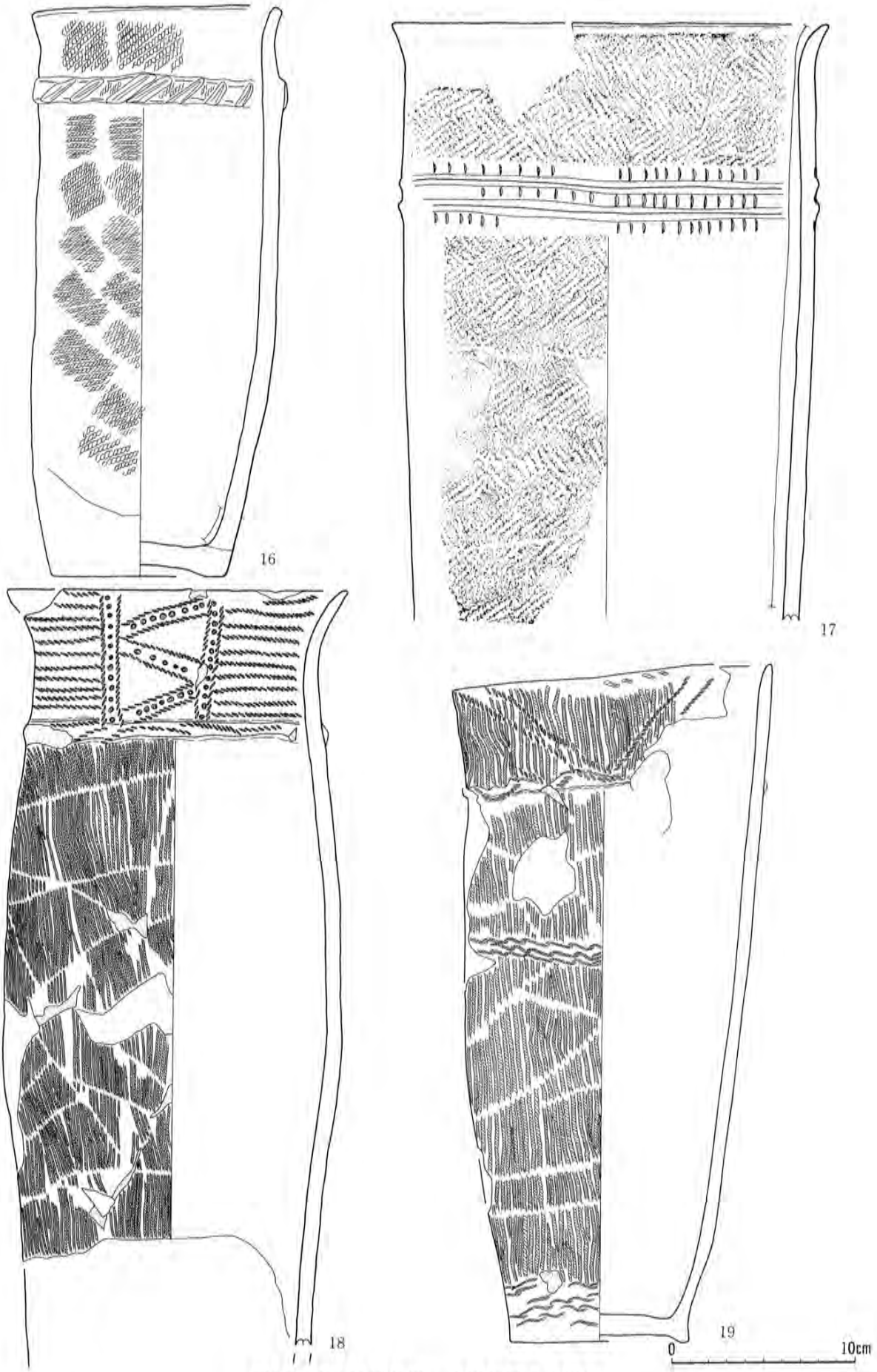


図11　縄文時代前期～中期初頭の土器(4)

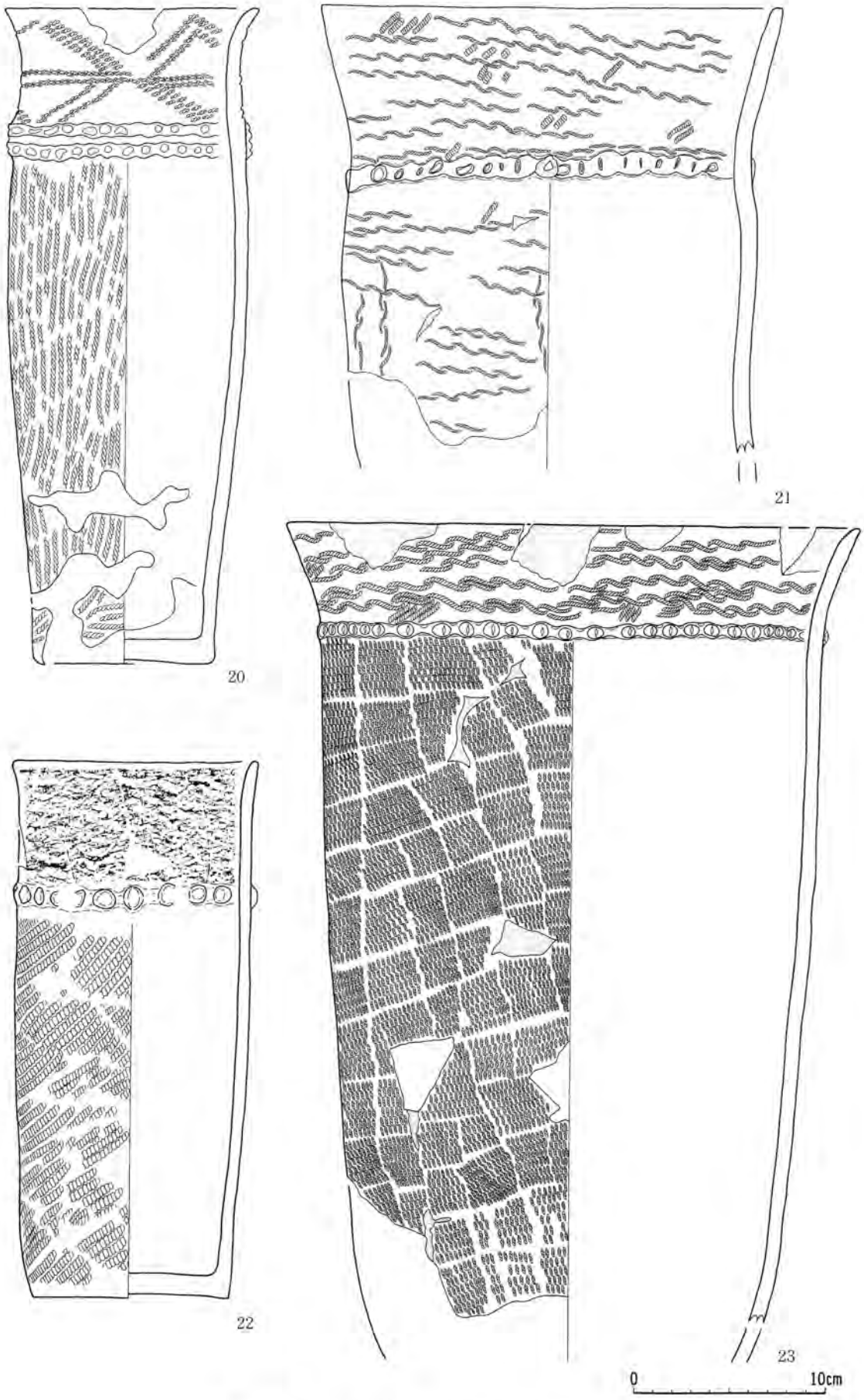


図12　縄文時代前期～中期初頭の土器(5)

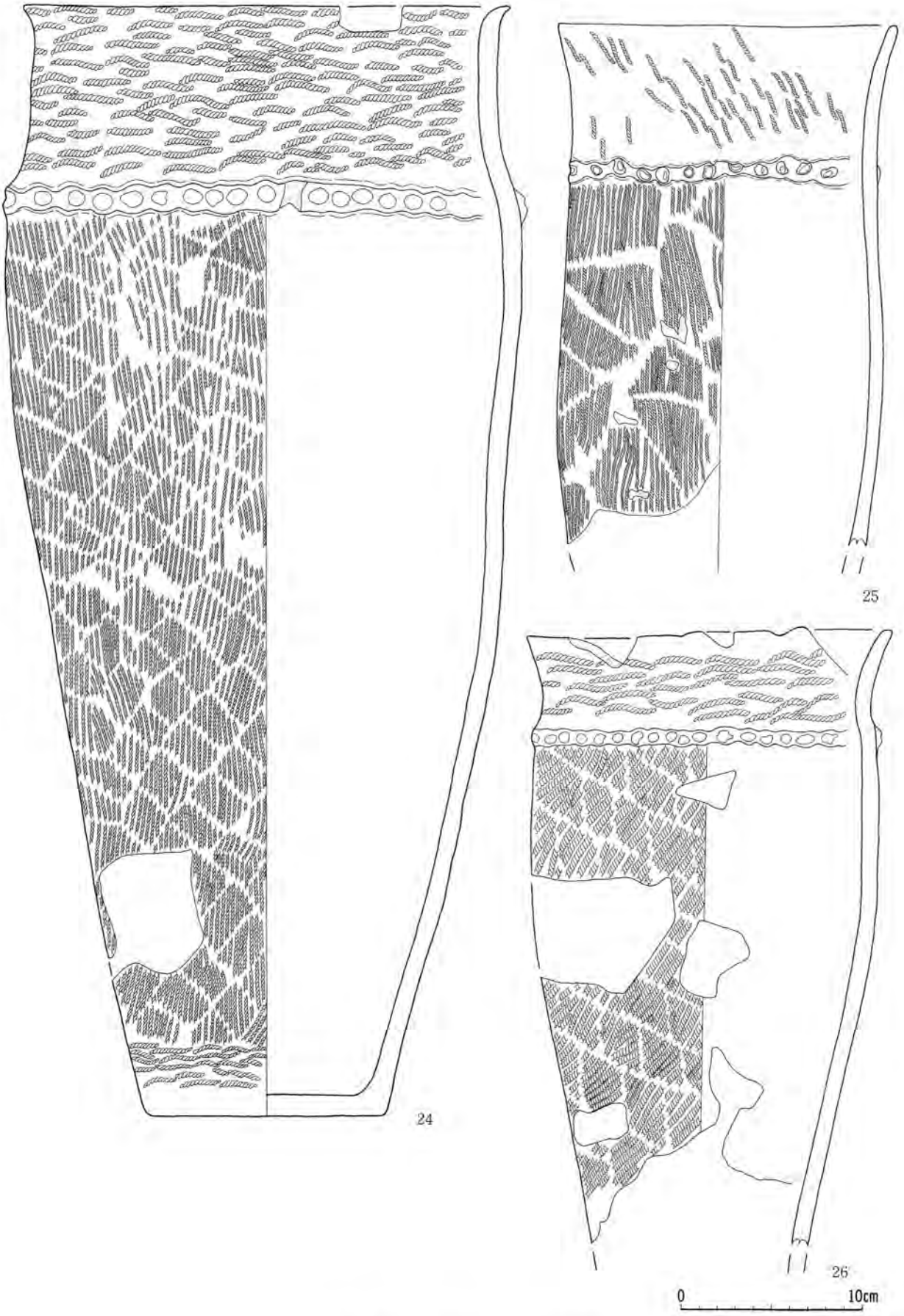


図13　縄文時代前期～中期初頭の土器(6)

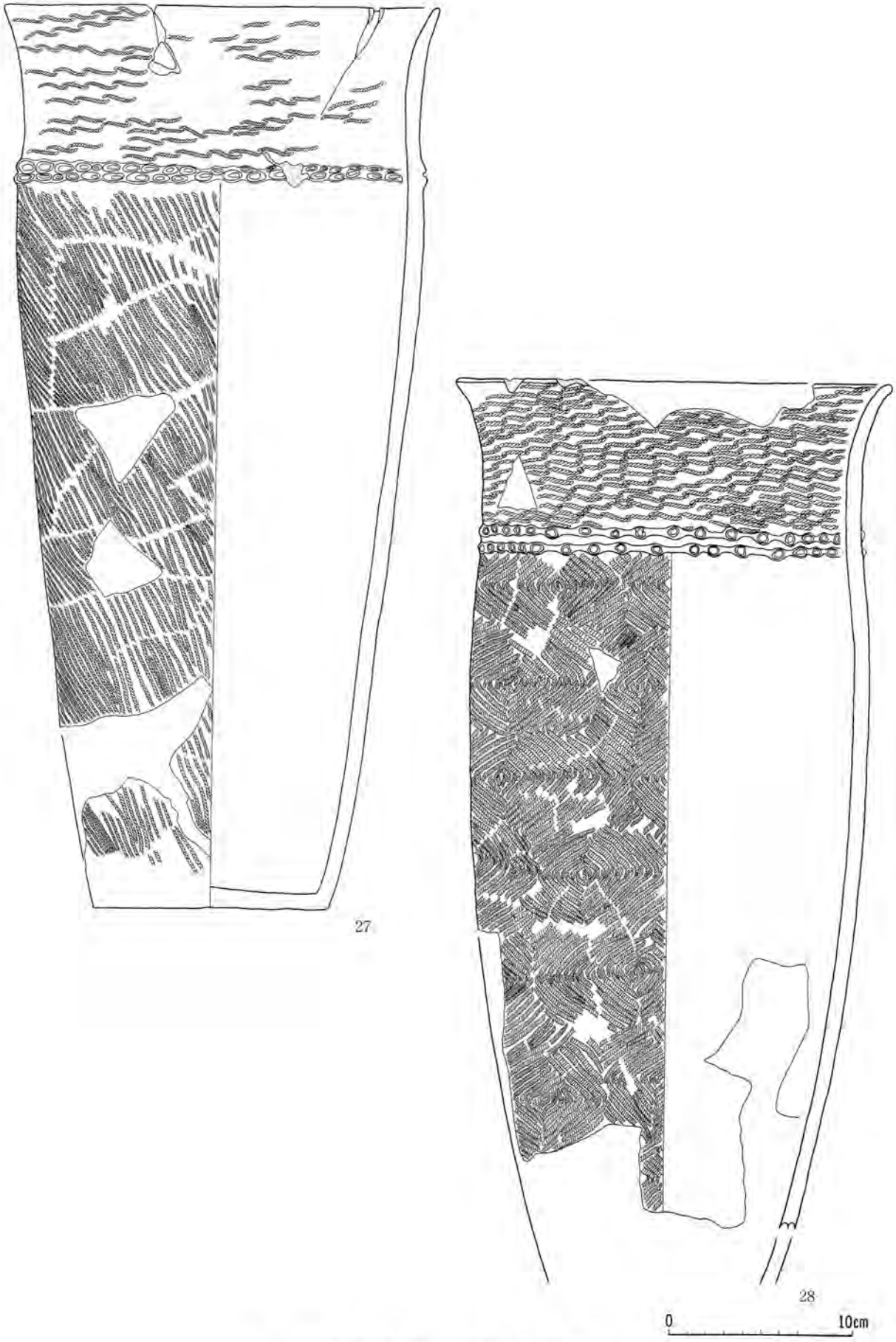


図14　縄文時代前期～中期初頭の土器(7)

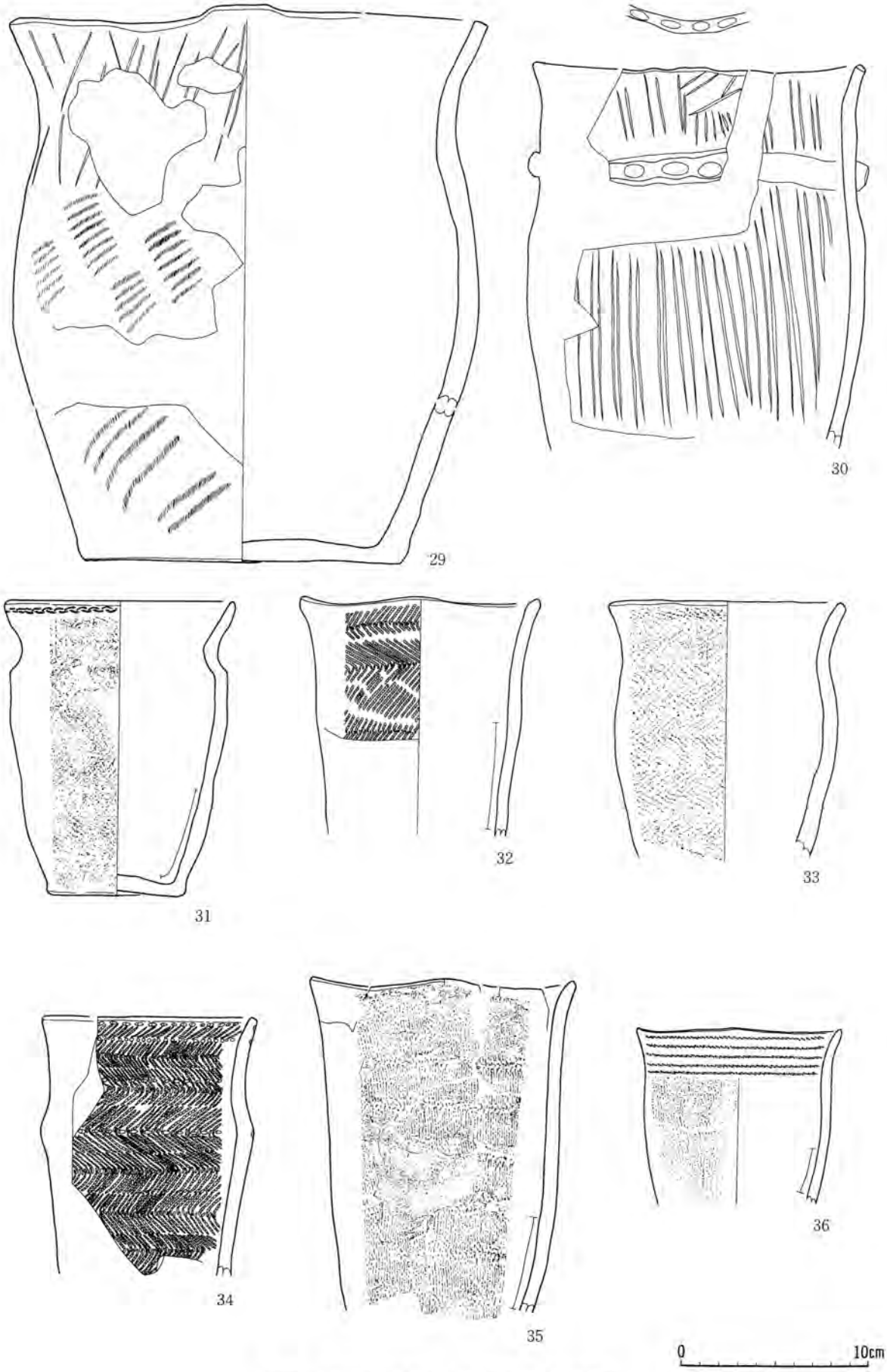


図15　縄文時代前期～中期初頭の土器(8)

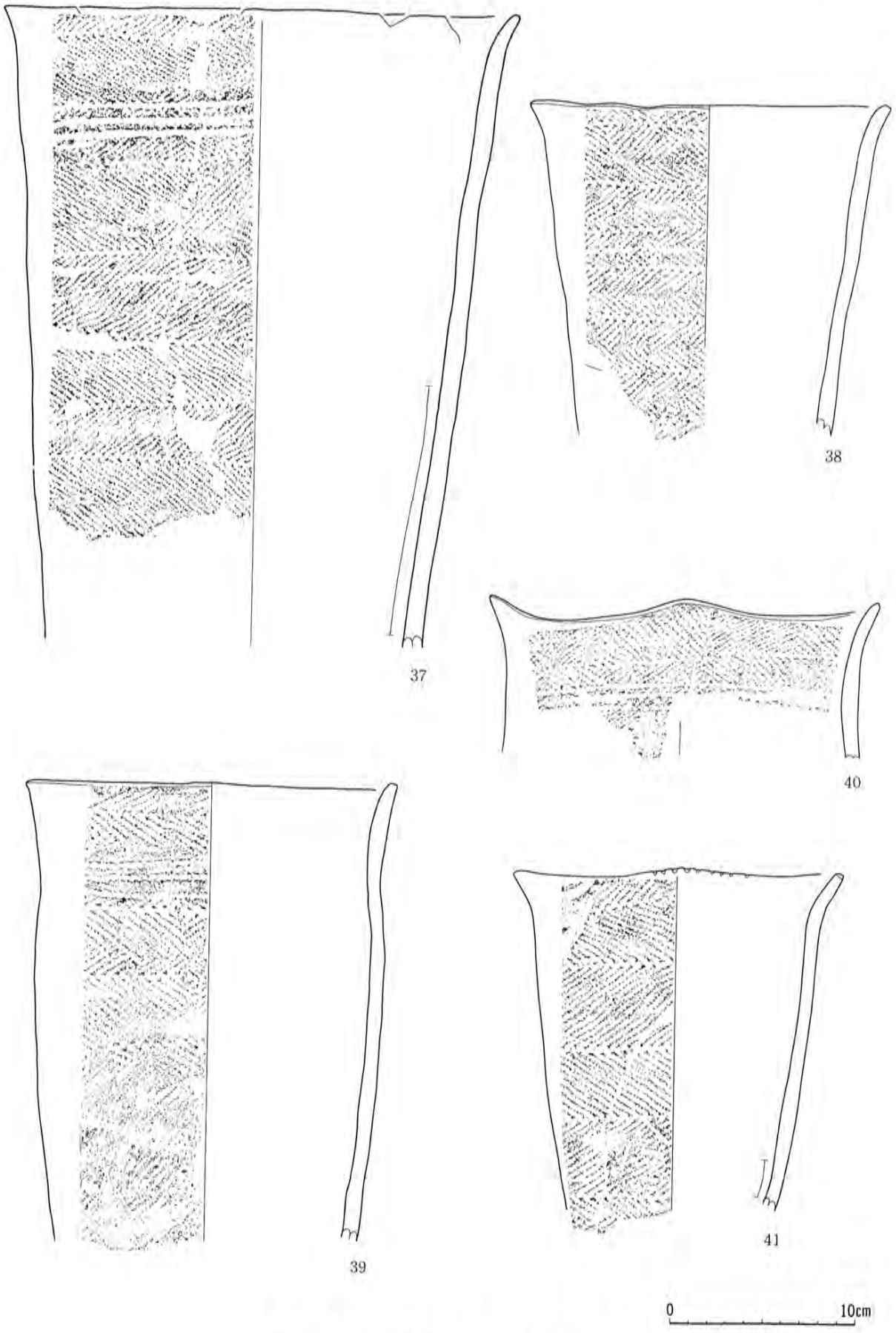


図16　縄文時代前期～中期初頭の土器(9)

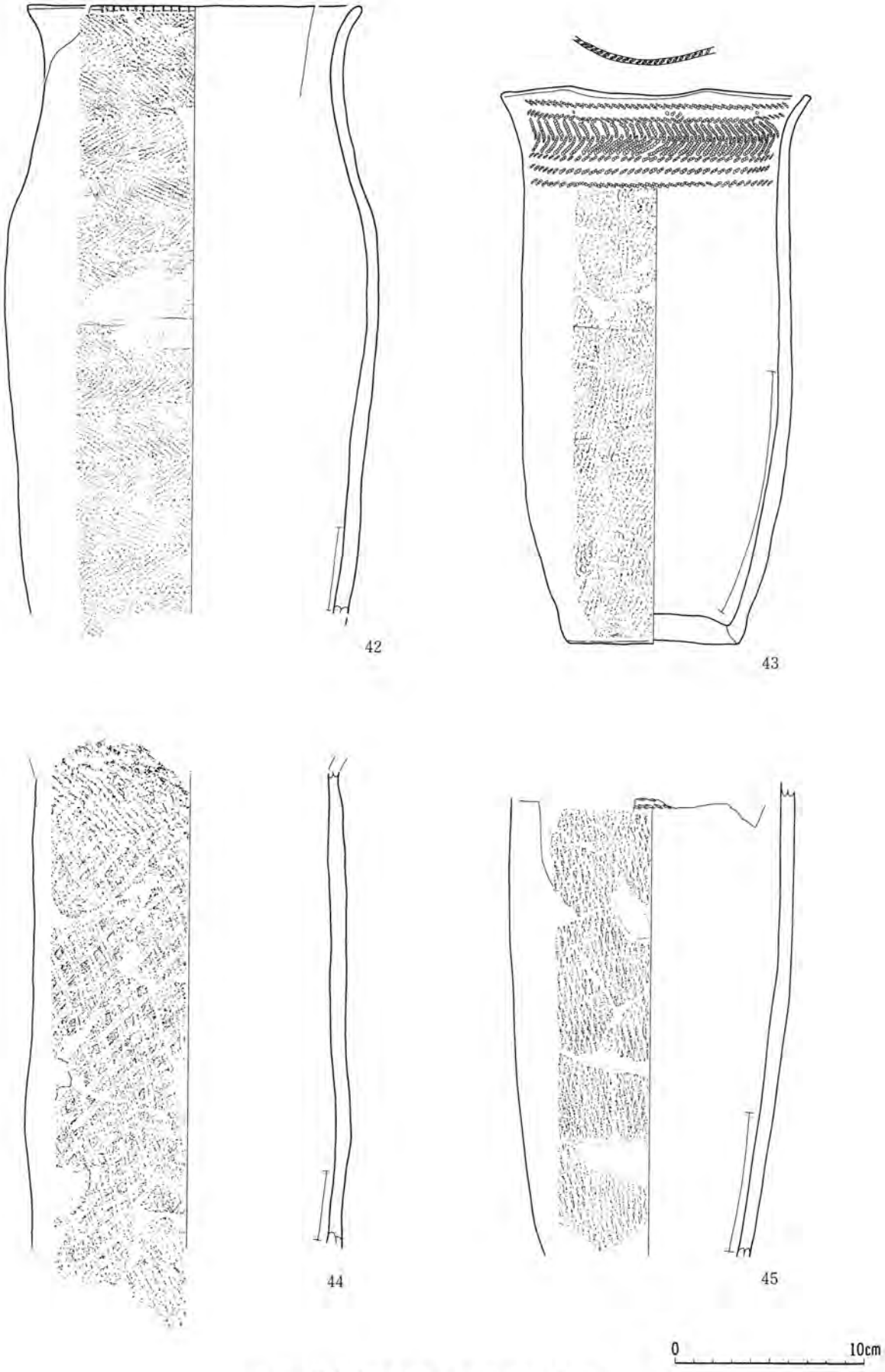
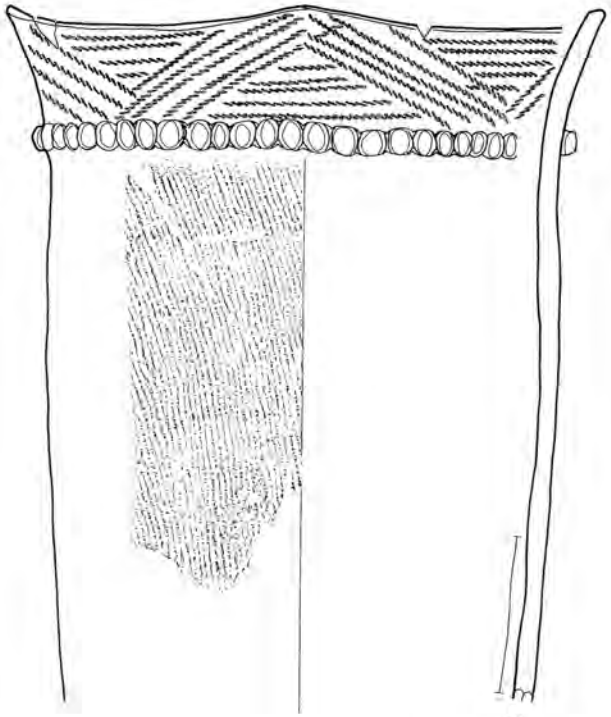
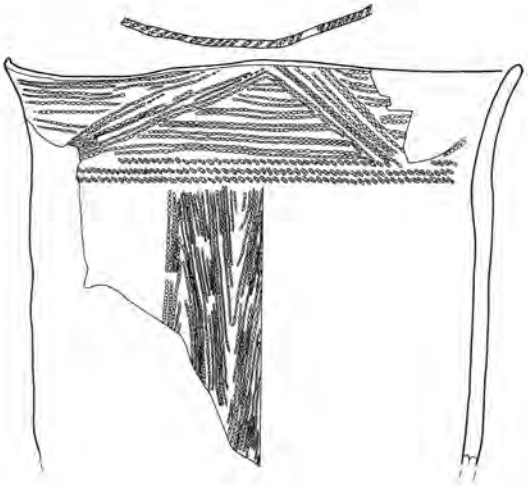
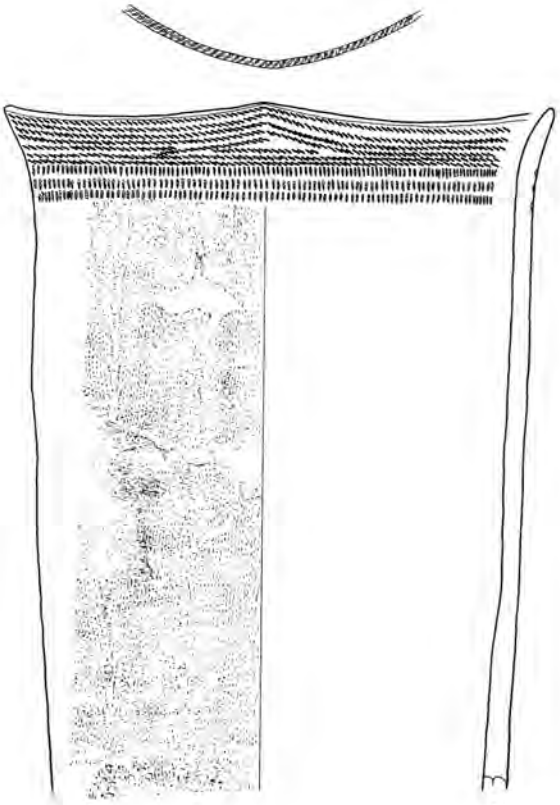
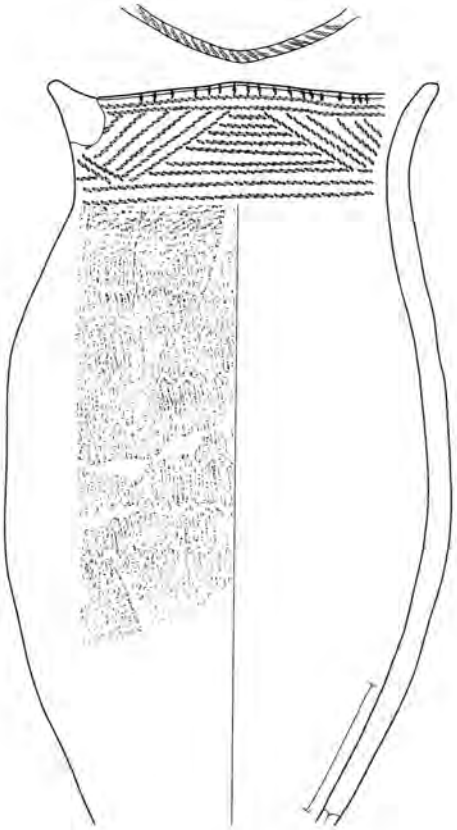


図17　縄文時代前期～中期初頭の土器(10)









0　10cm

図18　縄文時代前期～中期初頭の土器(11)

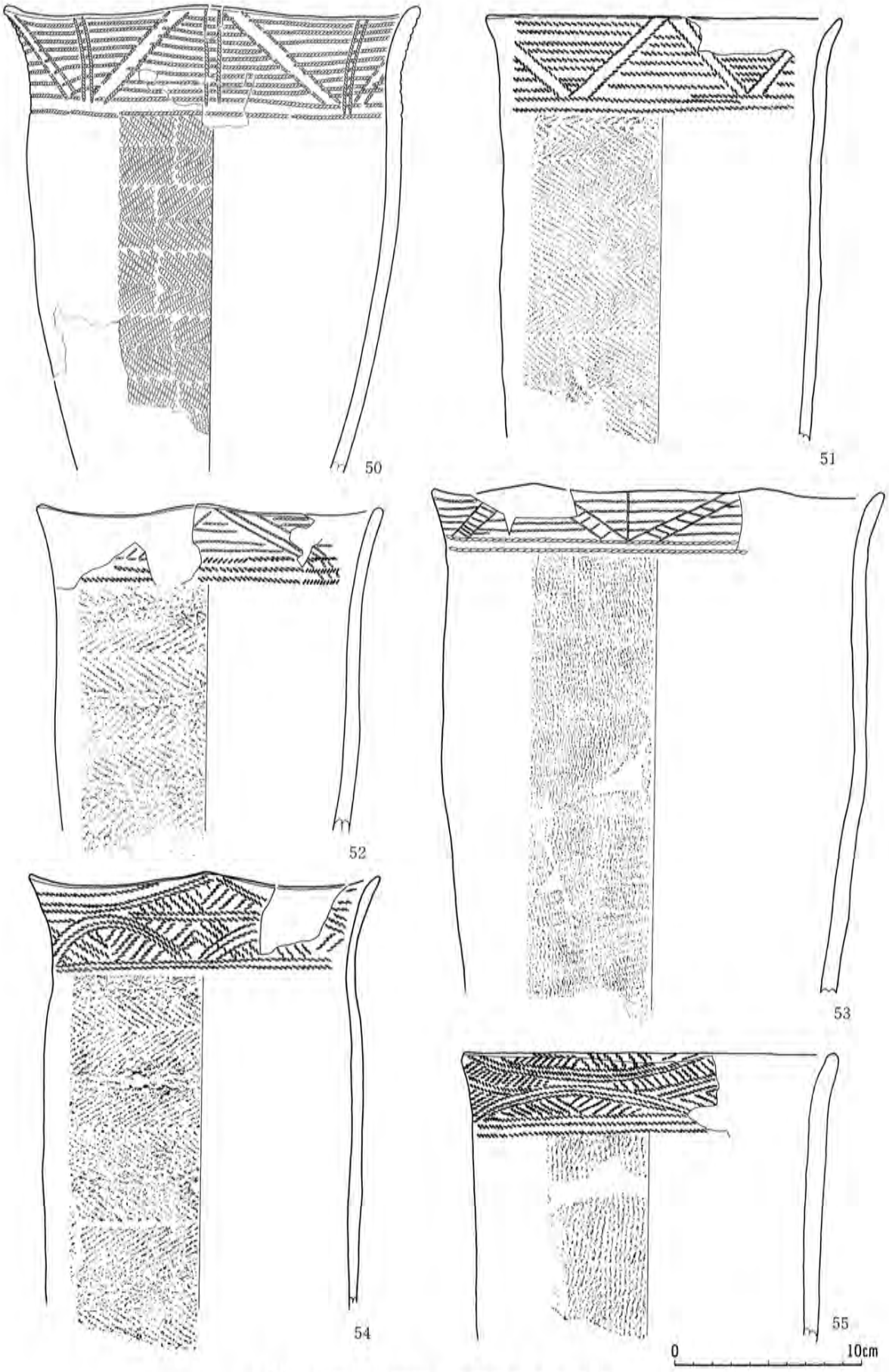


図19　縄文時代前期～中期初頭の土器(12)

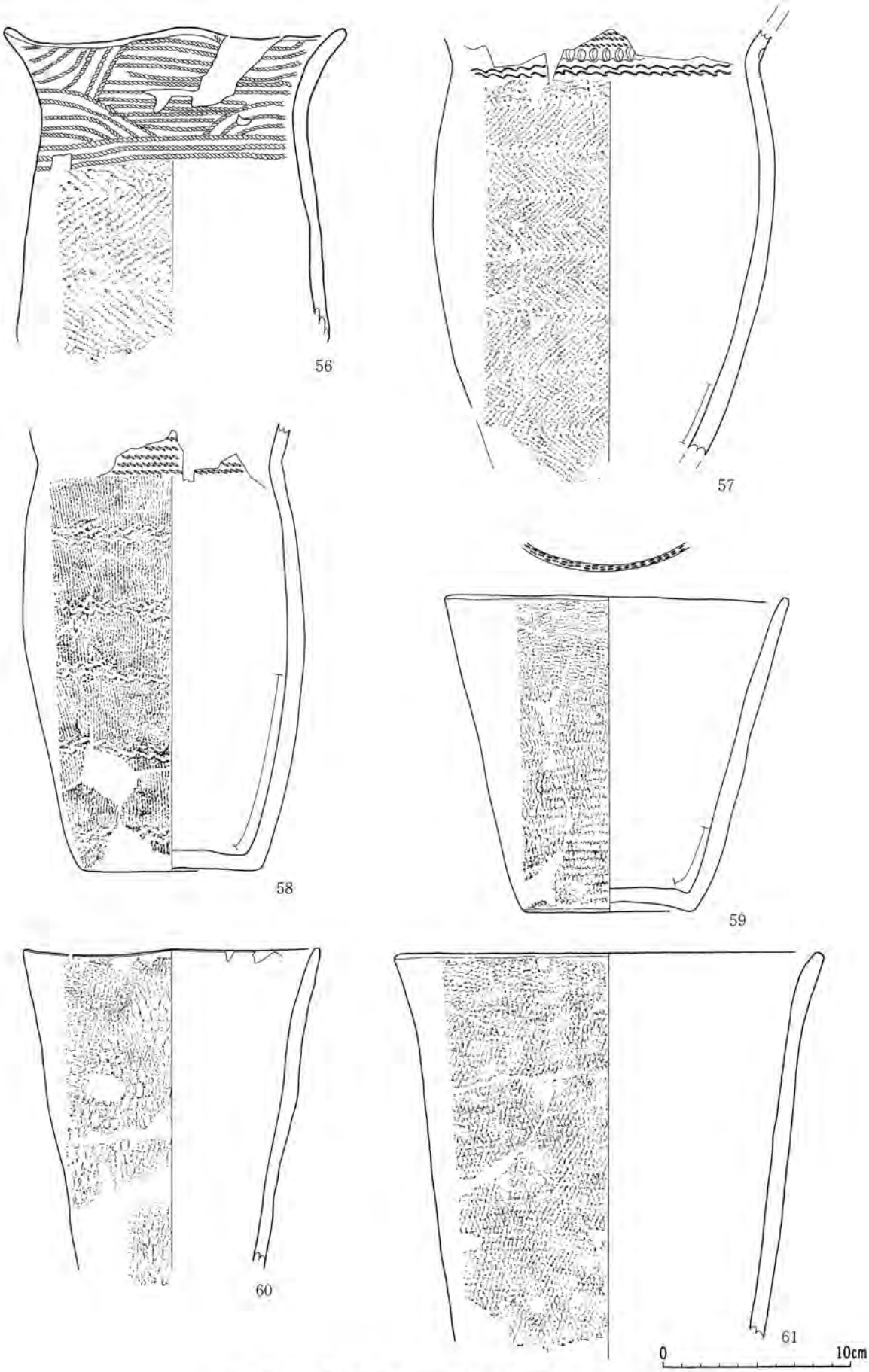


図20　縄文時代前期～中期初頭の土器(13)

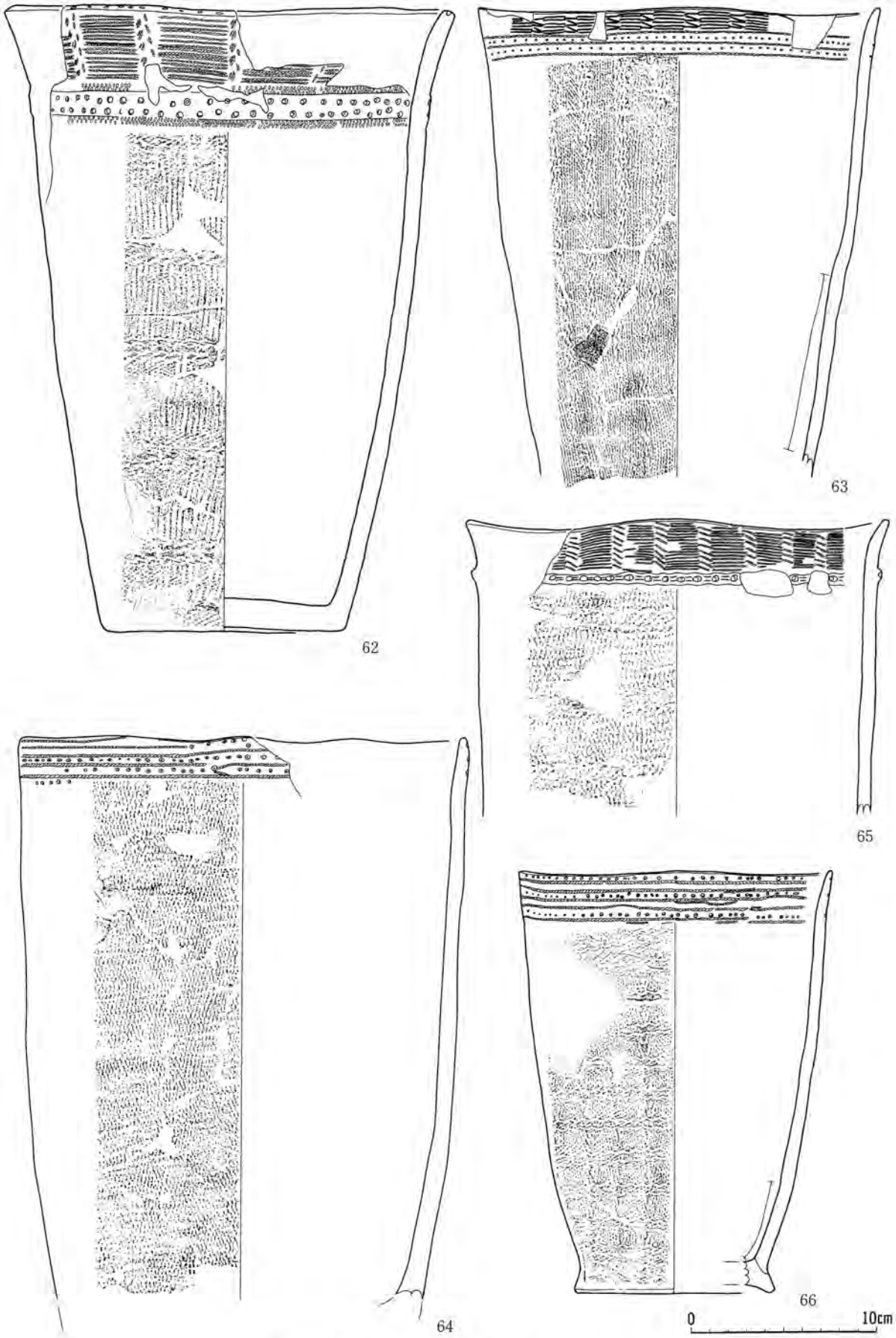


図21　縄文時代前期～中期初頭の土器(14)

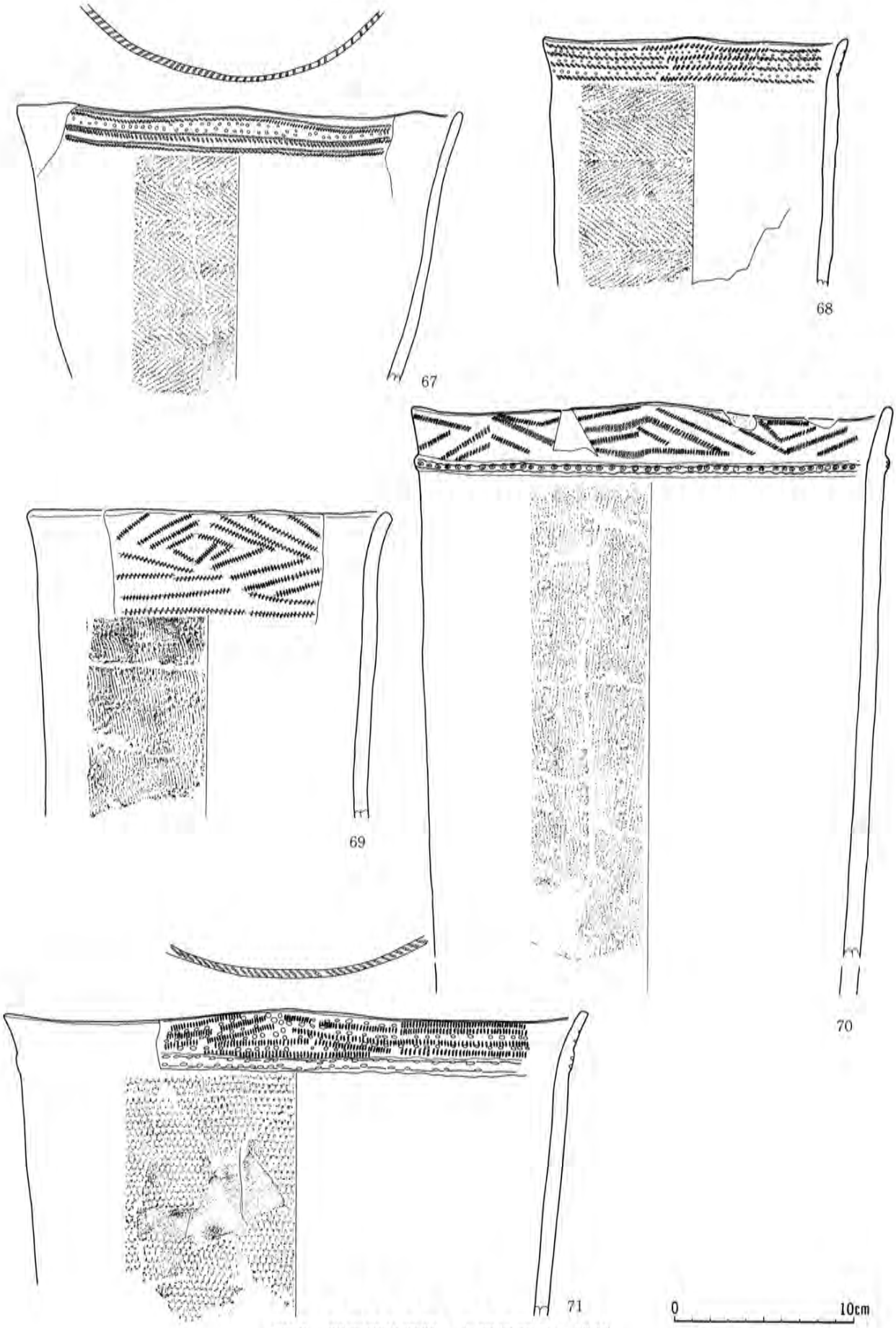


図22　縄文時代前期～中期初頭の土器(15)

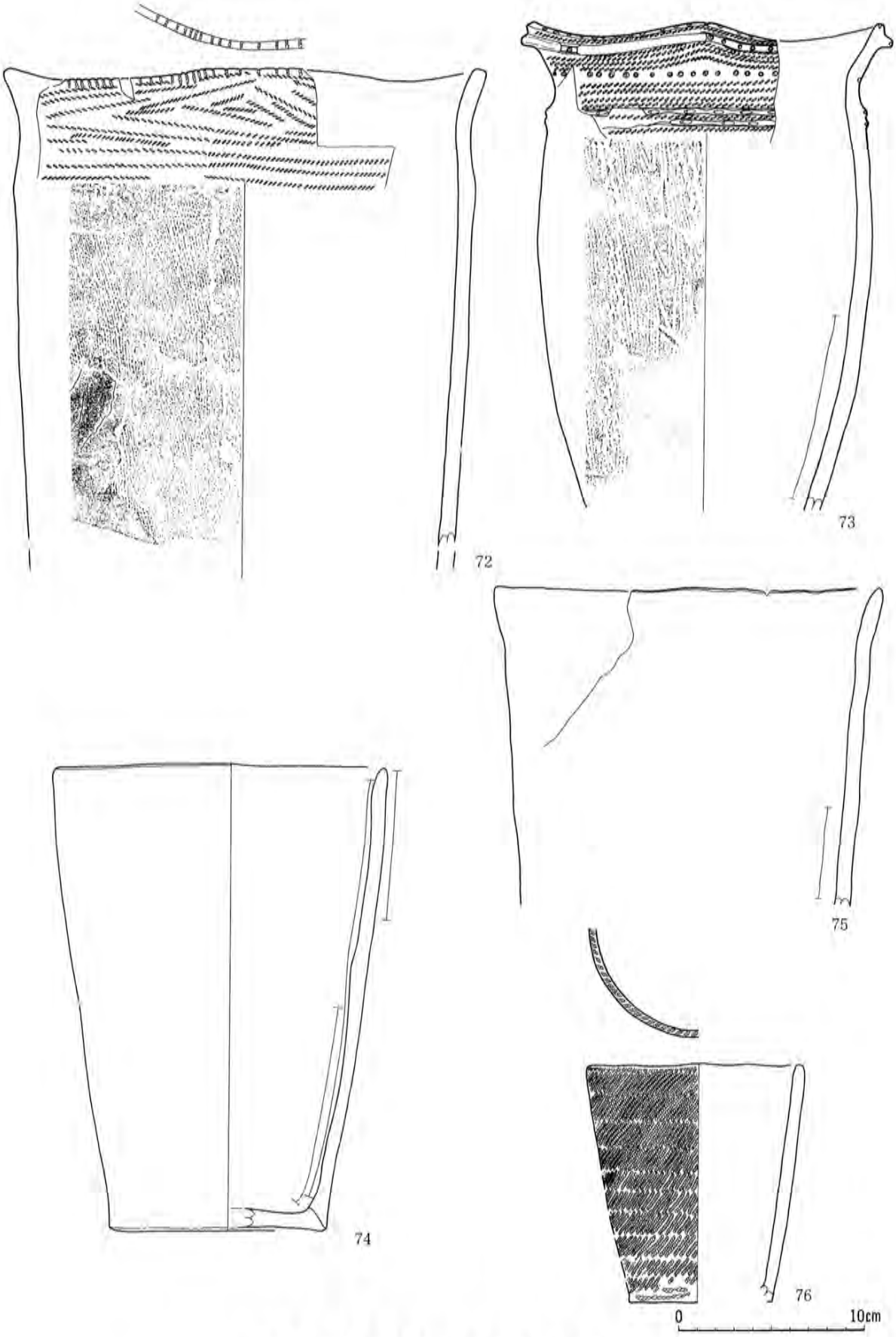


図23　縄文時代前期～中期初頭の土器(16)

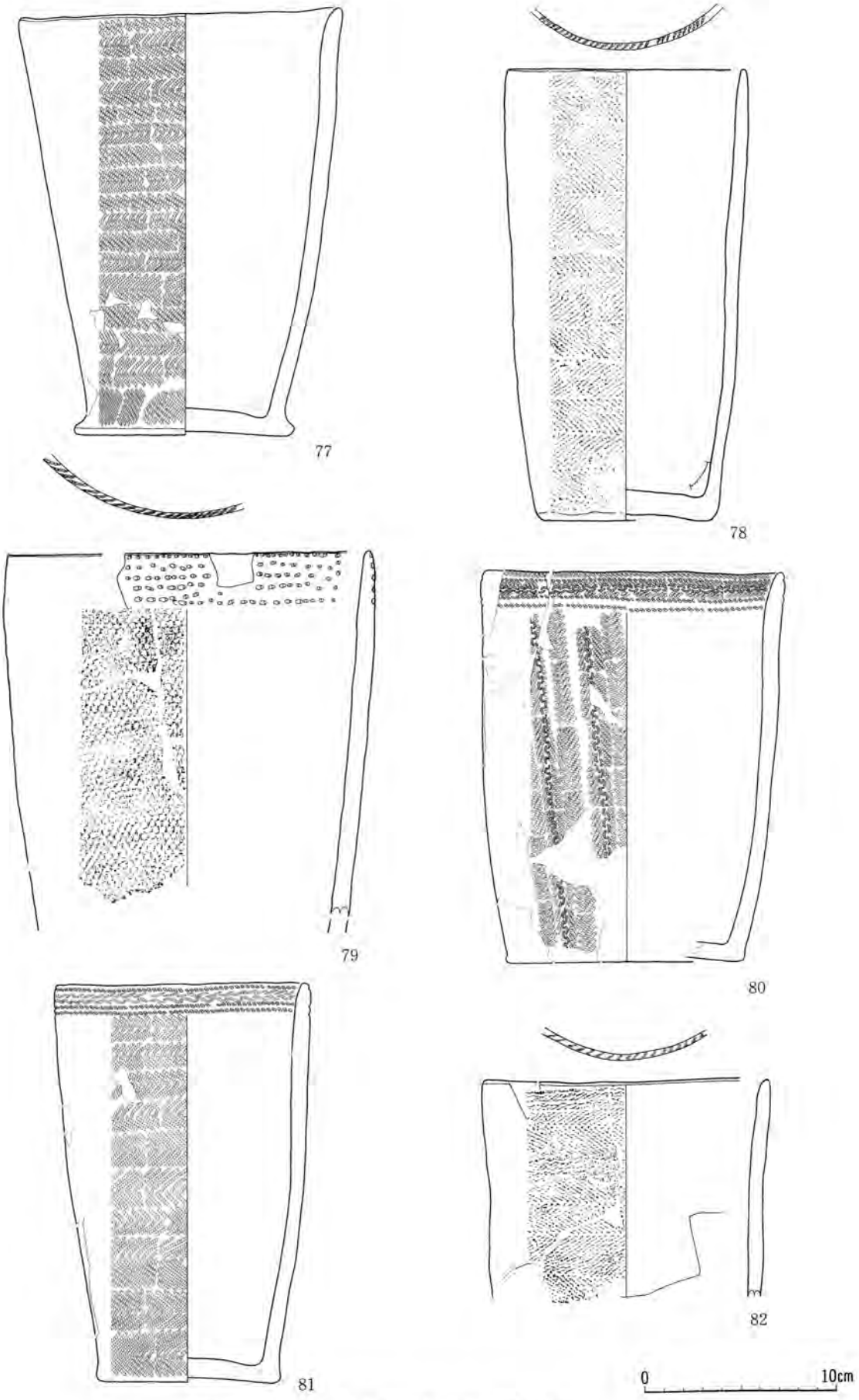


図24　縄文時代前期～中期初頭の土器(17)

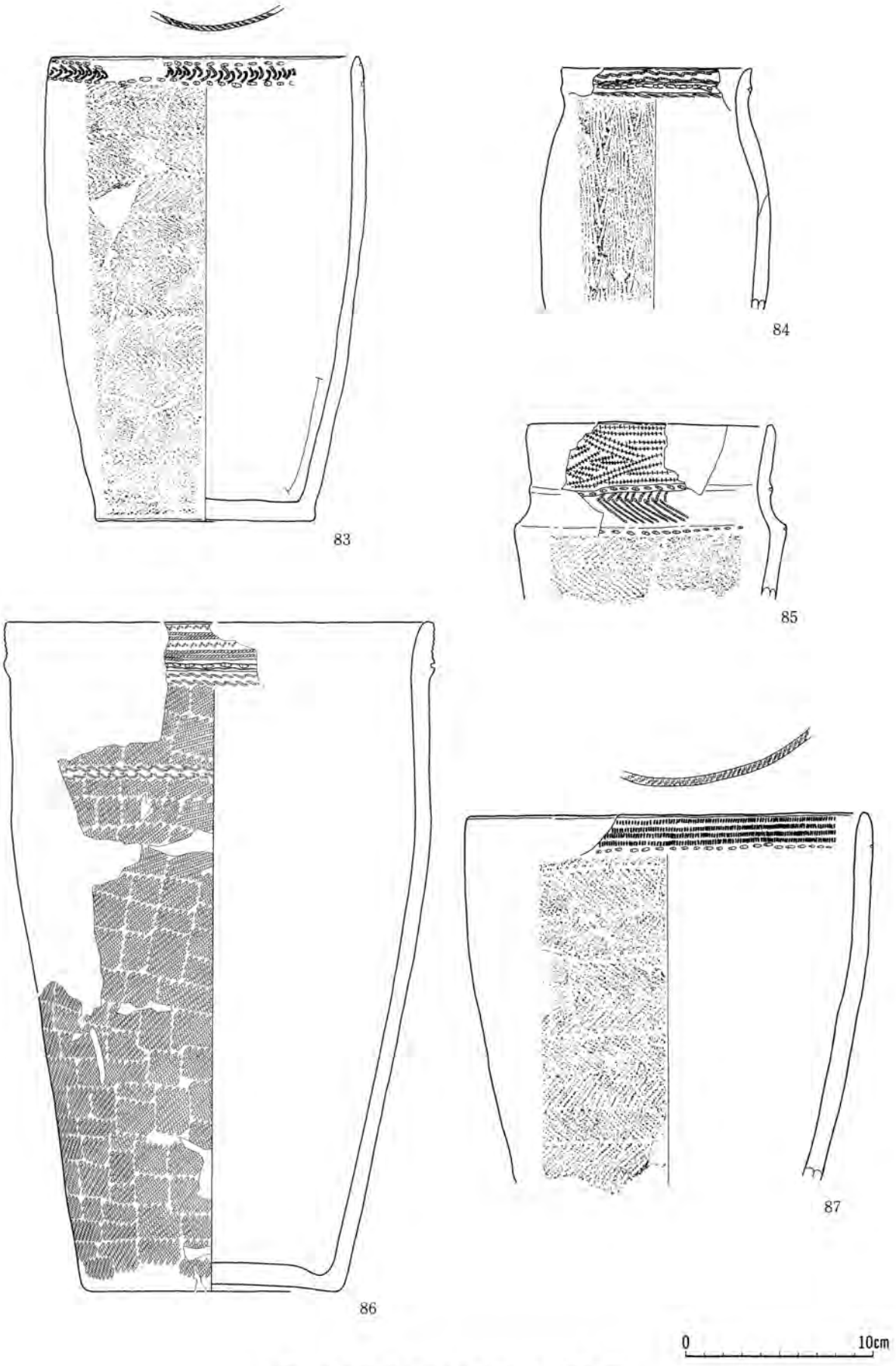


図25　縄文時代前期～中期初頭の土器(18)

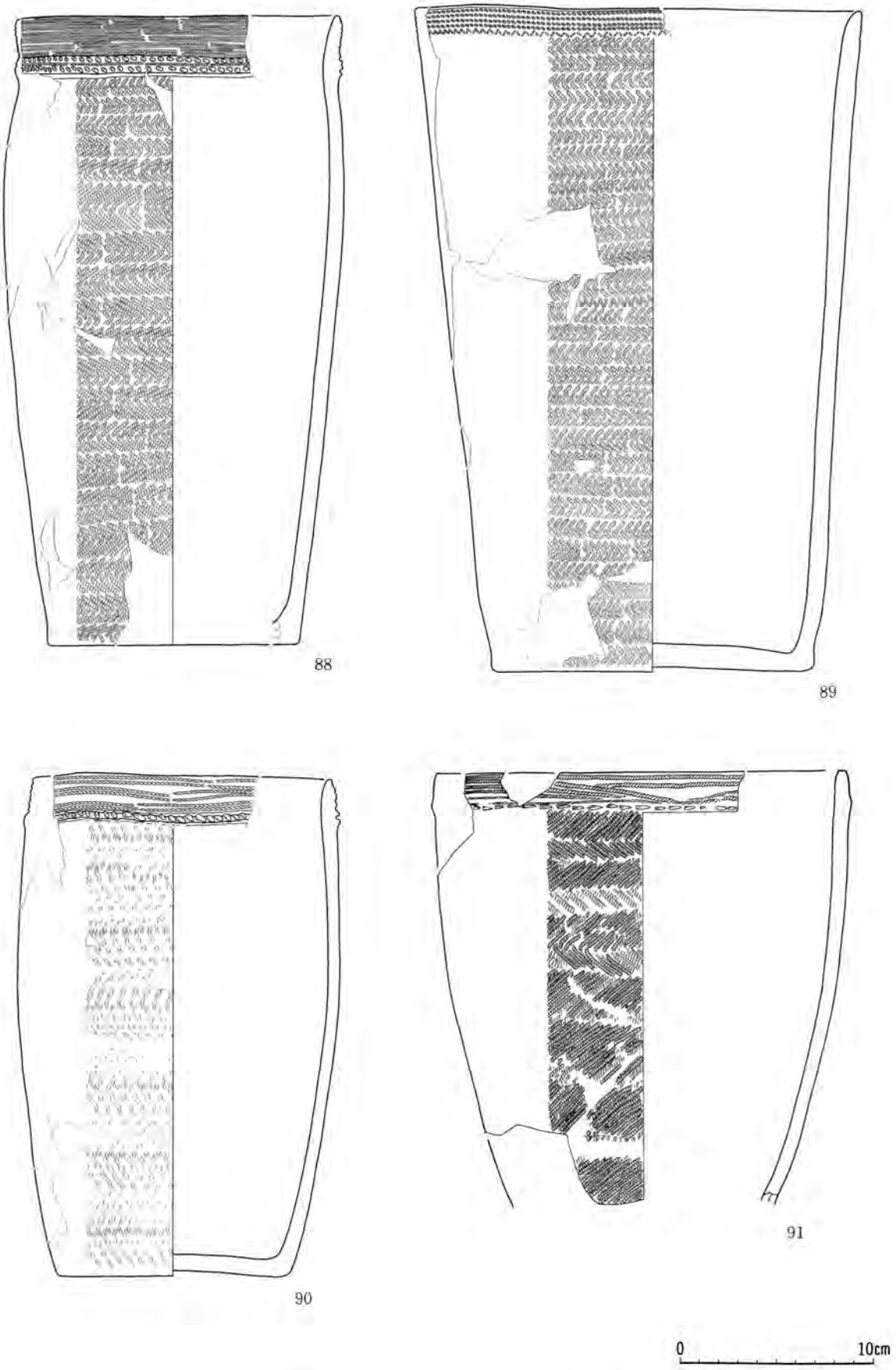


図26　縄文時代前期～中期初頭の土器(19)

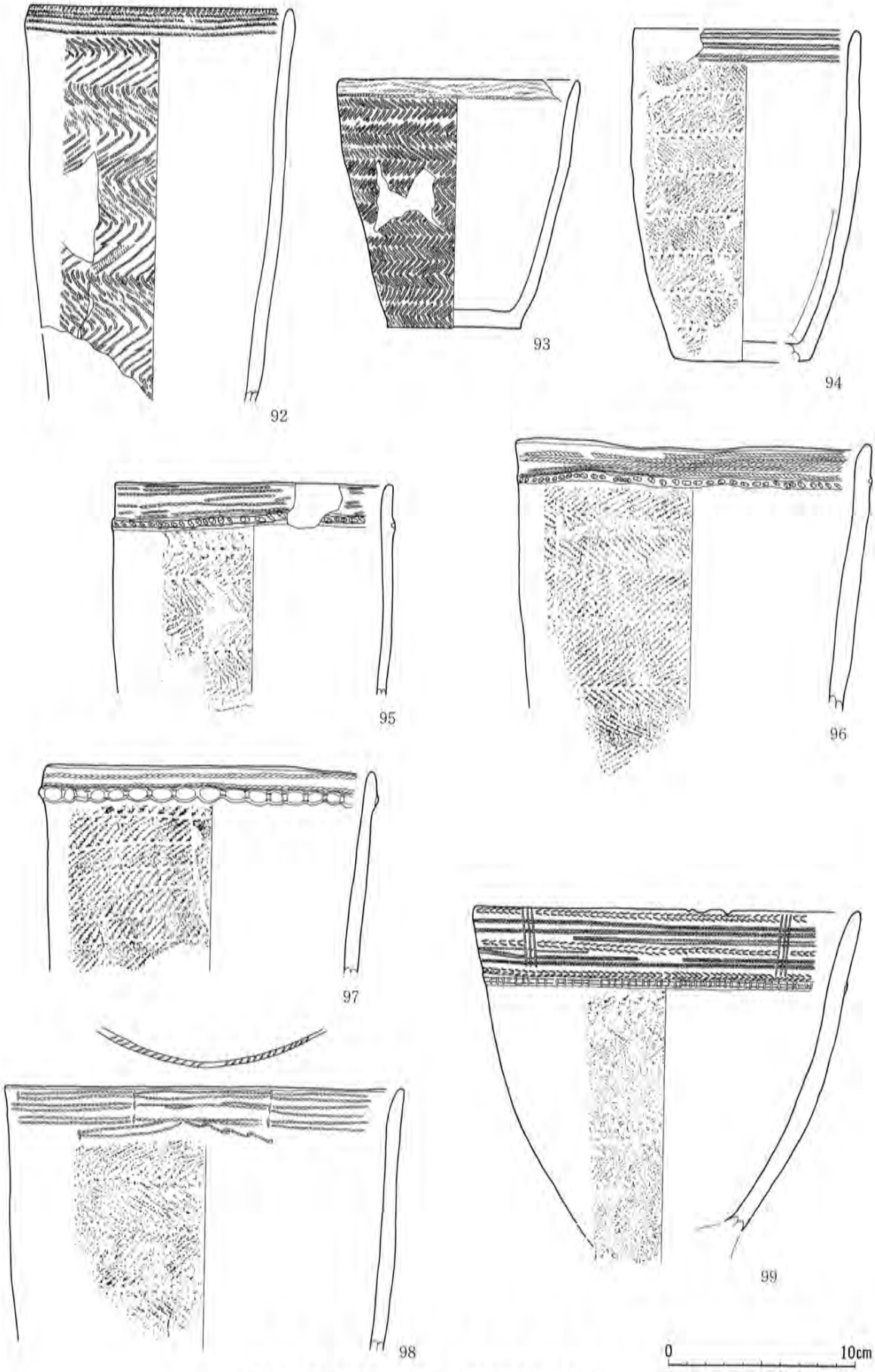


図27　縄文時代前期～中期初頭の土器(20)

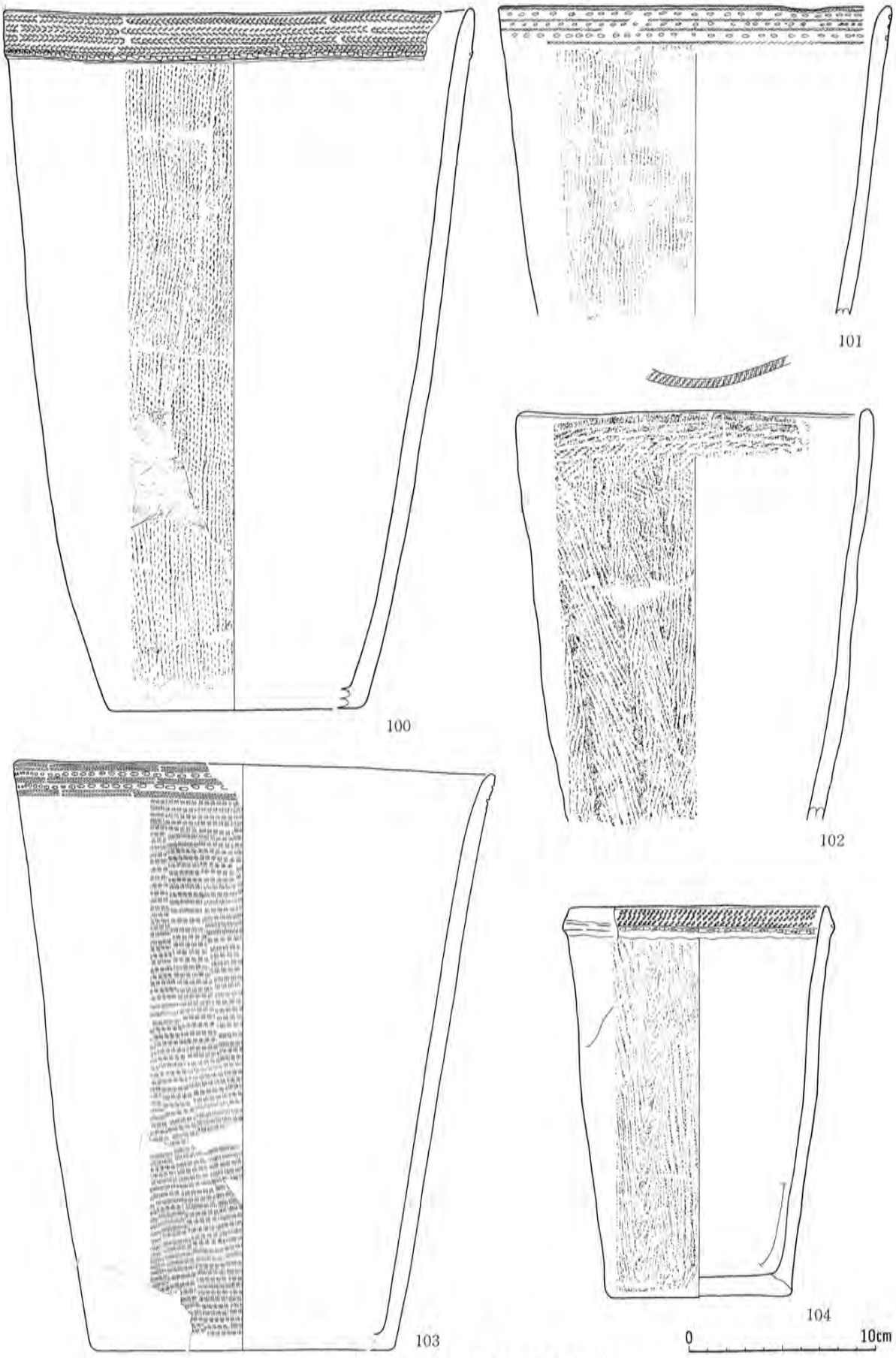


図28　縄文時代前期～中期初頭の土器(21)

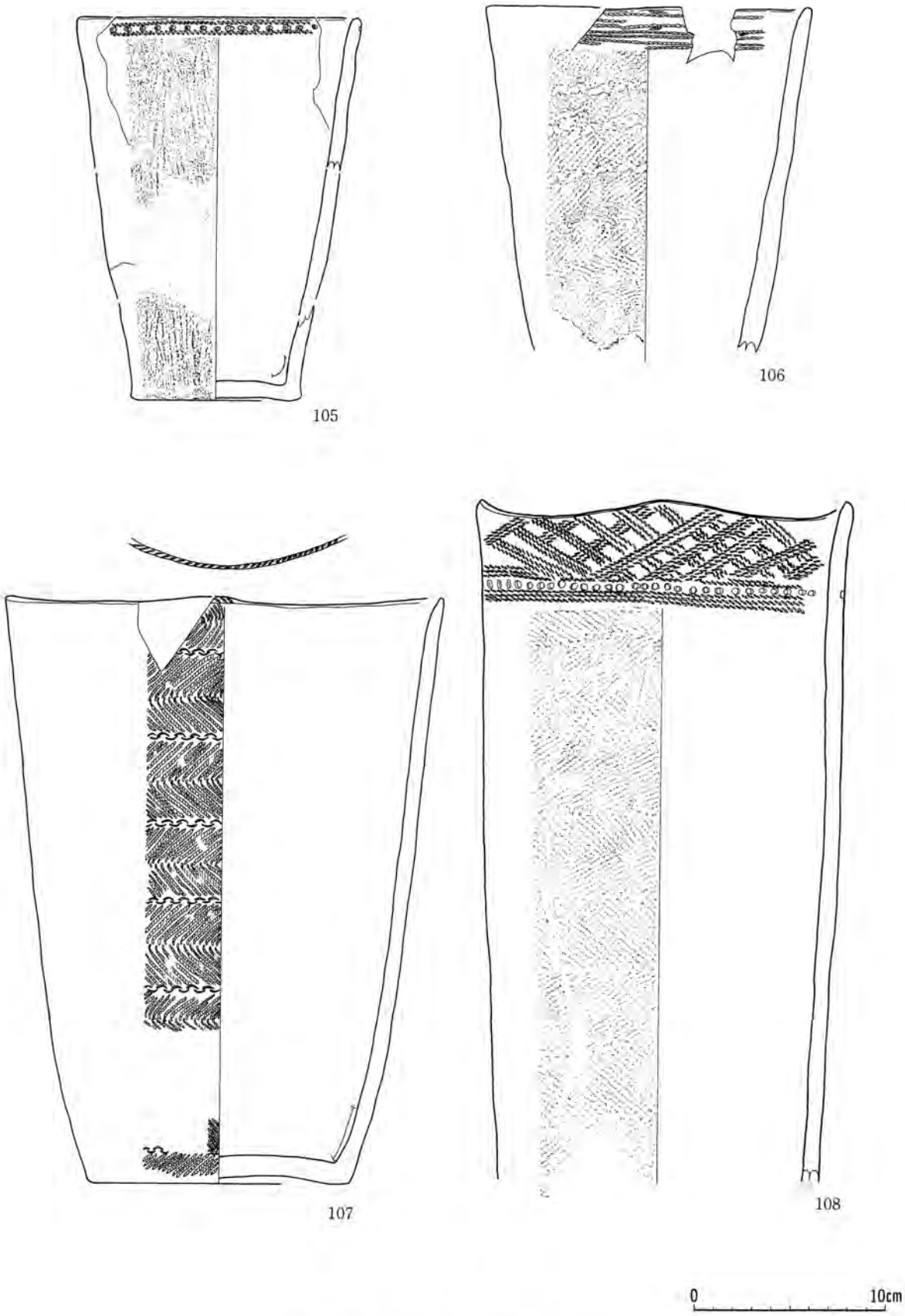


図29　縄文時代前期～中期初頭の土器(22)

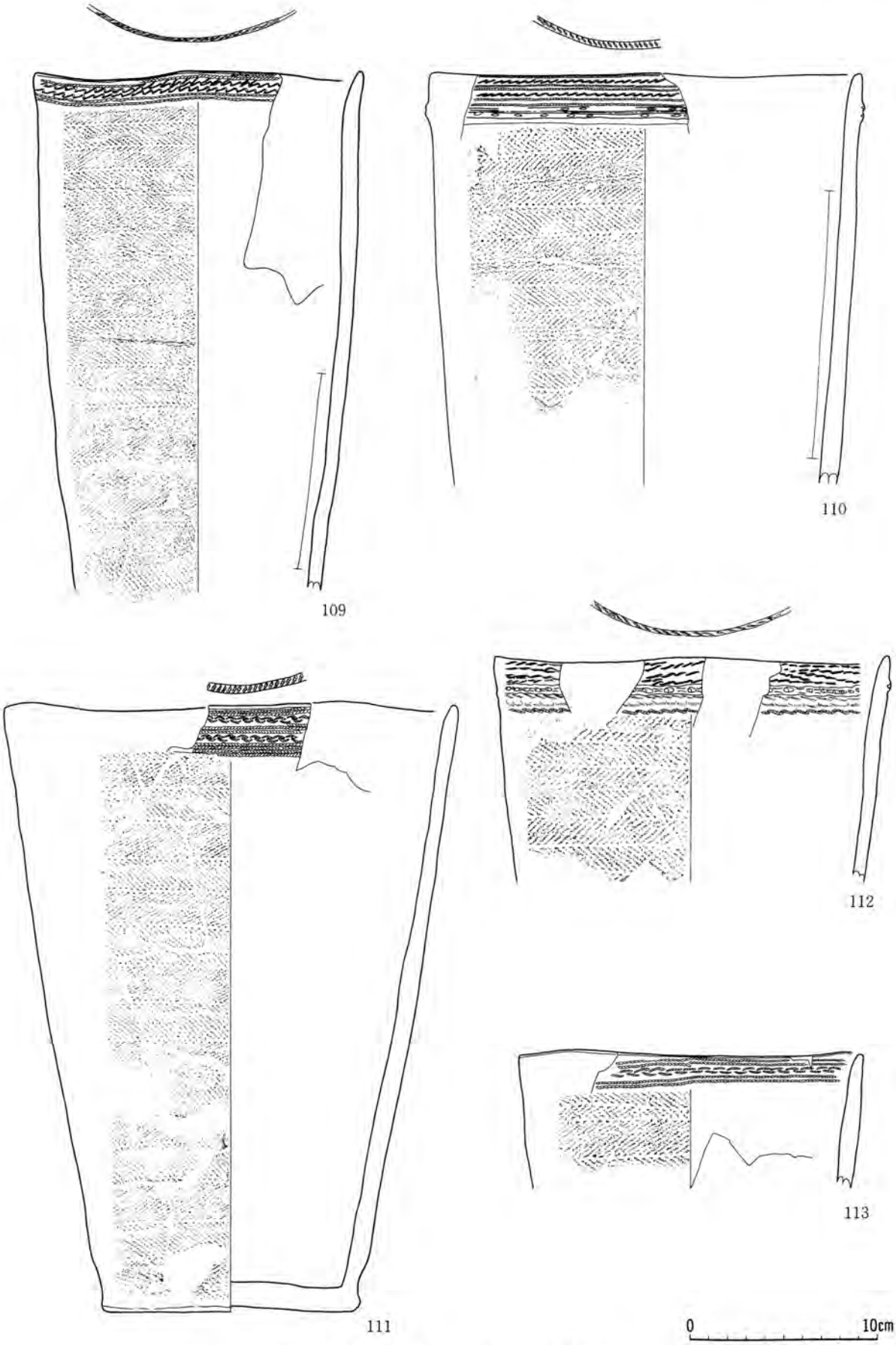


図30　縄文時代前期～中期初頭の土器(23)

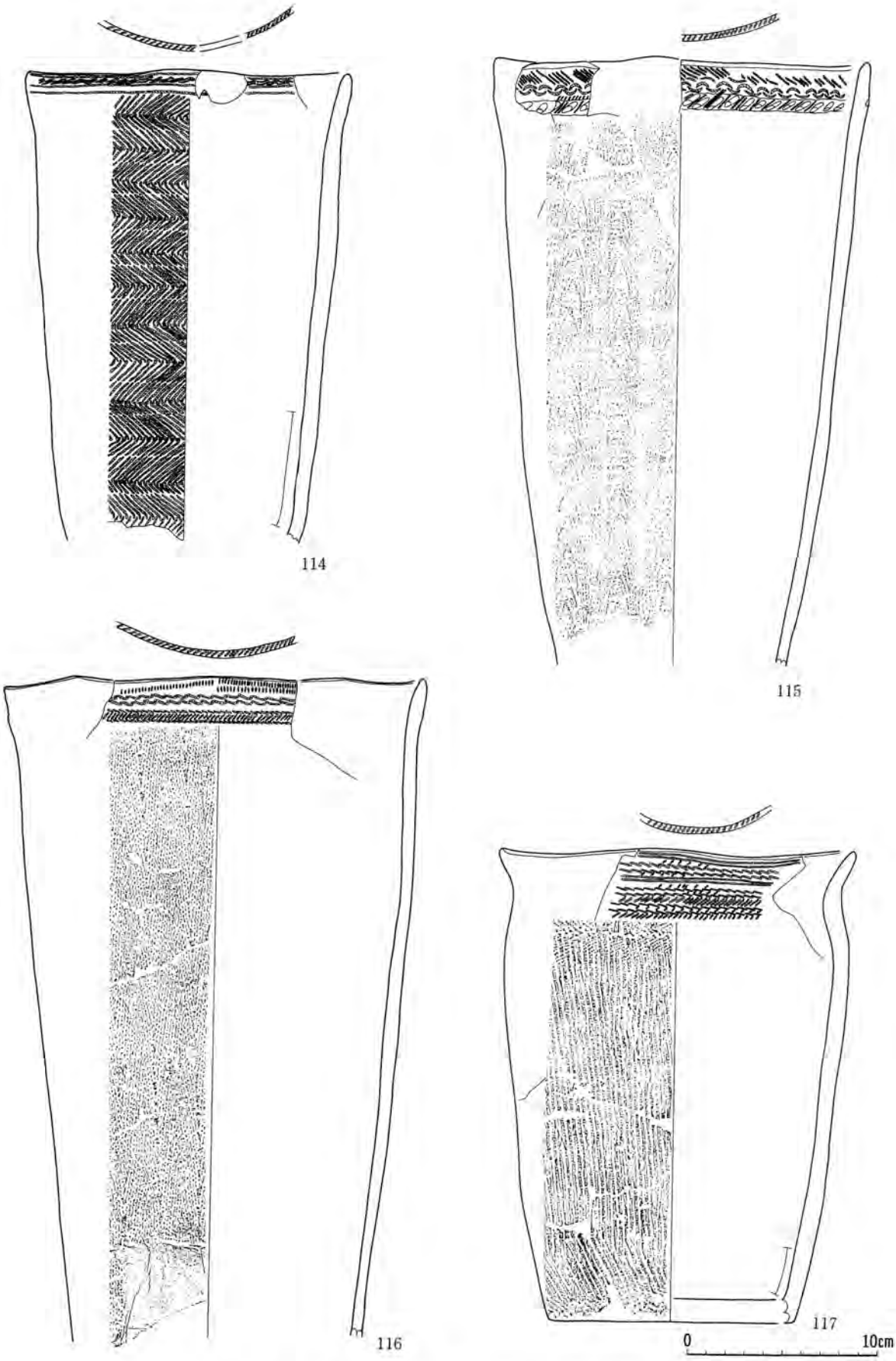


図31　縄文時代前期～中期初頭の土器(24)

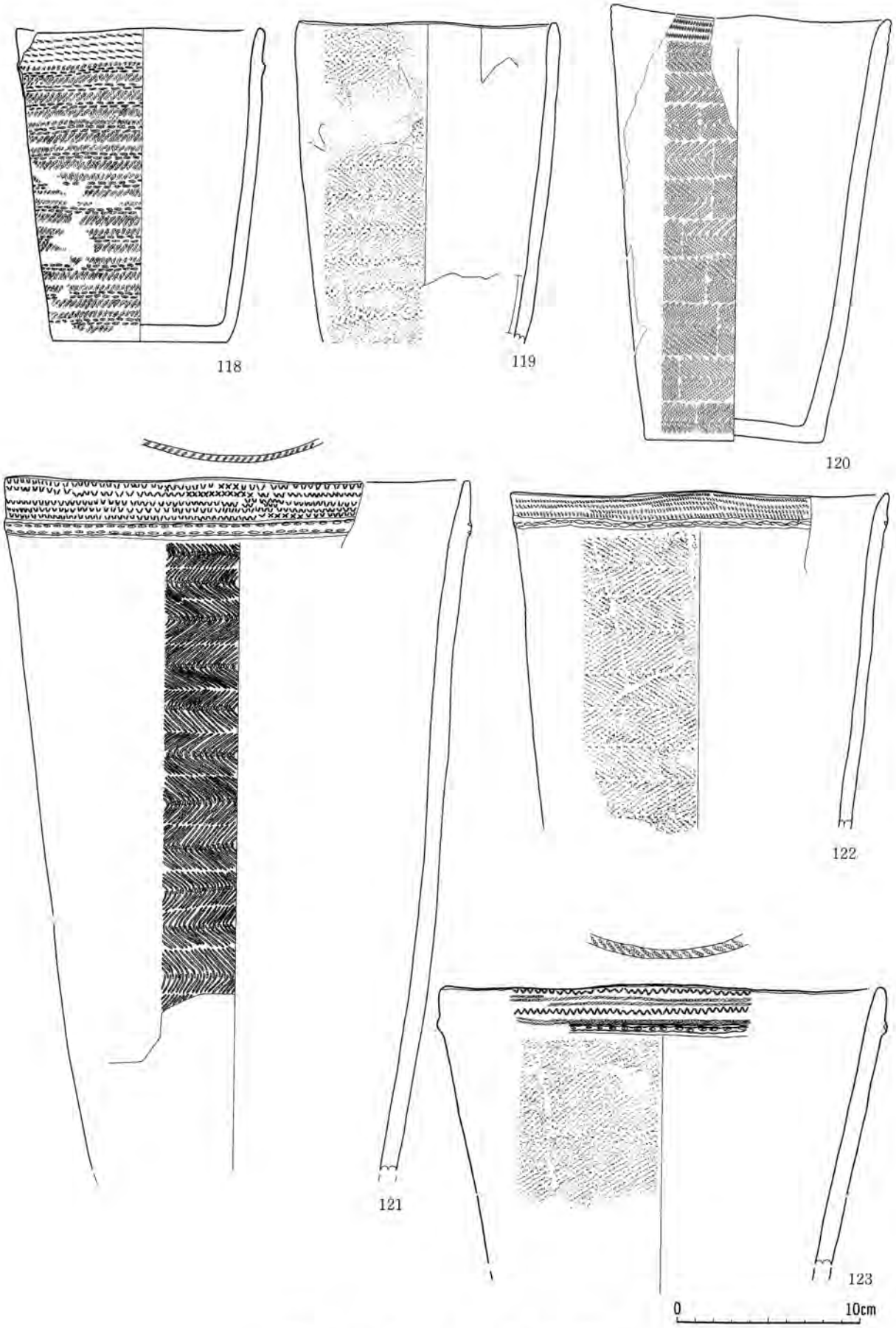


図32　縄文時代前期～中期初頭の土器(25)

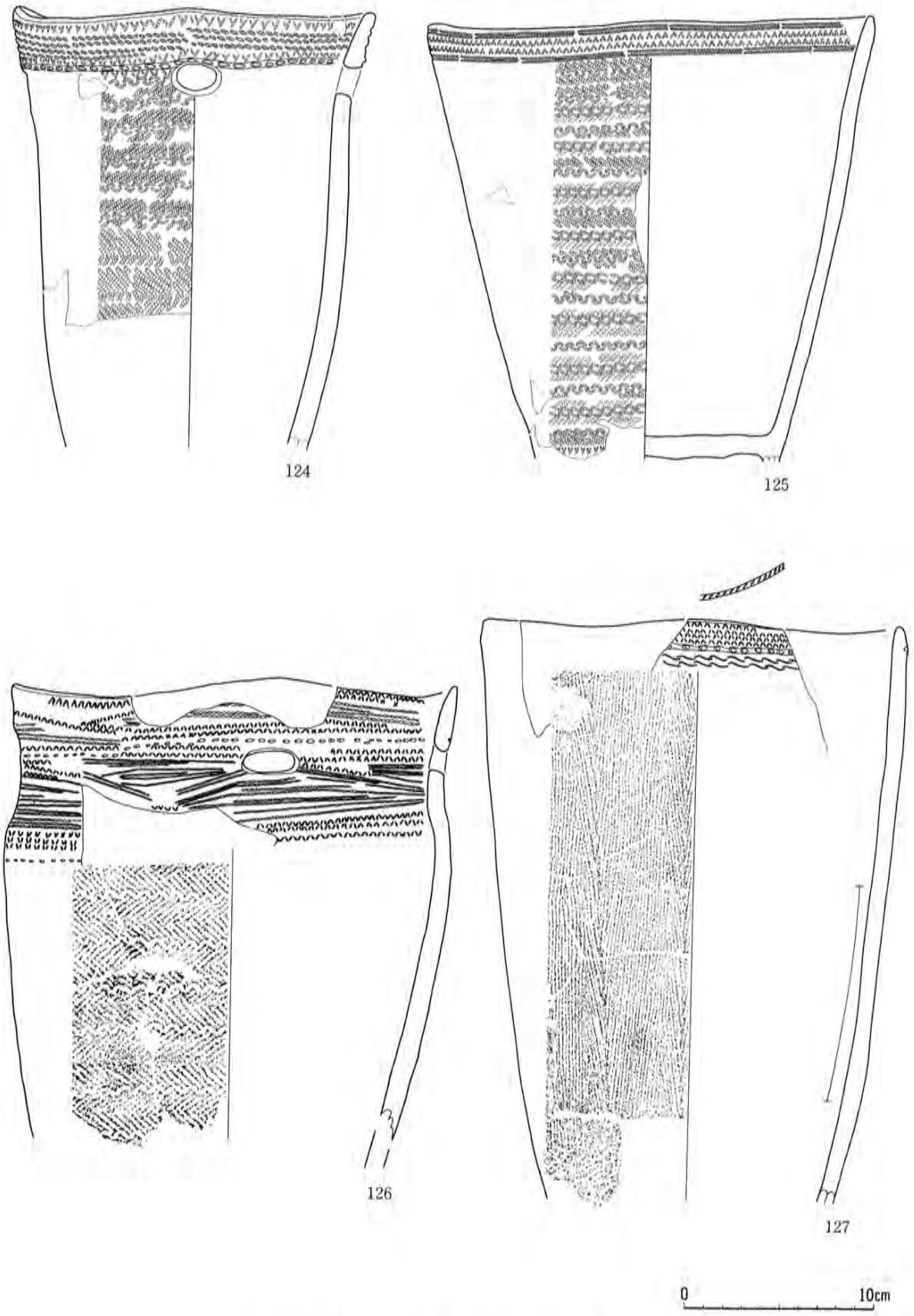


図33　縄文時代前期～中期初頭の土器(26)

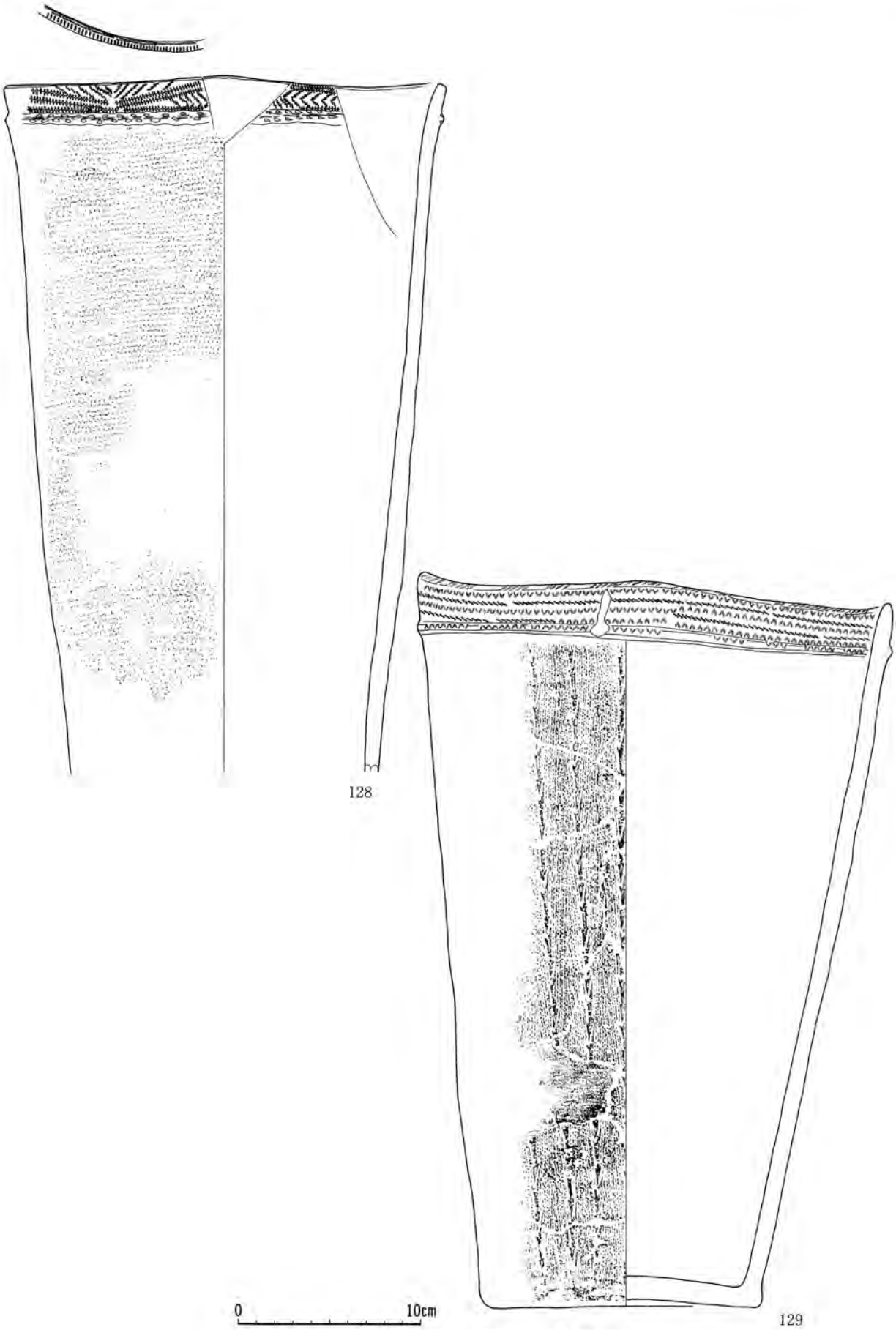


図34　縄文時代前期～中期初頭の土器(27)

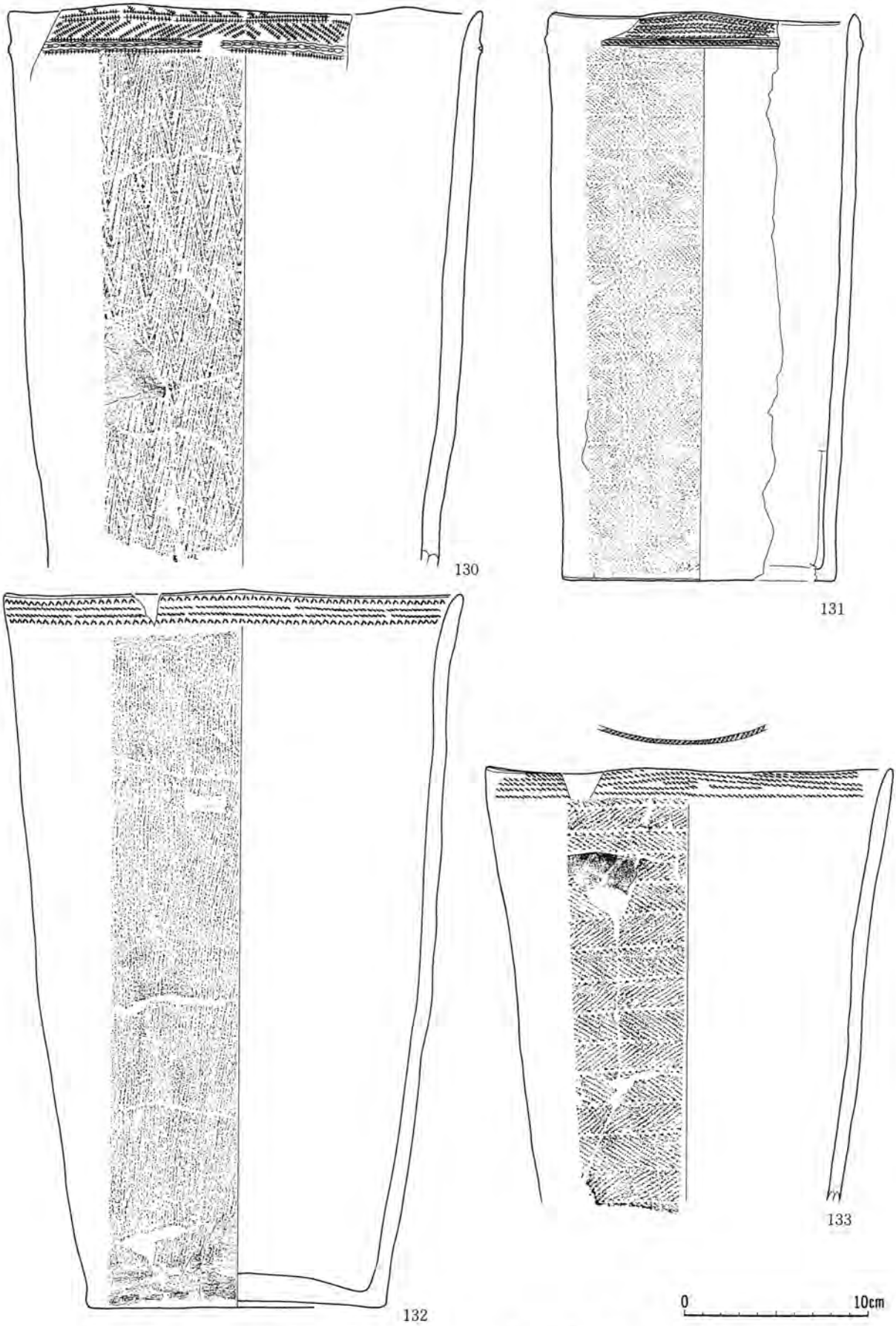


図35　縄文時代前期～中期初頭の土器(28)

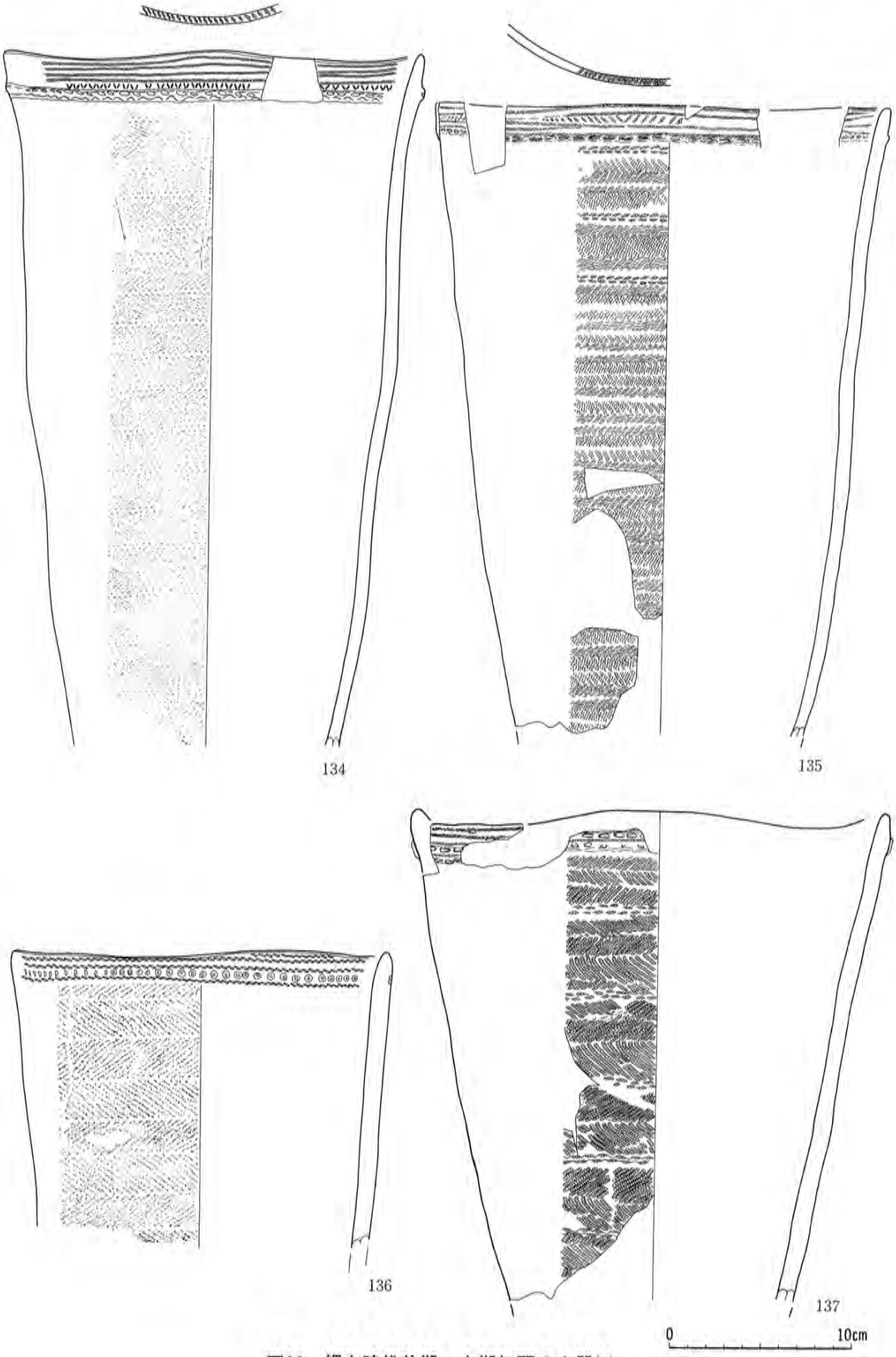


図36　縄文時代前期～中期初頭の土器(29)

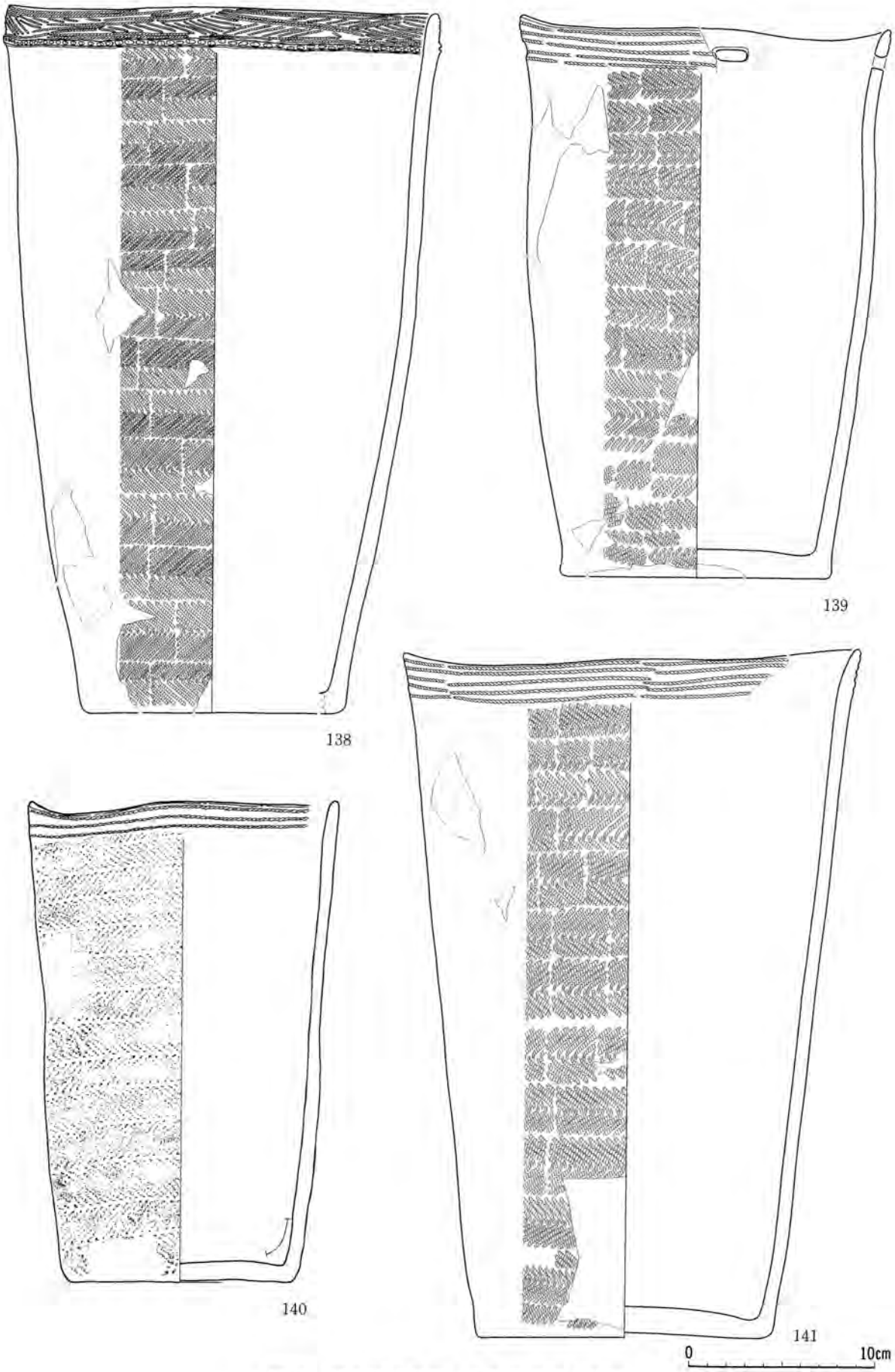


図37　縄文時代前期～中期初頭の土器(30)

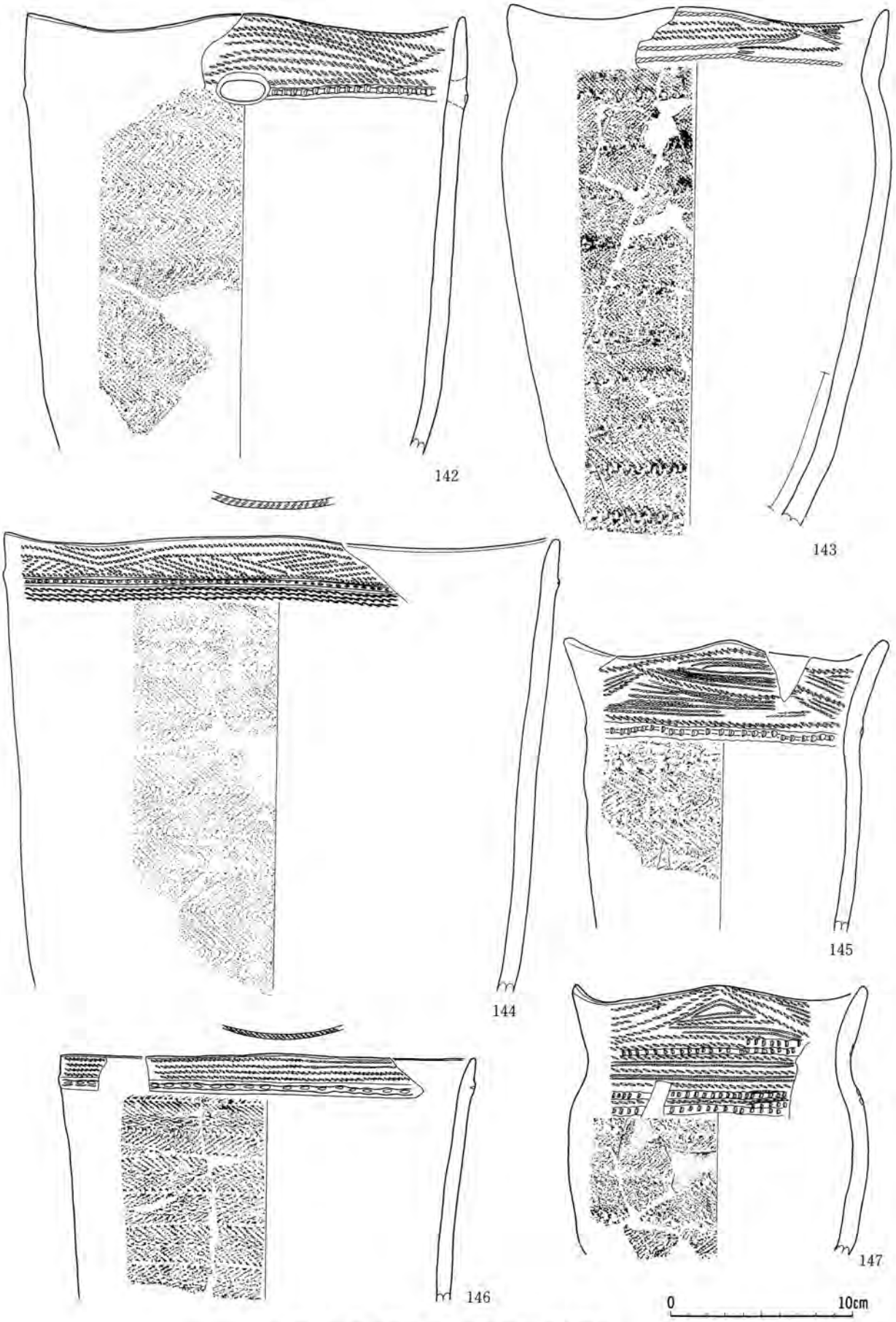


図38　縄文時代前期～中期初頭の土器(31)

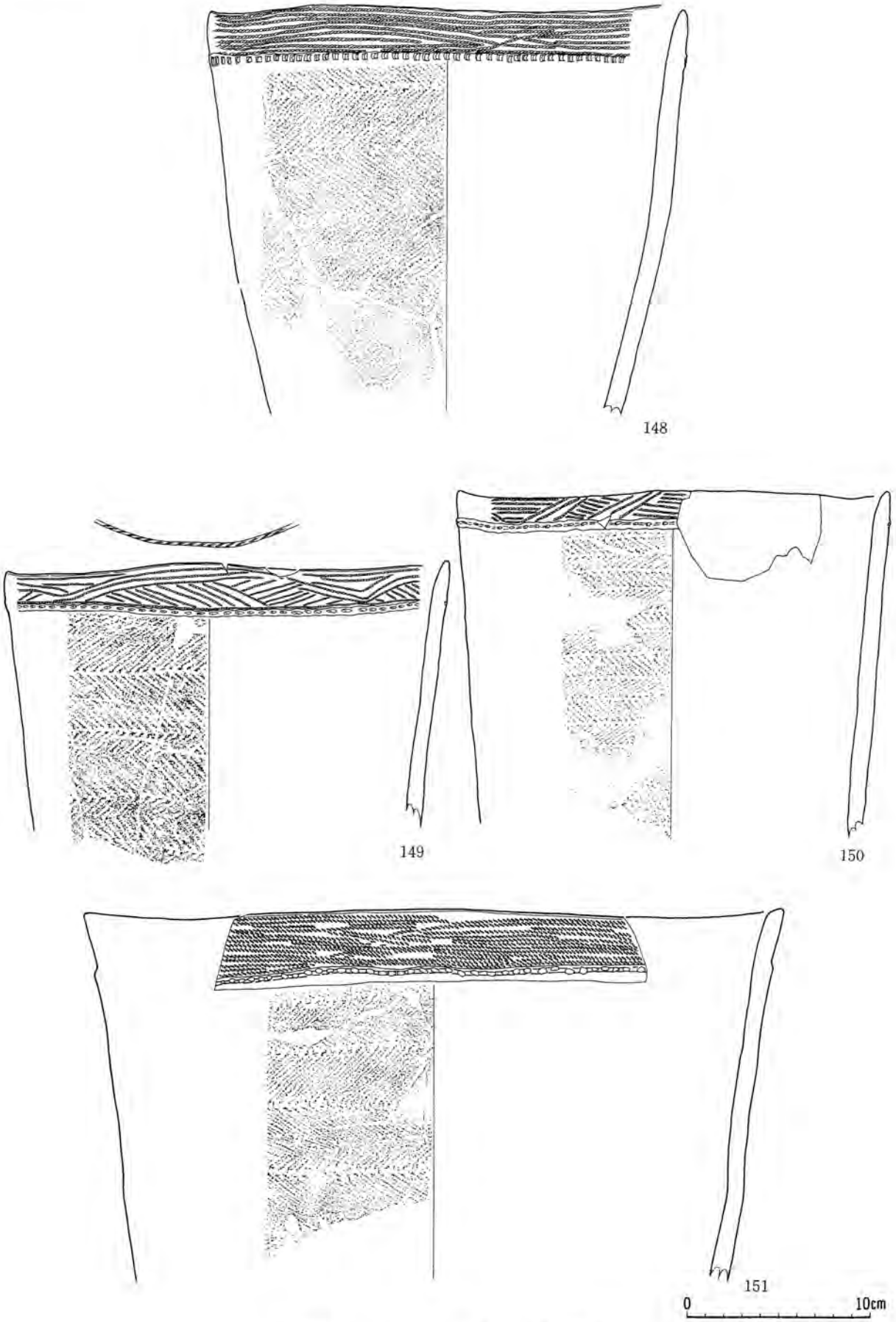


図39　縄文時代前期～中期初頭の土器(32)

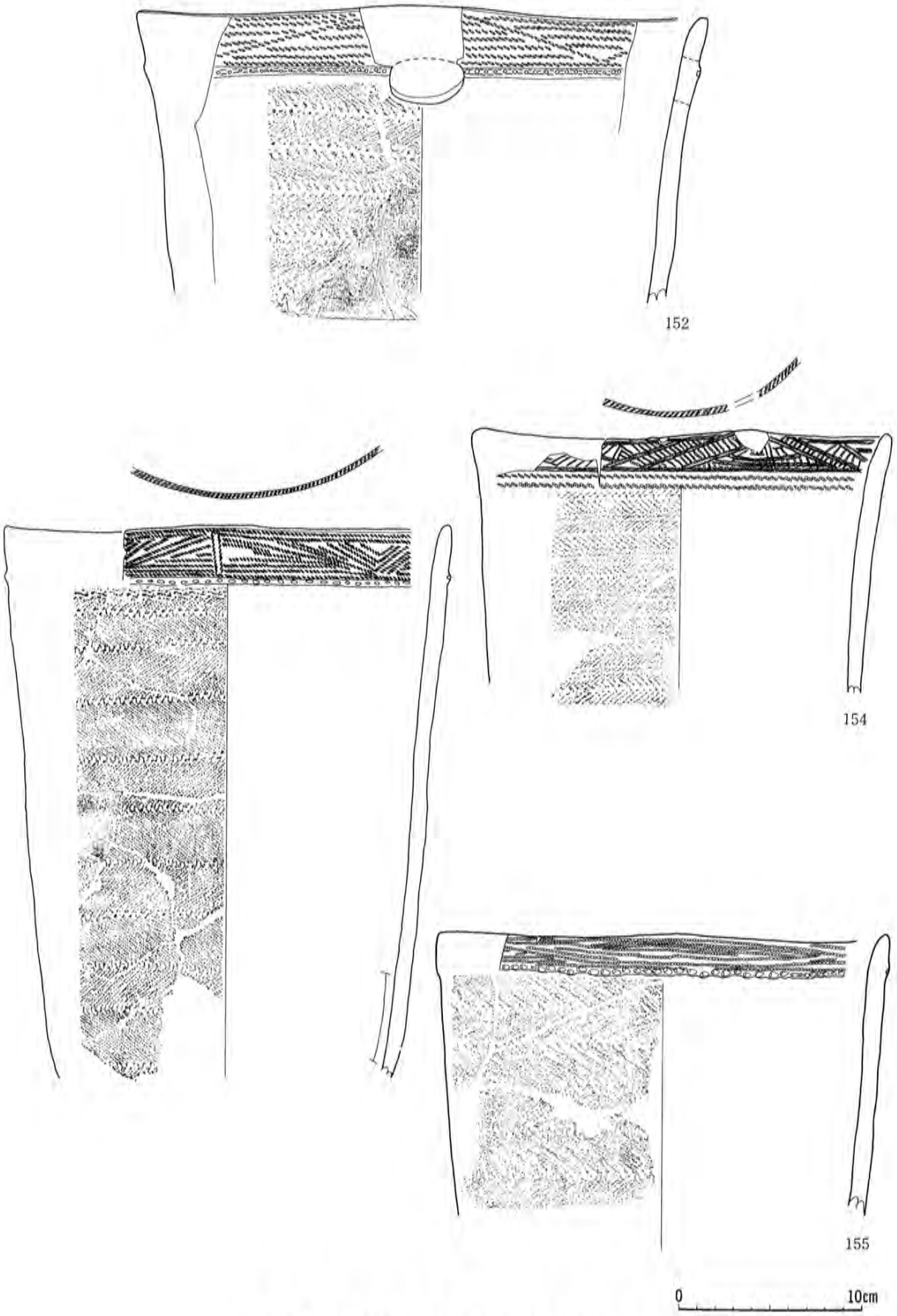


図40　縄文時代前期～中期初頭の土器(33)

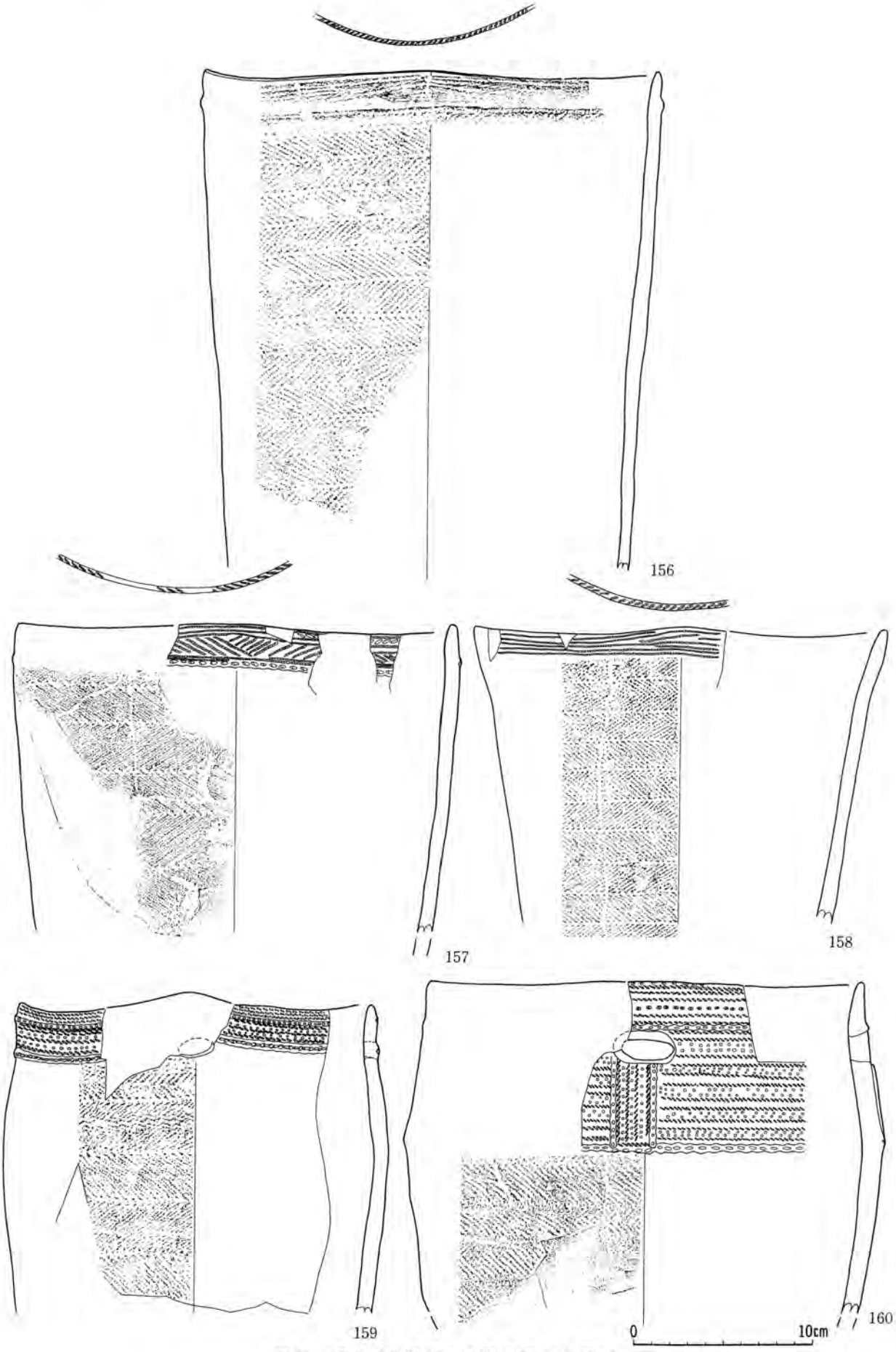
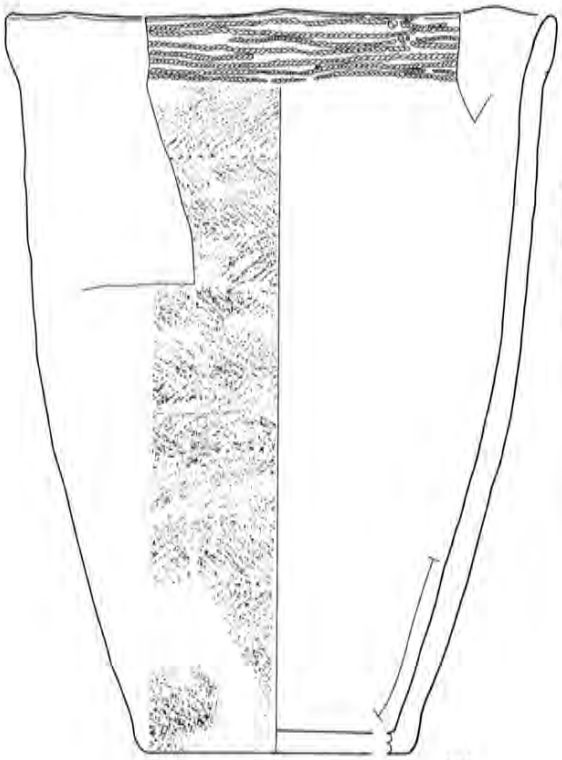
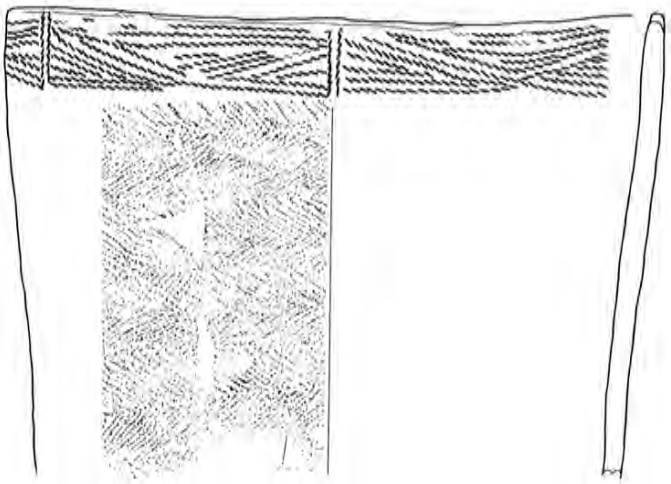
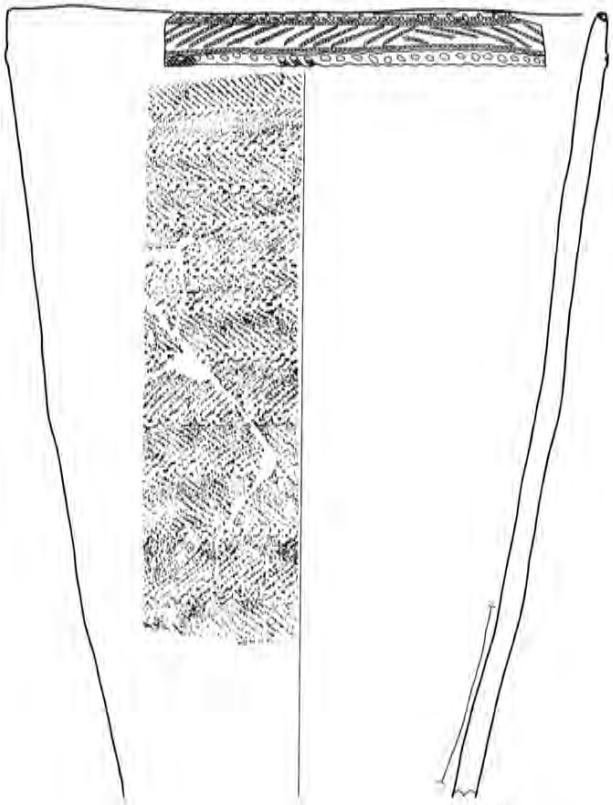
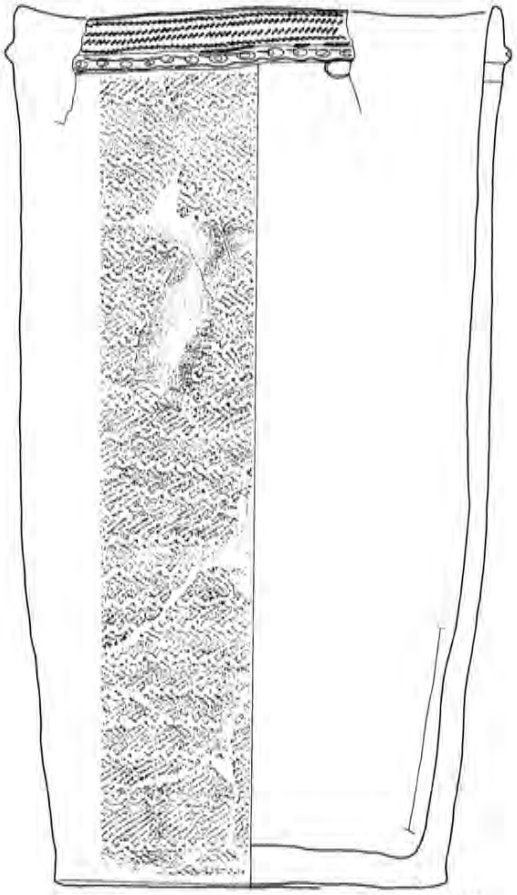


図41　縄文時代前期～中期初頭の土器(34)


161


162


163


164

0　10cm

図42　縄文時代前期～中期初頭の土器(35)

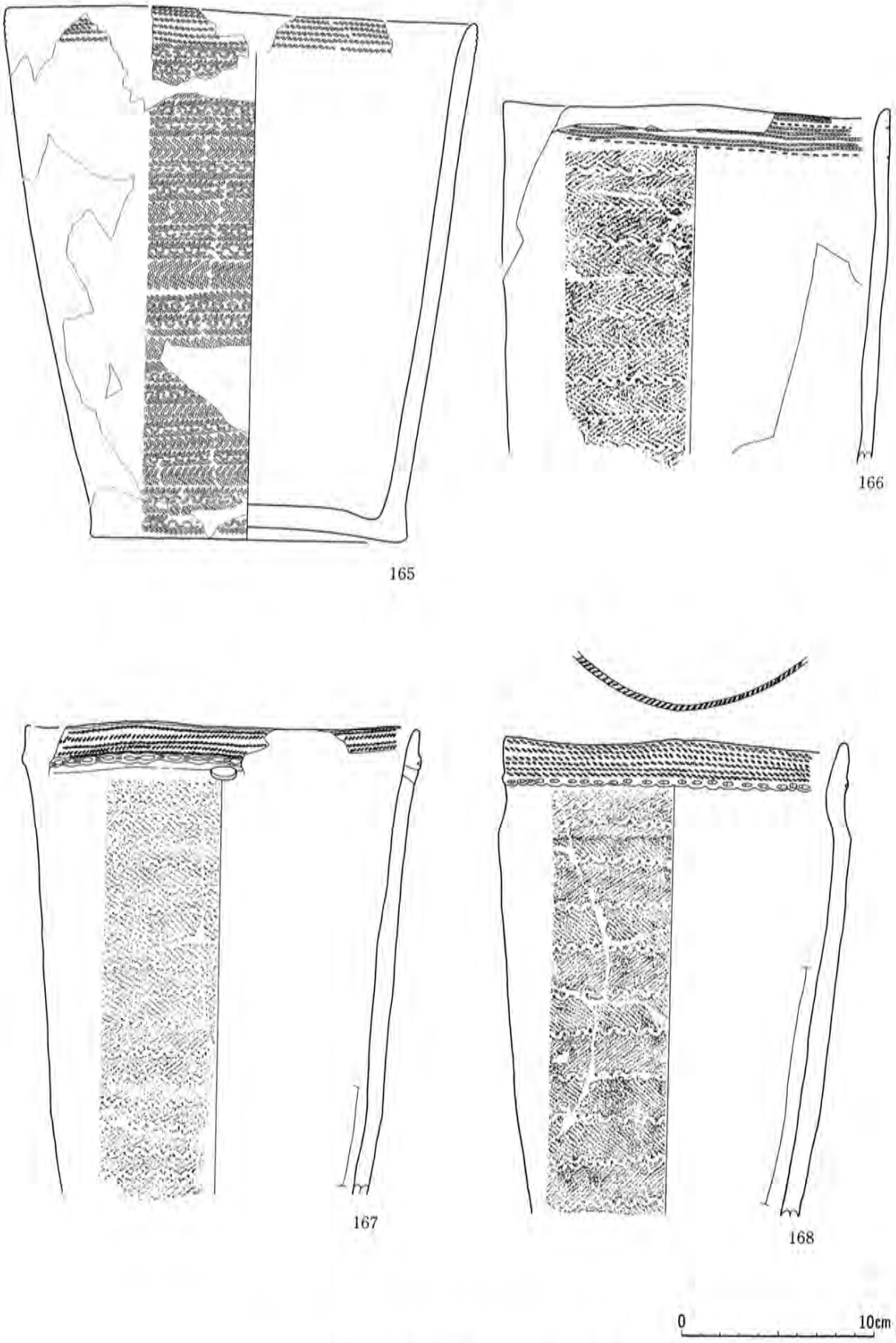


図43　縄文時代前期～中期初頭の土器(36)

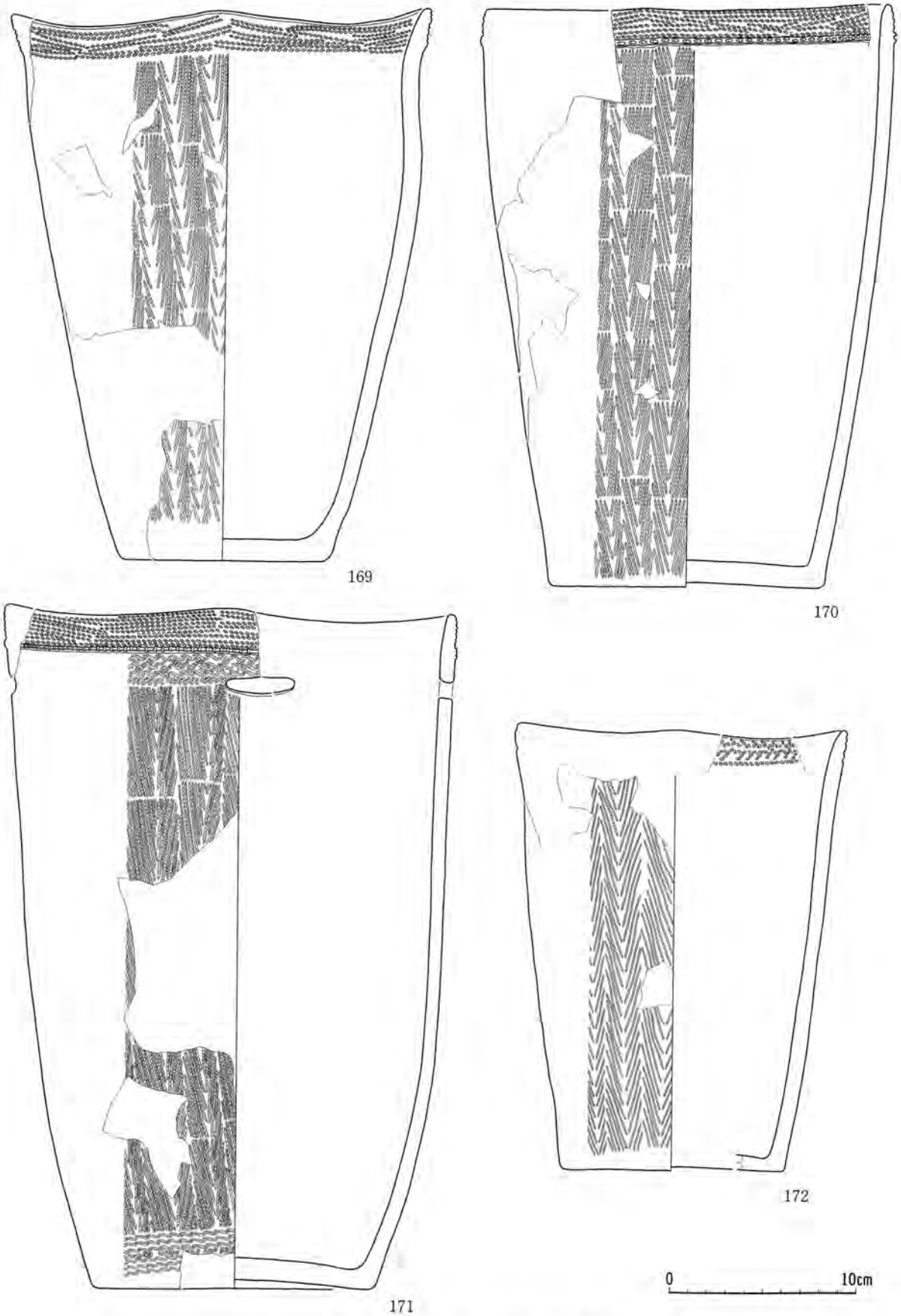


図44　縄文時代前期～中期初頭の土器(37)

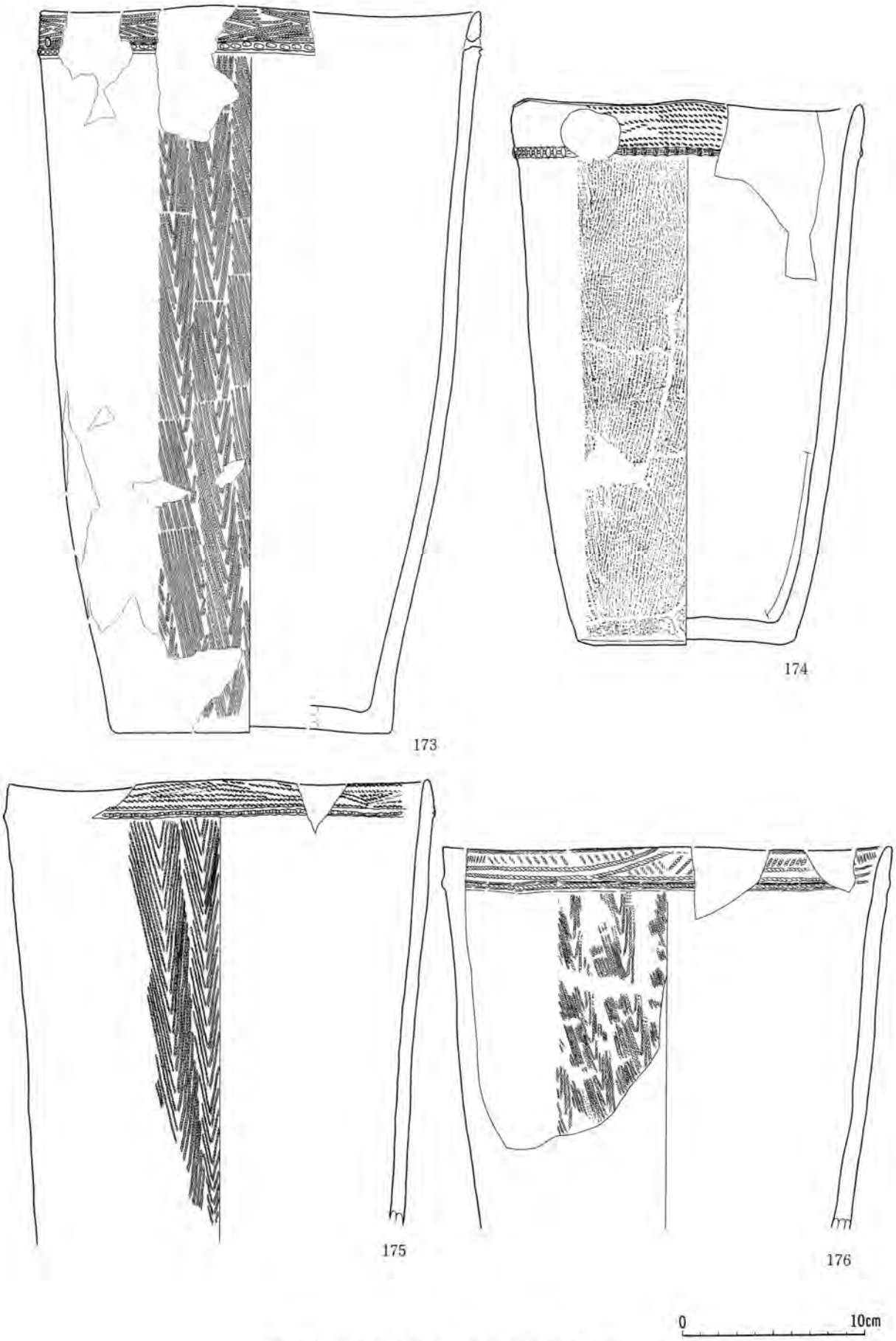


図45　縄文時代前期～中期初頭の土器(38)

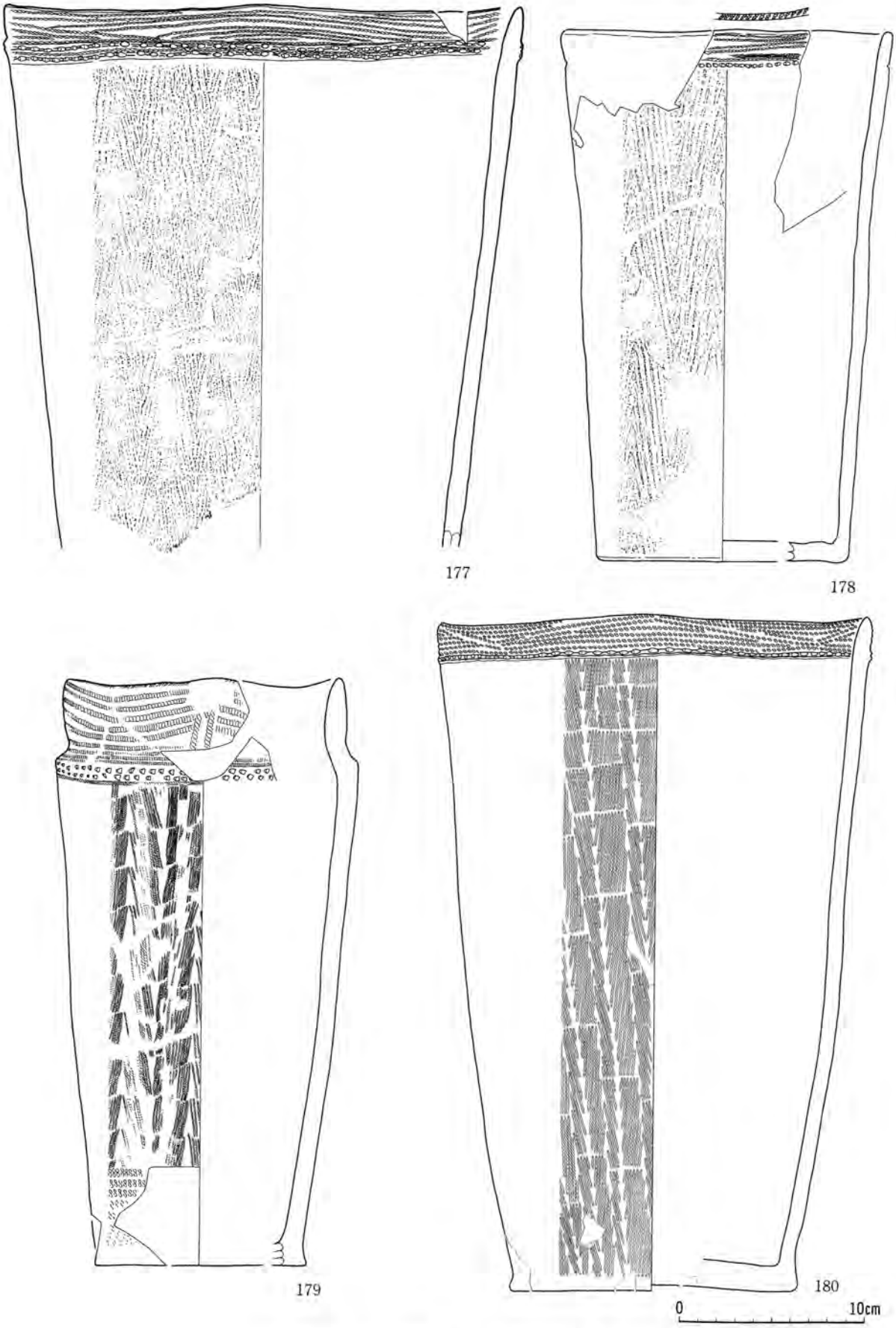


図46　縄文時代前期～中期初頭の土器(39)

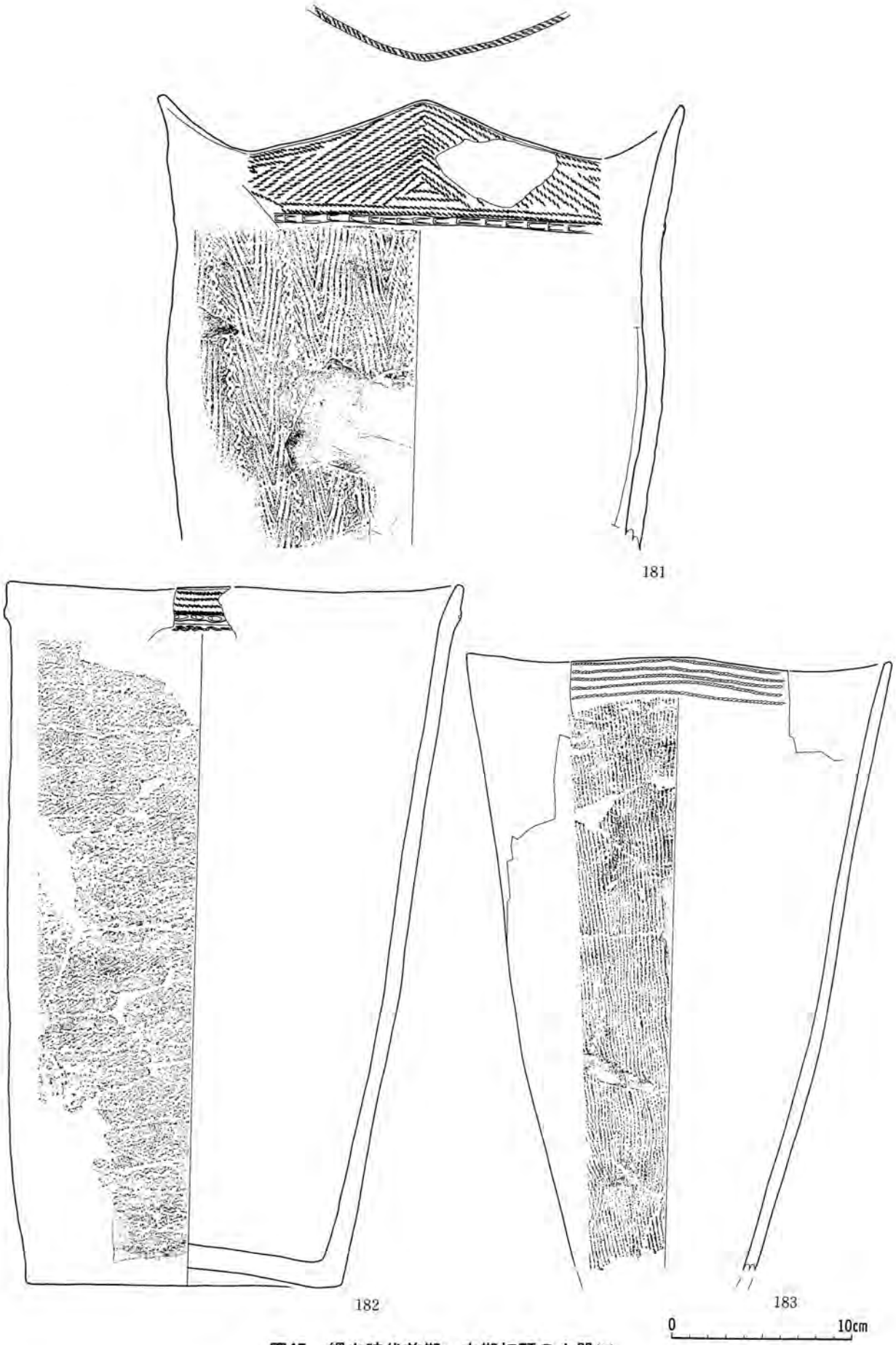


図47　縄文時代前期～中期初頭の土器(40)

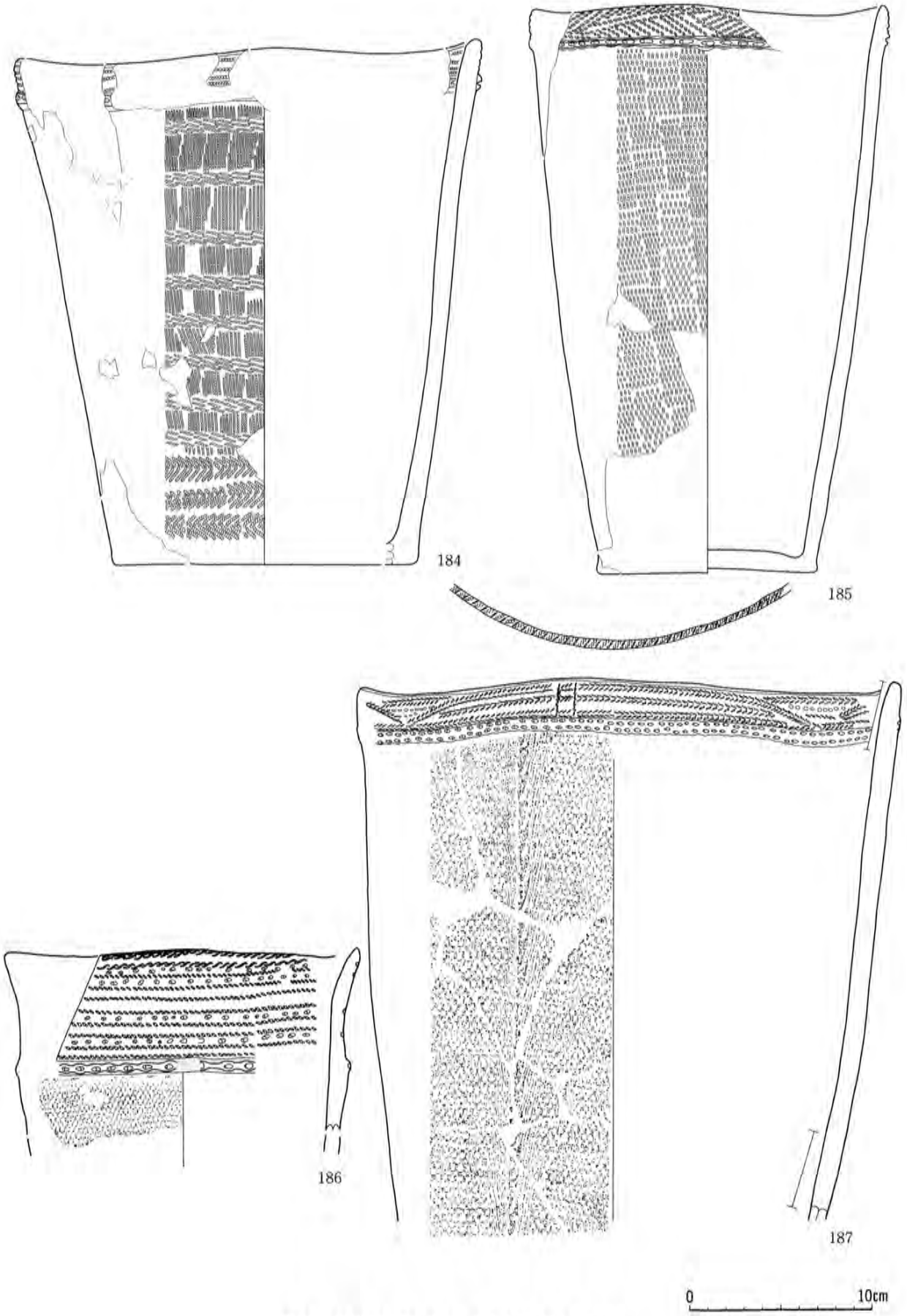


図48　縄文時代前期～中期初頭の土器(41)

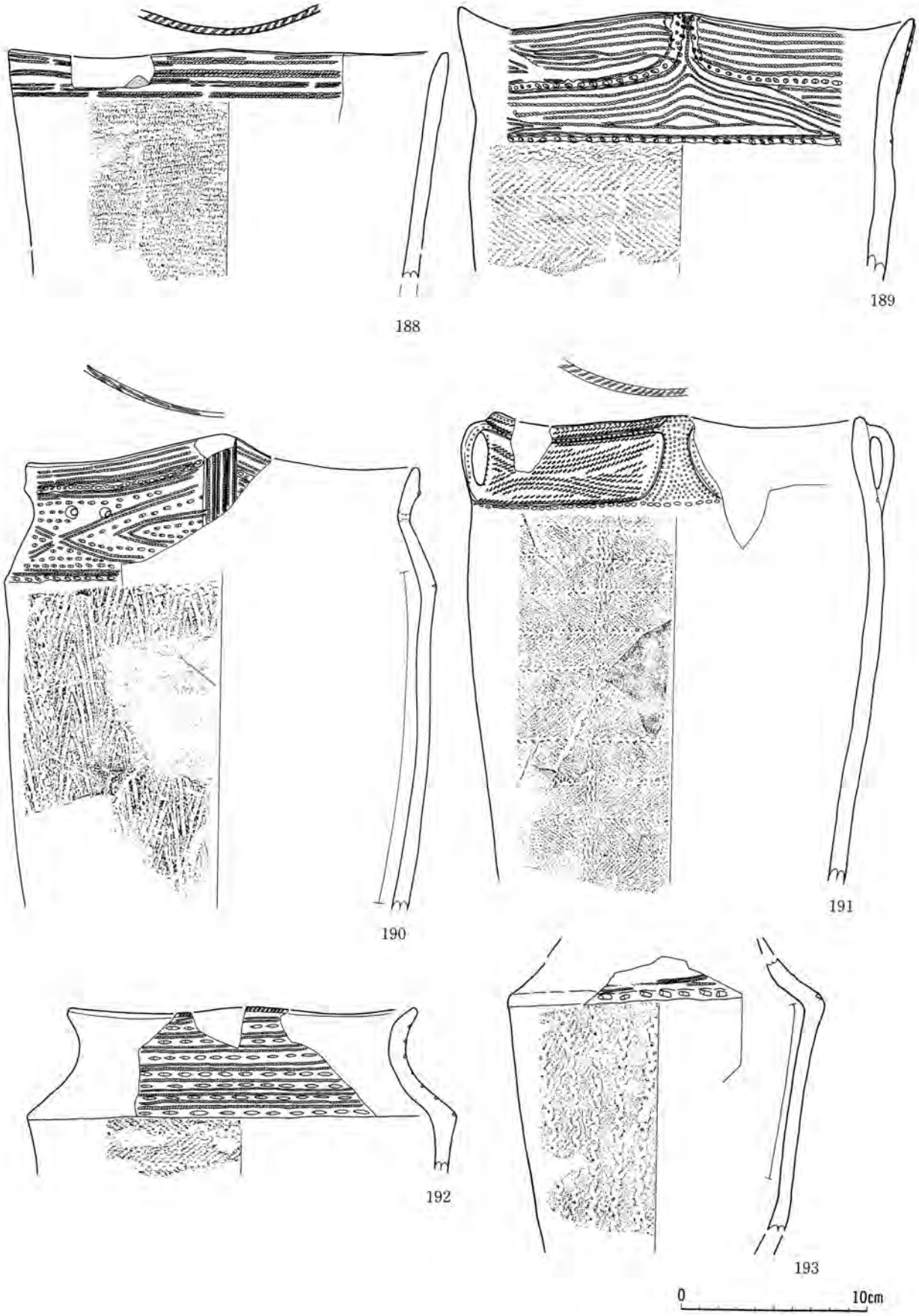


図49　縄文時代前期～中期初頭の土器(42)

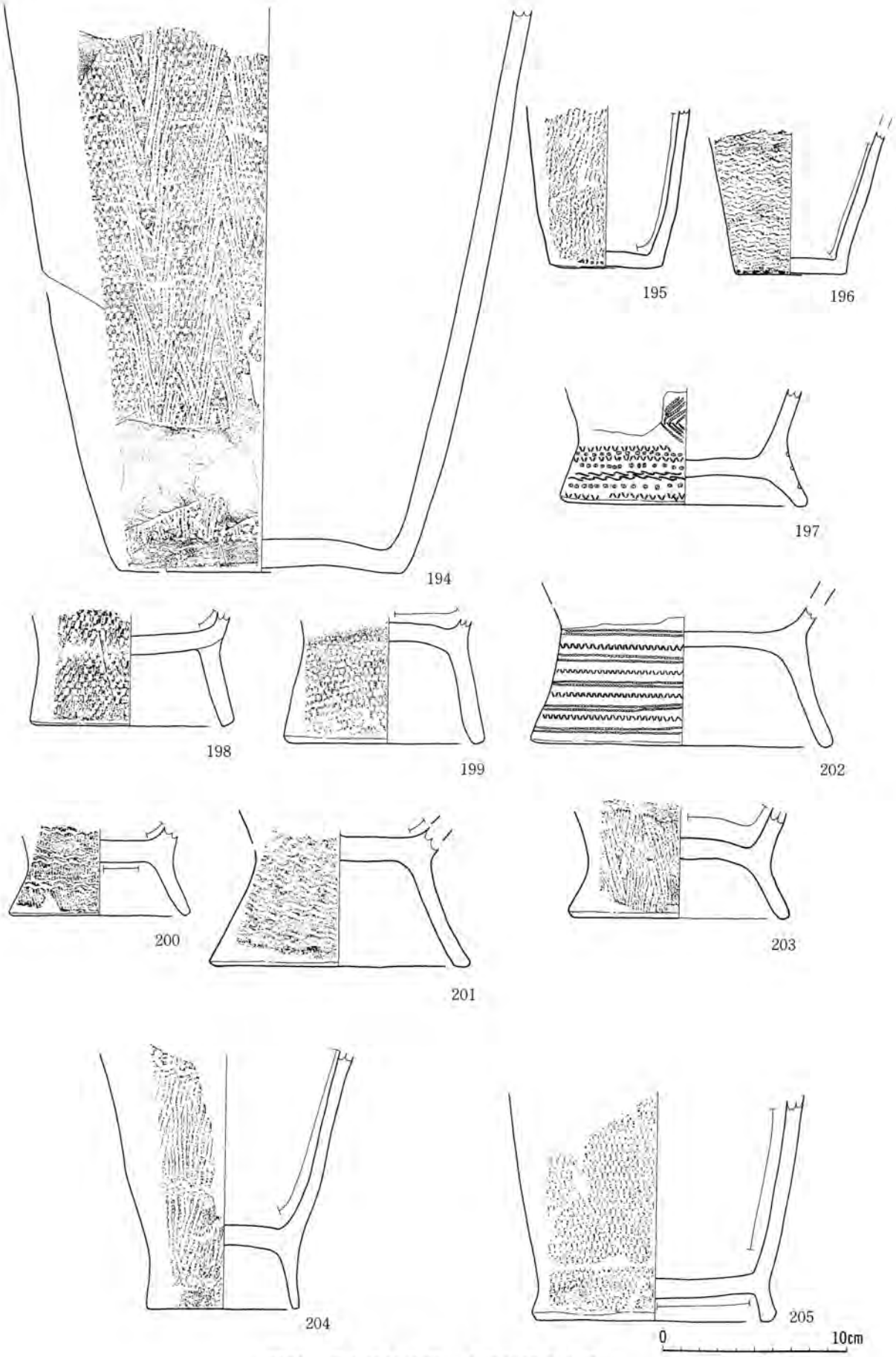


図50　縄文時代前期～中期初頭の土器(43)

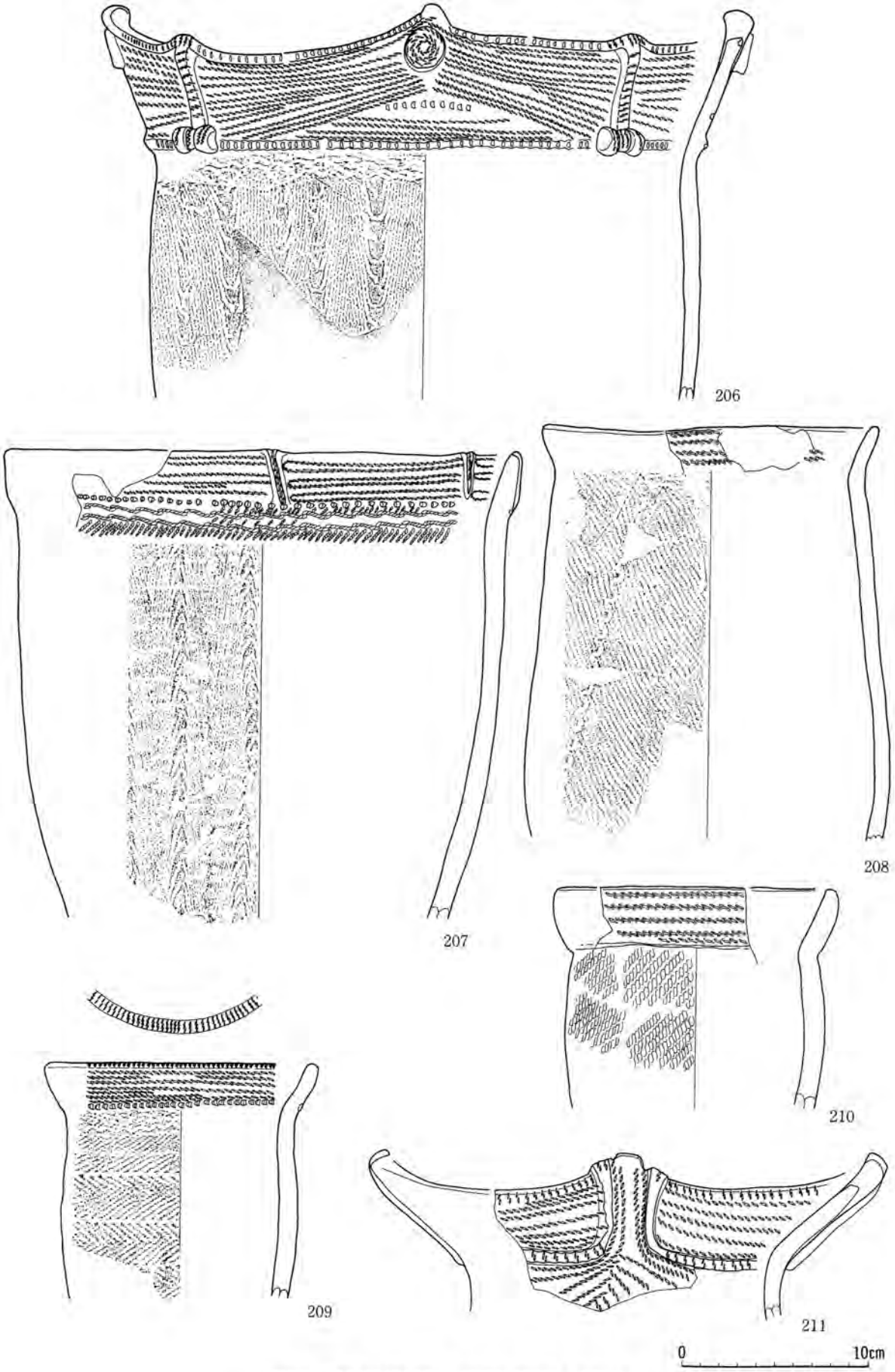


図51　縄文時代前期～中期初頭の土器(44)

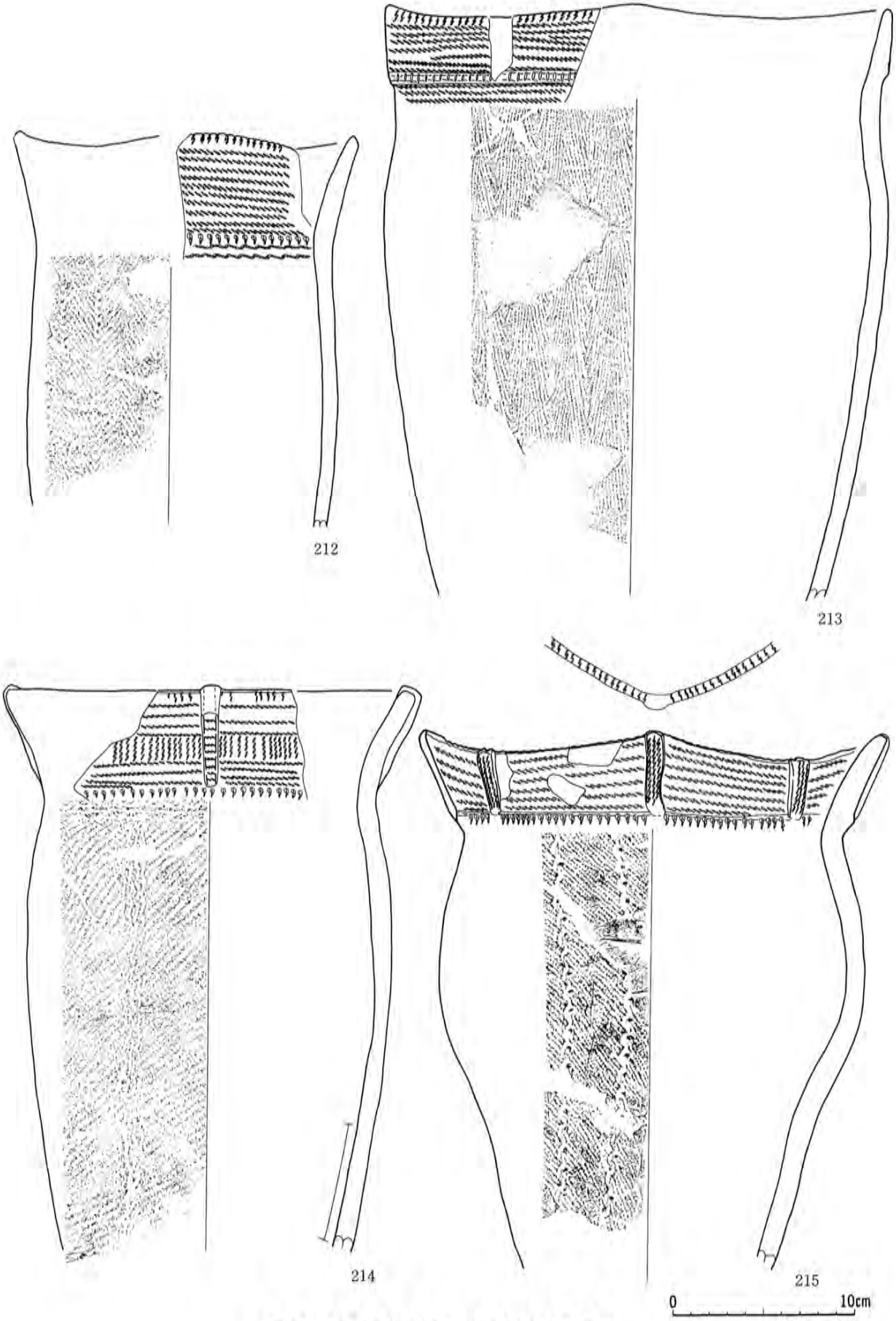


図52　縄文時代前期～中期初頭の土器(45)

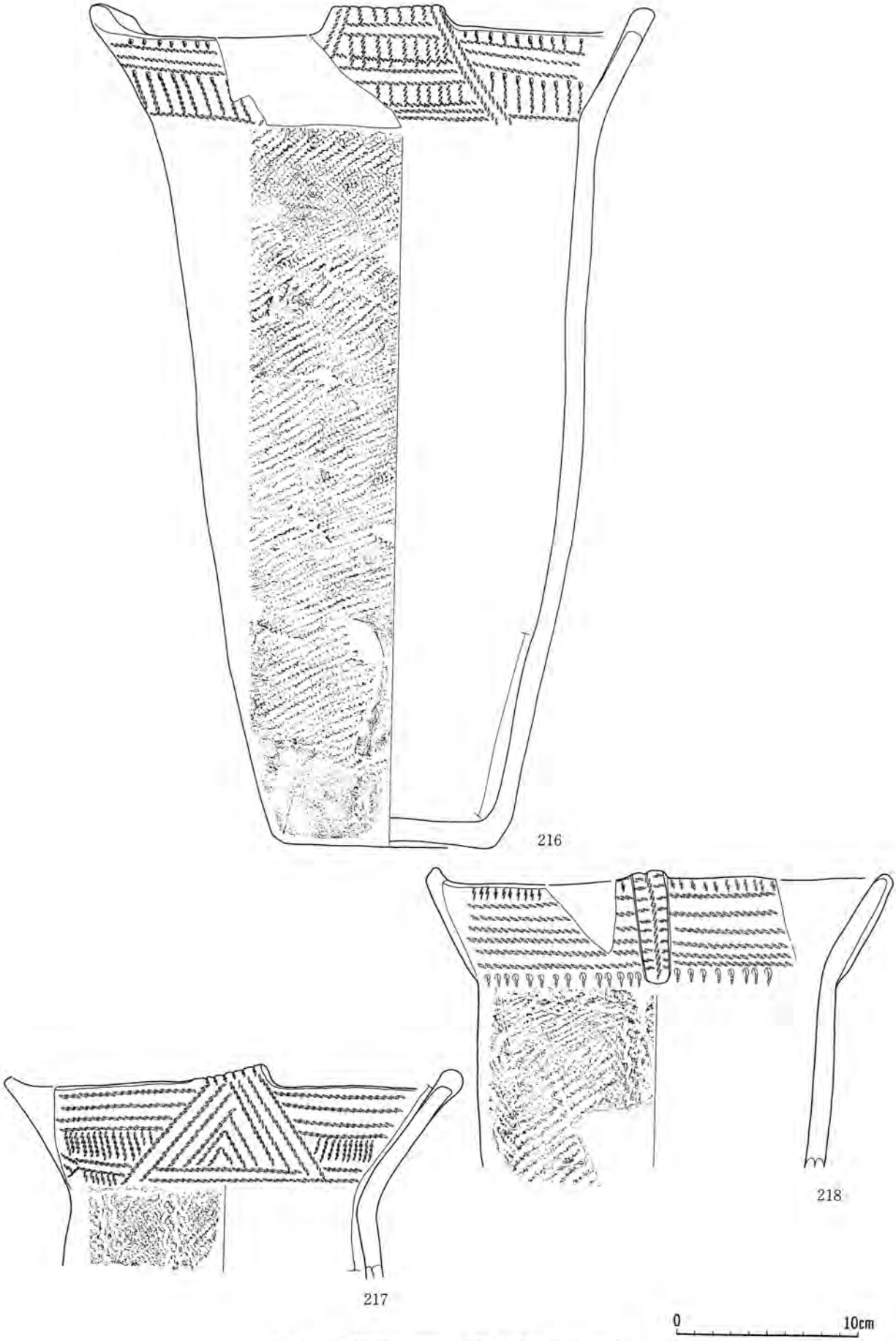


図53　縄文時代前期～中期初頭の土器(46)

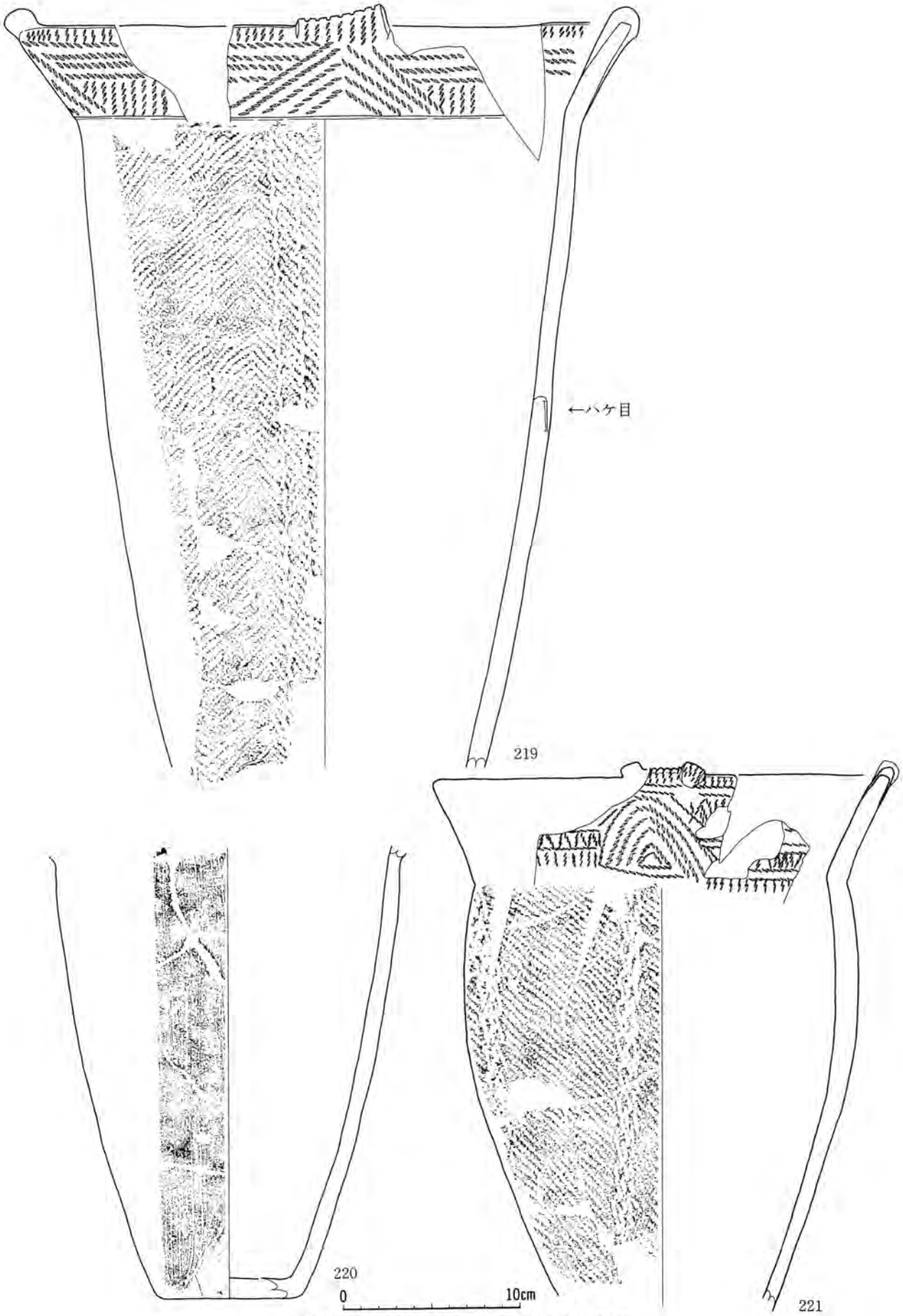
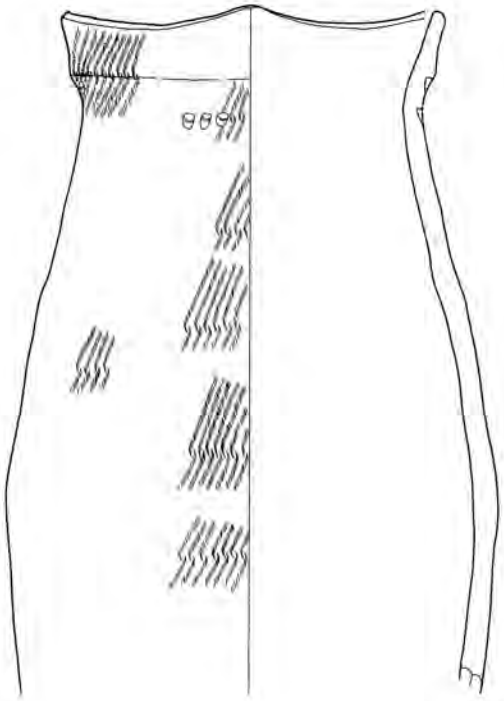
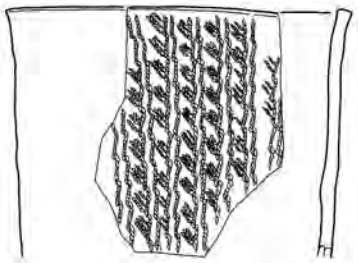


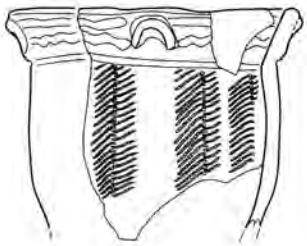
図54　縄文時代前期～中期初頭の土器(47)



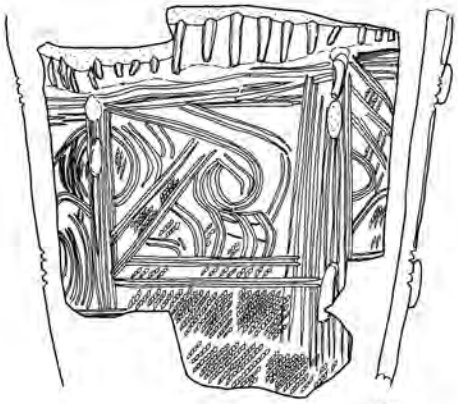
222



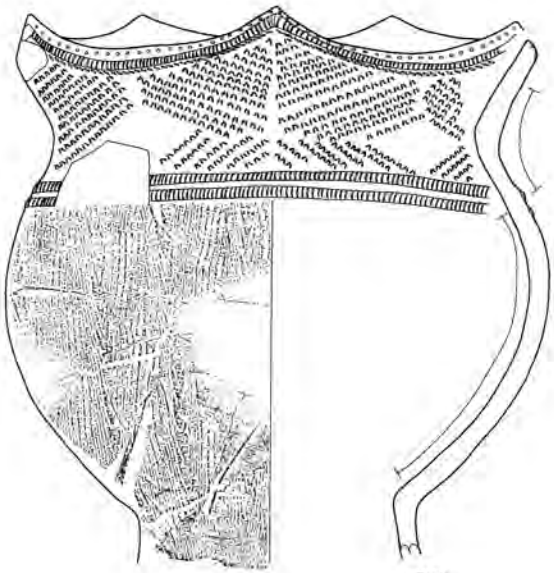
223



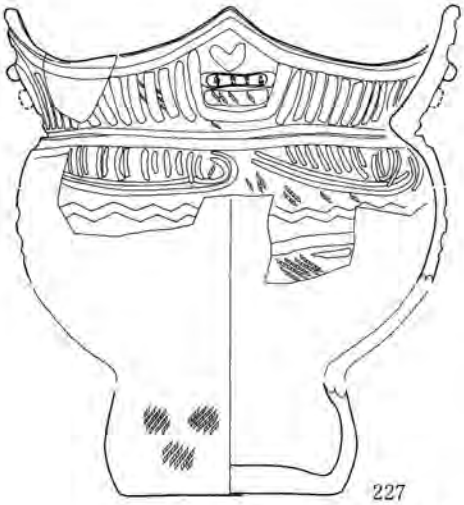
224



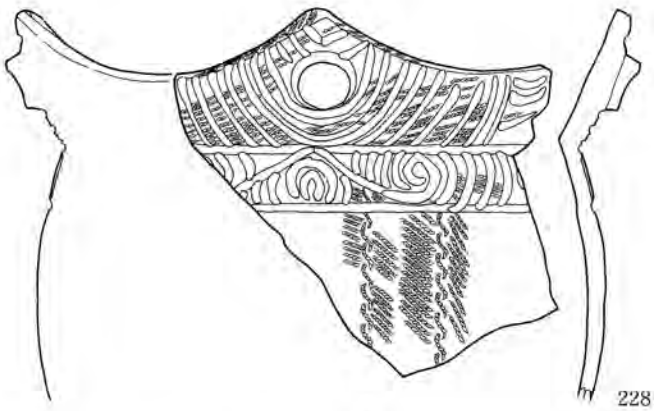
225



226



227



228

0　10cm

図55　縄文時代前期～中期初頭の土器(48)

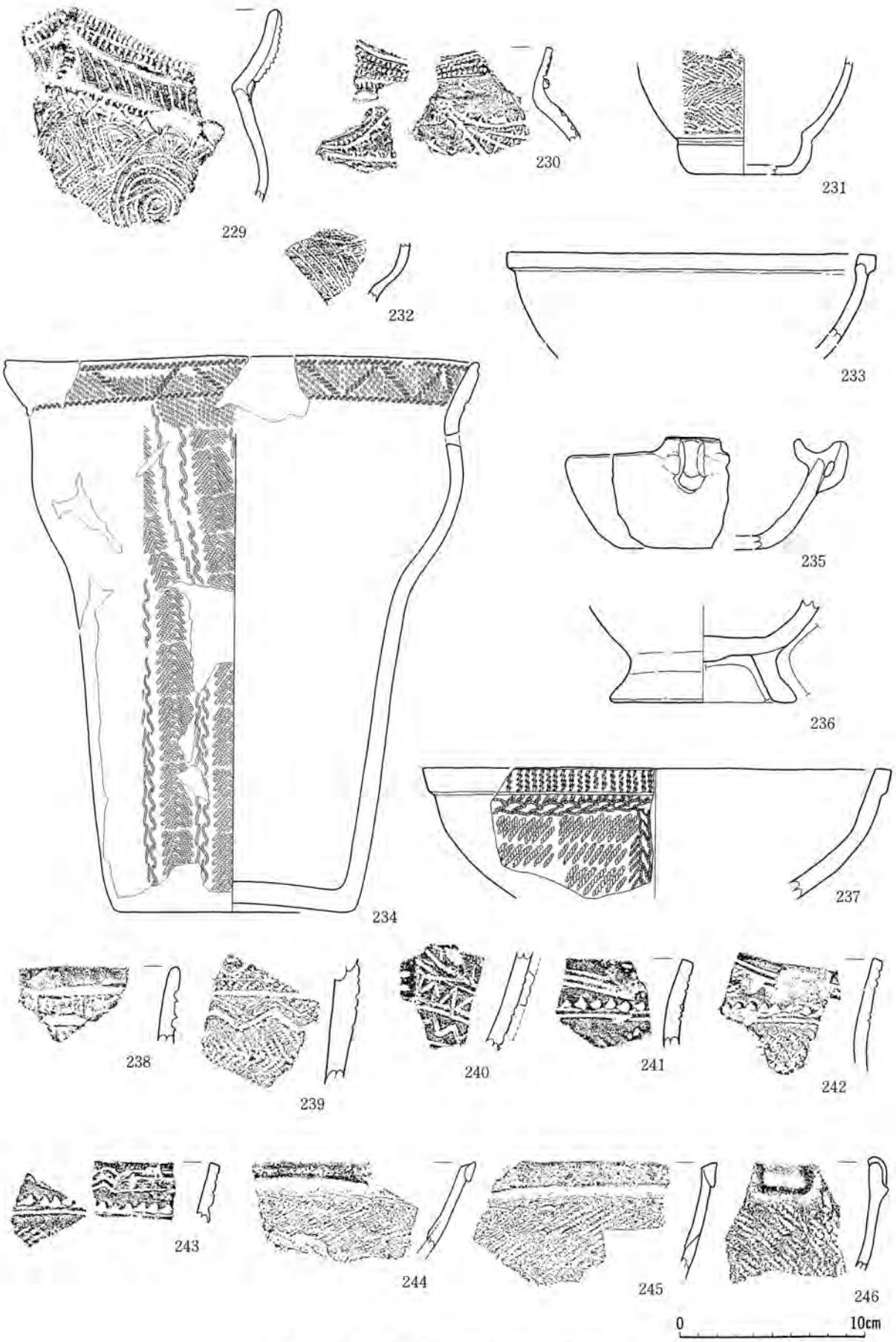


図56　縄文時代前期～中期初頭の土器(49)

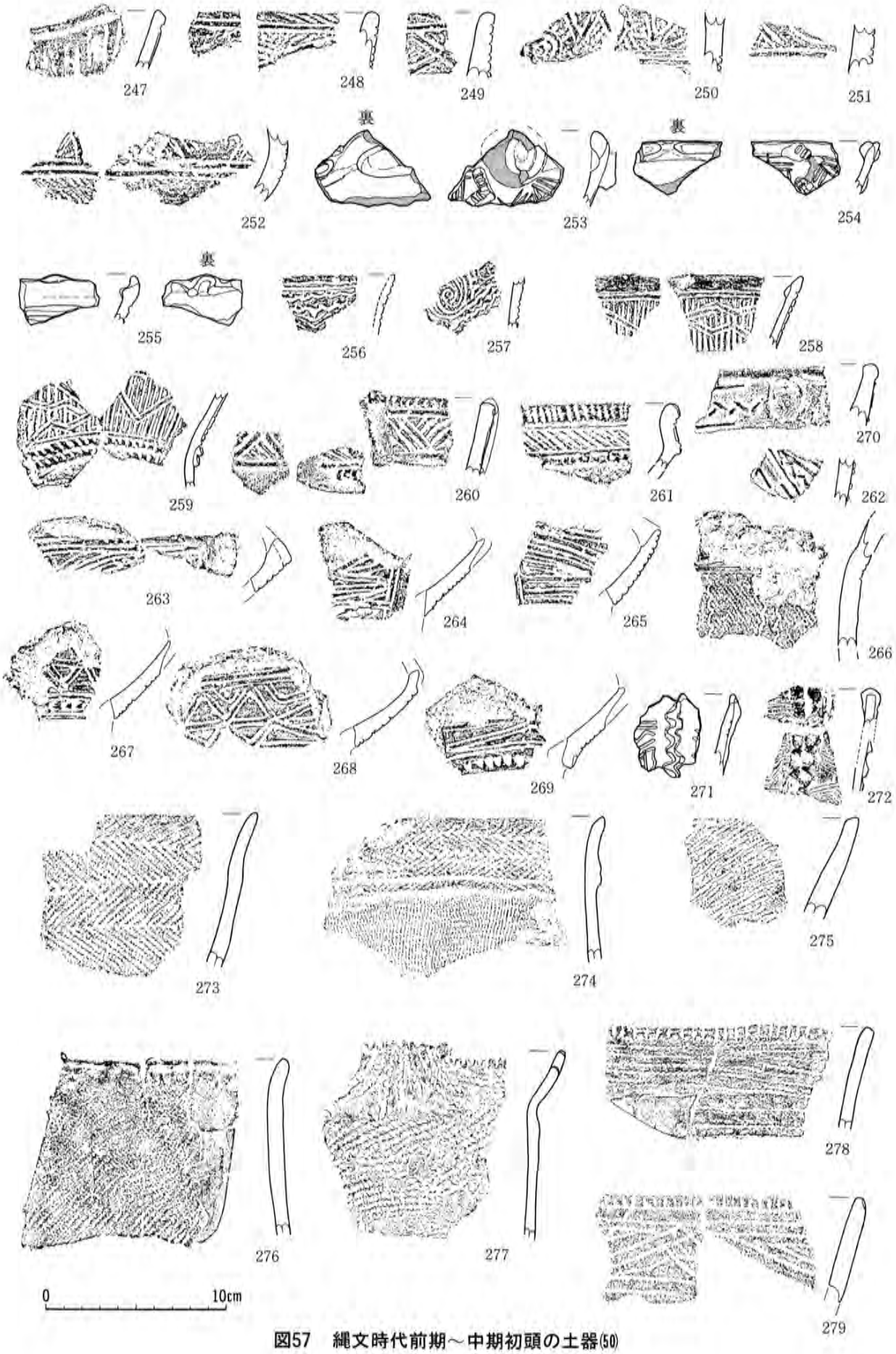


図57　縄文時代前期～中期初頭の土器(50)

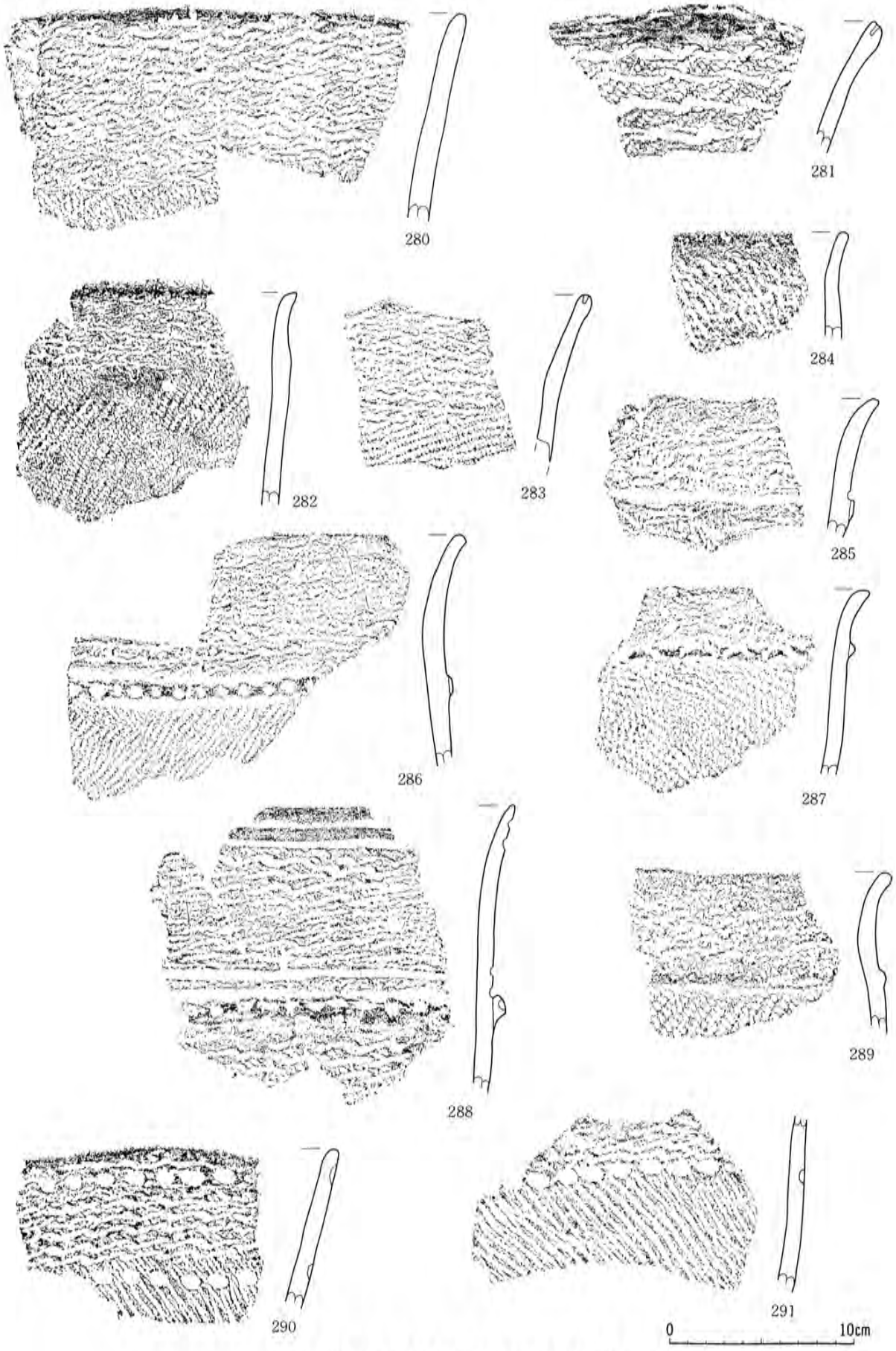


図58　縄文時代前期～中期初頭の土器(51)

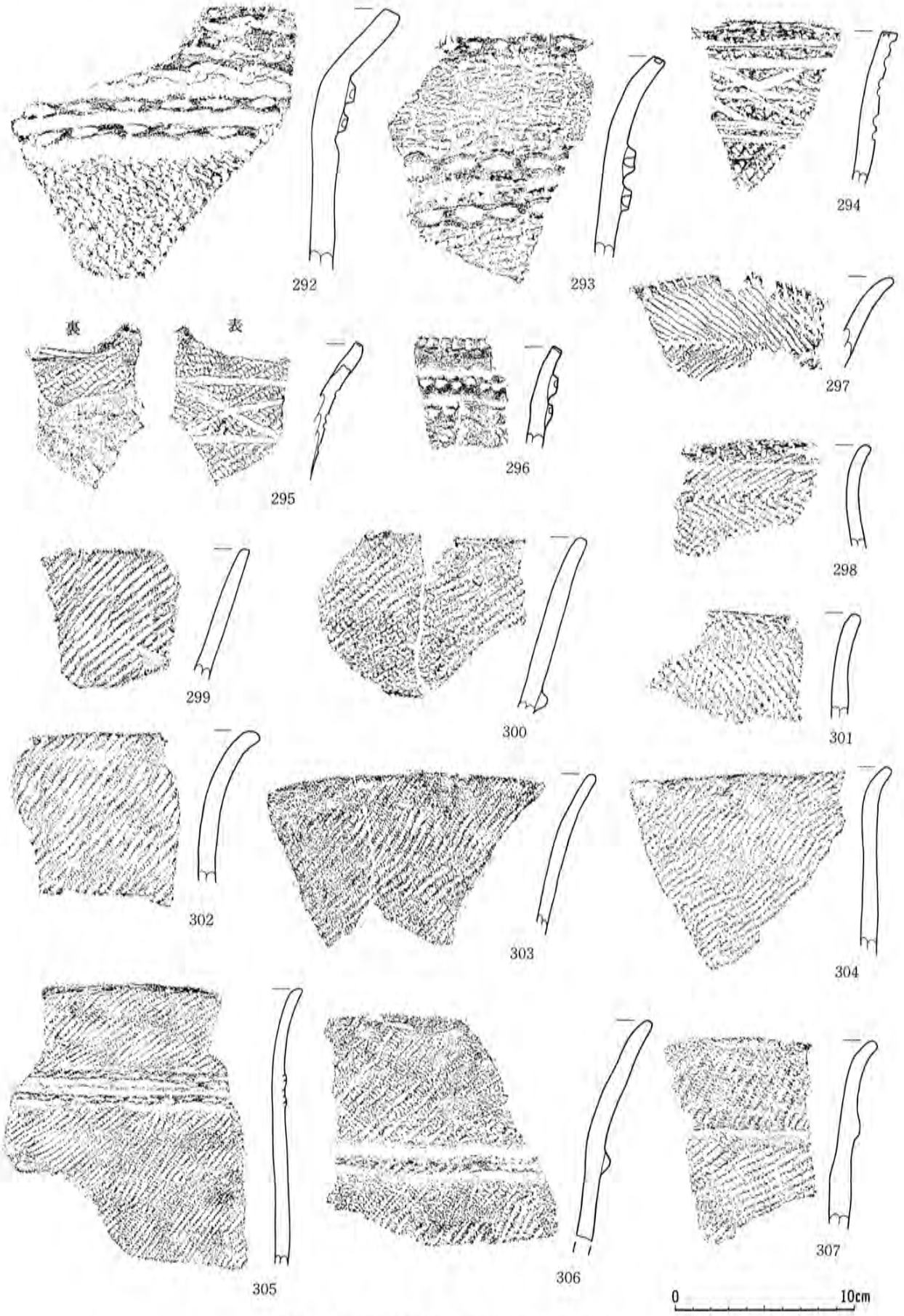


図59　縄文時代前期～中期初頭の土器(52)

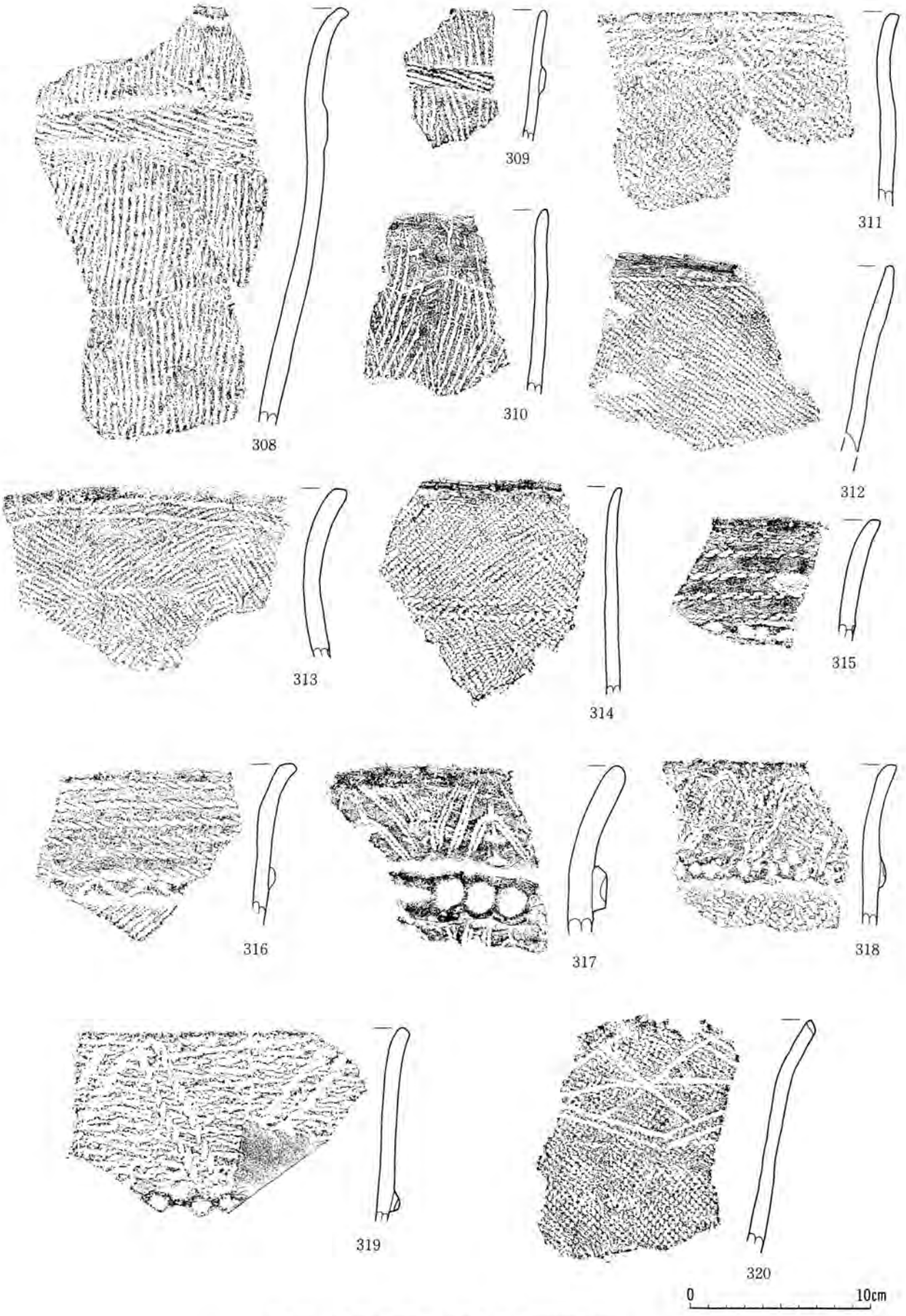


図60　縄文時代前期～中期初頭の土器(53)

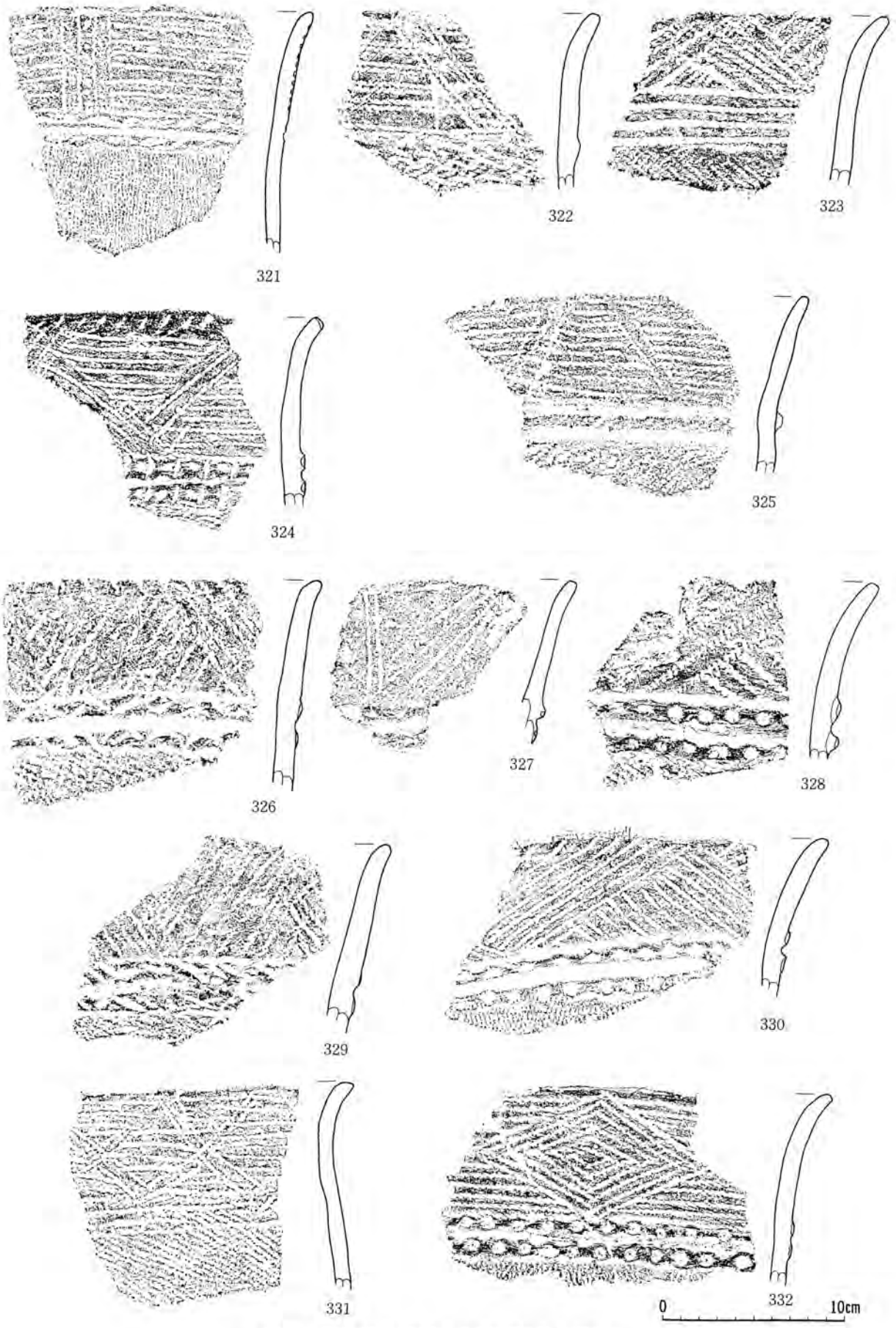


図61　縄文時代前期～中期初頭の土器(54)

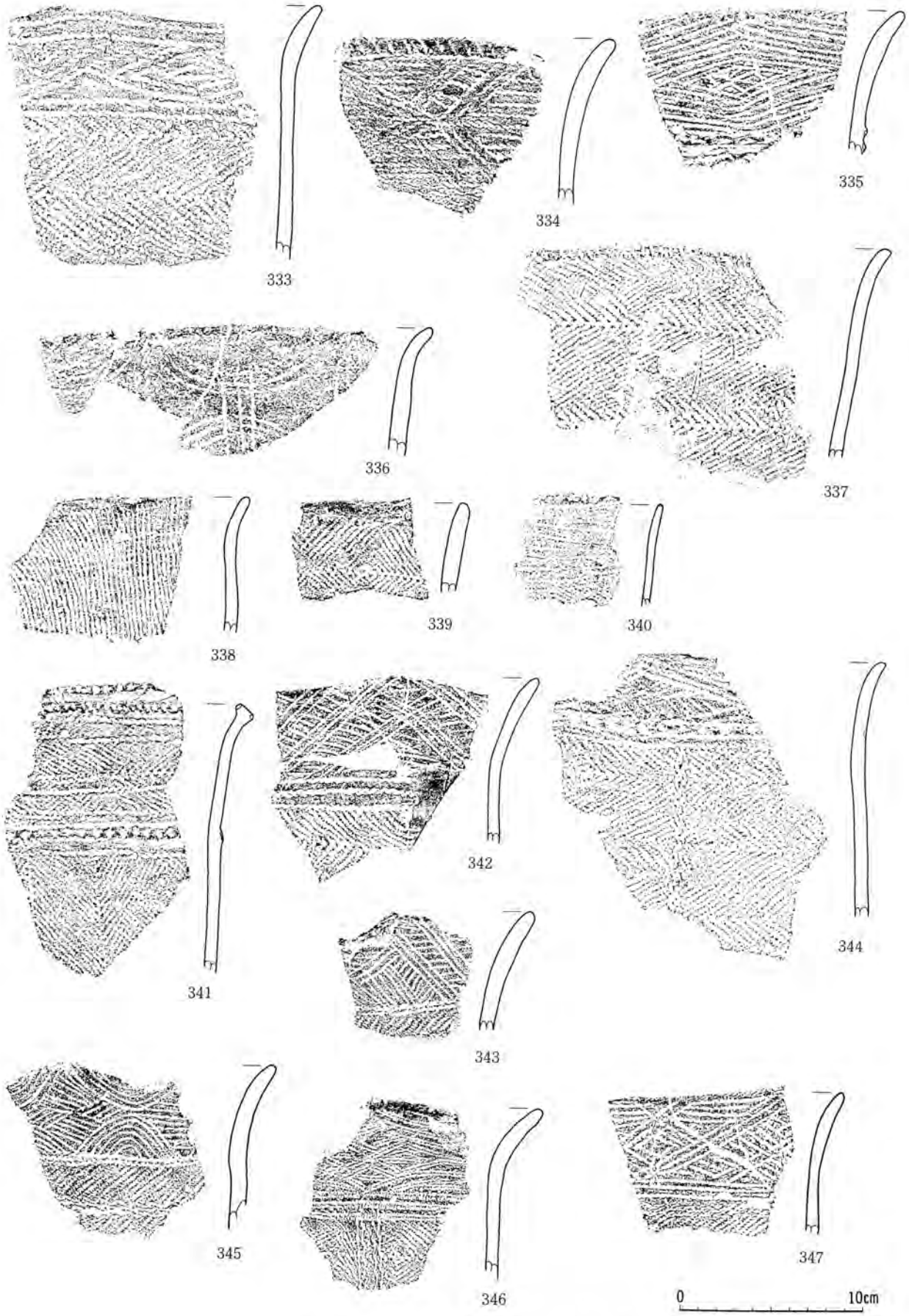


図62　縄文時代前期～中期初頭の土器(55)

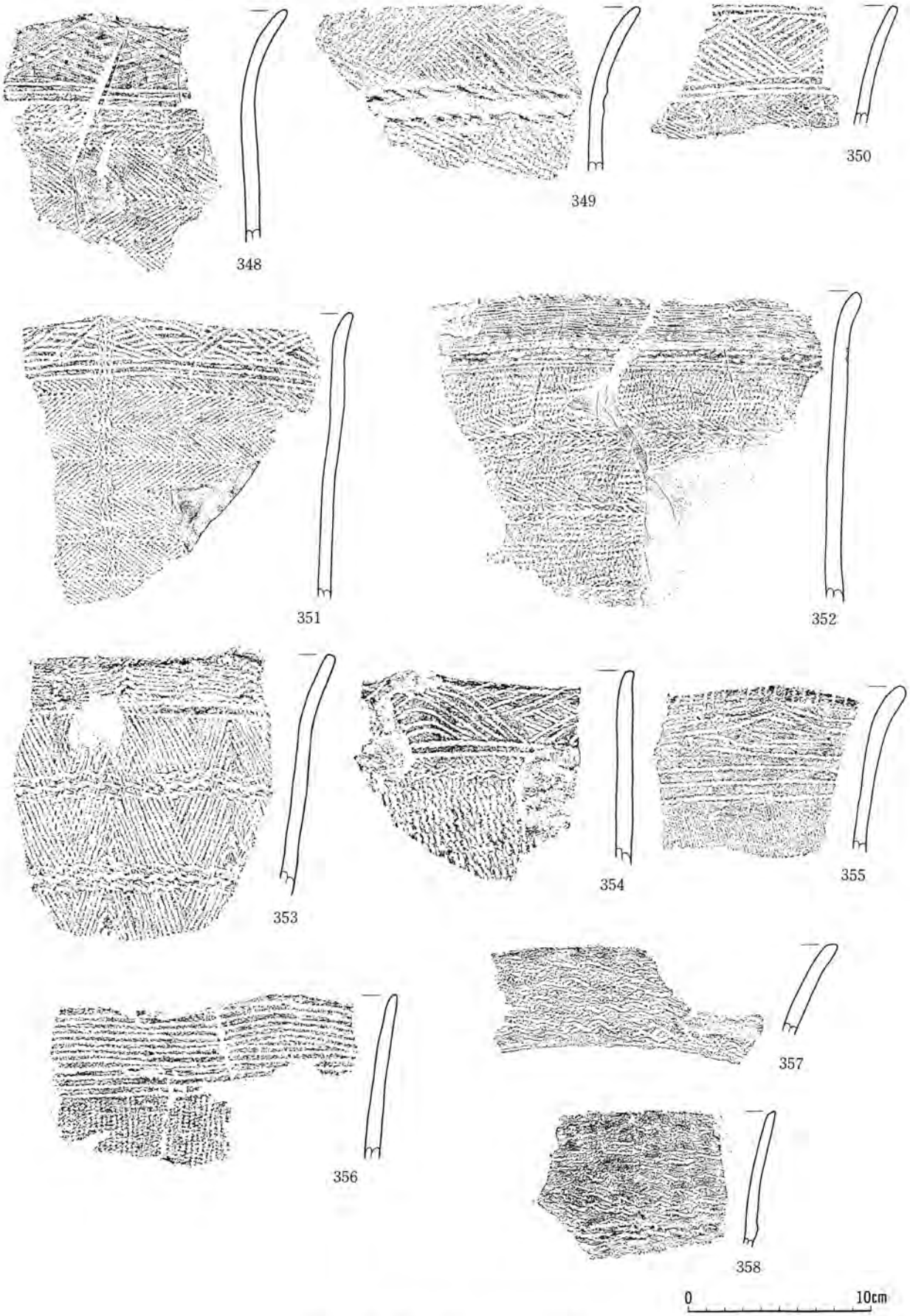


図63　縄文時代前期～中期初頭の土器(56)

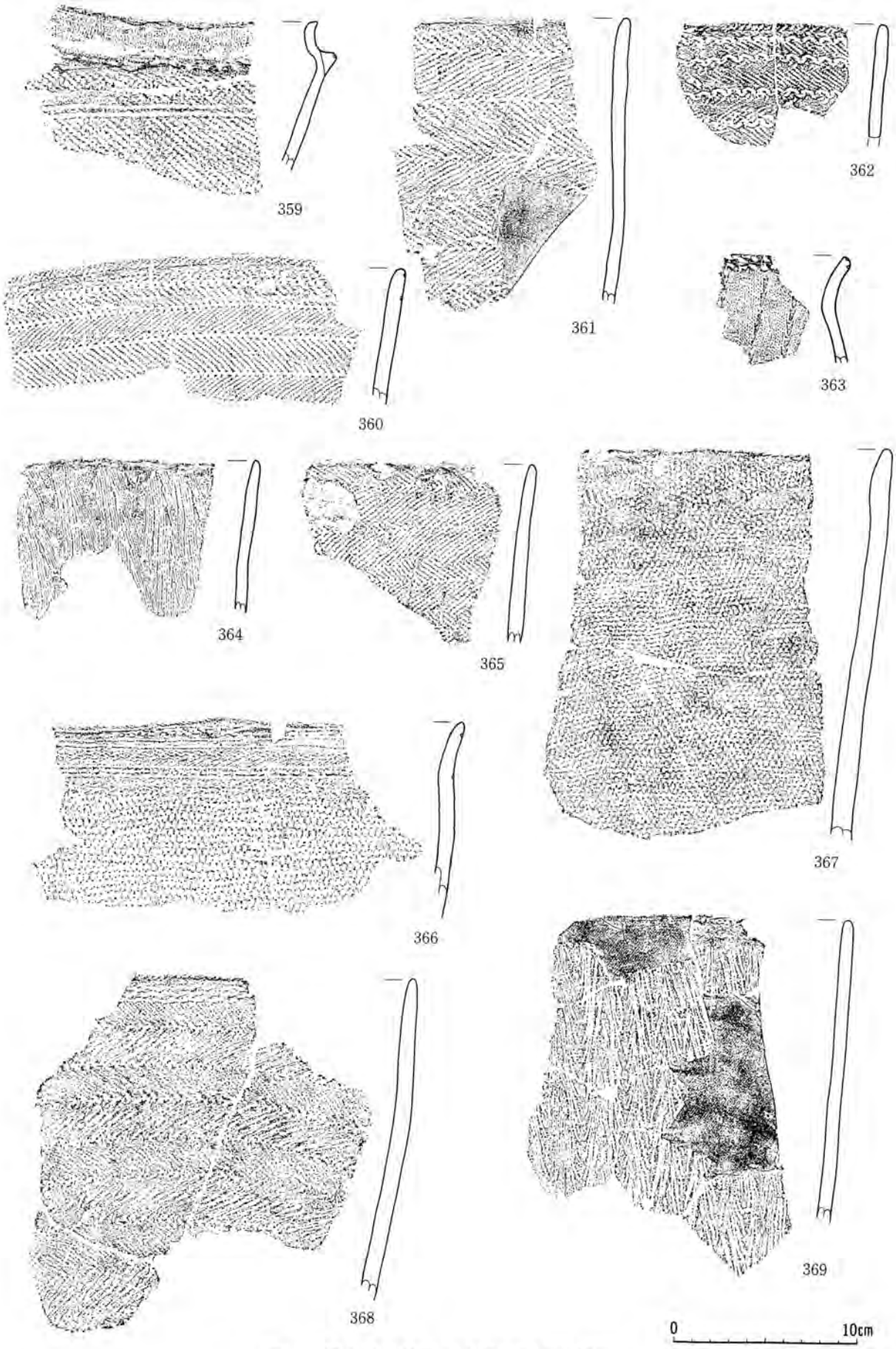


図64　縄文時代前期～中期初頭の土器(57)

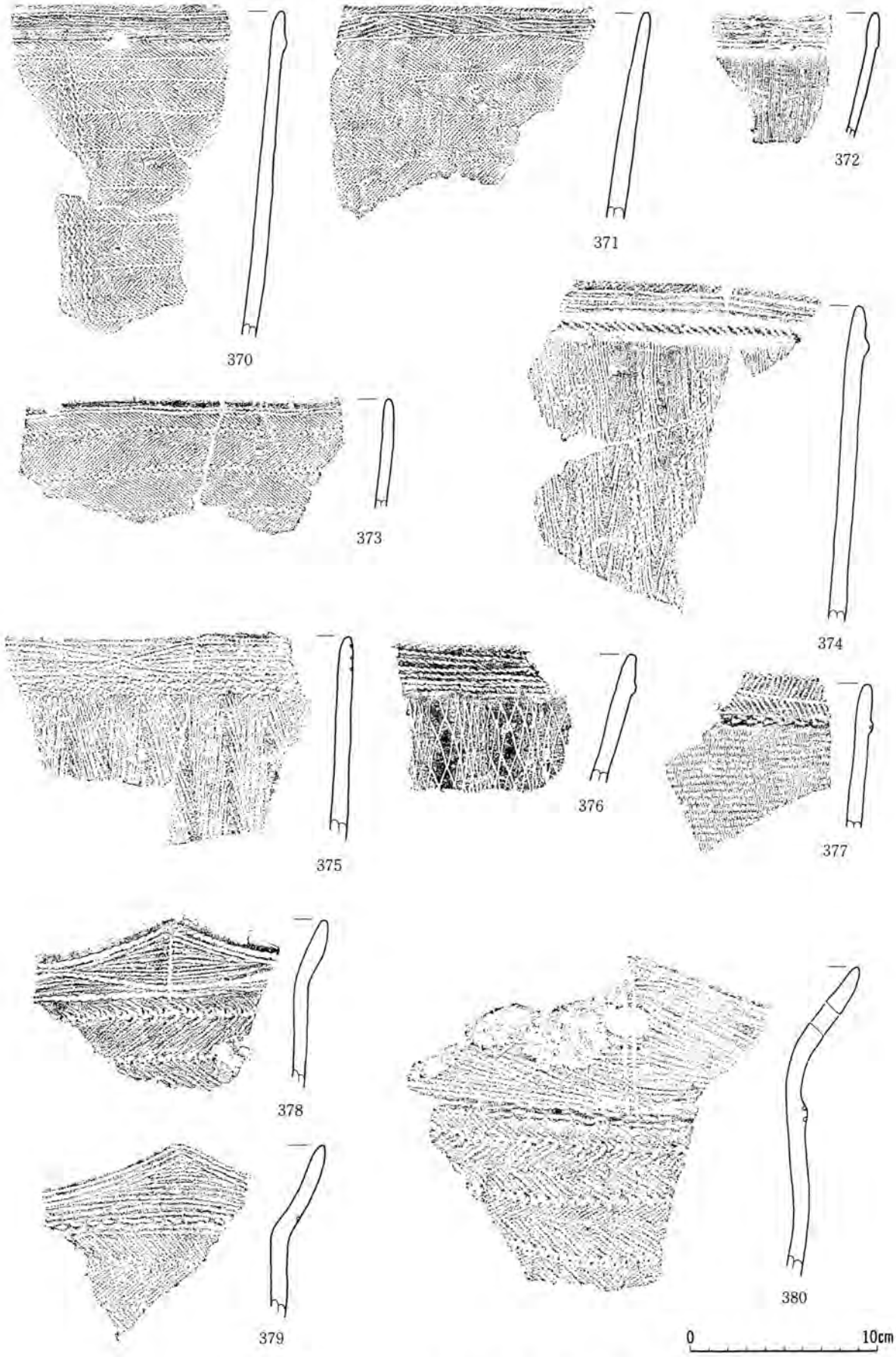


図65　縄文時代前期～中期初頭の土器(58)

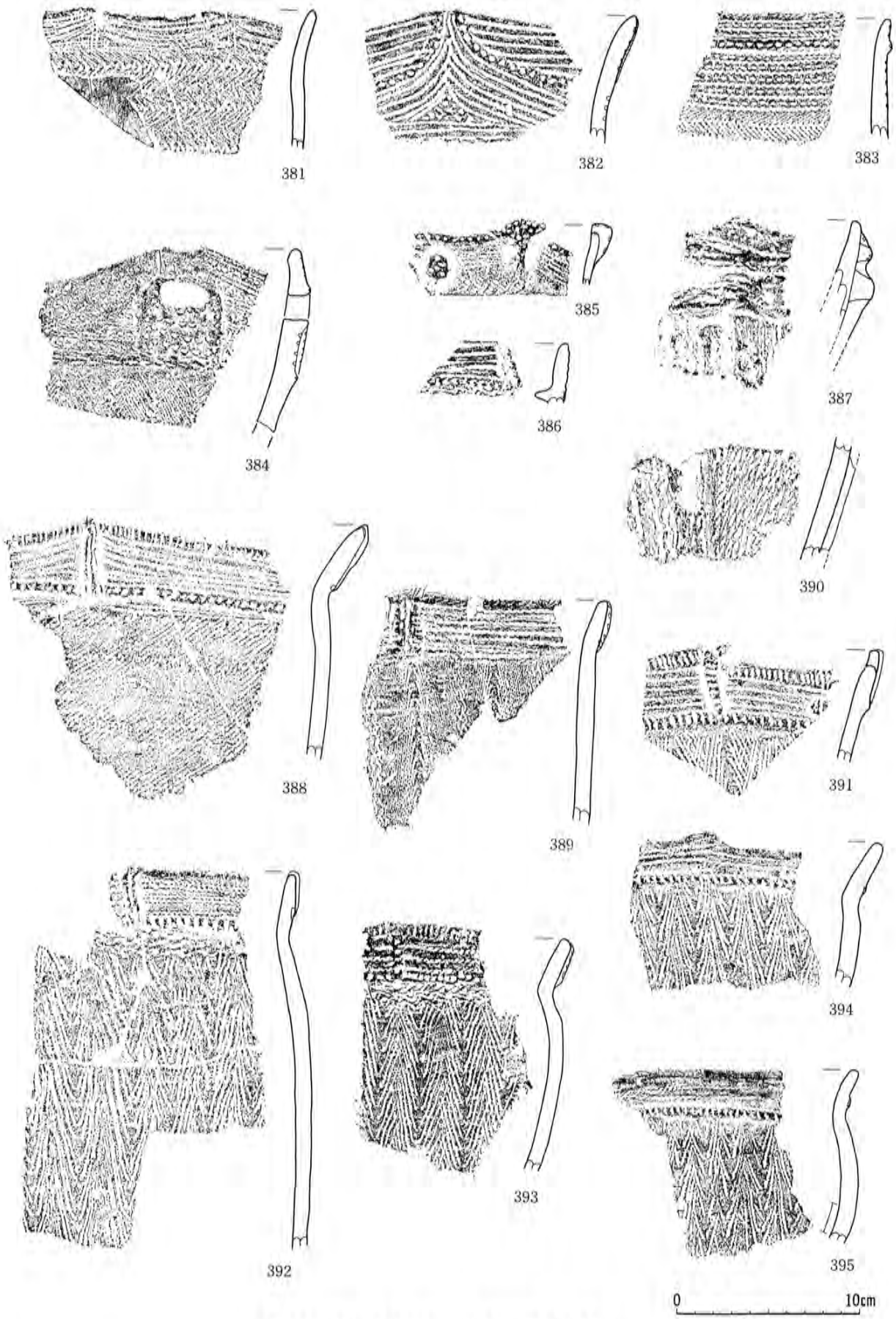


図66　縄文時代前期～中期初頭の土器(59)

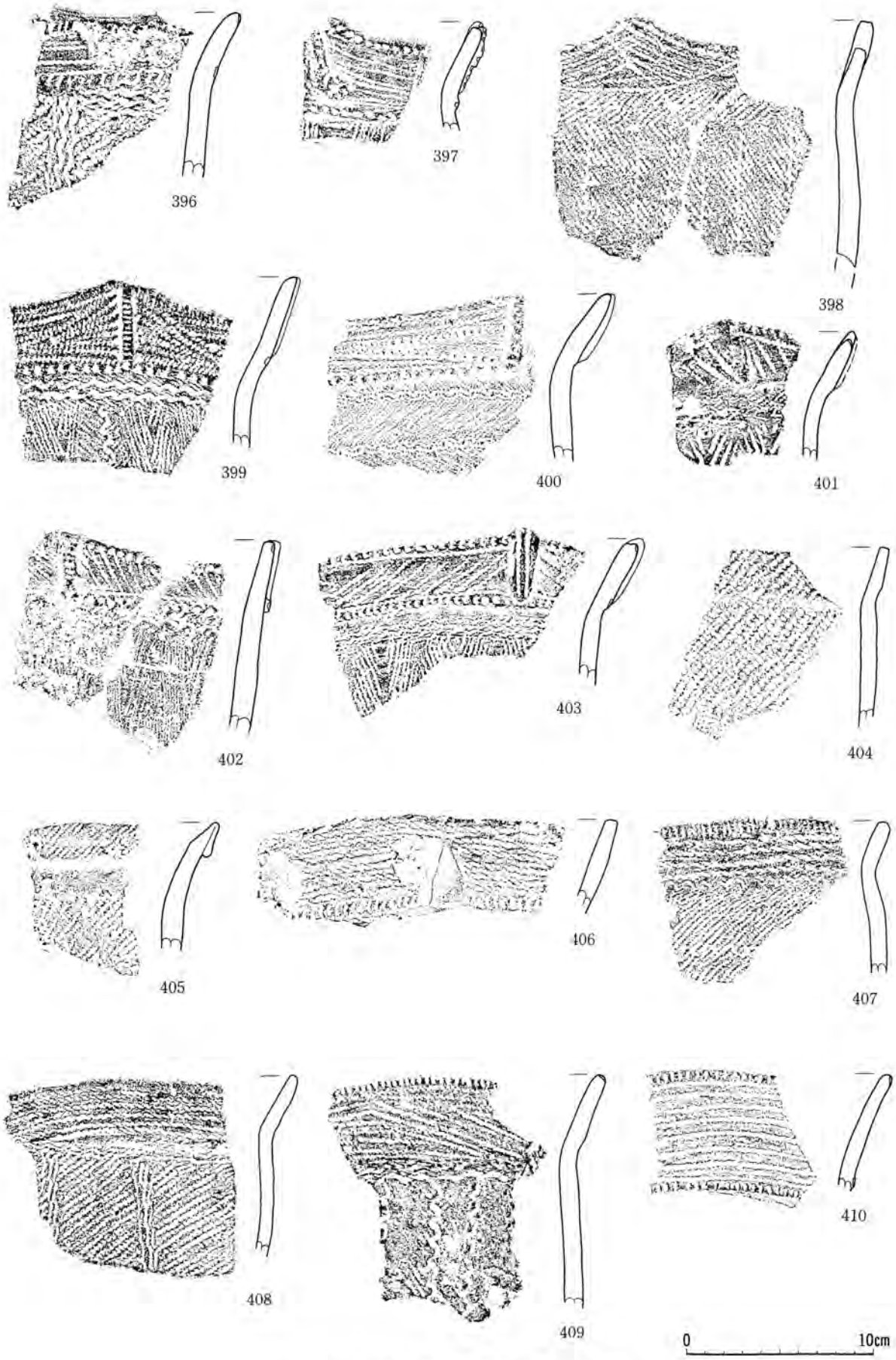


図67　縄文時代前期～中期初頭の土器(60)

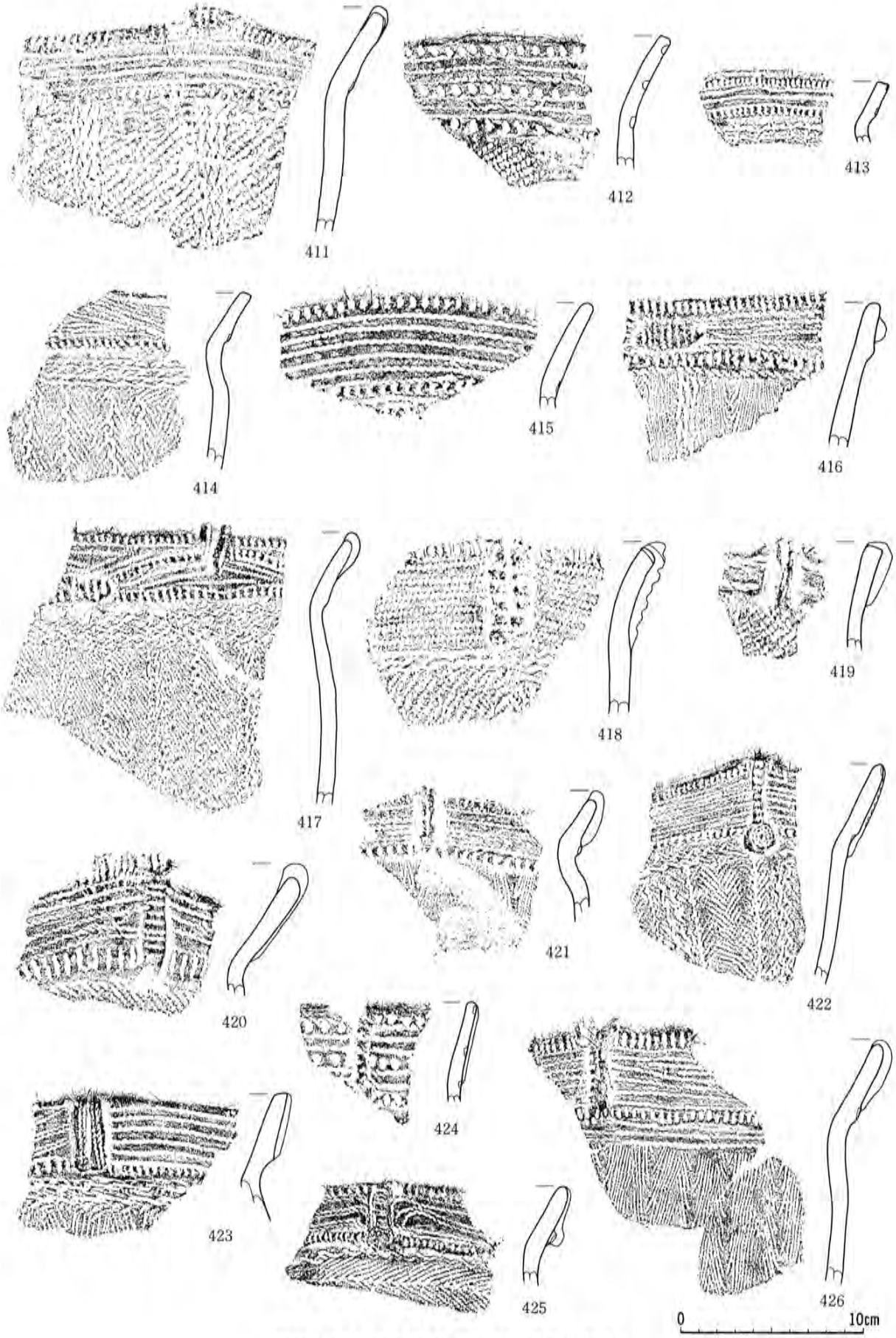


図68　縄文時代前期～中期初頭の土器(61)

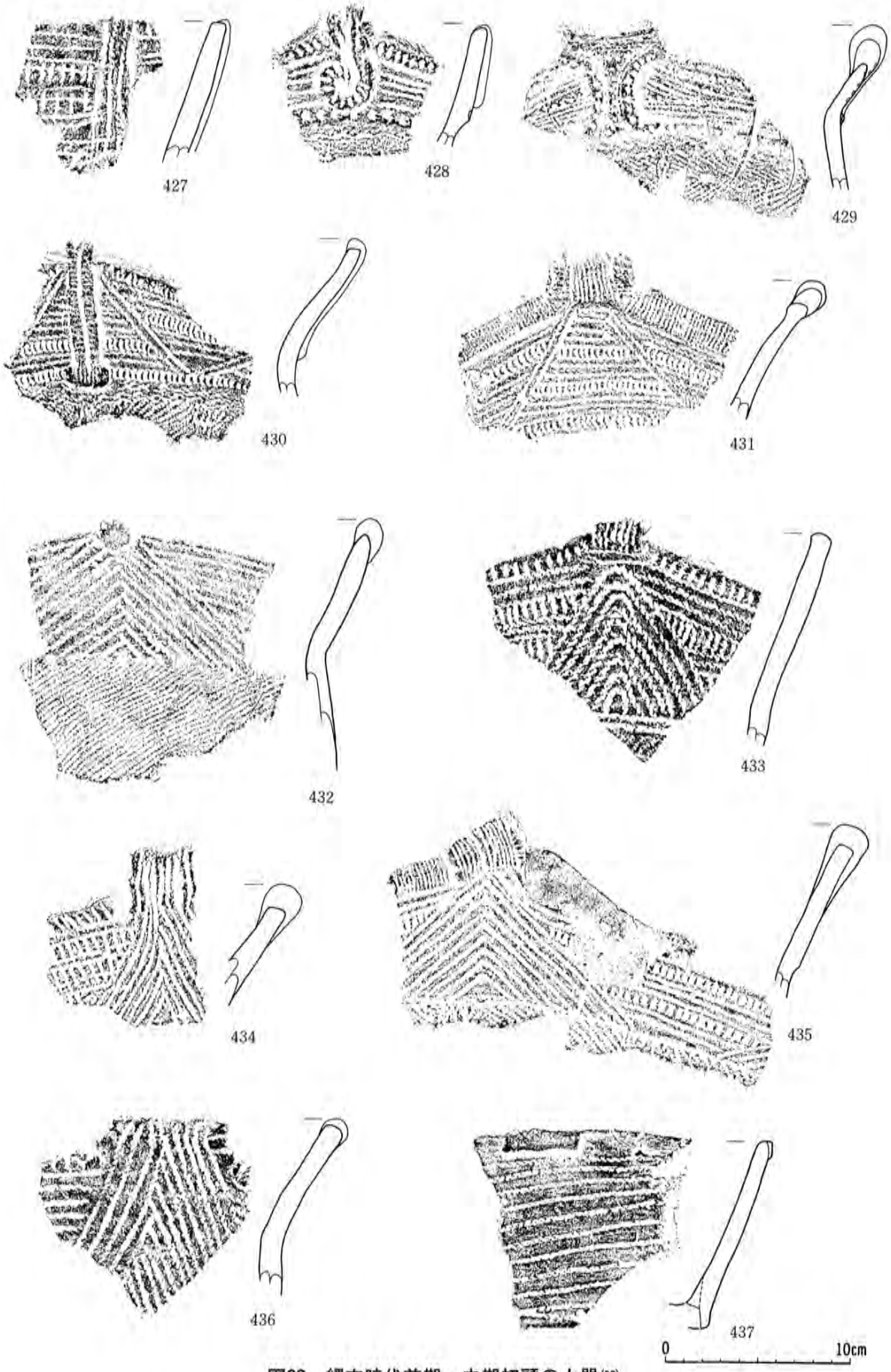


図69　縄文時代前期～中期初頭の土器(62)

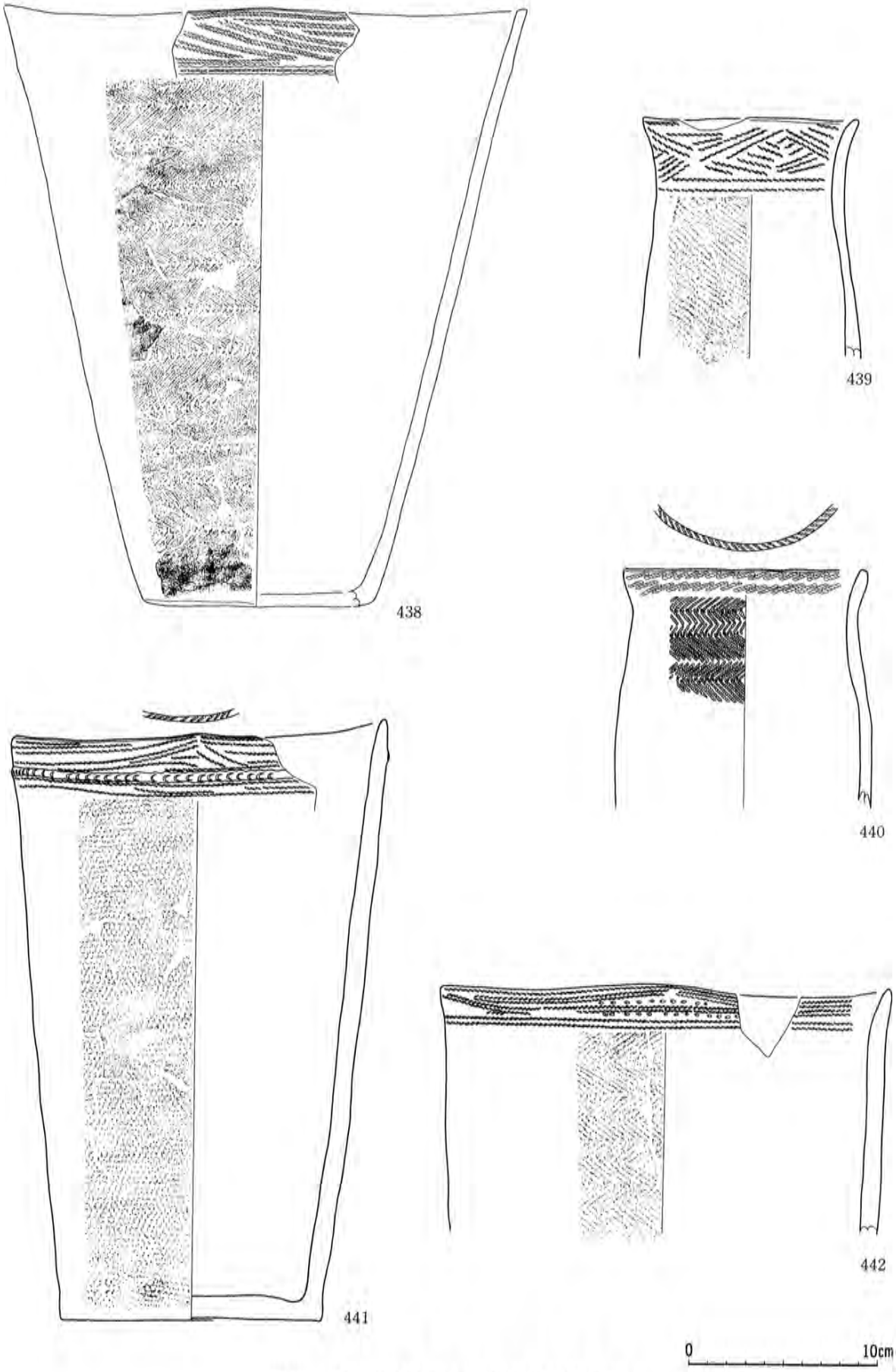


図70　縄文時代前期～中期初頭の土器(63)

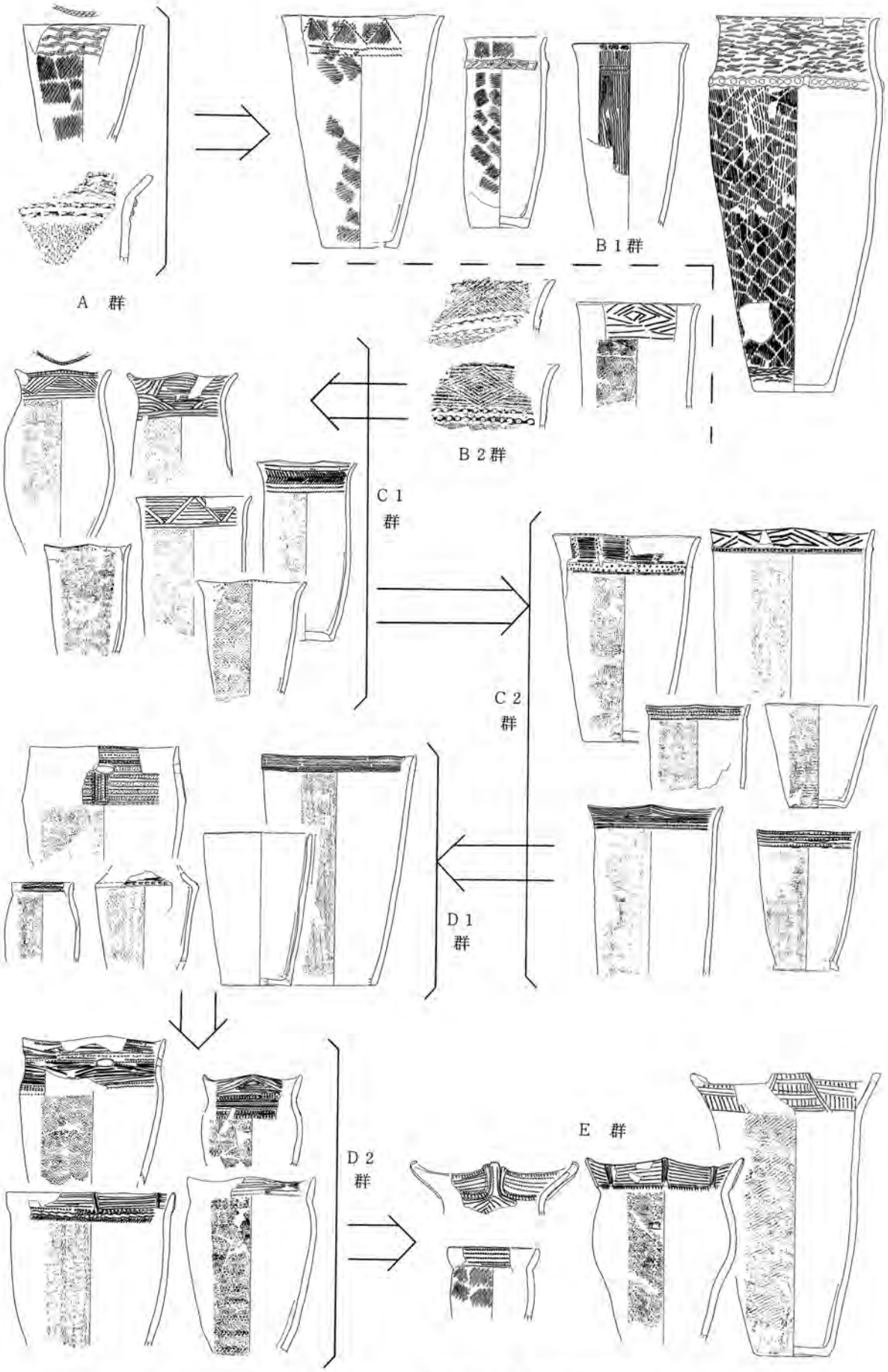
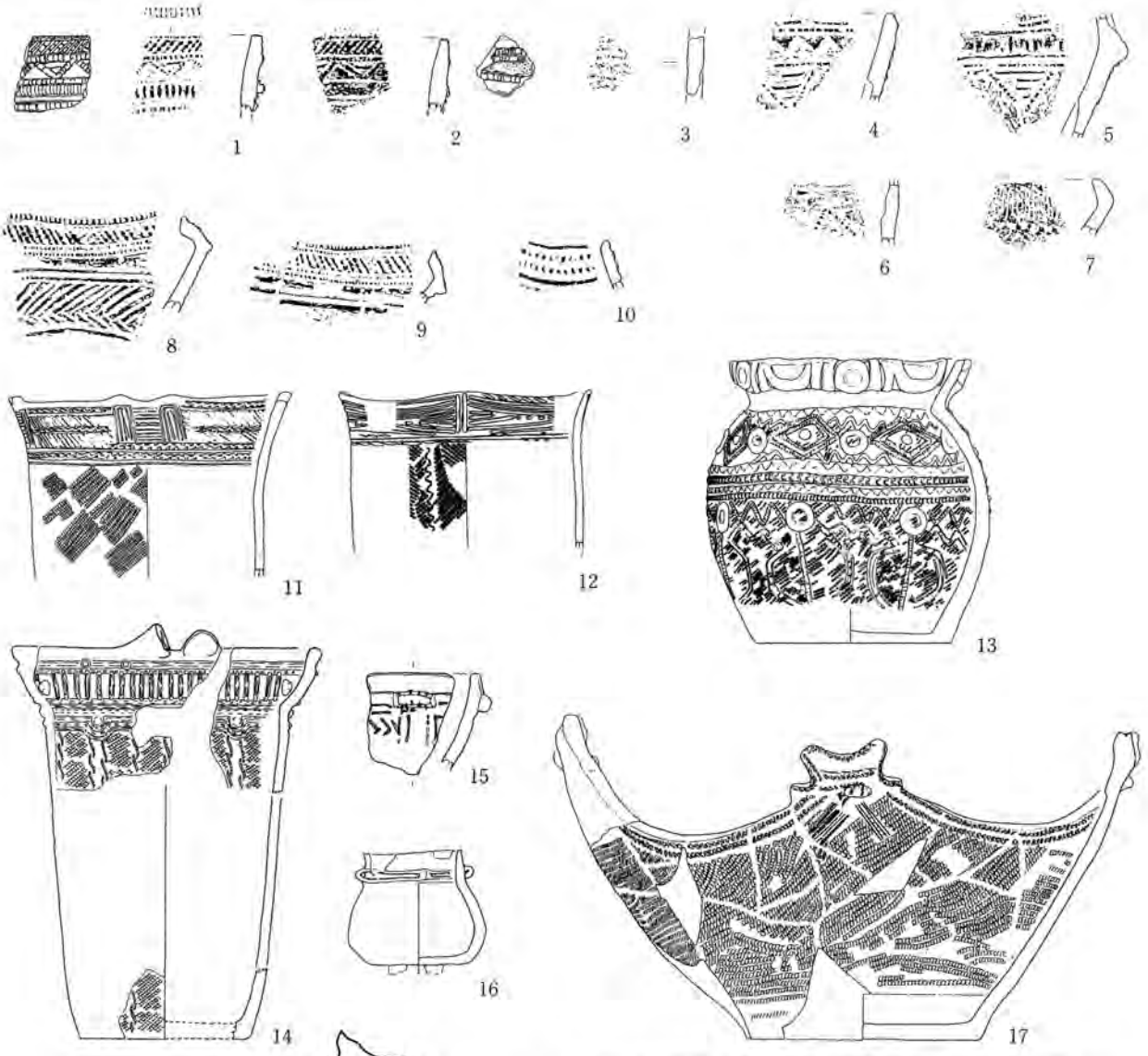
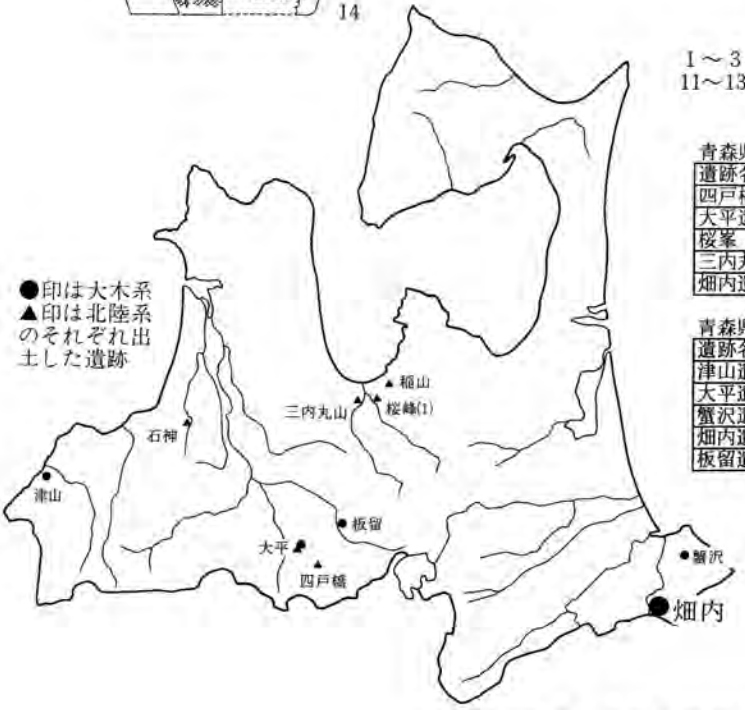


図71　C捨場における円筒下層式土器変遷図



1～3は桜峰、4～7は三内丸山、8～10は四戸橋
11～13は大平、14は板留、15は蟹沢、16・17は津山の資料



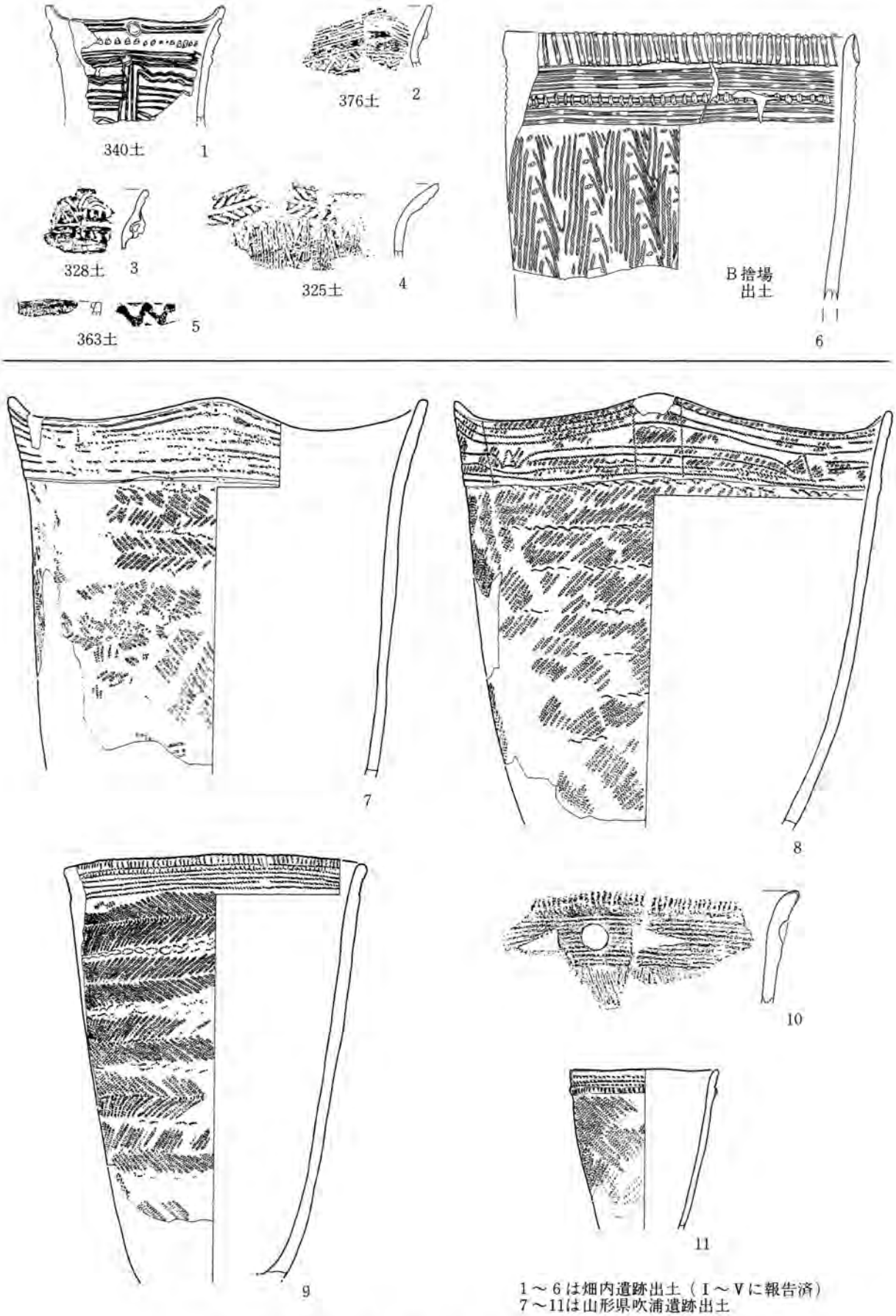
青森県内の北陸系（前期末～中期前葉）土器出土遺跡

遺跡名	時期（形式名）
四戸橋遺跡	前期末（朝日下層式）
大平遺跡	前期末？～中期初頭？
桜峯（1）遺跡	前期末（朝日下層式）
三内丸山遺跡	前期末（朝日下層式）
畑内遺跡	前期末（朝日下層式）～中期初頭（新保式）

青森県内の大木系（前期後半～中期前葉）土器出土遺跡

遺跡名	時期（形式名）
津山遺跡	中期前葉（大木７ａ？）
大平遺跡	大木６式？
蟹沢遺跡	大木６式？
畑内遺跡	大木６～７ａ
板留遺跡	大木７式？（細粘土紐貼付）

図72　青森県内の異系統土器集成



1～6は畑内遺跡出土（Ⅰ～Ⅴに報告済）
7～11は山形県吹浦遺跡出土

図73　畑内遺跡の異系統土器と他遺跡の参考資料

3　縄文時代中期中葉から晩期の土器

トロ箱にして2箱ほどの出土である。時期と文様について区分した。

1～5は中期に属する土器である。1は波状口縁の深鉢であり、やや太めの粘土紐の貼付とその間に施文される円形刺突が特徴である。粘土紐上には縄の側面圧痕が紐に沿って施文されている。円筒上層c式に比定されると考えられる。2と3は同一個体である。深鉢形土器の胴部破片である。器表面にRLを回転施文した後に粘土紐を貼り付けて文様を形成している。円筒上層e式に比定されると考えられる。4は深鉢の口縁部破片である。口縁部は折り返されており、その上に刻みが施されている。口縁直下には縄文回転施文後に浅い沈線により文様が展開されている。円筒上層d式に比定されると思われる。5は深鉢の破片である。口縁部と胴部の破片は接合しなかったが、近い位置にあると考えられたので器形を復元した。胴部下半はやや膨らみ気味であり、そこからやや外傾しながら口縁部まで立ち上がっている。口縁部は波状口縁であり、口縁裏側には口縁に沿って微隆帯が形成される。地文は単軸絡条体第1類の縦回転である。地文施文後沈線により胴部文様を描きその後磨り消しにより無文部とそうでないところとを区別している。一部に鰭条の突起もみられる。大木9～10式に相当すると思われる。

6～35は中期後半から中期初頭に属すると思われる土器である。文様要素の組み合わせ等により4グループに分類した。6～8は地文のみを施文するグループである。6は浅鉢形土器である。4単位の波状口縁であり、口縁部は折り返されている。口縁直下は折り返された部分は無文でありその下位には無節Lが縦方向に回転施文される。7は深鉢胴部破片である。単軸絡条体5類の変形したもの（連鎖状撚糸文）が縦位に回転施文される。珍しい原体ではあるが、青森市近野遺跡、秋田県大湯環状列石等で似たようなものが出土している。8は深鉢の口縁部である。口縁を折り返した後にLRを縦位に回転施文している。9～11は地文縄文上に沈線で文様を施文するグループである。すべて深鉢形土器である。11は口縁を折り返し、RLを回転施文した後に沈線で文様を描いている。12～28は縄文・沈線・磨り消しにより文様を施文するものである。24～26は壺形土器と考えられ、そのほかは深鉢形土器である。深鉢形土器は口縁が波状形になるものがほとんどである。口縁に沿って平行沈線や長方形文様を描くものが多く（13～18・22）、波頂部直下にはやや細長いボタン状の貼付がなされるものも多い（13～15・17・18）。文様の施文については縄文→沈線→磨り消しという順番がほとんどである。磨り消しについては沈線で区画された中を磨り消すもの（13・15・20・21）、外を磨り消すもの（14・17・18・23）がある。19・24は例外で、19は粘土紐を貼り付けた後に紐上に縄文を回転施文し、縄文で区画された内側をきれいに磨いている。24は縄文→沈線の後に全体を磨いている。折り返し口縁を持つものは13・15・16・18・20・22である。25～27は壺形土器の肩部付近と考えられる。

28は縄文施文後に粘土紐で十字状の隆線を作りその上に指頭押圧と縄文施文で加飾している。29～31は隆線のみで文様が構成されるものである。29・30はいわゆる狩猟文土器の一部である。胴部～頸部にかけてやや屈曲しさらに内湾しながら立ち上がるようである。隆線の断面は三角形である。31は壺の屈曲部であると考えられる。色調が全体に赤みを帯びており、胎土・焼成ともに良好である。32～36は文様が沈線のみで構成されるものである。32は浅鉢である。口縁から垂下する縦位の隆帯と沈線により大きく文様を区画し、その中にC字と逆C字の文様を向かい合わせに並べている。隆帯には上下方向に貫通する穴があけられている。33は底部破片であるが、底部に沈線による文様が施文され

ている。35は壺形土器の口頭部が切断されたものである。37～44は晩期の遺物である。37・38は壺、39・40は鉢？、42・43は台付き浅鉢、44は深鉢と思われる。時期のわかる破片は少ないが、38は沈線化した雲形文がみられるため大洞C2式に比定できそうである。

出土状況

図76に縄文中期から晩期にかけての土器の大まかな出土状況を示した。おおよそ捨て場一帯に広がっているものと考えられるが、量的には散発的な出土状況であり、ＢＤ～ＢＧ－16～22のあたりに分布の中心がありそうである。

すでに報告された遺構との関係であるが、図４に捨場周辺の遺構配置図を示した。そのうち住居跡に関していうならば、時期のはっきりしているものについていうならば40Ｈは後期前半、45Ｈが中期、48Ｈが中期、52Ｈが中期となっている。さらに、46Ｈは土器埋設石囲い炉のみの確認ではあるが、炉体土器には円筒上層ａ式とみられる土器が使用されている。時期的な占地状況としてはＡＺラインから東側に前期に近い中期の住居跡群。その西側に後期に近い中期の住居跡群という状況であると思われる。また、ＢＨ－22には屋外炉が確認されているが、これとの関係についてははっきりとしたことを言うことはできない。時期的な遺物量の変化については中期中葉はごくわずかであり、中期末～後期初頭にかけて若干遺物量が増え、後期中葉～晩期にかけてまた少なくなるという状況である。

縄文時代中期～晩期の土器観察表

図番号	出土位置	層位	器種	部位	時期	口縁部	胴部	底部	備考
1	BC-22	5	深鉢	口縁部	中期中葉？	粘土紐貼付・竹管刺突			粘土紐上には縄側圧、折り返し口縁
2	BF-19	5	深鉢	胴部	中期後半		RL横回転→粘土紐貼付		
3	BF-21	5	深鉢	胴部	中期後半		RL斜回転→粘土紐貼付		円筒上層ｄ？
4	AW-19	5	深鉢	口縁部	中期後半	縄文→沈線			口唇部刻み
5	BG-21	5	深鉢	口縁部～胴部	中期後半	単絡１縦回転	磨り消し縄文		鐙状突起
6	BD-19	5	深鉢	頸部	中期		微隆線・縄文		大木８式？・キャリパー形器形
7	BD-24	5	浅鉢？	口縁～胴部	中期～後	無文	L縦回転		折り返し口縁
8	BE-20	5	深鉢	胴部	後期		連鎖状撚糸文		
9	BF-20	5	深鉢	口縁部	後期初頭	LR横回転	LR横回転		折り返し口縁
10	BF-20	5	深鉢	口縁部	晩期	ナデ？・LR側圧	LR斜回転		
11	BH-21	5	深鉢	口縁部	後期初頭		RL縦回転→沈線		
12	BD-17	5	深鉢	口縁部	後期初頭	LR縦回転→沈線			
13	BB-18	5	深鉢	口縁部	後期初頭	沈線→LR回転	無文		波状口縁の波頂部直下にボタン状突起
14	BB-16	5	深鉢	口縁部	後期初頭	LR横回転→沈線			折り返し口縁
15	BD-23	5	深鉢	口縁部	後期初頭	LR縦回転→沈線			ボタン状突起
16	BC-18		深鉢	口縁部	後期初頭	LR横回転→沈線			波状口縁・波頂部直下にボタン状突起
17	BA-17	5	深鉢	口縁部	後期初頭	LR横回転→沈線			折り返し口縁
18	BC-17	5	深鉢	口縁部	後期初頭	縄文→沈線			ボタン状突起
19	BE-19	5	深鉢	口縁部	後期初頭	縄文→沈線			ボタン状突起
20	BO-19	5	深鉢	口縁部	後期初頭	隆線状に縄文			
21	BE-18	5	深鉢	口縁部	後期初頭	磨り消し縄文			
22	BD-19	5	深鉢	口縁部	後期初頭	RL縦回転～沈線			
23	BC-18	5	深鉢	口縁部～胴部	後期初頭	RL縦回転～沈線			折り返し口縁
24	BA-25	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	後期初頭	磨り消し縄文			
25	BF-20	5	鉢？	口縁部から胴部	後期初頭	LR縦回転→沈線	LR縦		
26	BC-17	5	壺	胴部	後期初頭		縄文→沈線		
27	AY-17	5	壺	胴部	後期初頭		沈線		
28	AU-17	5	壺	胴部	後期初頭		縄文→沈線		
29	BE-19	5	深鉢	胴部	後期初頭		縄文→隆線貼り付け		隆線状に縄文と指頭押圧
30	BG-20	5	深鉢	口縁部	後期初頭	断面三角形の隆線を矢羽状に貼り付			31と同一個体か？
31	BF-20	5	深鉢	口縁部	後期初頭	断面三角形の隆線を矢羽状に貼り付			狩猟文の一部？
24	BE-19	5	浅鉢	口縁～胴部	後期初頭	沈線			
33	BB-17	5		底部	後期初頭		沈線	底面に沈線	
34	BA-18	5	深鉢	口縁部	後期	沈線			
35	BB-18	5	壺	頸部	後期初頭		沈線		壺形土器の頸部が切断されている
36	AZ-18	5	深鉢	胴部	晩期		頸部沈線、ミガキ、LR横回転		
37	AZ-19	5	壺	肩部	晩期	LR回転→沈線			雲形文
38	BE-19	5	鉢？	口縁部	晩期？	無文			突起に貫通孔
39	BD-19	5	鉢？	口縁部	晩期？	無文			口縁部に突起
40									
41	BE-19	5	壺？	胴部	晩期？		無文		突起に貫通孔・38と似ている

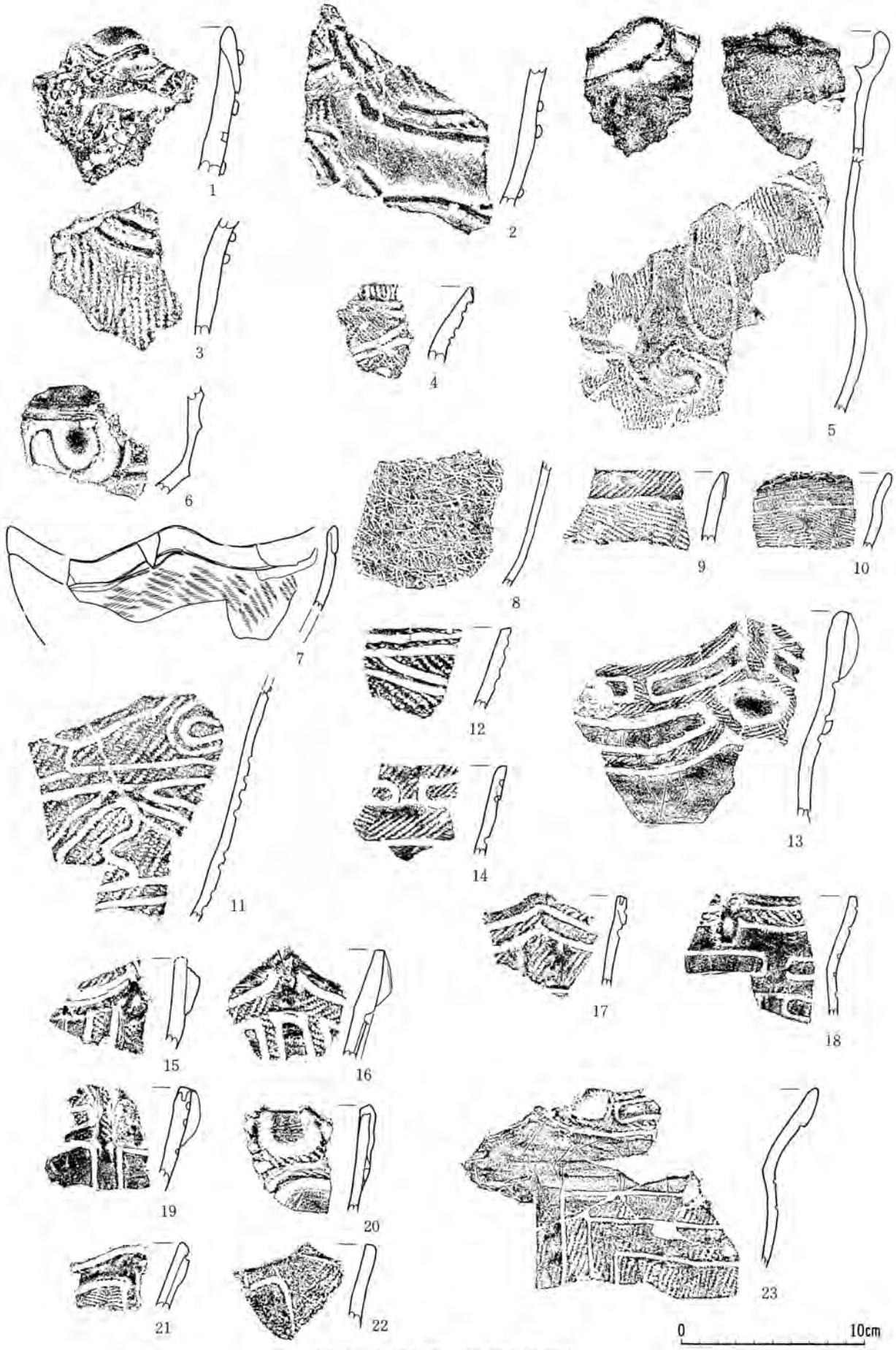


図74　中期中葉～晩期の土器(1)

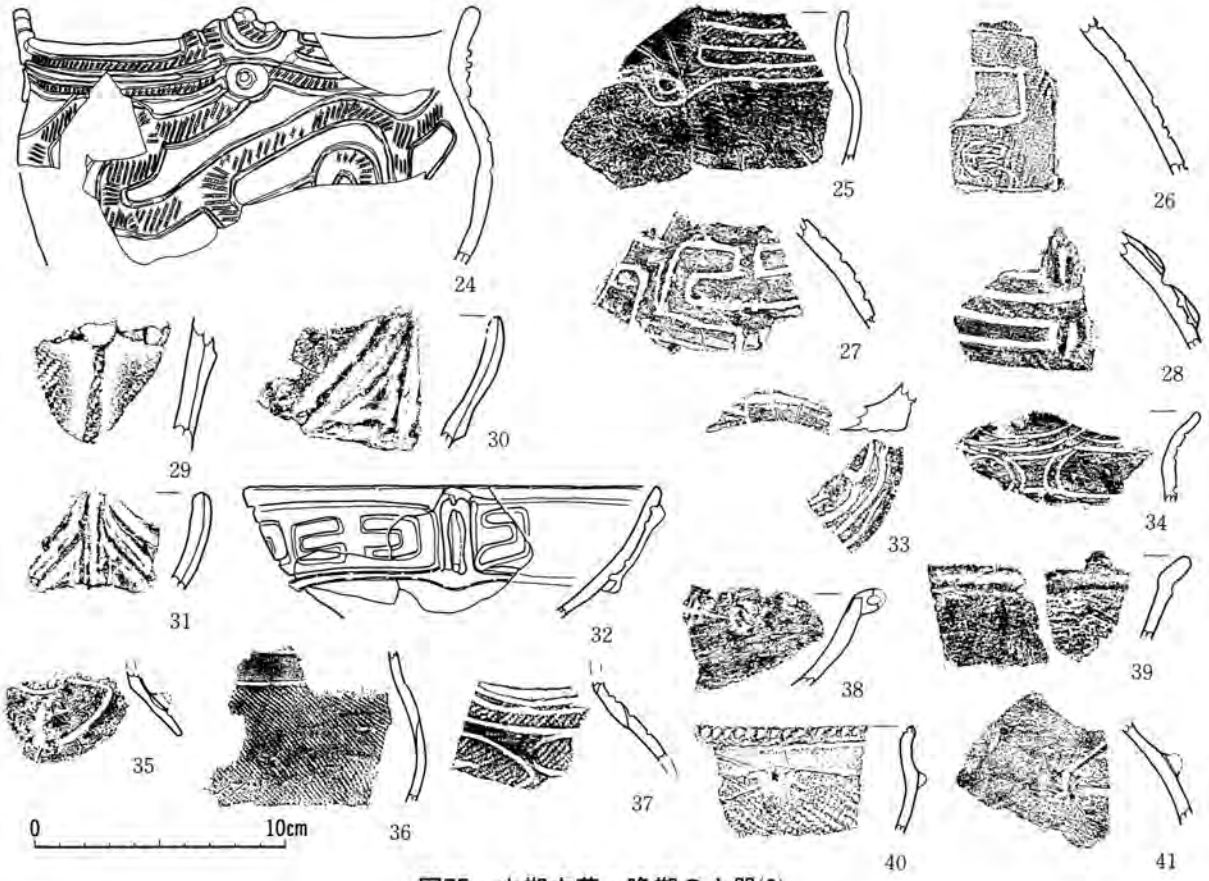


図75　中期中葉～晩期の土器(2)

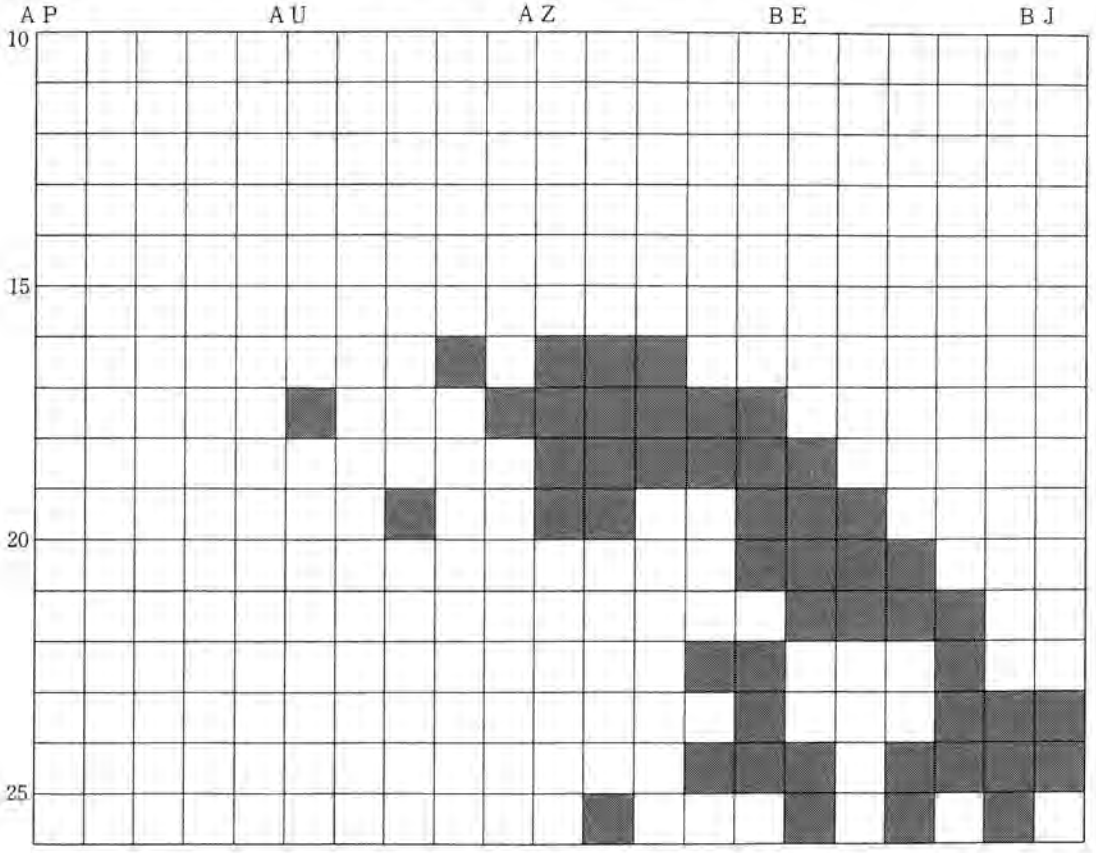


図76　縄文時代中期～晩期の遺物出土グリッド図

第4節　弥生時代以降の土器

1　弥生時代前期初頭の土器　図（127～134）

出土状況

C捨て場からは合計651箱の遺物が出土している。その中での弥生時代以降の土器の量はトロ箱で約20箱になる。これは畑内遺跡Ⅴで報告した分を除いているので、合計すると52箱になる。なお、出土範囲については図135に示した。なお、畑内遺跡Ⅳにおいて報告された遺物の出土位置も含めてある。

遺物の出土状況はほとんどが縄文時代前期の土器と同一層に混在して出土しているという様子であった。C捨て場は前述の通り斜面地に形成された捨て場であり、斜面の下と上では層順に違いがみられる。斜面の下方にあたるのが畑内遺跡Ⅴで報告した弥生時代遺物集中区であり、基本的に安定した層である第Ⅳ層から多量の遺物が出土した。今回はその斜面上方一帯であり、遺物の集中の度合いとしては前回報告の地点には及ばず、その周辺部に散乱した遺物と考えられる。

分類

変形工字文・器種等の分類については基本的に畑内遺跡Ⅴを踏襲したが、今回確認されなかった文様・器種等の分類についても参考までに記載してある。

変形工字文の分類

以下の種類に分類した。

大分類

①一つの繋がった沈線により三角形が構成されるもの。

②幅広の波状文と底辺との組み合わせにより、三角形が構成されるもの。

③流水状の沈線により、三角形が構成されるもの。

細分類

〔a〕完結型〔b〕、沈線連結型（A型・B型）、〔c〕π字状連結型（A型・B型）、〔d〕工字状連結型（A型・B型）、〔e〕連続型、〔f〕上下重層型、〔g〕交互重層型、〔h〕流水状文型。

器種分類

Ⅰ類　非装飾的な深鉢（1～44）

A　無文または全体に縄文が施文され底部から口縁部までスムーズに移行するもの。（1～7）

1は指押さえによる小波状口縁を持つ無文の深鉢である。内外面ともに幅1cmほどの板状の工具を横位から斜位に動かして器面を調整している。工具の単位ははっきりしており、ナデというよりはケズリに近い感じである。2～7はLRを横位から斜位に回転している。口縁部でやや外反するものと（2・3・5）、内湾しながら立ち上がり、口縁部付近でまっすぐ立ち上がるものとがある（4・7）。

B　口縁部または口頸部が無文で、頸部以下に縄文が施されるもの。（8～36）

縄文は22が無節のRの横位回転であるのを除くと、すべてLRの横位～斜位回転である。無文帯の幅は1～2cmくらいのものが多いが、頸部で屈曲し、肩部が張り出す器形のもの（29～32）についてはやや広めな印象を受ける。器形は他に口縁部が短く直立するもの（8・11～21・28）、胴部から口縁部までスムーズに立ち上がるもの（9・22）、口縁部で外反するもの（23～27）、頸部に屈曲を持

ち、口縁部が外反するもの（33～36）がある。

C　肩部で外側にやや張り出し、口縁部で短く外反し、頸部に１～２条の沈線または沈線状のくぼみを有するもの。（37～43）

口縁部の無文帯の幅はＢと同じ様な傾向で、幅の狭いものの器形は胴部からやや急に内湾しながら頸部にいたり、口縁部が直立あるいは外反気味に短く立ち上がっている（37～41）。それに対し、幅の広いものは頸部の屈曲がなだらかであり、胴部が外側に張り出すのが特徴的である。深鉢というよりは甕に近い器形である（42・43）。44は他と比べて少し異質である。内外面のミガキが特にきれいであり、縄文の節も非常に細かい。縄文晩期に属する遺物かもしれない。

その他のＩ類（45）深鉢の底部から胴部にかけての破片である。

Ⅱ類　平行沈線・平行工字文・π字文・流水工字文が施される深鉢（46～65）

A　口頸部に平行沈線が施されるもの（46～54）

Ａ１　肩部付近でやや内湾しながら、口縁部へとスムーズに移行するもの（47）

Ａ２　頸部で直立またはやや外反するもの（46・48～52）

Ａ３　口縁部で短く外反するもの（53・54）

B　口頸部に平行工字文・π字文・流水工字文・矢羽状沈線文が施される深鉢（55・56）

55は口縁部でやや外反する器形であり、波状口縁を持つ。口縁部には流水工字文が施文される。56も同様な器形であるが、眼鏡状沈線文？の下位に矢羽状沈線文が施文されている。

C　口縁～肩部にかけて横走沈線＋無文帯＋平行工字文が施されるもの（57～65）なお、ほとんどが破片であるため、平行工字文か平行沈線か判断の付かないものもここに入れた。

Ｃ１　口縁部で屈曲しないかまたは外反気味となるもの（60・61）

口縁部から胴部にかけて大きく張り出す器形（59）と、そうではないもの（57・58・62）がある。

D　口縁～肩部にかけて、二本の横走沈線間に幅広の無文帯を作るもの。（64・65）

64・65ともに２本の沈線により頸部がやや屈曲し、逆“コ”の字状の断面になっている。頸部の屈曲からやや胴部が張り出し、頸部直下あたりに最大径がくる器形になるものと思われる。

Ⅲ類　変形工字文・波状工字文が施される深鉢・鉢（66～77）ＡとＥについては今回は確認されなかった。

A　平坦口縁のもの

B　頂部二股の山形突起を有するもの（66・67・70・74・77）

65は横走沈線の下位に無文帯を設け、そのさらに下位に変形工字文を施文している。変形工字文の種類は完結型（67・74・77）があるが、その他は不明である。

C　特殊突起を有するもの（72）

前後に並ぶ２つの円筒形の突起それぞれの頂部に円形の刺突が加えられる。

D　向かい合う二股の突起を有するもの（69・71・73・76）

変形工字文の種類としては、完結型（69）がある。69は施文が２段になっており下位の変形工字文の沈線間には刺突が施されている。

E　波状工字文が施されるもの。台付の可能性がある。

Ⅲ類には深鉢か鉢か判然としないものを集めたが、断面形状等より66・69・71などは深鉢、その他

は鉢に分類される可能性がある。

Ⅳ類　胎土精良・焼成堅緻で、丁寧な作りの鉢。主に非煮沸用と考えられるもの。ＡとＢについては今回は確認されなかった。

Ａ　口頸部に平行沈線文・平行工字文・流水工字文が施されるもの

Ｂ　口縁～肩部にかけて横走沈線＋無文帯＋平行工字文が施されるもの

Ｃ　その他の鉢類（78～80）78・79は粗製の鉢である。口縁部に無文帯を持ち、その下位にＬＲが横位から斜位に回転施文される。80はおそらく鉢と考えられる。完結型の変形工字文が体部のかなり低い位置に施文されている。その下位にはＬＲが横位に回転施文されている。底部と胴部の境は丸みを帯びており、底部と胴部との境界はやや不確かである。胴部はそのままま っすぐに近い感じで立ち上がる。

Ⅴ類　浅鉢（81～84）

Ａ　台形状の器形を呈し、上半部または全面に変形工字文や平行工字文が施されるもの。

Ａ１　平坦口縁のもの（82・83）

２点確認された。82は変形工字文完結型が施文される。その下位にはＬＲが回転施文されている。83はほぼ器形、文様構成がわかるまで復元されている。口径と底径の差が大きくやや開き気味の逆台形状の器形である。幅広の文様帯の中に変形工字文の上下縦走型が施文されている。その下位は無文であり底部付近に２条の平行沈線が施文される。

Ａ２　向かい合う二個一対の突起を有するもの。今回は確認されなかった。

Ｂ　頸部で屈曲し、口縁部が外傾または外反し、上半部または全面に変形工字文が施されるもの。今回は確認されなかった。

Ｂ１　上面に刺突が施される二股の突起を有するもの

Ｂ２　向かい合う二個一対の突起を有するもの

Ｃ　頸部で屈曲し、口縁部で直立し肩部以下に変形工字文が施されるもの。今回は確認されなかった。

その他のⅤ類（81・84）

81はやや小型の浅鉢である。他の個体と比べると胎土、器面調整、沈線等の面でやや粗雑な感がある。頸部で屈曲し、口縁部で直立する器形であるが、施文される文様は平行工字文である。84は浅鉢の底部から体部にかけての破片である。おそらく頸部で屈曲する器形であるためＢかＣの破片であると思われる。体部下半はＬＲの回転施文であり、上半部に流水工字文が施文される。

Ⅵ類　浅鉢・高坏　口頸部破片からは浅鉢か高坏か不明であるもの。平坦口縁と波状口縁に突起が加えられるものがある。（85～95・97）

Ａ　坏部上半に平行工字文・π字文・流水工字文が施されるもの。体部上半で内湾し口頸部に移行するものが多い（85）

85は頸部下位に無文帯を持ち、その下位に変形工字文完結型が施文される。

Ｂ　坏部上半に変形工字文が施され、頸部で屈曲し口縁部でわずかに外反・直立するもの。（86～94）

Ｂ１　平坦口縁のもの（86～95・97）

文様構成についてはすべて１段の構成となっている。変形工字文の種類としては完結型（86・88～90・93）、平行工字文（91・94）がある。特に88・90は沈線が太く、断面が丸く、太さも一定であり

全体的にきれいな感じである。色調は外のものが赤みを帯びた色調を基調とするのに対し、明るく白っぽい色調である。97は口縁部の無文帯の上下を3条一組の平行沈線で挟んでいる。胎土には金雲母が混入し、色調もかなり赤みが強い。沈線は二度書きのためか断面が多角形になっている。もしかするとやや新しい時期に属する遺物かもしれない。98の脚部と同一個体の可能性がある。

B 2　波状口縁または突起を有するもの。（95）

95は小型の土器である。頂部二股の山形突起を持ち、変形工字文の特殊型が施文されている。特殊型とは変形工字文の頂角から底角へ延びる沈線の片方が頂角間中点に結合しているため通常と全く異なる文様構成となっているものである。本遺跡ではこの個体のみにみられた。他遺跡の類例は未だみられない。

Ⅶ類　高坏　高坏特有の突起が施されるもの（96・98～100）

A　変形工字文の三角形部頂点上の口縁部に、刻みによる頂部二股の山形突起が付され、背部上半で屈曲し、口縁部で外傾または外反するもの。（96）

B　変形工字文の三角形部頂点上の口縁部に、大型の円盤状突起が付され、背部上半で屈曲し、口縁部で外傾または外反するもの。今回は確認されなかった。

台部（98～100）

A　平行沈線文が施されるもの（99）

器壁の直立する円筒形の台部である。最下部に平行沈線が施文される。

B　流水状工字文が施されるもの。今回は確認されなかった。

C　波状文が施されるもの（98）

やや膨らみを帯び、裾広がり気味の筒形台部である。最下部に平行沈線、その上部に波状文が2段施文される。それぞれ沈線は3本一組である。胎土、色調、沈線の様子ともにⅥ類の97と類似している。

D　台部全体に縄文が施されるもの。今回は確認されなかった。

E　土器の脚部（100）

正面形は台形状であり、表裏面ともに外側の縁に沿って2条の沈線がかかれている。断面形はやや内湾気味であり、基部には土器の底部が接合している。既刊の「畑内遺跡Ⅴ」においても1点類似した例が報告されているが、土器の底面が接合しているのは本例が始めてである。類似したものは名川町剣吉荒町遺跡・岩手県長谷堂貝塚などで出土している（長谷堂貝塚例は土偶の腕として報告されている）。

Ⅷ類　壷（101～113）

A　縄文時代晩期後葉から続く形態で、口頸部が直立または緩やかに外反して立ち上がり肩部付近に最大径を有するもの。口縁部に匹字文・逆匹字文・平行工字文・平行沈線文が施される。（102・103～105）

102は口縁部を欠失している。無文であり、外面はミガキ・内面は幅1cmほどの板状の工具によりケズリに近いミガキ調整がなされている。かなり肩の張る器形である。103～105は口縁部破片である。103・105は口縁部に逆匹字文を施文するもの、104は平行工字文を施文するものである。

B　口頸部が、外反または外傾しながら開き、胴部中位付近に最大径を有するもの。（106）

106は波状口縁の頂部に突起を持つ。頸部には平行工字文、体部状半には変形工字文完結型＋無文帯＋平行沈線がそれぞれ施文され、体部下半にはＬＲが斜位回転施文されている。また、頸部には貫通孔が１つあけられており、おそらく蓋形土器とセットになるものと思われる。

C　その他の壺（101・102・107・108・110～113）

壺の体部及び無頸壺である。101は口頸部からやや内反り気味に肩部まで広がり、体部中位で最大径を持つ。そろばん玉のような器形である。頸部には横走沈線が１条走り、外面は無文であり丁寧に磨かれている。内面は幅１cmほどの板状工具で削られている。107～110は胴部中位に最大径を持つ有文の壺であり、Ｂに属する可能性がある。110は口径がやや広めであり、文様も口縁部に横走沈線間に無文帯を設け、体部上半には平行沈線＋無文帯＋平行沈線という文様構成であり、他の個体とはやや違った様子である。107・108には体部上半に変形工字文が施文されるが、107は交互重層連結型、108は完結型であるが、重層する可能性がある。111は有文壺の肩部である。体部上半に変形工字文完結型が施文され、その下位に微隆帯を作出しその上面に刻みを入れている。微隆帯の部分でちょうど最大径を持つようであり、その下位には２本の平行沈線が巡り、その下位は無文である。また、変形工字文は沈線でというより沈線間が隆線化しているような感じである。このような状況は畑内遺跡Ⅴの資料の中でやはり壺に見られている（図152の157等）。器形的にはＡに属する可能性がある。112は有文壺の頸部である。頸部の無文帯の下位に変形工字文を施文している。113は無頸壺である。畑内遺跡では初の出土である。口縁部は無文であり、その下位に変形工字文完結型が施文され、無文帯を挟んで３本の平行沈線が施文されるあたりで体部が屈曲する。器形的にはＢに近い。体部下半はＬＲが横位に回転施文されており、口縁直下のくびれ部に２個１対の貫通孔があけられている。蓋とのセットが想定できる資料である。

Ⅸ類　遠賀川式系土器（116～129）

甕と壺の２器種に認められた。全体としての特徴は、１、胎土に砂粒を多く含み、器表面に浮き出た砂粒を中心に放射状のひび割れが観察される（例外あり）。２、全体的に浅燈色から灰色を帯びた色調のものが多い（例外もある）。刷毛目やナデなどの在地系土器にみられない器面調整が観察されるもの、等がある。

A　甕（126～129）

126・127は甕の口縁部である。口唇部には斜め方向の刻みを持つ。頸部にはくびれを持ち、２～３条の平行沈線が施文される。126の体部には縄文が施文され、127には刷毛目がみられる。口縁部はナデ調整である。128・129は甕の胴部破片である。128は頸部直下の破片であるが、頸部には平行沈線間に木目列点文が施文される。列点の底部には工具の木目が明瞭に残っている（残らない場合はただの列点文と呼称する）。胴部には刷毛目がみられる。128は胴部破片である。表面に刷毛目が見られる。

B　壺（116～125）

116・117は推定復元である。頸部にくびれを持ち、体部はそろばん玉状の形状である。
最大径は体部中位であり、最大径の屈曲と頸部のくびれの中間あたりに３条の平行沈線が施文される。平行沈線の断面形は三角形である。117は器形は遠賀川系であるが、胎土への砂粒の混入が外よりかなり少ないものである。口縁部は強く外反し、頸部のくびれは“く”の字に近いものである。119・

120は口縁部破片である。119の頸部には平行沈線間に木目列点文が施文される。口縁部表面の調整はナデ調整である。120に頸部には平行沈線間に列点文が施文される。121・122は頸部から肩部への破片である。121には頸部に平行沈線、122は平行沈線間に刻みに近い弱い列点文がそれぞれ施文される。123・124は体部上半の破片である。3条から4条の平行沈線が施文されているが、位置的には116などと同様な位置に施文されているのだろう。123の平行沈線の上方には・U字状の沈線が2個並んで施文されている。また、平行沈線間には細かい刷毛目調整がみられる。125は壺とも甕とも取れる資料である。頸部のくびれに2本の平行沈線が施文されている。

X類　その他（114・115）

114は蓋である。台形状の器形をしており、体部には平行沈線、天井部には同心円上の沈線が施文される。貫通孔は確認されなかった。115は器形不明の破片である。130・131はミニチュア土器である。いずれも器形は壺のようである。

まとめ

図133に畑内遺跡Ⅳ・Ⅴ・今回報告分の弥生時代前期の遺物の出土グリッドとこれまでに報告された弥生時代前期の竪穴住居跡を示した。なお、畑内遺跡Ⅳの遺物に関しては観察表に載っているもののみの分布図となっている。

遺物の分布は第53・54号竪穴住居跡の周辺とC捨場周辺の2箇所に分布していることがわかる。また、台地上には弥生前期の竪穴住居跡が、3軒発見されているが、その周辺の遺構からも同時期の遺物が出土している。住居跡に関しては、出土遺物からはっきりと時期決定ができるものは、第9号竪穴住居跡と第54号竪穴住居跡である。両住居跡ともにいわゆる砂沢式よりもやや新しい特徴を持った遺物が出土している。東北南部の編年でいえば山王Ⅲ層式に並行しそうである。他の住居跡に関しては時期決定の決め手になるものが少ないが、第53号竪穴住居跡周辺から出土している遺物などを見る限り、砂沢式よりもやや新しい、青木畑式に並行すると考えられる遺物が多く出土していることなどから、青木畑式の時期かそれより以前の竪穴住居跡と考えられる。第7号、第8号竪穴住居跡についても深鉢などにいわゆる砂沢式より新しそうな雰囲気がみられるが、詳細な時期は判然としない。C捨場付近の遺物についてはそのほとんどが、いわゆる砂沢式に並行するものと考えられ、その中に青木畑式に並行すると思われるものが若干混在している状況である。したがって、各遺構、捨場には若干の時間差があることがわかる。各遺構、捨場関係については、今回は踏み込むことができなったが、今後もう1度出土状況等から考えられることを整理し、まとめができればと考える。

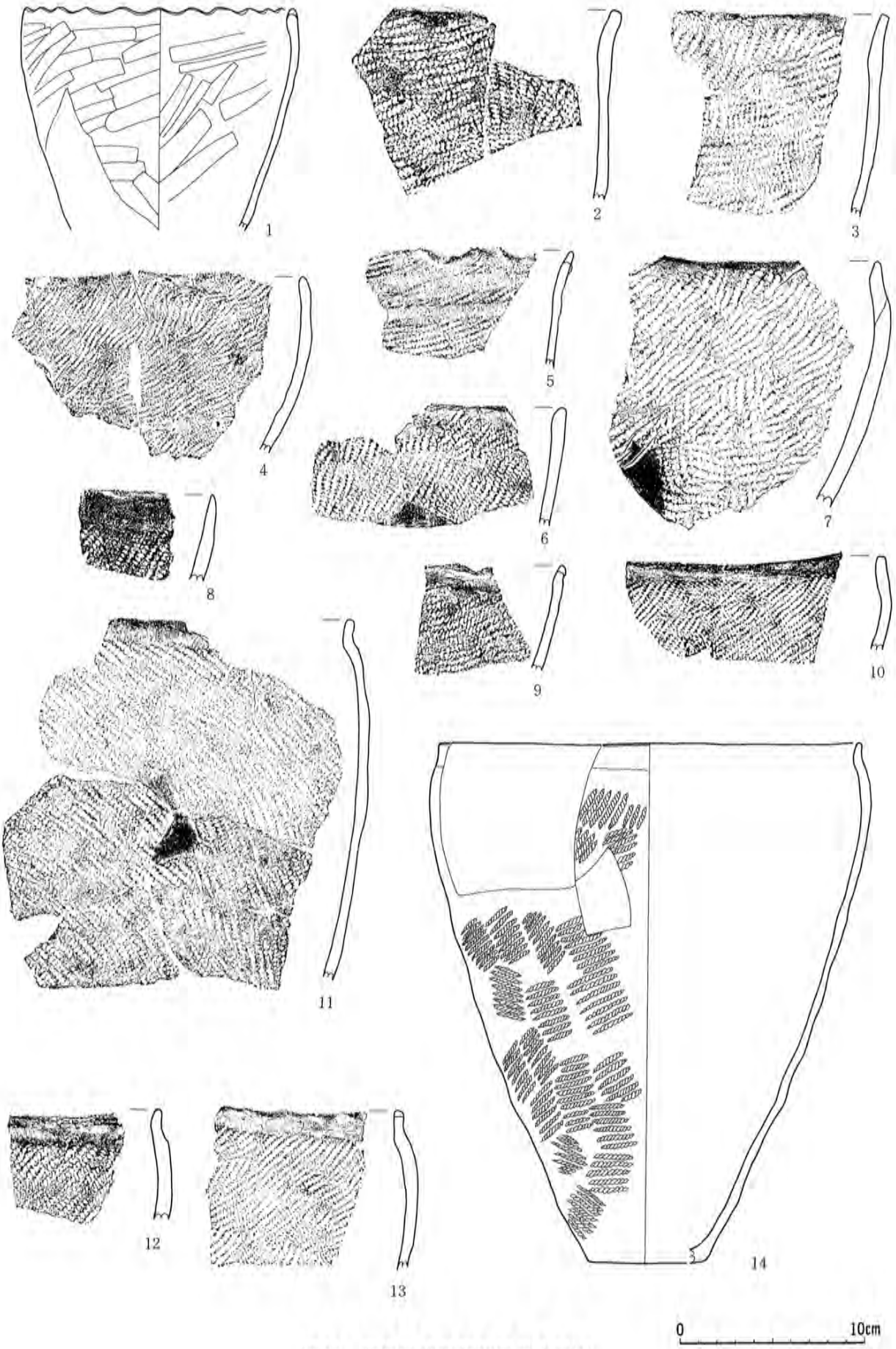


図77　弥生時代前期初頭の土器(1)

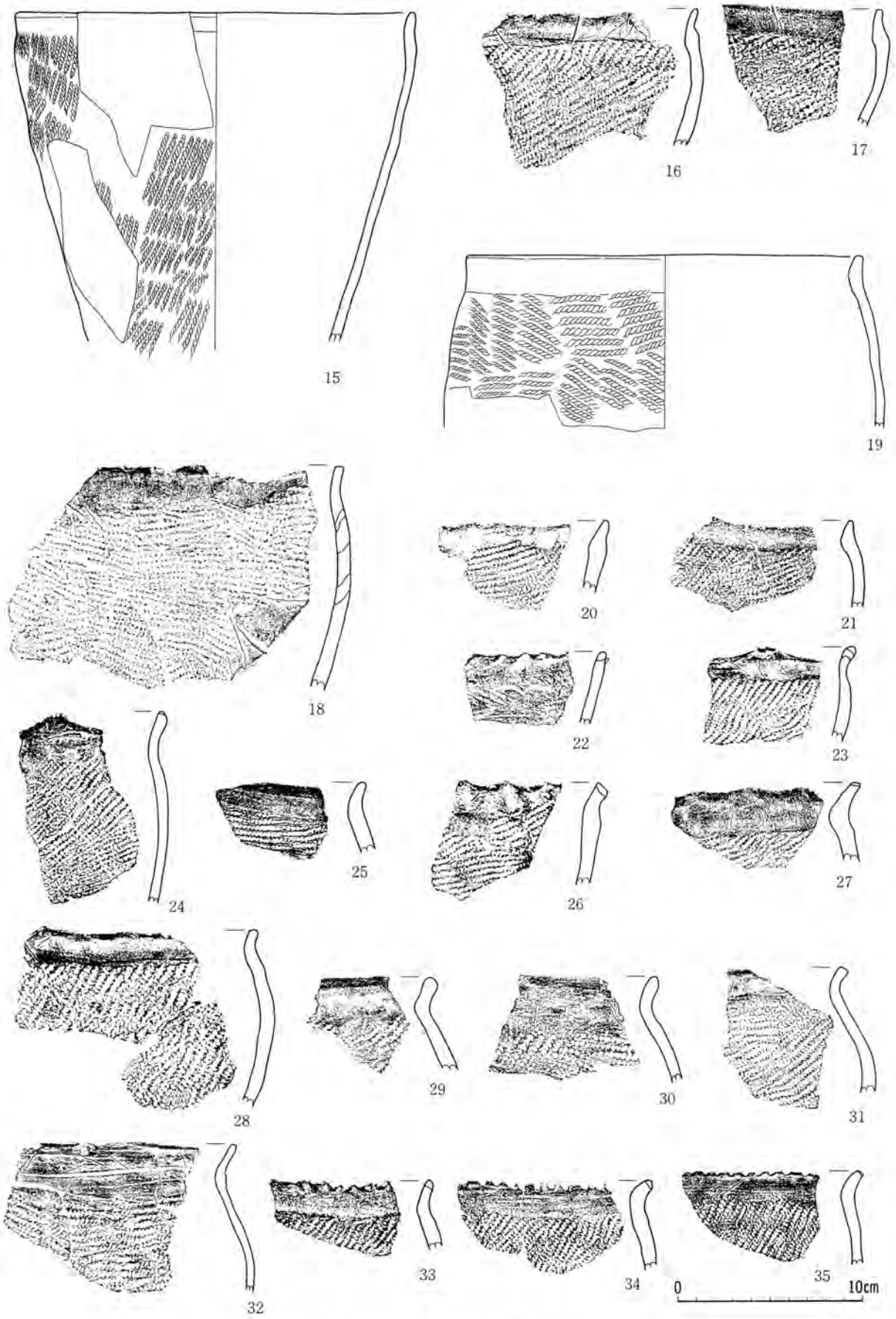


図78　弥生時代前期初頭の土器(2)

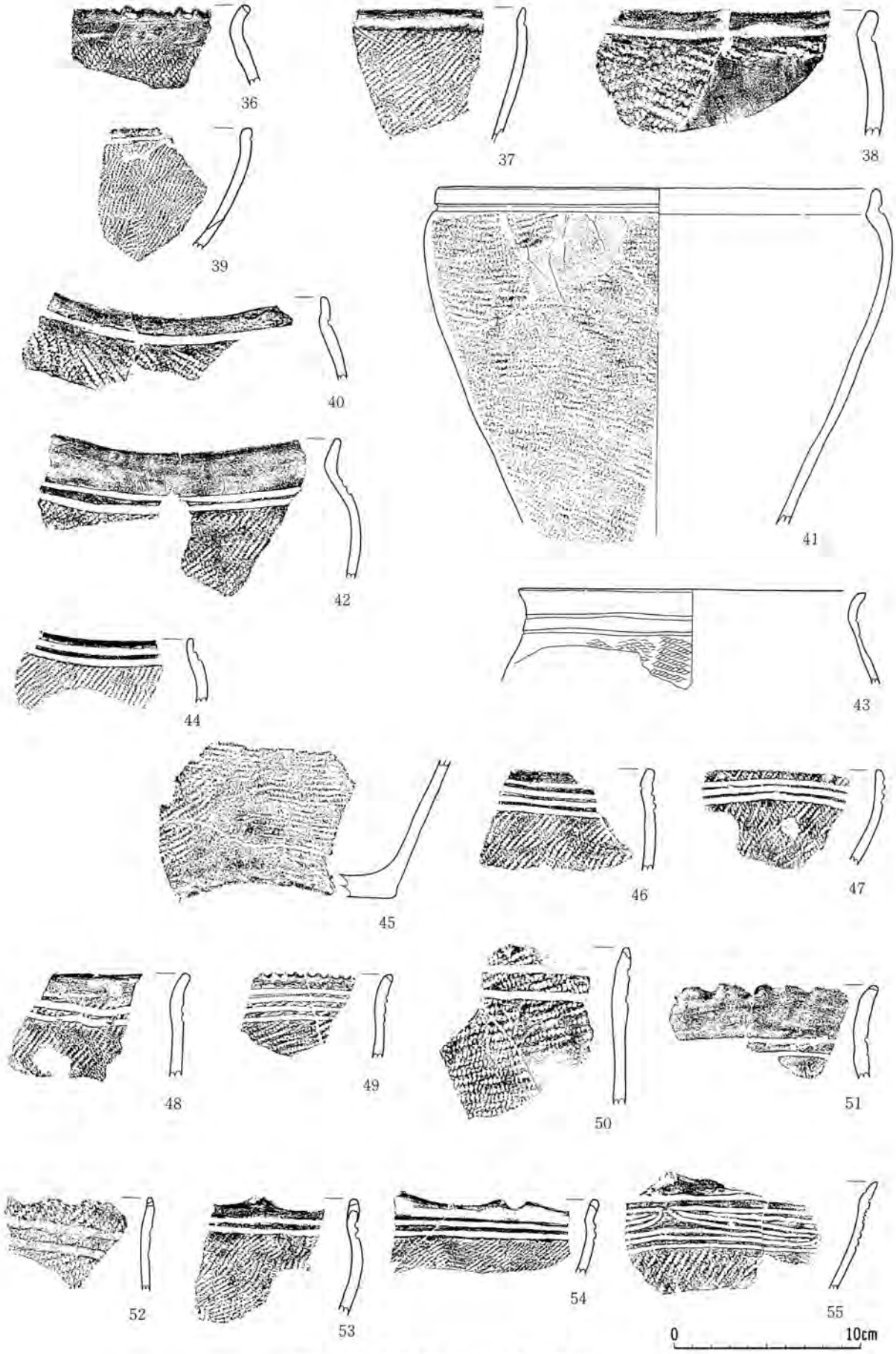


図79　弥生時代前期初頭の土器(3)

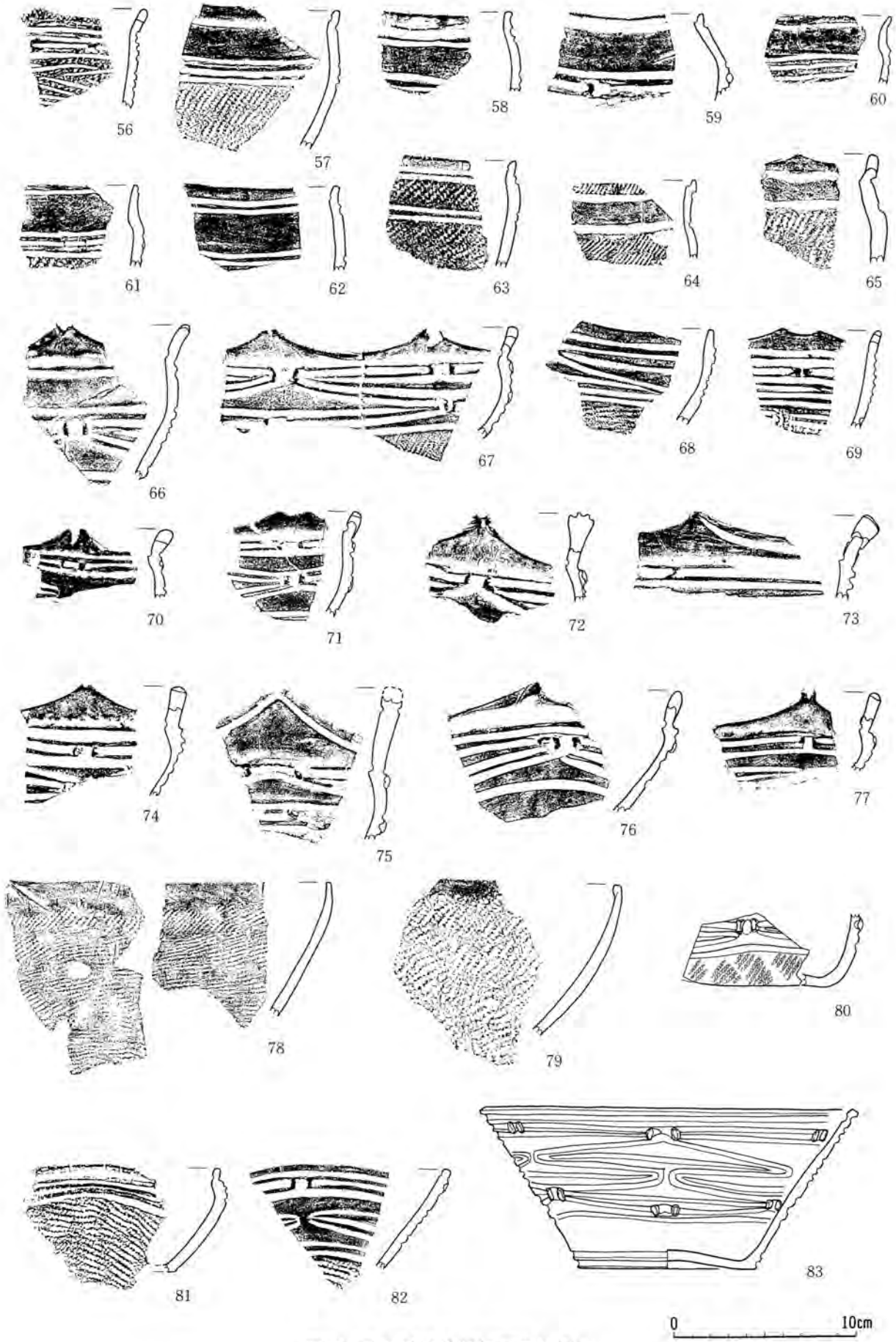


図80　弥生時代前期初頭の土器(4)

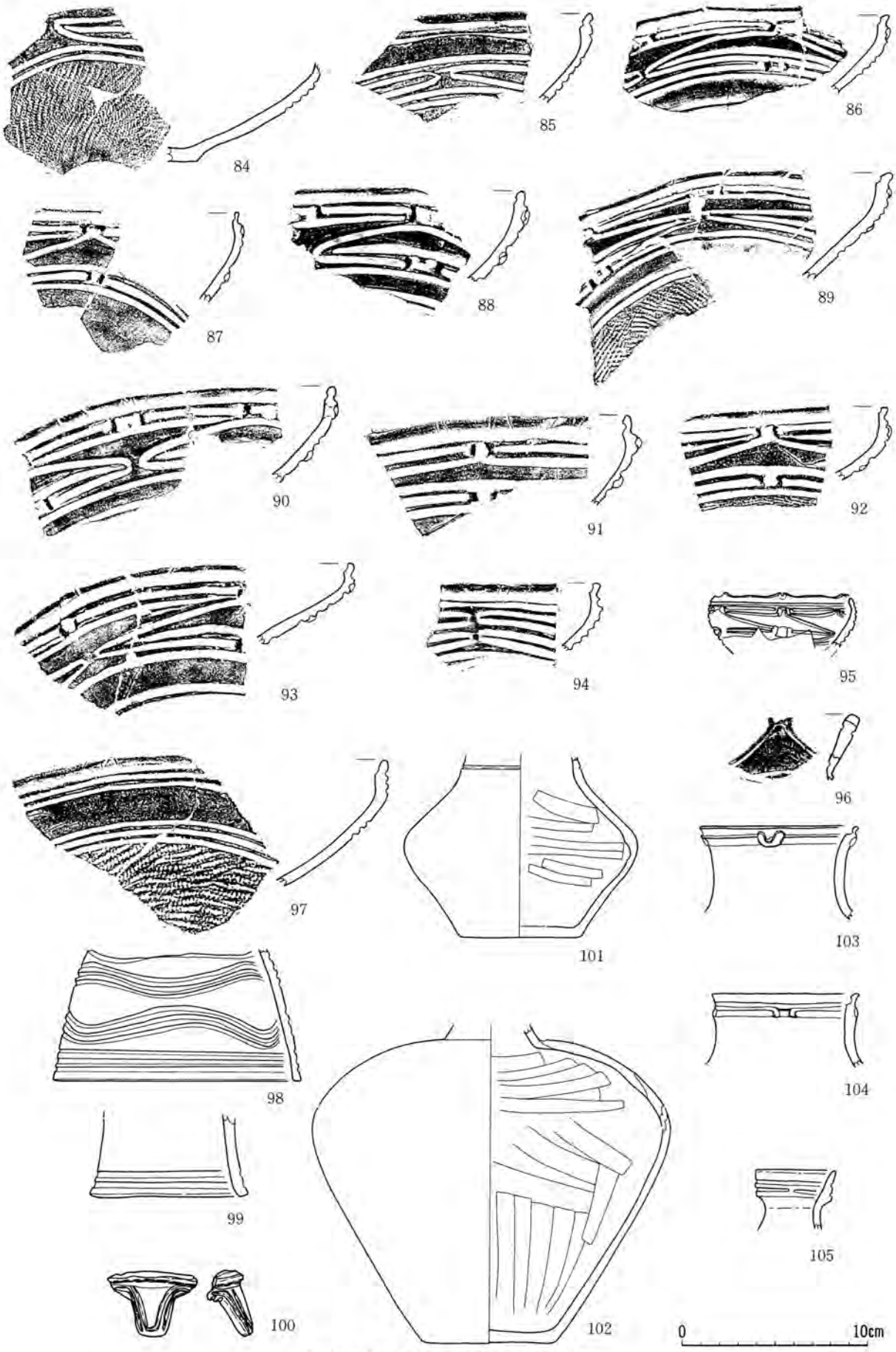


図81　弥生時代前期初頭の土器(5)

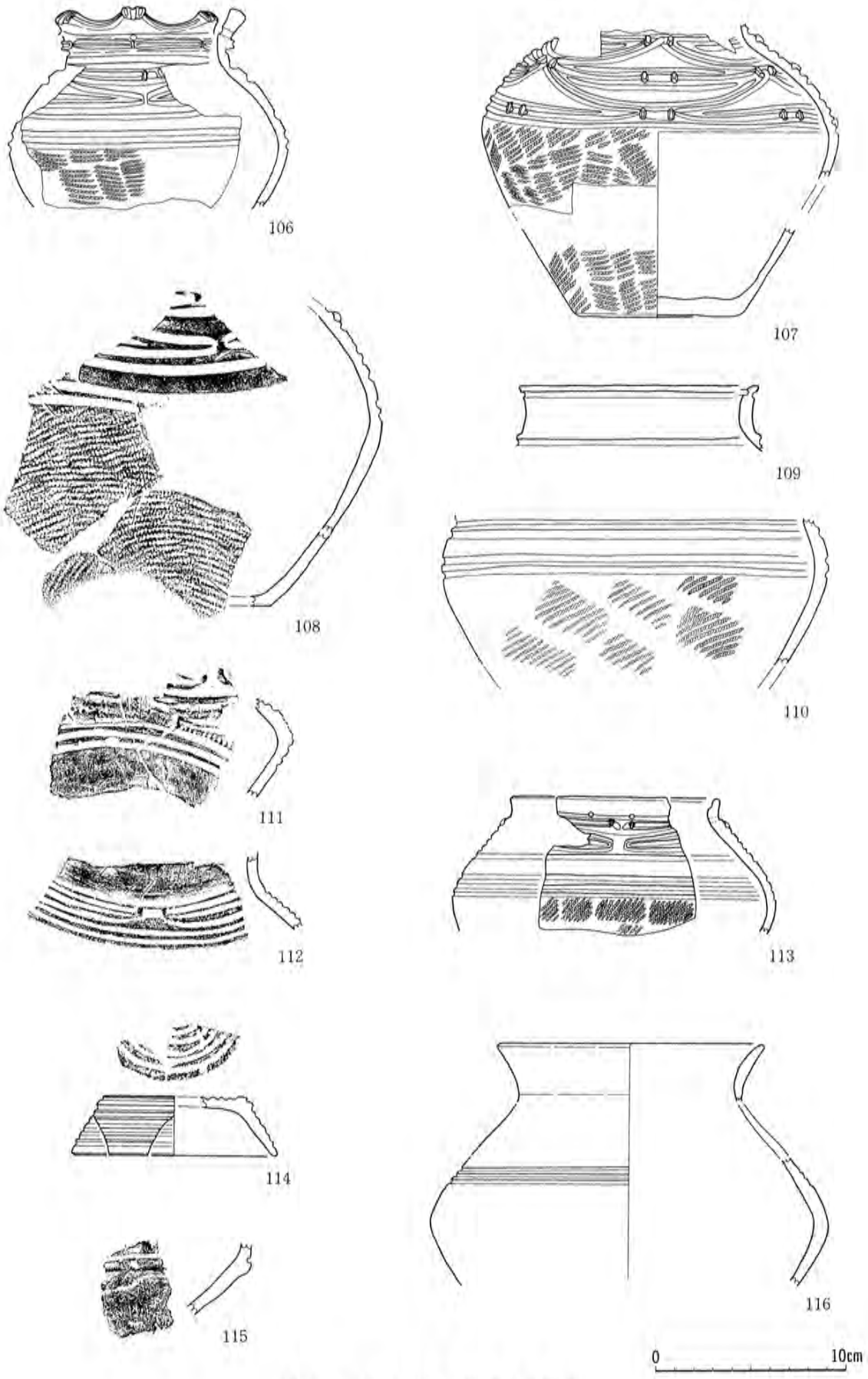


図82　弥生時代前期初頭の土器(6)

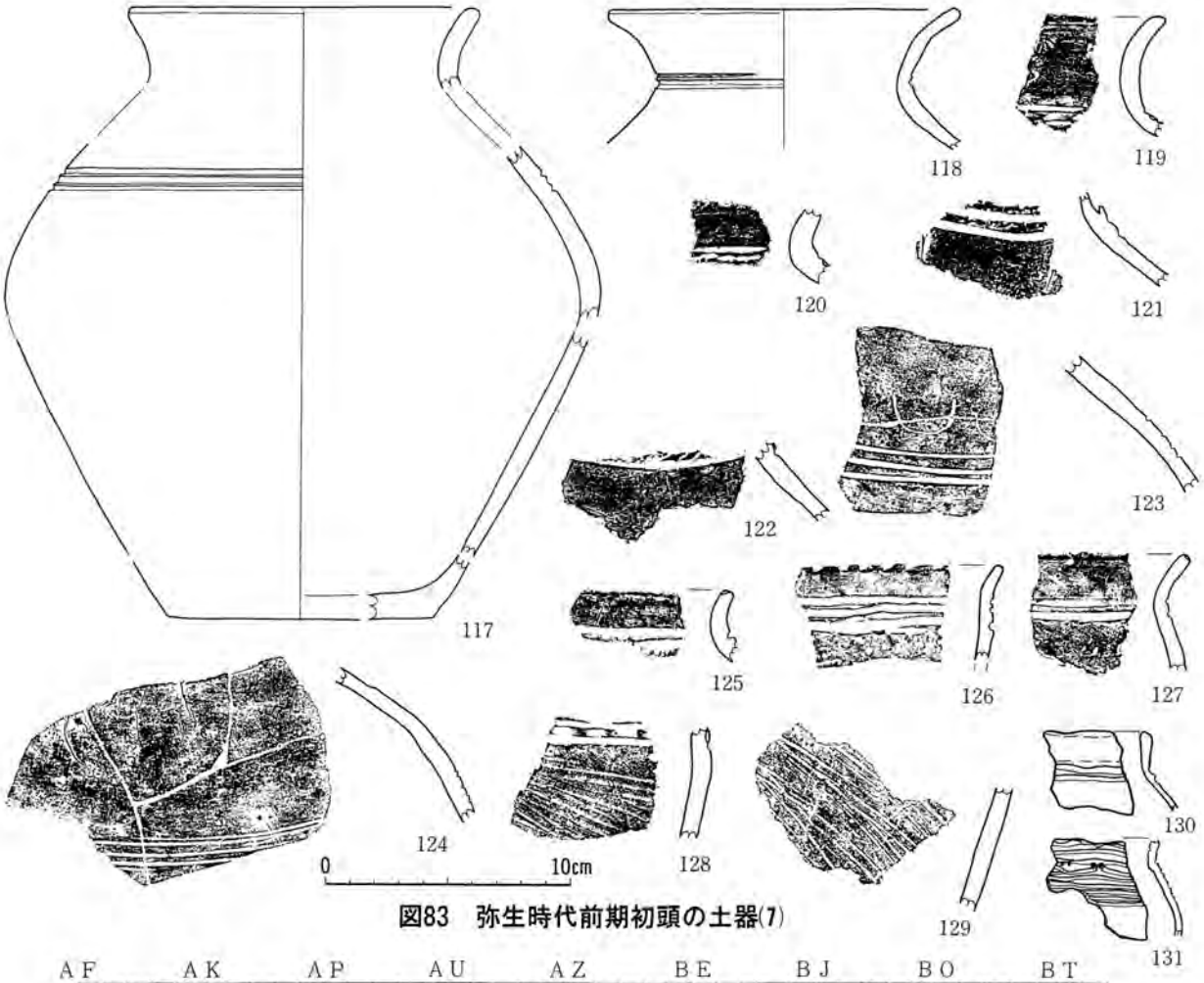


図83　弥生時代前期初頭の土器(7)

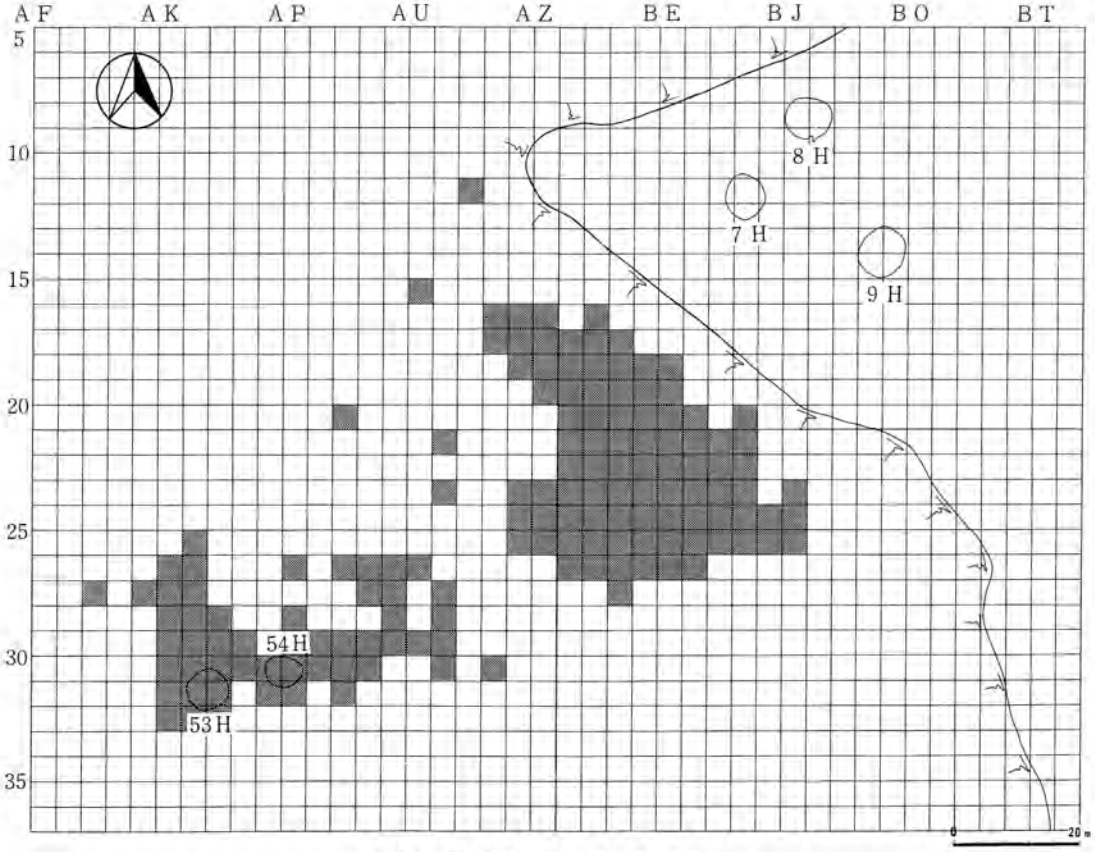


図84　弥生前期遺物出土状況図

2　弥生時代後期以降の土器

天王山式系土器

壺　2点確認された。1は壺の体部破片と思われる。破片中央に平行沈線が横走し、その上下に平行沈線で鋸歯状の文様が施文されている。上位の鋸歯文間には連弧文様の文様が施文されている。2も同様の文様構成であるが、連弧文状の文様はない。上位の平行沈線より上方に赤彩が確認される。

甕　少なくとも7個体確認できた。3と4、5～7はそれぞれ同一個体である。3は口縁部が波状をなしている。附加条の原体を押圧し、菱形の文様を表現している。その下位には沈線状の凹線が一条巡り、さらに下位には特殊撚り糸文が横走して文様を区画している。区画の下位には特殊撚り糸文が縦走しており、以下この横と縦の文様パターンが底部まで続くと思われる。器形は胴部からやや外反しながら口縁部付近で若干内湾し立ち上がっている。口唇部は先細りである。5は全面に特殊撚り糸文を縦位に施文している。器形は頸部が“く”の字状に屈曲し胴部最大径が器体の中位からやや下のあたりにくると思われる。口縁部には小さな山形突起がみられ、その左右には指で押さえたへこみが見られる。8は折り返し口縁を持つ。口縁には特殊撚り糸文が横位に施文される。9は底部破片である。特殊撚り糸文が横位に施文されている。他の破片に比べ縄文はしっかりとしている。その上位にはおそらく特殊撚り糸文が縦位に施文されていると考えられる。10・11・15は口縁部に交互刺突文が施文される甕である。10は口縁部下位が無文であり、11は特殊撚り糸文が施文される。15は完形に近い個体である。残念ながら底部とその上部が接合しなかったが、同一個体であることは間違いないと思われるので敢えて図上復元を試みた。口縁は概ね平縁であるが、その下位に施文される交互刺突文は4単位の波状をなしている。刺突の方向は斜め下と斜め上からであり、結果的に見た目がやや隆線状になっている。口縁直下と胴部最大径部・底部最下端部には特殊撚り糸文が帯状に施文され、文様区画体の役割をしている。その間は斜め方向に特殊撚り糸文が施文されている。12と13は壺か甕か判断不可能な破片である。両者ともに交互刺突文が施文されている。これらの土器は5～7の個体が黒褐色を呈するのに対し概ね燈色系の明るい色調を示している。胎土は精良であるが焼成はやや軟質な感じである。これらの土器はAZ-19付近、BF-22付近のおおよそ2箇所にまとまっている。

後北Ｃ２・Ｄ式土器

1点のみ確認した。ＢＦ－21グリッドからの出土である。口縁部直下の小破片である。口縁部は波状口縁であると考えられ、口縁に沿うように刻目貼付帯が1条巡っている。その下位には貼付文に沿うように刺突が加えられる。また、貼付の端部からは上下方向に微隆線が延びている。破片左側の一部には無線帯状文が施文される。縄文は0段多条のＲＬと思われる。色調は表面及び裏面が浅黄燈色であり、内面は褐灰色である。胎土には砂粒を若干含み全体に硬質な感じである。

時期不明の破片・土師器

18は口縁部が平坦であり、口唇直下に無節縄文の斜め押圧・口縁部には撚り糸を用いた単軸絡条体第1類が施文される。17は注口土器の注口部である。16は土師器である。4点出土しており、1点を図示した。頸部～胴部まで縦から斜め方向のケズリによって器面を調整している。内面はヘラナデによる調整が内面上半部は横位に、下部付近では縦位に施されている。器形・調整などから平安時代のものと考えられるが、定かではない。

図139に、過去に報告された天王山式系土器と後北式土器を集成した。

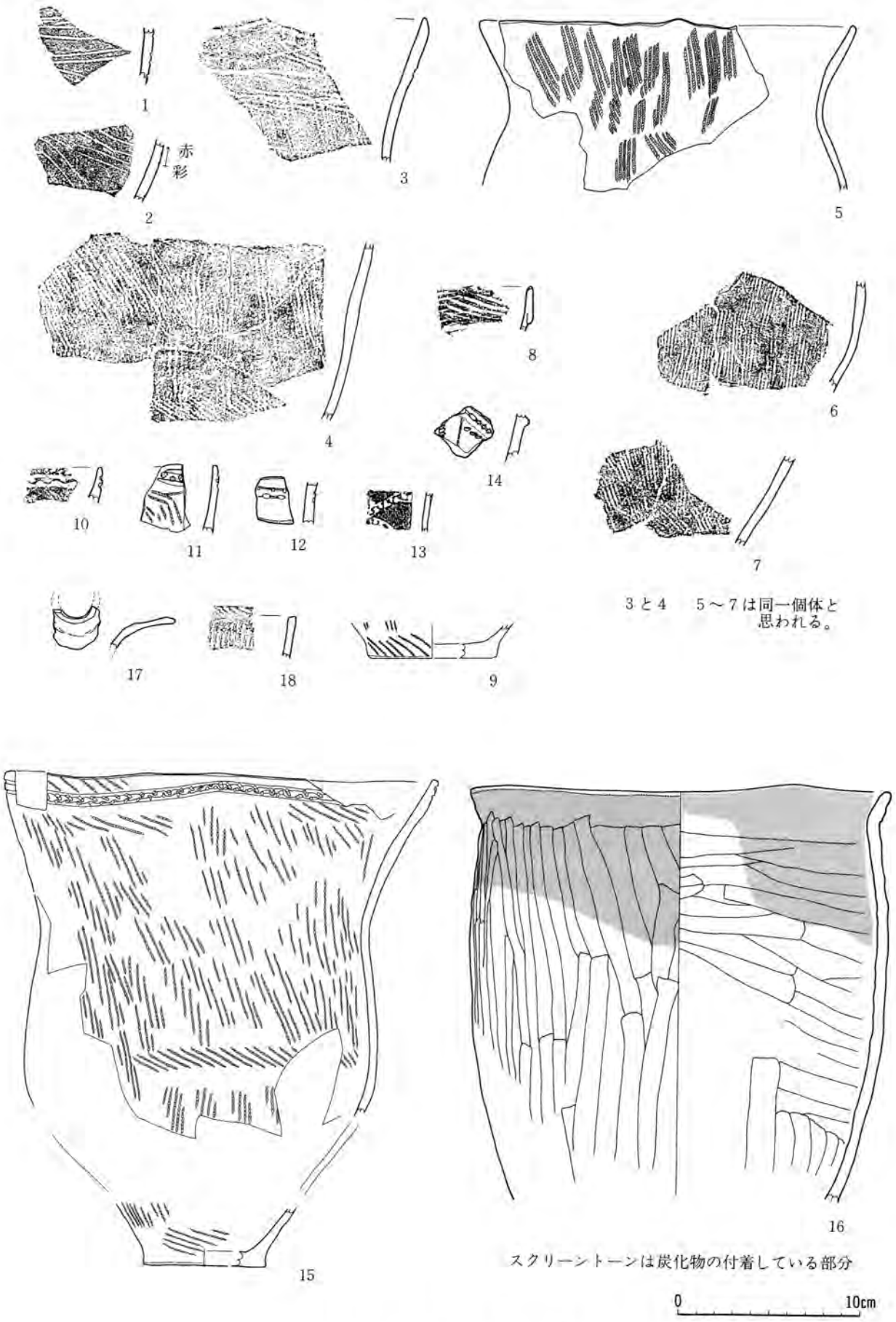
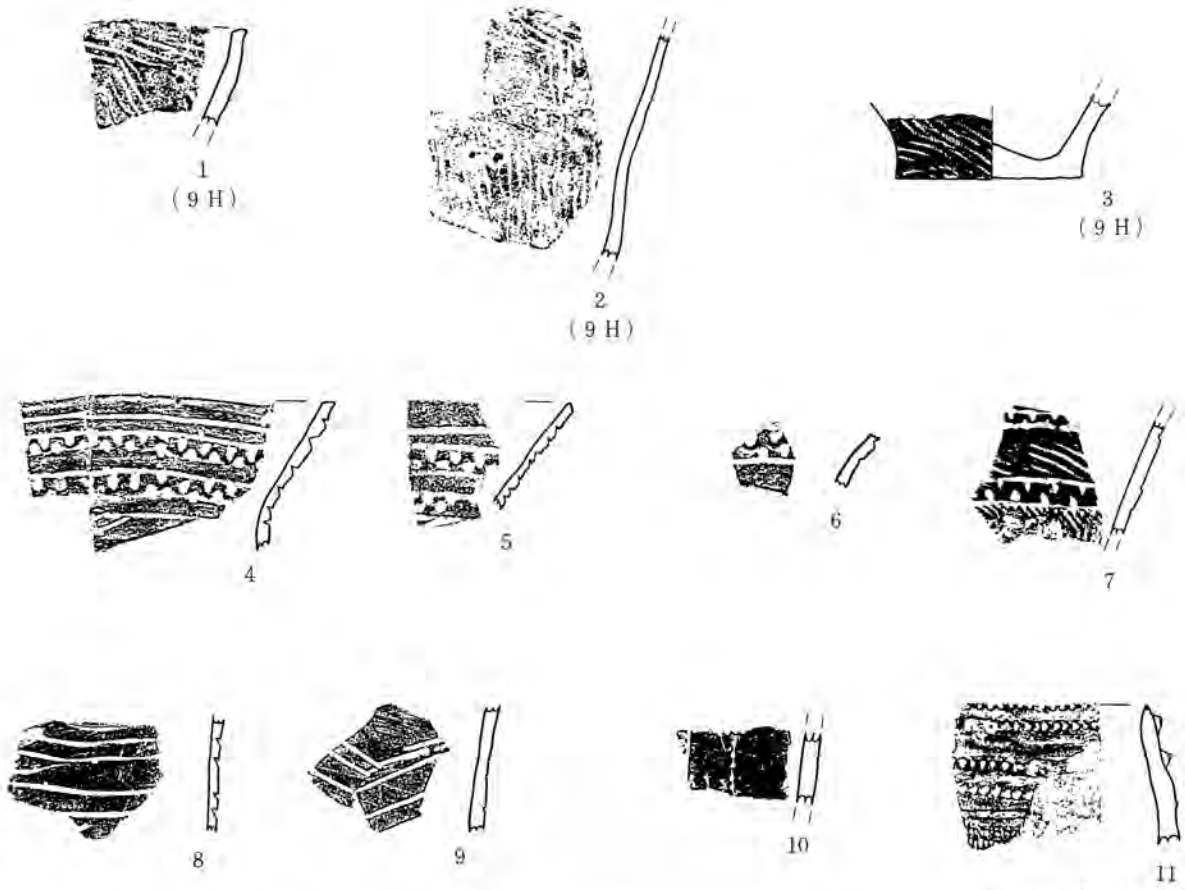


図85　弥生時代後期以降の土器



4～6は遺構外出土

図86　畑内遺跡出土の天王山式系・後北式土器集成図

天王山式系土器はこれまでに9点報告されている。すべて破片資料であるが、器種は甕のみが確認されている。特殊撚り糸文を全面に施文すると思われるもの、（1・2）交互刺突文が施文されているもの、沈線により文様が構成されるもの等があり、内容としてはC捨場出土のものとあまり差はない。出土地点は北側台地上の第9号竪穴住居跡と第7号住居跡覆土から3点、残りは遺跡西側の低地付近（AT－27グリッド付近）にまとまっている。また、第9号竪穴住居跡からは後北式土器の破片も出土している。後北式土器はこれまでに2点が報告されている。11はE捨て場付近からの出土である。

このように畑内遺跡では断片的ではあるが、弥生時代後期の人々の痕跡が見られる。個々の遺物に関しての細かい時期などはここでは触れないが、天王山式系土器と後北式土器が同一の遺跡、しかもまとまった場所から出土しているということは厳密な共伴関係とまではいかないが、ある程度注意しなければならない現象であると考えられる。

第5節　C捨場出土石器

C捨て場からは、約2000点の石器類が出土した。出土した石器はほとんどが縄文時代前期～中期初頭のものであると思われるが、層位的な確証はないため、ここでは他の時代のものも一括して分類・記述することとする。

1　剥片石器

剥片石器・礫石器とも、まず器種ごとに大きく分類し、その次に主に二次加工の種類によって細分を行った。

二次加工の種類について

二次加工の種類については、平成11年度に剥片石器の実測を委託した株式会社アルカの角張淳一氏の分類法に基づく。それによると、剥離面はハンマーの種類・加撃方法の２項目により分類される。ハンマーの種類とはすなわち加撃対象より堅い（Ｈａｒｄ＝Ｈ）か柔らかい（Ｓｏｆｔ＝Ｓ）かを表し、加撃方法とは、直接打撃（Ｄｉｒｅｃｔ＝Ｄ）、間接打撃（Ｉｎｄｉｒｅｃｔ＝Ｉ）、押圧剥離（Ｐｒｅｓｓｕｒｅ＝Ｐ）の３者を表す。ほとんどの剥離はこれらハンマーと加撃法の２つの組み合わせによって表現されるものである。押圧剥離の中には手で対象を固定して押圧剥離を行うものと（ｈａｎｄ＝Ｈ）、何らかの器具によって対象を固定して押圧剥離を行うもの（ｍｅｃｈａｎｉｃａｌ＝Ｍ）とが存在する）。これらの剥離が素材剥片にどのように施されるかによって石器の形が決定される。

なお、文章及び観察表における二次加工の種類の記述についてはハンマーの種類と加撃方の頭文字を組み合わせて記述している（例えば、堅いハンマーで、器具により対象物を固定し、押圧剥離を行っているものはＨＭＰと記述する）。また、剥離方向については両面に二次加工が施されているものに対しては「両面」、主要剥離面側、または図中の裏面側から剥離が施されているものが「正」、その反対が「反」、正反両方のものは「正＋反」と記述している。

2　分類

上記のような観点から出土石器を以下のように分類した。なお、石鏃と石匙の分類については株式会社アルカの池谷勝典氏によるものを基にしていることをお断りしておく。

①石鏃　195点出土し、176点図示した。形態と二次加工の種類によって以下のように細分された。

Ａ　群　有茎鏃（１～36）　基部になかごを持つ石鏃である。３つの形態が認められた。

１　かえしが発達するもの（10・16・18・19・22・24・29～31）

２　かえしのあまり発達しないもの。（１～５・７・８・11～15・17・20・21・25・28・32～35）

３　尖基に近いが、なかごを明確に持つもの

各形態ともに製作手順としてはまず基部を先に作出し、その後に尖頭部を整形している。二次加工の種類はＨＭＰ（１～28）・ＳＭＰ（29～36）の２種類であるが、８割はＨＭＰである。二次加工がＳＭＰであるものは29や32などのように形態的に異質なものもある。二次加工はほぼ両面に施されるが、素材剥片の剥離面を残すものも少なくない。側面の稜線はギザギザに近くなるものがあり、剥離面の凹凸と相まって全体的に荒っぽい感じがしている。

また、器厚も10㎜に届くものがあるなど全体的にゴロッとした感じがする。長さは24㎜～49㎜と幅があるが、大中小の３つくらいのグループに分かれそうである。21のように基部にアスファルトが付着しているものや、９のように錐として転用しているために先端部が摩耗しているものもある。

ＡＢ群　尖基鏃１（37～43）　明確ななかごを持たず、基部が尖っているもので、二次加工がＨＭＰであるもの。

本群は二次加工の種類がＨＭＰである。器厚が厚い、素材剥離面を多く残す。などのＡ群によく見られる諸特徴と、形態が尖基であるというＢ群の諸特徴を併せ持っている。いうなればＡ群の剥片剥離技術でＢ群の形態をイメージして作られた石器であると考えられる。39などは二次加工が全周していないことから未製品とも考えられる。

Ｂ　群　基部形態が尖基・円基・平基のものを集めた。二次加工はＳＭＰがほとんどである。

Ｂ１群　基部形態が平基のものをまとめた。（126～162）二次加工の種類と形態等により以下のように細分された。

ａ類　長身の二等辺三角形の形態を持ち、二次加工の種類がＳＭＰであるもの。（127～142）

二次加工のＳＭＰは、非常に浅い角度で器体表面を薄く長く剝ぎ取るような剝離である。両側片に規則的に並んでおり、非常に整った印象を与えている。また、側面の稜線はほぼ中央を通っており、整形の対称性がうかがえる。器体表面には素材剥離面を一部に残すものが少なくない。製作の手順としては基部の平らな部分を先に整形しその後に両側縁から先端部へと整形していくようである。

ｂ類　正三角形に近いような形態で、二次加工の種類がＨＭＰであるもの。（126・143～145・147～149）

長身のものも含まれるが形態的には背の低い二等辺三角形または正三角形というところである。剥離が器体中央部に届くものはそう多くはなく、そのため器表面に素材剥離面を残すものが多い。また、剥離の角度もａ類と比べると、やや大きいため、全体的に器厚が厚い。

ｃ類　基部形態が円基に近いもので、二次加工の種類がＳＭＰであるもの。（150～156）

ｄ類　基部形態は概ね平基であるが、二次加工がＨＭＰであるもの。

157・158・161は全体にゴロッとした感じである。159・160・162はＨＭＰによる二次加工にしては薄く、丁寧に整形されている。

Ｂ２群　基部形態が尖基～円基のものをまとめた。以下のように細分された。

ａ類　基部形態が尖基のもの、二次加工はほとんどがＳＭＰである。（44～52）

形態的には基部が尖り、長身なものが多い。側面の稜線は側面中央近くを通るものが多く、断面形はほぼ菱形に近い。二次加工については後述するＢ２群ｃと比べるとやや粗雑な感じがする。厚さは非常に薄く、３～４㎜のものが多い。

ｂ類　基部形態が円基のもので、小型のものをまとめた。（53～60）

二次加工はＳＭＰ・ＨＭＰ・ＨＨＰ・ＳＨＰなど複数の種類がみられる。二次加工の種類による形態等の差異ははっきりしない。また、二次加工の種類が同じであっても、

54と55のように、違った形をしているものもあれば、54と56のように違う種類の二次加工でも似たような形をしているものもある。二次加工の種類でいうならば、同じ押圧剥離でも対象を手で固定して二次加工を施しているものが多く、（56～59）それらはある程度の形態的な類似性を持つものである。

c類　基部形態が尖基または円基に近い尖基のものをまとめた。（61～89）

器厚が薄く、側面のラインに凹凸が少ない、非常に整った形をした1群である。二次加工は89を除きすべてＳＭＰである。剥離の角度は非常に浅く、器体表面を薄く長く剥ぎ取るような剥離が中央部に向かって規則的に並ぶように観察される。したがって器体表面に素材剥離面を残すものは非常に少ない。正面形状は最大幅が器体中央部よりやや下にくるものが多く、概ね形である。先端部は非常に丁寧に整形されている。基部は先端部に比べやや丸く作られている。61～81はやや幅のある1群であり、82～87は長さに対して幅の狭い1群である。なお、88は幅の広いものの未製品の欠損品と考えられ、89に関してはｂ類に入る可能性が高い。

ＢＣ群　基部形態が弱凹基形のもの。（96～125）

弱凹基形とは、形態的に凹基と平基の中間という意味である。ほとんどが最大幅より長さの値の方が大きい、長身の二等辺三角形を呈する。二次加工はほとんどがＳＭＰであり、Ｂ2群やＢ1群にみられるような、器体表面を薄く長く剥ぎ取るような規則的な剥離が観察される。その一方で、器体表面に素材剥離面を残すものも存在している。製作工程はＢ1類にみられるように基部を作り出した後に側縁と先端部を整形していると思われる。

Ｃ　群　基部形態が凹基のものをまとめた。（90～95・101）

二次加工はすべてＳＭＰである。小型のものが多く、概ね20㎜～25㎜の間に収まる。

90は黒曜石製、91・94・95は珪質頁岩製、92と93はチャート製と石材が多様である。90の黒曜石は透明度に富み、内部には白い混入物が層状に混入する。畑内遺跡で出土した黒曜石については、これまで現産地同定等を全く行っていなかった。今回も行っていないが、次回以降の報告でまとめて報告する予定である。

Ｄ　群　その他の石鏃をまとめた。（163～179）

未製品等を含むが、二次加工の種類により以下のように細分した。

a　二次加工の種類がＳＭＰのもの（163・166・175）

3点ともに未製品の可能性がある。163は素材剥離面を大きく残し、正面左側縁側が未加工である。166は下端（先端部か基部かどちらか）が欠損したところを再加工して製品にしようとしているが未完である。175は先端部を途中まで整形しているものの、側辺を整形する途中に欠損したものと思われる。

b　二次加工の種類がＨＭＰのもの（167～174・177）

尖基または円基鏃の未製品が多い。168～172は器厚が厚めである。両側縁の整形は進んでいるものの先端部の整形は今一歩というところである。未製品ではあるが、これから製品になるかというとそうではなく、未完成のまま捨てられたという感じである。

173・174・177は上記のものと違い、全体的に器厚が薄く整った形態をしている。3点と

も欠損品である。

c　二次加工の種類がＳＨＰのもの（164・165）

２点とも似未製品と考えられる。息の短い小さな剥離が周縁部に施されている。先端部の作りもあまり進んでいない。

d　二次加工の種類がＨＨＰのもの（178・179）

やや基部の作りがしっかりした、有茎に近い石鏃である。

e　二次加工の種類がＨＩのもの（176）

基部周辺の加工は表側はやや急角度、裏側は平坦な加工である。側縁はＨＩ似寄りやや鋸歯状のラインを呈する。側縁の剥離方向はおおかた正方向である。石鏃の未製品かどうかは不明である。

②石槍　４点の出土である。出土点数が少ないため個別に記述することにする。

198は上下両端が欠損している。二次加工はＳＩで大まかな成形をした後にＳＰにより周縁部を整形している。非常に浅い角度の、整った剥離が、器面全体を覆っている。199はＳＭＰで両面を整形しているが、一部厚みが取れないところに関してはＨＭＰによる二次加工がなされている。裏面に素材剥片の剥離面を残す。200はＨＭＰにより両面が整形されている。欠損品であり基部のみの残存である。220は木葉形の石槍の完形品である。二次加工の種類はＳＩであり、全体に浅い角度の剥離が器体中央部に及んでいる。剥離の角度は基部側の方がやや急角度であり、尖頭部と基部の作り分けがなされていたと考えられる。なお、基部付近は黒色に変化した部分があり、着柄痕である可能性がある。

③石錐　（180～197）20点の出土である。内18点を図示した。形状により以下のように分類した。

A　両面加工で棒状のもの。（180～183・192）

B　石鏃に似た形状をしているもの。（184～187）

C　剥片の端部を錐状に加工しているもの。（188～195）

D　特殊な形のもの（196・197）

④石匙　（201・202・204～285）点の出土である。図128－５の様な考えに基づいて、縦型と横型に分類した。（アルカの池谷氏の分類法に基づく）

A　縦型　石器の長軸に対して、つまみ部が45度の範囲に収まって付くもの（201・202・204～250）二次加工の施される部位等により以下のように細分される。

1　二次加工が両面に及ぶもの。形状により２種に分類される。

a　先端部が尖り、槍状になっているもの。（201・202・204・205）

201・204・205はやや荒い作りである。つまみ部については間接打撃を用いて抉りを入れている。201については刃部の二次加工にＳＩを用い、側縁を鋸歯状に整形している。

202は器厚が非常に薄く、二次加工も整った、優品である。刃部の二次加工には浅い角度のＳＭＰが使用されており、つまみ部はＳＰにより抉りを入れている。刃部の剥離面はほぼ等間隔に並んでおり、先端部も入念に整形されている。

b　ａ以外のもの（206～208・212）

刃部の二次加工が両面に及んでいるものである、長軸状につまみ部を作るものと、先端部

が“し”の字状に曲がるものとがある。二次加工はつまみ部に間接打撃が使用され、刃部にはＨＭＰが使用されている。208は黒曜石製である。

2　主に背面側に二次加工により刃部が形成されるもの。（209～211・213～250）つまみの付く位置により以下のように分類される。

a　つまみの付く位置が概ね長軸状にあるもの。（209～211・213～232）

二次加工の種類は刃部にＨＭＰが多く、つまみ部に間接打撃による抉り（ＨＩ）が多い。製作方法としては、まず刃部を整形し、最後につまみ部に抉りを入れるというものである。素材剥片は縦長の剥片が多く、剥離方向を長軸にして利用しているものが多い。素材剥片の特徴としてはバルブがあまり発達せず、主要剥離面の凹凸のあまりないものが多く、全体的に薄手な感じである。また、素材剥片の剥離方向を石器の長軸と直行するように利用しているものに関しては、ややバルブの発達するものが目立ち、打点周辺の高まりを入念に除去しているものがある。（220・230）また、主要剥離面側に光沢の見られるものもある。

b　つまみの付く位置が長軸からずれて斜めの位置にあるもの。（233～250）

二次加工の種類についてはａと同様である。素材剥片の用い方としては石器長軸に対して剥片の剥離方向がやや斜め、または横になるものが目立つ。

B　横型　（251～285）

石器の長軸に対してつまみが45度以上の位置に着いているものである。素材剥片は縦長のものと幅広あるいは横長の２種類であるが、縦長剥片を使用するものに関しては剥離方向と直行する位置につまみが着くものが多く、横長剥片を利用するものに関しては打点の位置につまみが着くものが多い。これは打点周辺の高まりを除去するねらいと、比較的うすい、剥片末端部を刃部に利用するねらいがあったものと思われる。二次加工の種類は刃部にＨＭＰが多く、つまみ部に間接打撃（ＨＩ）が多い。

C　その他のもの、欠損品と上記分類以外のものをまとめた。（281～285）

281と282は横型の欠損品であり、283・285はつまみ部を作り出しただけのものである。285は黒曜石製である。

⑤石箆　箆状の石器と掻器をまとめた。（286～296）

1　両面加工のもの（286～289）

いわゆる石箆である。刃部の断面形は両刃のもの（286・287）と、片刃のもの（288・289）がある。二次加工の種類は、両刃のものがＨＭＰ、片刃のものはＨＤとＨＰがある。

2　剥片の端部に平らまたは円形の刃部を急角度の剥離により作出しているもの。（290～296）石箆というより掻器というにふさわしいものである。

刃部には急角度な二次加工が施されている。二次加工の種類は様々である。先端部に刃こぼれ状の微細な剥離が見られるものも存在している。刃部への加工は正方向のものが多く、刃部の断面形は片刃である。

⑥二次加工剥片　（297～360）過去に発刊された畑内遺跡の報告書で不定形石器とされているものである。二次加工のある剥片石器、刃こぼれ等の使用痕跡のある剥片石器、剥片等がある。今回は93点図示した。大きく以下のように分類される。なお、詳細については観察表に記載する。

1　石匙・石箆や石槍の未製品・欠損品と考えられるもの。（297～307・353～358）

2　石鏃状の石器（308～315）

3　器体の一部に連続的な二次加工を施し、刃部を形成しているもの。（316～352）

4　刃こぼれ状の微細な剥離が見られるもの。（359・360）

⑦石核　確実なものは1点の出土である。（361）

打面転移を頻繁に繰り返し、様々な形状の剥片を剥ぎ取っているようである。裏面に礫面を大きく残している。

2　礫石器

⑧石斧

1　打製石斧　3点の出土であるが掲載したのは1点である。（362）

やや扁平な楕円礫を素材としている。二次加工は基部から側縁を中心に施されており。概ね平坦な剥離である。側面の稜線は器体ほぼ中央を通っている。器体及び刃部には明瞭な研磨痕が見られないが、風化のためとも考えられ、判然としない。あるいは局部磨製石斧の可能性もある。刃部には刃こぼれが認められる。

2　磨製石斧　主に研磨により器体を整形しているものである。（363～397）製作工程の差異より以下のように分類した。

a　擦り切り成形後、研磨整形するもの。（363～376）

全体形状のうかがえるものは2点のみであり、ほとんどが刃部のみまたは基部のみ残存している欠損品である。刃部の断面形状は両刃のもの（363・366・367）と片刃のもの（364・365・368）がある。器体の横断面は長方形の角が少し取れるものと、大幅に角の取れるものとがある。

b　敲打成形後、研磨により整形するもの。（377～381・385）

全体形状のうかがえるものは6点であり残りは破損品である。刃部の断面形状は両刃のもの（379・380・382・384）と片刃のもの（378・381・383）がある。横断面形は楕円形に近いものから楕円形の端部が角張るもの・長方形に近いものなどがある。

c　その他（aかbか判断しかねるもの）（382～384・386～397）

⑨半円状扁平打製石器　主として粘板岩・頁岩などの板状摂理により割れる石材を利用しており、全体の形状が半円状を呈しているもの。二次加工が施される部位等により以下のように分類した。

1　側面2に二次加工が施されるもの。（398～414）

側面2に施される二次加工は側面に対して垂直にハンマーを当てることにより、階段状の剥離になるものが多いように感じられる。それに対し、側面1の二次加工は正方向・反方向からやや急な角度で行われており、両側面の断面形状に若干の違いが生じている。おそらく側面2の加工については器体の保持等に関する、正面形を整えるための加工ととらえることができる。直、実測図中に範囲指定をしてあるところは、稜線がつぶれているなど、敲打の痕跡が見られる箇所である。

破損品は少なからず存在するが、その中に破断面にミガキに近い使用痕が見られるものがある。（412・413）このような特徴はすり石（本報告書の敲磨器4類1～3）によく見られ

る特徴である。

2　側面２に二次加工が施されないもの。（415～424）

側面１の二次加工に関しては１と同様である。側面２には原礫面を残すものが多い。

3　表面に擦痕がみられるもの（400・425～429）

形態や二次加工の施される位置は１類に相当するが、器面全体に研磨のあとが見られるものである。直、研磨の種類には２種類あり、器体表面に施されるものは比較的細かい研磨であり、器体側面に見られるものは、やや荒い研磨である。側面を観察すると、426に見られるような丸く、小さな剥離が連続してみられる。通常側面１に見られる様な剥離とは違う感じを受ける。また、側面１の刃部のどちらか片側には、剥離の稜線の摩滅が観察されるものがある。観察表には刃部片側にヌメリあり、と記載しておいたが、427の刃部正面側などに顕著である。使用に伴うものなのか、その他の要因が考えられるのか不明であるが、見た目には八戸市の櫛引遺跡より出土している、打製石斧の基部等にみられる「トロトロ」した感じににている（小山1999）。本遺跡のものは位置的に刃部と考えられるところに観察されるが、本類には、428のように両側縁に側面１に見られるような二次加工を施すものがあることや、側面２に見られる研磨痕が、器表面に見られるものと違うこと、等から、側面２に関しても何らかの形で使用してることが想定される。その際の使用法に関しても、通常の方法とは異なった使用法が想定できるが、今はまだ不明である。今後の課題としたい。

4　その他のもの（430～434）

430は両端に抉りが見られる。431は側面１に刃部を作出した痕跡はなく、逆に側面２側に見られる。また、正面形状は「鉈」のような形状をしており、先端部には抉りが見られる。432も欠損品であるが、431と同様の形状になるのかもしれない。

⑩敲磨器類　主として「擦る」「敲く」「磨く」などの行為による使用の痕跡がみられるもの。

1　凹み石　（435～451）

器体の表面に円形の凹みを有するものである。17点図示した。ほとんどのものが表裏両面に凹みを有しており、位置的にほぼ表裏対称の位置にある。凹みは単独であるものと、複数存在するものがある。凹みを観察すると、ほとんどのものが、ざらついた面で形成されており、この凹みが敲打によってできあがったものであることを連想させる。また、完璧にくぼんでおらず、ただざらついているものもあり、これらは使用の度合いの差ととることができよう。また、凹みの断面形はほとんどがすり鉢状に近い形状をしているが、中には445のように先端が細長く器体に食い込んでいるものもあり、この凹みを観察すると、他のものと違い、同心円状の擦痕がみられる。これは用途の違いと考えられ、この凹みの中で細長い棒のようなものを回転したことを想起させるものである。448の器表面には線刻？のような細かい溝がみられる。何を表しているのかは不明である。

2　たたき石

a　長軸端部に敲打痕跡が見られるもの。（452～457）

452・457は長軸両端の敲打痕が平坦面を持っている。敲打痕は凹み石などと比べるとより表面がつぶれており、対象物がより堅いものであることが考えられる。大きさも掌中に収まるく

らいの大きさであり、もしかすると石器作りのハンマーとして使用された可能性がある。

そのほかのものは前述のものに比べると、平坦面の荒れはそれほどでもない。対象物の違いのためであろうか。

b　側面に敲打痕跡が見られるもの。（459～463）

459は左右側面に剥離を伴う敲打痕がみられる。460は緑色細粒凝灰岩製であり、表面に擦り切りの痕跡がみられる。破断面は摂理面であり磨製石斧を製作する途中で欠損したものをたたき石として利用していると考えられる。461～463は側面の広い面に敲打痕を持つものであるが、462と463は敲打痕が側面を全周している。また敲打痕以外の表面は非常に滑らかであり、研磨されている可能性もある。

c　その他のもの。（458・467～469）

458・467・468は楕円礫の長軸上に剥離が施されるものである。長軸上に剥離が施されるのはどちらか片方の端部のみである。この剥離は礫石錘に施されるような剥離であるが、打点周囲に敲打によるものと思われるツブレが認められる。また、表裏面には明瞭ではないが凹みが認められる。これらの石器はもしかすると石錘の仲間の可能性がある。

469は柱状節理によって割れた角柱状の安山岩の端部と器体表面に敲打痕を有するものである。

3　側辺に観察される使用痕跡に稜線が見られるもの。多面体敲き石（阿部朝衛1987）・凸多面体磨き石（市毛美津子1992）などと呼ばれるものである。とも呼ばれている。使用面の観察される位置により大きく２種類に分類される。

a　使用痕が側辺を全周するもの。（470）

b　使用痕が長軸端部に表れるもの。（471～476）

ａ・ｂともに使用面は稜線が見られ、細かい面に分かれている。使用面の稜線は中央付近から、面を２分あるいは４分するものがあり、手に持ったときの対象物への角度が、ある程度一定であったと考えられる。使用面は敲打によるものというよりはこすることによって形成されたと思われ、何かある程度堅いものに硯と墨のような感じでこすりつけいていたのかもしれない。各面は概ね平坦である。また、使用面以外の部分は磨製石斧のように丁寧に研磨されているものが多い。

この石器の使用法については、寺地遺跡の報告では、磨製石斧生産に利用されたものととらえられている。他には、時代がかなりかけ離れるものの、旧石器時代の局部磨製礫の中に似たようなものが有り（黒坪一樹1996）、植物質食料の調理、薬草の調合、石器・骨角器の製作、等の可能性を示唆している。市毛氏の論考においては、皮なめしや木製品等の研磨、等の可能性を示唆している。

4　側面に使用に伴う平坦面が見られるもの。いわゆるすり石である。図137に分類模式図を示した。基本的な分類は正面形態と二次加工の施される部位により行い、以下のように分類した。

1　側面２に二次加工のあるもの。（477～506・539）

2　側面２に二次加工のないもの。（507～536）

3　１と２の中間的なもの。今回は存在しない。

4　いわゆる三角柱状磨石。（537～546）

また、使用面については、a、平坦面を持たないもの。b、平坦面が断続的に続くもの。c、平坦面が連続し、剥離が伴うもの。d、平坦面が剥離を伴わないもの。の4つに分類した。

1～3の各類はそれぞれに破損品があるが、全体の破損率は約4割である。また、破断面に使用痕が付着するものも存在しているが、類には全く付着しないという結果が判明し、これは筆者が集成した過去の報告分においても同様の結果が得られている。（茅野2000）

5　表面や側面が滑らかなもの。いわゆる磨き石である。

464は器体右側縁の一部が平坦面を持ち、その部分が滑らかである。465・466は全体的に表面が滑らかであるが、466の表面には黒色の物質が付着している。この物質が何であるかは不明である。

⑪石錘　川原石状の扁平な礫の端部に剥離による抉りを施したもの。

3点の出土である。547は粘版岩製である抉りの部分にはツブレがみられる。549は長軸中心上に断続的に敲打痕がみられる。その敲打痕は両端の剥離面にも及んでいる。

⑫石皿・台石類　今回は図示しなかったが、石皿の可能性のあるものが5点出土している。

⑬石製模造品・石製品

1　粘板岩、千枚岩、頁岩などの薄い剥片を素材とし、側辺や表面が剥離あるいは研磨により整形されているもの。畑内遺跡Ⅴでは敲磨器Ⅳa2類としたものである。

a　槍状の形状のもの。長さ6cm以上のものを槍状のものと呼ぶ。（550・551・560）

b　石鏃状の形状のもの。（552～558・562）

c　石匙状の形状のもの。今回は出土していない。

d　その他（形状がはっきりしないもの・未製品などを含む）

2　石刀・石剣など。（567～569）

まとめ

1　出土状況

図79～83に主要な石器の分布図を示した。各石器の分布域は概ね土器の出土分布と重なるが、器種によってはその中である程度のまとまりを持つ物がある。礫石器においては敲磨器4dがAT－11～12付近に強いまとまりを見せている。この石器に関しては、縄文時代早期～前期に出土のピークがあると考えられている石器である。今回報告された早期の土器はこの石器と分布域を異違えているが、これだけの数が同じグリッドから出土するということは注目に値する。またこの付近には図示しなかったものの、片面に礫面を多く残す石斧や、石篦、先端部が切り出しナイフのような形状をした石匙など、縄文時代早期的な雰囲気を感じさせる石器が出土している。その他の石器では特定の器種が1箇所に集中するような現象は目立ってみられなかった。各器種ともに出土量が多い地点はほぼ同様な位置であり、それは土器の出土状況と合致している。ただし、土器については細別した群ごとの出土分布を把握できなかったため、どの石器がどの土器と一緒に出土する傾向があるかなどの情報を得ることができなかった。

2　石材の利用状況

剥片石器についてはほとんどが珪質頁岩製であり、玉髄、チャート、鉄石英、黒曜石などがそれ

に続いている。しかし、水吉遺跡での石材組成で触れたとおり、鉄石英は遺跡周辺で採取できる石材であるにもかかわらず、利用率は低い。逆に、黒曜石に関しては剥片などの出度量に対する、製品の率がかなり高いように思われる。

礫石器については砂岩と粘板岩が主体である。凹み石やすり石などについてはほとんどが砂岩であり、半円状扁平打製石器については粘板岩が大勢を占める。磨製石斧については少々様相が異なり、緑色細粒凝灰岩を主体とし、頁岩がそれに次いでいる。たたき石については、a類のうちハンマーとして想定されるものについては、頁岩や安山岩などのやや硬めの石材が用いられている。そのほかのものについてはほとんどが砂岩製である。多面体磨き石については、砂岩、緑色細粒凝灰岩、頁岩などである。

3　石鏃における各形態同士の相関関係について

図136に、出土した石鏃について、各群の相関関係図を示した。この図と、石鏃の分析については株式会社アルカの池谷氏によるものである。C捨て場から出土した石鏃は、二次加工の種類によって大きく２つに分類できる。まず、ＨＭＰを二次加工に使用するものに関しては石鏃ＡとＡＢ群が相当する。ＳＭＰを二次加工に用いるものに関してはＢ群・ＢＣ群・Ｃ群が相当する。二次加工の違いによる２者の相違点は、主に石器の厚さに現れている。二次加工にＨＭＰを用いるものに関しては、全体的に器厚が厚く、ゴロッとした感じを受けるものが多い。それに対し、ＳＭＰを用いるものは全体的に整った剥離が見られ、器厚も極端に薄いものが多い。その両極に位置するのが、Ａ群とＢ群である。Ｃ群に関しては小型のものが多く形状的にもやや異質な感じを受けるものである。さて、まずはＡ群とＢ２群の関係であるが、Ａ群は有茎であり、Ｂ２群は丸みを帯びた尖基を基調とする、相容れない特徴を持つ。しかし、ＡＢ群は二次加工の面ではＡ群に近い特徴を有し、大きさの面でもＡ群に近い大きさである。また、形態の面では尖基であり、Ｂ群の中でも、特にＢ２群に近い特徴を持つ。言うなれば両者の特徴を備えた中間的な群であといえる。すなわち、Ａ群からは二次加工の技術と石器自体の大きさを・Ｂ２群からは石器の形をそれぞれ反映しているのである。次にＣ群とＢ群との関係であるが、Ｃ群は基部形態が凹基であり、二次加工はＳＭＰである。Ｂ群に関しては二次加工の面で強い共通性を持ちつつも、丸みを帯びる尖基のＢ２群と平基のＢ１群とに分かれている。この両者の中間に位置するのがＢＣ群である。ＢＣ群は基部形態が弱凹基である。大きさはＢ１群に類似しており、形態はＣ群にやや近い感じである。すなわちＣ群から形態的特徴を、Ｂ１群からは大きさをそれぞれ取り入れているのである。

このようにＣ捨場から出土した石鏃は大きく分けたＡからＣ群が、間に融合形態を持ち、お互いに関連していることがわかる。Ｃ捨場からは主に縄文時代前期中葉～中期初頭の土器が出土しているが、土器の型式でいうならば、少なくとも５段階の時期的変遷が想定できる。石鏃に関しても大きく５つのグループがあることがわかっているが、これらが時間的な変遷を示すのかどうかは定かではない。しかしながら、これまでの研究史等をかえりみると、縄文時代中期には有茎鏃が出土することが多く、前期には平基石鏃が出土することが多いという傾向が見られる。したがってＣ群からＢ群、Ｂ群からＡ群へという流れが想像できるが、確証はない。しかしながら、各群はＡＢ群、ＢＣ群という中間的な形態を介在してつながりを持っており、時間的な流れの方向はともかく、Ａ・ＡＢ・Ｂ・ＢＣ・Ｃという組列は妥当性を持つ可能性が高いと思われる。ただし、中間形態にあた

る石鏃は今回出土量が少ないため組成の面や時期的なまとまりを持つのかは今後検討を要するところである。また、組列の方向や各群の時期的な変遷についても、遺構内での出土状況等をあわせて考えることにより、明確にしていかなければならない。

4　いわゆるすり石について

すり石は縄文時代を通じて各時期に存在する石器であるが、特に縄文時代前期～中期にかけては石器組成の中で非常に大きな割合を占めるものである。筆者は畑内遺跡の過去に報告された分について、特にすり石の折れ方に注目し、論考を展開したことがあるが、今回もまた同様の結果が得られた。

まず、すり石の折損率であるが、C捨場のものについては全体の約4～5割が折損していることがわかった。すり石は前述のように4つに分類されるが、1～3はほぼ同じ石器と考えられる。1～3と4で各々の折損率はそれぞれ約4割、約5割である。ここで注目するのは1～3についてである。1～3について折損したものの破断面を観察すると、ミガキに近いような滑らかな面を観察することができる。何らかの使用痕であることは間違いないと思われるが、現時点でその使用法を特定することは不可能である。この使用痕の付着位置は図137の4の様に模式化される。

付着位置による使用痕の状態に差異はあまりないように見られるが、中央付近に付着するものに関しては、他のものと同様の使用法であるのか、検討する必要がある。

最後に、このような使用痕を持つすり石の分布であるが、筆者の集成（茅野2000）によると今のところ、青森県下と岩手県に類例が見られる。特に、青森県南部地域と岩手県北部地域に濃く分布しているようである。使用痕が付着する器種は、やはりすり石であり、実測図を見た感じでは大木式文化圏のものと円筒土器文化圏のものとで大差はないように感じられる。秋田・山形・宮城・福島・新潟県に関しては今のところ見つかっていない。この分布域と、石器の類似性がを意味するのかは、今後の課題であり、分布については今一度見直す必要性があると思われる。

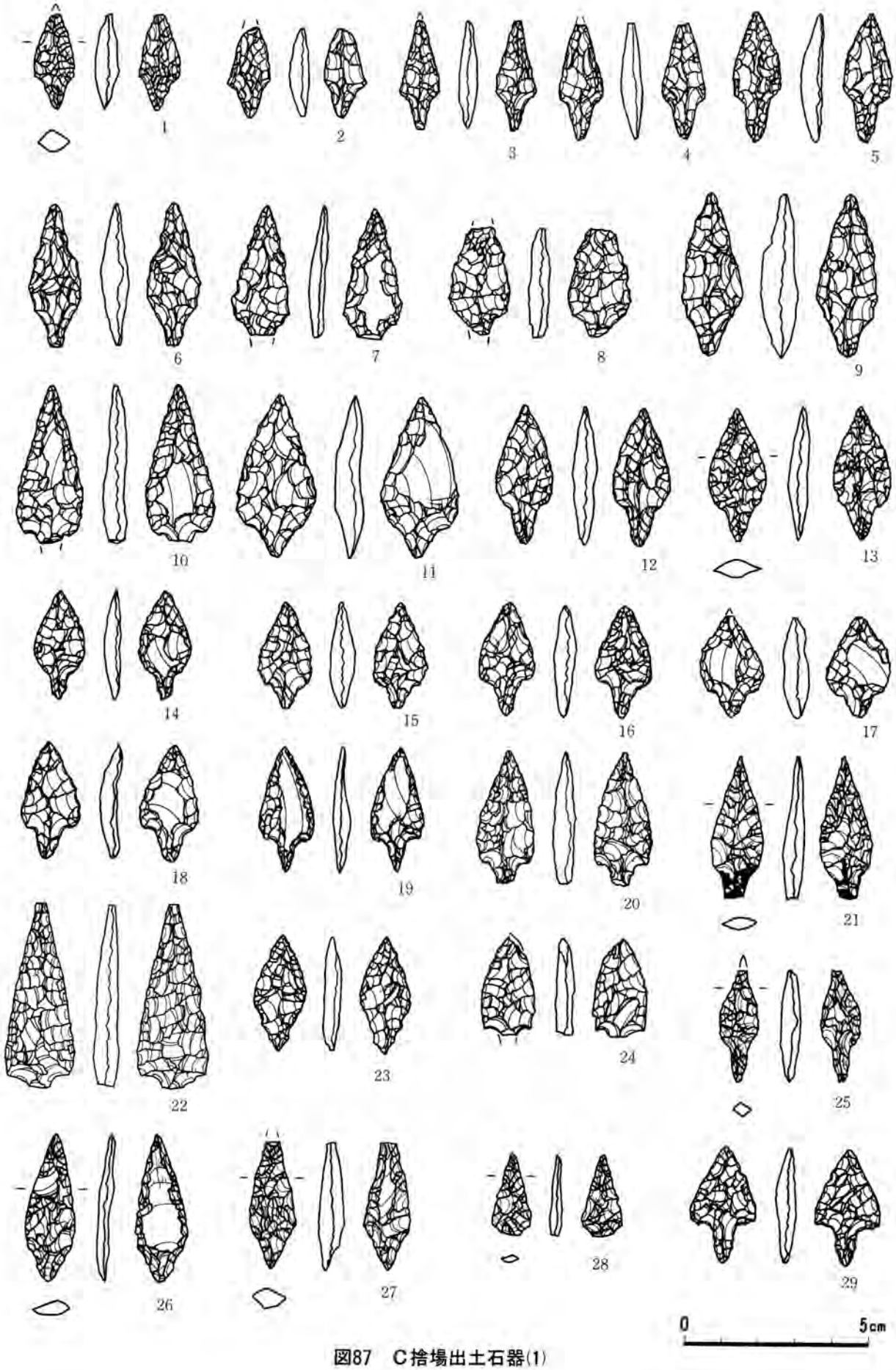


図87　C捨場出土石器(1)

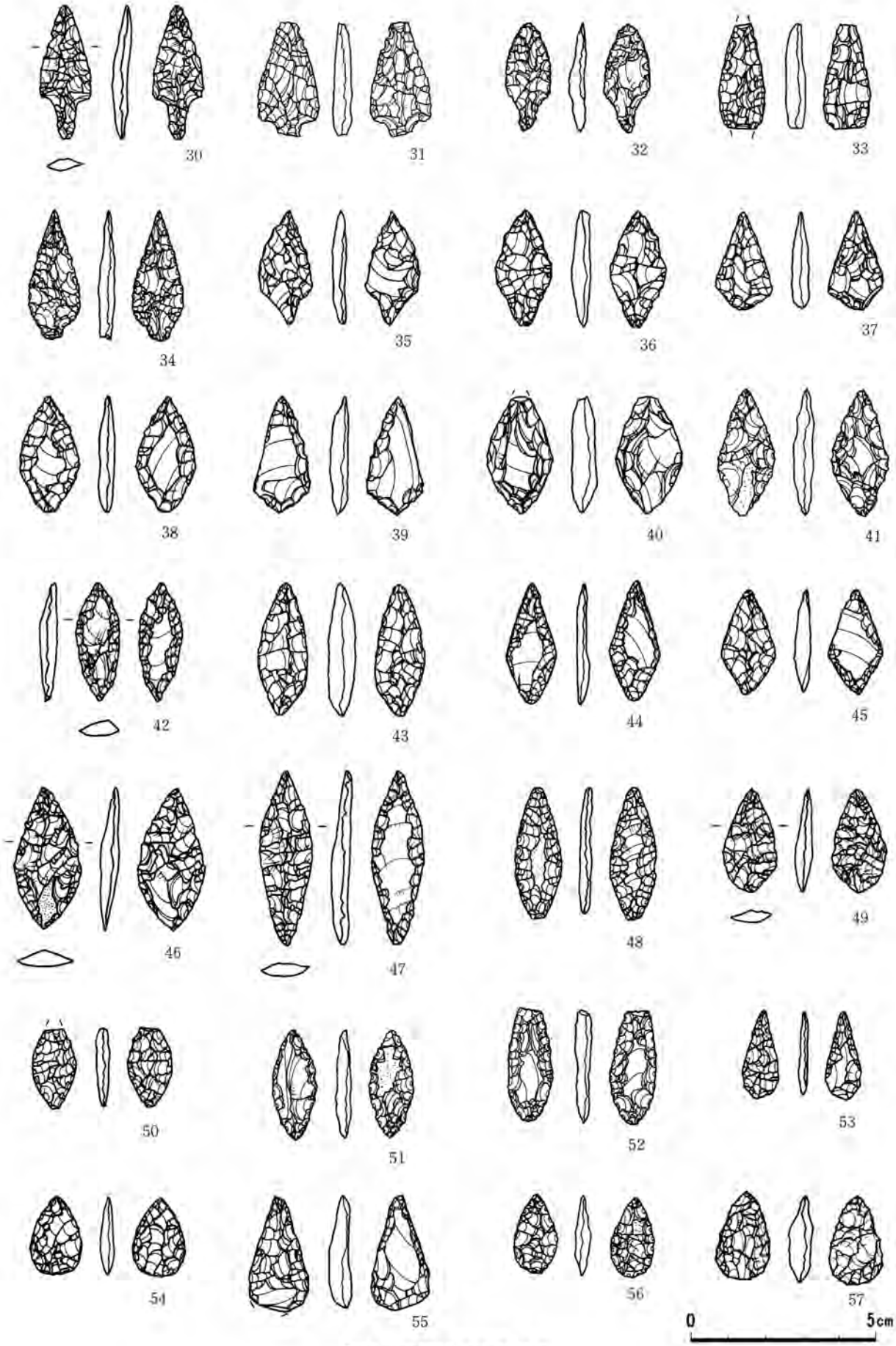


図88　C捨場出土石器(2)

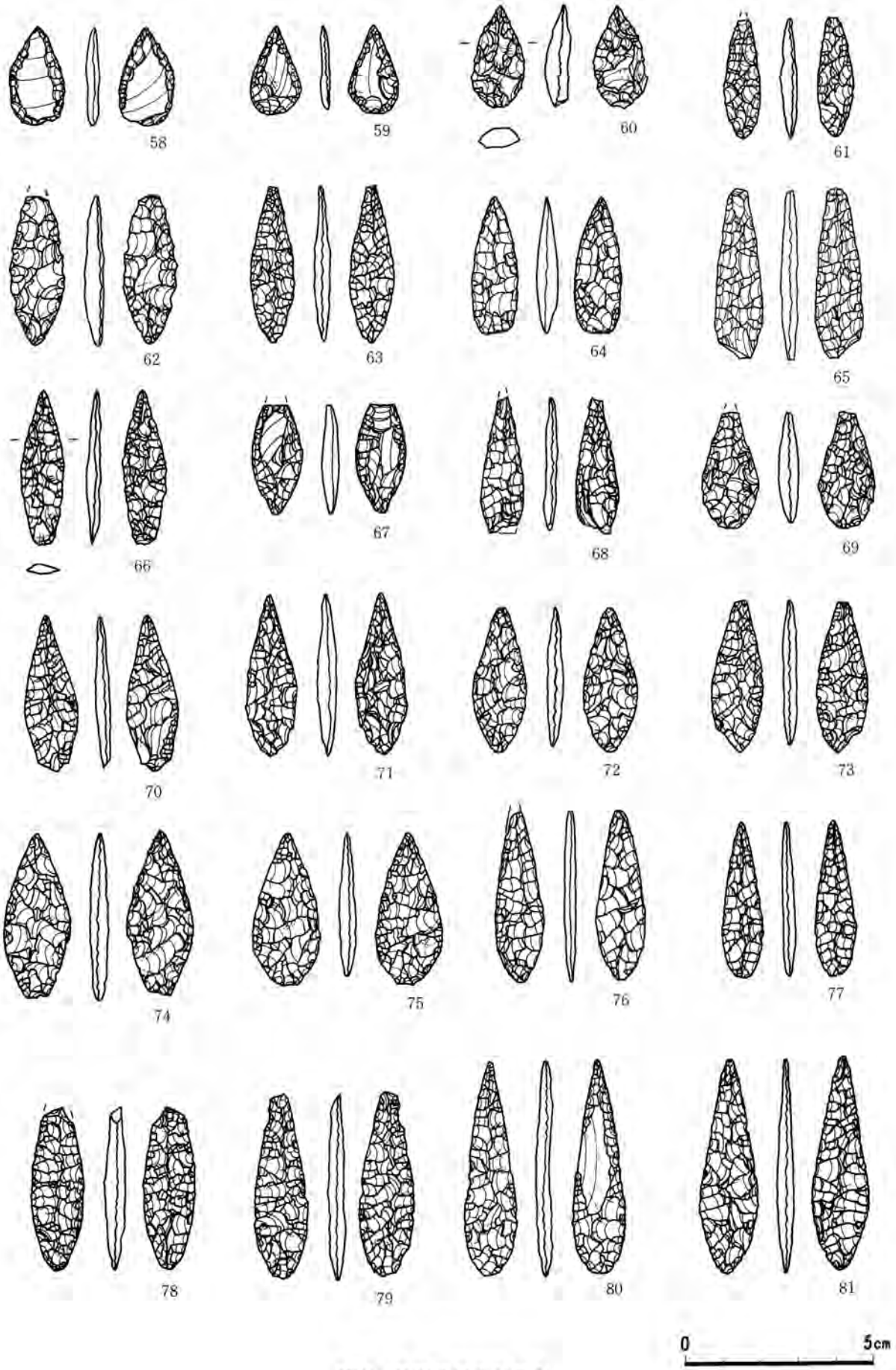


図89　C捨場出土石器(3)

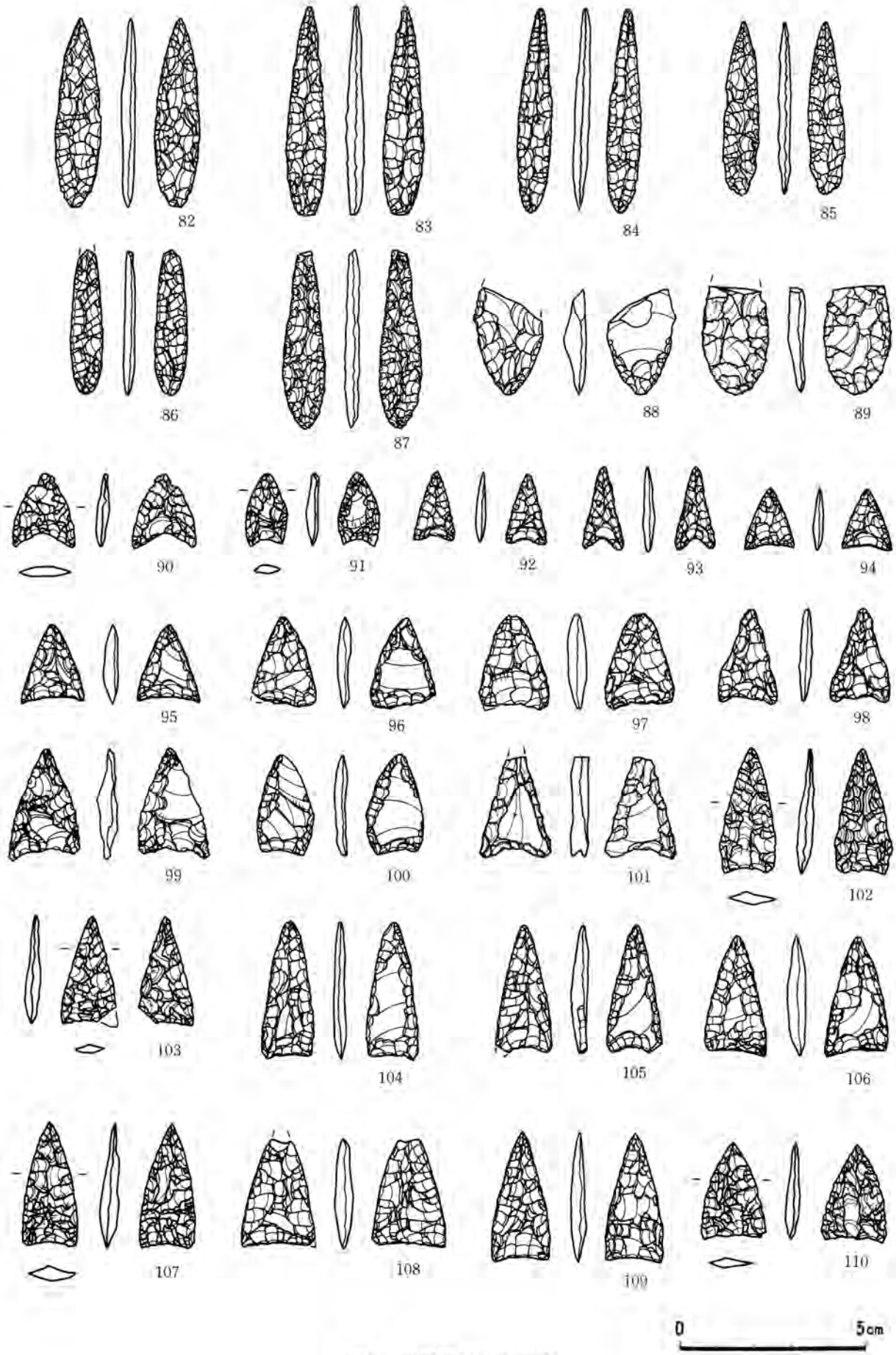


図90　C捨場出土石器(4)

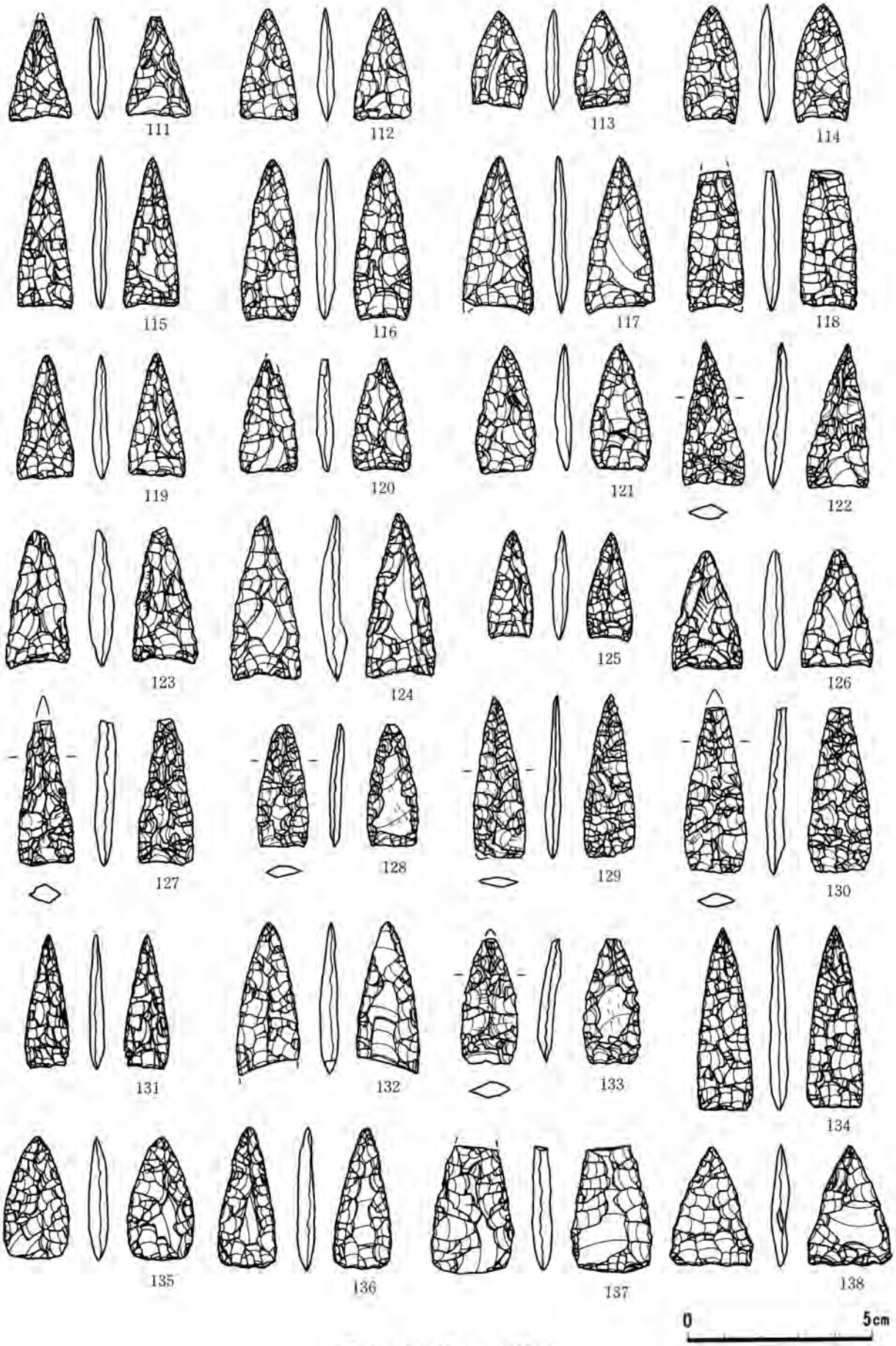


図91　C捨場出土石器(5)

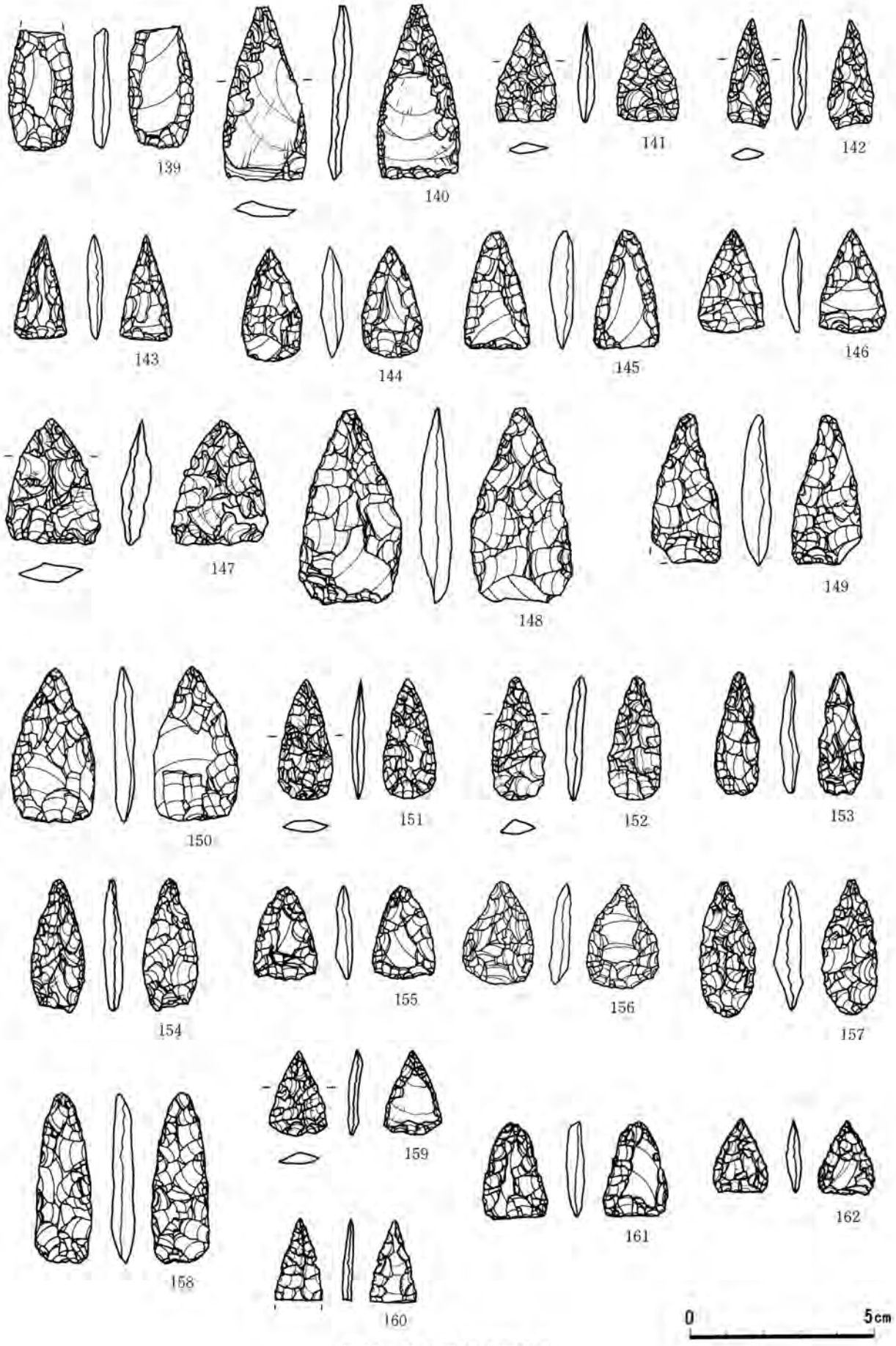


図92　C捨場出土石器(6)

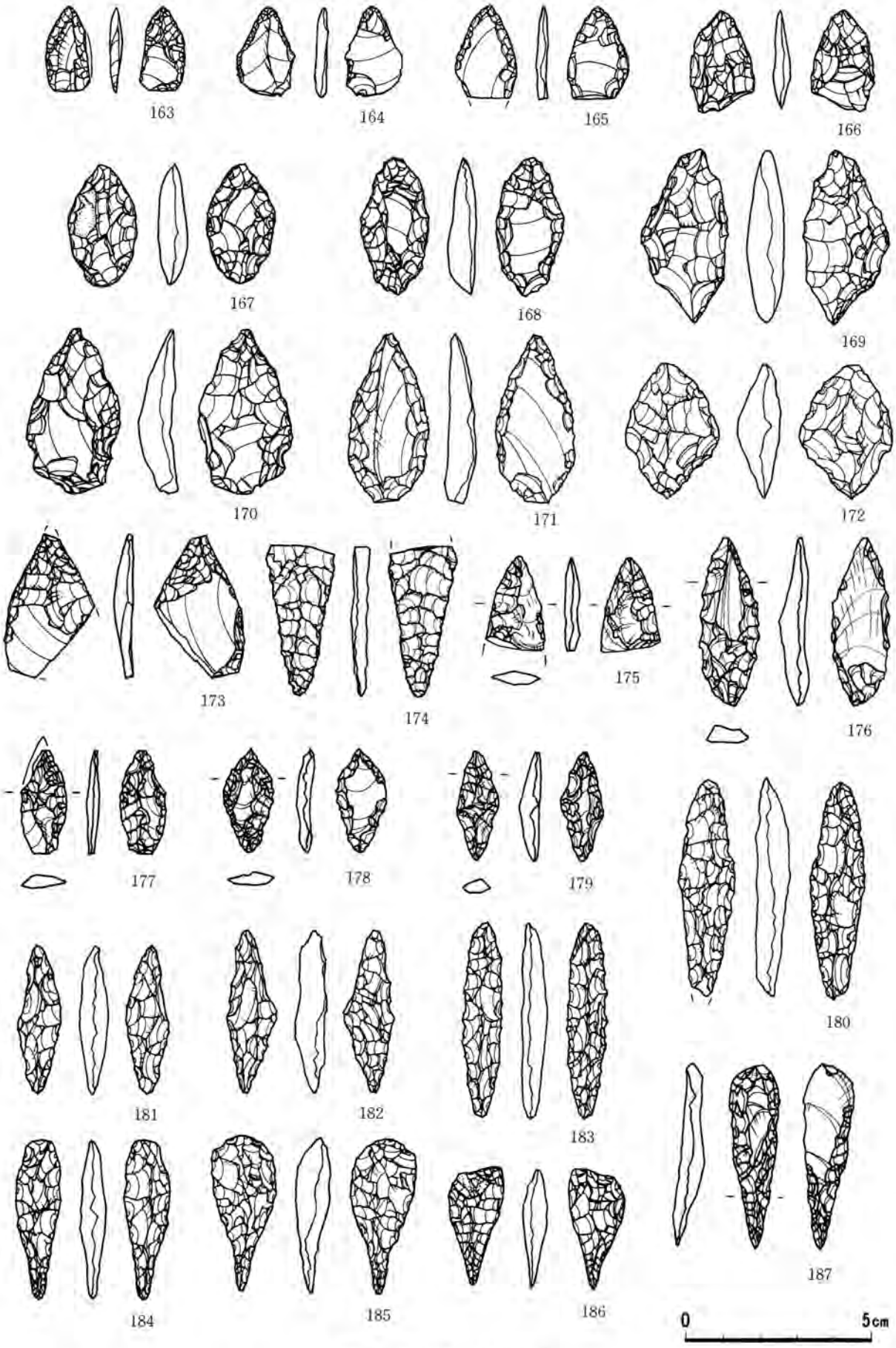


図93　C捨場出土石器(7)

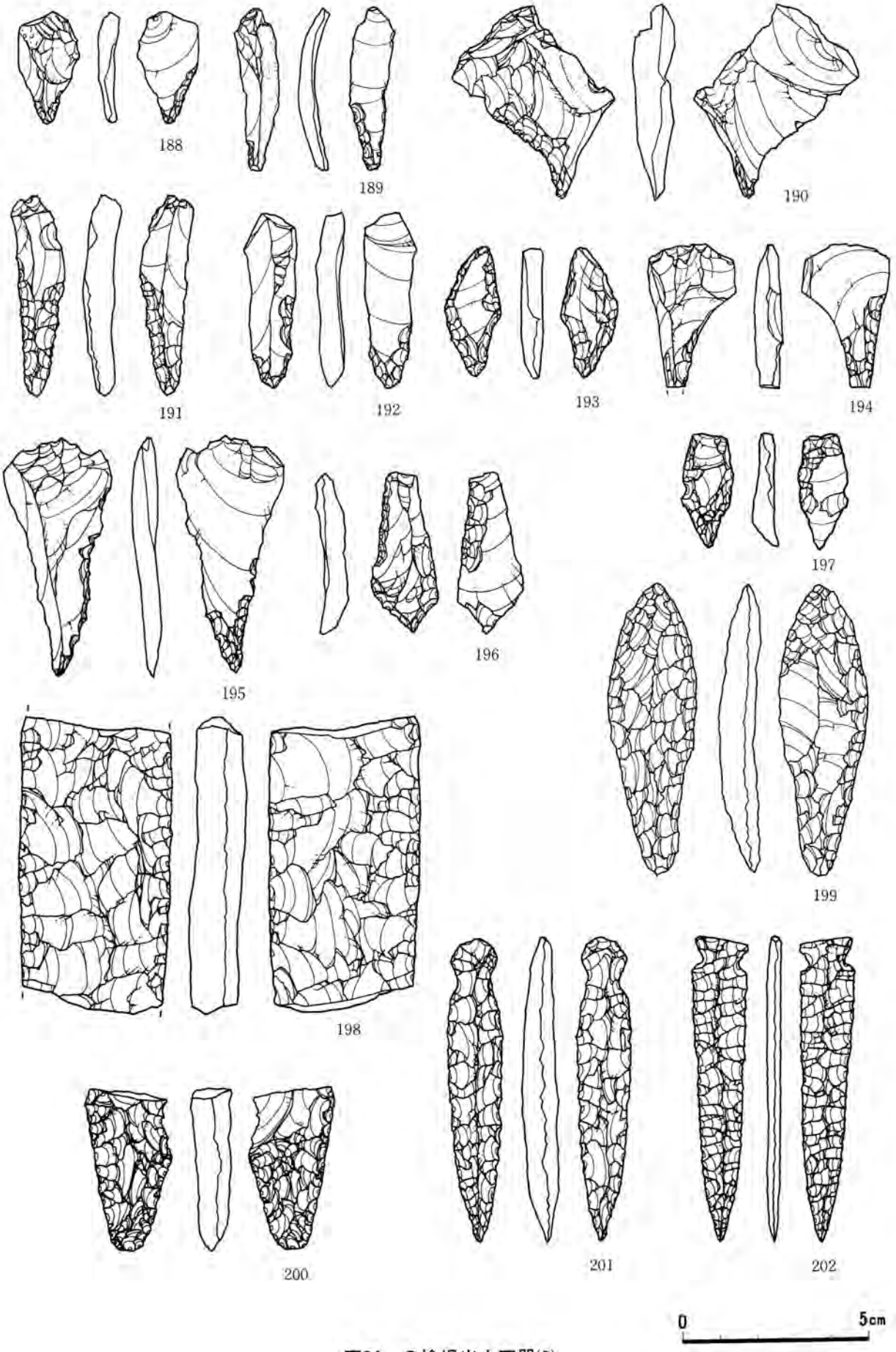


図94　C捨場出土石器(8)

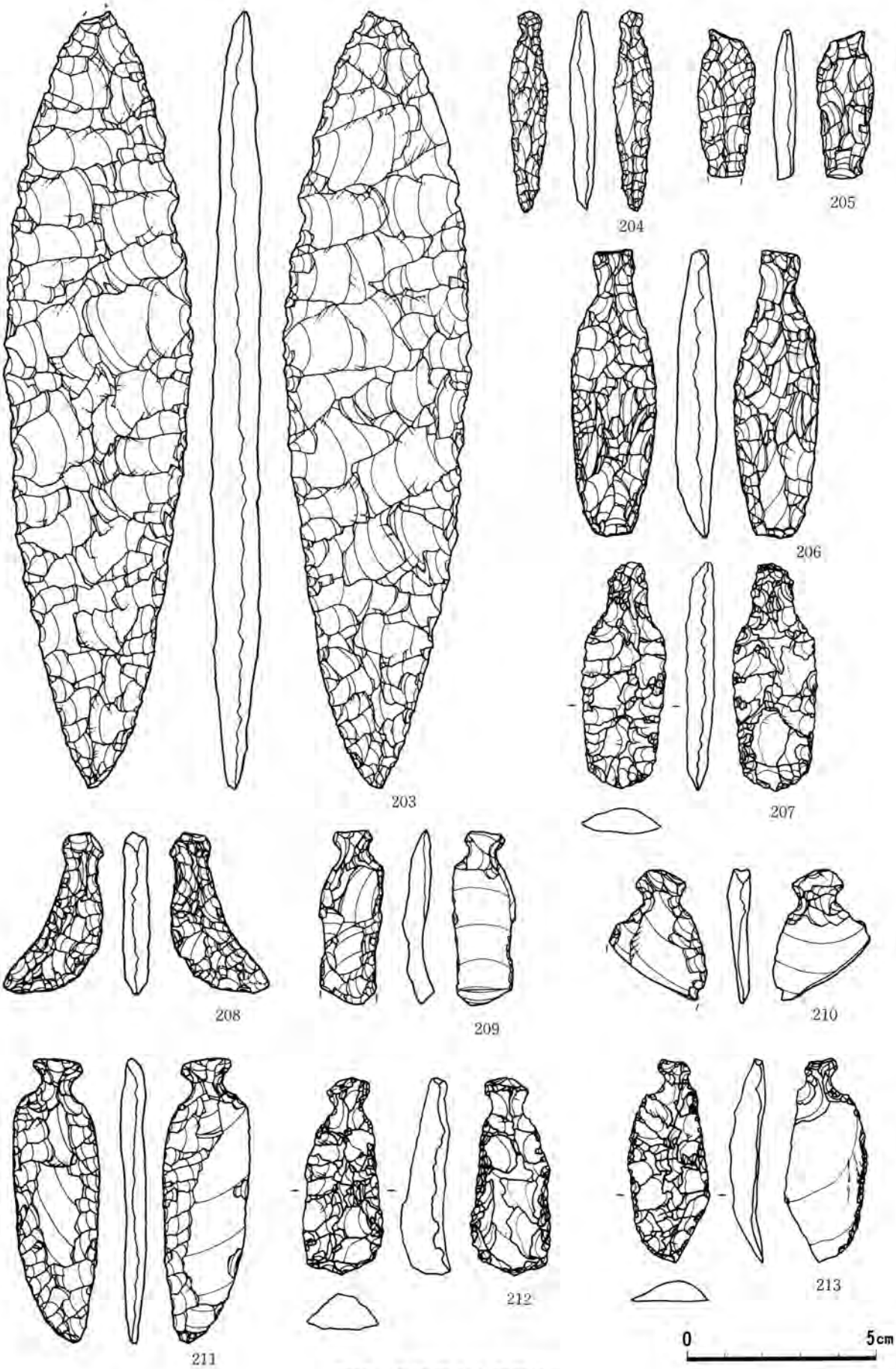


図95　C捨場出土石器(9)

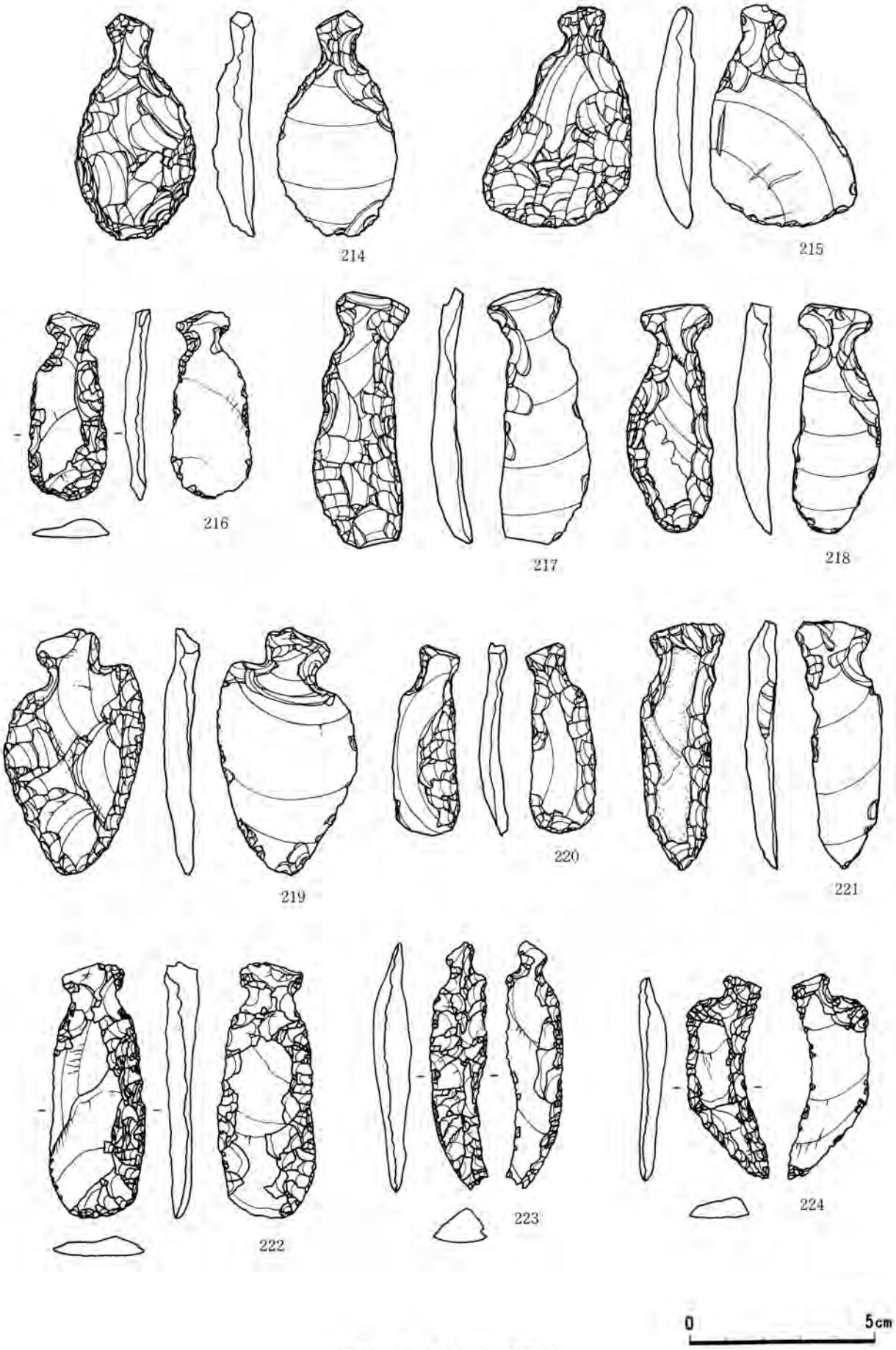


図96　C捨場出土石器(10)

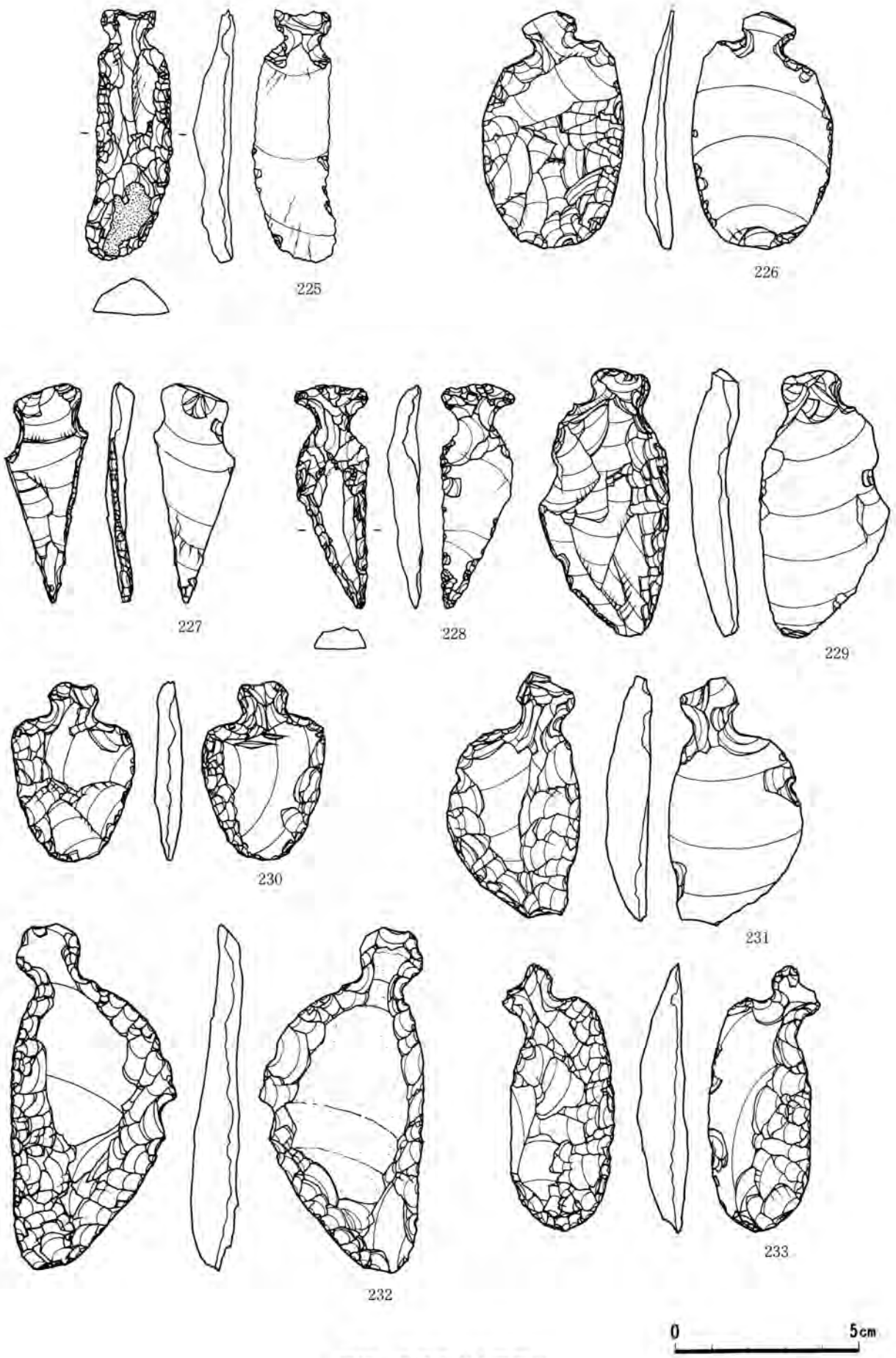


図97　C捨場出土石器(11)

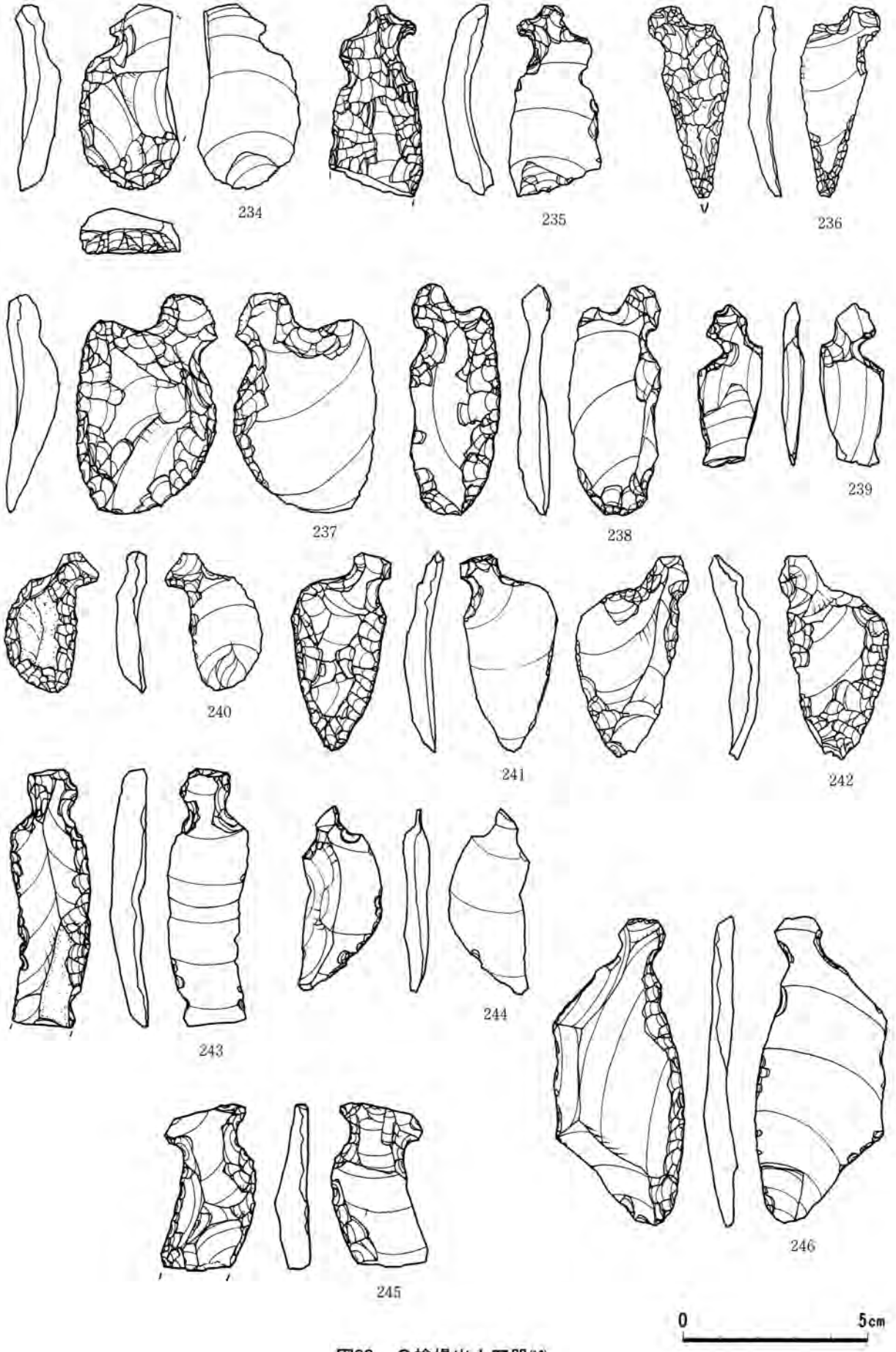


図98　C捨場出土石器(12)

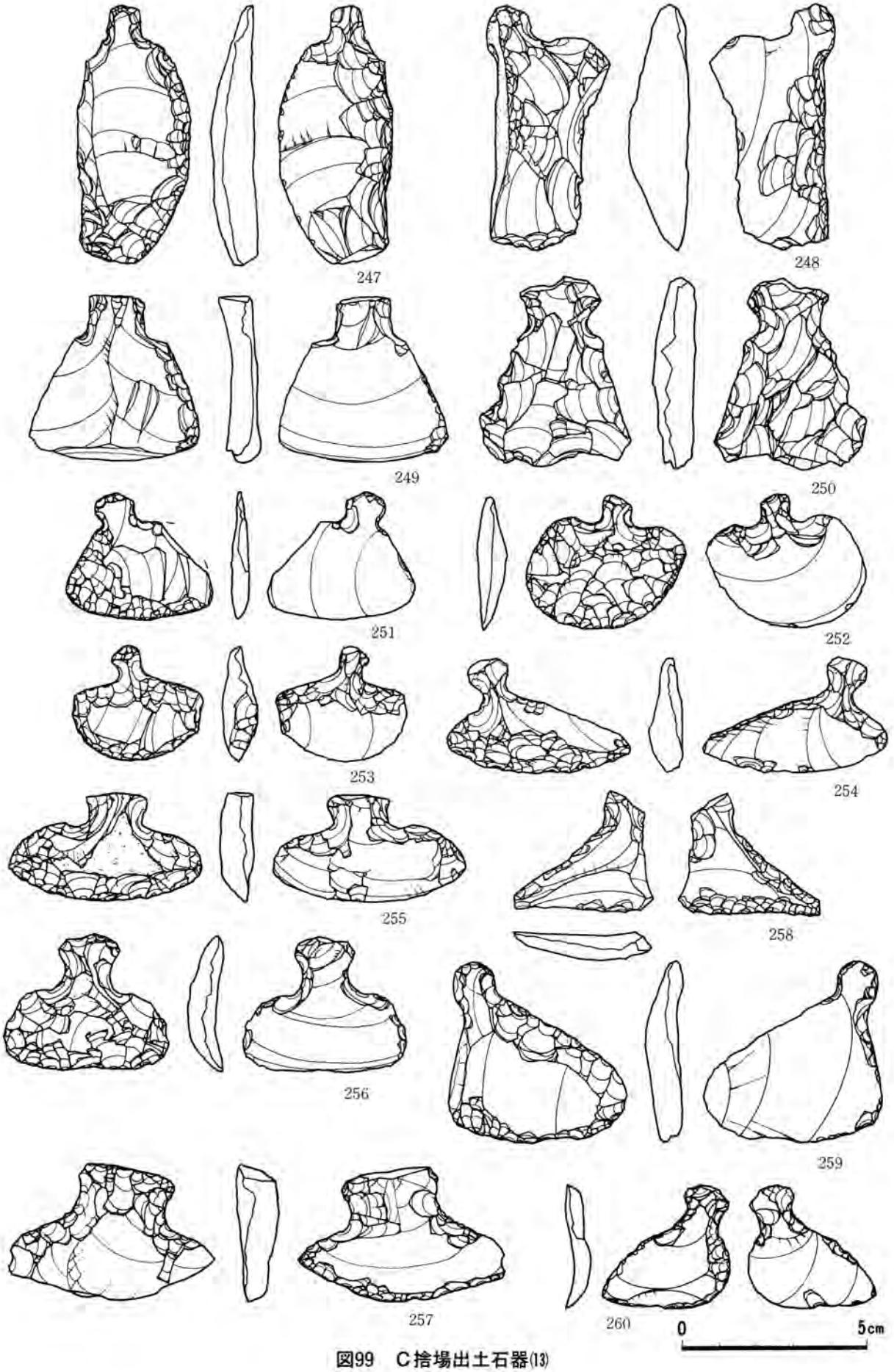


図99　C捨場出土石器(13)

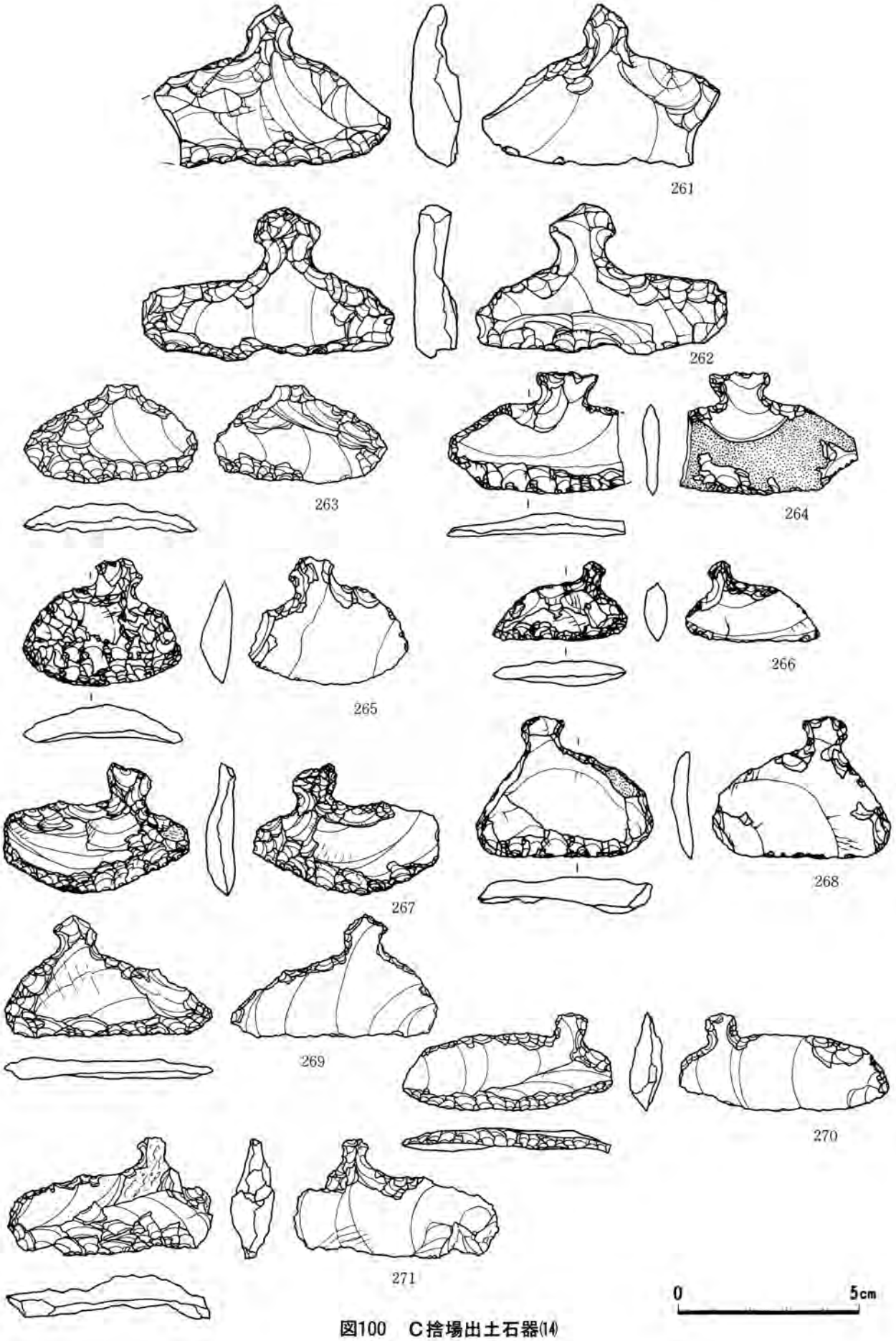


図100　C捨場出土石器(14)

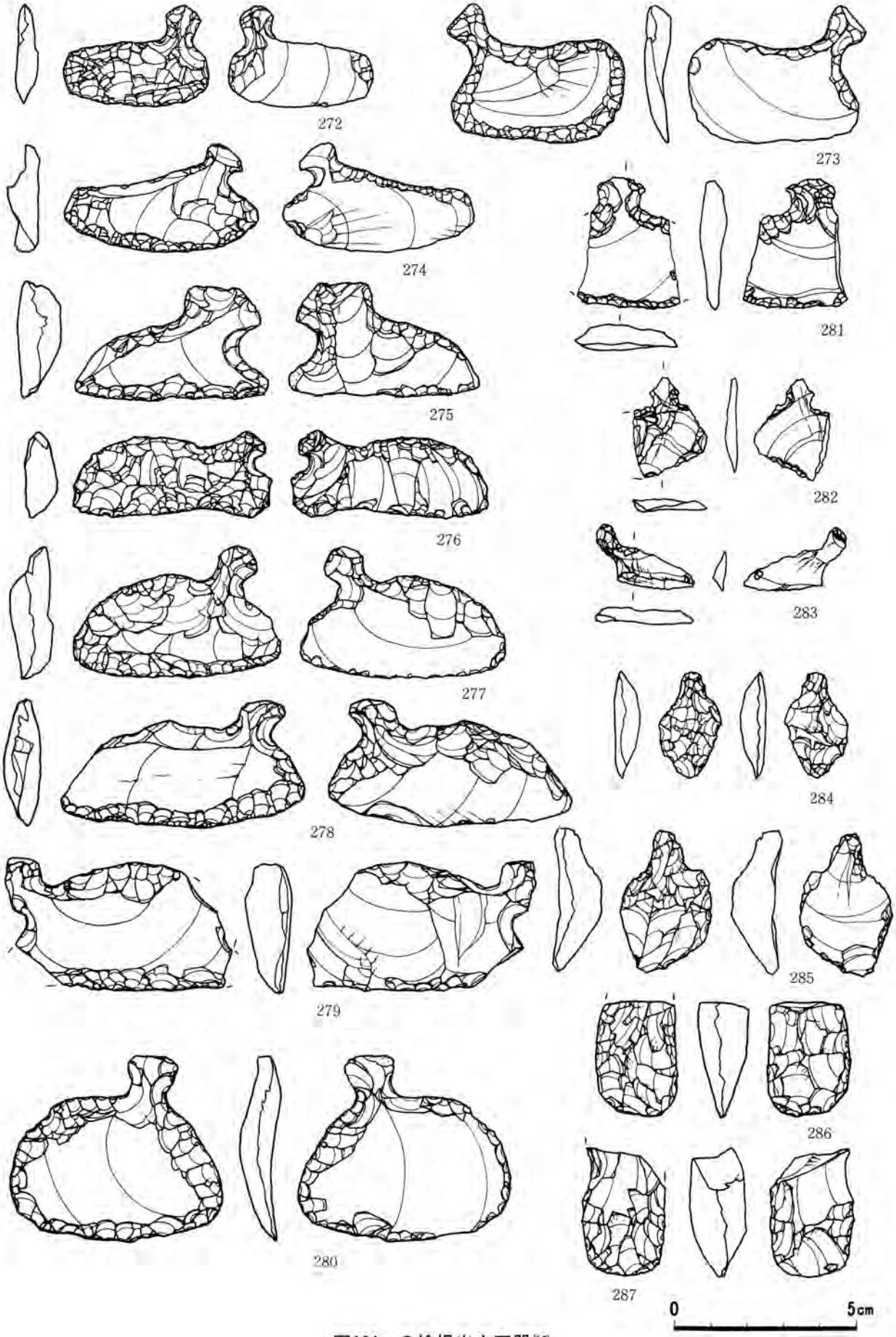


図101　C捨場出土石器(15)

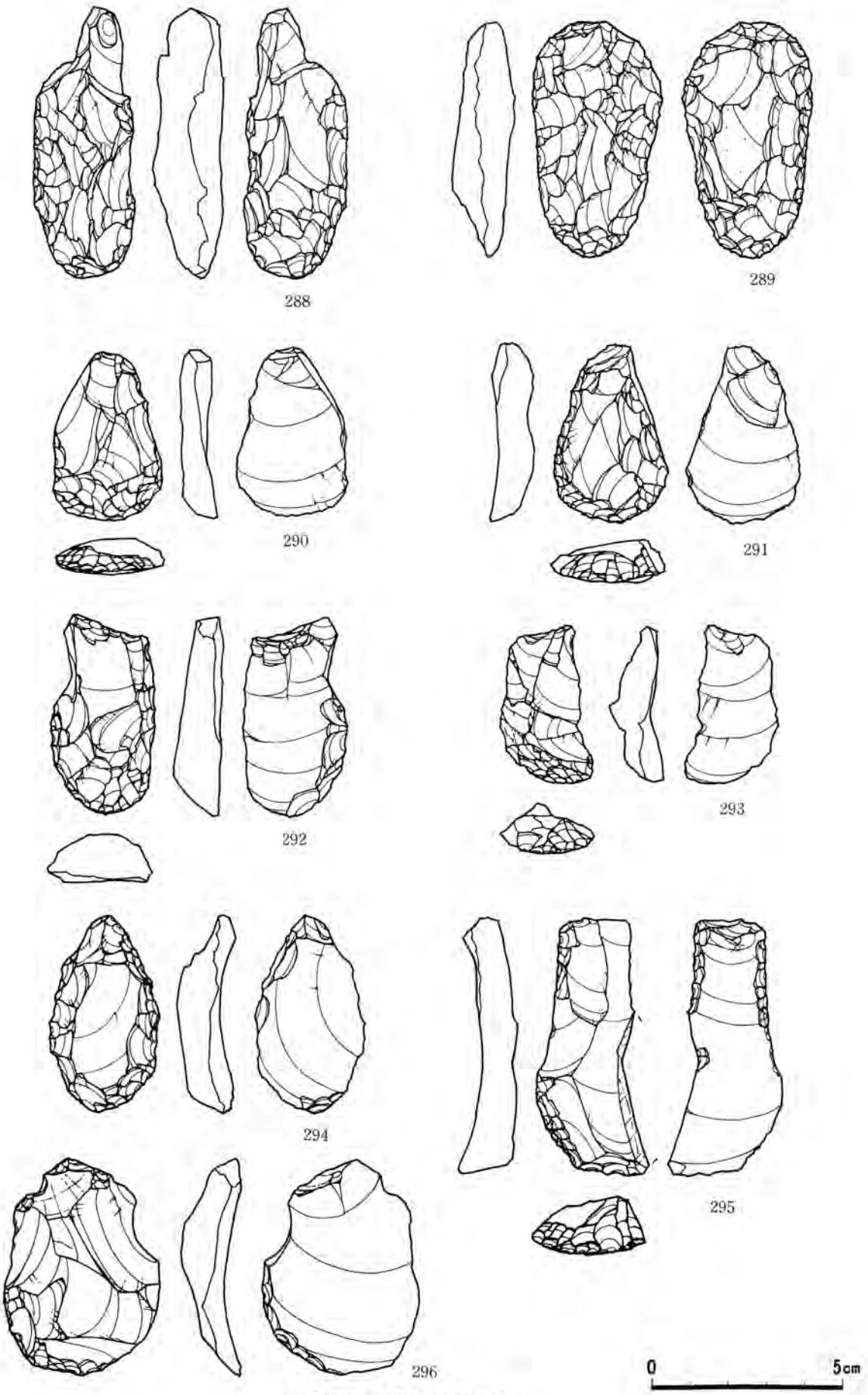


図102　C捨場出土石器(16)

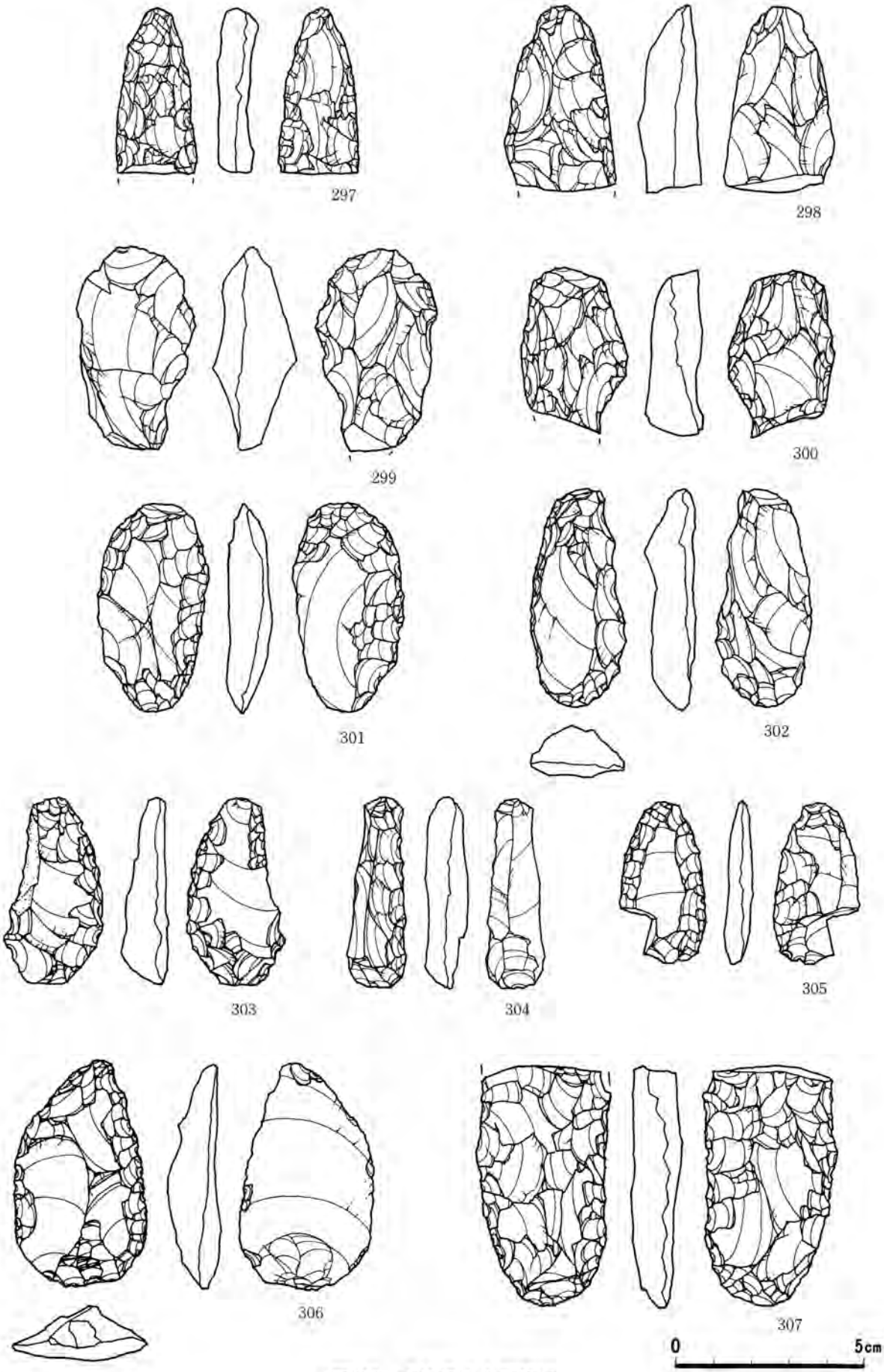


図103　C捨場出土石器(17)

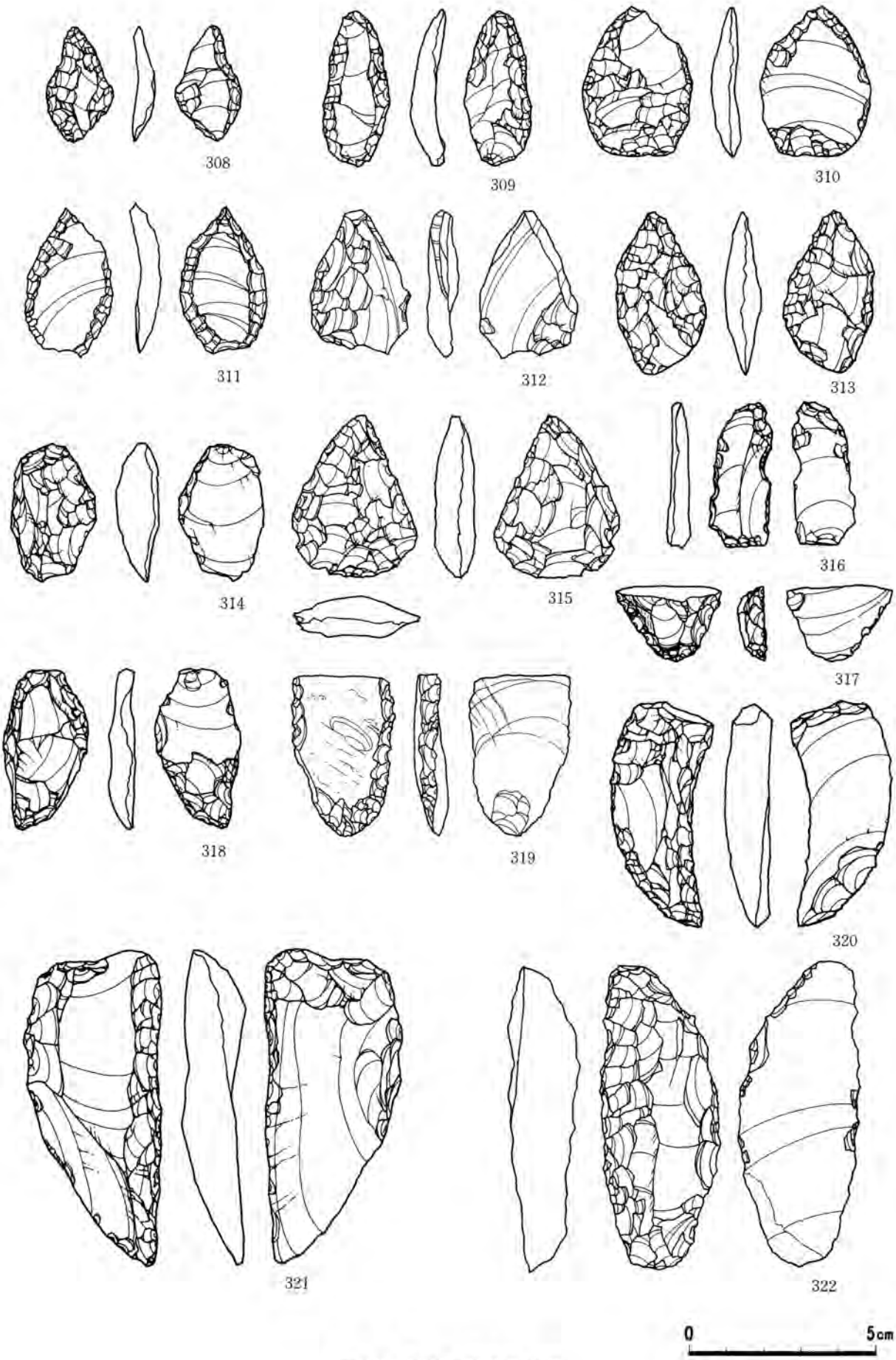


図104　C捨場出土石器(18)

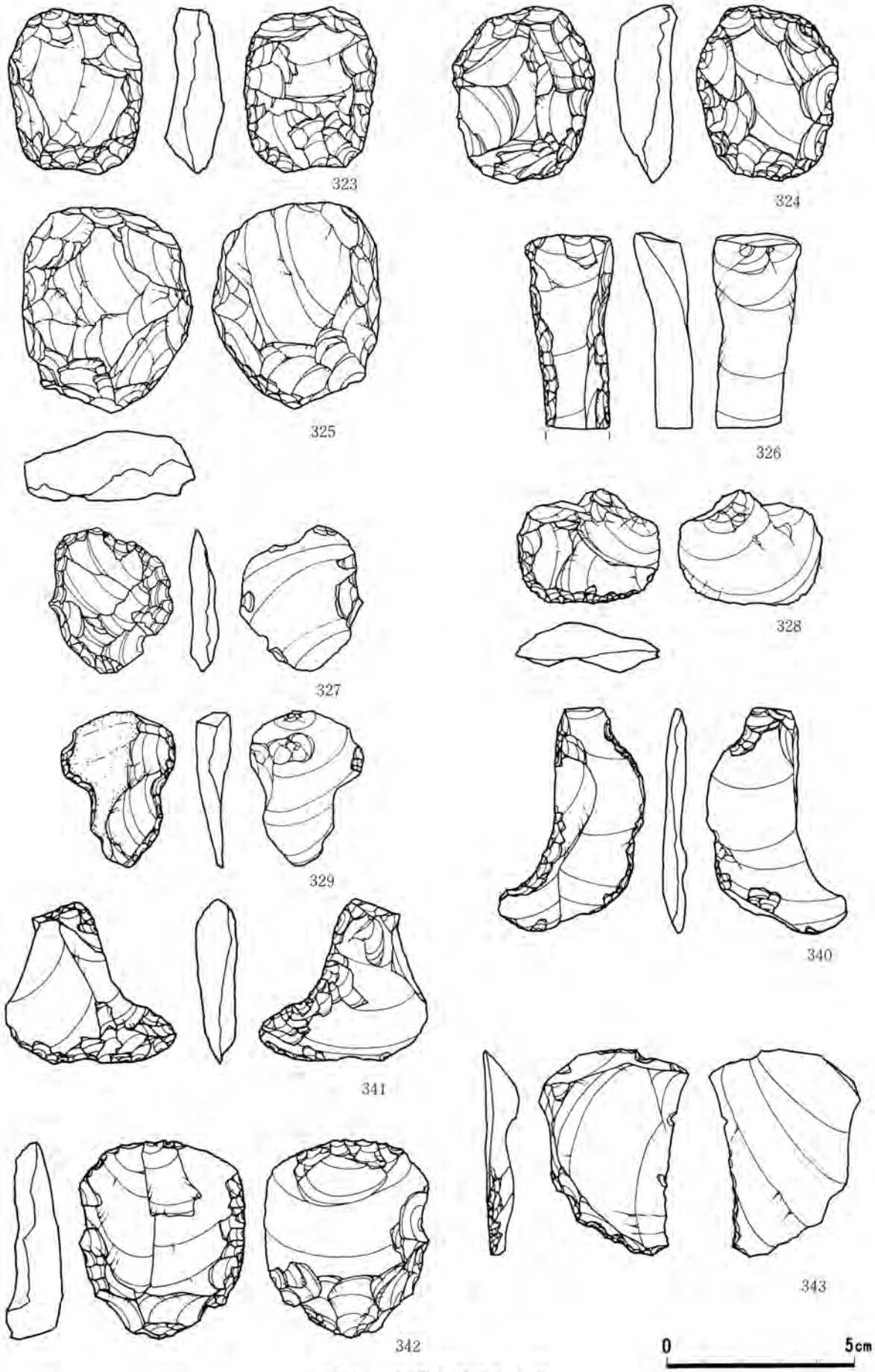
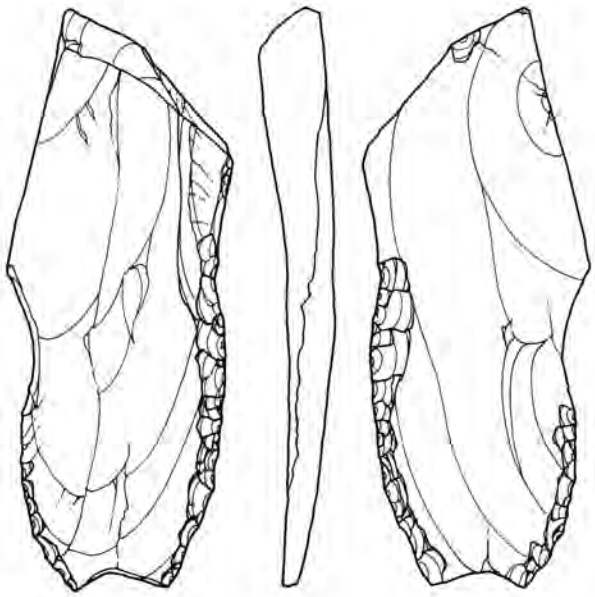
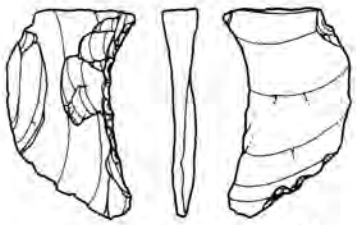
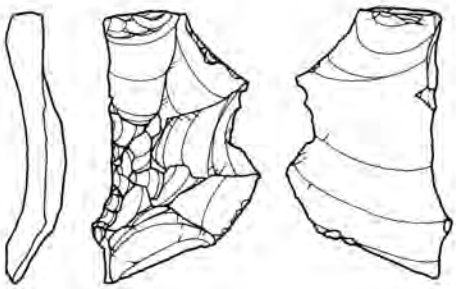
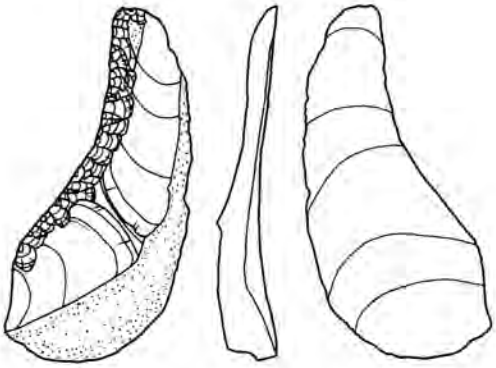


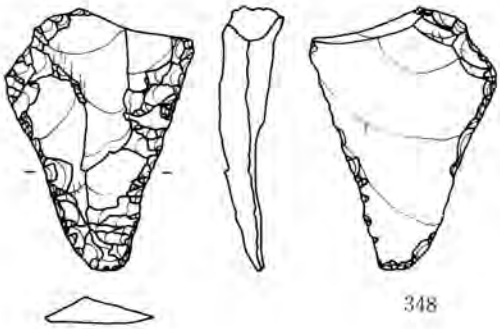
図105　C捨場出土石器(19)

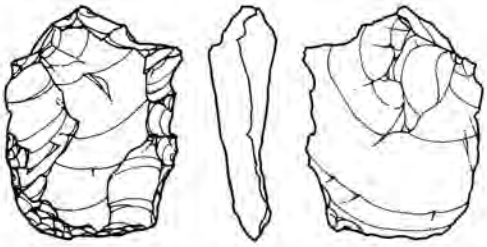


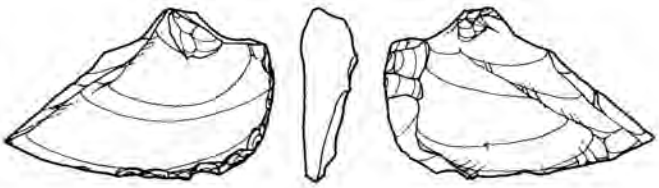


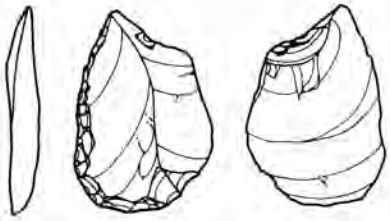


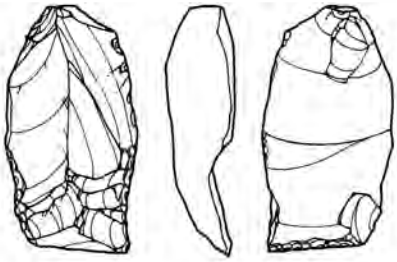












0　5cm

図106　C捨場出土石器(20)

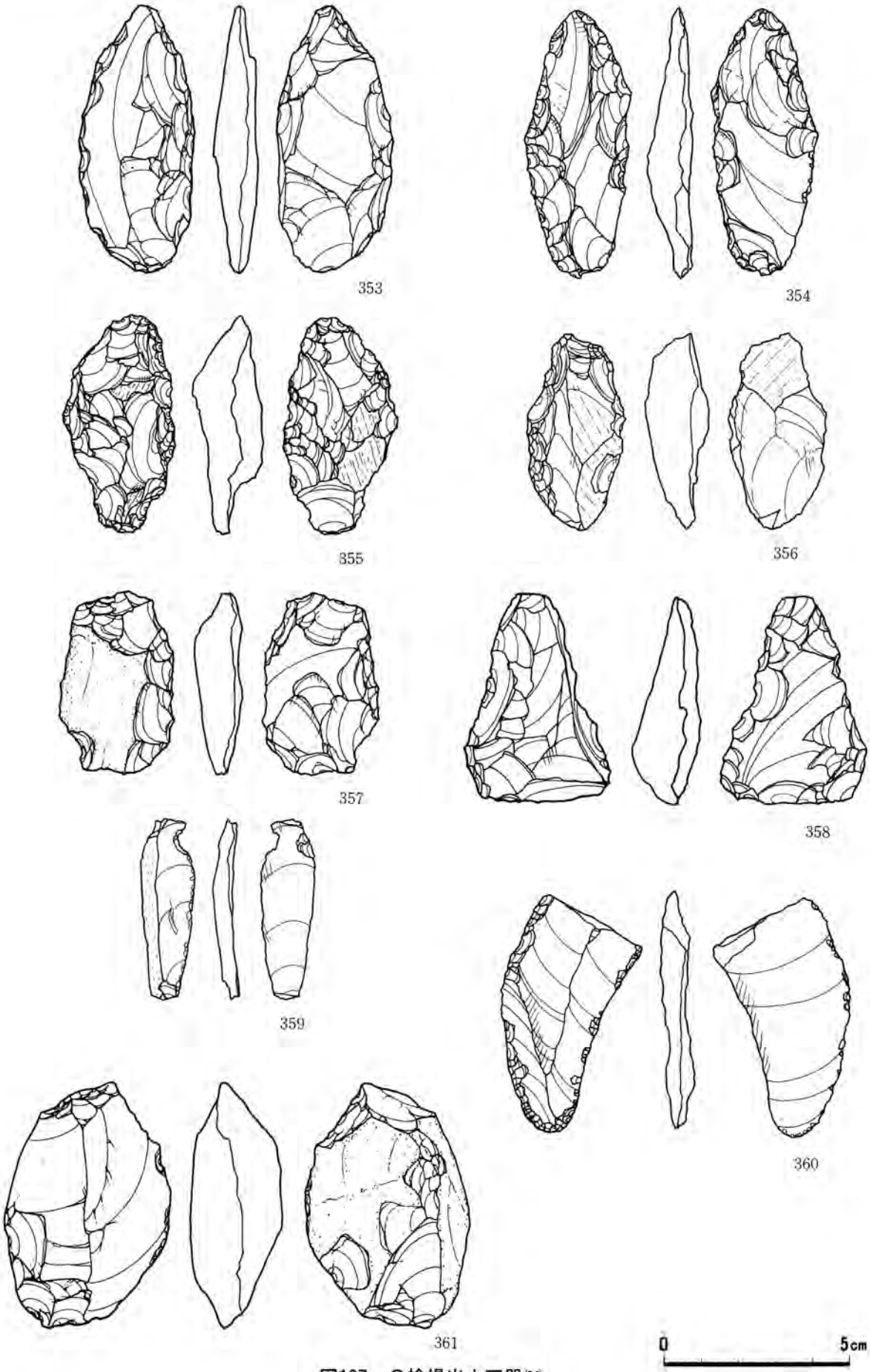


図107　C捨場出土石器(21)

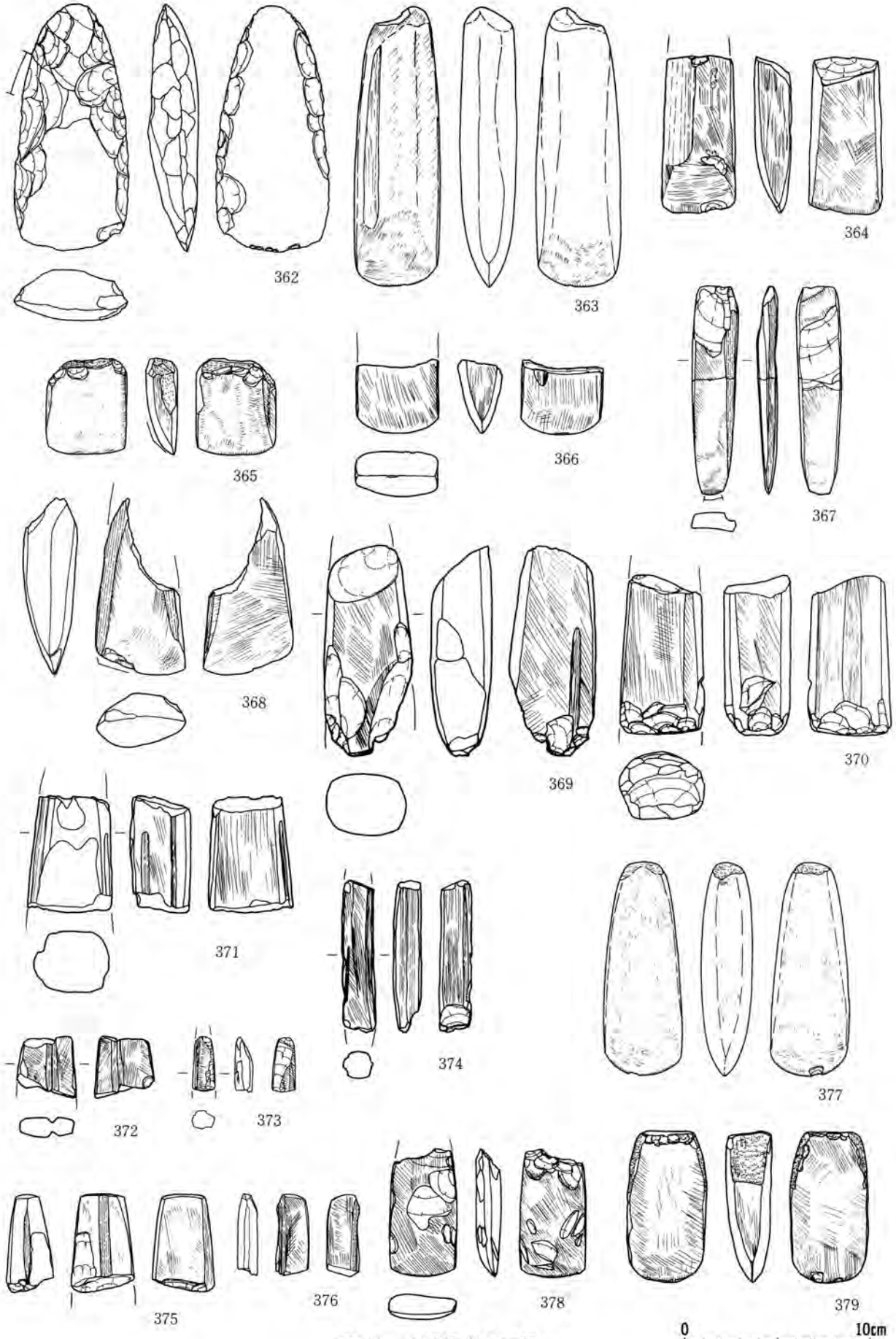


図108　C捨場出土石器(22)

図109　C捨場出土石器(23)

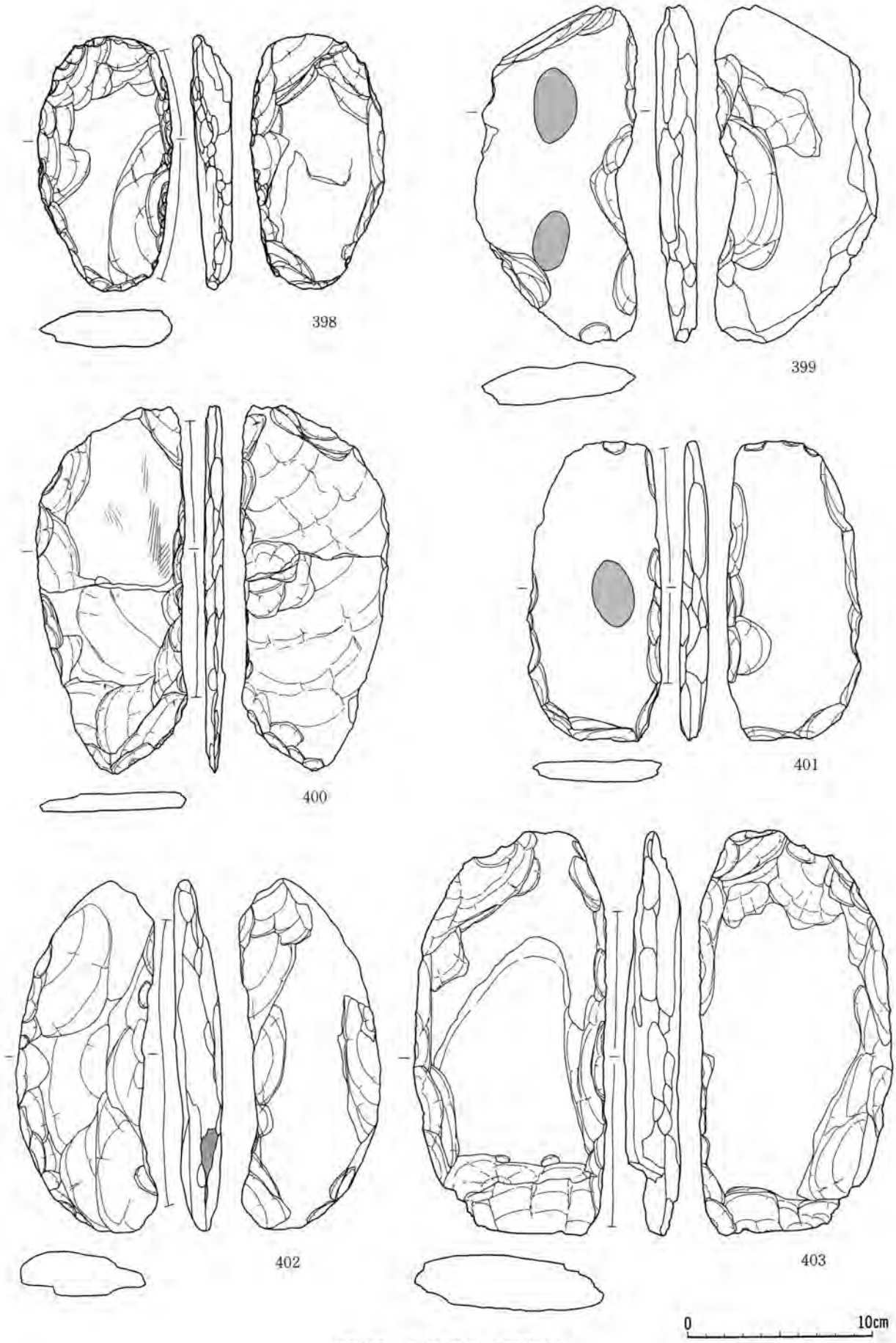


図110　C捨場出土石器(24)

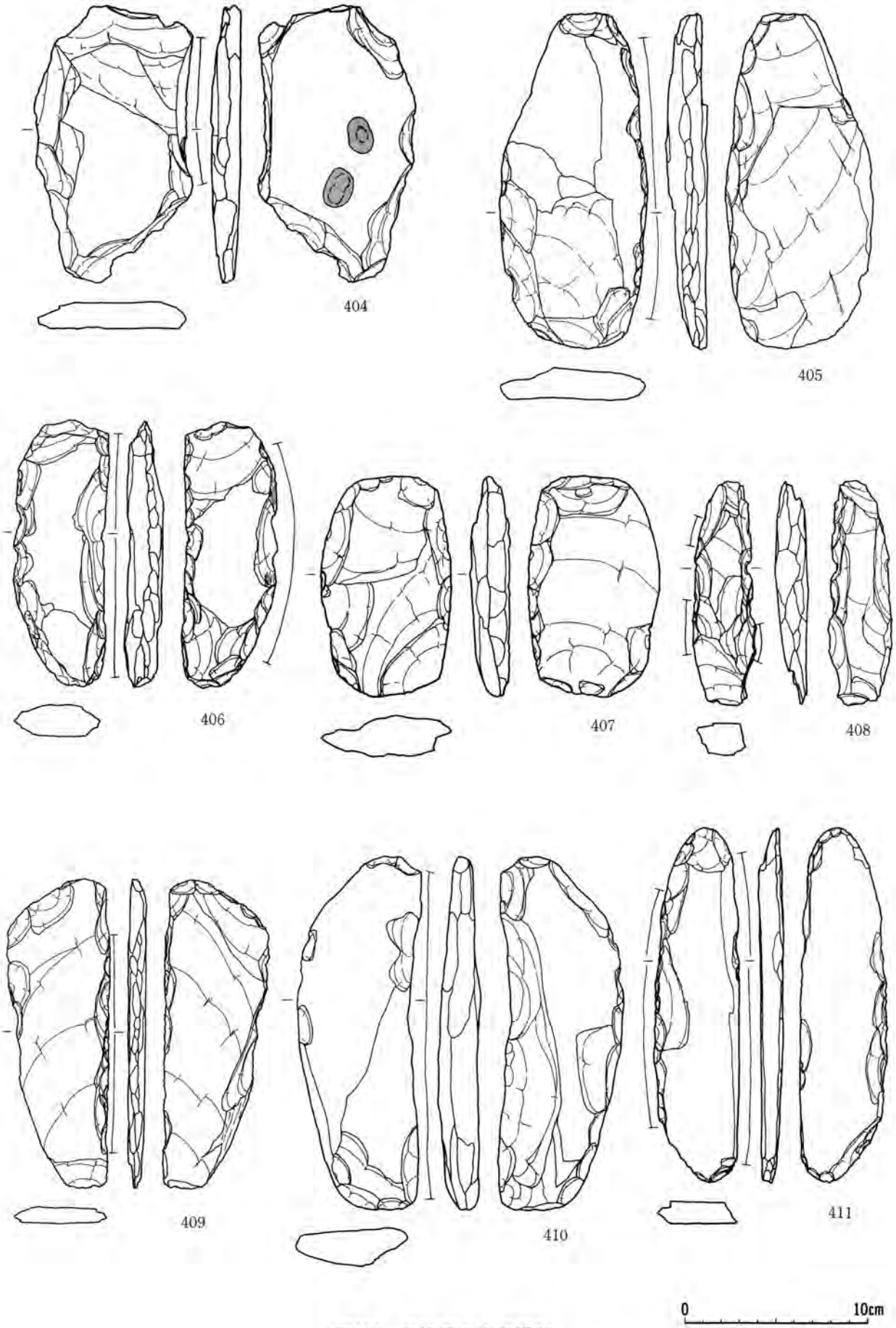


図111　C捨場出土石器(25)

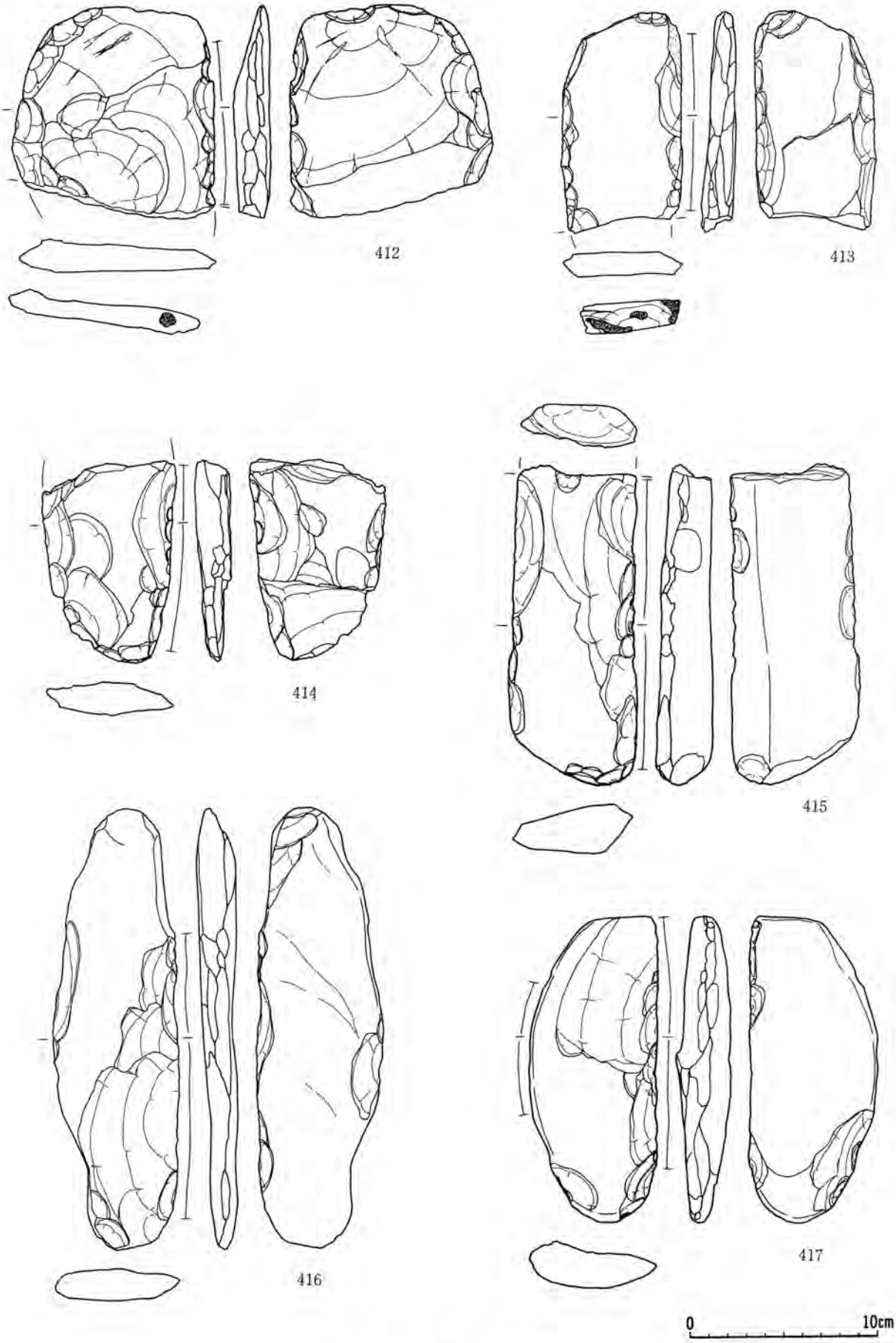


図112　C捨場出土石器(26)

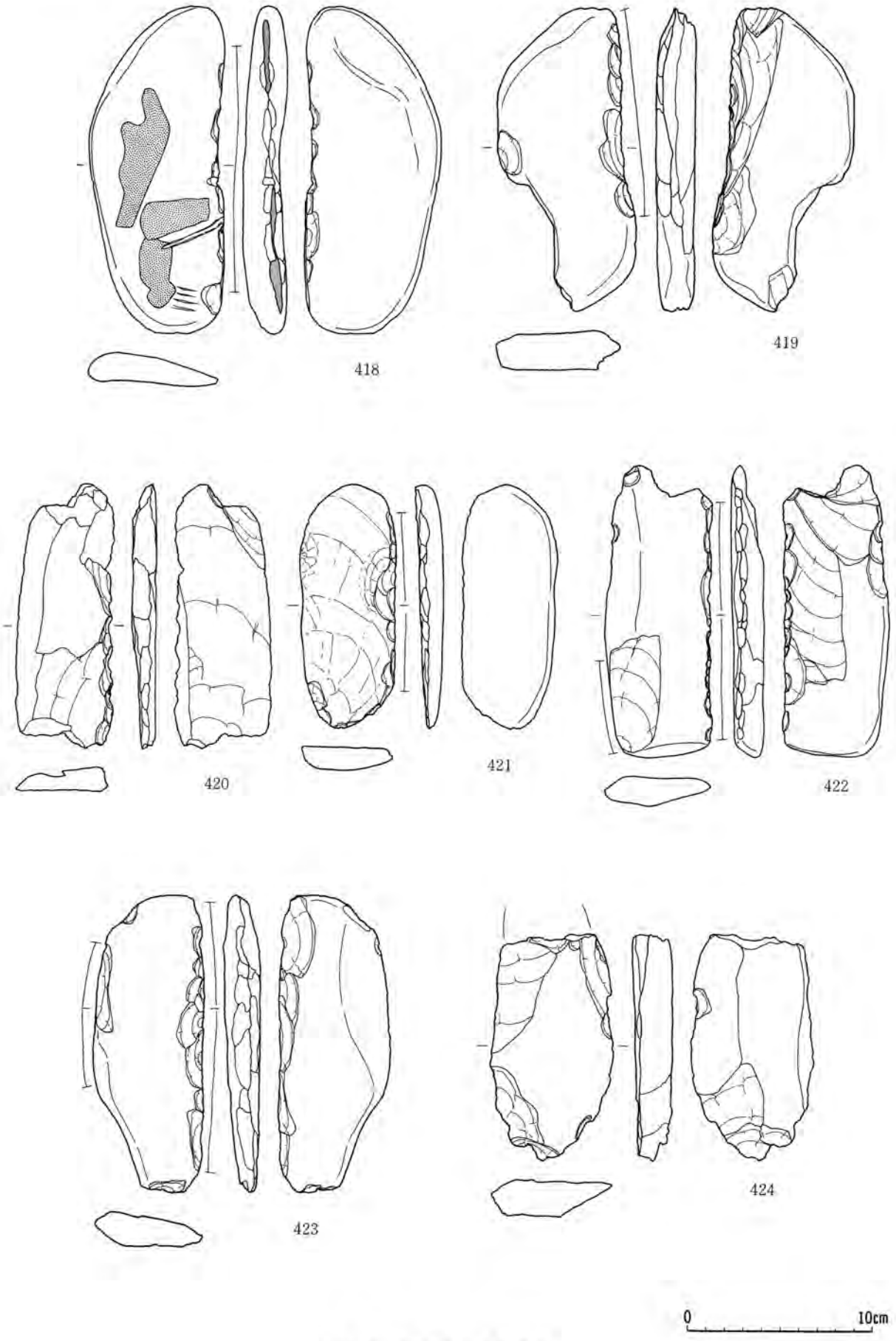


図113　C捨場出土石器(27)

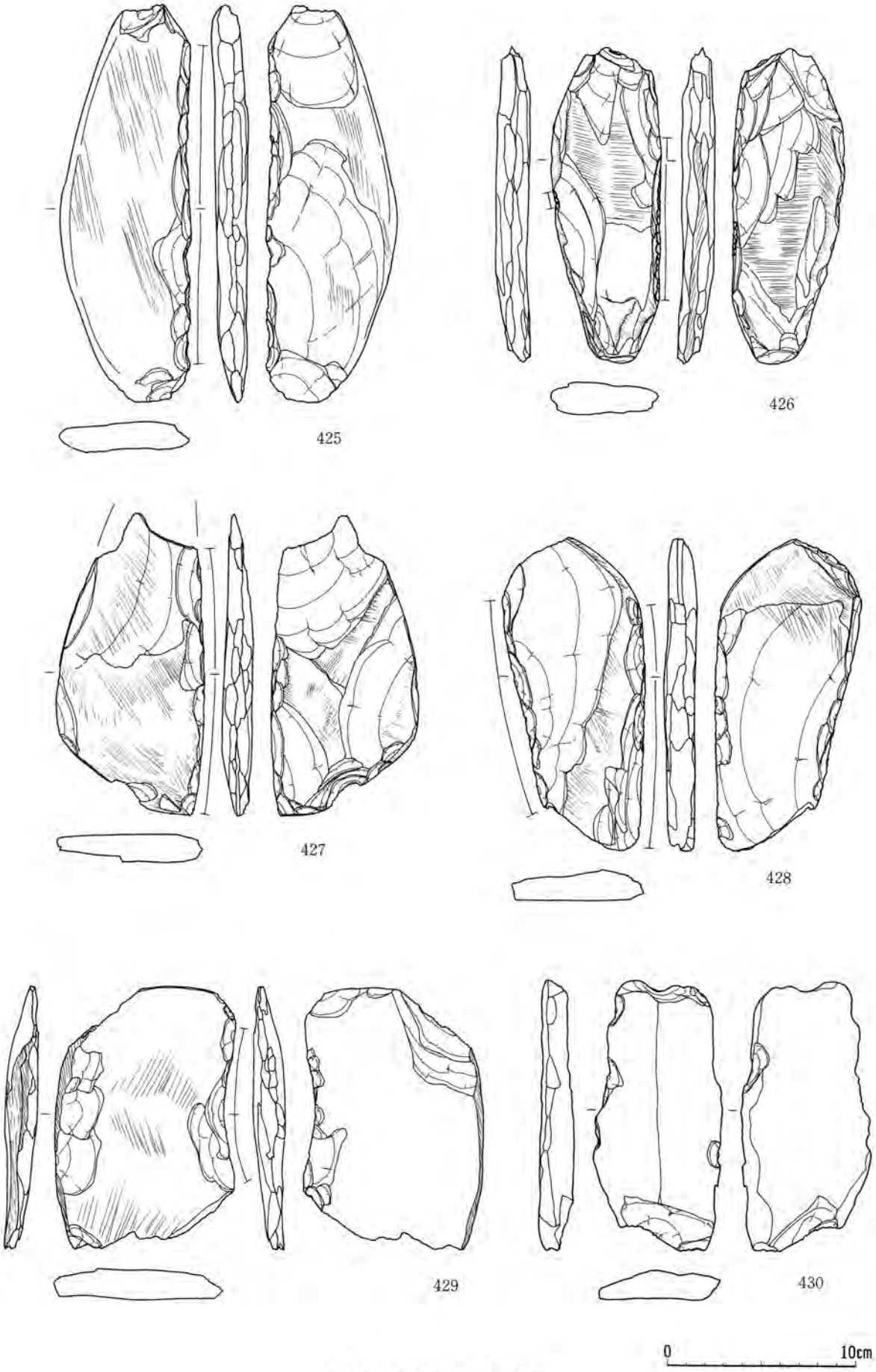


図114　C捨場出土石器(28)

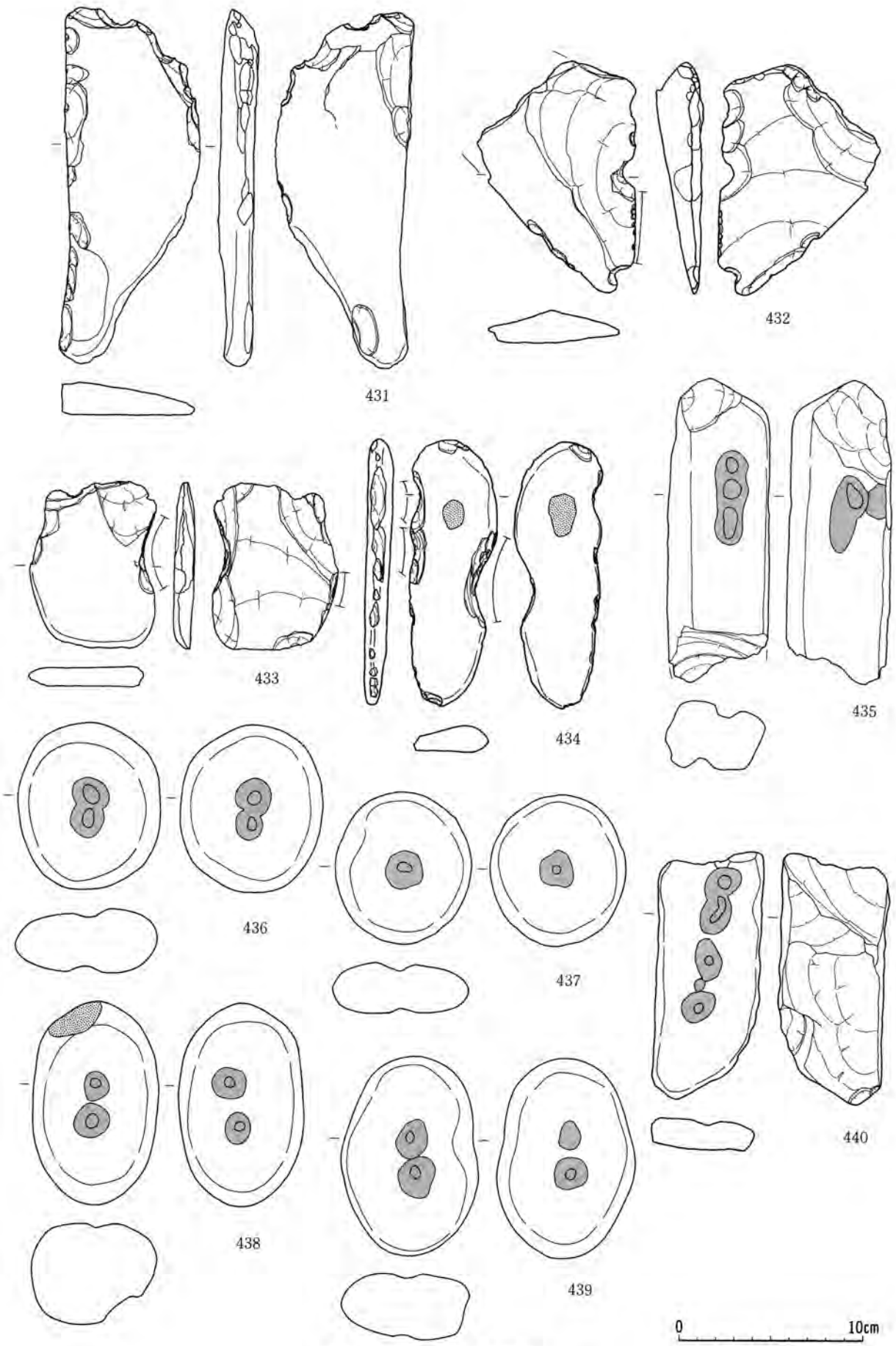


図115　C捨場出土石器(29)

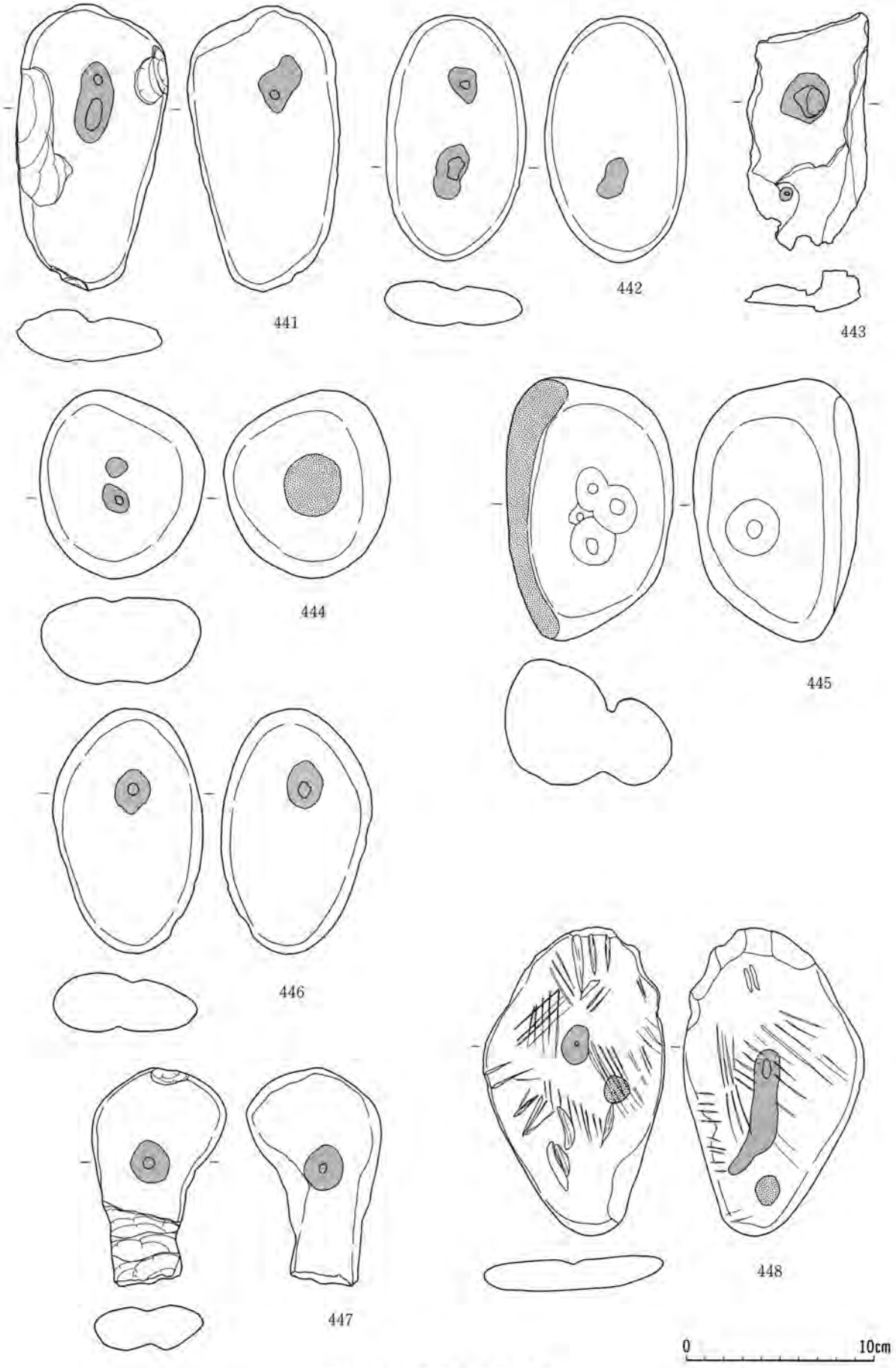


図116　C捨場出土石器(30)

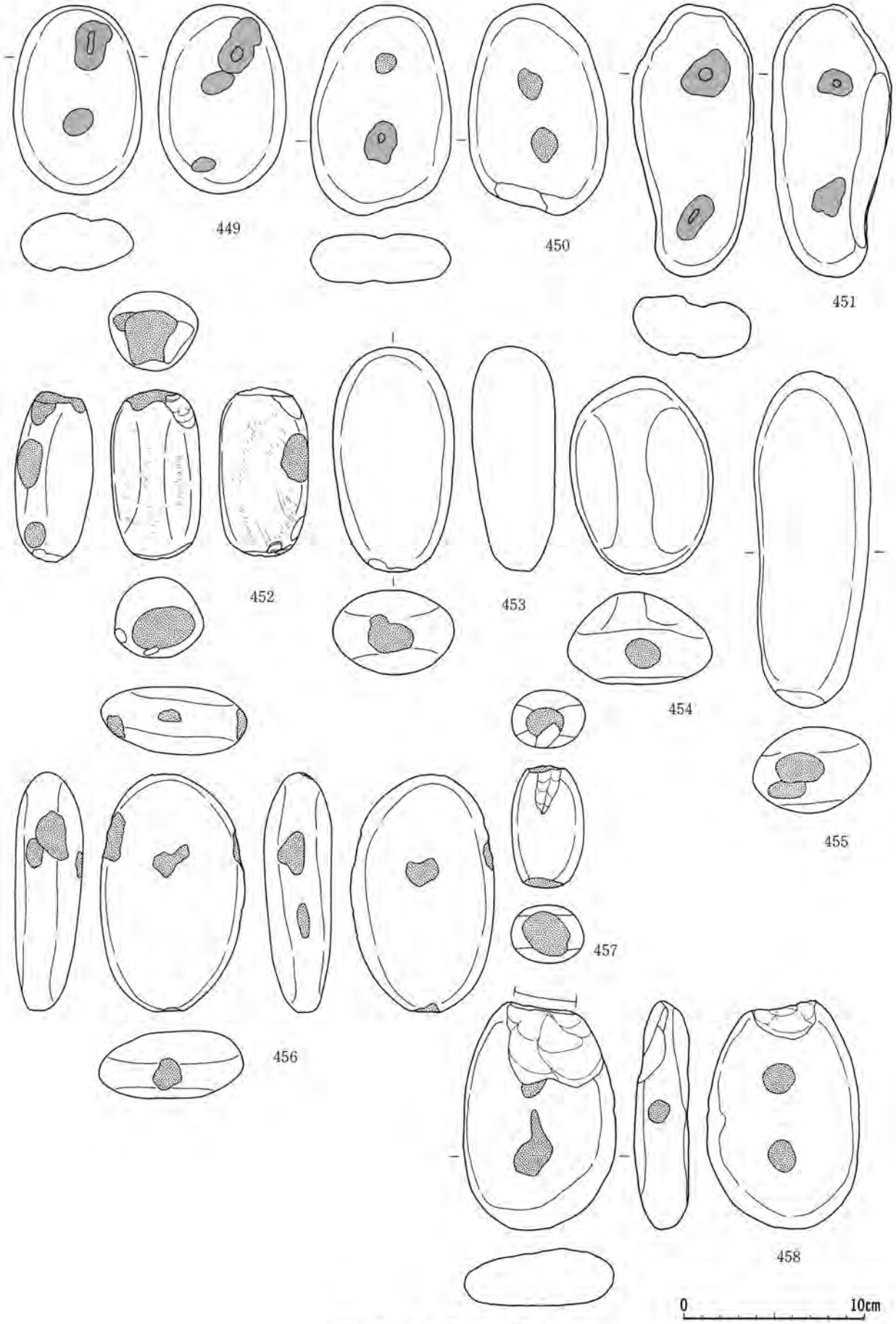


図117　C捨場出土石器(31)

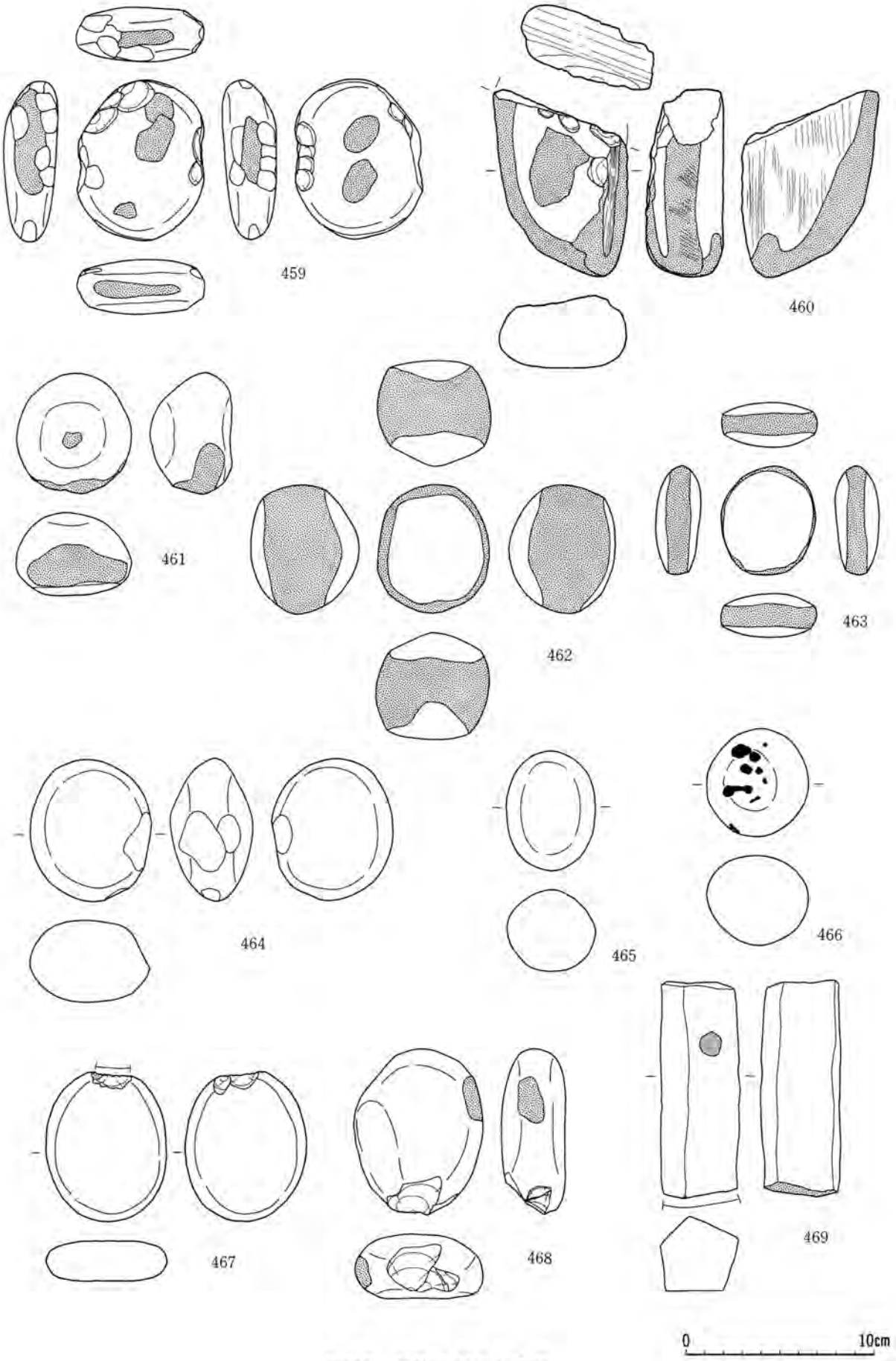


図118　C捨場出土石器(32)

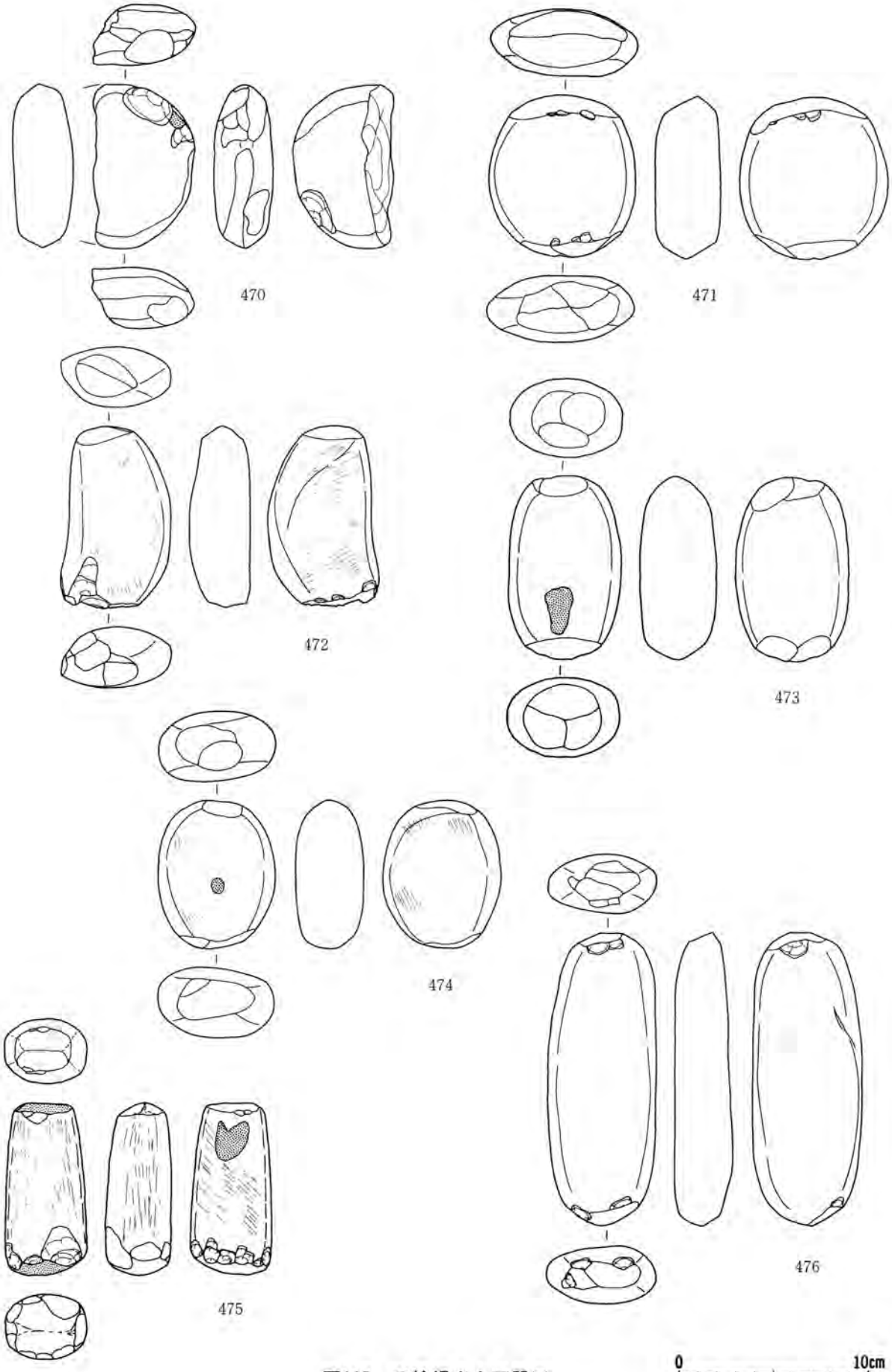


図119　C捨場出土石器(33)

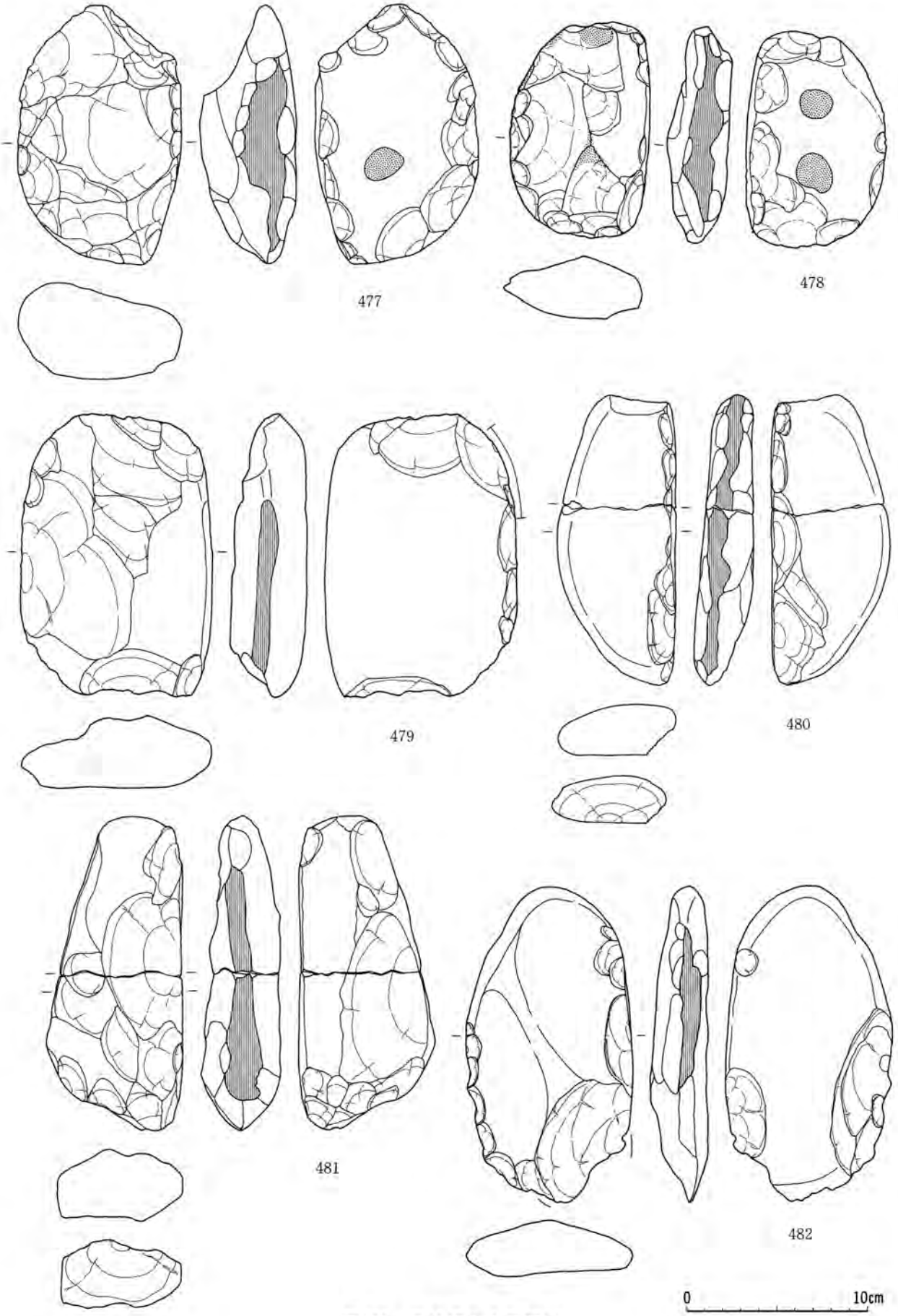


図120　C捨場出土石器(34)

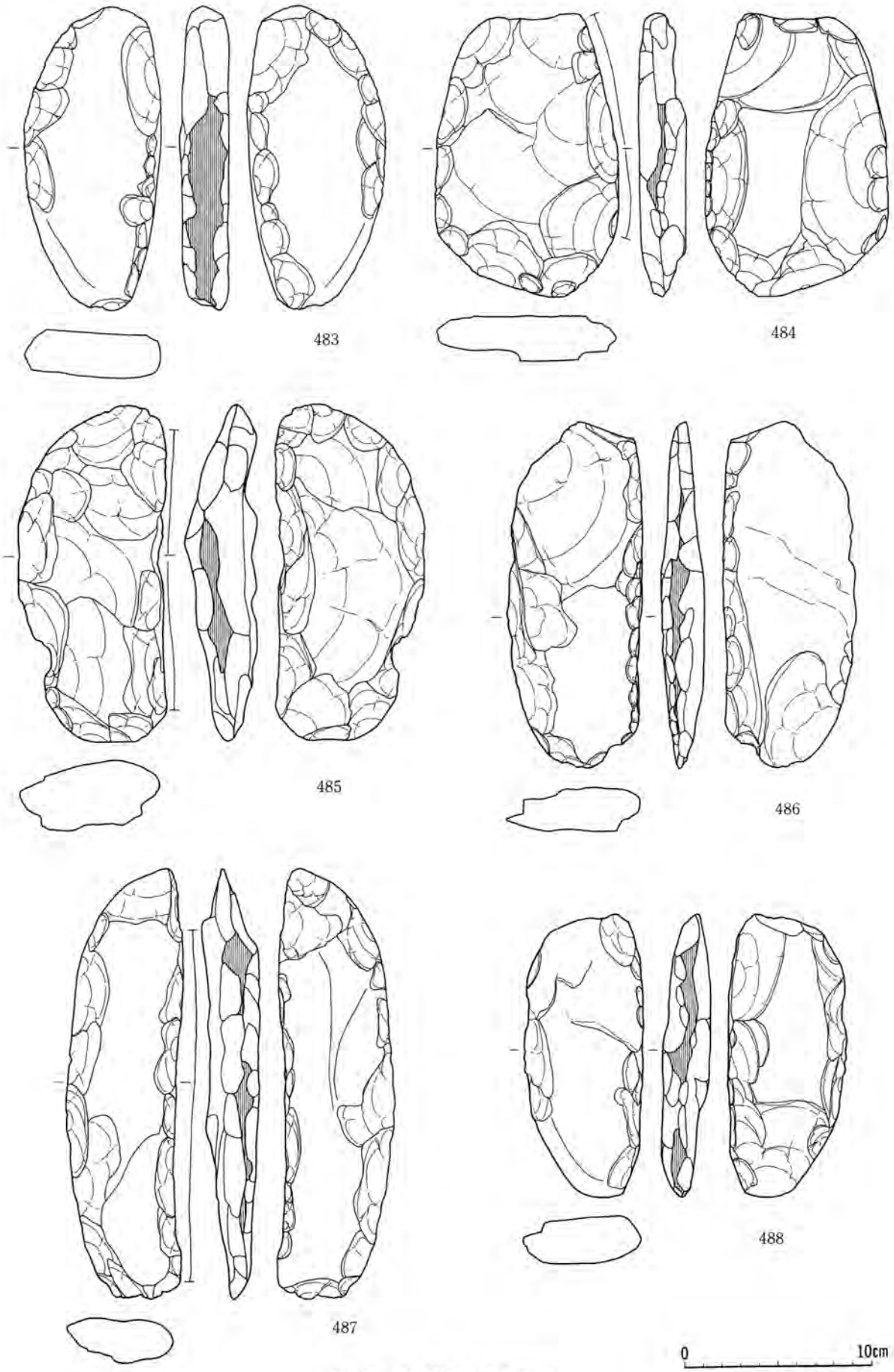


図121　C捨場出土石器(35)

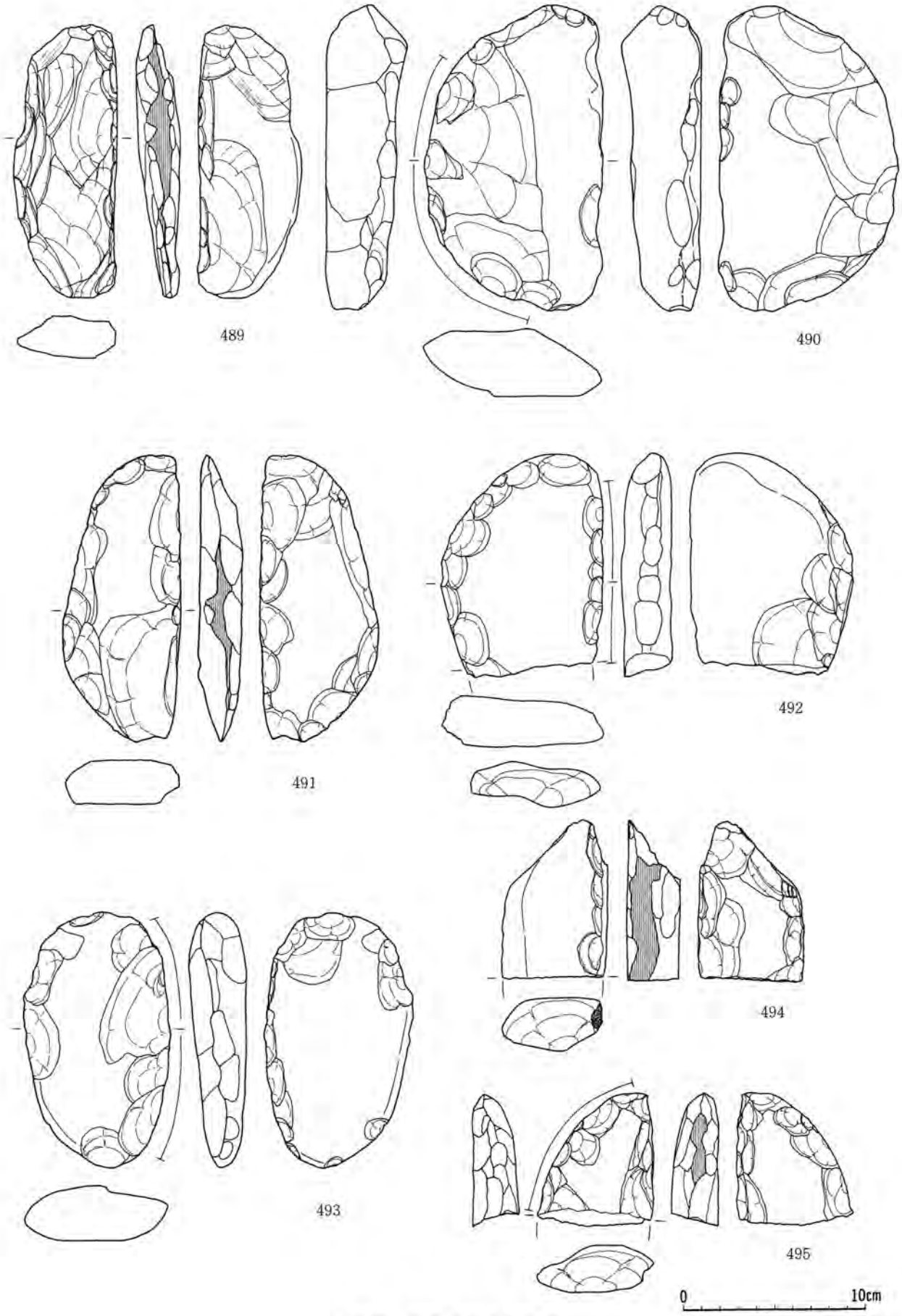


図122　C捨場出土石器(36)

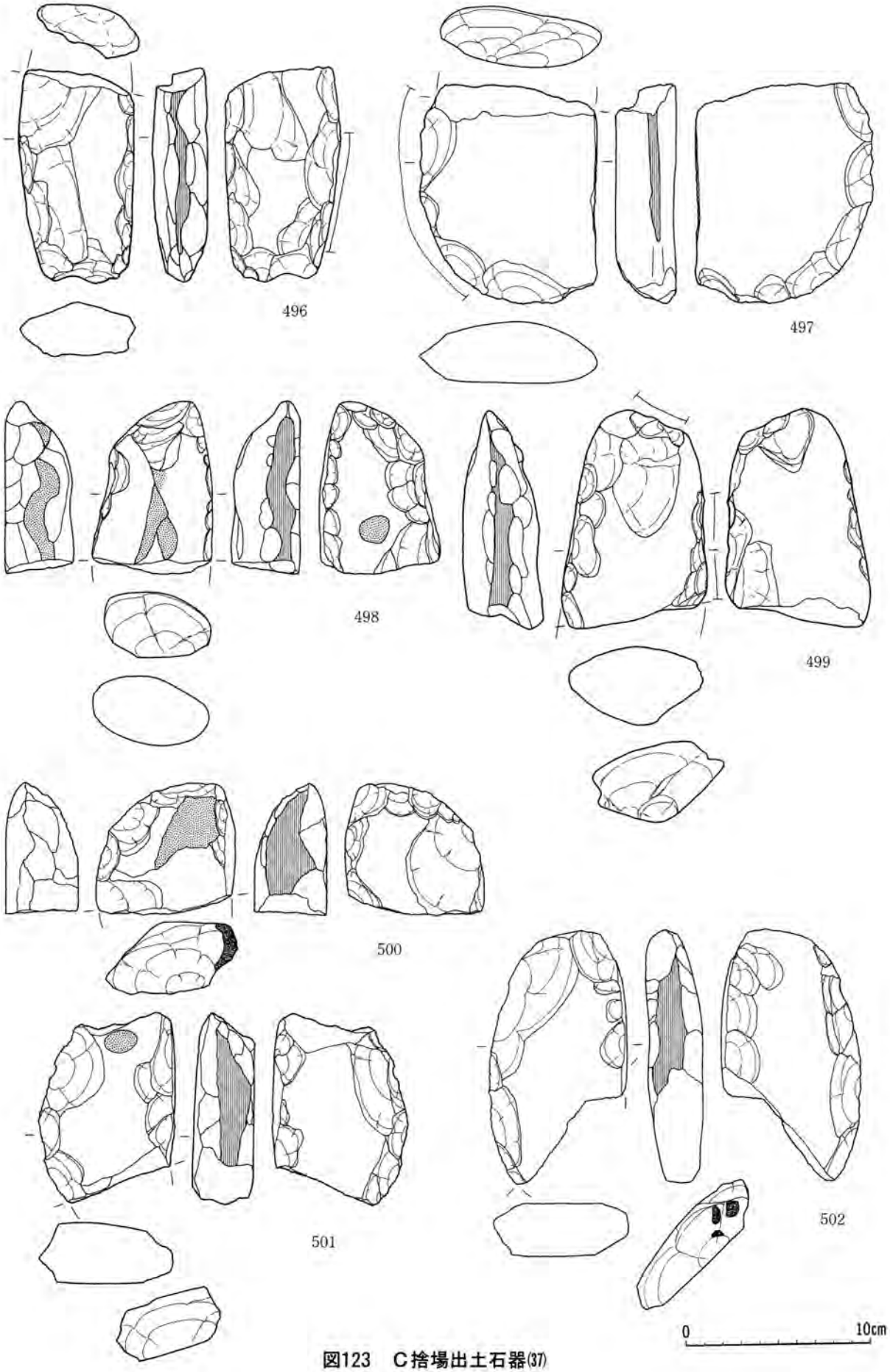


図123　C捨場出土石器(37)

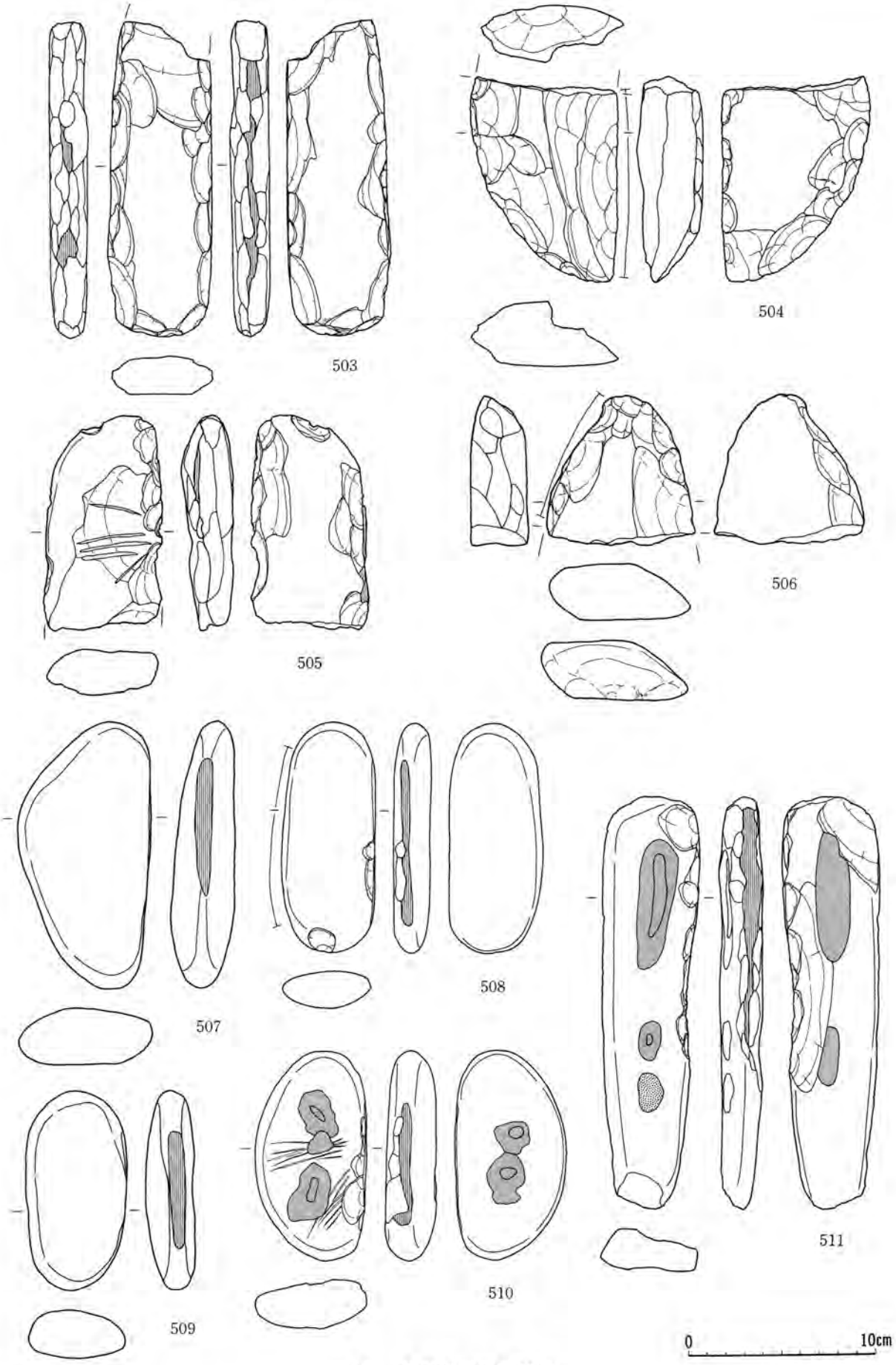


図124　C捨場出土石器(38)

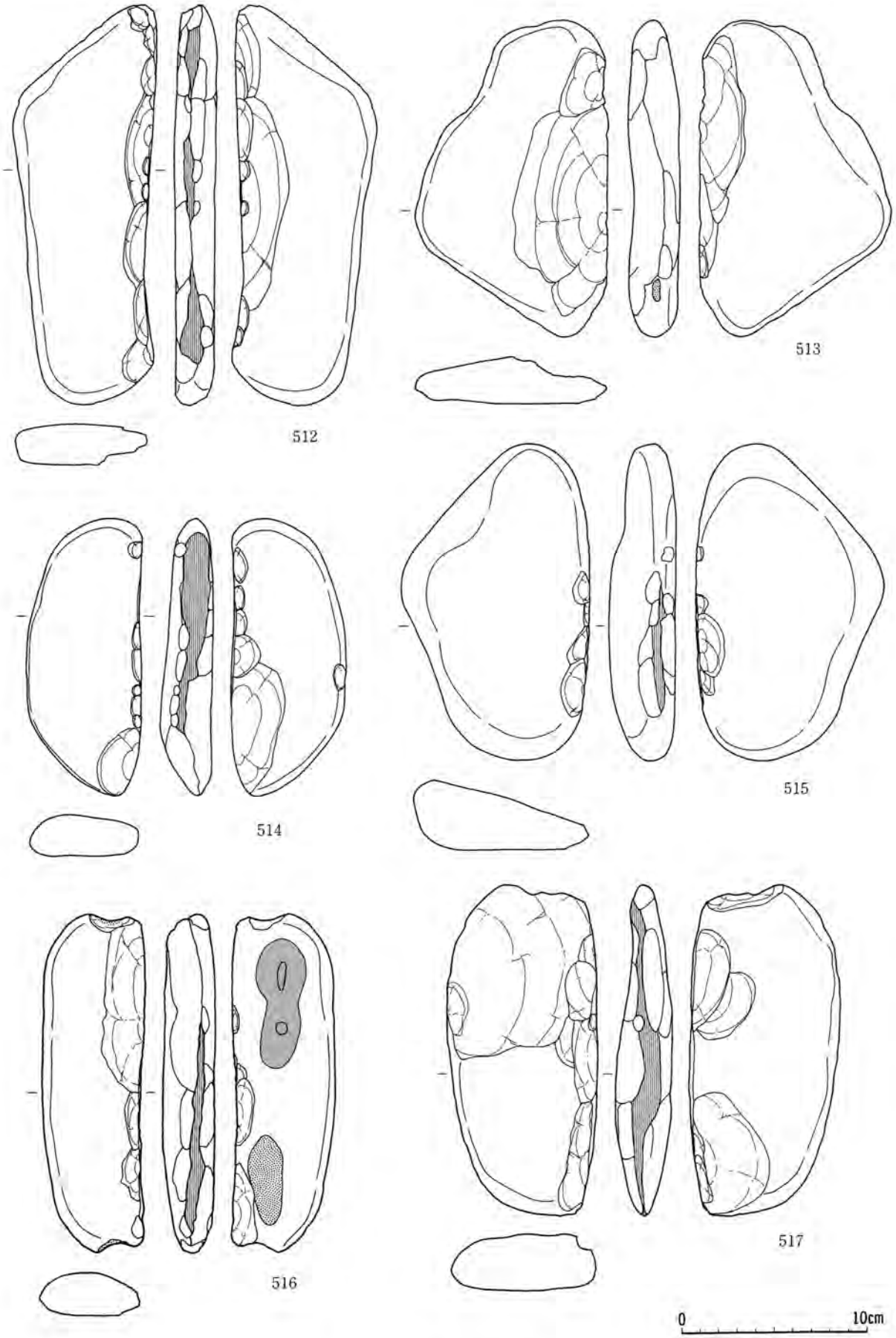


図125　C捨場出土石器(39)

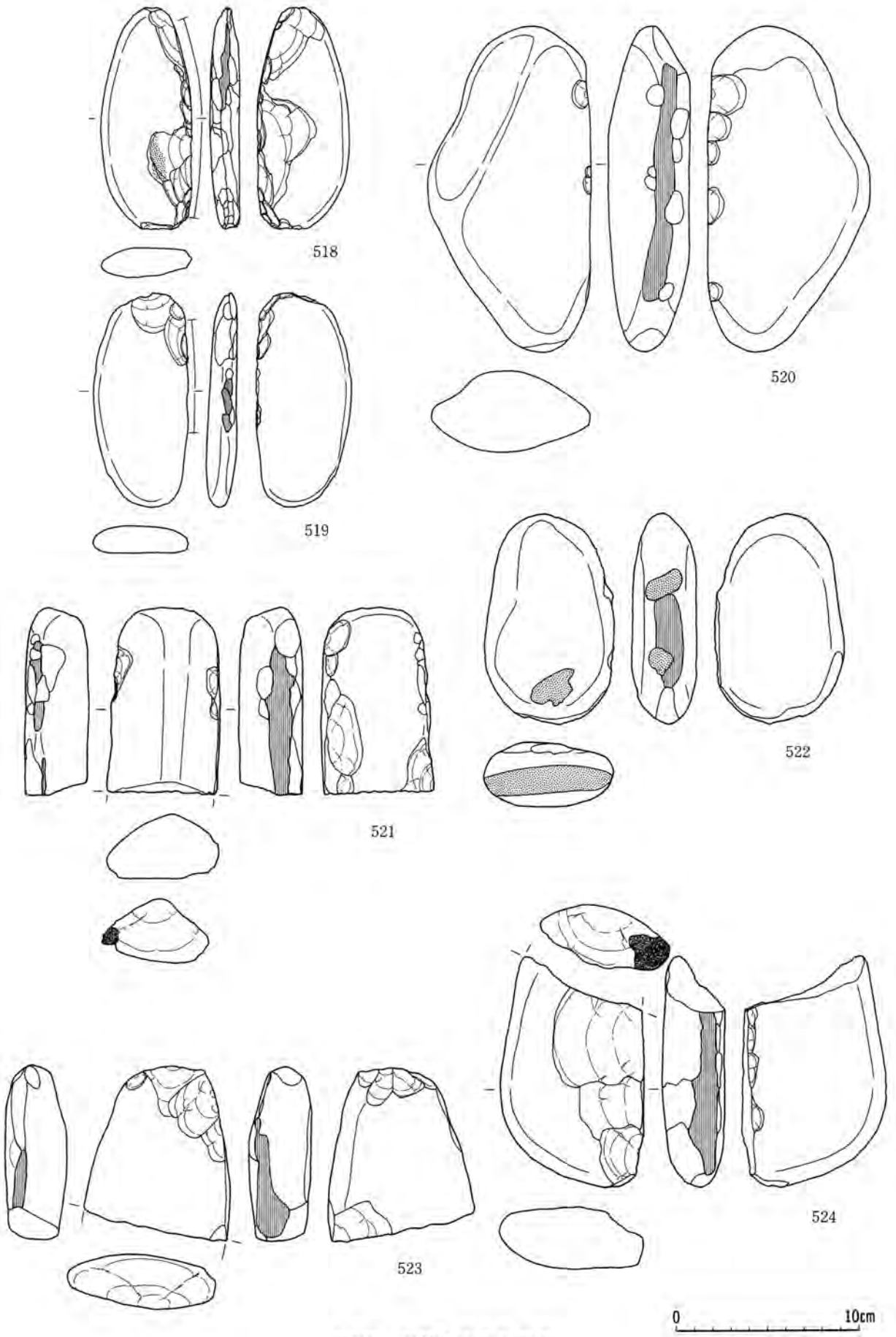


図126　C捨場出土石器(40)

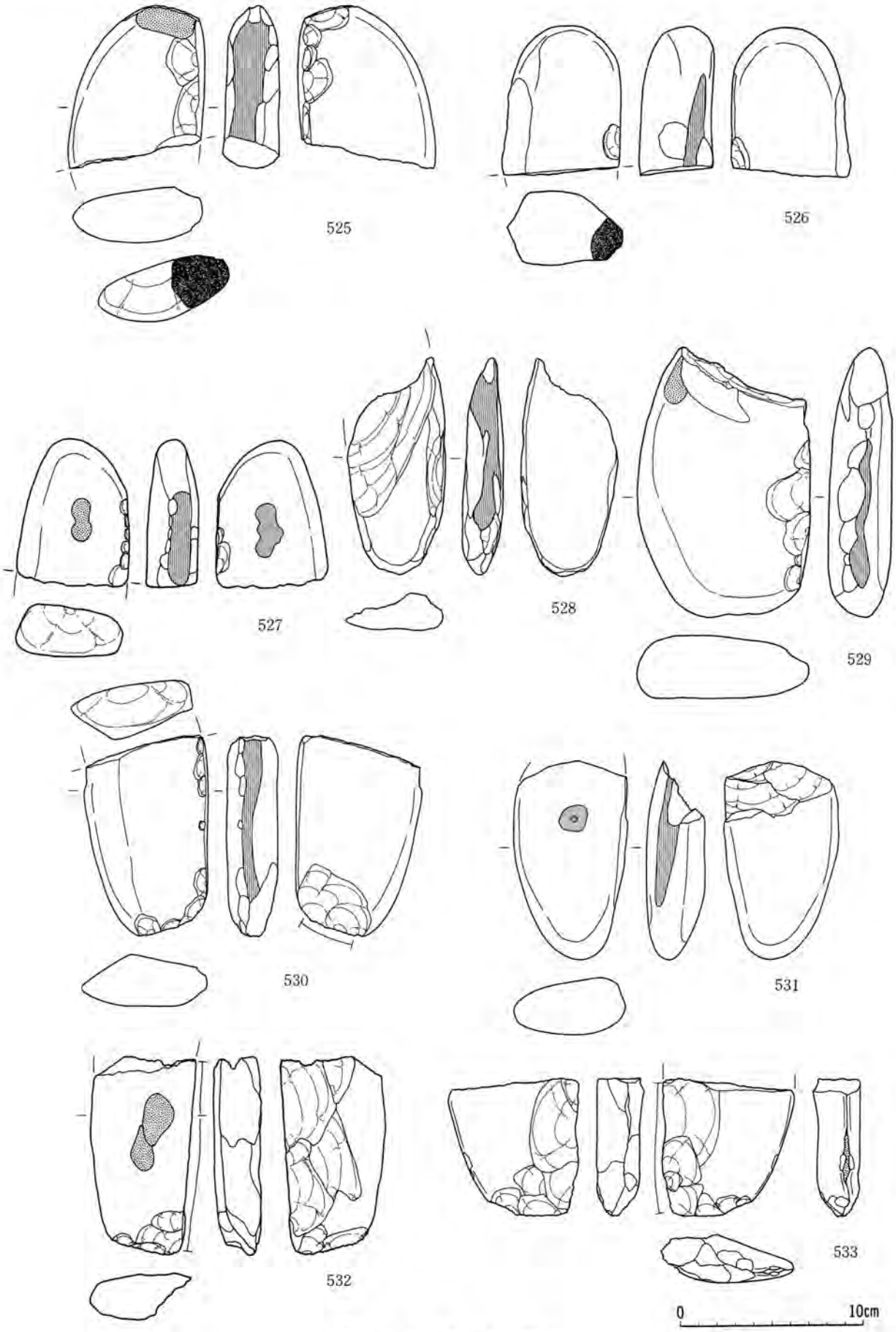


図127　C捨場出土石器(41)

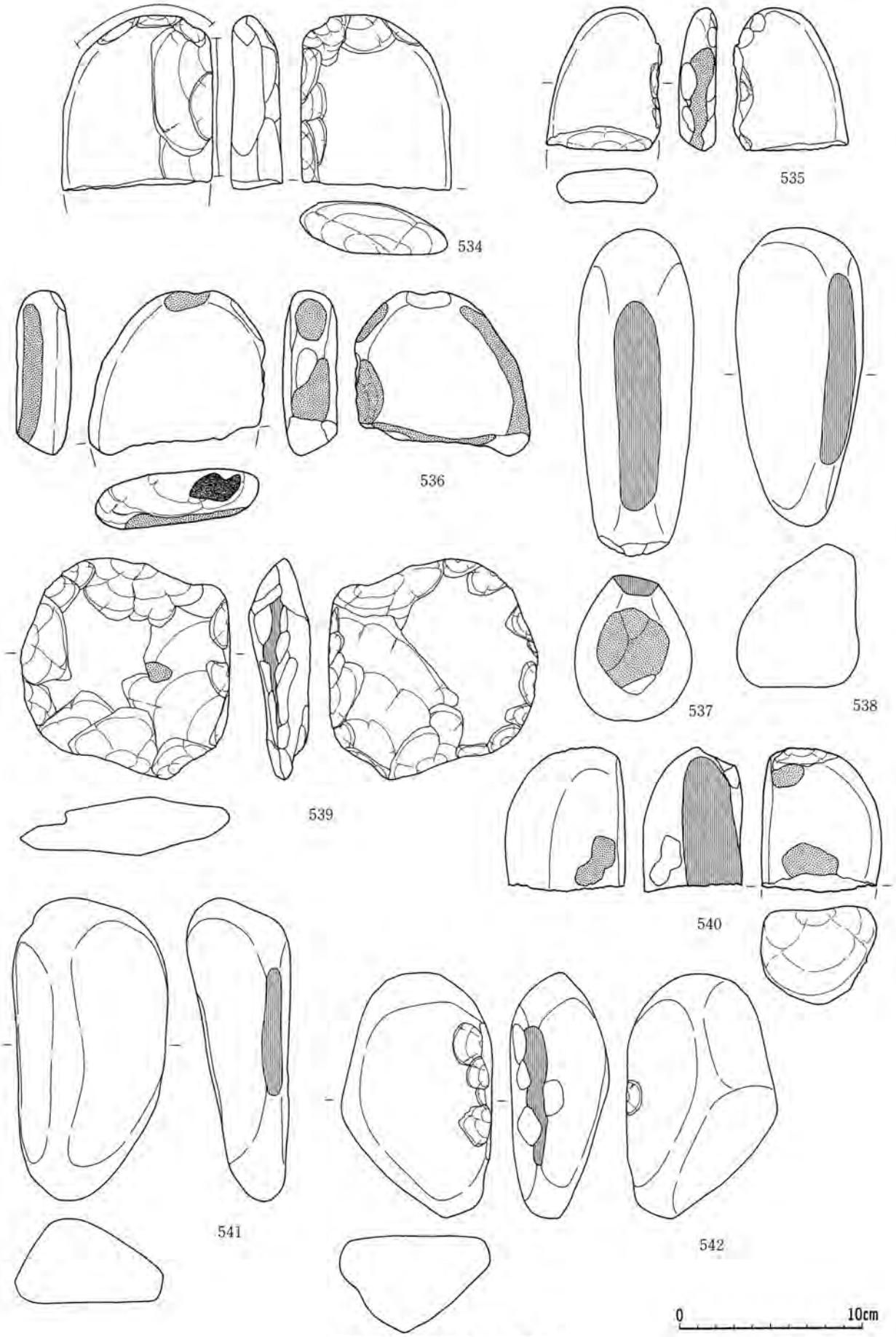


図128　C捨場出土石器(42)

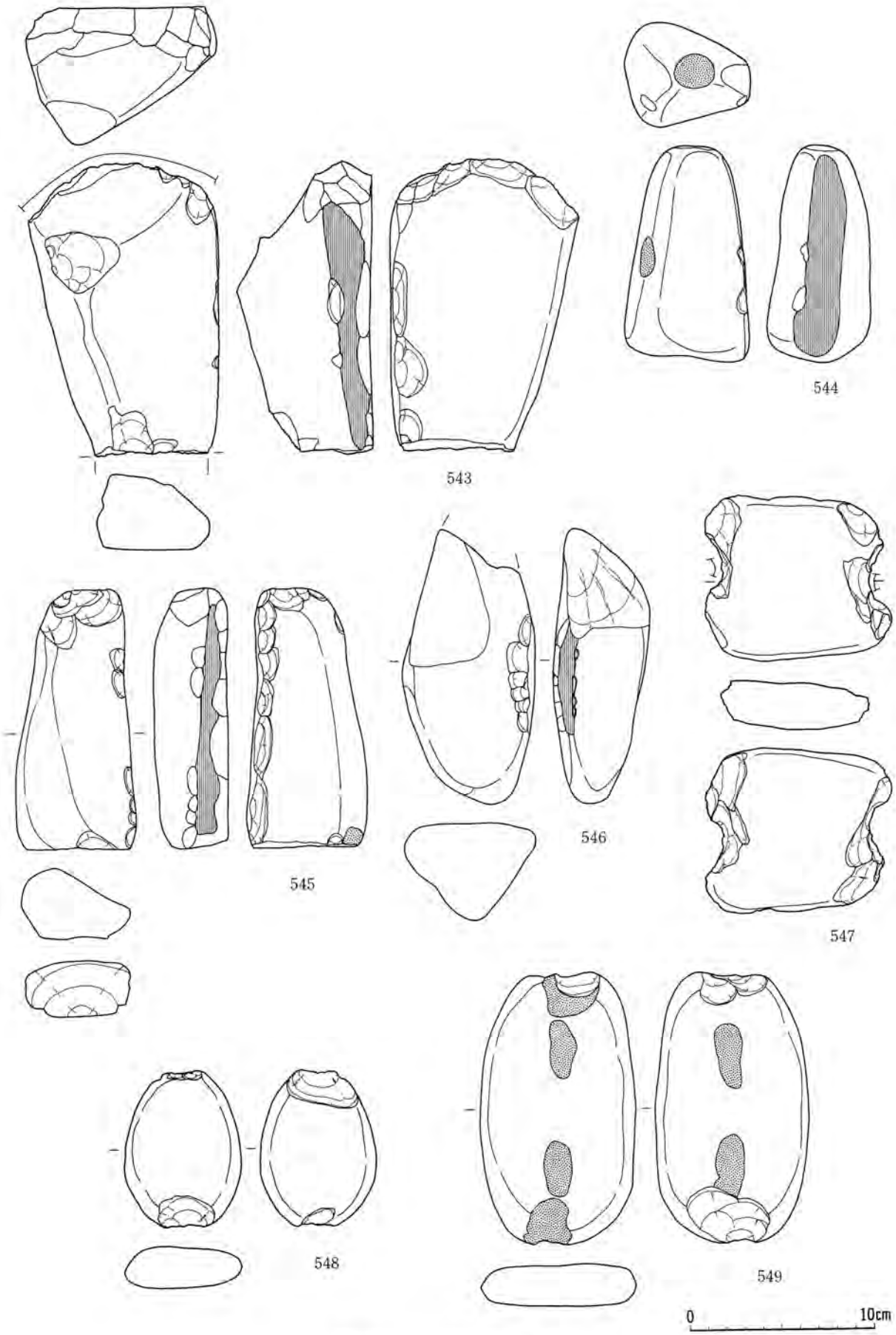


図129　C捨場出土石器(43)

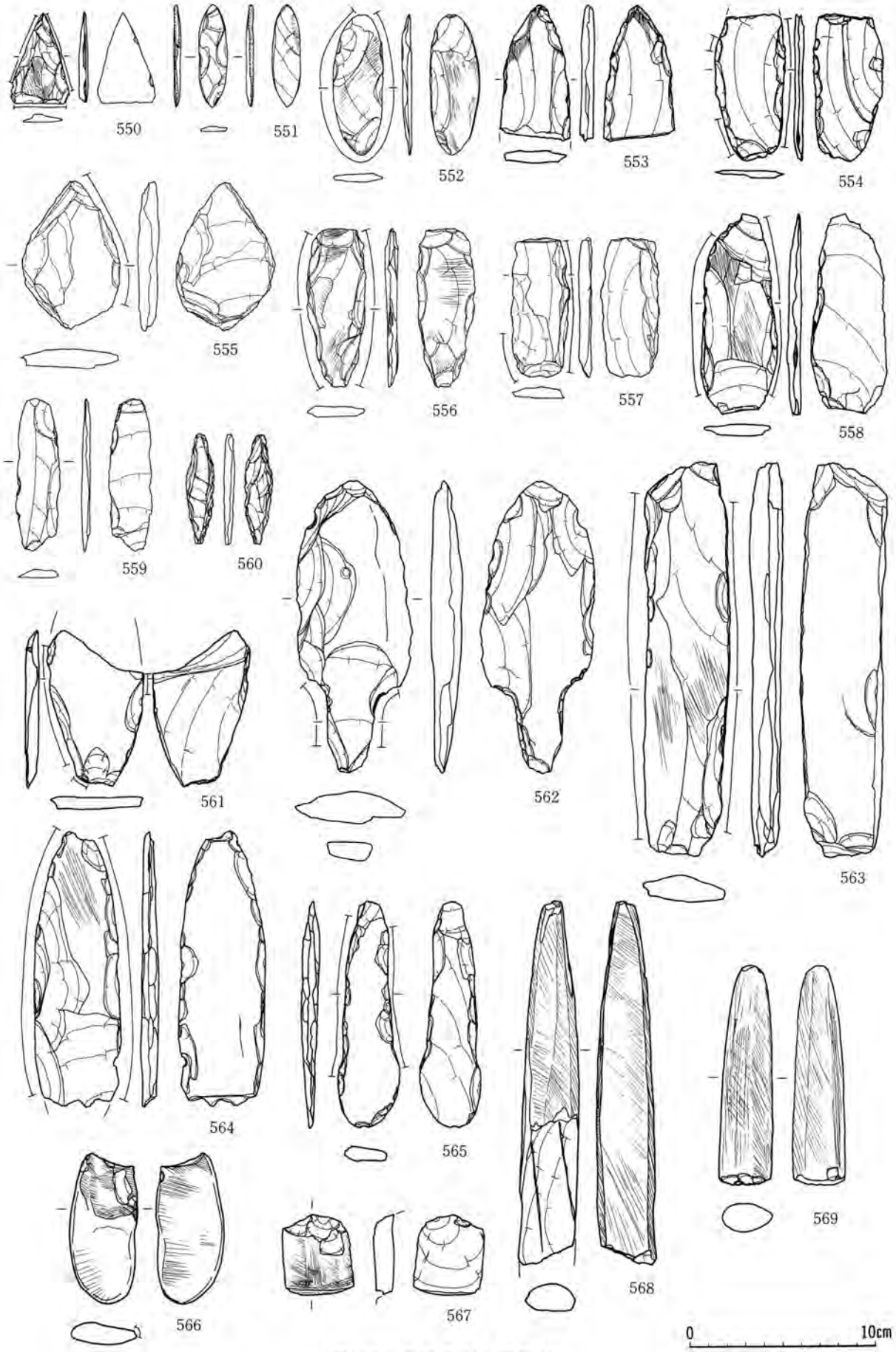
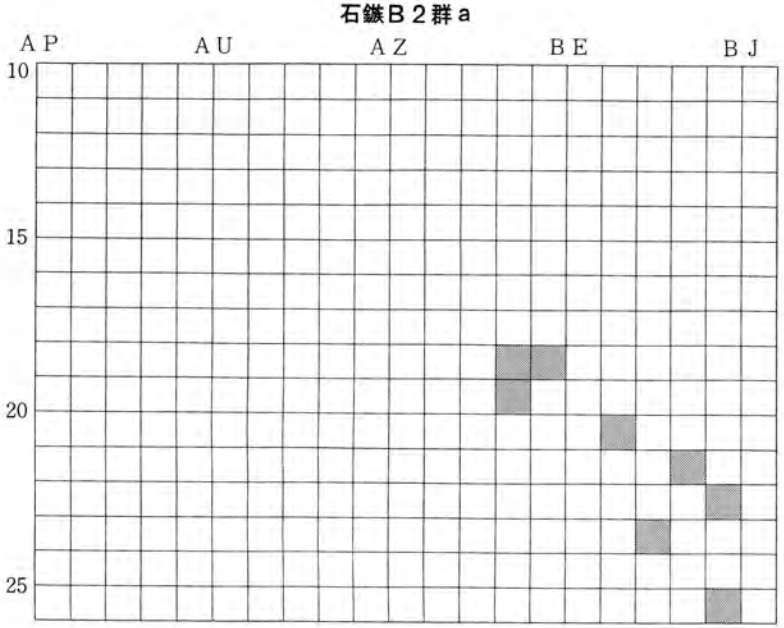
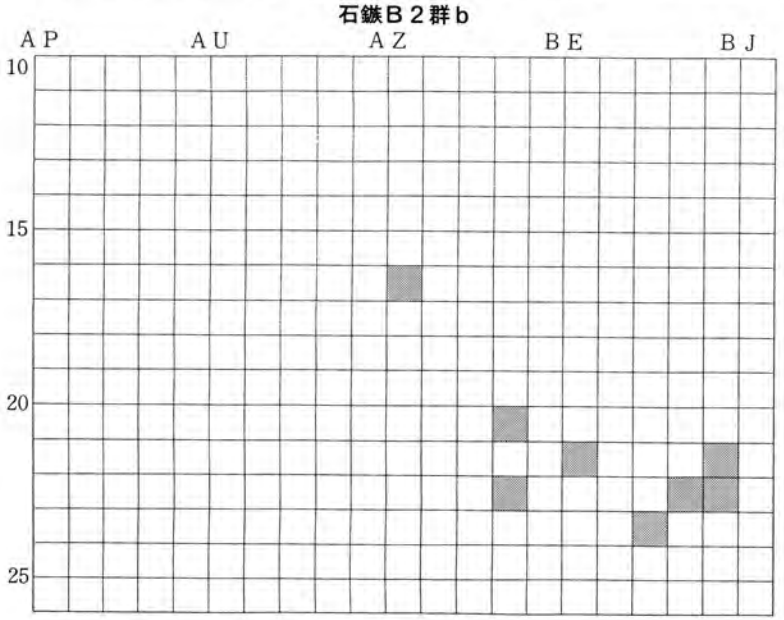
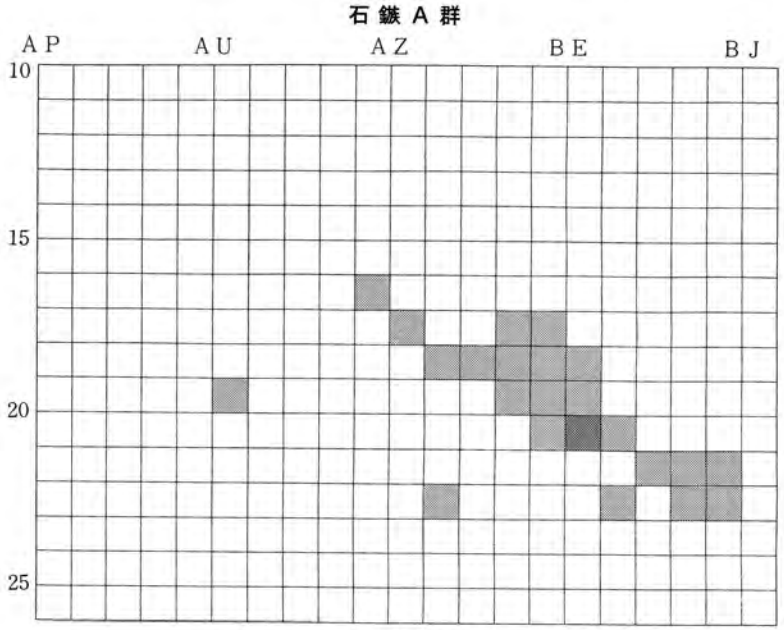


図130　C捨場出土石器(44)


石鏃B２群a
AP
AU
AZ
BE
BJ
10
15
20
25


石鏃B２群b
AP
AU
AZ
BE
BJ
10
15
20
25


石鏃A群
AP
AU
AZ
BE
BJ
10
15
20
25

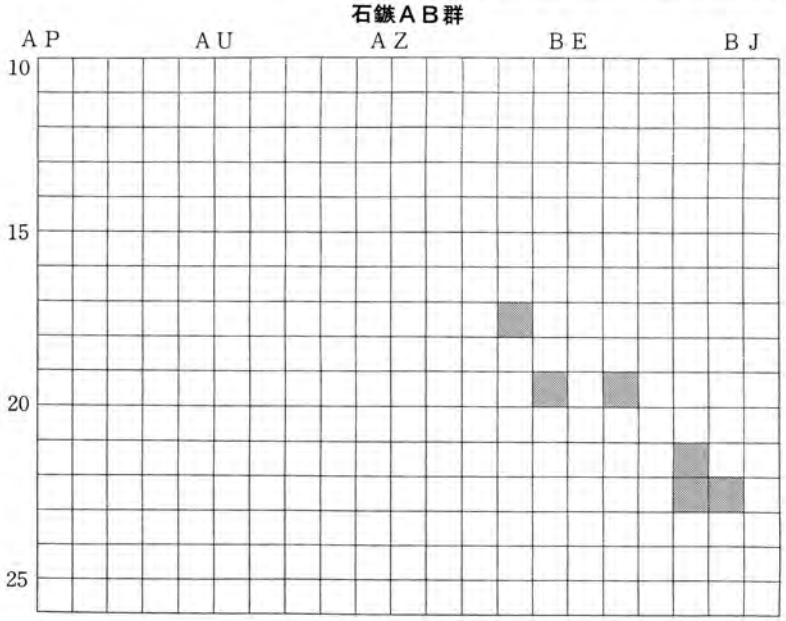

石鏃AB群
AP
AU
AZ
BE
BJ
10
15
20
25

図131　石器分布図(1)

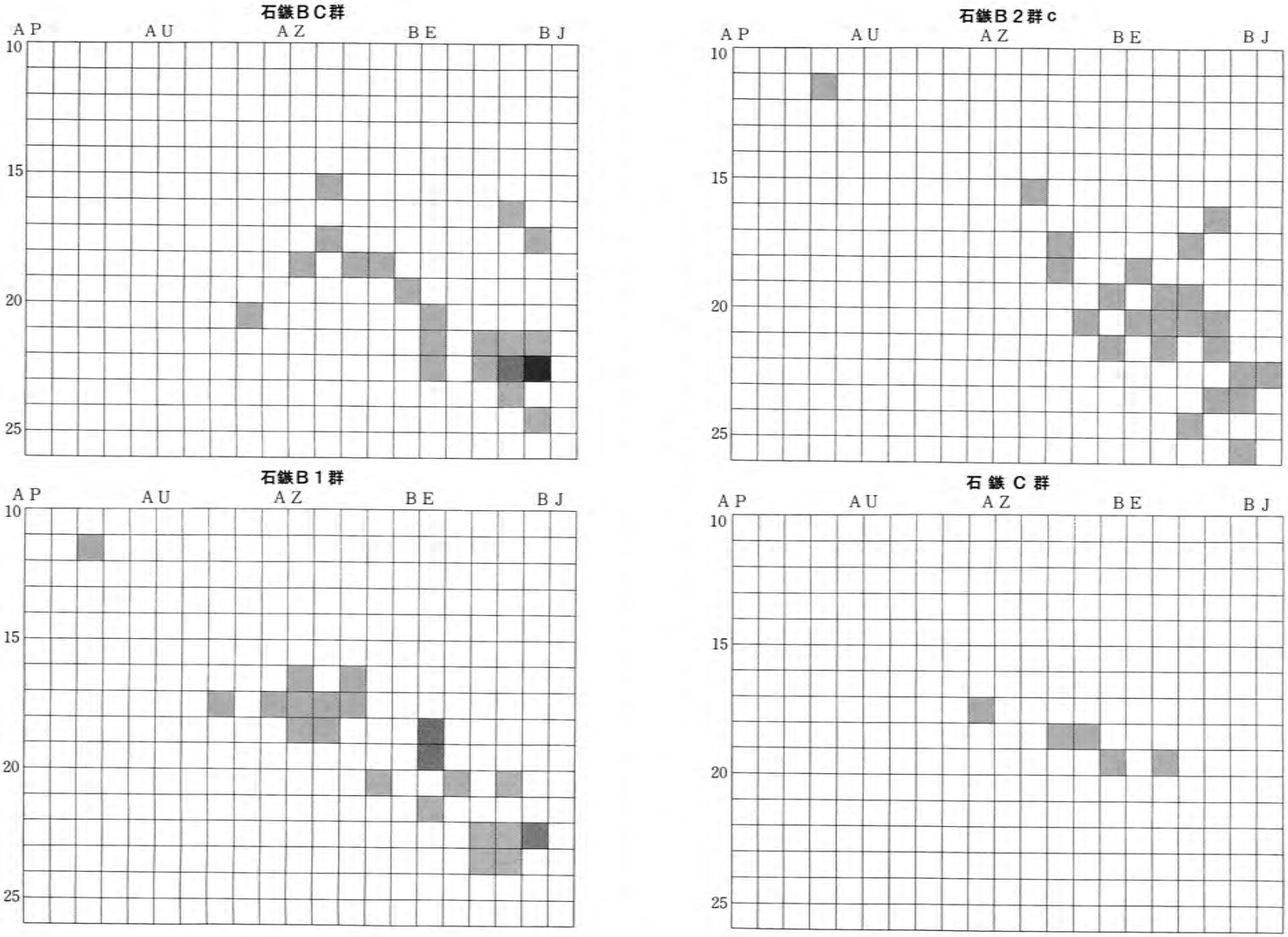


図132　石器分布図(2)

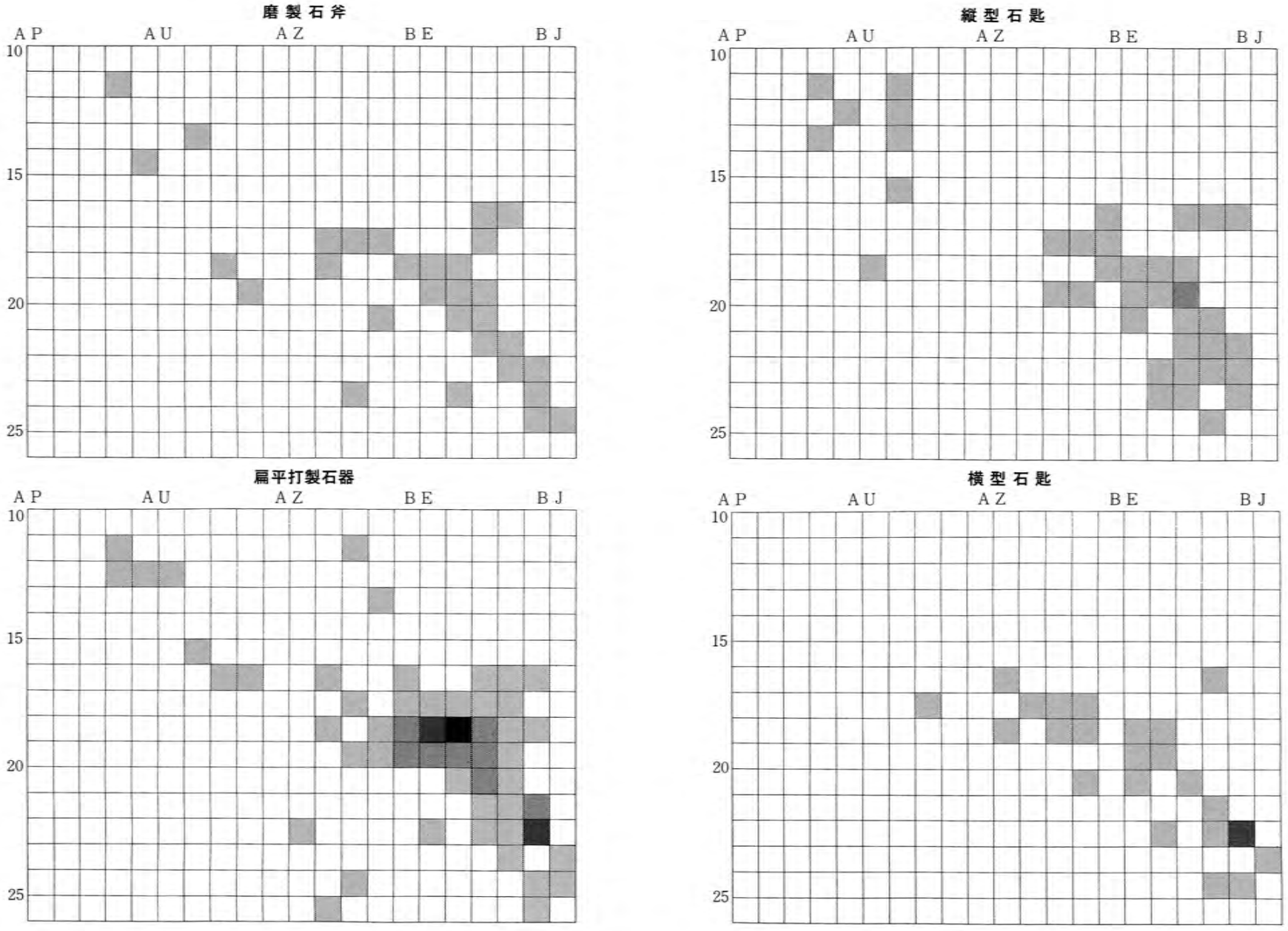
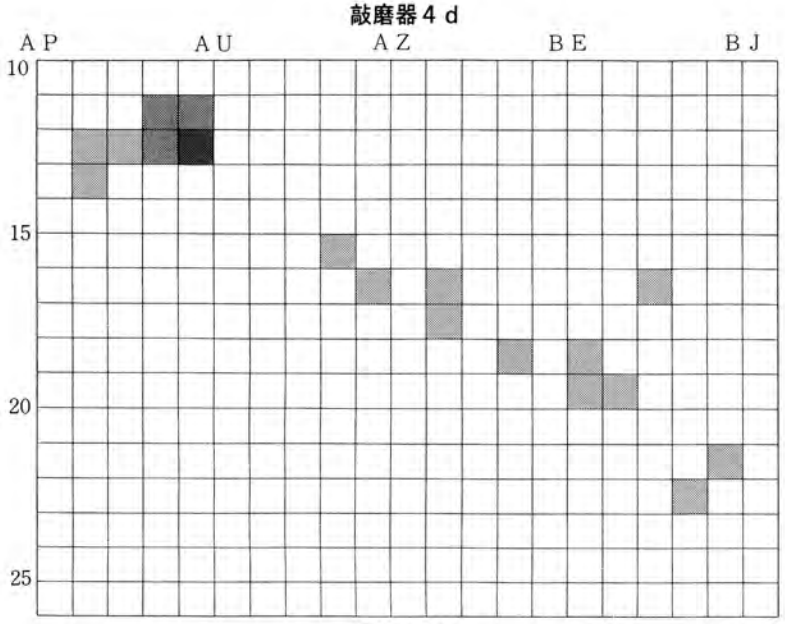
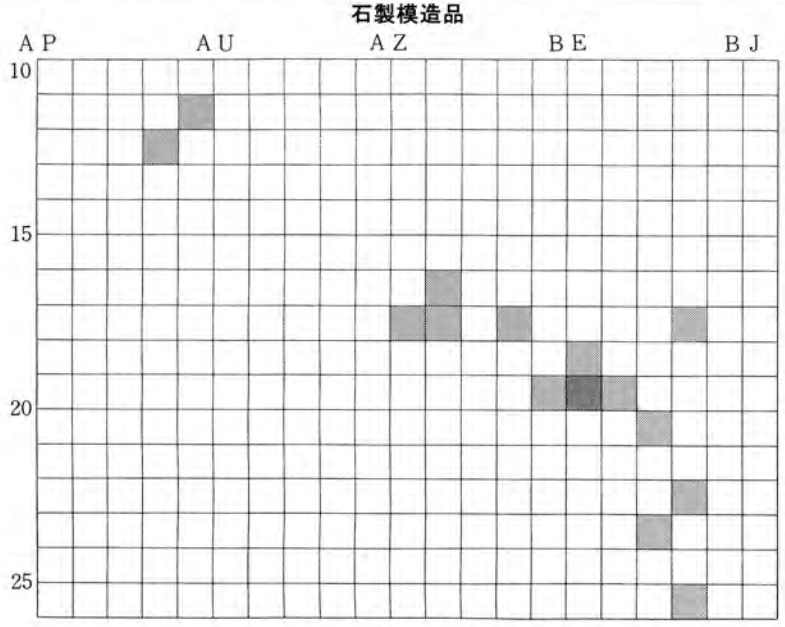
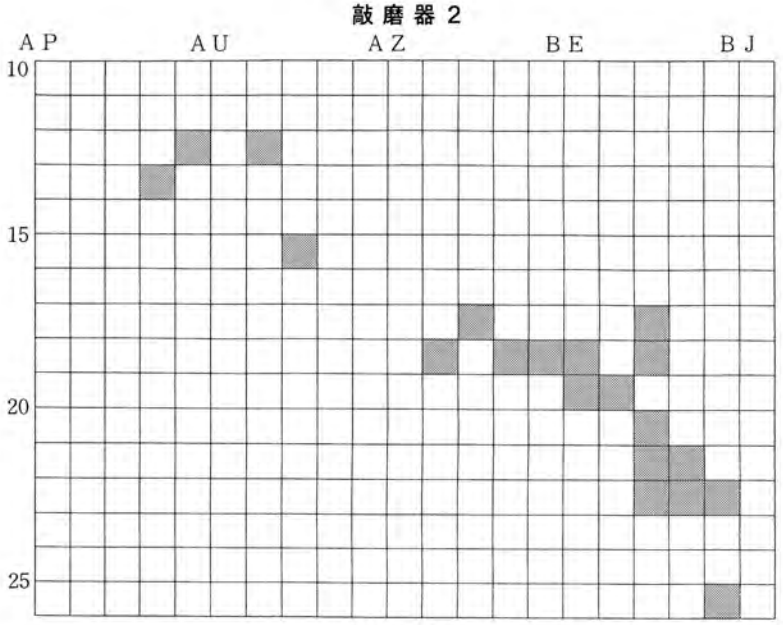


図133　石器分布図(3)


敲磨器4 d
AP
AU
AZ
BE
BJ
10
15
20
25


石製模造品
AP
AU
AZ
BE
BJ
10
15
20
25


敲 磨 器 2
AP
AU
AZ
BE
BJ
10
15
20
25

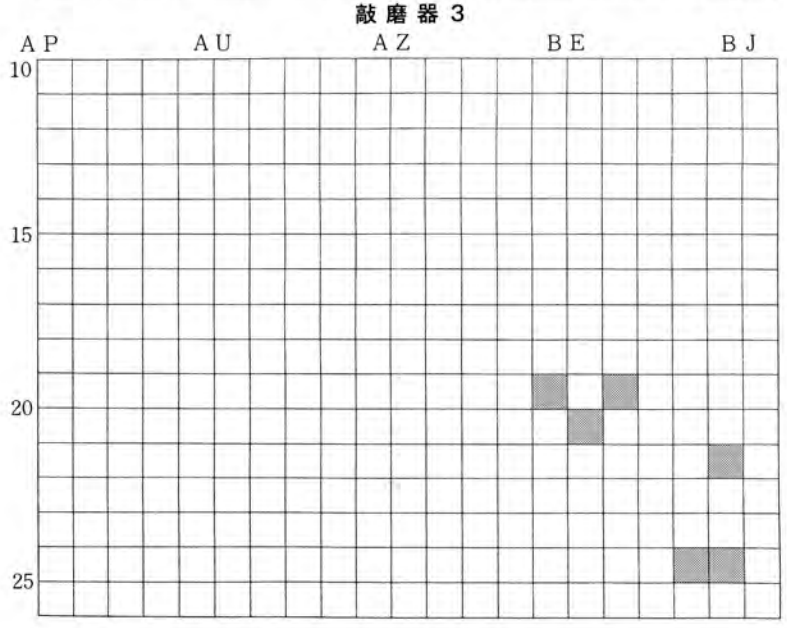

敲 磨 器 3
AP
AU
AZ
BE
BJ
10
15
20
25

図134　石器分布図(4)

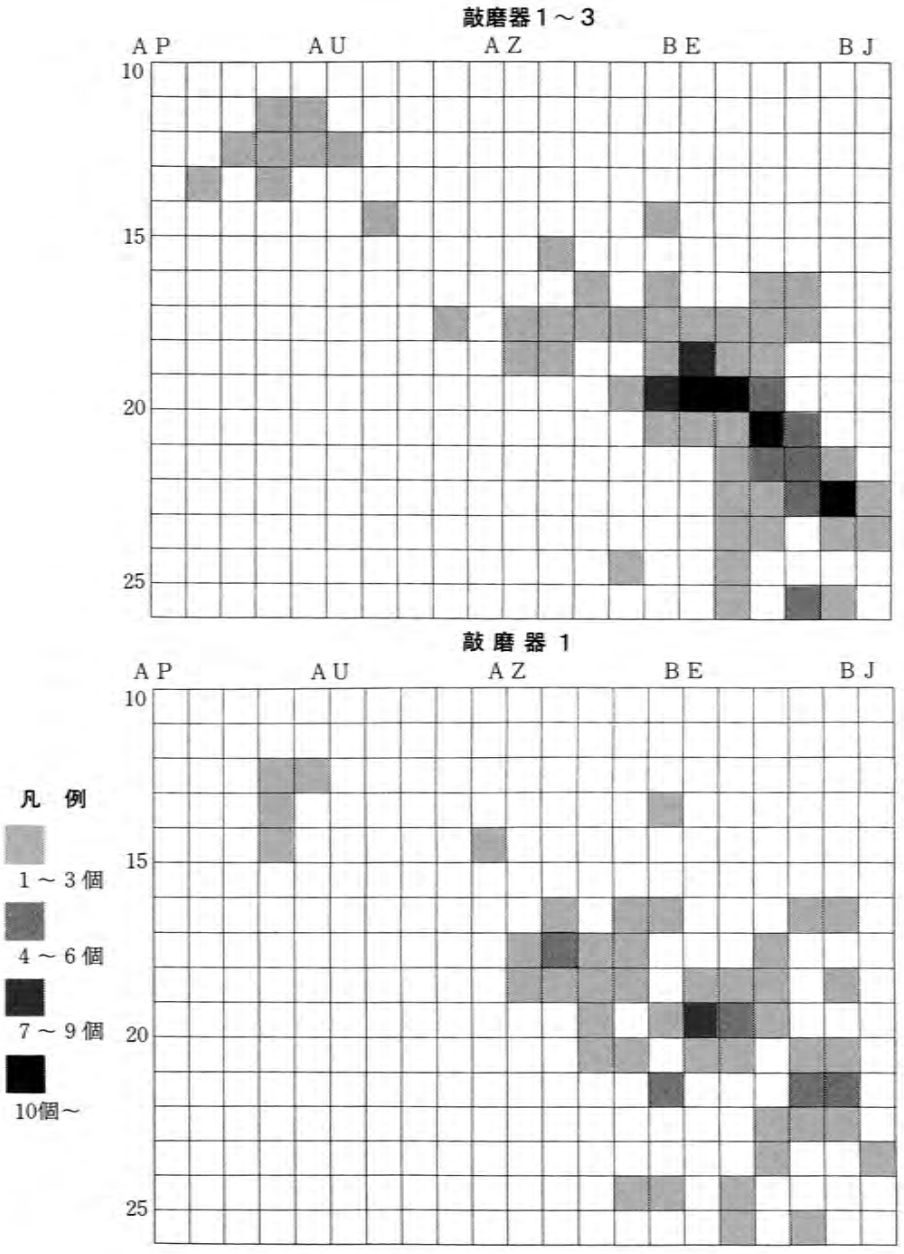

敲磨器1～3
A P
A U
A Z
B E
B J
10
15
20
25
敲 磨 器 1
A P
A U
A Z
B E
B J
10
15
20
25
凡 例
1～3個
4～6個
7～9個
10個～

図135 石器分布図(5)

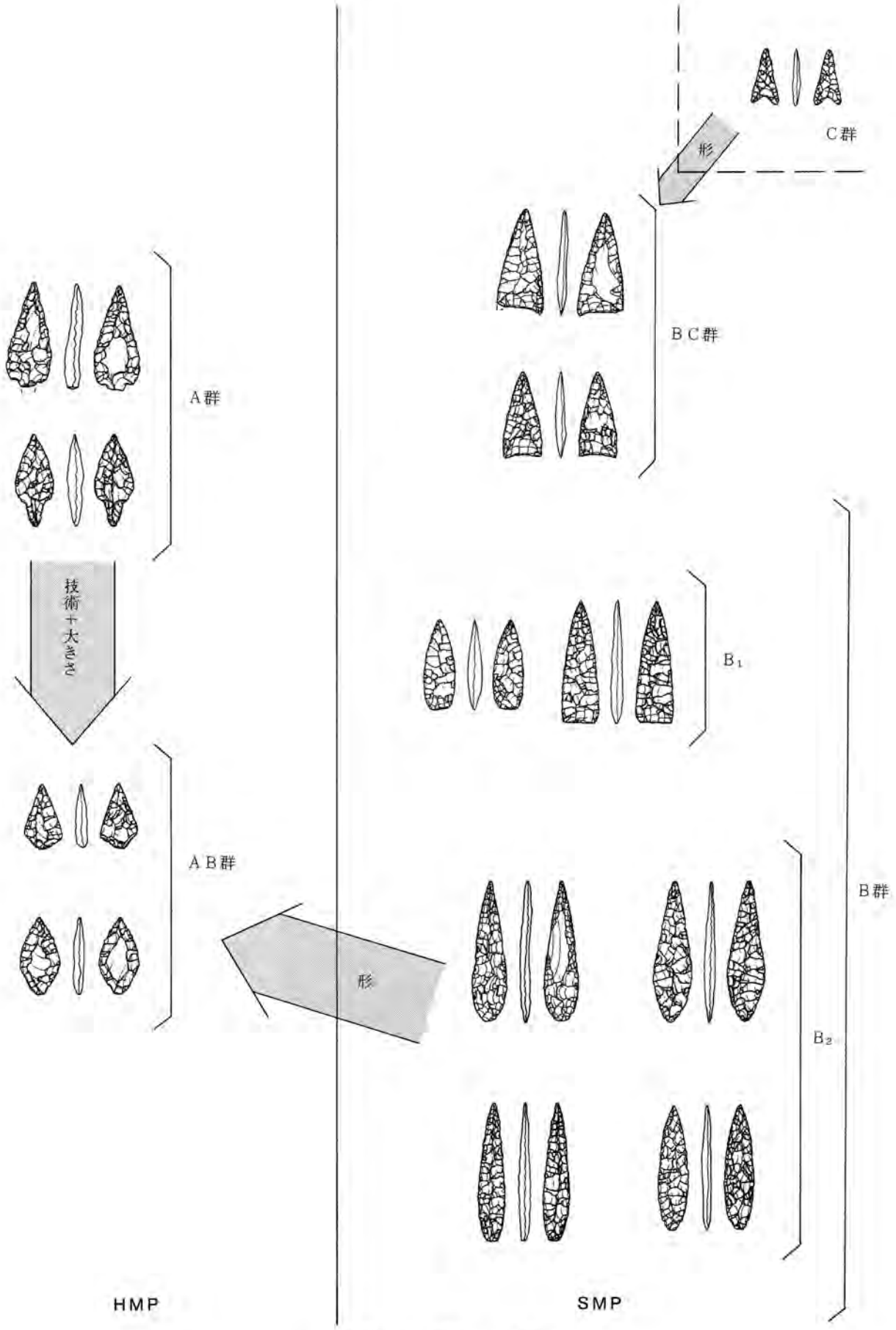
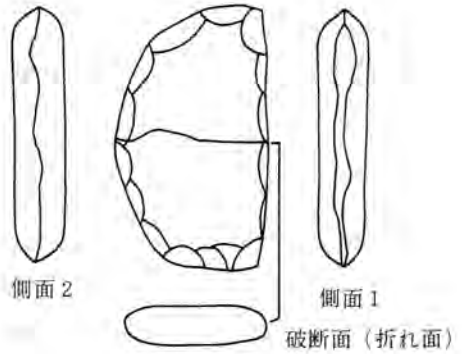
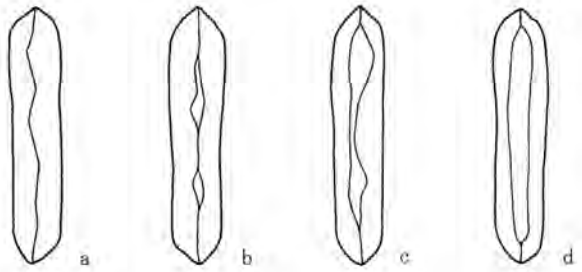


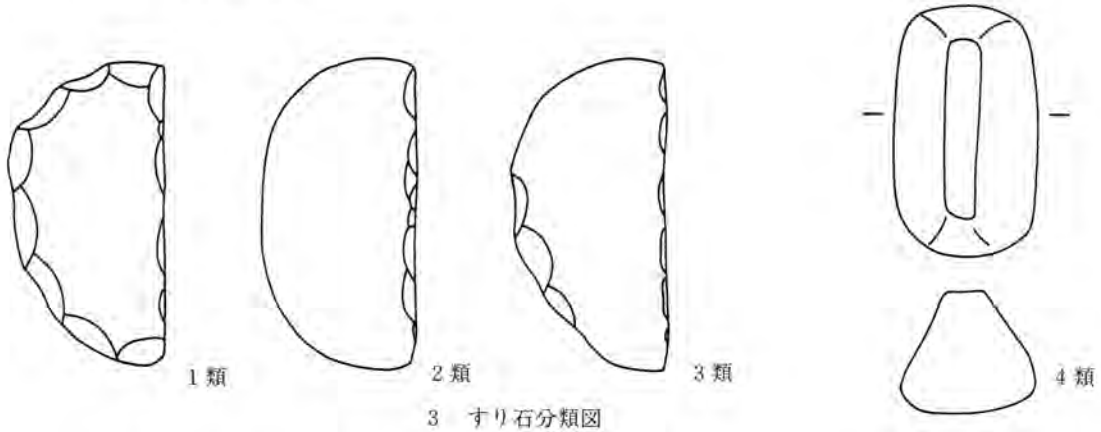
図136　石鏃の相関関係図



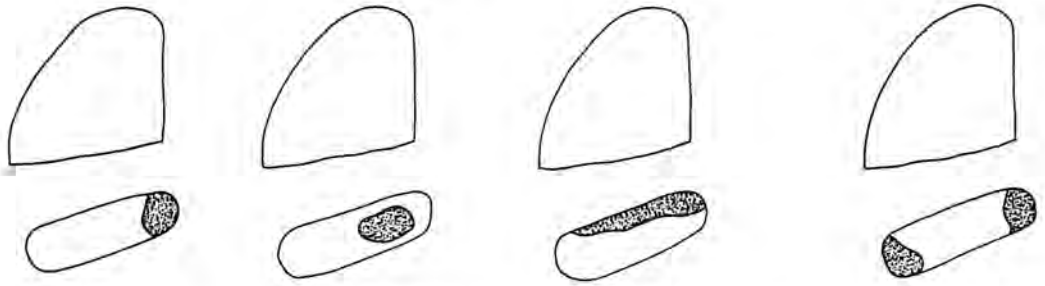
1　すり石の各部位の名称



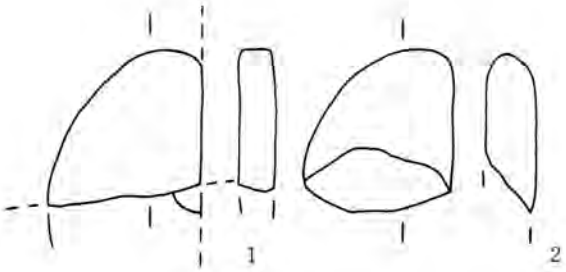
2　使用面分類図



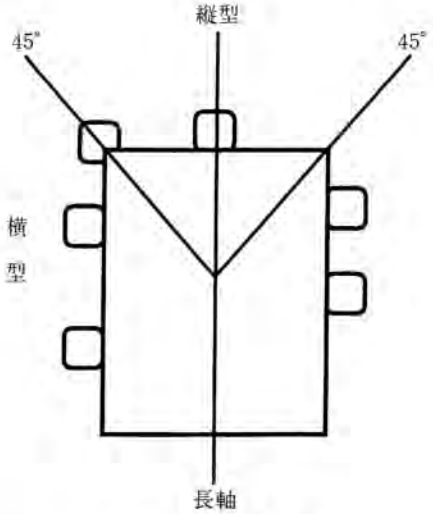
3　すり石分類図



4　破断面に付着する使用痕の位置



5　すり石の折れ方の模図



6　石匙の分類模式図

図137　石器分類模式図

第6節　土製品

ミニチュア土器

1は中掫浮石層下位（台地上のⅤ層・低地部のⅨ層に相当）からの出土である。底部が無いため全体形状は不確定である。胴部下部はやや丸みを帯びているが尖底・丸底・平底のいずれかは判断しかねる。胴部は外側に開きながら立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部はやや平らに作られており、刻みなどはみられない。口縁部から胴部まで単軸絡条体第1類を回転施文しているが、上半では縦方向、中盤から下位にかけて格子目状に、最下部は横位に回転している。胎土には繊維を多量に含む。2・3は口縁部がややすぼまる感じの深鉢である。胎土には繊維を大量に含んでいる。2の胴部にはＬＲが縦位に回転施文され、3の口縁部には単軸絡条体第1類が横位に回転され文様帯を構成している。胴部は同一原体が縦位に回転されている。口唇部は平らに作られている。4・6は底部が上げ底になり、高台を持つような感じの深鉢である。胎土に繊維を多量に含んでいる。4は口縁部にＬＲの側面圧痕が2条巡り、胴部にはＬＲが縦位に回転施文される。口唇部は平らである。6は口唇部に刻みを持つ。残存率は約4割ほどであるため刻みが何単位になるかは不明である。口縁部直下は無文であり、胴部にはＬＲが横位回転施文されている。5は底部を欠くため、底部形態が不明であるが、おそらく底部の厚い平底形か、高台付の形になると思われる。口唇部はやや尖っており、外面文様は無く、無文である。胎土中に繊維はほとんど含まれない。7～14は底部付近の破片である。7はやや上げ底気味の底部である。胴部文様はＬの横位回転である。内面は磨かれている。8は底部破片である。底部内面は残存していないが、かなりぶ厚い底部になると思われる。割れ口に製作の痕跡が観察された。やや先細りの底部の外側に粘土をかぶせて整形しているのがわかる。9・11・12・14は高台が付く深鉢と考えられる。9の最下部には結束第2種が横位に施文される。11と12は高台というより上げ底気味である。内外面ともに無文である。14は胎土に繊維を含む。外面文様は無節縄文の回転施文である。10・13は平底である。10の外面は無文、13には結節回転文が施文される。15～28は時期のわかるもの及び特殊なものを集めた。15は口縁部に縄の側面圧痕が3条平行に巡り、その下位に結節羽状縄文が帯状施文されている。口唇部には縄文が回転施文されている。16は口縁部に単軸絡条体1類を横位回転・胴部に木目状撚り糸文を縦位回転している。17は口縁～胴部まで櫛歯状工具による沈線文が縦に施文されている。内面は磨かれている。18は口縁部でやや外反する。口縁部はなでられており無文である。胴部は櫛歯状沈線が縦方向に施文されている。19は口縁部で外反する。口唇部は平坦であり、直下には縄文の側面圧痕が縦に施文され、その下位にはＬＲの側面圧痕が3状平行に巡っている。くびれ部には結節回転文が横位に施文され、胴部には結束第1種羽状縄文が縦位に施文されている。20は文様帯下部付近で内傾し、口縁上部で外反している。口唇部は概ね平坦である。口縁部にはＬＲの側面圧痕を7状平行に巡らした後に2本一組の側面圧痕を鋸歯状に施文している。胴部には単軸絡条体1類が縦位に回転施文されている。21は口縁部が外反している。口唇部は平坦であり、俵状の突起が付いている。口縁部には平行沈線が5条巡り、胴部にはＲＬＲが横位に回転施文されている。15～21はいずれも胎土に多少ながら繊維を含んでいる。15・16・などは円筒下層ｄ1式に、18・19・21は円筒下層ｄ2式に、20は円筒下層ｂ～ｃ式にそれぞれ比定できると思われる。17は不明であるが円筒下層式の範疇でとらえられる遺物である。22は台付鉢の様な器形である。底部はやや上げ底気味であり、そ

の上部に柱状の台部が付く。口縁部は波状形であり、波頂部のうち向かい合う２つには弁状突起が付いている。内面は鉢部の最下部で１段へこんでいる。胎土には繊維を含んでいる。24も類似した形態の台付鉢形をしている。口縁部は３単位の波状形と考えられ、胎土には繊維を含む。23は浅鉢の形をしているが、底部付近を欠失しているため全体形状は不確定である。台付きの可能性もある。胎土に少量の繊維を含むが、内外面ともに磨かれているため全体的になめらかな感じがする。27は底部に穴があいている。底部は平坦というよりは丸底に近い感じがする。胎土には繊維を多量に含み、全体にもろい感じがする。25は底部破片であり、高台が付いている。残存部の体部の傾きなどから判断すると、おそらく台付き浅鉢になると思われる。胎土には繊維を含み、内外面ともに磨きがかけられている。26は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。表面には刺突の連続により文様がかかれている。口唇部は表面文様に使用されたものと同様の工具による刻みが施されている。28は鉢形をしている。底部はやや角張った丸底であり内外面ともに磨かれている。口縁部は波状形であり、波頂部直下付近に刺突が施される。口唇部にも同様の刺突が施される。22～28については胎土に繊維を含むという点では縄文時代前期あたりに属するということがいえるが、細かい帰属時期は不明である。

土製品

土偶（１～５）

１は板状土偶の腹部である。上下は欠失している。中央上方に突起が付いており、そこから２列の刺突列が下・左右斜め下方向にのびている。側面にも刺突が施される。裏面は表面の突起のちょうど裏あたりから左右斜め方向に刺突列がのびている。２～５は弥生時代の土偶の一部である。１は土偶の顔面である。目・眉・口は微隆線を作出した後、刺突を施すことで表現されている。また・頬の部分には刺突が集中して施されている。内面の観察から中空であることがわかる。顔の表面は中空の頭部を成形した後に粘土を盛りつけて整形し、施文している。３・４は肩か腰の部分であると思われるが確実ではない。２点とも２本の平行沈線の下位に３角形の刺突を充塡している。５の部位は不明である。

土製品・玉類

６は正体不明の土製品である。上下端が欠損している。製作技法は、まず１枚の板状の粘土の両側縁を指で一定の間隔で押さえて刻みを入れる。その際に粘土の角張った部分を表あるいは裏側に折り返して処理し、最終的には緩やかな鋸歯状の側縁を作出している。左右両側縁の鋸歯状突起は概ね互い違いに作出されているようである。表裏面の中央には背鰭状の突起が作出されているが、これは粘土板の中央部を両側からつまみ出すようにして作られている。胎土には繊維を多量に含む。繊維の含み方や色調・表面の様子からは円筒下層ａ式の胎土等に似ているが、帰属時期は縄文時代前期中葉から末葉としかいえない。７は鐸形土製品の破片と思われる。表面は沈線により文様が描かれている。８～11は土製玉類である。８はやや扁平な断面形である。貫通孔などは無い。９～11は貫通孔を持つ。９は円筒形をしており、中心部に長軸方向の貫通孔が通っている。10は円盤状の形をしており、上下面が中心に向かってへこんでいる。中心部には貫通孔がある。11は角の取れた円柱形である。正面中位に横走沈線が１条巡る。中心には上下方向に貫通孔がみられる。12・13は何とも奇妙な形の土製品である。形容するとすれば波止め用のテトラポッドのような形である。胎土に繊維が含まれるかどうかは表面上の観察では判断できなかったが、雰囲気的には縄文時代前期に属する感じがする。器体各

所には刺突が施されるが、刺突があるところは周囲がフジツボ状に隆起している。先端部の側面に横方向の貫通孔があるため、垂飾品や土玉の一種と考えられる。類似した例は青森市近野遺跡・階上町白座遺跡にみられるが、形態的には２例とも十字形をしている。しかしながら円柱状の突起部に側辺から貫通孔をあけるという点と、突起部先端に刺突を加えるという点では本遺跡例と酷似している。なお、白座遺跡例は円筒下層ａ式に、近野遺跡例は縄文時代後期の土器とそれぞれ伴うと報告されている。14は球状土製品である。表面は無文である。このような遺物は畑内遺跡でこれまでに大小あわせて４個の出土が確認されている。15はおはじきのような形状をしている。16は耳栓と考えられる。内面や側面には成形時の指頭痕が残る。断面はＨ字状である。17～19は円盤状土製品である。３点出土した。17は底部破片を利用しているため両面ともに無文である。側面を数カ所こすることにより角をとっている。18・19は胴部破片を利用している18は結節回転文と斜縄文が施文されている円筒下層ａ式の破片である。19は木目状撚り糸文が施文されている円筒下層ｄ式の破片である。両者とも中央部に穿孔されている。穿孔は両面から行っている。

ミニチュア土器観察表

図番号	出土位置	層位	器種	口唇文様	口縁文様	区画帯	胴部文様	内面調整	炭化物	備考
1	BD-16	7	深鉢				単絡１回転	ナデ		繊維含む
2	BG-17	5	深鉢？				LR縦回転			粒・繊維含む
3	BF-18	5	深鉢？		単絡１横回		単絡１縦回			繊維含む
4	BE-18	5	台付き深鉢		LRL側圧		LR縦回転？	荒いミガキ		繊維含む
5	BI-22	5	深鉢？				無文	ミガキ		
6	BG-20	5	台付き深鉢	刻み			LR横回転	ミガキ		繊維含む
7	BH-20	5	深鉢				L横回転	ミガキ		繊維含む
8	BE-18	5	深鉢				無文			
9	BH-22	5	台付き深鉢？				結束２	ミガキ		繊維含む
10	BI-22	5	深鉢				無文			繊維含む
11	BF-19	5	台付き深鉢				無文			繊維含む
12	AZ-16	5	台付き深鉢？				無文			繊維含む
13	BH-19	1	深鉢				結節回転文	荒いミガキ		
14	BE-19	5	台付き深鉢				R横回転？			
15	BE-20	5	深鉢	RL回転	R側圧		結束１	ミガキ		
16	BI-21	5	深鉢		単絡１横回		単絡1a縦回	ミガキ		繊維含む
17	BH-22	5	深鉢				櫛歯状沈線	ミガキ		繊維含む
18	BE-18	5	深鉢		ナデ		櫛歯状沈線	ミガキ		繊維含む
19	BE-18	5	深鉢	直下に縄文末端圧痕	LR側圧	末端圧痕・結節回転	結節回転縦	ミガキ		繊維含む
20	BH-17	1	深鉢		LR側圧		単絡１縦回			繊維含む
21	BF-20	5	深鉢		平行沈線		RLR横回転	ミガキ		口縁部に突起
22	BF-19	5	台付き鉢？							２単位突起・繊維含む
23	BF-19	5	台付き浅鉢				無文	ミガキ		
24	BB-17	5	台付き鉢？							ね・３単位波状口縁
25	BE-19	5	台付き浅鉢？				無文	ミガキ		
26	BF-19	5	深鉢	刺突			刺突による文様	ミガキ		繊維含む
27	BC-18	5	深鉢？				無文			通孔（焼成前か？）
28	BE-19	5	浅鉢？	刺突	刺突		無文	ミガキ		繊維含む

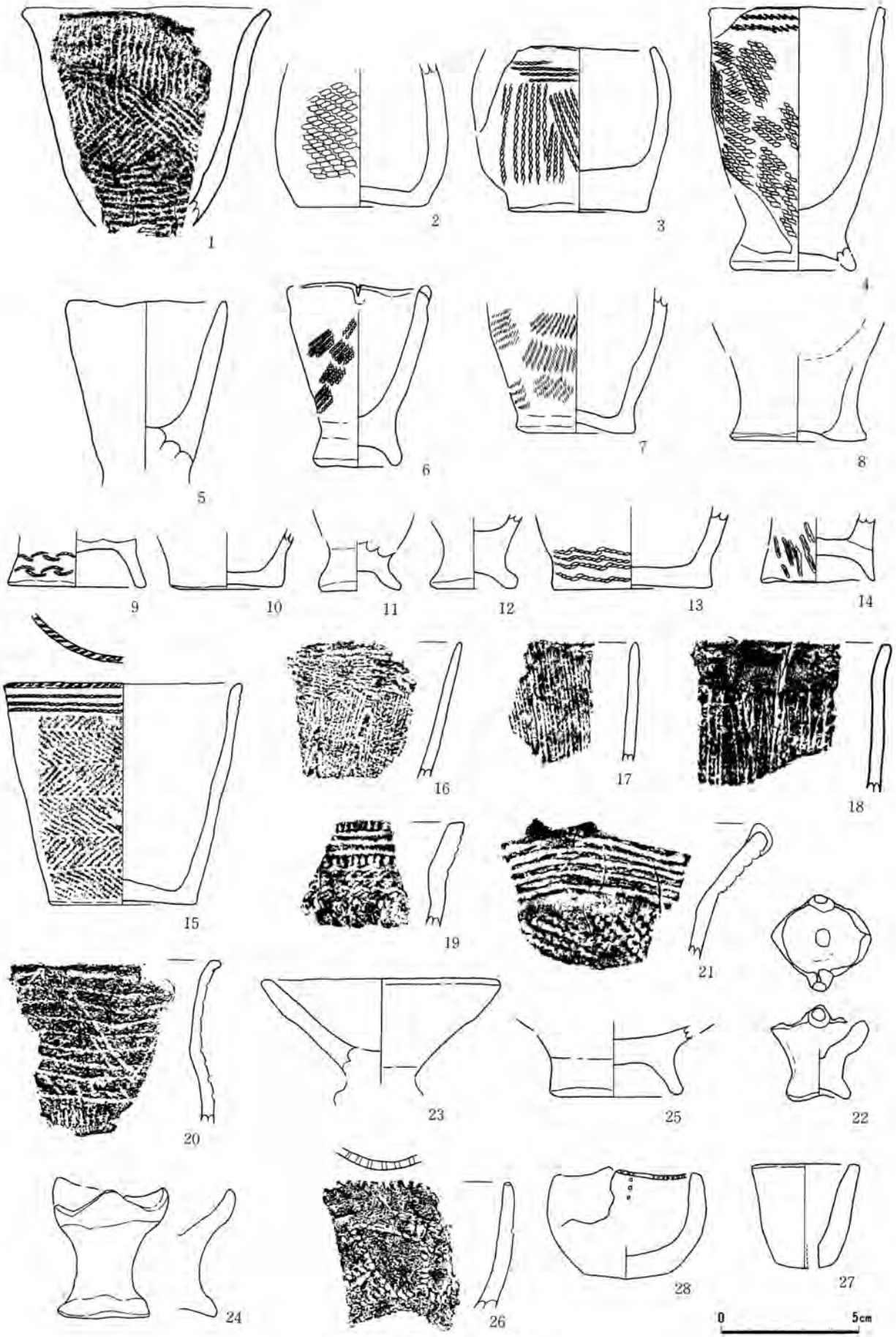


図138　ミニチュア土器

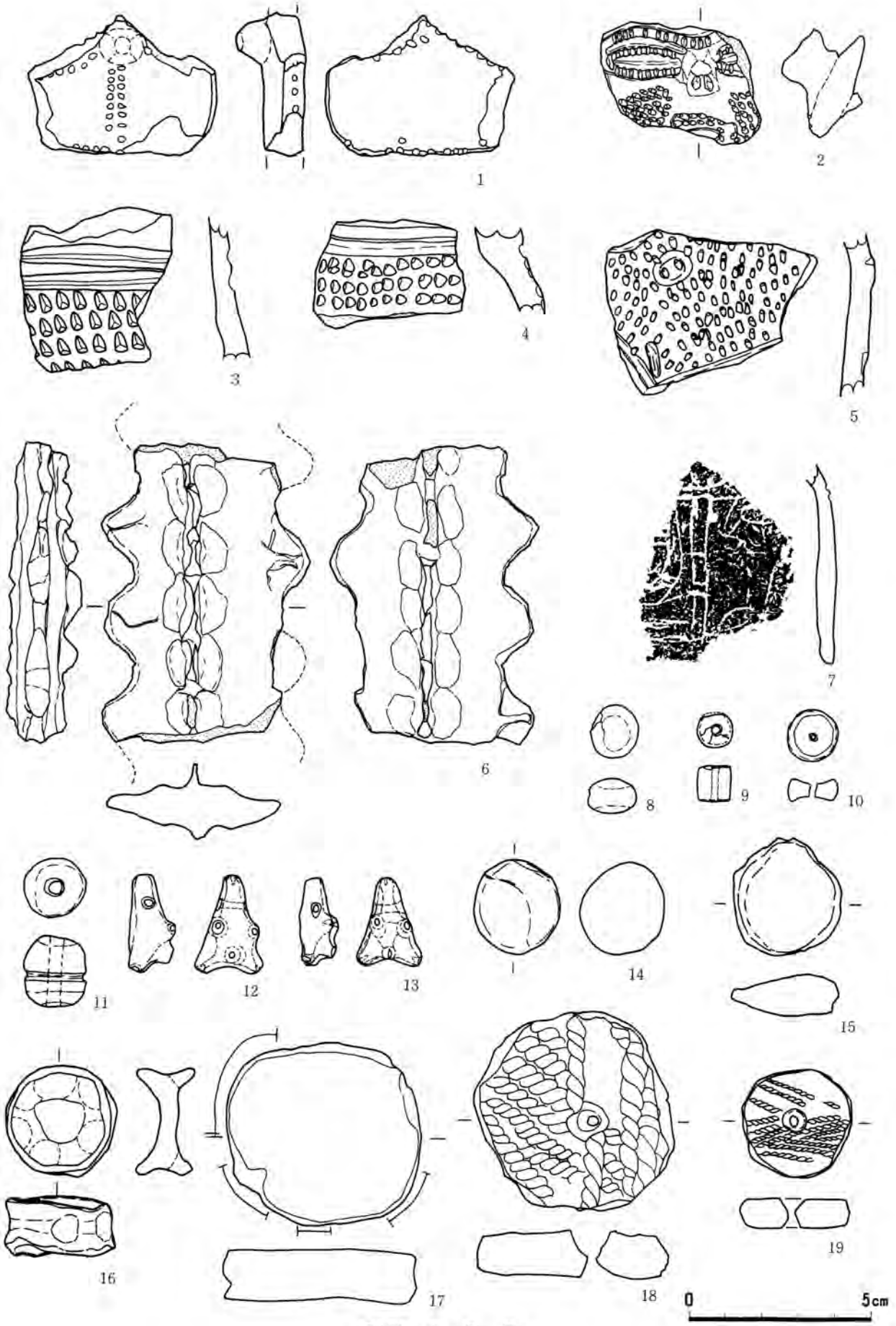


図139　土　製　品

第Ⅲ章　B捨場（西捨場）出土遺物

第1節　B捨場（西捨場）の調査

B捨場（西捨場）は、以前の調査で「西捨場」と呼称していたものである。平成4年度の調査段階では、最初に検出された捨場を「東捨場」と呼称し、次に検出された捨場を「西捨場」と呼称した。しかし、その後の調査で、捨場が遺跡のその他の地点でも検出されるに及び、東・西と言う言葉が遺跡全体での位置づけとはそぐわないので、アルファベットで呼称することにし、東捨場は「A捨場」に西捨場は「B捨場」とすることとしたものである。

B捨場（西捨場）は、畑内遺跡北側の台地状をなす平場の北西斜面に形成された捨場である。B捨場の調査は、平成4年と平成5年の2ヶ年にわたり、捨場の面積は約900㎡で、出土遺物の量は段ボールで約1,400箱にのぼる。捨場として形成された時代は、円筒下層a式からd式の縄文時代前期の所謂円筒下層式の時期を主体とし、縄文時代早期や弥生時代前期の遺物も極僅かであるが出土している。また、土器・石器の外に鳥骨・獣骨の動物骨、魚骨が出土し注目された。

B捨場の遺物は、土器が『畑内遺跡Ⅲ』（青埋文報187集）と『畑内遺跡Ⅴ』（青埋文報262集）に、石器は『畑内遺跡Ⅲ』、捨場から検出された鳥獣魚骨については『畑内遺跡Ⅳ』（青埋文報211集）に掲載されている。　（木村鐵次郎）

第2節　土器について

1　縄文時代早期の土器（図156）

7～10は爪形状刺突文を口縁部に施文するグループである。7は口唇部に斜め上方から板状の工具で刻みを施している。口縁部には縦爪が3段施文され、その下位に貝殻条痕が施文される。内外面ともにきれいに磨かれている。8と10は口唇部に斜め上方から板状の工具による刻みが施される。口縁部には縦爪が2段施文される。器表面は内外面ともに丁寧に磨かれている。9は口唇部に斜め上方からの刻みが施され、口縁部には横爪が4段施文される。その下位には貝殻腹縁圧痕が4段施文されている。内外面ともに丁寧に磨かれている。　（茅野　嘉雄）

2　縄文時代前期の土器

出土した大量の円筒土器の中から復元された土器については、『畑内遺跡Ⅲ』（「第Ⅲ章西捨場の調査の概要」）、『畑内遺跡Ⅴ』（「第Ⅳ章第3節B捨場（西捨場）出土土器」）で報告してきた。今回報告するものでB捨場出土土器についての紹介は終わりとする。

下記の分類は、B捨場出土の土器については胴部文様と口頸部の文様を主体にして『畑内遺跡Ⅲ』『畑内遺跡Ⅴ』で分類したものと同様である。

A1類　口頸部が結節回転で、胴部に太めの単節原体による斜縄文が施文されるもの。底面に文様のみられるものもある。（1、2、3、5、6、7、10、11、13、14）

A２類　口頸部に側面押圧がみられ、胴部は太めの単節原体による斜縄文が施文されるもの。（４、15）

A３類　口頸部に結節回転、胴部に単軸絡条体第１類が施文されているもの。

A４類　口頸部から胴部まで単軸絡条体第１類が施文されるもの。

A５類　口頸部から胴部まで結束第１種の羽状縄文が施文されるもの。

A６類　口頸部から胴部まで斜縄文が施文されるもの。（８、９、17）

A７類　口頸部から胴部まで結節回転が施文されるもの。

B１類　口頸部が結節回転で、隆帯を持ち、胴部に単節あるいは複節の斜縄文が施文されるもの。底面に文様がみられるものもある。（22、23、25）

B２類　口頸部が斜縄文で、隆帯を持ち、胴部に斜縄文が施文されるもの。（21、24、27）

B３類　口頸部に斜縄文あるいは側面押圧がみられ、幅広で矢羽状の沈刻がみられる隆帯を持ち、胴部に斜縄文が施文されるもの。

B４類　口頸部が結節回転で、胴部に斜縄文が施文されるもの。

B５類　口頸部に側面押圧と単軸絡条体第５類が施され、胴部に斜縄文が施文されるもの。

B６類　口頸部から胴部まで斜縄文が施文されるもの。

B７類　口頸部が単軸絡条体第１類で、胴部に斜縄文が施文されるもの。

B８類　口頸部に斜縄文と側面押圧がなされ、隆帯を持ち、胴部に斜縄文が施文されるもの。

B９類　口頸部に沈線が巡り、胴部に斜縄文が施文されるもの。底面に文様がみられるものもある。

B10類　口頸部に結節回転があり、隆帯を持ち、胴部に単軸絡条体第１類が施文されるもの。（19、20）

B11類　口頸部に単軸絡条体第１類、隆帯を持ち、胴部に単軸絡条体第１類が施文されるもの。（18）

B12類　口頸部に単軸絡条体第１類や第６類が横位にみられ、胴部は同じ単軸絡条体が縦位に施文されるもの。

B13類　口頸部に結束第１種の横位回転、隆帯を持ち、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。

B14類　外面の文様は単軸絡条体第１類や第５類が施文されるもの。底面に文様がみられるものもある。

B15類　口頸部は斜縄文と原体側面押圧があり、隆帯を持ち、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。

B16類　口頸部は結束第１種、胴部は多軸絡条体が施文されるもの。（30）

B17類　口頸部は斜縄文、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。底面に文様がみられる。

B18類　口頸部は沈線、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。

B19類　口頸部は結節回転、隆帯を持ち、胴部は結節回転が縦位に施文されるもの。

B20類　口頸部は結束第１種、隆帯を持ち、胴部は結束第１種が施文されるもの。J（28）

B21類　口頸部は結束第１種、頸部に側面押圧が巡り、胴部は結束第１種が施文されるもの。（29）

B22類　口頸部から胴部まで結束第１種が施文されるもの。（26）

B23類　口頸部は側面押圧、胴部は結束第１種や結節回転、単軸絡条体第１類が施文されるもの。

B24類　口頸部は側面押圧が巡り、胴部は斜縄文が施文されるもの。

B25類　口頸部は側面押圧が巡り、胴部は単軸絡条体第１類・第１A類、多軸絡条体が施文されるも

の。

C１類　口頸部は単軸絡条体第６Ａ類、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。（45、47）

C２類　口頸部は単軸絡条体第６Ａ類、胴部は多軸絡条体が施文されるもの。

C３類　口頸部は単軸絡条体第６Ａ類、胴部は単軸絡条体第１Ａ類、結束第１種、多軸絡条体が施文されるもの。

C４類　口頸部は側面押圧、隆帯を持ち、胴部は斜縄文が施文され、一部結節回転文もみられるもの。

C５類　口頸部は幾何学状に側面押圧、胴部は斜縄文が施文されるもの。

C６類　口頸部は幾何学状に側面押圧、隆帯を持ち、胴部は結束第１種が施文されるもの。（33、34、40）

C７類　口頸部は幾何学状に側面押圧、胴部は結束第１種が施文されるもの。（35、36）

C８類　口頸部は幾何学状に側面押圧、隆帯を持ち、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。

C９類　口頸部は幾何学状に側面押圧、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。（39）

C10類　口頸部は幾何学状に側面押圧、胴部は多軸絡条体が施文されるもの。（37、41）

C11類　口頸部は幾何学状に側面押圧、隆帯を持ち、胴部は多軸絡条体が施文されるもの。

C12類　口頸部は幾何学状に側面押圧、隆帯を持ち、胴部は単軸絡条体第１Ａ類が施文されるもの。

C13類　口頸部は平行に側面押圧、胴部は結束第１種が施文されるもの。

C14類　口頸部は平行に側面押圧、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。

D１類　口頸部は結節回転、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。（46）

D２類　口頸部は側面押圧、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。

D３類　口頸部は単軸絡条体第１類、胴部は単軸絡条体第１類が施文されるもの。

D４類　口頸部は側面押圧あるいは側面押圧と結節回転、胴部は結束第１種あるいは第２種が施文されるもの。（48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、66、67）

D５類　口頸部は側面押圧、胴部は結節回転が施文されるもの。

D６類　口頸部は側面押圧、胴部は多軸絡条体が施文されるもの。（43、44、58、59）

D７類　口頸部は側面押圧、胴部は単軸絡条体第１Ａ類が施文されるもの。（60、61、62、63、64、65、68）

D８類　口頸部は幅広く側面押圧、胴部は結束第１種、単軸絡条体第１Ａ類、多軸絡条体が施文されるもの。

D９類　口頸部は側面押圧と貼付、胴部は単軸絡条体第１Ａ類が施文されるもの。（69）

D10類　口頸部は側面押圧と貼付、胴部は結束第１種・第２種が施文されるもの。

上記の分類を一応土器型式と対比すると、Ａ１類からＡ７類は、円筒下層ａ式に、Ｂ１類からＢ25類は、円筒下層ｂ式に、Ｃ１類からＣ14類は円筒下層ｃ式に、Ｄ１類からＤ８類は円筒下層ｄ１式に、Ｄ９類からＤ10類は円筒下層ｄ２式に対応するものではないかと思われる。　（木村鐵次郎）

３　異系統の土器（図156）　文様・器形等に他地域の影響が強く現れているものを集めた。

１は深鉢形土器の口縁部である。胴部から口縁部まですんなりと立ち上がる器形のようである。口縁形状は波頂部が左右非対称の波状形を呈している。文様は口縁部から胴部まで全面に結節回転文を

伴う羽状縄文を施文した後、口縁部付近のみに竹管による二本同時施文の沈線が横方向に施文されている。全体的にやや赤みを帯びた色調であり、胎土には繊維が含まれない。2は深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部はやや外傾するようであり、口唇部上面は概ね平坦である。口縁形状は波状形を呈するようであり、波頂部は丸みを持っている。口縁部には竹管状工具による二本同時施文の沈線が施文されており、口縁の屈曲部付近には三角形の彫刻が見られる。胎土には繊維を含まず、色調は赤みを帯びた肌色といったところである。3は深鉢形土器の胴部破片である。器壁はやや外側に外反気味である。胴部に@を横位回転施文した後、円形の沈線と、弱波状の沈線を描いている。沈線は竹管状工具によるものではなく、棒状の工具によるものと見られる。胎土には砂粒を多く含み、全体にもろい感じである。4は球胴形深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は波状形であり、波頂部から隆線が垂下しており、その中心に沈線が描かれているが、その沈線から左右に縦方向の沈線が並列して描かれている。屈曲部から下位の文様帯には、渦巻き状の円を中心として、左右に波紋状沈線が描かれている。胴部文様はＲＬの横位回転施文である。内面は丁寧に磨かれており、胴部と口縁部の屈曲点はかなり明瞭である。胎土には砂粒を含み、繊維は含まれない。外面には炭化物が付着している。5は深鉢形土器の口縁部である。器形は胴部が円筒形で、口縁部は緩やかに内湾しつつ外傾し、立ち上がるものと思われる。口縁形状は平縁であるが、向かい合う一対の突起が付いている。口唇部は粘土をかぶせることによりやや厚みを持っている。文様は沈線と棒状工具による刺突によるものである。口縁部に付く2つの突起の中心付近からは隆帯が“し”の字状に垂下し、頸部の隆帯に連続している。隆帯上には刺突が加えられる。口縁部の文様は隆帯を境にして左右で若干の差異が見られる。左側は平行沈線間に刺突が加えられるが、右側は平行した連弧文とでもいうような模様の内側に刺突が加えられる。土器内面は丁寧に磨かれており、胎土も精良で、繊維は含まれない。

6は鉢のような器形をしている。この遺物は『畑内遺跡Ⅰ』において土坑内の遺物としてすでに報告されていたが、B捨場出土の破片と接合し、全体がよりはっきりとわかるようになったので、再度報告するものである。全体形状は球胴形の深鉢の胴部下半の円筒形の部分が無くなったような器形である。胴部は文様帯の下部で屈曲し、頸部へとつながり、口縁部は内湾しながら強く外傾し、立ち上がっている。頸部内面の屈曲部は稜線ができるほど明瞭である。口縁形状は、2種類の波頂部が一対づつの、4単位の波状口縁と思われる。波頂部の直下にはU字上に隆帯が貼り付けられていたと思われるが、一部が剝落しており全体像ははっきりしない。隆帯上には刻みが施される。頸部から上の文様帯には、沈線により曲線を主体とした、文様が描かれている。また、沈線の横には三角形の彫去が並んでみられる。頸部より下の文様帯には、沈線による鋸歯文と、それを埋めるようにして円形文と、三角形文が施文されている。ここにも沈線横に三角形の彫刻が見られる。胴部の屈曲部と頸部には3条の沈線が平行に施文され、文様帯の区画をしている。胴部下位の文様はＶ字状の沈線の中を平行に集合沈線で充填しているものと、U字状の沈線の中を同様に集合沈線で充填しているものが交互に並んでいくものと思われる。土器内面は丁寧に磨かれており、外面の色調はやや赤みを帯びる。胎土に繊維は混入せず、砂粒が多く混入している。焼成は堅緻である。以上の土器は1を除きが大木6～7ａ式に比定されるものと考えるが、5・6に関しては、関東の五領ヶ台式の要素を少なからず持っている。1に関しては竹管状工具による二本同時施文の沈線が見られるため、大木6式の範疇でとらえられる可能性もあるが、他の個体とは少し異質な感じがする。　（茅野　嘉雄）

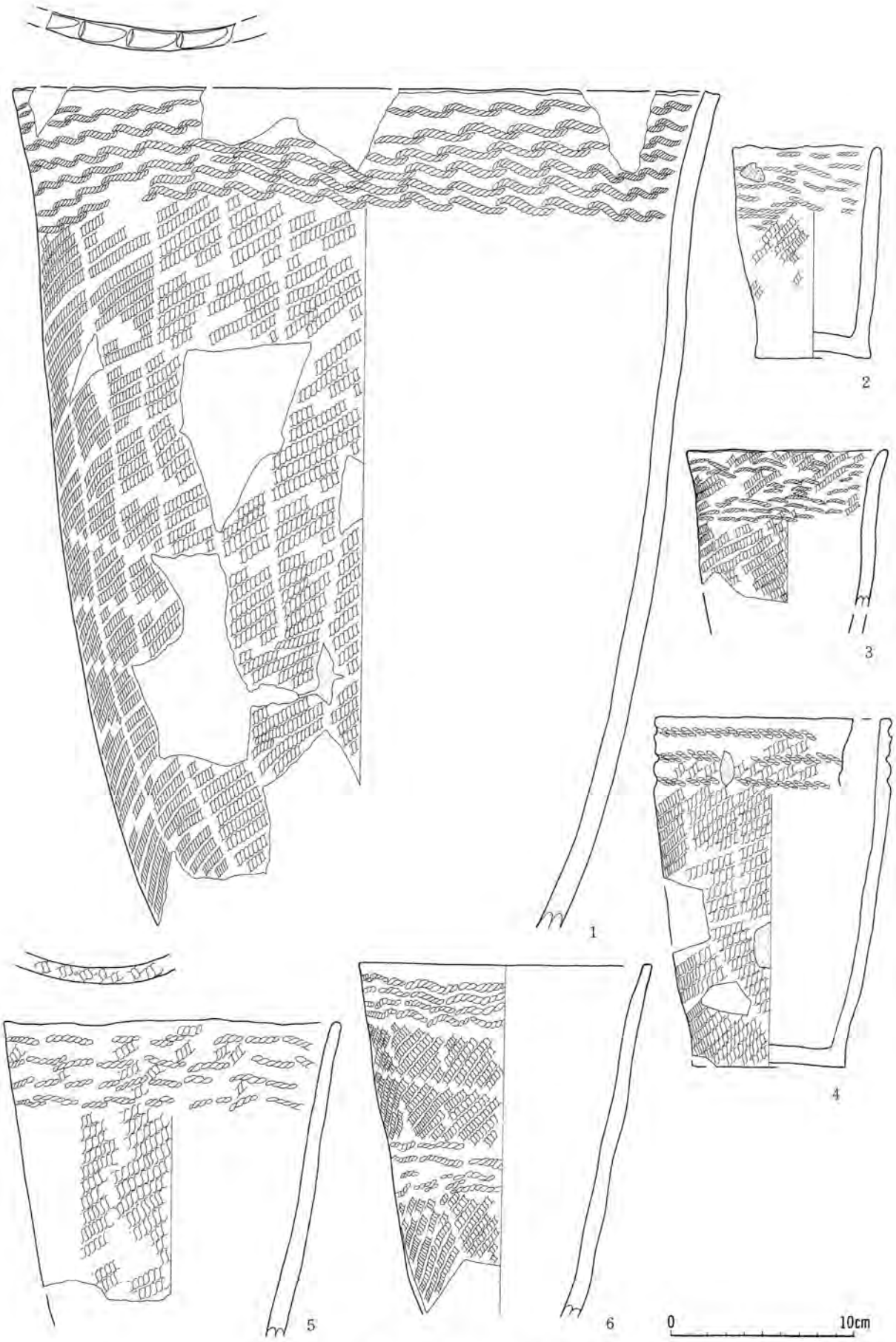


図140　B捨場（西捨場）出土土器(1)

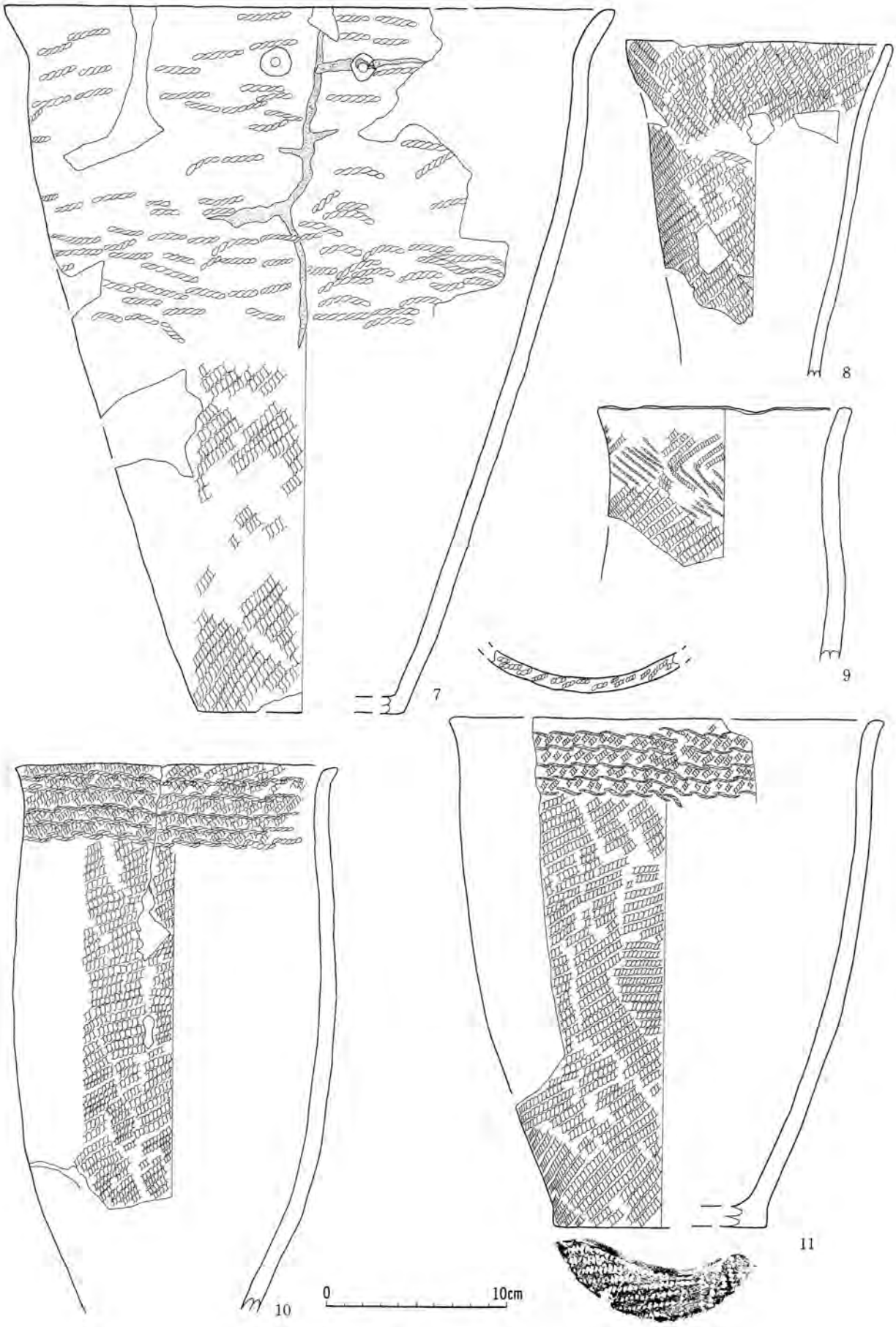


図141　B捨場（西捨場）出土土器(2)

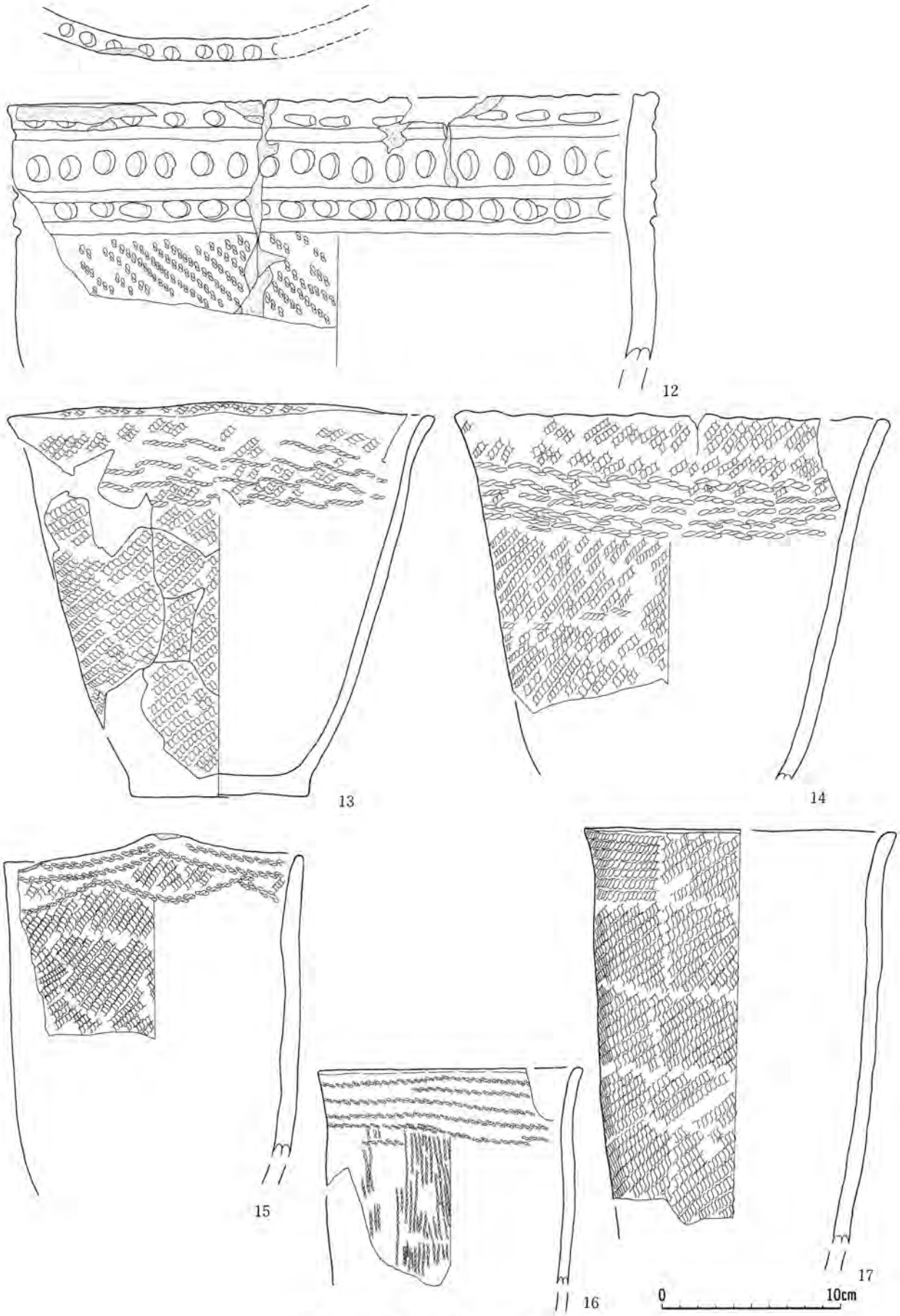


図142　B捨場（西捨場）出土土器(3)

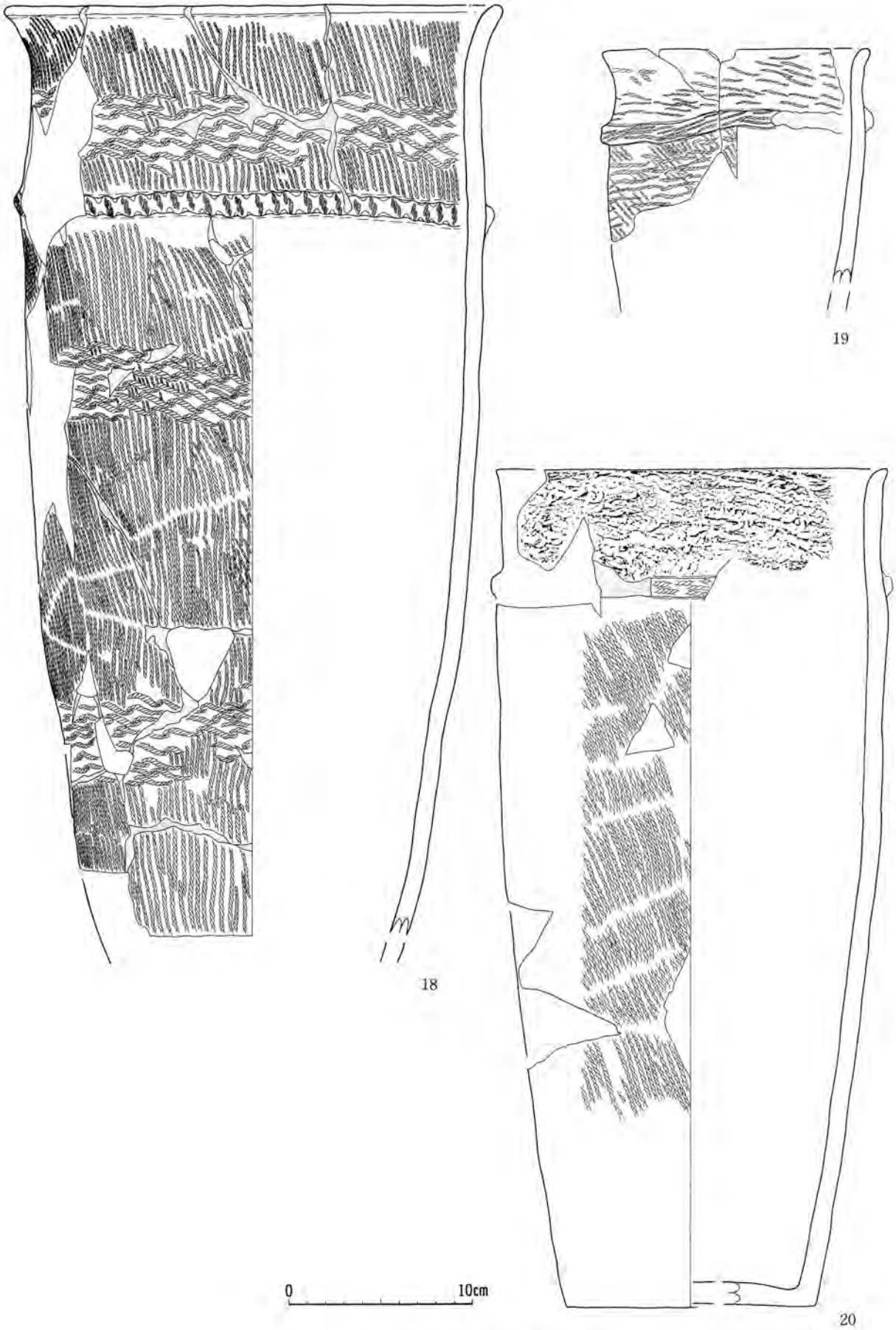


図143　B捨場（西捨場）出土土器(4)

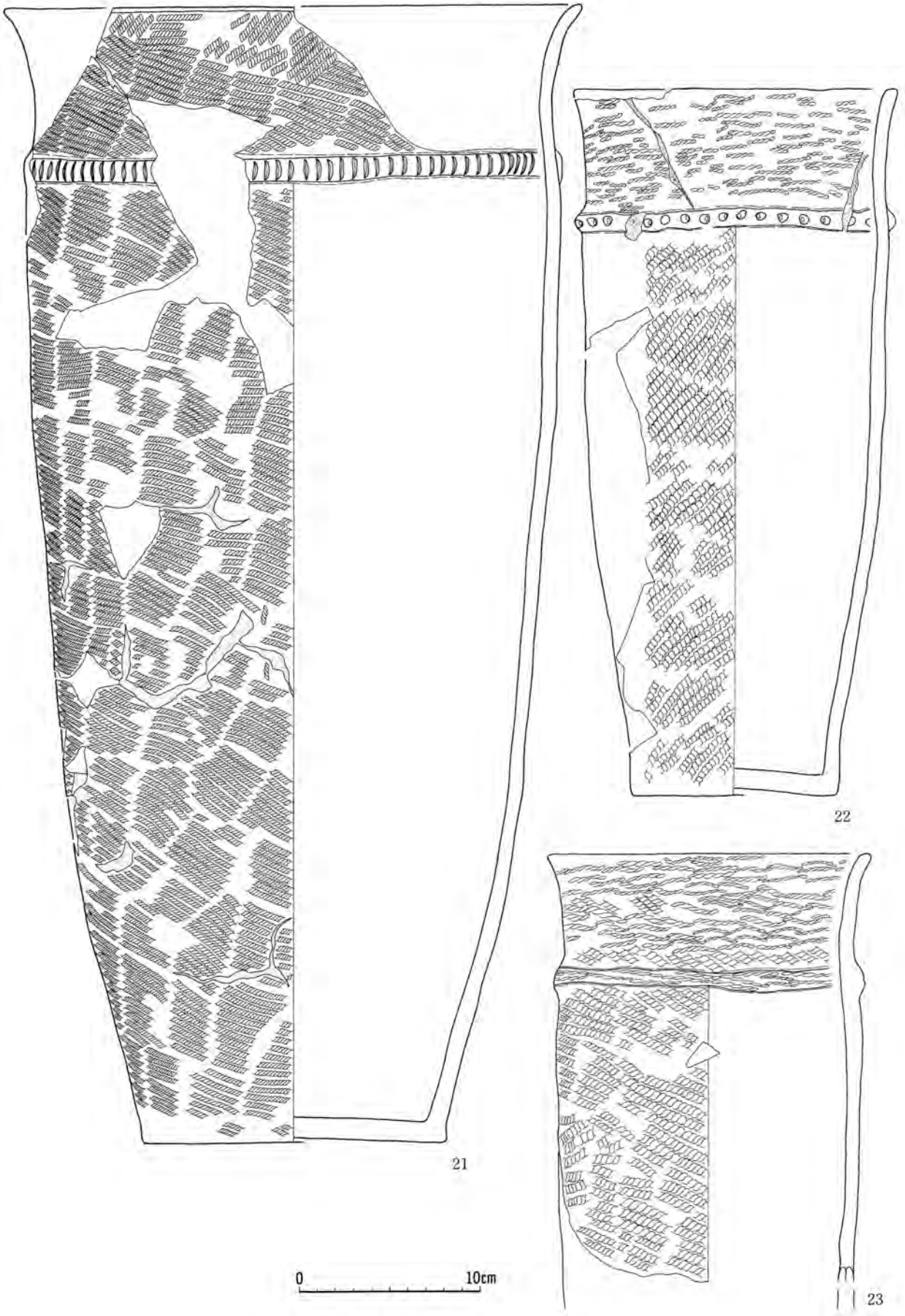


図144　B捨場（西捨場）出土土器(5)

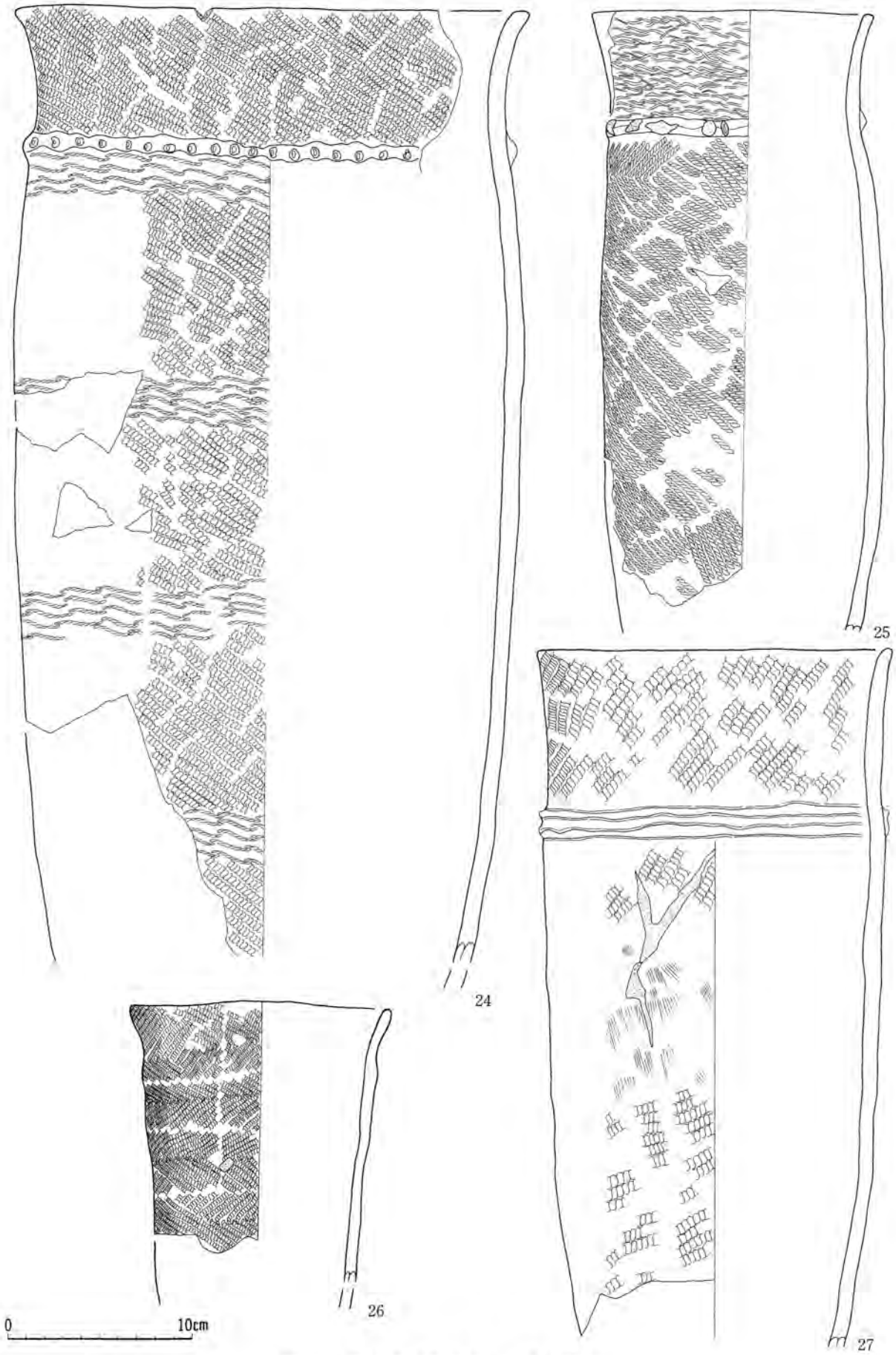


図145　B捨場（西捨場）出土土器(6)

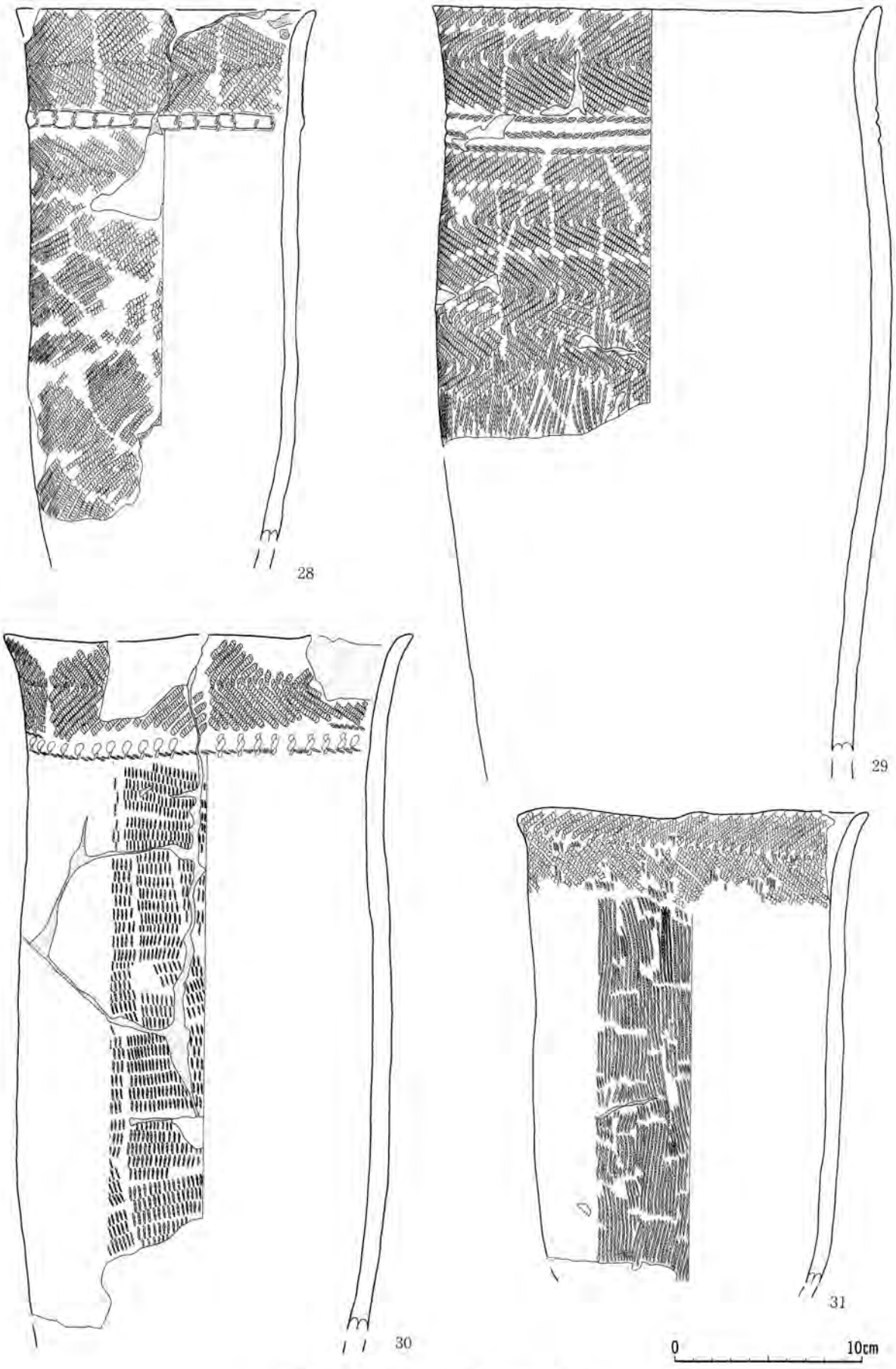


図146　B捨場（西捨場）出土土器(7)

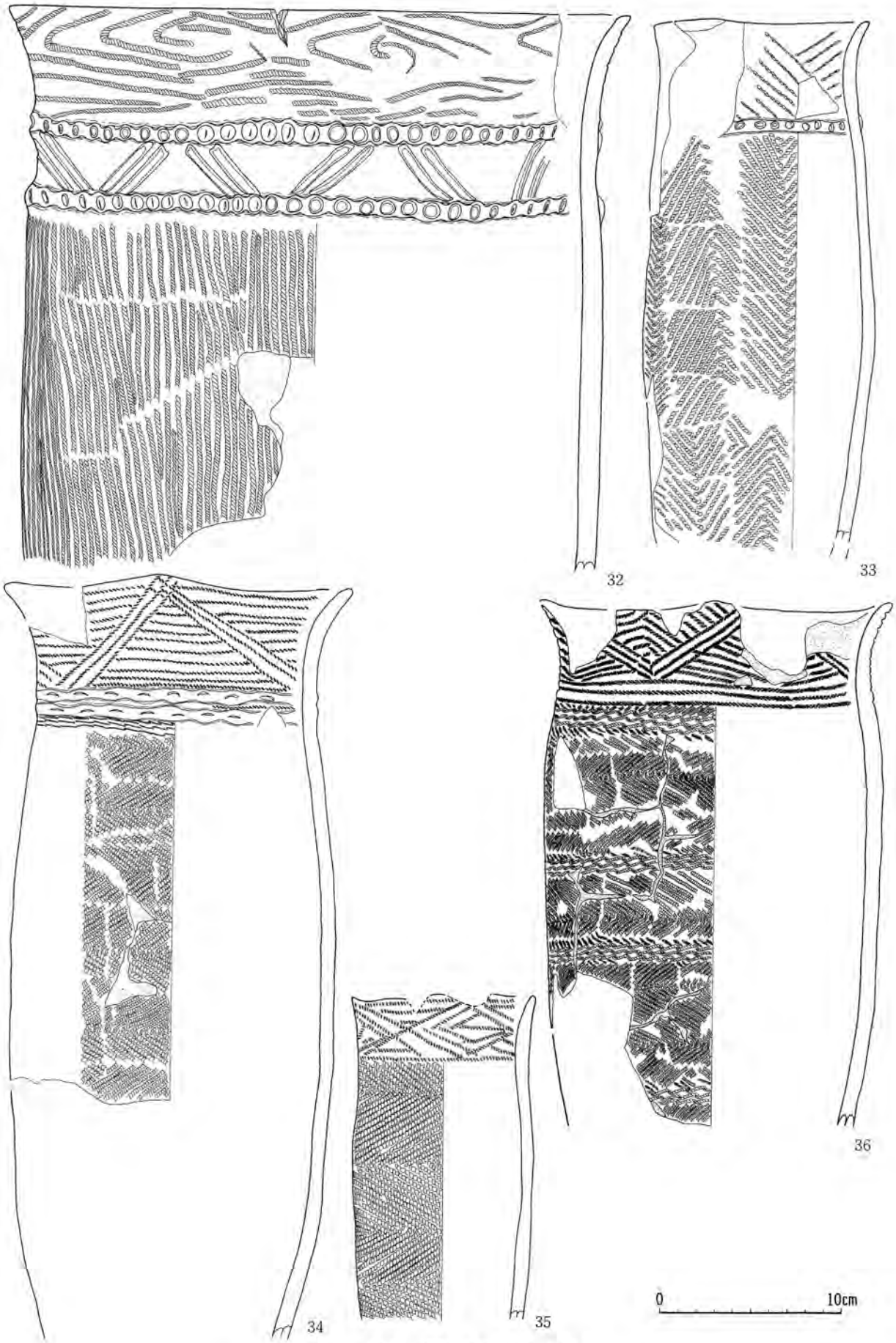


図147　B捨場（西捨場）出土土器(8)

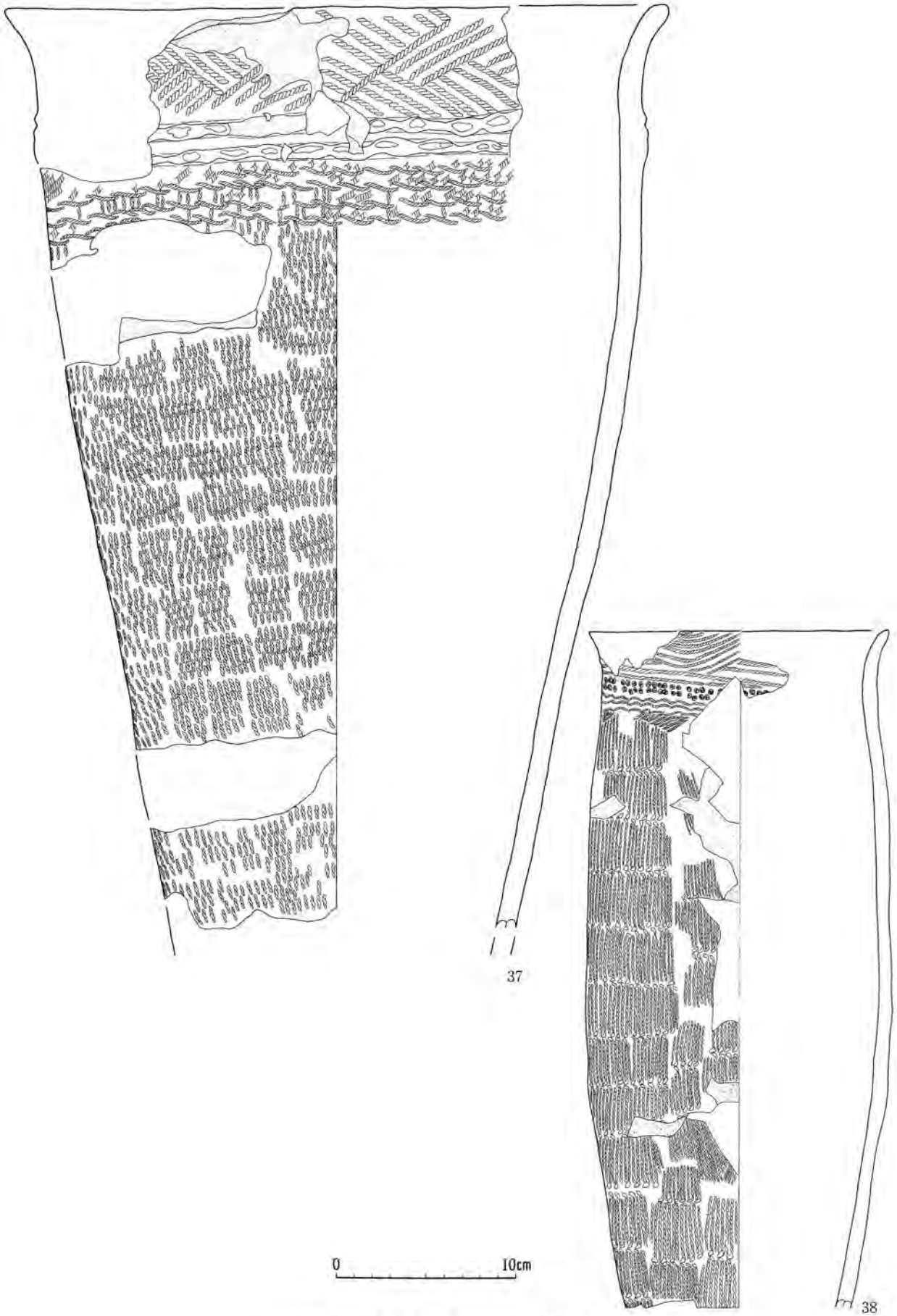


図148　B捨場（西捨場）出土土器(9)

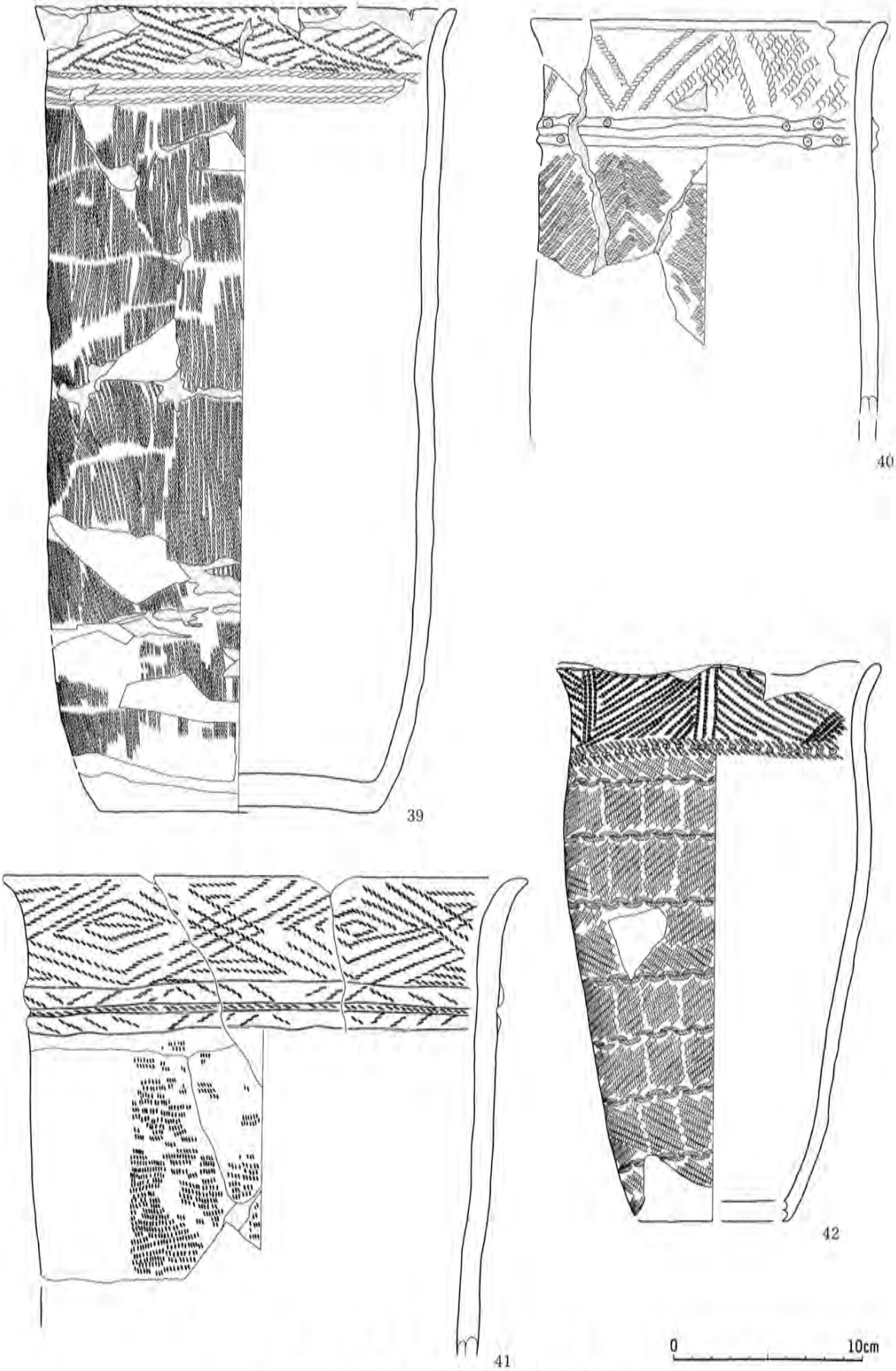


図149　B捨場（西捨場）出土土器(10)

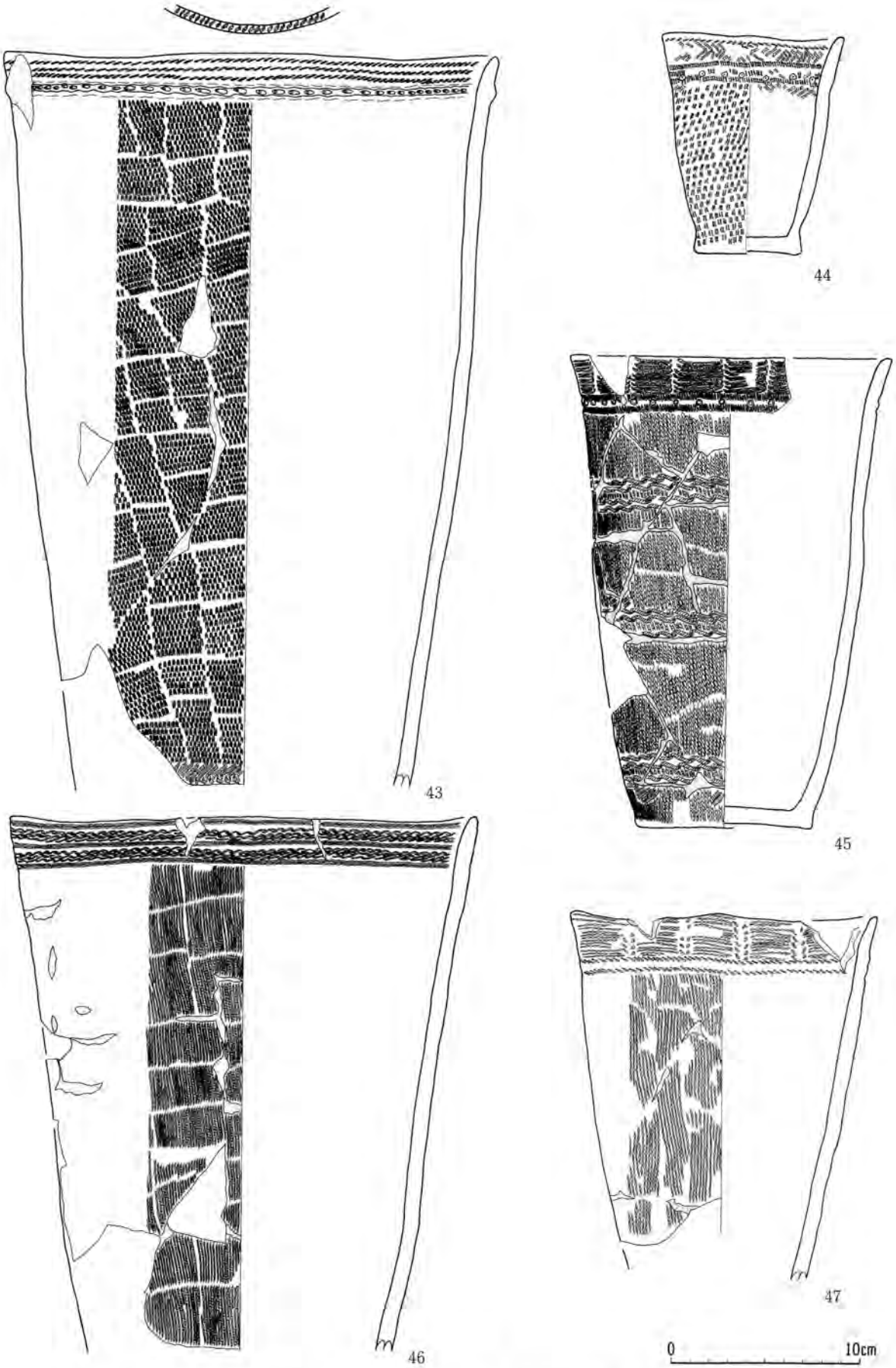


図150　B捨場（西捨場）出土土器(11)

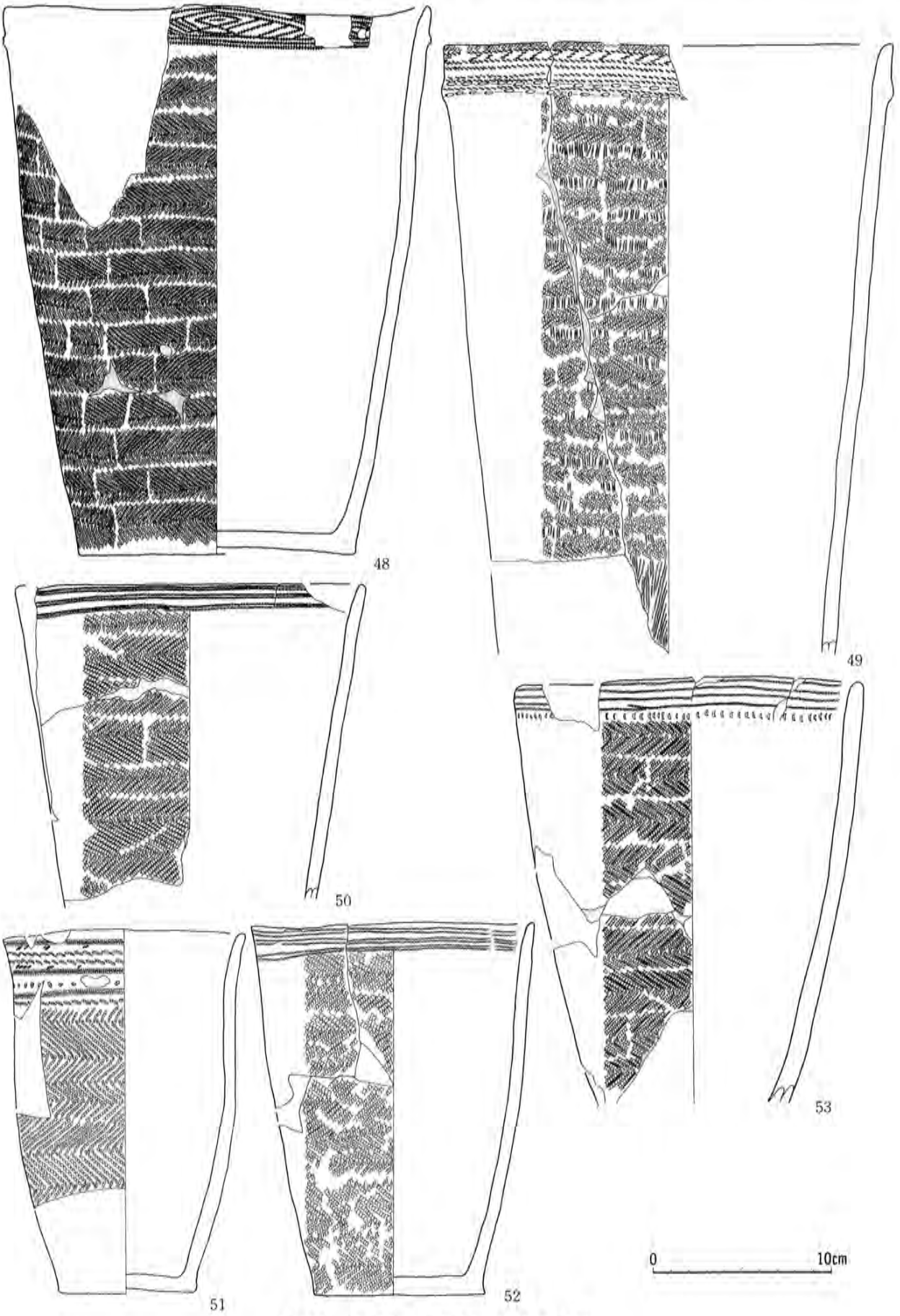


図151　B捨場（西捨場）出土土器(12)

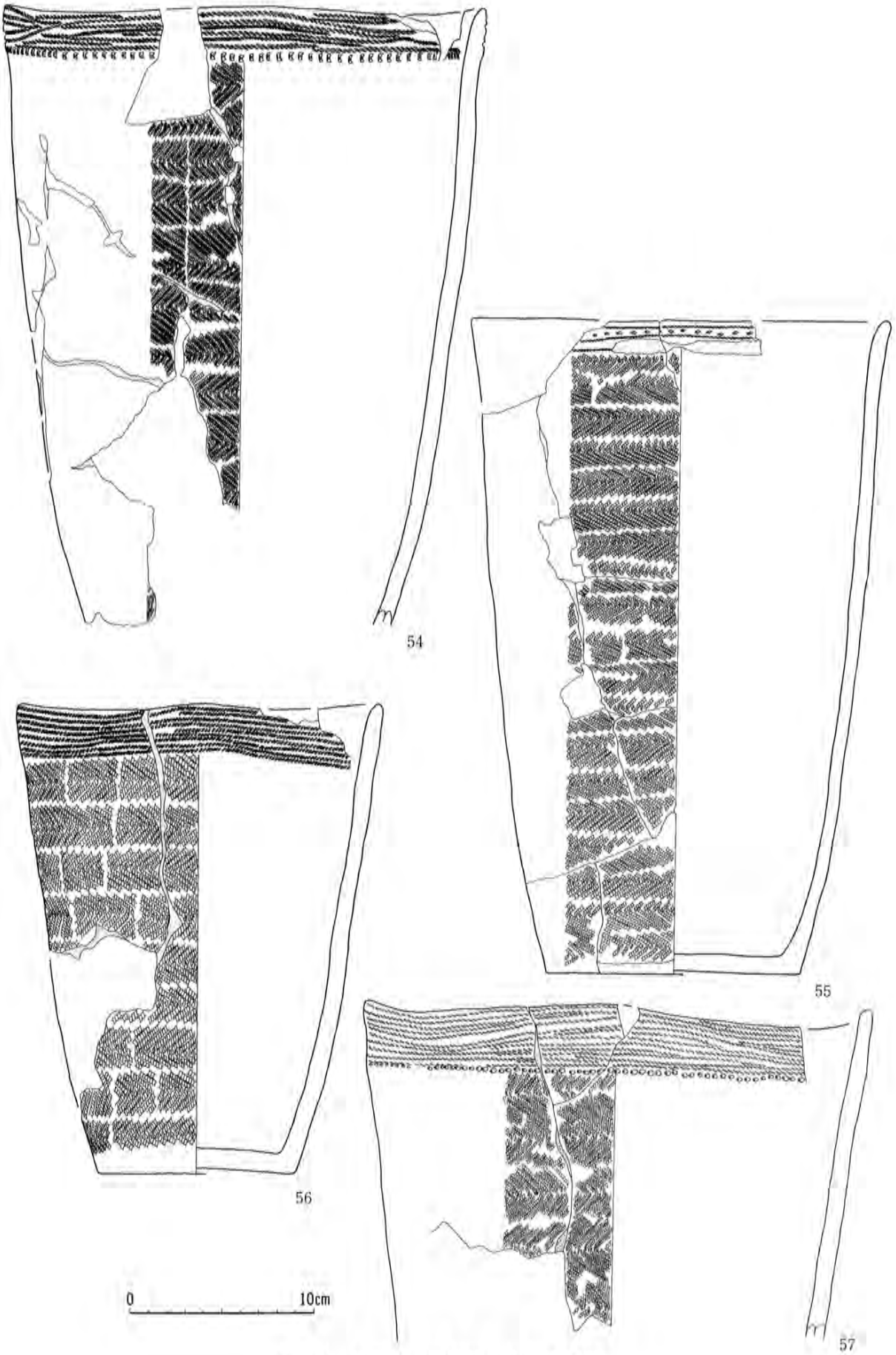


図152　B捨場（西捨場）出土土器(13)

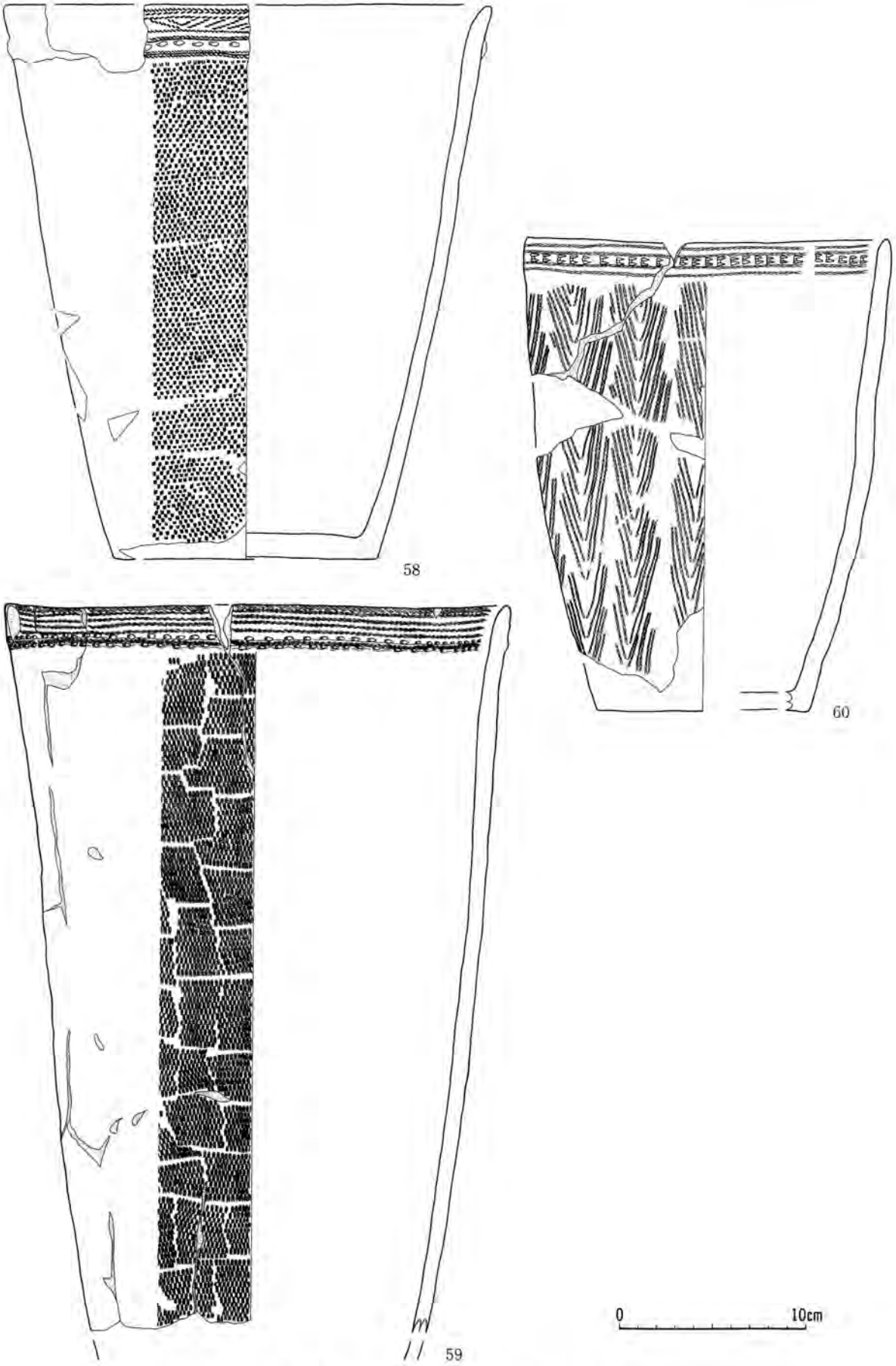


図153　B捨場（西捨場）出土土器(14)

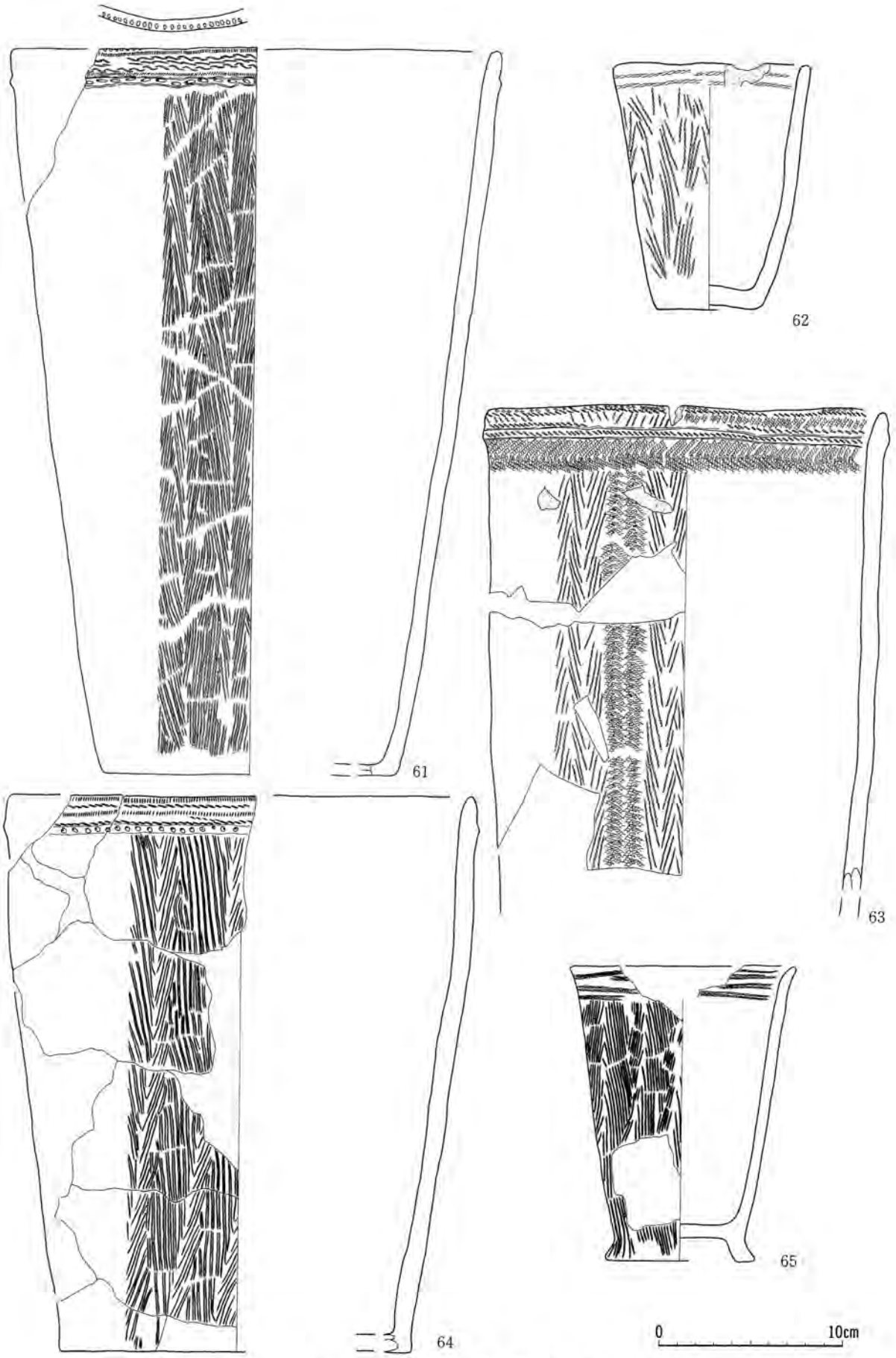


図154　B捨場（西捨場）出土土器(15)

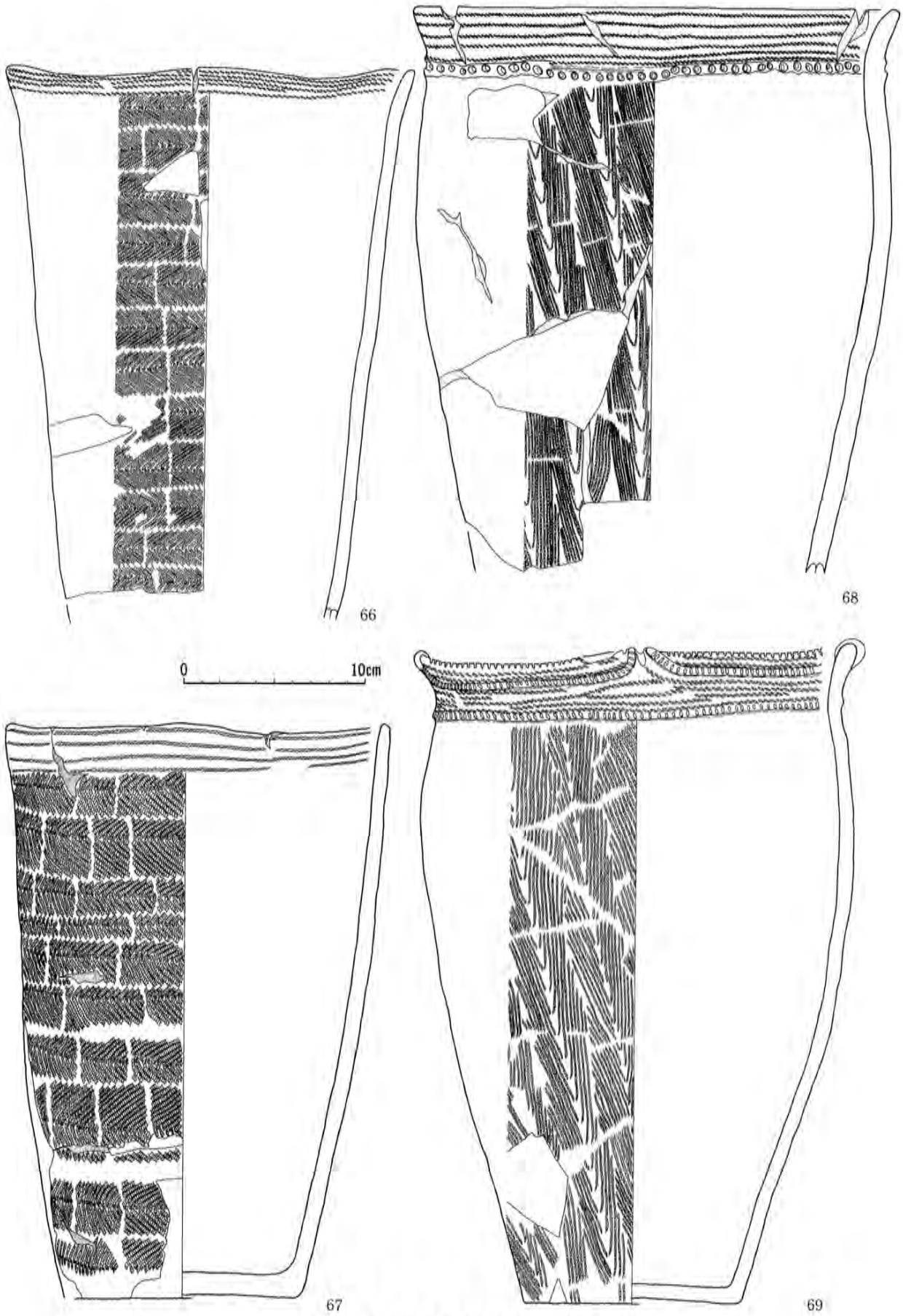


図155　B捨場（西捨場）出土土器(16)

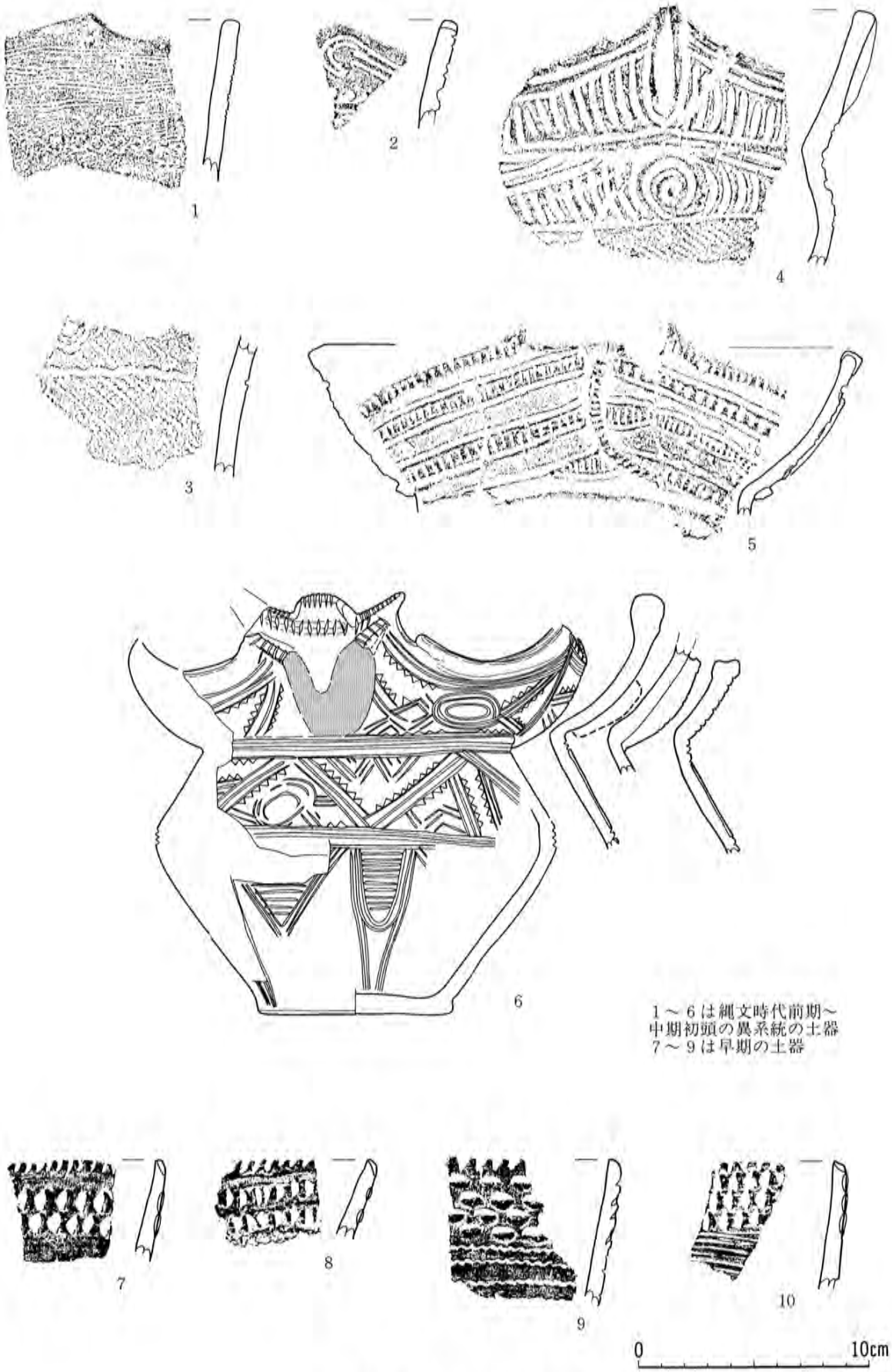


図156　B捨場出土土器(17)

第Ⅳ章 ま と め

３ヶ年にわたったＣ捨て場の調査では、総遺物箱数700箱の遺物が発掘された。以下に調査のまとめをする。

Ｃ捨て場は畑内遺跡の北側に位置する台地の南西斜面に確認された。以前に調査されたＢ捨て場（旧西捨て場）とは台地を挟んで反対側に位置する。遺物の散布している面積は約2,600㎡である。出土した遺物の時期は縄文時代早期～平安時代までである。次に各時期についてまとめる。

縄文時代早期～前期初頭

畑内遺跡で確認されるもっとも古い時期である。Ｃ捨て場では白浜式並行、吹切沢式並行と考えられる破片が数点出土している。また、前期初頭に属すると思われる破片も数点出土している。

縄文時代前期中葉～中期初頭

畑内遺跡の規模が一気に大きくなる時期である。土器型式でいうと円筒下層ａ式～上層ａ式にあたる。量的には円筒下層ｄ式のものが圧倒的に多い。次いで円筒下層ｂ式が多く出土している。

特筆される遺物は、東北南部及び北陸地方の土器群である。縄文時代前期～中期の東北北部は青森県を中心とし、北海道南西部・秋田・岩手の北部地方に広がる円筒土器文化圏に属している。畑内遺跡は青森・岩手の県境に位置しているため、円筒土器文化圏の中でも辺境であり、東北南部に広がる大木式土器文化圏との接点に近い地域である。そういう地理的環境のせいか、畑内遺跡には大木式系の土器が少なからず混入している。今回Ｃ捨て場からは前期末～中期初頭にかけての大木６式～７ａ式にかけての土器群が地元の同時期の土器群に混じってややまとまって出土した。内容的には大木式そのもの、器形だけまねているもの、器形・文様構成はまねているが、施文具が円筒土器的なもの、文様だけまねているもの、等がある。北陸地方の土器については形式名でいうと朝日下層式、新保式に並行しそうな土器群がわずかに出土している。太平洋側では数少ない資料である。

縄文時代中期後半から晩期

この時期は畑内遺跡の規模がいったん縮小する時期である。中期の円筒土器については上層ｃ・ｄ式の破片がわずかに出土しているだけである。中期末～後期初頭にかけてはやや出度量がまとまるが、前期とは比べものにならない。晩期にはいるとさらに出土量が少なくなり、この時期の様相は不明確である。

弥生時代前期初頭

再び畑内遺跡が活気を帯びる時期である。前回報告と今回報告の遺物は地点的にほぼ同じである。いわゆる砂沢式に並行する土器群がまとまって出土している。中には東北南部的な土器・西日本の影響を受けたと考えられる土器（遠賀川式系土器）などが混入しており、この時期にもやはり交流が活発であったことがうかがえる。

弥生時代後期以降

これまで遺構・遺物ともにごくわずかであったが、今回ややまとまった土器群が出土したことで、本遺跡にも弥生時代後期の人々が生活していた可能性がでてきた。　（調査者一同）

C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器観察表（在地系）

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
1	37	BG-23	5	深鉢	a	平縁	ナデ	LR回転	結節回転文		LR横	内胴下		
2	82	BF-19	5	深鉢			荒いミガ		結節回転文		LR斜め			
3	18	BI-22	5	深鉢	a	平縁	荒いミガ	LR回転	結節回転文		LR横回転	内胴下		底面LR回
4	17	BH-22	5	深鉢	a	平縁	荒いミガキ		LR横回転後・LR側圧	LR側圧	LR斜め	内胴下		
5		BG-19	5	深鉢	b？	平縁	荒いミガ		LR側圧		RL・LR回			
6	193	BI-18	5	深鉢	b？	平縁	ミガキ		LR側圧	微隆帯・上下にLR	LR横回転	内胴下	外炭	
7		BH-16	5	深鉢	a？	平縁					LR横回転			
8		BI-16	5	深鉢		平縁	ミガキ				LR縦回転			大木９～
9	42	BI-22	5	深鉢	b？	平縁					RLR横回転	内胴下		粘板岩粒
10		BH-17		深鉢	b	平縁					単絡１斜め回転・結節回転・LR横			粘板岩粒
11		BG-19		深鉢	b	波状	荒いミガ				RLR横回転			粘板岩粒
12	22	BH-17	5	深鉢	b	平縁	荒いミガキ	直下にLR回転		LR側圧	単絡１縦回転			粘板岩粒
13		BH-16	5	深鉢		平縁			結節回転文？		RLR横回転・結節回転			粘板岩粒
14		BH-16		深鉢	b	平縁			RLR横回転	隆帯上に棒状工具押圧	RLR横回転・結節回転			粘板岩粒
15		BH-16		深鉢	b	平縁			RL横回転	隆帯上にRL横回転	単絡１縦回転			粘板岩粒
16	12	BH-22	5	深鉢	a？	平縁			LR横	隆帯上に棒状工具	LR斜め回転	内胴下		粘板岩粒
17	257	BH-17	5	深鉢	b	平縁			結束１回転	微隆帯２本・上下と間に爪形の刺突	結束１	全面	外炭	粘板岩粒
18	16	BH-16		深鉢	b	平縁			LR側圧・刺突	隆帯上にLR側圧	単絡１縦回転			粘板岩粒
19	21	BH-16		深鉢	b？	平縁			単絡１縦回転後LR側圧		単絡１縦回転・結節回転			粘板岩粒
20	20	BH-16		深鉢	b	平縁			LR・RL側圧	隆帯２本、上面	単絡１縦回転			粘板岩粒
21		BH-16		深鉢	a？	平縁			結節回転文	隆帯上に刺突	結節回転文			粘板岩粒
22	13	BI-22	5	深鉢	b？	平縁			結節回転文	隆帯上に指頭押圧	LR横回転			粘板岩粒
23		BH-16		深鉢	b	平縁			結節回転文	隆帯上に指頭押圧	多軸回転			多軸１本
24		BH-16		深鉢	b	平縁			結節回転	隆帯上に指頭押圧	単絡１縦回転・結節回転			粘板岩粒
25		BH-16		深鉢	b？	平縁			結節斜め回転	隆帯上に原体端部押圧？	単絡１縦回転			粘板岩粒
26		BI-16		深鉢	b？	平縁			結節回転	隆帯上に刺突	LR横回転			粘板岩粒
27		BH-16		深鉢	b？	平縁			結節回転	隆帯上に刺突２列	単絡１縦回転			粘板岩粒
28		BH-16		深鉢	b	平縁			結節回転文	隆帯２本、上面	結束１			粘板岩粒
29		BF-21		深鉢	a	平縁（突起有り）	荒いミガキ		櫛歯状沈線		撚り糸の反置反転		上半部タール状	赤色粒子
30		BI-21		深鉢	a？	平縁		刺突	櫛歯状沈線	隆帯上に刺突	櫛歯状沈線			粘板岩粒
31		BH-22		深鉢	g？	平縁			口唇直下に結束２回転		結束１附加条	内胴下		
32	129	BE-18	5	深鉢	c？	波状	ミガキ				結束１	内胴下	外炭	
33	278	BG-20	5	深鉢	d	平縁					結束２附加条	内炭	タール状	
34	283	BE-19	5	深鉢	d	平縁	ミガキ			屈曲部と口縁に刺	結束１		外炭	砂粒多い
35	40	BG-19	5	深鉢	d	弱波状	荒いミガキ				単絡6a縦回転	内胴下	外炭	
36	383	BJ-22	5	深鉢	e？	弱波状	ミガキ		LR側圧		単絡１縦回転	内胴下	外炭	
37	192	BI-21	5	深鉢	f？	平縁	ミガキ			R側圧	結束１	内胴下	外炭	
38	136	BH-21	5	深鉢		平縁	ミガキ				結束２			繊維少・砂粒多い
39	265	BG-19	5	深鉢	f	弱波状	ミガキ			LR側圧	結束１		外炭	化粧粘土
40	251	BG-19	5	深鉢	d？	波状	ミガキ			LR側圧	結束１			
41	304	BI-21	5	深鉢	f	弱波状	ミガキ	縄文側圧			結束１	内胴下	外炭	
42	44	BG-19	5	深鉢	c？	平縁	ミガキ	縄文側圧			結束１	内胴下	外炭	
43	6	BI-21	5	深鉢	f	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧・結束１	LR・RL側圧	多軸１	内胴下		
44	191	BG-20	5	深鉢							LR横回転・単絡４縦回転	内胴下		

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
45		BE-17	5	深鉢					LR側圧		単絡５縦回転	内胴下	外炭	
46	25	BG-20	5	深鉢	b？	弱波状	ミガキ		LR側圧	隆帯上に指頭押圧	単絡１縦回転	内胴下	外炭	
47	68	BF-19	5	深鉢	d	弱波状		LR回転	R側圧	LR側圧	単絡1a縦回転			木目１本
48	38	BE-18	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧	単絡１側圧	単絡1a縦回転			木目１本
49	375	BH-22	5	深鉢	c	弱波状	荒いミガキ	RL回転	LR側圧	LR側圧	単絡7a縦回転	内胴下	外炭	
50			5	深鉢	c	弱波状	ミガキ		R側圧		結束１			
51	177	BE-17	5	深鉢	c	平縁	ミガキ		LR側圧		結束１			
52	153	BH-21	5	深鉢	c	平縁	ミガキ		R側圧	LR側圧	結束１・結節回転		外炭	
52	189	BI-22	5	深鉢	c	平縁	ミガキ	L側圧（刻み状）	LR側圧	LR側圧	単絡１に結節巻き			
53	132	BG-19	5	深鉢	c	弱波状	ミガキ		L側圧	L側圧	多軸			
54	104	BI-22	5	深鉢	c	弱波状	ミガキ		LR側圧	LR側圧	結束１		外炭	
55	62	BG-19	5	深鉢	c	平縁	ミガキ		LR側圧	LR側圧	単絡１縦回転		外炭	
56	29	BI-22	5	深鉢	c	弱波状	ミガキ		L側圧	L側圧	結束１			
57	32	BE-19	5	深鉢			ミガキ		LR側圧	原体端部側圧・結節回転	結束１	内胴下	外炭	
58	180	BH-21	5	深鉢			ミガキ		LR側圧		単絡１縦回転	内胴下	外炭	
59	323	BH-21	5	深鉢	f	平縁	ミガキ	多軸回転	多軸横回転		多軸縦回	内胴下		
60	266	BH-20	5	深鉢	f	弱波状	ミガキ				多軸回転			
61	196	BH-20	5	深鉢	c	平縁	ミガキ		多軸横回転		多軸回転			多軸１本
62		BG-19	5	深鉢	f	平縁	ミガキ	刺突	単絡6a横回転	微隆帯上に刺突２列・上下に多軸側	単絡１縦回転・結節回転			
63	26	BF-18	5	深鉢	e	弱波状	ミガキ		単絡6a横回転	R側圧・間に刺突	単絡１縦回転・結節回転	内胴下	外炭	
64	69	BF-19	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ		R側圧観に刺突		多軸			
65	159	BE-18	5	深鉢	e？	弱波状	ミガキ		単絡6a横回転	微隆帯上に刺突	多軸・結節回転			
66	9	BF-18	5	台付深鉢	f	弱波状	ミガキ		L･R側圧間に刺突		単絡1a縦回転・結節回転	内胴下		木目１本
67	276	BG-20	5	深鉢	c	弱波状	ミガキ	LR回転	LR･R、RL･L束側圧、間に刺突		結束１			
68	142	BH-21	5	深鉢	c	弱波状	ミガキ		RL側圧間に刺突		結束１			
69	158	BE-18	5	深鉢	d	平縁			単絡１側圧			内胴		
70	31	BE-20	5	深鉢	f	弱波状	ミガキ		単絡１側圧	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			
71	66	BG-19	5	深鉢	f	弱波状	ミガキ	RL回転	単絡１側圧間に刺突	微隆帯上に刺突２	多軸回転			多軸２本
72		BG-19	5	深鉢	c？	弱波状	ミガキ	L側圧	RL・LR側圧	RL・LR側圧	単絡１縦回転			
73	70	BF-20	5	深鉢	f	弱波状	ミガキ	刺突	RL側圧間に刺突	微隆帯２本・上面に刺突	単絡1a縦回転	内胴下	外炭	木目１本同一・粒多移管に
74	38	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ				無文	内胴下	上半部	内面下半部炭化物
75	75	BG-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ				無文	内胴下		
76		BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	RL回転			結束１（羽状にならな			
77			5	深鉢	g	平縁	ミガキ				結束１			底部張り出す
78	1	BE-19	5	深鉢	g？	平縁	ミガキ	LR回転			結束１	内胴下	外炭（吹きこぼれ？）	
79	183	BH-21	5	深鉢	g？	平縁	ミガキ	LR回転	刺突		多軸回転			多軸２本
80		BE-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		結束２横回転・LR側圧	LR側圧	結束２縦回転			
81		BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		結節回転・LR側圧	LR側圧	結束１			
82	87	BF-20	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	R回転	結節回転・LR側圧		結束１・結節回転			
83	2	BF-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	RL回転	結束１回転・刺突		結束１附加条	内胴下	タール状	
84	144	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		結節回転	微隆帯上に刺突・下位に結	単絡1a縦回転		外炭	木目１本同一
85	122	BE-18	5	深鉢	f？	平縁	ミガキ		単絡１側圧	微隆帯上に刺突	結束１		外炭	

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
86		BE-18	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		単絡５側圧・R側圧	微隆帯上に刺突・下位に結	LR横・結節回転			
87	71	BE-18	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	LR回転	単絡１側圧	刺突列	結束１附加条			
88		BF-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		L・R束側圧	微隆帯２本・上面に刺突	結束１			
89		BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		LR側圧	単絡４側	結束１			
90		BF-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突	結束１			直前段反撚り
91		BG-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		R側圧	微隆帯上に刺突	結束１			
92		BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	LR回転	L側圧		結束１			
93		BG-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		R側圧	R側圧	結束１			
94	39	BF-20	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		L・R束側圧		結束１附加条	内胴下		
95	86	BF-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		L側圧	微隆帯上に刺突	結束１			
96	184	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		L・R束側圧	微隆帯上に刺突	結束１		外炭	
97	138	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		R側圧	微隆帯上に刺突	結束１		外炭	
98	157	BH-22	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	LR回転	L・R束側圧		結束１			閉じた縄
99	28	BF-21	5	深鉢（台付き？）	g	平縁	ミガキ		LR・RL、L・R束側圧	微隆帯上に刺突・下位に結節回転（閉じた	結束１附加条			
100		BF-19	5	深鉢		平縁	ミガキ		LR・RL側圧	微隆帯上に刺突	単絡１縦回転			
101	270	BF-18	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		R側圧・間に刺突		単絡１			
102	168	BF-18	4	深鉢	g	平縁	ミガキ	LR回転	R側圧	刺突列２列	単絡1a縦回転			口縁部に単絡1aを横回転
104	5	BE-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		RL側圧	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転	内胴下	外炭	
105	4	BH-24	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		LR側圧・間に原体端部		単絡1a縦回転	内胴下		
106	274	BE-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		LR・RL側圧		結束１・結束回転		外炭	
107	14	BE-19	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ	LR回転			結束１・結束２	内胴下		
108	101	BD-18	5	深鉢	g？	波状	ミガキ		単絡１回転？	LR側圧・刺突	結束１			Ｄ１群か？
109	11	BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	R側圧・間に結節回転		結束１・結節回転	内胴下		
110	67	BF-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	RL回転	R側圧・間に結節回転	微隆帯２本・上面に刺突	結束１・結節回転	内胴	上半部	
111	10	BH-22	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	L・R束回転・間に結節回		結束１			胴下部に結束２
112	124	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	結節回転	微隆帯上に刺突・下位に結	結束１			
113	115	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		L束側圧・間に結束２回		結束１			
114	27	BE-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	L側圧・間に結節回転		結束１	内胴下	外炭	
115	47	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	結束２	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			木目１本同一
116	46	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	単絡１側圧・結節回転	微隆帯上にLR回転、両端	単絡1a縦回転			
117	77	BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	L・R束側圧・結節回転		単絡１縦回転（L・Rの束）・結束２	内胴下		
118		BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯	結束２	内胴下		
119	181	BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ				無文	内胴下		
120		BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		単絡１側圧		結束１			
121	36	BG-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	単絡５側圧	微隆帯上に刺突２	結束１			
122	165	BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		単絡１側圧	微隆帯上に刺突	結束１			
123	125	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	RL回転	単絡５側圧・R束側圧	微隆帯上に刺突	LR横・結節回転		外炭	
124		BF-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		単絡５側圧・LR側圧	微隆帯上に刺突	結束１・２			
125		BG-19	5	台付深鉢	g	弱波状	ミガキ		L・R束側圧・単絡５側圧		結束２			
126	76	BF-20	5	深鉢	h	波状	ミガキ		R・L束側圧・単絡５	刺突列	結束２		外炭	透かし孔
127	24	BJ-23	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	単絡５側圧	微隆帯上に側圧・下位に結	単絡1a縦回転	内胴	口縁部	

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
128	108	BH-21	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ	単絡１側圧・L束側圧	単絡１側圧・LR側圧	微隆帯上に刺突２列	多軸２本			
129		BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	単絡５側圧・LR側圧	微隆帯上に単絡４	単絡1a縦回転			木目２本
130	169	BG-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		単絡１側圧	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転		外炭	木目１本
131	146	BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR・RL束側圧	微隆帯上にLR側圧	結束１	内胴下		
132		BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		単絡４側圧・LR側圧		単絡１縦回転（L・Rの束）			
133	369	BG-19	5	深鉢	e？	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧		結束１			
134	48	BF-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	RL回転	L側圧	微隆帯上に刺突	結束１			
135		BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	L・R側圧	微隆帯上に刺突	結束１・結束２			
136	179	BH-22	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧・間に原体端部		結束１			
137		BF-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突２	結束１・結束２			隆帯刺突間にL側圧
138		BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		L・R側圧	微隆帯上に刺突	結束１			
139		BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		L側圧		結束１			
140	7	BH-22	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		R側圧		結束１	内胴下	上半部ターール状	
141		BF-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		L側圧		結束１			
142	98	BF-20	5	深鉢	h？	波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に竹管押し引き	結束１附加条		上半部ターール状	透かし孔
143	367	BG-19	5	深鉢	h	波状	ミガキ		LR・R側圧		結束１附加条	内胴下		
144	88	BF-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧	微隆帯上に刺突・下位に結	結束１附加条			
145	56	BG-19	5	深鉢	h？	波状	ミガキ		LR・R側圧	微隆帯上に刺突・下位に結	結束１附加条			
146	147	BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	RL回転	LR側圧	微隆帯上に刺突	結束１・結節回転			
147	64	BF-19	5	深鉢	h	波状	ミガキ		LR・R側圧	微隆帯上に刺突	結束１附加条			
148	373	BG-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		R側圧	微隆帯上に刺突	結束１附加条	内胴		
149	263	BE-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	L側圧	微隆帯上に刺突	結束１	内胴		
150	65	BF-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		R側圧	微隆帯上に刺突	結束１			
151	54	BE-18	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突	結束１横		外炭	
152	119	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突	結束１附加条			透かし孔
153	175	BE-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧	微隆帯上に刺突	結束１	内胴下	外炭	
154	45	BH-21	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ	LR回転	L・R側圧	LR側圧	結束１・結節回転			
155	79	BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突	結束１附加条	内炭		
156	74	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	RL側圧	微隆帯上に単絡１	結束１			
157	111	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	RL回転	R側圧	微隆帯上に刺突	結束１附加条			
158	127	BE-18	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ	LR回転	L側圧		結束１			
159	255	BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧・間に刺突	微隆帯上に刺突	結束１・結節回転			
160	110	BE-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		LR側圧・間に刺突	微隆帯上に刺突	結束１			透かし孔
161	19	BH-22	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ		R・L束側圧（端部閉じる）		結束１	内胴下	ターール状	
162	89	BF-20	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ		LR側圧		結束１附加条		口縁付近	
163	130	BE-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	刺突	L・R側圧	微隆帯上に刺突	結束２		ターール状	
164	16	BG-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		RL・LR側圧	微隆帯上に刺突	結束２	内胴下	上半部	透かし孔
165			5	深鉢	g	平縁？	ミガキ		LR側圧		結束１・結束２			
166	19	BG-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		L側圧・刺突		結節回転		外炭	
167	172	BG-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR・RL側圧	微隆帯上に刺突	結束２	内胴下	口縁部	透かし孔
168	133	BH-21	5	深鉢	h	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧	微隆帯上に刺突	結束２	内胴下	口縁部	内面荒れる

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
169		BF-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧		単絡1a縦回転			木目１本
170		BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			木目１本
171		BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上竹管押し引き・下位に結節	単絡1a縦回転			木目１本
172		BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	LR側圧	単絡1a縦回転			
173		BH-21	5		g	弱波状	ミガキ		R側圧	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			木目２本
174	8	BH-22	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に縄文刺	単絡1a縦回転	内胴下	外炭	木目１本
175	152	BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			木目１本
176		BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		L側圧	微隆帯上にL側圧	単絡1a縦回転			木目１本
177	366	BG-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		L側圧	微隆帯２本、上面に刺突	単絡1a縦回転			木目１本・隆帯間にL側圧
178	103	BF-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	RL回転	L･R束側圧	刺突列	単絡1a縦回転			木目１本
179		BG-19	5	深鉢	h？	弱波状	ミガキ	単絡１回転	単絡１側圧	微隆帯上に刺突２列	単絡1a縦回転・下部多軸回			木目１本
180		BF-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			
181	94	BF-20	5	深鉢	h？	波状	ミガキ	RL回転	LR側圧	微隆帯上に竹管押し引き	単絡1a縦回転・結束２斜め	内胴下		木目２本
182														
183	43	BE-17	5	深鉢	e？	波状	ミガキ		R側圧		単絡１縦			
184		BF-20	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ		R側圧	微隆帯上に刺突	単絡１縦・結節回転・下			
185		BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突	多軸回転			
186	254	BF-19	5	深鉢	h？	弱波状	ミガキ	直下に結節回転	LR側圧・間に刺突	微隆帯上に刺突	多軸回転			
187	107	BF-20	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	縄文回転	LR・RL側圧・一部刺	微隆帯上に刺突２	多軸２本・単絡	内胴下	外炭	繊維少
188	90	BF-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	RL回転	R側圧		多軸回転			
189	189	BH-20	5	深鉢	h？	波状	ミガキ		L側圧・微隆帯・上面に刺突	微隆帯上に刺突	結束１			
190	190	BH-23	5	深鉢	g	波状（２単位か）	ミガキ	L側圧	L･R側圧・間に刺突	微隆帯上に刺突	単絡1a縦・結節	内胴	外炭	
191	170	BD-19	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	RL側圧・橋状取っ手・上面に刺突	微隆帯上に刺突	結束１・結節回転		外炭	
192	192	BE-17	5	深鉢	g？	弱波状	ミガキ	LR回転	L･R束側圧・間に刺突		結束２			
193	173	BE-21	5	深鉢			ミガキ		L･R側圧	微隆帯上に刺突	結束２	内胴	外炭	
194	194	BE-18	5	深鉢			ミガキ				多軸回転・単絡			多軸２本・木目
195	195	BG-19	5	深鉢			ミガキ				多軸回転	内胴下		
196	196	BG-19	5	深鉢			ミガキ（やや荒				結節回転	内胴下	外炭	
197	197	BH-21	5	台付深鉢			ミガキ				結束１・単絡５側圧、結節回転・刺			
198	377	BD-17	5	台付深鉢			ミガキ				多軸回転	内胴下		多軸２本
199	85	BF-19	5	台付深鉢			ミガキ				多軸回転	内底		多軸２本
200	381	BF-18	5	台付深鉢			ミガキ				単絡１・結節回転	内胴下、台付き部		
201	221	BH-24	5	台付深鉢			ミガキ				結節回転文	内胴下		繊維少・砂粒含む
202	84	BF-20	5	台付深鉢			ミガキ				R･L束側圧・単絡6a側圧			繊維含む
203	379	BG-18	5	台付深鉢			ミガキ				単絡1a縦回転	内底		木目１本同一
204	58	BF-19	5	台付深鉢			ミガキ				単絡１縦回転・結節回転横	内胴下	外炭	
205	52	BF-19	5	台付深鉢			ミガキ				多軸２本	内胴下・台付部内	外炭	
206		BH-21	5	深鉢	i	６単位波状	ミガキ		LR側圧・垂下隆帯	微隆帯（下位に結節回	単絡1a縦回転		外炭	ボタン状の貼り付け
207	195	BJ-21	5	深鉢	h	弱波状？	ミガキ		LR側圧・垂下微隆帯（６単位）	微隆帯・刺突列）下位に結節回転	単絡1a縦回転			

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
208	256	BI-21	5	深鉢	h？	平縁	ミガキ		LR側圧	結節回転文	結束２斜回転			やや下膨れ器形
209	282	BG-20	5	深鉢	h	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧	微隆帯上に竹管押し引き	結束１横		外炭	
210	279	BE-19	5	深鉢	i	平縁	ミガキ		LR側圧		LR横			
211	273	BE-19	5	深鉢	i	波状	ミガキ		LR側圧	隆帯				隆帯上にLR側圧
212	166	BI-21	5	深鉢	h？	波状	ミガキ	LR側圧	LR側圧	LR端圧・結節回転	結束１横			
213	102	BF-20	5	深鉢	i	弱波状	ミガキ	LR側圧	LR側圧	微隆帯（上面に	単絡1a縦回転			木目１本同一
214	280	BG-19	5	深鉢	i	平縁		LR側圧	LR側圧・垂下隆帯	LR端圧・結節回転文	LR横・結節回転縦	内胴下	外炭口縁部	繊維少
215	100	BF-19	5	深鉢	h	波状	ミガキ	LR側圧	LR側圧・垂下隆帯	微隆帯・LR端圧	結束２			繊維含む・隆帯上にLR側
216	20	BI-21	5	深鉢	i	平縁（４単位突	ミガキ		LR側圧		LR横	内胴下	外炭	
217	97	BF-20	5	深鉢	i	平縁（４単位突	ミガキ		LR側圧		LR横・結節回転	内胴口	外炭	繊維少・俵状突起
218	96	BF-20	5	深鉢	h	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧	LR端圧・結節回転	LR横・結節回転		外炭	繊維少
219	224	BG-19	5	深鉢	i	平縁（４単位突	ミガキ		LR側圧		LR横・結節回転			接合面に刷毛目
220		BH-21	5	深鉢			ミガキ				櫛歯状沈			繊維含む
221	259	BE-19	5	深鉢	i	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧		結節回転縦		外炭	口縁部に突起
273	224	BH-21	5	深鉢	c	平縁	荒いミガ				結束１			
274	326	BE-18	5	深鉢	d？	弱波状？	ミガキ		結束１横回転	微隆帯上に結束１回転・RL	多軸回転			
275	305	BH-17	5	深鉢	i？	平縁	ミガキ		前々段反撚り？					胎土緻密
276	201	BG-19	5	深鉢	d？	平縁？	ミガキ				LR横回転			
277	153	BD-18	5	深鉢	i？	平縁（突起有り）	荒いミガキ	LR側圧	LR側圧		LR横回転			繊維混入
278	219	BH-21	5	深鉢	d？	平縁？	ミガキ	LR側圧	L･R側圧					
279	356	BH-21	5	深鉢	d？	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧					外傾接合
280	285	BA-17	5	深鉢	a	平縁	ミガキ		結節回転文		多軸回			
281	346	BH-18	1	深鉢	a	弱波状	刷毛目状	刺突	結節回転文					
282	355	BD-17	5	深鉢	a	平縁	荒いミガ		結節回転		LR横回転			粘板岩粒
283	353	BC-19	5	深鉢	a	波状	刷毛目状	LR回転・波頂部に	結節回転文		LR斜め回転			
284	311	BH-17	1	深鉢	a	平縁	荒いミガ		結節回転文					
285	301	BH-17	1	深鉢	b	平縁	荒いミガキ		結節回転	隆帯上に単絡１回転、沈線				
286	342	BG-19	1	深鉢	a	平縁	ミガキ		結節回転文	隆帯上に刺突	LR横回転			
287	350	BC-17	5	深鉢	b	平縁	荒いミガキ		結節回転文	隆帯上にRLR側圧	RLR横回転			
288	250	BI-22	5	深鉢	b？	平縁	ミガキ		沈線・結節回転文	隆帯上に刺突	結節回転文			
289	303	BH-17	1	深鉢	a？	平縁	ミガキ		結節回転	隆帯上にLR横回転	LR横回転			粘板岩粒
290	300	BH-17	1	深鉢	a？	平縁	荒いミガキ		結節回転・指頭圧痕		単絡１斜め回転			
291	313	BH-19	1	深鉢			荒いミガキ		結節回転	指頭押圧	単絡１斜め回転			
292	247	BH-20		深鉢	a	平縁	ミガキ		結節回転文	隆帯上に刺突	RLR横回転			
293	344	BI-22		深鉢	a	平縁	荒いミガキ	刺突	結節回転（単絡４の変形か）	隆帯上に刺突	結節回転			
294	351	BD-18	5	深鉢	a	平縁	ナデ	竹管押し引き	結節回転・沈線		LR横回転			
295	494	BE-19		深鉢	a	波状	LR横回転	刺突	沈線	LR斜め				
296	233	BE-18	5	深鉢	a	平縁	ナデ	板状工具押し引き	無文	隆帯上に刺突	LR横回転			
297	150	BG-19	5	深鉢	c	平縁	ミガキ	R側圧	結束１					
298	151	BG-19	5	深鉢	d	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧・結束１					
299	312	BH-19	1	深鉢	a？	平縁	荒いミガ				LR横回転			
300	308	BH-19	1	深鉢	a？	平縁	荒いミガ		LR横回転	隆帯				
301	307	BH-19	1	深鉢	a？	平縁	ミガキ		RLR横回転					
302	235	BG-18	5	深鉢	b	平縁	荒いミガ				LR横回転			粘板岩粒
303	257	BH-18	1	深鉢	c？	平縁	荒いミガ				LR横回転			
304	295	BH-17	1	深鉢	a	平縁	荒いミガ				LR横回転			
305	271	BH-21	5	深鉢	b？	平縁	荒いミガキ		LR横回転	隆帯上に爪形刺突	LR横回転			
306	348	BG-16	1	深鉢	a？	平縁	荒いミガキ		LR横回転	隆帯上にLR回転	LR横回転			
307	297	BH-19	1	深鉢	a？	平縁	荒いミガキ		LR横	微隆帯上にLR横回				

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
308	253		1	深鉢	b？	平縁	荒いミガキ		単絡1縦回転	隆帯上に単絡1斜め回転	単絡1縦回転			粘板岩粒
309	309	BH-19	5	深鉢	a？	平縁	荒いミガキ		単絡1縦回転	隆帯上に単絡1斜め回転	単絡1縦回転			
310	168	BG-17	1	深鉢							単絡1縦回転			
311	284	BA-16	5	深鉢	a	平縁	ナデ		RLR側圧		RLR横回転			
312	236	BB-19	5	深鉢	g？	平縁			無文	LR側圧	LR縦回転			
313	296	BH-19	1	深鉢	a？	平縁	ミガキ		LR側圧		結束1			
314	164	BG-19		深鉢	b	平縁			LR横回転	LR側圧	LR横回転			
315	196	BE-18		深鉢	a？	平縁	荒いミガキ		LRL側圧	隆帯上に刺突				
316	244	BD-18	5	深鉢	b	平縁	荒いミガキ		LR側圧	隆帯上にLR側圧	LR横回転			粘板岩粒
317	349	BD-19	5	深鉢	a？	平縁	荒いミガキ		単絡1a縦回転	隆帯上に指頭押圧・沈線	単絡1a縦回転			
318	352	BC-17	5	深鉢	b	平縁	荒いミガキ		LR側圧	隆帯上に刺突	LR横回転			
319	343	BI-22	5	深鉢	a？	平縁	ミガキ		結節回転・LR側圧	隆帯上に刺突				粘板岩粒
320	376	BH-17	1	深鉢	a	波状	荒いミガ	刻み	LR側圧		RLR横回転			
321	371	BG-16	1	深鉢	b？	平縁	荒いミガキ		LR側圧・刺突	微隆帯上に刻み	単絡1縦回転			粘板岩粒
322	214	BH-19	5	深鉢	a？	平縁	荒いミガキ		LR・RL束側圧・刺突	隆帯・結節回転文				
323	370	BD-17	5	深鉢	b？	平縁	荒いミガ		RL側圧	RL側圧	RL横			
324	221	BF-19	5	深鉢	d？	平縁	ミガキ	爪形刻み	L・RL側圧	隆帯上に刺突・刻み・結節				
325	367	BH-21	5	深鉢	c？	平縁	ミガキ	LR回転	LR側圧	隆帯上にLR回転	LR横回転			
326	358	BG-18	5	深鉢	b	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧	隆帯上に刻み	RLR横回転			
327	359	BH-17	5	深鉢	a？	平縁			LR側圧	隆帯上に刺突		全面	外炭	
328	364	BH-18	5	深鉢	a？	平縁	ミガキ		単絡1側圧・RLR側圧	隆帯上に原体端部押圧？	RLR横回転？			
329	261	BG-18	5	深鉢	b	平縁			LR側圧	隆帯上に刻み				
330	363	BI-22	5	深鉢	c？	平縁	ミガキ		LR側圧	隆帯上に原体端部押圧？	多軸縦回転			
331	365	BG-19	5	深鉢	b	平縁	ミガキ		LR側圧	LR側圧	LR縦回転			
332	377	BF-19	5	深鉢	b？	平縁	ミガキ		LR側圧	隆帯上に原体端部押圧？	多軸回転			
333	362	BD-17	5	深鉢	c	弱波状	ミガキ		LR側圧	LR側圧	結束1			
334	258	BG-18	5	深鉢	c	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧	結節回転				
335	298	BH-17	5	深鉢	c	平縁	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突				
336	372	BG-19	5	深鉢	b？	平縁	ミガキ		LR側圧					
337	172	BD-19	5	深鉢	d	弱波状	ミガキ	縄側圧	結束1					
338	156	BD-19	5	深鉢	b？	平縁	荒いミガ		単絡1縦回					
339	310	BH-17	5	深鉢	c？	弱波状	ミガキ		結束1					
340	306	BH-19	5	深鉢	e？	平縁	荒いミガ	刻み	R側圧		RL横回			
341	232	BG-17	5	深鉢	f？	平縁	荒いミガキ	刻み	LR側圧・結束1	微隆帯上に刺突	結束1縦回転			
342	366	BH-20	5	深鉢	c	弱波状	ミガキ		R側圧	RL側圧	結束1			
343	368	BF-19	5	深鉢	d	波状	荒いミガ		R側圧	LR側圧	LR横回転			
344	255	BE-18	5	深鉢	b？	弱波状？	ミガキ		LR側圧	刺突・LR側圧	結束1・結節回転			
345	374	BF-19	5	深鉢	c	波状	荒いミガ		R側圧	L・R束側圧	結節回転			
346	375	BG-19	5	深鉢	d	弱波状	ミガキ		L・R側圧	単絡1側圧	結束1・結節回転			
347	373	BH-20	5	深鉢	d	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧・結節回転縦	LR側圧・結節回転	結節回転？			
348	360	BG-19	5	深鉢	c？	弱波状	ミガキ		L・L束側圧・刺突	L側圧・結節回転文	結束1			
349	361	BG-18	5	深鉢	c	平縁	ミガキ		LR側圧	隆帯上にLR側圧	RLR横回転			
350	329	BH-21	5	深鉢	f	平縁	ミガキ		LR側圧	LR側圧	結束1			
351	263	BF-19	5	深鉢	d	弱波状	荒いミガキ	LR回転	LR側圧	LR側圧	結束1・結節回転			
352	266	BI-21	5	深鉢	d	平縁	ミガキ	R側圧	単絡6a横回転	L・R束側圧間刺突2列	多軸縦回転・結節回転			
353	226	BG-19	5	深鉢	f？	平縁	ミガキ	LR回転	単絡6a横回転	LR側圧	単絡1鋸歯状施文・結節			
354	357	BH-21	5	深鉢	d？	弱波状	ミガキ		LR側圧	LR側圧・結節回転	多軸縦回転			多軸荒い
355	231	BH-21	5	深鉢	c	弱波状	ミガキ	LR側圧	LR・RL側圧		単絡1縦回転			

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
356	189	BF-19	5	深鉢	e？	弱波状	ミガキ		LR側圧		単絡１縦回転			
357	184	BH-18	5	深鉢	i？	平縁	荒いミガ		結節回転文					
358	314	BH-17	5	深鉢	e？	平縁	荒いミガ		結節回転文	微隆帯	結節回転			
359	256	BH-21	5	深鉢		平縁	ミガキ		単絡１縦回転	隆帯上に刺突・LR	RLR横回転			
360	396	BF-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	LR横回転	刺突間結節回転		結束１			
361	241	BH-20	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	結束１			結束１			
362	394	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	LR回転			結束２			
363		BB-19	5	深鉢		平縁	ミガキ	刺突			単絡1a縦回転			木目１本
364	390	BE-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ				単絡1a縦回転			木目１本
365	385	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ				結束１			
366	254	BE-18	5	深鉢	e？	弱波状	ミガキ	RL回転	L側圧・刺突・結節回	刺突両側にL側圧	多軸回転			多軸２本
367	273	BI-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		多軸横回転		多軸縦回			
368	275	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	LR回転	結節回転		結束１			
369	413	BE-18	5	深鉢	g	平縁？	ミガキ		単絡４側圧		単絡1a縦回転			木目１本
370	380	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	LR回転	L･R束側圧	微隆帯上縄側圧	結束１・結節回転			
371	407	BH-21	5	深鉢	e？	弱波状	ミガキ	LR回転	R側圧		結束１			
372	383	BD-18	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		R側圧	折り返し口縁	櫛歯状沈線			
373	392	BG-19	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		L･R束側圧		結束１			
374	403	BE-16	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧	隆帯上にLR側圧	単絡1a縦回転・結節回転縦			木目１本
375	400	BH-21	5	深鉢	g	平縁	ミガキ		R･L側圧・間に刺突	結節回転	単絡１a縦回転			木目１本
376	382	BD-17	5	深鉢	g	平縁？	ミガキ	LR回転	LR側圧	微隆帯上に縄側圧	単絡４縦回転			
377	393	BF-18	5	深鉢	g	平縁	ミガキ	RL回転	L側圧	微隆帯上に刺突	多軸縦回転			
378	331	BA-17	5	深鉢	g	波状	ミガキ		RL・R側圧		結束１			
379	337	BE-20	5	深鉢	h	波状	ミガキ		R側圧	刺突・両側にR側圧	結束１			
380	334	BE-18	5	深鉢	h	波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突２	結束１			
381	225	BE-18	5	深鉢	d？	波状	ミガキ		LR側圧		結束１			
382	318	BH-21	5	深鉢	h？	弱波状	ミガキ	LR側圧・微隆線上に刺突		LR側圧				
383	391	BD-18	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧間刺突	微隆帯上に刺突	単絡４側圧間刺突・結束			
384	341	BA-16	5	深鉢	g？	波状	ミガキ		L･R側圧間に刺突	微隆帯上に刺突				
385	493	BE-19	5	深鉢		平縁	ミガキ	刺突	L側圧・折り返し・ボタン状の突起		LR横回転			
386		BH-25	5	深鉢	g	平縁？	ミガキ	LR回転	LRL側圧	竹管刺突・結節				内面に受け口状の
387	238	BI-22	5	深鉢	g	弱波状？	ミガキ		隆帯・LR側圧・結節回転・単絡１縦回転	隆帯				237と同一固体
388	237	BI-22	5	深鉢			ミガキ				垂下隆帯・結節回転縦・単絡１縦			
389	262	BE-18	5	深鉢	h	弱波状	ミガキ		刺突・LR側圧・垂下隆帯	隆帯上に刺突・下位にR側圧	結束１			
390	332	BE-20	5	深鉢	i？	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧・垂下隆帯		単絡1a縦回転・結節回転			木目１本同一
391	336	BH-21	5	深鉢	h？	段違い	ミガキ	LR側圧	LR側圧・垂下隆帯	隆帯上にLR側圧	単絡2a縦回転			
392	216	BG-19	5	深鉢	h	平縁	ミガキ		LR側圧（折り返し）・垂下隆帯	刺突	単絡1a縦			木目１本同一
393	210	BF-19	5	深鉢	i？	平縁	ミガキ	R側圧	R側圧・垂下隆帯	微隆帯上に刺突・結節回転	単絡1a縦回転			木目１本同一
394	193	BD-17	5	深鉢	h	段違い	ミガキ		R側圧	微隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			木目１本同一
395	223	BD-18	5	深鉢	h	平縁？	ミガキ		R側圧	隆帯上に竹管押し引きと側	単絡1a縦回転	内胴下		木目１本
396	148	BF-19	5	深鉢	h？	弱波状	ミガキ		LR側圧	刺突・結節回転	結節回転縦			
397	222	BD-18	5	深鉢	h	波状	ミガキ		R側圧・垂下隆帯	隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
398	321	BC-18	5	深鉢	i	波状	ミガキ		LR側圧		結束１（羽状にならな			
399	330	BF-19	5	深鉢	i	弱波状	ミガキ	単絡１側圧	単絡１側圧・垂下隆帯	微隆帯上に刺突・結節回転	単絡1a縦回転・結束２縦			木目２本
400	333	BB-17	5	深鉢	h	弱波状	ミガキ		RL側圧・竹管刺突・垂下隆帯	隆帯上に刺突	結束１附加条・結節回転			
401	202	BE-18	5	深鉢	h	波状	ミガキ	刺突	単絡１側圧・垂下隆	結節回転	単絡1a縦回転			木目１本
402	180	BH-21	5	深鉢	h	弱波状	ミガキ		刺突・垂下隆帯・LR側	隆帯上に刺突	単絡1a縦回転			木目１本同一
403	190	BH-21	5	深鉢	i	弱波状	ミガキ		竹管刺突・LR側圧	竹管刺突・結節	単絡1a縦回転			木目１本同一
404	179	BH-21	5	深鉢	a	平縁	ミガキ	LR回転			LR横回転			
405	242	BE-18	5	深鉢		平縁	ミガキ		LR横回転		LR横回転			折り返し口縁
406	260	BF-20	5	深鉢	i	平縁	ミガキ		LR側圧	原体末端圧痕				
407	200	BG-19	5	深鉢	h？	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧	結節回転	結束１（羽状にならな			
408	228	BI-21	5	深鉢	h	平縁	ミガキ		LR側圧	結節回転	結節回転			
409	230	BG-21	5	深鉢	h	平縁	ミガキ	刺突	LR側圧	結節回転	結束２縦回転			
410	198	BF-19	5	深鉢	i	平縁	ミガキ	刺突	LR側圧	微隆帯上にLR側圧				
411	229	BF-19	5	深鉢	i	弱波状	ミガキ	LR側圧	LR側圧	刻み・結節回転	結節回転縦		外炭	
412	152	BE-19	5	深鉢	i	平縁	ミガキ		LR側圧・原体端部圧痕		LR横回転		外炭	
413	182	BH-21	5	深鉢	i	平縁	ミガキ		LR側圧・竹管刺突	竹管刺突・結節				
414	209	BF-19	5	深鉢	i	弱波状	ミガキ		LR側圧	微隆帯上に刺突・結節回転	結束２縦回転			
415	220	BF-19	5	深鉢	h？	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧	竹管刺突列・原体末端圧痕				
416	212	BF-19	5	深鉢	h	弱波状	ミガキ	LR側圧	LR側圧・ボタン状突起	微隆帯上にLR側圧	単絡1a縦回転・結節回転縦			木目１本同一
417	208	BI-22	5	深鉢	h	平縁	ミガキ		単絡１側圧・LR側圧	微隆帯上に側圧・下位に結	結節回転縦			
418	227	BG-21	5	深鉢	i	平縁	ミガキ	刻み	単絡１側圧・垂下隆	結節回転	LR横回転			
419	161	BD-18	5	深鉢	i	弱波状？	荒いミガキ		垂下隆帯・LR側圧		LR横回転			
420	175	BF-18	5	深鉢	i	波状	ミガキ		LR側圧・垂下隆帯	隆帯上にLR側圧	RLR横回転			
421	199	BF-19	5	深鉢	h	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧・垂下隆帯	微隆帯上に竹管押し引き	単絡1a縦回転			木目同一１本
422	335	BH-21	5	深鉢	h	波状	ミガキ	直下に竹管押し引き	LR側圧・垂下隆帯・ボタン状突起	微隆帯上に竹管押し引き・結節回転	結節回転・結束１縦回転・異原体による			
423	327	BH-21	5	深鉢	i	平縁	ミガキ		LR側圧（折り返し）・垂下隆帯	隆帯上にLR側圧・結節回転	単絡1a縦回転			
424	234	BE-18	5	深鉢	a？	平縁	荒いミガキ		LR側圧・原体端部圧痕・垂下隆					
425	323	BG-19	5	深鉢	h	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧（折り返し）・垂下隆帯	隆帯上に竹管押し引きと側圧・結節	結束１			
426	338	BF-20	5	深鉢	i？	平縁	ミガキ	LR側圧	LR側圧・垂下隆帯	隆帯上に刺突・下位にLR側	単絡1a縦回転			木目１本
427	204	BG-19	5	深鉢	i	平縁	ミガキ		LR側圧・垂下隆帯（上面に縄側					
428	203	BD-18	5	深鉢	i	弱波状	ミガキ		LR側圧・垂下隆帯（上面に縄側	隆帯と結節回転				
429	316	BF-19	5	深鉢	h？	弱波状（突起有			LR側圧、し･R側圧、刺突	隆帯と結節回転	結束１			
430	205	BG-20	5	深鉢	i	弱波状	ミガキ		LR側圧・竹管状工具の押し引き・垂下隆帯	結節回転				
431	207	BG-20	5	深鉢	i	波状	ミガキ	LR側圧	LR側圧・竹管押し引き					

図No	整番	出土位置	層位	器種	口唇形	口縁形	内面調整	口唇文様	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
432	183	BI-21	5	深鉢	i ?	弱波状	ミガキ		LR側圧		LR横回転			
433	211	BH-21	5	深鉢	i	波状	ミガキ		LR側圧	LR側圧	結束１？			
434	192	BF-19	5	深鉢	i ?	平縁（突起有り）	ミガキ	LR側圧	LR側圧					
435	215	BF-20	5	深鉢	i	波状	ミガキ	LR側圧	単絡１側圧・刺突		結節回転縦			
436	195	BH-21	5	深鉢	i ?	平縁（突起有り）	ミガキ	LR側圧	LR側圧					
437	177	BH-21	5	浅鉢	i	平縁	ミガキ				LR側圧		外炭	
438	188	BE-18	5	深鉢	i ?	弱波状	ミガキ		LR束側圧	微隆帯上に刺突	結束１附加条			
439	261	BH-21	5	深鉢	c ?	弱波状	ミガキ		LR側圧	LR側圧				
440	151	BF-21	5	深鉢	g ?	平縁	ミガキ	LR回転	RL側圧		結束１		外炭	
441		BH-21	5	深鉢	g	弱波状	ミガキ	LR回転	LR側圧	微隆帯上に爪形刺突・下位にLR側圧	多軸回転			多軸２本
442	271	BF-18	5	深鉢	g ?	弱波状	ミガキ		LR・RL束側		結束１			

異系統の土器観察表

図番号	出土位置	層位	器種	口縁	内調	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
222	BF-20	5	深鉢	波状	ミガキ			結束１（一部に刺突）			下膨れの器形・胎土に砂粒多
223	BD-20	5	深鉢	平縁	荒いミガキ			結節縦回転	全面		胎土に砂粒多
224	BD-17	5	深鉢	平縁	ミガキ	沈線・貼り付け	沈線	結束１縦回転			頸部で外傾する器形・胎土に砂粒
225	BD-19	5	深鉢		ミガキ	縦沈線？		半裁竹管による２本同時施文沈線・下部LR横		外炭	胎土に砂粒多
226	BD-19	5	球胴形深鉢	５単位波状	ミガキ	単絡４側圧	微隆帯上に結節浮線文状の竹管押し引き	単絡1a縦回転	内胴	口縁部	口唇部に刺突・砂粒やや多い
227	BE-20	5	球胴形深鉢	４単位波状	ミガキ	太沈線・突起状の貼り付け		鋸歯状・渦巻き状の沈線・RL横回転	内炭	外炭	砂粒多い
228	BG-19	5	球胴形深鉢	４単位波状	ミガキ	円形貼り付け・波紋状沈線・渦巻き状沈		結節回転縦			砂粒多い
229	BI-21	5	球胴形深鉢	波状	ミガキ	LR側圧・隆線状にL側圧	隆帯上に円形・方形の刺突、下位に交叉沈線	LR側圧による渦巻き文			繊維少量
230	BD-18	5	球胴形深鉢	波状	ミガキ	沈線・刺突	隆帯上に刺突	沈線・三角形彫刻・刺突			砂粒多い
231	BJ-23	5	球胴形深鉢		ミガキ			結束２・沈線			底部付近無文帯
232	BH-21	5	球胴形深鉢		ミガキ			LR側圧・斜沈線			
233	BH-21	5	浅鉢	平縁	ミガキ	無文		無文			繊維少量
234	BH-21	5	深鉢	平縁	ミガキ	RLR横回転・RLR側圧		結束１・結節縦回転			
235	BG-20	5	浅鉢	平縁	ミガキ	橋状取っ手・弁状突		無文			
236	BD-18	5	台付浅鉢		ミガキ			無文		全面・高台内面	繊維含む
237	BG-20	5	浅鉢	平縁	ミガキ	LR側圧	結節回転	結節回転・LR横回転			繊維含む
238	BF-20	5	深鉢	平縁	ミガキ	縦細沈線・平行沈線					繊維含む
239	BG-21	5	深鉢					沈線・結束１			鉱物粒多い
240	BE-19	1	深鉢			垂下隆帯・上面に刺突、平行沈線間に鋸歯状沈線					
241	BD-18	5	深鉢	波状	ミガキ	沈線・三角形彫刻	沈線	RL横回転			沈線は竹管による２本同時施文
242	BC-18	5	深鉢	波状	ミガキ	沈線・三角形彫刻	沈線	RL横回転			繊維含む
243	BA-18	5	深鉢	波状	ミガキ	沈線・三角形彫刻	沈線	RL横回転			
244	BG-21	5	深鉢？	平縁	荒いミガキ			結節回転横			砂粒多い
245	BF-20	5	深鉢？	平縁	荒いミガキ			結節回転横・結束１			砂粒多い
246	BF-20	5	深鉢	平縁	ミガキ	U字状の微隆線		LR縦回転			繊維含む
247	BB-19	5	球胴形深鉢	波状	荒いミガキ	沈線					砂粒多い
248	BB-17	5	深鉢？	平縁	ミガキ	竹管による沈線・LR横回転					胎土に繊維
249	BA-16	5	深鉢？	平縁	ミガキ	竹管による沈線で菱形文					胎土に繊維
250	BB-17	5	深鉢？		ミガキ	竹管による沈線で三角形・円形モチーフ					胎土に繊維
251	BB-17	5	深鉢		ミガキ			竹管による沈線			胎土に繊維
252	BB-18	5	深鉢？		ミガキ			竹管による沈線で三角形モチーフ・LR縦回転			胎土に繊維
253	BA-16	5	球胴形深鉢？	波状	ミガキ	隆線状に刻み、竹管による沈線					砂粒少
254	AZ-16	5	球胴形深鉢？	平縁？	ミガキ	隆線状に刻み、竹管による沈線					253と同一個体
255	BB-18	5	深鉢？	平縁？	ミガキ	沈線					口縁内部に貼り付
256	BE-19	5	深鉢	平縁		平行沈線・鋸歯状沈					砂粒多い
257	BF-19	5	深鉢？			渦巻き状沈線					砂粒多い
258	BA-17	5	深鉢？	平縁	ミガキ	無文帯の下位に平行沈線・縦位集合沈線・鋸歯状沈線					口縁内部に貼り付け
259	BA-16	5	深鉢？		ミガキ	縦位集合沈線・鋸歯状沈線	隆帯上に刻み	縄文回転			258と同一個体
260	BE-18	5	深鉢	平縁	荒いミガキ	沈線	微隆帯上に竹管押し引き				砂っぽい
261	BE-18	5	深鉢	平縁	ミガキ	口唇部にL側圧・格子状沈線	微隆帯上に竹管押し引き	縄文回転			
262	BB-18	5			ミガキ			細隆線			砂粒含む
263	AZ-18	5	深鉢		ミガキ	反隆起状沈線					砂粒多い
264	BC-17	5	深鉢		ミガキ	反隆起状沈線					砂粒多い
265	BC-17	5	深鉢		ミガキ	反隆起状沈線					砂粒多い
266	BC-17	5	深鉢		ミガキ			沈線・結節縦回転			砂粒多い
267	BC-18	5	深鉢		ミガキ	反隆起状沈線	刺突				砂粒多い
268	BC-18	5	深鉢		ミガキ	反隆起状沈線・三角形文					砂粒多い
269	BC-17	5	深鉢		ミガキ	反隆起状沈線	刺突				
270	BB-17	5	深鉢？		ミガキ	細隆線による鋸歯状文・平行文・一部に剥落					砂粒含む・口縁肥厚
271	BE-19	5	深鉢？	波状？		縦位鋸歯状貼り付け・沈線					砂粒多い
272	BE-20	5	深鉢			垂下隆帯上に爪形横圧、菱形沈線					砂粒多い

弥生時代前期の土器観察表

図番号	No	出土地点	層	分類	主文様	地文	外面調整	内面調整	外炭	内炭	赤	含有物	備考	色調
1		BC-18	5	?			ケズリ	ケズリ	タール	タール		砂粒	内外面ともに幅５から１０㎜の工具でのケズリ・口縁部刻み	灰黄褐10YR5/2
2	94	BF-24	5	ＩＡ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状				口縁部でやや外反	灰黄褐10YR5/2
3	136	BE-25	Ⅲ	ＩＡ		ＬＲ横斜	ミガキ	ミガキ	炭状				弱波状	灰黄褐10YR6/2
4	116	BA-19	5			ＬＲ横斜	ナデ（ミガキ）	ナデ（ミガキ）	スス			石英		灰黄褐10YR4/2
5	122	BB-19	5	ＩＡ		ＬＲ斜		ナデ	スス	スス		金雲母少	２個一組の指による刻み	燈7.5YR7/6
6	104	BD-23	Ⅳ	ＩＡ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ					口縁直下にミガキがみられるが無文帯にはならない	にぶい赤褐5YR4/4
7	114	BD-24	4			ＬＲ横斜	ナデ（ミガキ）	ナデ（ミガキ）	炭状			石英	口縁部のナデは縄文施文の前段階	褐灰10YR4/1
8	106	BD-25	Ⅳ	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ナデ						にぶい横褐10YR5/3
9	89	BD-22	Ⅲ	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	タール			石英	２個一対の山形突起	明赤褐10YR5/6
10	92	BJ-23	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状				弱波状	にぶい赤褐5YR5/4
11	140	BJ-24	Ⅳ	ＩＢ		ＲＬ横	ミガキ	ミガキ	タール					
12	118	BB-18	5	ＩＢ		ＬＲ横	ナデ（ミガキ）	ケズリ	炭状			砂粒多	胎土遠賀川っぽい	浅黄燈10YR8/4
13	121	BB-19	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状				口唇部に板状工具による？刻み	褐7.5YR4/6
14		BE-24	Ⅳ	ＩＢ		ＬＲ横斜	ミガキ	ミガキ	タール					浅黄燈10YR8/4
15		BD-23	Ⅳ	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ						にぶい赤褐5YR5/4
16	91	BC-19	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	タール				弱波状	黒褐10YR3/1
17	88	BD-22	Ⅳ	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	タール	炭状				褐灰10YR4/1
19		BE-20	5	ＩＢ		ＬＲ縦斜	ミガキ	ミガキ（ケズリ）	炭状					にぶい褐7.5YR5/3
20	124	BD-24	Ⅳ	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	スス				波状口縁・口縁部無文帯に指頭押圧	灰黄褐10YR5/2
21	119	BE-21	4	ＩＢ		ＬＲ横斜	ミガキ	ミガキ	炭状				口縁波状か山形突起	灰黄褐10YR5/2
22	126	BD-24	Ⅳ	ＩＡ		Ｒ横斜	ナデ	ナデ	炭状	炭状			口唇部刻み・接合痕明瞭（内傾）	にぶい黄燈10YR7/3
23	105	BE-22	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ					頂部二股の山形突起	黒褐10YR3/1
24	97	BE-21	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ナデ	炭状	炭状			頂部二股の山形突起	にぶい横褐10YR5/3
25	112	BE-20	Ⅱ	ＩＢ		ＬＲ斜	ナデ	ミガキ	炭状					にぶい黄燈10YR6/3
26	99	BA-19	5	ＩＡ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	タール				口唇部に指による押さえ・口頸部に指頭圧痕	灰黄褐10YR5/2
27	130	AZ-18	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ					波状口縁	赤褐10YR4/6
28	93	BD-22	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状				弱波状・口縁部短く外反	灰黄褐10YR4/2
29	131	BA-17	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ		タール				にぶい黄燈10YR6/3
30	132	BE-21	Ⅱ	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ		タール				にぶい黄燈10YR7/3
31	102	BC-19	5	ＩＢ		ＬＲ横斜	ミガキ	ミガキ	炭状					灰黄褐10YR5/2
32	128	BC-18	5	ＩＣ		ＬＲ斜	ミガキ	ミガキ	炭状			砂粒多		褐灰10YR5/1
33	111	BA-17	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ					棒状工具による刻み	にぶい黄燈10YR7/4
34	117	BC-18	5	ＩＢ		ＬＲ横	ナデ	ミガキ	炭状	タール			棒状工具による刻み	灰黄褐10YR6/2
35	108	BE-24	Ⅲ	ＩＢ		ＬＲ横	ナデ	ミガキ	炭状				棒状工具による刺突	にぶい黄燈10YR6/3
36	113	BC-18	5	ＩＢ		ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状				棒状工具による刻み	褐灰10YR4/1
37	87	BD-20	5	ＩＣ	横走沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ		スス				にぶい黄燈10YR6/3
38	95	AZ-19	5	ＩＣ	横走沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ			内			にぶい黄燈10YR6/4
39	65	BG-24	5	ＩＣ	沈線	ＬＲ横	ミガキ	ナデ	スス			石英	口縁部から胴部までスムーズにやや内湾気味に立ち上がっている	褐灰10YR4/1
40	98	BD-19	5	ＩＣ	横走沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状	炭状				褐灰10YR4/1
41		BA-17	5	ＩＣ	横走沈線	ＬＲ横斜	ミガキ	ミガキ	炭状			砂粒		にぶい黄燈10YR7/3
42	52	AY-18	5	ＩＣ	平行沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状	炭状		石英	沈線１	にぶい横褐10YR5/3
43		BC-18	5	ⅡＡ３	平行沈線	ＬＲ斜	ミガキ	ミガキ						褐灰10YR4/1
44	125	BD-18	5	ⅡＡ２	平行沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	タール					褐灰10YR4/1
45	137	BE-21	Ⅳ	ＩＢ？		ＬＲ斜		ミガキ				砂粒	深鉢ＩＢの底部か？	灰黄褐10YR5/2
46	73	AZ-18	5	ⅡＡ２	平行沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状	タール		石英	口縁内面沈線	明赤褐10YR5/8
47	72	BC-20	Ⅳ	ⅡＡ１	平行沈線	ＬＲ横		ミガキ	炭状					にぶい黄燈10YR7/4
48	100	BI-25	5	ⅡＡ３	平行沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状				弱波状？	褐灰10YR4/1
49	107	BC-19	Ⅳ	ⅡＡ２	平行沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	タール				棒状工具による刺突・沈線４条	にぶい黄燈10YR6/3
50	59	BD-22	5	その他	平行沈線	ＬＲ横斜		ミガキ	炭状				口唇部に指？による斜め刻み	灰黄褐10YR4/2
51	86	BC-19	5		平行沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状				やや大きめな斜め刻み。口縁外反	灰黄褐10YR4/2
52	129	BI-25	5	ⅡＡ２	浅い平行沈線	ＬＲ横斜		ミガキ	炭状				頂部二股の山形突起が連続している	褐黄灰10YR5/2
53	96	BG-23	5	ⅡＡ２	平行沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状	タール			頂部二股の山形突起	灰黄褐10YR4/2
54	67	BC-18	5	ⅢＡ３	平行沈線	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	タール	タール				褐灰10YR4/1
55	77	BE-25	Ⅳ	ⅡＢ	流水工字文	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	スス	炭状			波状口縁・内面沈線	灰黄褐10YR4/2
56	69	BI-25	5	ⅢＦ	平行工字文、矢羽根状？沈線	ＬＲ横		ミガキ	タール	スス				褐灰10YR4/1
57	64	BD-18	5	ⅡＣ	平行沈線と無文帯・平行工字文	ＬＲ横	ミガキ	ナデ	炭状	炭状	内		無文帯の下は平行工字文の可能性がある	にぶい黄燈10YR6/3
58	74	AZ-19	5	ⅣＢ	平行沈線		ミガキ	ミガキ				砂粒多	沈線は太さが一定せず汚い感じがする。	褐灰10YR4/1
59	42	BE-19	4		平行沈線		ミガキ	ミガキ？			内外		口縁直下の沈線と胴部屈曲部の沈線間に幅広の無文帯・沈線１	灰黄2.5YR7/2
60	82	BA-18	5	ⅣＢ	横走沈線・無文帯・平行工字文	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ	炭状					褐灰10YR4/1

図番号	No	出土地点	層	分類	主文様	地文	外面調整	内面調整	外炭	内炭	赤	含有物	備考	色調
61	79	BA-17	5	ⅣB	横走沈線・無文帯・平行工字文	LR横	ミガキ	ナデ				石英	平行工字文は沈線の切れ目に段差を作ることで瘤を表現している	灰黄褐10YR5/2
62	71	BD-18	5	ⅣB	平行沈線・無文帯		ミガキ	ミガキ					胎土精良・焼成堅緻	灰黄褐10YR4/2
63	38	BE-20	5		平行沈線	LR横	ミガキ	ミガキ			外	砂粒多	二本一単位の平行沈線を二段施文	褐灰10YR4/1
64	75	BA-18	5		沈線・無文帯	LR横	ミガキ	ミガキ	タール	タール			口縁内面沈線、口縁部直下に縄文施文・無文帯と縄文を沈線で区画している。	灰黄褐10YR5/2
65	110	BH-20	Ⅰ	ⅡA？	平行沈線	LR横	ミガキ	ミガキ		タール			山形突起・平行沈線間無文	褐7.5YR4/2
66	70	BD-23	Ⅳ		平行沈線・変形工字文		ミガキ	ミガキ			内外		頂部二股の山形突起・頂角部彫り込み処理	褐灰10YR4/1
67	5	BB-17	5		変形工字文連結型	LR横	ミガキ	ミガキ					胎土きめ細かい・瘤横彫り込む・波状突起先端部に刻み（6単位か？）	にぶい黄燈10YR7/4
68	66	BD-19	5	ⅢD？	変形工字文	LR斜	ミガキ	ミガキ	炭状	炭状			胎土精良	にぶい黄燈10YR5/3
69	76	BD-18	5	ⅢE	波状工字文？・刺突		ミガキ	ミガキ			内外		平行沈線・平行工字文の下に波状工字文か？刺突は波状工字文部に施される・2個一組の山形突起	黒褐10YR3/1
70	84	BE-20	5	ⅢB	変形工字文		ミガキ	ミガキ					頂部二股の山形突起	にぶい黄燈10YR6/3
71	81	BD-24	Ⅳ	ⅢB？	変形工字文		ミガキ	ミガキ	タール		外		2個一対の山形突起	灰黄褐10YR6/2
72	63	BD-18	5	ⅢC	変形工字文		ミガキ	ミガキ				スス		黒褐10YR3/1
73	85	BA-17	5	ⅢC	変形工字文		ミガキ	ミガキ				長石		にぶい黄燈10YR7/2
74	78	BD-19	5	ⅢB	変形工字文		ミガキ	ミガキ			外		頂部二股の山形突起・頂角中点部彫り込み処理	黒褐10YR3/1
75	83	BB-18	5	Ⅲ	変形工字文		ミガキ	ミガキ					突起部は破損しているため形状不明	浅黄燈10YR8/3
76	10	BF-20	5		変形工字文		ミガキ	ミガキ			外		胎土きめ細かい・口唇部に沈線・沈線1	燈7.5YR6/6
77	17	BG-24	5		平行工字文		ミガキ	ミガキ					波状突起頂部に刻み、口唇部沈線	にぶい黄燈10YR7/4
78	142	BG-25	Ⅳ	ⅠB		LR横斜	ミガキ	ナデ					底部から斜めに立ち上がり口縁部で短く直立する	褐灰10YR4/1
79	134	BA-19	5	ⅠB		LR横斜	ミガキ	ミガキ	炭状	炭状		砂粒多	口縁部付近で短く直立する	にぶい黄燈10YR6/3
80	80	BH-24	5	Ⅲ？	変形工字文	LR横	ミガキ	ミガキ	タール				底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がる。	褐灰10YR4/1
81	62	BC-25	Ⅳ		流水工字文	LR斜	ミガキ	ミガキ				砂粒多	沈線3	褐灰10YR4/1
82	3	AZ-16	5		変形工字文	LR斜	ミガキ	ミガキ			内外		沈線1	灰黄褐10YR5/2
83		BD-24	Ⅳ	VA1	変形工字文重層完結型		ミガキ	ミガキ			内外		変形工字文の直下に無文帯、その下位に平行沈線	燈7.5YR6/6
84	12	BG-23	5		変形工字文	LR横	ミガキ	ミガキ			外		沈線1	燈5YR6/6
85	18	BB-20	5		変形工字文		ミガキ	ミガキ				金雲母	沈線2・口縁内面沈線	燈5YR6/6
86	23	BE-25	Ⅳ		変形工字文完結型		ミガキ	ミガキ					胎土精良・内面沈線・沈線1	燈5YR6/6
87	11	BF-21	5		変形工字文		ミガキ	ミガキ					胎土きめ細かい	燈7.5YR6/6
88	22	BD-18	5		変形工字文完結型		ミガキ	ミガキ			内外		胎土きめ細かい・瘤横彫り込む	にぶい黄燈10YR7/4
89	56	BE-25	5	VIB1	変形工字文連結型	LR斜縦	ミガキ	ミガキ					底角部は二個一対の刺突が施される	燈5YR6/6
90	4	BC-18	5		変形工字文完結型		ミガキ	ミガキ			内外		胎土きめ細かい・瘤横彫り込む	にぶい黄燈10YR7/4
91	1	AZ-23	5		平行工字文		ミガキ	ミガキ					口縁内面沈線・沈線断面2	にぶい黄燈10YR7/4
92	61	BD-18	5	VIA	変形工字文	LR斜	ミガキ	ミガキ					口縁部内面に沈線、頂角部はπ字文のような処理	にぶい黄燈10YR6/3
93	57	BD-24	Ⅳ	VIB1	変形工字文完結型		ミガキ	ミガキ					頂角間中点刺突処理・沈線2	褐10YR6/4
94	20	BB-17	5		流水工字文？		ミガキ	ミガキ					平縁・沈線1	灰黄褐10YR5/2
95		BA-17	5		変形工字文特殊	縄文	ミガキ	ミガキ					ミニチュア土器	
96	13	BC-24	4		沈線		ミガキ	ミガキ					口唇部沈線	燈5YR6/6
97	24	BD-24	Ⅳ		平行工字文	LR斜	ミガキ	ミガキ				金雲母	平縁・沈線3	燈5YR6/6
98	2	BB-20	5		波状文・並行沈線		ミガキ	ミガキ				金雲母	高坏の脚部	燈5YR6/6
99	21	BE-18	4		平行沈線		ミガキ	ミガキ						にぶい黄燈10YR6/4
100		AK-27	5		沈線		ミガキ	ミガキ					土器の脚部	

図番号	No	出土地点	層	分類	主文様	地文	外面調整	内面調整	外炭	内炭	赤	含有物	備考	色調
101		BD-25	Ⅳ	ⅧB	頸部に横走沈線		ミガキ	ケズリ	炭状				在地系壺・胴部中位に最大径	赤褐10YR4/6
102		BD-18	5	ⅧA	頸部に横走沈線		ミガキ	ナデ？					風化激しく表面の剥落箇所多い	浅黄燈7.5YR8/6
103	14	BA-19	5		沈線		ミガキ	ミガキ			内外	金雲母		燈7.5YR6/6
104		BB-20	5	Ⅷ	平行工字文		ミガキ	ミガキ						褐灰10YR5/1
105		BH-22	5	Ⅷ	平行工字文		ミガキ	ミガキ						
106		AZ-16	5	Ⅷ	頸部平行工字文・変形工字文完結型・平行沈線	ＬＲ斜	ミガキ	ミガキ			外		口縁部はゴロッとした突起上に３本の刻みが施される・頸部は平行工字文を隆帯状に作り上げている。変形工字文と平行沈線の間に無文帯	浅黄燈10YR8/3
107		AZ-19	5	ⅧB	変形工字文交互重層完結型	ＬＲ横斜	ミガキ	ミガキ（ケズリ）	炭状		外		口縁部なし	にぶい黄燈10YR6/3
108	60	BB-20	5	ⅧB	変形工字文完結型	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ					変形工字文は残存部分では１段だが重層する可能性もある	褐灰10YR4/1
108		BB-20	5	ⅧB	平行沈線・変形工字文？	ＬＲ横斜	ミガキ						変形工字文の文様構成は不明	褐灰10YR4/1
109		BB-20	5	ⅧA１	横走沈線		ミガキ	ミガキ						褐灰10YR4/1
110		BB-20	5	ⅧA１	横走沈線	ＬＲ横斜	ミガキ	ミガキ						褐灰10YR4/1
111	29	AZ-18	5		変形工字文・平行沈線		ミガキ	ナデ					胴部の屈曲部に微隆帯・隆帯状には縦の刻み・変形工字文は浮き彫りのよう	にぶい黄燈10YR7/3
112	48	BC-24	Ⅳ	ⅧA	変形工字文		ミガキ	ミガキ				金雲母	変形工字文三角部頂点が匹字文状	にぶい黄燈10YR7/4
113	25	BD-20	Ⅳ		変形工字文完結型	ＬＲ横	ミガキ	ミガキ					平縁・頸部に蓋と対になる２個一対の貫通口	にぶい黄燈10YR7/3
114		AX-16	5		平行沈線・同心円状沈線		ミガキ	ミガキ						
115	68	BG-23	5	？	沈線		ミガキ	ミガキ						にぶい黄燈10YR7/4
116	43	BF-21	5	ⅨB	平行沈線（３本～４本		ミガキ	ミガキ				細砂粒多		にぶい黄燈10YR7/3
117		BE-20	5	ⅨB	平行沈線		ミガキ	ミガキ					表面の風化激しい	
118	39	BC-25	Ⅳ		沈線		ミガキ	ミガキ					細かい砂粒を含むが胎土、焼成ともに良好	にぶい黄燈10YR7/4
119	30	BD-19	5		平行沈線間木目状列点文		ミガキ	ミガキ				砂粒多	列点文は内面に木目の跡が明瞭	燈7.5YR6/6
120	32	BD-19	5		平行沈線間列点文		ミガキ	ミガキ				細砂粒多	砂粒は多いが細かい・器表面はややひび割れが目立つ	にぶい黄燈10YR7/3
121	47	BF-20	5	ⅨB	平行沈線		ミガキ	ミガキ				砂粒多	遠賀川壺頸部	にぶい黄燈10YR7/4
122	37	BE-19	5		平行沈線間列点文		ミガキ	ミガキ				砂粒多	列点文はどちらかというと刻みのよう	にぶい黄燈10YR7/4
123	53	BE-20	5	ⅨB	平行沈線・U字沈線		ミガキ？	ミガキ？				砂粒多	遠賀川壺肩部付近、３条の平行沈線の上位にU字状沈線施文、沈線施文前にはハケメの痕跡がみられる。風化激しい	灰5Y5/1
124	54	BB-16	5	ⅨB	平行沈線		ミガキ？	ミガキ？				砂粒多	沈線は場所によって４本から５本に分かれる。また、頸部付近に指による浅く太い沈線条のくぼみがみられる	灰5Y5/1
125	34	BA-19	5		平行沈線		ミガキ	ミガキ	炭状			細砂粒	沈線１・口唇部内面側に斜めの刻み	にぶい黄燈10YR7/3
126	143	BE-22	Ⅳ	ⅨA	平行沈線	ＬＲ斜	ナデ	ミガキ	タール	スス		砂粒多	遠賀川系甕・口唇部に斜めの刻み	にぶい黄燈10YR6/3
127	36	AZ-18	5		平行沈線		ハケメ	ナデ				砂粒多	口縁部横ナデ口唇部に斜めの刻み・沈線３	にぶい燈7.5YR7/3
128	115	BF-26		ⅨA	平行沈線間木目状列点文		ハケメ	ナデ	スス	炭状		砂粒多	遠賀川系甕・頸部に木目状列点文	にぶい黄燈10YR7/3
129	120	BF-26		ⅨA			荒いハケメ	ナデ				砂粒多	遠賀川系甕体部	にぶい黄燈10YR6/3（黒）
130		BE-24	Ⅳ	ⅨA？	平行沈線		ミガキ？	ミガキ？				砂粒	遠賀川系のミニチュアか？	
131		BC-17	5		変形工字文		ミガキ	ミガキ					ミニチュア土器	

弥生時代後期以降の土器観察表

図番号	番号	出土位置	層位	器種	分類	口縁部文様	胴部文様	内面	胎土	炭化物	備考	色調
1	530	AX-19	5	壺か甕			平行沈線・平行沈線による鋸歯文・平行沈線内	ミガキ	金雲母			にぶい黄燈10YR7/4
2	531	AX-19	5	甕か壺			平行沈線・平行沈線による鋸歯	ミガキ	金雲母		一部に赤彩	灰黄褐10YR6/2
3	451	AZ-19	5	甕		附加条圧痕、回転・沈線？	特撚横回転で横帯を作りその下位に附加条縦回	ミガキ	金雲母			にぶい黄燈10YR7/4
4	443	AZ-19	5	甕			特撚横回転で横帯を作りその下位に附加条縦回	ミガキ	金雲母	内外		にぶい黄燈10YR7/4
5	454	BA-19	5	甕			特殊撚り糸文斜め？回転	ミガキ	砂粒多	外		灰黄褐10YR6/2
6	455	BA-19	5	甕			特殊撚り糸文縦回転	ミガキ	砂粒多			褐灰10YR4/1
7	458	BA-19	5	甕			特殊撚り糸文斜め回転？	ミガキ	砂粒多	内外		にぶい黄燈10YR6/3
8	445	BI-25	4	甕？		特殊撚り糸文横回転		ミガキ			折り返し口縁	灰黄褐10YR6/2
9	450	BI-25	4	甕？			特殊撚り糸文横回転	ミガキ			底部破片	にぶい黄燈10YR7/4
10	448	BF-24	4	甕？		平行沈線間交互刺突	特殊撚り糸文回転	ミガキ				にぶい燈7.5YR7/4
11	444	BD-23	2	甕？		平行沈線間交互刺突	特殊撚り糸文回転	ミガキ				にぶい黄燈10YR7/4
12	596	BF-22	4	甕？		平行沈線施文後交互刺突（２段か？）		ミガキ				にぶい黄燈10YR7/4
13	446	BH-25	4	壺か甕			平行沈線間交互刺突	ミガキ				にぶい黄燈10YR7/4
14	449	BF-21	4	甕？	後北Ｃ２・Ｄ	刻目貼付帯	三角形刺突・微隆線・帯縄文	ミガキ	砂粒多		口縁直下の破片・縄文は０段多条ＲＬ	浅黄燈10YR8/3
15	459	AZ-19	5	甕		口唇部特殊撚り糸文回転・口縁部平行沈線間交互刺突	特撚り横～斜め回転・口縁部直下、胴部～底部にかけての屈曲部、底部付近に横回転による黄	ミガキ	精良	内外		燈10YR7/6
16		BA-17	4	甕	土師器	ナデ？	ケズリ	ヘラナデ	砂粒多	内外		
17		BE-19	4	注口	？							
18	447	BE-19	4	甕？		無節ｒ斜め押圧	単絡１ｒ縦回転	ミガキ			時期不明・口唇平坦	灰黄褐10YR6/2

石匙以外の剥片石器観察表

遺物NO.	図番号	器種	出土位置	層位	分類	二次加工	剥離方向	石材	長さ	幅	厚さ	重	備考
1231	1	石鏃	BC-18	Ⅴ	A	HMP	両面	珪質頁岩	26	11	4	1	ゴロッとしている
92	2	石鏃	BI-22	Ⅲ	A	HMP	両面	ﾁｬｰﾄ？	24.3	11.2	5.6	1.0	注記　Cステ、先端部欠損。
11	3	石鏃	BF-22	Ⅱ	A	HMP	両面	赤ﾁｬｰﾄ	29.2	10.9	5.2	1.0	注記　Cステ
14	4	石鏃	BE-18	Ⅱ	A	HMP	両面	珪質頁岩	30.6	11.6	7.4	1.2	注記　Cステ
104	5	石鏃	BH-22	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	34.5	13	6.3	1.9	注記　Cステ。
69	6	石鏃	BD-19	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	38.8	14.4	7.7	2.8	右側辺が不整形。
83	7	石鏃	BE-19	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	35.2	15.5	4.9	1.7	基部欠損。
115	8	石鏃	BE-20	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	28.9	16.5	5.9	2.3	注記　Cステ
124b	9	石鏃	BA-22	Ⅳ	A	HMP	両面	珪質頁岩	43.7	16.2	10.2	4.7	先端、有茎部欠損。
101	10	石鏃	BD-20	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	42.3	18.6	6.7	3.8	有茎部欠損。
75	11	石鏃	BE-18	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	42.6	21.1	7.7	5.3	裏面に主要剥離面を多く残す。未成品？
116	12	石鏃	BF-20	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	37.3	15.5	6.7	2.4	
1201	13	石鏃	BA-18	Ⅴ	A	HMP	両面	珪質頁岩	36	16	3	2.2	
86	14	石鏃	BD-18	Ⅱ	A	HMP	両面	珪質頁岩	29.2	14.1	4.5	1.1	裏面に主要剥離面を多く残す。
21	15	石鏃	BE-18	Ⅲ	A	HMP	両面	頁岩	28.9	14.4	7	1.9	
17a	16	石鏃	BI-21	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	30.3	15.1	6.3	2.0	
113	17	石鏃	BE-20	Ⅰ	A	HMP	両面	珪質頁岩	27.1	17.2	7	2.4	加工は、縁辺部に限られ、素材面が多く残る。
96	18	石鏃	BD-19	Ⅲ	A	HMP	両面	玉髄	31.7	16.2	5.9	1.8	裏面に主要剥離面を多く残す。
126	19	石鏃	BE-18	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	33.5	14.8	5.2	1.1	先端部わずかに欠損。表裏に素材面を多く残す。
376	20	石鏃	BE-20	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	36	16	6	2.5	
1232	21	石鏃	BD-17	Ⅴ	A	HMP	両面	珪質頁岩	38	15	4	2.7	基部にアスファルト付着
362	22	石鏃	BI-22	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	49	18.5	5	2.5	基部欠損
26	23	石鏃	BH-22	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	31	13.7	4.9	1.5	有茎部の加工が完全ではない。
94	24	石鏃	BD-19	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	26.4	14.8	5.2	1.5	先端部、有茎部欠損
1237	25	石鏃	BC-19	Ⅴ	A	HMP	両面	珪質頁岩	30	10	4	1	先端欠損
1210	26	石鏃	BB-18	Ⅴ	A	HMP	両面	珪質頁岩	40	14	2	2	
1226	27	石鏃	AZ-17	Ⅴ	A	HMP	両面	珪質頁岩	35	13	4	2.8	
1239	28	石鏃	BC-19	Ⅴ	A	HMP	両面	玉珪	22	11	2	0.6	基部欠損
54	29	石鏃	BE-20	Ⅲ	A	SMP	両面	珪質頁岩	31.7	17.9	5.9	1.1	正三角形に近い形態で、有茎部が長い。
1222	30	石鏃	BC-17	Ⅴ	A	SMP？	両面	玉珪	36	14	3	1.6	
363	31	石鏃	BF-19	Ⅰ	A	SMP	両面	珪質頁岩	31	16	4.5	2.1	先端部欠損
368	32	石鏃	BU-21		A	SMP	両面	珪質頁岩	34.5	14	4.5	1.2	
64	33	石鏃	BI-22	Ⅲ	A	SMP	両面	珪質頁岩	28.2	12.7	5.6	1.7	先端、基部欠損。
369	34	石鏃	CD-16		A	SMP	両面	珪質頁岩	28.5	12.5	4	1.8	
57	35	石鏃	BH-21	Ⅲ	A	HMP	両面	珪質頁岩	30.6	14.4	4.2	1.4	
98	36	石鏃	BG-21	Ⅲ	A	SMP	両面	珪質頁岩	31.3	15.1	5.6	1.8	
20	37	石鏃	BD-19	Ⅲ	AB	HMP	両面	珪質頁岩	26.4	15.1	4.9	1.5	
25	38	石鏃	BD-19	Ⅲ	AB	HMP	両面	ﾁｬｰﾄ？	31.3	16.2	5.2	1.9	表裏に素材面を多く残す。
61	39	石鏃	BH-22	Ⅲ	AB	HMP	両面	頁岩	31.7	15.1	5.2	1.8	表裏に素材面を多く残す。
46	40	石鏃	BH-21	Ⅲ	AB	HMP	両面	ﾁｬｰﾄ？	31.7	17.9	7	3.5	先端部わずかに欠損。粗い石材を用いる。
380	41	石鏃	BF-19	Ⅰ	AB	HMP	両面	珪質頁岩	34	15	5	2.5	
1236	42	石鏃	BC-17	Ⅴ	AB	HMP	周縁	珪質頁岩	32	12	3	1.9	
112	43	石鏃	BI-22	Ⅲ	AB	HMP	両面	珪質頁岩	34.9	13.7	7.7	3.1	
118	44	石鏃	BF-20	Ⅰ	B2a	SMP	両面	珪質頁岩	32.1	13.7	4.2	1.0	表裏に素材面を多く残す。
19	45	石鏃	BI-25	Ⅲ	B2a	SMP	両面	珪質頁岩	27.8	14.4	4.5	1.1	裏面に主要剥離面を多く残す。基部を逆三角形に作出。
1207	46	石鏃	BC-18	Ⅴ	B2a	SMP	両面	珪質頁岩	39	29	4	3	
1203	47	石鏃	BD-18	Ⅴ	B2a	SMP	両面	玉髄	48	14	3	2.8	
114	48	石鏃	BH-21	Ⅰ	B2a	SMP	両面	珪質頁岩	35.6	12.3	3.8	1.5	
1235	49	石鏃	BC-19	Ⅴ	B2a	HMP	両面	珪質頁岩	28	15	3	1.6	
27	50	石鏃	BI-22	Ⅲ	B2a	SMP	両面	珪質頁岩	21.8	12.3	3.8	0.7	先端部欠損。
382	51	石鏃	BG-23	Ⅰ・Ⅱ	B2a	SHP	両面	珪質頁岩	29	11.5	3.5	1.1	
370	52	石鏃	BG-23	Ⅲ	B2a	HMP	両面	珪質頁岩	30.5	12	4	1.7	先端欠損
12	53	石鏃	BC-20	Ⅱ	B2b	SMP	両面	珪質頁岩	23.9	9.8	2.8	0.5	
97	54	石鏃	BH-22	Ⅲ	B2b	SMP	両面	ﾁｬｰﾄ？	21.5	14.1	3.8	0.8	
123	55	石鏃	BI-22	Ⅲ	B2b	SMP	両面	珪質頁岩	31.3	16.2	6.3	2.3	基部欠損。裏面に主要剥離面を多く残す。
381	56	石鏃	BC-22	Ⅲ	B2b	SHP	両面	珪質頁岩	21.5	11.5	3.5	0.8	
367	57	石鏃？	BG-23	Ⅰ・Ⅱ	B2b	HHP	両面	玉珪	24	14.5	6.5	2.1	先端やや丸い
5	58	石鏃	BF-21	Ⅱ	B2b	HHP？	両面	珪質頁岩	25.7	15.1	3.8	1.2	表裏に素材面を多く残す。
40	59	石鏃	BI-21	Ⅲ	B2b	SHP？	両面	珪質頁岩	23.6	13.4	2.4	0.6	
1230	60	石鏃	AZ-16	Ⅴ	B2b	HMP	両面	珪質頁岩	27	15	4	2.6	基部欠損、ゴロッとしている
108	61	石鏃	BG-24	Ⅲ	B2c	HMP	両面	チャート	31.7	9.8	4.9	1.3	先端部欠損
120	62	石鏃	BG-19	Ⅲ	B2c	HMP	両面	珪質頁岩	39.5	14.4	5.6	2.5	未成品？
37	63	石鏃	BF-21	Ⅱ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	41.6	11.6	4.5	1.4	
62	64	石鏃	BI-25	Ⅱ	B2c	SMP	両面	頁岩	36.3	12.3	5.9	2.1	
360	65	石鏃	BJ-22	Ⅲ	B2c	SMPE	両面	珪質頁岩	44.5	12	4	2.1	基部欠損
1218	66	石鏃	BB-17	Ⅴ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	41	12	3	1.6	
9	67	石鏃	BD-21	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	28.5	13.4	4.5	1.5	先端部欠損。表裏に素材面を残す。
67	68	石鏃	BG-20	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	35.6	11.9	3.5	1.2	先端、基部わずかに欠損。
71	69	石鏃	BE-20	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	30.6	15.1	5.9	2.3	
79	70	石鏃	BH-23	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	40.9	14.1	4.2	1.7	基部欠損。
76	71	石鏃	BF-21	Ⅱ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	42.6	13.7	5.2	2.4	
13	72	石鏃	BI-25	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	38.4	14.8	4.9	1.8	
107	73	石鏃	BG-20	Ⅰ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	40.2	13.7	4.5	1.9	基部欠損。
41	74	石鏃	BH-21	Ⅰ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	43.7	17.6	5.2	3.0	
10	75	石鏃	BE-20	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	40.2	17.6	4.9	3.0	注記　Cステ
49	76	石鏃	BH-23	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	45.1	13.4	3.5	1.5	先端部わずかに欠損。
70	77	石鏃	BC-20	Ⅱ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	41.2	10.9	3.8	1.3	
8	78	石鏃	BJ-22	Ⅳ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	43	14.4	5.6	2.7	先端部欠損。
58	79	石鏃	BD-21	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	49	14.4	4.9	2.6	
44	80	石鏃	BF-20	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	56.7	14.1	4.9	2.6	
55	81	石鏃	BI-22	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	56.4	15.1	4.9	2.6	
132	82	石鏃	BH-16		B2c	SMP	両面	珪質頁岩	50	12.3	4.2	2.0	注記　S-23
65	83	石鏃	BH-20	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	55.7	11.2	5.2	2.5	棒状。
131	84	石鏃	BI-22	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	55	9.2	4.1	1.5	棒状。先端部に使用痕光沢。
35	85	石鏃	BI-23	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	46.2	9.5	3.5	1.3	

遺物NO.	図番号	器種	出土位置	層位	分類	二次加工	剥離方向	石材	長さ	幅	厚さ	重	備考
59	86	石鏃	BD-19	Ⅲ	B2c	SMP	両面	珪質頁岩	39.1	9.1	3.5	1.1	棒状。先端部わずかに欠損。
386	87	石鏃	BF-19		B2c	SMP	両面	珪質頁岩	47.5	11	3.5	2.3	
33	88	石鏃	BE-18	Ⅲ	B2c	SMP	両面	頁岩	28.2	18.6	6.3	1.6	先端部欠損。被熱。裏面に主要剥離多く残す。
358	89	石鏃	BG-17		B2c	HHP	両面	珪質頁岩	29.5	17.5	4	2.1	先端部欠損
1204	90	石鏃	BC-18	V	C	SMP？	両面	黒曜石	16	17	2	0.8	先端両側に小さな抉りあり、他機種に転用か
1208	91	石鏃	BB-18	V	C	SMP	両面	珪質頁岩	18	11	3	0.8	
93	92	石鏃	BF-19	Ⅲ	C	SMP	両面	ﾁｬｰﾄ？	19	11.2	3.1	0.2	
90	93	石鏃	BD-19	Ⅲ	C	SMP	両面	ﾁｬｰﾄ？	22.5	11.2	3.5	0.3	
129	94	石鏃	BI-22	Ⅲ	C	SMP	両面	珪質頁岩	16.5	13	2.8	0.2	小形。ｶｴｼ部をわずかに作出。
130	95	石鏃	BG-22	Ⅲ	C	SMP	両面	珪質頁岩	20.8	16.9	4.2	0.8	小形。ｶｴｼ部をわずかに作出。
48	96	石鏃	BG-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	24.3	17.6	4.2	1.3	
111	97	石鏃	BG-21	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	25.7	18.6	5.2	1.5	先端部わずかに欠損。
52	98	石鏃	BI-17		BC	SMP	両面	珪質頁岩	25.4	16.2	3.8	0.9	注記　S-11。ｶｴｼ部をわずかに作出。
387	99	石鏃	BE-22	Ⅱ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	30	19	4	1.9	
18	100	石鏃	BI-22	Ⅲ	BC	SHP	両面	珪質頁岩	27.5	15.8	3.8	1.0	表裏に素材面を多く残す。ｶｴｼ部をわずかに作出。
364	101	石鏃	BH-21	Ⅲ	C	HHP	両面	頁岩	27	19	4.5	2.3	
1224	102	石鏃	BC-18	V	BC	SMP	両面	珪質頁岩	34	15	5	1.8	
1217	103	石鏃	AZ-18	V	BC	SMP	両面	珪質頁岩	28	15	2	1.2	
89	104	石鏃	BI-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	頁岩	37	14.4	3.8	1.3	
103	105	石鏃	BH-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	34.2	15.1	4.9	1.3	裏面側に主要剥離面を多く残す。ｶｴｼ部をわずかに欠損。
23	106	石鏃	BH-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	32.4	16.9	5.2	2.1	
1220	107	石鏃	BB-18	V	BC	SMP	両面	珪質頁岩	33	15	3	2.1	
84	108	石鏃	BD-19	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	29.2	20.1	5.2	2.3	先端に被ハネ？
87	109	石鏃	BI-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	ﾁｬｰﾄ？	34.9	16.2	4.2	1.8	
1225	110	石鏃	BA-17	V	BC	SMP	両面	珪質頁岩	25	18	3	1.3	
17b	111	石鏃	BE-21	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	28.5	16.5	4.9	1.4	先端部わずかに欠損。
68	112	石鏃	BI-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	29.9	15.8	4.9	1.7	
127	113	石鏃	BH-23	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	26.4	15.1	3.5	1.1	
34	114	石鏃	BI-21	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	31	15.1	4.5	1.7	ｶｴｼ部をわずかに作出。
2	115	石鏃	BH-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	40.2	15.1	3.5	1.7	
16	116	石鏃	BI-24	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	43.3	15.5	5.6	2.8	
85	117	石鏃	BH-16		BC	SMP	両面	珪質頁岩	41.9	19	4.2	2.5	注記　S-33。ｶｴｼ部をわずかに作出。
24	118	石鏃	BI-22	Ⅲ-Ⅳ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	37.3	15.5	4.9	2.3	
128	119	石鏃	BH-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	33.5	15.5	4.5	1.6	注記　Cステ
102	120	石鏃	BE-20	Ⅱ	BC	SMP	両面	ﾁｬｰﾄ？	30.6	15.8	4.9	1.7	
66	121	石鏃	BH-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	34.2	16.5	4.5	1.8	注記　Cステ
1205	122	石鏃	AX-20	V	BC	SMP	両面	珪質頁岩	39	17	3	2.7	
95	123	石鏃	BH-22	Ⅲ	BC	HMP	両面	頁岩	36.6	17.9	6.7	2.8	注記　Cステ。先端部わずかに欠損。
119	124	石鏃	BI-22	Ⅲ	BC	HMP？	両面	珪質頁岩	44.4	19.4	7.4	4.2	表裏に素材面を残す。
91	125	石鏃	BI-22	Ⅲ	BC	SMP	両面	珪質頁岩	28.9	12.3	4.5	1.2	注記　Cステ
4	126	石鏃	BI-22	Ⅲ-Ⅳ	B1b	HMPE	両面	頁岩	32.1	19.4	5.6	2.9	表裏に素材面をわずかに残す。ｶｴｼ部をわずかに作出。
1214	127	石鏃	AZ-16	V	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	39	15	3	3.3	
1227	128	石鏃	BB-17	V	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	33	14	2	1.6	
1221	129	石鏃	BB-17	V	B1a	SMPE	両面	珪質頁岩	44	14	2	2.1	
1215	130	石鏃	BB-17	V	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	45	17	3	3.4	
1	131	石鏃	BH-22	Ⅲ	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	36.3	12.3	4.2	1.4	
82	132	石鏃	BI-22	Ⅲ	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	41.2	17.2	5.6	2.1	基部欠損。
1209	133	石鏃	AZ-18	V	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	34	15	3	2.4	
50	134	石鏃	BE-19	Ⅲ	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	49	15.1	4.9	2.6	
125	135	石鏃	BE-19	Ⅲ	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	33.1	17.9	5.6	2.9	
77	136	石鏃	BE-18	Ⅲ	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	37.7	15.8	5.2	2.5	
31	137	石鏃	BI-22	Ⅲ-Ⅳ	B1a	SMP	両面	頁岩	34.9	22.2	5.6	4.0	大形品。
32	138	石鏃	BE-18	Ⅲ	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	32.1	22.5	4.9	2.3	
45	139	石鏃	BE-19	Ⅲ	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	32.4	17.6	4.9	2.8	先端部欠損。裏面に主要剥離面を多く残す。
1206	140	石鏃	BA-18	V	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	47	23	3	4.4	
1229	141	石鏃	AZ-18	V	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	27	17	3	1.6	
1211	142	石鏃	AZ-17	V	B1a	SMP	両面	珪質頁岩	29	12	2	1	
39	143	石鏃	BI-22	Ⅲ	B1b	HMP	両面	珪質頁岩	28.2	14.1	4.2	1.1	先端部をやや急角度の剥離で整形し、厚みがある。
42	144	石鏃	BG-22	Ⅲ	B1b	HMP？	両面	珪質頁岩	29.9	16.5	5.9	2.3	先端部をやや急角度の剥離で整形し、厚みがある。
60	145	石鏃	BC-20	Ⅱ-Ⅲ	B1b	HHP,HMP	両面	珪質頁岩	32.1	17.9	7	3.3	注記　２０ライントレンチ。先端部を急角度剥離で整形し、厚みがある。
63	146	石鏃	BE-18	Ⅲ	B1a	SMP	両面	頁岩	28.2	17.9	5.2	1.9	裏面に主要剥離面を多く残す。
1213	147	石鏃	BA-17	V	B1b	HMP	両面	珪質頁岩	34	26	5	6	少し大型
30	148	石鏃	BE-18	Ⅲ	B1b	HMP	両面	珪質頁岩	51.8	27.8	9.1	10.1	大形品。
100	149	石鏃	BF-21	Ⅰ	B1b	HMP	両面	珪質頁岩	40.5	19	8.4	4.5	
56	150	石鏃	BI-22	Ⅲ	B1c	SMP	両面	珪質頁岩	41.6	23.2	5.6	5.1	
1202	151	石鏃	BA-18	V	B1c	SMP	両面	珪質頁岩	33	15	2	1.6	
1228	152	石鏃	BA-17	V	B1c	SMP	両面	珪質頁岩	34	15	3	2.1	先端摩滅（石錐に転用）
78	153	石鏃	BF-21	Ⅰ	B1c	SMP	両面	珪質頁岩	33.1	12.7	5.6	1.4	
22	154	石鏃	BH-20	Ⅲ	B1c	SMP	両面	頁岩	36.3	14.8	5.6	2.3	基部欠損。
15	155	石鏃	AK-27	Ⅱ	B1c	SMP	両面	珪質頁岩	25.4	17.2	4.9	1.5	注記　S-X。裏面に主要剥離面を多く残す。
365	156	石鏃	BG-23	Ⅰ・Ⅱ	B1c	SMP	両面	珪質頁岩	27.5	19	0.45		
3	157	石鏃	BE-18	Ⅲ	B1d	HMPE	両面	珪質頁岩	36.3	15.1	8.1	3.1	未成品？
133	158	石鏃	BE-18	Ⅲ	B1d	HMP？	両面	珪質頁岩	46	15.5	6.5	4.3	
1233	159	石鏃	BB-16	V	B1d	HMP	正＋反	珪質頁岩	23	16	2	1	裏面は剥離が浅い
359	160	石鏃	BH-23	Ⅲ	B1d	HMP	両面	珪質頁岩	22	12.5	2.5	0.6	基部欠損
6	161	石鏃	BI-22	Ⅲ	B1d	HHP？	両面	珪質頁岩	26.1	17.6	4.9	1.9	基部はSMPで加工されているが、先端部はHHPで加工。再加工の可能性あり。

遺物NO.	図番号	器種	出土位置	層位	分類	二次加工	剥離方向	石材	長さ	幅	厚さ	重	備考
361	162	石鏃	BH-22	Ⅲ	B1d	SHP	両面	珪質頁岩	20	14.5	4	0.8	
106	163	石鏃	BE-20	Ⅱ	D	SMP	両面	珪質頁岩	22.2	12.3	3.5	0.9	右側辺破損。
105	164	石鏃	BE-19	Ⅲ	D	SHP	両面	珪質頁岩	23.6	15.5	3.8	1.1	未成品。基部は、未加工。
47	165	石鏃	BE-19	Ⅲ	D	SHP	両面	珪質頁岩	25	16.5	3.5	1.2	基部欠損。表裏に素材面を多く残す。
88	166	石鏃	BD-19	Ⅲ	D	SMP	両面	玉髄	26.8	16.9	5.2	1.5	先端部欠損。
29	167	石鏃	BE-18	Ⅲ	D	HHP,HMP	両面	赤ﾁｬｰﾄ？	32.1	19	8.1	4.3	未成品？
110	168	石鏃	BD-19	Ⅲ	D	HMP	両面	珪質頁岩	36.6	18.3	8.1	4.6	未成品。
53	169	石鏃	BH-22	Ⅲ	D	HMP	両面	頁岩	45.8	22.9	10.2	7.2	未成品。
38	170	石鏃	AQ-12	Ⅲ	D	HMP	両面	珪質頁岩	43.7	25	11.2	6.9	注記　S-X。基部加工が完全でなく未成品。
226	171	石鏃	BG-20	Ⅲ	D	HMP	正+反	頁岩	45.1	21.5	8.1	6.5	未成品？
224	172	石鏃	BD-18	Ⅲ	D	HMP	両面	頁岩	35.6	25	11.6	6.9	未成品と考えられる。
51	173	石鏃	BI-22	Ⅲ	D	HMP	両面	珪質頁岩	37.7	22.2	5.9	3.3	未成品？先端部のみ加工。
366	174	石鏃	BH-22	Ⅲ	D	HMPE	両面	珪質頁岩	40.5	18	4	2.5	先端部欠損
1223	175	石鏃	BB-16	Ⅴ	D	SMP	両面	珪質頁岩	25	16	2	1.3	欠損（石鏃未製品か）
1234	176	石鏃？	BA-17	Ⅴ	D	HI	正	珪質頁岩	45	16	5	4.6	石鏃未製品？
1212	177	石鏃	AZ-17	Ⅴ	D	HMP	両面	珪質頁岩	28	12	2	1	先端欠損
1219	178	石錐？	BC-18	Ⅴ	D	HHP？	正＋反	珪質頁岩	28	14	3	1.4	
1238	179	石鏃	BC-17	Ⅴ	D	HHP？	両面	珪質頁岩	30	11	5	1.6	
122	180	石錐？	BH-21	Ⅲ	A	HMP+HI	両面	珪質頁岩	57.1	15.1	9.8	6.1	基部右側をHIで整形し、他はHMPで整形。
74	181	石錐？	BE-19	Ⅲ	A	SP	両面	珪質頁岩	39.5	11.6	7.7	2.4	
399	182	石錐？	BH-21	Ⅲ	A	SP	両面	珪質頁岩	43.3	13.4	8.1	3.5	棒状で片面から急角度の剥離を施す。
80	183	石錐？	BG-20	Ⅲ	A	SI	両面	珪質頁岩	51.8	10.9	7	3.0	先端部磨耗。石錐として使用か？
72	184	石錐	BH-21	Ⅲ	B	HMP	両面	珪質頁岩	42.3	12.3	7	2.5	刃部にMFあり。
124a	185	石錐	BI-22	?	B	HMP	両面	珪質頁岩	41.6	17.6	9.5	5.2	
73	186	石鏃	BE-18	Ⅲ	B	SMP	両面	珪質頁岩	32.1	15.1	7	2.2	基部は石材の夾雑物で荒れている。
1216	187	石錐	AZ-16	Ⅴ	B	HMP	正＋反	珪質頁岩	50	14	4	3.7	
395	188	石錐	BH-21	Ⅲ	C	HP	正+反	珪質頁岩	29.9	16.5	5.9	1.3	刃部に加工。先端部MFあり。
398	189	石錐	BI-21	Ⅲ	C	SI	正+反	珪質頁岩	43.7	12.3	8.8	1.6	刃部のみ加工。先端部MFあり。
280	190	石錐	BF-21	Ⅲ	C	SP	正	珪質頁岩	51.8	43.7	11.6	12.4	先端部MFあり。
325	191	石錐	BE-20	Ⅲ	C	HMP？	両面	珪質頁岩	53.9	14.4	10.2	4.5	刃部のみ加工。先端部若干磨耗あり。
269	192	石錐	BI-22	Ⅲ	C	HP	正+反	珪質頁岩	46.9	14.4	8.1	3.7	刃部のみ加工。先端部MFあり。
7	193	石錐？	AL-29	Ⅲ	C	HMP	正+反	珪質頁岩	34.9	15.5	5.9	2.5	石錐未成品？
397	194	石錐	BE-19	Ⅲ	C	SI	正+反	珪質頁岩	38.4	23.6	7.7	5.1	先端部破損。
260	195	石錐	BE-21	Ⅰ	C	HP	正+反	珪質頁岩	63.5	29.2	7.4	7.9	未成品？
389	196	石錐	BH-22	Ⅲ	D	HP	正+反	珪質頁岩	43.3	17.6	8.4	4.5	端部破損。石錐未成品あるいは掻器か？
36	197	石錐	BD-18	Ⅲ	D	HMP？	正+反	珪質頁岩	31	14.1	7	2.2	刃部を正方向の急角度剥離で整形し、基部を正+反方向の平坦剥離で整形。NO.389と同じ石器。
234	198	石槍	BH-16			SI-SP	両面	珪質頁岩	80.4	41.6	15.8	58.3	両端部破損。SIで成形されてSPで整形される。
467	199	石槍	BD-19	Ⅲ		SMPE	両面	頁岩	77.5	25	10	17.7	欠損
384	200	石槍	BH-17	Ⅰ		HMP	両面	珪質頁岩	44	24	11	10.9	
220	203	石槍	BI-18	Ⅰ(カクラ	木葉	SI	両面	珪質頁岩	204.9	50	14.1	112.7	基部は、黒く変色しており着柄の痕跡と思われる。基部と刃部では、明瞭に剥離面がちがい、刃部は平坦剥離で基部はやや急角度の剥離で加工される。
28	284	石匙	BD-18	Ⅲ		SMP	正+反	珪質頁岩	28.9	17.2	7	2.3	摘み部はSIで整形し、主要剥離面側に平坦剥離をほどこし、その面から背面側にやや急角度な剥離を施す。
187	285	石匙	BG-19	Ⅲ		HD＋SD	正	黒曜石	38.8	25	13.7	8.4	未成品で、摘み部をHDで成形したのみ。
227	286	石箆	BF-22	Ⅲ	1	HMP	両面	珪質頁岩	31.7	23.2	14.1	10.1	一部破損。
236	287	石箆	BD-18	Ⅲ	1	HMP	両面	珪質頁岩	35.6	24.6	31.3	12.7	未成品？一部破損。HDで成形し、HMPで整形を施す。
232	288	石箆	BD-18	Ⅲ	1	HD	両面	珪質頁岩	70.5	26.8	18.6	32.8	未成品。一部破損。HDで成形を施す。
237	289	石箆	BE-18	Ⅲ	1	HP	両面	珪質頁岩	60.6	33.5	15.8	30.1	HIで成形したあと、HPで整形を施す。
205	290	石箆	BD-19	Ⅲ	2	SP	正	珪質頁岩	43.3	28.2	9.1	10.5	刃部のみ加工。先端部MFあり。
215	291	石箆	BH-25	Ⅱ	2	HMP	正	珪質頁岩	46.2	29.6	11.2	12.9	刃部に急角度剥離を施す。刃部にMFあり。
207	292	石箆	BH-22	Ⅲ	2	SMP	正	珪質頁岩	51.8	27.8	12.3	18.6	刃部は急角度剥離。刃部にMFあり。
204	293	石箆	BJ-22	Ⅲ	2	SMP	正	珪質頁岩	40.5	24.3	13	6.5	刃部のみ加工。先端部MFあり。
211	294	石箆	BF-20	Ⅲ	2	HMP	反	頁岩	51.1	28.9	14.4	18.2	刃部は、HMPで整形されているが、基部はHIで整形されている。
208	295	石箆	BH-21	Ⅲ	2	SMP	正	珪質頁岩	67.7	29.2	16.5	18.7	刃部右側破損。基部は、なかご状に成形され、刃部はHMPで急角度剥離を施す。
284	296	石箆	BH-16		2	HMP？	正	珪質頁岩	56.7	41.6	16.2	23.8	刃部にMFが激しく、刃部加工が不明瞭。
217	297	二次加工剥片	BE-21	Ⅱ		HI	正+反	珪質頁岩	44.4	22.2	11.2	10.4	未成品。一部破損。HIで整形をほどこす。
239	298	二次加工剥片	BE-19	Ⅲ		HD	両面	珪質頁岩	48.6	29.9	17.9	21.1	未成品。一部破損。HDで成形を施す。
231	299	二次加工剥片	BE-19	Ⅲ		HD	正	珪質頁岩	52.9	31.3	21.1	28.4	未成品。HDで成形を施す。
238	300	二次加工剥片	BD-18	Ⅱ		HD	両面	珪質頁岩	44	29.2	16.2	18.4	石箆の未成品？一部破損。HDで成形を施す。
229	301	二次加工剥片	BE-19	Ⅲ		HI+HMP	正+反	珪質頁岩	55	29.6	11.9	17.5	未成品？
210	302	二次加工剥片	BE-18	Ⅲ		HD+HI	正	頁岩	57.5	25.4	13	13.7	刃部にMFあり。
214	303	二次加工剥片	BN-23	Ⅲ		HHP	正+反	珪質頁岩	49.7	26.1	12.3	12.3	未成品と考えられる。
307	304	二次加工剥片	BI-23	Ⅲ		HI	稜上正	珪質頁岩	50.4	15.5	11.9	6.2	石錐の未成品？
219	305	二次加工剥片	BF-18	・	横	HMP	正+反	珪質頁岩	43.3	23.2	7.4	5.9	摘み部が欠損しているが石匙の破損と考えてられる。
216	306	二次加工剥片	BE-18	Ⅲ		HMP	正	珪質頁岩	59.6	35.6	14.1	22.2	整形には、HIとHPで加工されている
235	307	二次加工剥片	BF-19	Ⅲ		HMP	両面	珪質頁岩	63.1	35.9	14.1	32.7	石匙の破損品？

遺物NO.	図番号	器種	出土位置	層位	分類	二次加工	剥離方向	石材	長さ	幅	厚さ	重	備考
396	308	二次加工剥片	BG-21	Ⅲ		ＨＰ	正+反	珪質頁岩	30.6	17.9	6.3	1.8	未成品？
335	309	二次加工剥片	BE-19	Ⅲ		ＨＰ	正+反	珪質頁岩	41.6	17.9	9.5	4.5	未成品？
315	310	二次加工剥片	BI-25	Ⅲ		ＨＰ	正+反	珪質頁岩	39.8	29.6	8.1	7.2	未成品？
392	311	二次加工剥片	BE-19	Ⅰ		ＨＭＰ	正＋反	珪質頁岩	38.5	23	5.5	5	石鏃未製品？
461	312	二次加工剥片	BF-18	Ⅰ		ＨＤ		珪質頁岩	38	26.5	6.5	7	
218	313	二次加工剥片	BF-22	Ⅱ		ＳＭＰ	正+反	珪質頁岩	42.6	24.6	10.2	7.4	未成品と思われる。
320	314	二次加工剥片	BC-18	Ⅴ		ＨＤ	正	珪質頁岩	36.6	23.6	11.6	7.6	未成品。
225	315	二次加工剥片	BE-20	Ⅲ		ＨＭＰ	両面	珪質頁岩	43	33.5	10.5	12.5	未成品と考えられる。
292	316	二次加工剥片	BE-19	Ⅲ		ＨＨＰ	正	珪質頁岩	38.8	16.9	6.3	3.0	右側辺にノッチ状の抉りをもつ。
390	317	二次加工剥片	BD-22	Ⅱ		ＨＭＰ	正	珪質頁岩	20	28	9	4.8	
330	318	二次加工剥片	BG-20	Ⅲ		HD+HP	正+反	珪質頁岩	42.6	23.6	7.4	7.0	未成品。主要剥離面側をHDで成形。
395	319	二次加工剥片	BH-22	Ⅲ下		ＨＩ＋ＨＭＰ	正	珪質頁岩	43.5	28	7	10.3	
198	320	二次加工剥片	BF-18	・	縦	ＨＭＰ	正	珪質頁岩	59.9	27.5	12.7	18.3	未成品。摘み部破損、先端部未加工。
302	321	二次加工剥片	BF-18	Ⅱ	棒状	ＨＰ	正	珪質頁岩	84.3	37.3	17.6	44.5	左側辺をHDで加工し、右側辺は、HPで加工を施す。
394	322	二次加工剥片	BG-19	Ⅲ		ＳＩ＋ＳＤ	正	珪質頁岩	80	32	13		
340	323	二次加工剥片	BH-22	Ⅱ		―	―	ﾁｬｰﾄ	44	35.9	15.5	23.0	ﾋﾞｴｽ？
241	324	二次加工剥片	BF-19	Ⅲ		HD+HP	正+反	珪質頁岩	46.9	38.1	16.5	29.0	未成品？主要剥離面側からHPで加工を施し、背面側からHDで加工を施す。
261	325	二次加工剥片	BI-19	Ⅰ		ＨＤ	両面	珪質頁岩	54.3	45.1	44.4	44.7	
316	326	二次加工剥片	BI-22	Ⅲ		ＨＭＰ	正	頁岩	51.5	23.6	16.2	12.1	未成品？先端部破損。
397	327	二次加工剥片	BG-20	Ⅰ		ＨＭＰ	正	珪質頁岩	38	35.5	6	7.8	
228	328	二次加工剥片	BI-22	Ⅲ			正	珪質頁岩	35.2	37.3	42.3	8.2	石匙のつまみ部欠損品
317	329	二次加工剥片	BG-20	Ⅱ		ＨＰ	正	頁岩	41.2	31	9.5	6.5	未成品？
290	340	二次加工剥片	BH-22	Ⅲ		ＨＨＰ	正+反	珪質頁岩	59.6	38.8	6.3	8.1	石匙の未成品か？摘み部の抉りが作出途中である。
245	341	二次加工剥片	BN-24	Ⅲ		ＨＰ	反	珪質頁岩	43	45.5	11.6	12.5	未成品。右側辺をHPで加工を施すのみ。
209	342	二次加工剥片	AT-26	Ⅱ		HD+SMP	正	珪質頁岩	52.2	44.4	15.1	27.3	未成品と考えられ、一部側辺にSMPの加工を施す。
337	343	二次加工剥片	BE-18	Ⅲ		―	―	珪質頁岩	54.6	39.8	9.5	11.4	左側辺にＭＦあり。
301	344	二次加工剥片	BD-17	Ⅴ		ＨＰ	両面	頁岩	113.9	45.5	15.1	53.9	未成品。
257	345	二次加工剥片	BG-21	Ⅱ		ＨＰ	正	珪質頁岩	41.2	25.7	7	3.4	未成品？
270	346	二次加工剥片	BD-20	Ⅰ-Ⅱ		―	―	珪質頁岩	53.6	33.5	12.3	9.4	左側辺中央部に背面側にむけてMFがある。
2218	347	二次加工剥片	BB-17	Ⅴ		ＳＨＰ	正	珪質頁岩	70	37	12	16	素材ＳＩ
2215	348	二次加工剥片	BC-17	Ⅴ		ＨＭＰ	正	珪質頁岩	52	38	6	14.6	
309	349	二次加工剥片	BF-18	Ⅰ		―	―	珪質頁岩	45.6	36	14	5.7	下辺にMFあり。
310	350	二次加工剥片	BD-20	Ⅱ		ＨＰ	反	珪質頁岩	34.2	53.6	11.6	10.2	石匙の未成品か？剥片末端のヒンジになった部分に急角度剥離を途中まで施す。
206	351	二次加工剥片	BG-23	Ⅰ-Ⅱ		ＨＨＰ	正	珪質頁岩	40.2	27.8	7	15.0	刃部は急角度剥離。
249	352	二次加工剥片	BI-22	Ⅳ		HP+HMP	正+反	珪質頁岩	49	26.4	14.1	14.3	未成品？
233	353	二次加工剥片	BD-18	Ⅱ		ＨＤ	反	頁岩	70.5	31.3	11.2	22.2	未成品？
383	354	二次加工剥片	BG-17			ＨＩ＋ＨＤ	正＋反	珪質頁岩	70.5	28.5	11	19.9	表ＨＤ裏ＳＤ
396	355	二次加工剥片	BI-21	Ⅲ		ＨＤ＋ＳＤ	両面	珪質頁岩	58	30	16	25.3	石匙の素材
418	356	二次加工剥片	BE-19	Ⅲ		ＨＩ・ＨＤ	正	珪質頁岩	52	2.7	15.5	20.9	
230	357	二次加工剥片	BE-18	Ⅲ		ＨＤ	正	珪質頁岩	48.3	30.6	12.7	18.8	未成品。
437	358	二次加工剥片	AX-36			ＨＤ	正＋反	珪質頁岩	54.5	40	17	27.8	刃こぼれ
439	359	二次加工剥片	BG-17			不規則		珪質頁岩	48	14	4.5	2.8	剥離は使用痕跡
393	360	二次加工剥片	BF-24			不規則	不規則	珪質頁岩	63	37	7	12.6	
323	361	石核	BD-19	Ⅲ		―	―	珪質頁岩	65.6	44.8	25	58.2	HDで剥片を作出。

石匙観察表

遺物NO.	図番号	器種	出土位置	層位	細分類	２次加工		剥離方向（刃部）	刃部形態	石材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	備考
						つまみ部	刃部周辺								
162	201	石匙	BG-22	5	縦	ＨＩ	SI	両面	急角度	珪質頁岩	82.1	15.1	9.8	9.7	
185	202	石匙	BG-21	5	縦	ＳＰ	SMP	両面	平坦	珪質頁岩	81.8	15.1	3.8	3.5	先端部に使用痕光沢あり。
188	204	石匙	BG-19	5	縦	ＨＩ	HMP	両面	急角度	珪質頁岩	52.2	10.5	7	2.4	棒状で石錐に摘み部がついたもの。
43	205	石匙	BE-18	5	縦	ＳＩ？	SMP	両面	平坦	珪質頁岩	39.1	15.1	6.3	4.3	全体にやや磨耗している。使用痕明瞭、側縁に顕著に見られる。末端欠損。
137	206	石匙	BF-23	5	縦	ＨＩ	HMP	両面	急角度	珪質頁岩	75.8	22.9	10.2	26.2	摘みは石器の長軸・対称軸上に作出。
2216	207	石匙	BC-17	5	縦		ＨＭＰ	正＋反		珪質頁岩	60	22	5	10.9	両面調整に近い
201	208	石匙	BG-20	5	縦	ＨＩ？	HMP?	両面	平坦	黒曜石	42.6	26.8	7.4	5.3	先端部、両側縁に磨耗？が見られる。
156	209	石匙	BH-16	5	縦	ＨＩ	HMP	正	平坦	珪質頁岩	45.8	17.2	8.1	5.3	末端欠損。摘みは石器の長軸・対称軸上に作出。
148	210	石匙	BH-21	5	縦？	ＨＩ	-	―	-	珪質頁岩	34.5	26.4	7	3.1	刃部は欠損。
152	211	石匙	BD-18	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	両面	平坦	頁岩	75.1	23.2	7	12.0	右側縁は両面に加工。左側縁は正方向の片面加工。
2212	212	石匙	BD-16	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正＋反		珪質頁岩	51	22	10	12.7	裏面光沢を切るＳＤ
2204	213	石匙	AQ-13	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正		珪質頁岩	54	21	7	8.5	
145	214	石匙	BH-21	5	縦	ＨＩ	HHP?	正	急角度	珪質頁岩	60.3	32.1	11.6	17.3	摘みは石器の長軸・対称軸上に作出。HDで成形したあとが見られる。
164	215	石匙	BG-20	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	珪質頁岩	59.9	40.2	11.2	20.4	右側縁は急角度、末端辺は平坦。
2203	216	石匙	BD-17	5	縦	ＨＩ	ＳＭＰ	正		珪質頁岩	50	22	4	6	

遺物NO.	図番号	器種	出土位置	層位	細分類	２次加工		剥離方向（刃部）	刃部形態	石材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	備考
						つまみ部	刃部周辺								
178	217	石匙	BD-17	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	69.1	27.1	10.9	12.2	右側縁は急角度、左はＳＭＰ？で平坦。左側辺の刃部がわずかに磨耗。
149	218	石匙	BE-19	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	61.7	23.9	10.9	14.4	右側縁は急角度。正面に火ハネ？摘みは石器の長軸・対称軸上に作出。
160	219	石匙	BH-22	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	37	64.5	7.7	16.9	
157	220	石匙	BI-22	5	縦	ＨＩ？	ＨＨＰ	正+反	平坦	珪質頁岩	51.5	18.6	8.1	4.3	右側縁は反方向、左側縁は正方向に加工。
182	221	石匙	BG-18	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	珪質頁岩	66.6	23.2	9.1	12.1	左側辺刃部には、MFあり。
2217	222	石匙	BB-17	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正＋反		珪質頁岩	69	25	8	13.7	断面対角上に刃部形成
2205	223	石匙	BD-17	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正＋反		珪質頁岩	68	15	7	9.2	裏面剥離は打点作出のため
2208	224	石匙	BC-17	5	縦？	ＨＩ	ＨＭＰ	正		珪質頁岩	55	19	5	6.8	
2206	225	石匙	AT-12	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正		珪質頁岩	67	20	9	14.7	裏面下端右側面とつまみ直下に光沢
179	226	石匙	BG-20	5	縦	ＳＩ	ＳＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	63.8	38.4	8.1	14.1	末端はSIで加工。右側辺にMFが顕著。
151	227	石匙	BI-22	5	横	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	58.9	22.2	7.7	6.3	摘みは石器の長軸・対象軸上に作出。
2211	228	石匙	BB-19	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正		珪質頁岩	60	19	9	9.5	先端尖る
141	229	石匙	BI-23	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	71.9	35.6	14.1	26.3	左側辺刃部には、MFあり。
183	230	石匙	BI-16	5	縦	ＨＩ？	ＳＭＰ	両面	平坦	珪質頁岩	48.3	33.8	7.7	12.0	右側縁の加工は反方向。摘みは、石器の長軸・対象軸上に作出。
197	231	石匙	BF-18	5	縦	ＨＩ	ＳＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	66.3	35.9	12.3	23.8	末端わずかに欠損。
172	232	石匙	BH-24	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正+反	平坦	珪質頁岩	93	45	13.5	40.4	摘み部頂部をHPで加工。
159	233	石匙	BG-19	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	珪質頁岩	71.9	30.3	14.4	25.6	摘み部頂部にHIで加工し、摘みをハート形に整形
212	234	石匙	BH-22	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	珪質頁岩	49	27.1	11.6	10.5	右側辺破損。
174	235	石匙	BH-20	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	51.5	25.7	13	11.2	末端欠損。摘み部の頂部からHIで抉りを施し、摘みをハート形に整形。
440	236	石匙	BG-23	5	縦？	ＨＩ	ＨＭＰ	正		珪質頁岩	51.5	21	5.5		先端右側縁裏に刃こぼれ
196	237	石匙	BF-22	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	頁岩	38.8	58.2	10.9	20.5	
167	238	石匙	BE-18	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	反	平坦	珪質頁岩	26.4	62	9.8	11.1	
142	239	石匙	BG-23	5	縦	ＨＩ	ＨＨＰ	正	急角度	珪質頁岩	43.7	17.6	5.2	4.0	未成品。右側辺破損。刃部は、加工途中。
181	240	石匙	BE-20	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	珪質頁岩	25.4	37.3	9.8	5.2	摘み部頂部にHIで加工。
186	241	石匙	BG-16	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	30.6	50.4	10.5	8.3	
200	242	石匙	BE-20	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	反	平坦	珪質頁岩	35.6	48.3	15.5	9.3	
192	243	石匙	BF-19	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	70	22.5	10	13.1	末端欠損。右側辺のみの加工が主体。未成品？
168	244	石匙	BG-19	5	縦	ＨＩ	-	-	-	珪質頁岩	49.7	22.2	22.2	5.1	未成品、摘み部HIで加工したのみ
173	245	石匙	BG-19	5	縦	ＨＩ	ＨＰ	正	急角度	珪質頁岩	45.5	26	9	9.6	未成品？主要剥離面側にHIの加工があるので未成品か刃部再生の可能性がある。先端部破損。
144	246	石匙	BI-21	5	縦	ＨＩ？	HMP?	正	平坦	珪質頁岩	82.9	36.3	8.4	15.3	右側辺に加工を施す。
193	247	石匙	BF-19	5	縦	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	頁岩	69.4	31	13.4	24.4	左側縁はＨＤで加工。末端辺は、素材の打面が残っており、左側辺が加工途中と見られるため未成品の可能性あり。
177	248	石匙	BI-21	5	縦	ＨＩ	-	-	-	珪質頁岩	65	34	16.5	29.0	未成品。HD成形したあと,摘み部をHIで加工して、HIで整形する。
169	249	石匙	BE-18	5	縦？	ＨＩ	HMP?	正	平坦	頁岩	45.1	45.5	11.6	16.9	未成品。右側辺の加工のみ。素材剥片の末端は、ヒンジ（蝶番剥離）。
195	250	石匙	BG-19	5	縦？	ＨＩ	ＨＩ？	両面	平坦	珪質頁岩	51.1	41.6	11.9	19.3	未成品。HIで成形途中。
184	251	石匙	BI-22	5	横	ＳＰ	ＳＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	34.5	39.8	5.2	4.1	
143	252	石匙	BF-18	5	横	ＨＩ	ＳＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	36.3	43.7	8.4	8.5	
191	253	石匙	BH-22	5	横	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	珪質頁岩	31.3	35.9	10.2	8.9	
163	254	石匙	BG-21	5	横	ＨＩ	ＨＰ	正	急角度	珪質頁岩	31.3	50.4	9.8	8.3	
170	255	石匙	BT-22	5	横	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	珪質頁岩	29.2	52.5	9.5	11.8	
161	256	石匙	BH-16	5	横	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	珪質頁岩	37.3	44.8	9.8	10.0	
136	257	石匙	BI-22	5	横	ＨＩ	HMP?	反	急角度	珪質頁岩	37	56	11.9	16.5	
154	258	石匙	BG-21	5	横	ＨＩ	ＨＭＰ	反	急角度	珪質頁岩	32.1	38.4	8.1	5.7	
158	259	石匙	BH-22	5	横	ＨＩ	ＨＭＰ	正	平坦	頁岩	49	48.6	10.5	13.5	
171	260	石匙	BI-22	5	横	ＨＩ	-	-	-	珪質頁岩	33.5	34.9	7.4	4.2	未成品、摘み部HIで加工したのみ
139	261	石匙	BF-19	5	横	ＨＩ	ＨＭＰ	正	急角度	珪質頁岩	44.4	65.9	14.4	19.6	

遺物NO.	図番号	器種	出土位置	層位	細分類	2次加工		剥離方向（刃部）	刃部形態	石材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	備考
						つまみ部	刃部周辺								
140	262	石匙	BI-22	5	横	HI	HP	正	急角度	珪質頁岩	42	70.5	12	19.8	刃部がHDでこわされている。
474	263	石匙	BH-24	5	横	HI	HMP	正＋反		珪質頁岩	27	47.5	7	9.3	つまみ部再生
2214	264	石匙	BA-17	5	横		HMP	正		珪質頁岩	34	49	4	7.6	裏面摂理
2201	265	石匙	BC-17	5	横	HI	HMP	正		珪質頁岩	35	44	8	11.8	
2209	266	石匙	BC-18	5	横	HI	HHP	正		珪質頁岩	22	35	4	4.7	
438	267	石匙	BH-21	5	横		HMP	正＋反		珪質頁岩	36.5	51	8.5	12.8	裏→表
2202	268	石匙	BB-17	5	横		HMP	正		珪質頁岩	40	50	8	3	素材HD
473	269	石匙	BE-20	5	横	SI	HMP	正		珪質頁岩	33.5	57.5	4.5	8	
441	270	石匙	BE-20	5	横		HMP	正		珪質頁岩	27	57.5	6	8.1	素材HI
472	271	石匙	BJ-23	5	横	HI	SMP	正		珪質頁岩	32	57	10	14	主剥に光沢
155	272	石匙	BI-22	5	横	HI	HMP	正	平坦	珪質頁岩	27.5	39.8	6.7	4.4	
153	273	石匙	BE-19	5	縦	HI	HHP	正	急角度	珪質頁岩	38.1	48.6	7.4	7.7	
150	274	石匙	BE-18	5	横	HI	HMP	正	平坦	珪質頁岩	29.9	53.2	9.5	7.5	
147	275	石匙	BF-18	5	横	HI	HMP	正	平坦	珪質頁岩	31.3	52.5	12.3	13.0	
138	276	石匙	BC-20	5	横	HI	HMP	正	急角度	珪質頁岩	24.6	54.3	8.8	9.7	
146	277	石匙	BF-22	5	横	HI	HMP	正	急角度	珪質頁岩	35.9	56.7	12.7	14.7	
166	278	石匙	BH-16	5	横	HI	HMP	反	平坦	珪質頁岩	35.2	67.3	10.9	20.8	未成品、摘み部と背部はHIで整形し、刃部はHMP
165	279	石匙	BE-19	5	横	HI	HMP	反	急角度	珪質頁岩	36.6	63.1	13.4	25.6	側辺破損。
175	280	石匙	BI-24	5	横	HI	HMP	反	平坦	頁岩	51.5	58.9	11.2	19.3	
2210	281	石匙	AZ-18	5	横	HMP	HHP	正＋反		珪質頁岩	35	29	7	5.7	両端欠損
2207	282	石匙	BB-17	5	横	HI				珪質頁岩	25	21	3	1.5	欠損
2213	283	石匙	BC-19	5	縦？	HHP				珪質頁岩	13	21	3	0.9	

礫石器観察表

図番号	番号	出土位置	層位	器種	細分類	二次加工	使用面	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
362	81	BI－23	Ⅲ	8	1	正＋反		133	62	27	263	千枚岩	磨製石斧の形をした打製石斧
363		BG－21	Ⅲ	8	2b	研磨		150	47	31	392	緑色細粒凝灰岩	擦り切り後研磨調整、刃部に直行する使用痕
364		BH－16		8	2b	研磨		85	39	20	124	緑色細粒凝灰岩	擦り切り後研磨調整、刃部に直行する使用痕
365		BI－24	Ⅲ	8	2b	研磨		52	44	17	71	緑色細粒凝灰岩	擦り切り後研磨調整、刃部に直行する使用痕
366		BG－16		8	2b	研磨		40	45	24	62	緑色細粒凝灰岩	擦り切り後研磨調整、刃部に直行する使用痕
367		BG－20	Ⅲ	8	2b	研磨		112	25	11	48	緑色細粒凝灰岩	直行する使用痕、欠損品が接合
368		BJ－24	Ⅲ	8	2b	研磨		95	49	29	128	頁岩	擦り切り後研磨調整、欠損
369		BC－17	Ⅴ	8	2b	研磨		113	47	33	269	頁岩	擦り切り後研磨調整、先端部に敲打痕
370		BF－31		8	2b	研磨		86	46	36	274	緑色細粒凝灰岩	擦り切り後研磨調整、破断面から剥離が入る。
371		BE－18	Ⅲ	8	2b	研磨		63	46	33	179	頁岩	擦り切り後研磨調整、欠損
372		BH－22	Ⅲ	8	2b	研磨		34	33	11	18	頁岩	擦り切り途中の欠損品か？
373		BF－19	Ⅲ	8	2b	研磨		34	14	10	6	緑色細粒凝灰岩	
374		BI－22	Ⅱ	8	2b	研磨		82	18	15	40	緑色細粒凝灰岩	擦り切り後研磨整形
375		BH－21	Ⅱ	8	2b	研磨		53	34	26	72	緑色細粒凝灰岩	
376		BF－20	Ⅲ	8	2b	研磨		44	17	11	15	緑色細粒凝灰岩	
377		BF－18		8	2a	研磨		115	43	28	222	緑色細粒凝灰岩	敲打成形後研磨
378		BA－18	Ⅴ	8	2a	研磨		69	37	14	57	緑色細粒凝灰岩	剥離成形後研磨、表面に着柄痕と思われる光沢
379		BG－17	Ⅱ	8	2a	研磨		81	44	25	163	頁岩	敲打成形後研磨、破断面からの剥離
380		BB－17	Ⅴ	8	2a？	研磨		115	57	27		輝緑岩	
381		BE－19	Ⅲ	8	2a？	剥離＋研磨		81	54	22	186	緑色細粒凝灰岩	刃部に直行する使用痕
382		BE－26	Ⅲ	8		研磨		54	28	18	30	緑色細粒凝灰岩	刃部に直行する使用痕
383		BF－23	Ⅲ	8		研磨		76	21	8	21	頁岩	
384		BC－23	Ⅲ	8		研磨		55	50	27	80	緑色細粒凝灰岩	斜め方向の線条痕
385		BF－19	Ⅲ	8	2c	一部研磨		88	55	33	249	輝緑岩	器体がやや曲がる
386		BE－18	Ⅲ	8	2a	研磨		55	59	32	146	緑色細粒凝灰岩	刃部に平坦なすり減り
387		BH－16		8	2a？	研磨		51	40	17	58	緑色細粒凝灰岩	くさびとして再利用か？
388		BG－19	Ⅲ	8	2c	研磨		80	12	6	8	頁岩	欠損

図番号	番号	出土位置	層位	器種	細分類	二次加工	使用面	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
389			Ⅱ～Ⅲ	8	2 c	研磨		70	24	10	29	頁岩	欠損
390		BG－20	Ⅲ	8	2 c	研磨		32	40	17	23	緑色細粒凝灰岩	刃部に直行する使用痕、欠損
391		BY－16	Ⅰ	8	2 c	研磨		53	29	30	72	緑色細粒凝灰岩	欠損、刃部に直行する使用痕
392		BI－22	Ⅲ	8	2 a	研磨		92	52	27	145	頁岩	再加工途中品か？
393			Ⅱ	8	2 c	研磨		119	46	38	308	緑色細粒凝灰岩	破断面より剥離が入っている。
394		BG－17	Ⅰ	8	2 a	研磨		85	49	19	142	頁岩	
395		BH－21	Ⅰ	8	2 a	研磨		101	33	21	161	頁岩	
396		BC－20		8	2 a	研磨		46	36	23	47	緑色細粒凝灰岩	欠損
397		BD－18	Ⅲ	8	2 c	研磨		30	36	11	19	頁岩	欠損
398	44		Ⅰ～Ⅱ	9	1	正＋反	1	138	73	22	261	頁岩	
399	37	BD－16	Ⅴ	9	1？	正＋反	1	182	88	23	426	頁岩	表面に敲打痕、刃部内湾
400	56	BE－19	Ⅲ	9	1	正＋反	1	198	81	11	101	粘板岩	表面研磨、刃部片側ややヌメル、欠損品が接合。
401	47	BG－17	Ⅰ	9	1	正＋反	1	162	73	16	265	粘板岩	
402	39	BH－19	Ⅱ	9	1	正＋反	1	190	77	26	310	頁岩	刃部内湾
403	40	BG－16	Ⅰ	9	1	正＋反	1	219	105	31	979	粘板岩	巨大
404	57	BQ－18	攪乱	9	1	正＋反	1	150	86	16	247	粘板岩	表面に敲打痕
405	45	BE－17	Ⅲ	9	2	正＋反	1	182	81	23	366	頁岩	
406		BE－22	Ⅱ	9	1	正＋反	1？	144	52	20	211	頁岩	側面２に抉り
407	88	BE－36	Ⅶ	9？	1	正＋反	1	120	72	22	219	砂岩	E捨場
408		BI－22	Ⅲ	9	1	正＋反	1	121	46	19	81	粘板岩	側面つぶし・抉り
409	42	BH－17	Ⅰ	9	1	正＋反	1	168	57	10	121	粘板岩	
410	38	BG－18	Ⅰ	9	1	正＋反	1	192	68	23	347	頁岩	
411	48	BE－17	Ⅱ	9	4	正＋反		193	57	14	168	頁岩	使用面にヌメリ
412	52		Ⅰ	9	1	正＋反	1	113	109	20	268	安山岩	欠損、折れ方１、破断面に使用痕
413	51	BE－18	Ⅲ	9	1	正＋反	1	117	65	19	183	頁岩	欠損、折れ方１、破断面に使用痕
414	54	BF－19	Ⅲ	9	1	正＋反	1	107	73	19	146	粘板岩	欠損
415	62	BD－18	Ⅲ	9	2	正＋反	1	170	69	30	446	砂岩	欠損、折れ方１
416	41	BF－19	Ⅲ	9	2	正＋反	1	235	68	21	395	粘板岩	
417	61	BA－18	Ⅴ	9	2	正＋反	1？	163	69	29	378	粘板岩	
418	21	BG－20	Ⅰ	9	2	正＋反	1	175	73	24	352	砂岩	表面に敲打痕
419	65	BC－19	Ⅴ	9	2	正＋反	1	163	76	21	325	頁岩	
420		BH－21	Ⅲ	9	2	正	1	142	53	13	104	粘板岩	
421	63	BE－18	Ⅱ	9	2	正	1	131	52	16	126	頁岩	
422	35	BH－20	Ⅲ	9	2	正＋反	1	156	58	18	192	砂岩	器体端部に抉り
423	64	BE－19	Ⅱ	9	2	正＋反	1	160	61	20	205	砂岩	
424	50	BG－16	Ⅰ	9	3？	正＋反	1	122	67	22	203	頁岩	
425	60	BG－17	Ⅰ	9	3	正＋反	1	211	70	20	332	粘板岩	リ
426		BI－22	Ⅲ	9	3	正＋反	1	168	59	19	244	粘板岩	表裏面に研磨痕、刃部一部つぶし
427		BE－18	Ⅲ	9	3	正＋反	1	160	79	16	217	粘板岩	表裏面に研磨痕、器体端部に抉り、刃部片側にヌメリ
428		BF－19	Ⅲ	9	3	正＋反	1	166	78	17	275	粘板岩	表裏面に研磨痕、両側縁に敲打痕
429		BE－18	Ⅲ	9	3	正＋反	1	140	96	17	250	粘板岩	表面に研磨痕、刃部内湾
430		BE－22	Ⅲ	9	3		1	144	70	19	203	結晶片岩	長軸端部に抉り
431		BG－22	Ⅲ	9	4	正＋反		192	75	20	312	頁岩	側面１に加工・使用痕無し、側面２の一部に抉り
432	59		Ⅰ～Ⅱ	9	4	正＋反	敲打	125	87	26	203	粘板岩	抉りあり
433		BD－18	Ⅲ	9	4	正＋反	敲打	90	68	11	93	粘板岩	側面は敲打によるつぶし
434		BF－18	Ⅱ	9	4	正	敲打	144	47	14	125	頁岩	側面に抉りとつぶし
435	99	BI－22	Ⅲ	10	1		敲打	164	56	40	459	砂岩	
436	95	BI－21	Ⅲ	10	1		敲打	90	78	35	354	砂岩	
437	106	BF－19	Ⅲ	10	1		敲打	83	74	27	233	砂岩	
438	101	BI－22		10	1		敲打	110	69	55	511	砂岩	
439	94	BD－21	Ⅳ	10	1		敲打	108	75	36	425	砂岩	
440	91	BF－19	Ⅲ	10	1		敲打	135	58	17	172	頁岩	
441	98	BE－18	Ⅲ	10	1		敲打	151	81	27	429	砂岩	
442	96	BI－26	Ⅳ	10	1		敲打	130	75	23	300	砂岩	
443	107	BG－17	Ⅰ	10	1		敲打	126	64	22	194	粘板岩	
444	102	BH－22	Ⅲ	10	1		敲打	99	88	46	607	砂岩	
445		BB－19	Ⅴ	10	1		摩擦	139	89	68	1200	砂岩	火起こし用の石か？側面に敲打痕
446	97	BG－19	Ⅲ	10	1		敲打	130	80	31	383	砂岩	
447	90	BF－24	Ⅱ	10	1		敲打	116	72	22	170	砂岩	
448	103	BG－18	Ⅲ	10	1		敲打	164	97	19	496	輝緑岩	表面に線刻？
449		BG－17	Ⅰ	10	1			103	71	32	354	砂岩	
450	105	BE－19	Ⅲ	10	1			115	77	27	382	砂岩	
451	104	BD－26	Ⅲ	10	1			149	67	34	473	砂岩	
452	132	BG－20	Ⅰ	10	2 a		敲打	93	50	43	322	頁岩	表面研磨・ハンマーか？
453	133	BA－18	Ⅴ	10	2 a		敲打	123	67	46	604	砂岩	
454	134	BH－21	Ⅱ	10	2 a		敲打	108	79	50	603	砂岩	
455	135	BD－18	Ⅲ	10	2 a		敲打	184	65	48	817	砂岩	
456	100	BI－25	Ⅳ	10	2 b		敲打	130	80	37	563	砂岩	
457	131	BG－22	Ⅲ	10	2 a		敲打	67	40	31	119	安山岩	ハンマーか？
458	136	BE－18	Ⅲ	10	2 a？		敲打	126	85	30	445	砂岩	表面に数カ所の敲打痕。
459	32	BC－18	Ⅴ	10	2 b		敲打	85	68	29	266	安山岩	

図番号	番号	出土位置	層位	器種	細分類	二次加工	使用面	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
460		BG−21	Ⅲ	10	2b		敲打	100	73	41	448	緑色細粒凝灰岩	磨斧未製品転用か？擦り切りの痕跡あり
461		BH−22	Ⅲ	10	2b		敲打	64	62	44	223	安山岩	
462		BG−18	Ⅱ	10	2b		敲打	69	71	57	340	砂岩	
463		BF−19	Ⅲ	10	2b		敲打	57	51	23	105	チャート	
464		BC−19	Ⅴ	10	5？		ミガキ？	76	65	44	324	安山岩	
465		BG−23	Ⅲ	10？	5		ミガキ	65	47	44	197	安山岩	
466		BH−16		10	5？		？	58	55	48	203	チャート	表面に黒色の物質が付着
467	130	BI−22	Ⅲ	10	2a		敲打	80	65	21	201	砂岩	ハンマーか？
468		BD−18	Ⅲ	10	2b？		敲打	90	78	35	301	砂岩	
469		BH−21	Ⅰ	10	2a		敲打	115	44	40	301	安山岩	柱状節理の端部を利用。
470		BF−19	Ⅱ	10	3a		稜持ちミガキ	86	54	32	252	頁岩	欠損
471	124	BE−20	Ⅲ	10	3b		稜持ちミガキ	85	78	35	366	砂岩	
472	128	BH−24	Ⅲ	10	3b		稜持ちミガキ	95	58	32	297	緑色細粒凝灰岩	表面研磨
472	127	BI−21	Ⅲ	10	3b		稜持ちミガキ	97	60	41	373	緑色細粒凝灰岩	表面に敲打痕
474	125	BE−20	Ⅲ	10？	3b		稜持ちミガキ	78	62	37	277	頁岩	表面研磨
475		BD−19	Ⅱ〜Ⅲ	10	3b		稜持ちミガキ	91	44	35	253	緑色細粒凝灰岩	磨斧転用
476		BI−24	Ⅳ	10	3b		稜持ちミガキ	155	58	31	469	砂岩	
477	110	BF−19	Ⅲ	10	4a	正＋反	3	142	91	53	830	安山岩	使用面はかなり滑らか
478	89	BE−19	Ⅲ	10	4a	正＋反	3	119	77	34	394	砂岩	表面に敲打痕
479	111	BD−19	Ⅲ	10	4a？	正＋反	4？	156	107	42	950	砂岩	側面２の一部に敲打痕
480	30	BG−17	Ⅱ	10	4b	正＋反	3	160	66	33	395	砂岩	欠損品が接合、折れ方１
481	31	BG−19	Ⅲ	10	4c	正＋反	3	173	76	44	409	安山岩	欠損品が接合、折れ方１
482	113		Ⅰ	10	4c	正＋反	3	174	92	32	601	砂岩	使用面が大きな剥離により切られている。
483	83		Ⅱ	10	4a	正＋反	3	160	73	26	432	砂岩	
484	85	BF−19	Ⅲ	10	4a	正＋反	2	149	98	26	463	砂岩	う
485	112	BG−21	Ⅲ	10	4a	正＋反	2	177	79	38	491	砂岩	側面２の一部に抉り
486	46	BE−17	Ⅲ	10	4c？	正＋反	2と3	183	72	23	359	砂岩	
487	115	BG−16	Ⅰ	10	4a	正＋反	敲打と2	228	62	31	505	砂岩	
488	43	BE−18	Ⅲ	10	4a	正＋反	2	150	63	26	319	頁岩	
489	49	BG−20	Ⅱ	10？	4a	正＋反	2	149	57	25	228	頁岩	
490	82	BD−19	Ⅲ	10	4a	正＋反	1？	167	99	44	829	砂岩	側面２に敲打痕
491	86	BD−19	Ⅲ	10	4a	正＋反	2	157	65	24	309	砂岩	
492	72	BE−18	Ⅲ	10	4a	正＋反	敲打	122	90	28	438	砂岩	欠損、折れ方１
493	84	BE−18	Ⅲ	10	4a	正＋反	敲打	140	82	32	442	砂岩	正面形楕円形
494	74	BI−21	Ⅲ	10	4a	正＋反	3	88	59	29	222	砂岩	欠損、折れ方１，破断面に使用痕
495	78	BH−21	Ⅲ	10	4a	正＋反	2	73	64	26	146	砂岩	欠損、折れ方１，側面２に敲打痕
496	79	BG−20	Ⅰ	10	4a	正＋反	3	115	62	30	306	頁岩	欠損、折れ方１
497	80	BI−22	Ⅲ	10	4a	正＋反	4？	118	97	33	550	砂岩	欠損、折れ方２、側面２に敲打痕
498	73	BG−19	Ⅱ	10	4a	正＋反	3	93	66	37	305	砂岩	欠損、折れ方１，表面、側面２に敲打痕
499	77	BH−20	Ⅰ	10	4c	正＋反	3	118	79	44	481	砂岩	欠損、折れ方１，側面２に敲打痕
500	69	BI−22	Ⅲ	10	4a	正＋反	3	71	76	39	288	砂岩	欠損、折れ方１，破断面に使用痕
501	71	BE−18	Ⅲ	10	4a	正＋反	3	104	74	33	342	砂岩	欠損、折れ方１
502	68	BE−17	Ⅱ	10	4a	正＋反	3	137	76	31	386	砂岩	欠損、折れ方１，破断面に使用痕
503			Ⅰ〜Ⅱ	9？	1	正＋反	2	168	56	21	321	結晶ひん岩	端部欠損、折れ方１、両側面に使用痕。
504	75	BE−18	Ⅲ	10	4a	正＋反	1	110	80	36	333	砂岩	欠損、折れ方１、側面に敲打痕？
505	53	BG−18	攪乱	13？	1	正＋反	2	115	64	28	260	頁岩	刻？
506	76	BH−22	Ⅲ	10	4a	正＋反	敲打	80	80	31	248	砂岩	欠損、折れ方１
507	20		Ⅰ〜Ⅱ	10	4b		4	143	72	35	459	砂岩	
508	29	BH−22	Ⅲ	10	4b		3	123	51	20	191	砂岩	側面１に敲打痕
509	28		Ⅰ〜Ⅱ	10	4b		4	107	55	26	226	砂岩	
510		BG−21	Ⅲ	10	4b	正	3	113	60	28	247	砂岩	表面に凹み、線刻
511	26	BC−17	Ⅴ	10	4b	正＋反	3	221	53	24	314	砂岩	表面に凹み
512	25	BI−22	Ⅲ	10	4b	正＋反	2	213	77	22	532	砂岩	
513	16	BH−25	Ⅱ	10	4b	正＋反	1	169	104	28	578	砂岩	
514	24	BC−19	Ⅴ	10	4b	正＋反	3	147.5	62	28	331	砂岩	
515	17	BD−20	Ⅳ	10	4b	正＋反	3	169	102	42	721	砂岩	
516	19	BD−19	Ⅲ	10	4b	正＋反	3	181	56	28	364	砂岩	表面に凹み，上下両端に抉り
517	27	BE−18	Ⅲ	10	4b	正＋反	3	177	81	30	531	砂岩	
518	67	BF−18	Ⅲ	10	4b	正＋反	1	120	50	16	125	砂岩	側面敲き
519	66	BC−17	Ⅴ	10？	4b		敲打	116	52	17	149	頁岩	側面敲き
520	18	AV−14	Ⅴ	10	4b	正＋反	3	187	89	44	874	砂岩	
521	6	BF−22	Ⅱ	10	4a？	正＋反	2と3	102	62	35	341	砂岩	両側縁に使用面、欠損、折れ方１，破断面に使用痕
522	139	BC−19	Ⅴ	10	4b？		4？	115	71	35	433	砂岩	使用面を切る敲打痕
523	1	BD−17	Ⅱ	10	4b？		4	95	80	34	345	砂岩	欠損、折れ方１，両側縁に使用面
524	5	BG−20	Ⅲ	10	4b	正＋反	3	126	79	34	446	砂岩	欠損、折れ方１，破断面に使用痕
525	10	BG−22	Ⅱ	10	4b	正＋反	3	88	75	31	282	砂岩	欠損、折れ方１、破断面に使用痕

図番号	番号	出土位置	層位	器種	細分類	二次加工	使用面	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
526	8		Ⅰ～Ⅱ	10	4 b	正＋反	3	81	65	40	318	砂岩	欠損、折れ方１、破断面に使用痕
527	13	BF－19	Ⅲ	10	4 b	正＋反	3	80	61	28	216	砂岩	欠損、折れ方１
528	59	BI－22	Ⅲ	10？	4 b	正＋反	3	118	53	22	155	頁岩	欠損、折れ方２使用面の横にヌメリ
529	12	BI－22	Ⅲ	10	4 b	正	3	146	94	35	683	砂岩	端部欠損
530	3	AZ－18	Ⅴ	10	4 b	正	3	109	69	28	305	砂岩	欠損、折れ方１
531	11	BB－16	Ⅴ	10？	4 b		4	108	63	32	272	砂岩	欠損、折れ方２
532	9	BG－19	Ⅲ	9	2	反	1	103	58	26	191	砂岩	欠損
533	14	BG－19	Ⅲ	10	4 b	正＋反	1	75	82	26	166	砂岩	欠損、折れ方１
534	7	BB－17	Ⅴ	10	4 b	正＋反	1	95	83	28	331	砂岩	欠損・折れ方１、角度
535	140	BC－24	Ⅳ	10	4 b	正＋反	3	78	63	20	140	砂岩	欠損・折れ方２
536	138	BF－25	Ⅱ	10？			敲打	89	96	30	382	砂岩	欠損、折れ方１、角度　、破断面に使用痕
537	121	BG－16		10	4 d		4	178	64	79	1200	砂岩	下端部に敲打痕
538	116	BI－21	Ⅲ	10	4 d		4	163	71	78		砂岩	
539	87	BD－19	Ⅲ	10	4 a	正＋反	2	120	115	34	474	砂岩	
540	120	BE－18	Ⅲ	10	4 d		4	79	66	55	410	砂岩	欠損、表面に敲打痕
541	119	AS－12	Ⅴ	10	4 d		4	165	86	57	929	砂岩	
542	118	BA－16	Ⅴ	10	4 d	正＋反	3	134	83	54	684	砂岩	
543	122	AS－12	Ⅴ	10	1 d		3	157	103	73	1200	砂岩	
544	123	AQ－13	Ⅴ	10	1 d		4	116	68	56	591	砂岩	
545	4	BE－19	Ⅱ	10	1 d		3	139	65	40	507	砂岩	集石
546	117	AS－11	Ⅴ	10	1 d		3	147	72	52	553	砂岩	
547	33	AZ－16	Ⅴ	11		抉り		101	89	30	313	頁岩	
548	137	BH－22	Ⅲ	11		階段状		84	63	23	227	砂岩	
549	93	BE－22	Ⅰ・Ⅱ	11				146	84	23	501		表面の敲打痕は帯状に断続的に続く
550		BH－22	Ⅲ	13	1 b	正		48	31	5	7	粘板岩	側面こすり
551	143	BE－19	Ⅲ	13	1 b	正		55	15	4	4	粘板岩	側面こすり、裏面一部研磨
552	146	BZ－16	Ⅲ	13	1 a	正＋反		75	27	5	11	粘板岩	側面こすり、表裏研磨
553		BH－17	Ⅰ	13	1 a	正＋反		73	38	7	25	粘板岩	側縁こすり、先端表裏研磨、欠損
554		BE－19	Ⅲ	13	1 d	正＋反		79	38	5	19	粘板岩	側縁こすり、未製品か？
555	149	BE－19	Ⅲ	13	1 a	正＋反		53	80	11	52	粘板岩	側縁つぶし
556	142	BF－	Ⅲ	13	1 d	正＋反		85	32	7	23	粘板岩	側縁こすり、表裏面研磨、未製品か？
557		BD－19	Ⅲ	13	1 d	正＋反		75	32	7	23	粘板岩	側縁弱いこすり
558		BG－20	Ⅲ	13	1 d	正＋反		108	42	7	38	粘板岩	側縁敲き・弱いこすり、表面研磨、未製品？
559		BH－25	Ⅱ	13	1 d	正＋反		82	24	5	10	粘板岩	側縁敲き、未製品か失敗品？
561		BF－19	Ⅲ	13	1 d	正		84	52	7	34	粘板岩	側縁こすり、欠損
562	141	BE－19	Ⅲ	13	1 a	正＋反		156	62	17	157	粘板岩	有茎の槍？基部両側縁つぶし
563	36	BG－23	Ⅲ	13	1 d	正＋反		212	47	18	217	粘板岩	側縁こすり、表面研磨、石剣等の未製品か？
564	150	BH－17	Ⅰ	13	1 a	正＋反		148	49	10	87	粘板岩	側縁こすり、先端部表面研磨
565		BE－19	Ⅲ	13	1 d	正＋反		122	34	95	38	千枚岩	側縁こすり
566		BE－18	Ⅲ	13	1 d			81	37	13	67	輝緑岩	表面丁寧な研磨
567		BH－22	Ⅲ	13	2			43	40	11	25	緑色細粒凝灰岩	
568	145	BG－21	Ⅲ	13	2	研磨		195	30	145	100	粘板岩	石刀の欠損品
569	147	BI－21	Ⅲ	13	2	研磨		118	28	15	82	ホルンフェルス	石刀？

早期の土器観察表

C捨場

図番号	出土地点	層位	部位	文様	口唇部	備考
1	BC-18	5	口縁部	縦爪５段	刻み斜め上	
2	BE-19	5	口縁部	貝殻腹縁横位圧痕・縦爪	刻み横	
3	BD-20	5	胴部	貝殻条痕・横爪２段		
4	BC-18	5	胴部	沈線・横爪３段		
5	BE-19	5	底部付近	貝殻条痕		
6	BH-23	5	口縁部	貝殻背面押し引き	刻み斜め上	
7	BJ-24	5	胴部	貝殻背面押し引き		
8	BJ-24	5	底部	無文		
9	BH-22	5	底部	縄文回転？		繊維含む
10	BH-23	5	底部	単絡１縦回転		内面炭化物付着・繊維含む
11	BI-22	5	底部	ＲＬ回転		繊維含む

B捨場

図番号	出土地点	層位	部位	文様	口唇部	備考
1	BD-4	Ⅱ	口縁部	縦爪３段・貝殻条痕	刻み斜め上	
2	BE-2	Ⅱ	口縁部	縦爪２段	刻み斜め上	
3	BF-1	Ⅱ	口縁部	横爪４段・貝殻腹縁圧痕	刻み斜め上	
4	BC-7	Ⅱ	口縁部	縦爪２段	刻み斜め上	

B捨場（西捨場）出土土器観察表

NO.	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	P番	口唇	口縁	隆帯の有無と頸部	胴部	底部	整理番号
1	BG － 1	9	刺突	結節回転	－	LRﾖｺ	欠	35
2	BE － 4	154	－	LRﾖｺ＋結節回転	－	LRﾖｺ	－	1048
3	AX － 6	×	－	LRﾖｺ＋結節回転	－	LRﾖｺ	欠	1218
4	BE － 4	132	LR	LRﾖｺ+側圧	－	LRﾖｺ	LR	272
5	BD － 4	18	LR	LRﾖｺ＋結節回転	－	LRﾖｺ	欠	1045
6	BE － 5	8	－	結節回転	－	LRﾖｺ、結節回転	欠	1277
7	B? － 5	1	－	結節回転	－	LRﾖｺ	欠	1019
8	BA － 6	12	－	結束1種(0段多条)	－	LRﾖｺ(0段多条)	欠	279
9	BA － 4	4	－	LRﾖｺ	－	LRﾖｺ	欠	1219
10	BE － 4	27	LR	LRﾖｺ＋結節回転	－	LRﾖｺ	欠	1169
11	BE － 4	269	LR	LRﾖｺ＋結節回転	－	LRﾖｺ	文様	1250
12	BG － 3	63	指圧	指圧、沈線、刺突	－	RLRﾖｺ	欠	1049
13	BE － 4	303	LR	LRﾖｺ＋結節回転	－	LRﾖｺ	－	1265
14	BG － 2	×	－	LRﾖｺ＋結節ﾖｺ	－	LRﾖｺ	欠	1036
15	AY － 6	×	３波状	LRﾖｺ＋LR側圧	－	LRﾖｺ	欠	1201
16	AX － 6	×	－	単絡１類ﾀﾃ＋LR側圧	－	単絡１類側圧	欠	1082
17	BE － 4	173	－	LRﾖｺ	－	LRﾖｺ	欠	280
18	AY － 5	×	－	単絡1類、結節	有、側圧	単絡1類、結節	－	270
19	BC － 4	×	刺突	結節回転	有、単絡１類ﾖｺ	結節回転、単絡１類ﾀﾃ	欠	1258
20	BB － 4	49	－	結節回転	有、結節回転	単絡１類ﾀﾃ	欠	1215
21	BF － 1	1	－	LRﾀﾃ	有、刻目	LRﾀﾃ	文様	33
22	BA － 5	21	－	結節回転	有、刺突	LRﾖｺ	－	1208
23	BE － 4	205	－	LRﾀﾃ＋結節回転	有、単絡１類	LRﾀﾃ	欠	1259
24	AX － 5	2	－	LRﾖｺ	有、刺突	LRﾖｺ、結節回転	欠	1177
25	BE － 4	95	－	結節回転	有、縄文側圧	RLﾖｺ	欠	1253
26	BC － 4	48	－	結束１種ﾖｺ	－	結束１種ﾖｺ	欠	1176
27	AX － 6	9	－	Ｒ側圧	有、刺突	結節回転、多絡	欠	1221
28	BC － 4	10	－	結束１種ﾖｺ	有、LR側圧	結束１種ﾖｺ、LRﾖｺ	欠	1204
29	BF － 1	46	－	結束1種	－、側圧	結束1種、単絡1類	－	244
30	BC － 5	125	－	結束1種	－、側圧、刺突	多絡	欠	266
31	BC － 5	103	－	結束１種ﾖｺ	×	単絡１類ﾀﾃ	欠	1033
32	BE － 3	29	－	単絡1類ﾖｺ、隆帯	2段、指頭押圧	単絡1類	欠	49
33	BD － 3	495	－	LR側圧	有、刺突	結束１種ﾖｺ	欠	1254
34	BB － 3	48	４波状	LR側圧	有、指頭押圧	結節回転、結束１種ﾖｺ	欠	1205
35	BC － 4	51	４波状	単絡側圧	－	結束１種ﾖｺ	－	1266
36	BC － 2	1	側圧	側圧	－、側圧	結束1種、結節	欠	40
37	BC － 4	5	－	側圧	有、刺突	結節回転、多絡	欠	41
38	BC － 3	59	－	Ｒ側圧	－、刺突	結節回転、単絡6A類ﾀﾃ	欠	1264
39	BD － 6	363	側圧	側圧	－	単絡1類	－	267
40	BE － 5	54	－	LRﾖｺ、LR側圧	有、刺突	結束１種ﾖｺ	欠	1175
41	BD － 3	485	４波状	LR側圧	有、LR側圧	多絡ﾀﾃ、結節回転	欠	1216
42	BE － 7	1	－	側圧	側圧、刺突	結束2種(RL-LR, LR-LR)	欠	248

NO.	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	P番	口唇	口縁	隆帯の有無と頸部	胴部	底部	整理番号
43	BL － 5	38	LR	結節	有,刺突	多絡	欠	235
44	BK － 2	×	－	R・絡側圧、結束１、刺	－、絡側圧	多絡	－	1035
45	BE － 3	×	－	単絡6A類	－,側圧,刺突	単絡1類,結節	－	258
46	BD － 6	286	LR	側圧,結節	－	単絡1類	欠	238
47	BD － 6	X	４波状	単絡6A類ﾖｺ	×、LR側圧	単絡１類ﾀﾃ	欠	1034
48	BL － 5	66	－	側圧	有,側圧	結束1種	－	261
49	BC － 6	7	波状か	LRﾖｺ、LR側圧	有、刺突	結束１種ﾖｺ、単絡１類ﾀﾃ	欠	1274
50	BC － 6	32	４波状	Ｌ・Ｒ側圧	－	結束１種ﾖｺ	欠	1251
51	BC － 5	95	４波状	Ｌ・Ｒ側圧、結節回転	－	結束１種ﾖｺ	－	1257
52	BD － 6	74	RL	Ｒ側圧	－	結束１種ﾖｺ	－	1269
53	BL － 02	37	－	Ｒ側圧	－、刺突	結束１種ﾖｺ	欠	1172
54	BL － 02	37	－	側圧	有(小)、刺突	結束１種	欠	260
55	BC － 6	37	－	LR側圧、刺突	有、Ｌ側圧	結束１種ﾖｺ	－	1263
56	BD － 4	255	－	側圧	－	結束１種(RL-LR)	－	274
57	BC － 4	14	４波状	LR・Ｌ・Ｒ側圧	有、刺突	結束１種ﾖｺ	欠	1273
58	BC － 5	108	RL	LR側圧、RL側圧	有、刺突	多絡ﾀﾃ		1271
59	BC － 5	55	RL	側圧	有,刺突,側圧	多絡	欠	263
60	BC － 5	89	－	側圧	－	単絡1A類	－	269
61	BC － 5	20	刻目	単絡側圧、結節回転	有、刺突	単絡1A類ﾀﾃ	－	1187
62	BE － 2	21	－	Ｒ側圧	－	単絡1A類ﾀﾃ	－	1170
63	BF － 3	93	単絡	LR側圧	有、LR側圧	結束１ﾖｺ・ﾀﾃ、単絡1A類	－	1108
64	BC － 4	28	－	単絡側圧、LR側圧	有、刺突	単絡1A類ﾀﾃ	－	1249
65	BE － 4	24	－	Ｌ・Ｒ側圧	－	単絡1A類ﾀﾃ	台付	1261
66	BD － 6	75	４波状、LR	LR側圧	－	結束１種ﾖｺ	欠	1163
67	BC － 5	43	LR	側圧	－	結束1種	－	265
68	BG － 1	210	－	側圧	有,刺突	単絡1A類ﾀﾃ	欠	278
69	BG － 1	207	４突起、刻目	隆帯、LR側圧、刻目	有、刻目	単絡1A類ﾀﾃ	－	1157

略称
側圧　側面押圧
単絡　単軸絡条体
多絡　多軸絡条体
指圧　指頭押圧

Ｂ捨場出土の異系統土器観察表

図番号	出土位置	層位	器種	口縁	内調	口縁部文様	区画帯	胴部文様	内炭	外炭	備考
2	AY-6	Ⅱ	深鉢	波状	ミガキ	沈線・三角形彫刻					
3	BL-1	Ⅱ	深鉢？					沈線・附加条横回転			
1	BG-1	Ⅱ	深鉢	波状		沈線・結節回転					
4	BE-3	Ⅱ	球胴形深鉢	波状	ミガキ	波紋状・渦巻き状沈線		LR横回転？			
5	BL-1	Ⅱ	深鉢	平縁・突起	ミガキ	沈線・隆帯。刻み	隆帯上に刻み	縄文回転			
6	BM-7	Ⅱ	鉢？	４単位波状	ミガキ	沈線・刻み・隆帯・三角形の彫刻		沈線			

引用・参考文献

青森県教育委員会	1994	『畑内遺跡Ⅰ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第161集
青森県教育委員会	1995	『畑内遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第178集
青森県教育委員会	1996	『畑内遺跡Ⅲ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第187集
青森県教育委員会	1997	『畑内遺跡Ⅳ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第211集
青森県教育委員会	1999	『畑内遺跡Ⅴ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
青森県教育委員会	1989	『館野遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
青森県教育委員会	1998	『上尾駮(1)遺跡Ｃ地区』　青森県埋蔵文化財調査報告書第113集
青森県教育委員会	1998	『水吉遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第245集
青森県教育委員会	1997	『津山遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
青森県教育委員会	1992	『沢堀込遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
青森県教育委員会	1998	『三内丸山遺跡Ⅸ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第249集
青森県教育委員会	1998	『三内丸山遺跡Ⅹ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第250集
青森県教育委員会	1998	『三内丸山遺跡Ⅺ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第251集
青森県教育委員会	1996	『三内丸山遺跡Ⅵ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
青森県教育委員会	1992	『鳴沢遺跡・鶴喰(9)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
青森県教育委員会	1986	『沖附(2)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
青森県教育委員会	1976	『水木沢遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第31集
青森県教育委員会	1977	『近野遺跡Ⅲ・三内丸山遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
青森県教育委員会	1979	『近野遺跡Ⅳ』　青森県埋蔵文化財調査報告書47集
青森県教育委員会	1999	『三内丸山(6)遺跡Ⅰ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第257集
青森県教育委員会	1998	『幸畑(4)・幸畑(1)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第236集
青森県教育委員会	1999	『櫛引遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
青森市教育委員会	1998	『桜峰(1)遺跡』　青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集
青森県教育委員会	1997	『宇田野(2)・宇田野(3)・草薙遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第217集
碇ヶ関村教育委員会	1998	『四戸橋遺跡』　碇ヶ関村文化財調査報告書第２集
階上町教育委員会	1989	『白座遺跡・野場(3)遺跡』
青森県立郷土館	1988	『名川町剣吉荒町遺跡』　青森県立郷土館報告第22集
弘前市教育委員会	1990	『砂沢遺跡－本文編－』
秋田県教育委員会	1997	『池内遺跡　遺構編』　秋田県文化財調査報告書第268集
秋田県教育委員会	1999	『池内遺跡　遺物編』　秋田県文化財調査報告書第282集
秋田県教育委員会	1996	『東北横断自動書道秋田線発掘調査報告書　蟹子沢遺跡』 秋田県文化財調査報告書第261集
秋田市教育委員会	1982	『下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書』
秋田市教育委員会	1985	『秋田臨空新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
岩手県埋蔵文化財センター	1998	『大日向Ⅱ遺跡』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集
岩手県埋蔵文化財センター	1999	『大鳥Ⅰ遺跡』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第290集
岩手県埋蔵文化財センター	1997	『和当地Ⅰ遺跡』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第259集
岩手県埋蔵文化財センター	1994	『煤孫遺跡』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第196集
岩手県埋蔵文化財センター	1982	『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書　雫石町　下長谷地・元御所Ⅰ・Ⅱ遺跡』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第28集
岩手県埋蔵文化財センター	1982	『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書　雫石町　塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第31集
岩手県埋蔵文化財センター	1984	『長者屋敷遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）遺物編』 岩手県埋文センター文化財報告書第77集
北上市教育委員会	1983	『滝ノ沢遺跡』　北上市文化財調査報告書第33集
北上市教育委員会	1990	『滝ノ沢遺跡Ⅱ』　北上市文化財調査報告書第72集
稲　野　彰　子	1991	「大木式土器にみられる球胴形深鉢について－文様の多系統性に注目して－」 北上市立博物館研究報告第８号

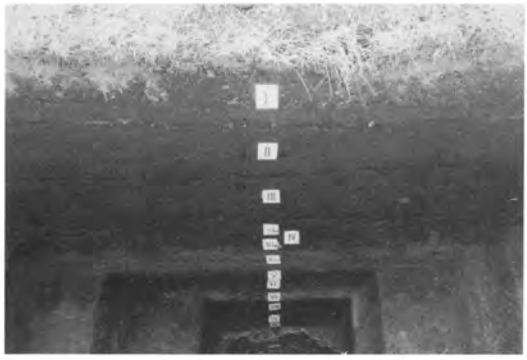
岩手県教育委員会	1982	『東北縦貫自動車道関係発掘調査報告書　江釣子村鳩岡崎遺跡』 岩手県文化財調査報告書第70集
岩手県教育委員会	1980	『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅶ－』　岩手県文化財調査報告書第51集
山　内　清　男	1979	『日本先史土器の縄文』先史考古学会
市　毛　美津子	1992	「「凸多面体磨き石」について－縄文時代中期後半の遺跡の検討から－」 『古代』第94号
宮城県教育委員会	1969	『埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－』　宮城県文化財調査報告書第19集
能登町教育委員会 真脇遺跡発掘調査団	1986	『真脇遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター	1986	『徳前Ｃ遺跡Ⅱ・Ⅲ』
石川県立埋蔵文化財センター	1983	『徳前Ｃ遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
石川県立埋蔵文化財センター	1987	『笠舞Ａ遺跡（Ⅲ）』
山形県教育委員会	1988	『吹浦遺跡第３次・第４次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第120集
庄内古文化研究所編	1955	『吹浦遺跡』
山形県教育委員会	1981	『郷の浜Ｊ遺跡』　山形県埋蔵文化財調査報告書第50集
山形県教育委員会	1987	『生石２遺跡(3)』　山形県埋蔵文化財調査報告書第117集
巻町編	1994	「豊原遺跡」「重稲場遺跡群」『巻町史　資料編１　考古』
小木町教育委員会編	1982	『長者ケ平遺跡Ⅱ』
小木町教育委員会編	1983	『長者ケ平遺跡Ⅲ』
神奈川県教育委員会	1977	『尾崎遺跡』　神奈川県埋蔵文化財調査報告　第13集
阿　部　朝　衛	1987	「第６章　磨製石斧生産の様相」『寺地遺跡』青海町教育委員会
一戸町教育委員会	1983	『上野遺跡』　一戸町埋蔵文化財調査報告書　第７集
富　樫　泰　時	1984	「秋田県における北陸系の土器について」　『本庄市史研究４』
盛岡市教育委員会	1998	『永福寺山遺跡』　盛岡市埋蔵文化財調査報告書
滝沢村教育委員会	1985	『湯舟沢遺跡』　滝沢村埋蔵文化財調査報告書第２集
角　張　淳　一	1998	「石器研究の感想」　『東京考古16』
竹　岡　俊　樹	1989	『石器研究法』　言叢社
三　宅　徹　也	1974	「青森県における円筒下層式土器の地域展開」『北奥古代文化第６号』

調査前風景

調査風景（平成７年度）

遺物出土状況（ＢＥ－18付近）

遺物出土状況（平成９年度）



斜面下部層位（ＢＥ－22）

トレンチ内（ＢＦ－18～19付近）遺物出土状況

基本層序（ＢＥ－18）

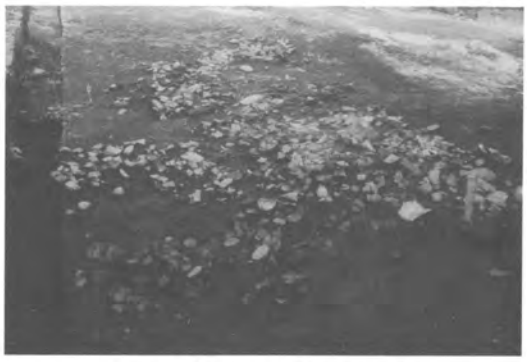
基本層序（ＢＥ・ＢＤ－17）

図　版　1

基本層序（ＢＤ－17）

基 本 層 序

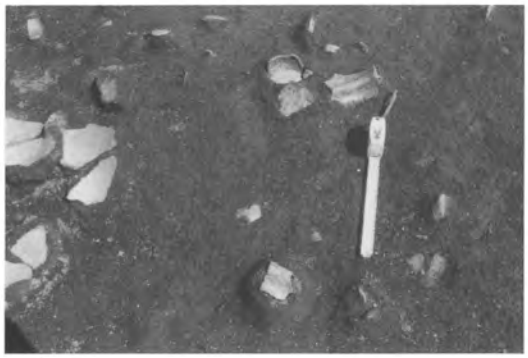
基 本 層 序



遺物出土状況（ＢＧ－19付近）

遺物出土状況

遺物出土状況



大木系遺物出土状況①（ＢＥ－20）

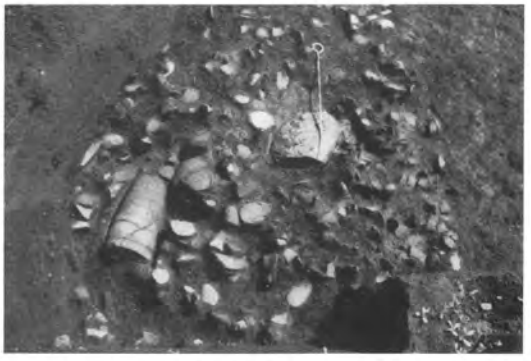
大木系遺物出土状況②（ＢＧ－19）

図 版 2

7 号 集 石

8 号 集 石

遺物出土状況（ＢＧ－19）

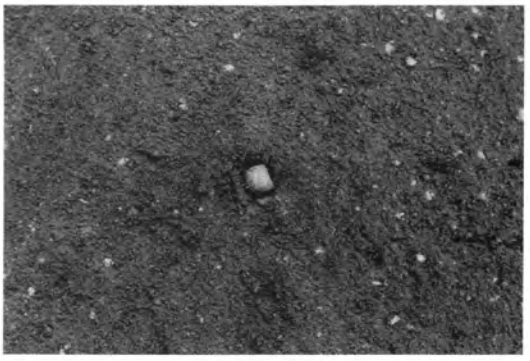


遺物出土状況（ＢＥ－18）

遺物出土状況（第72号竪穴住居跡覆土）

遺物出土状況（ベルト上の遺物はＣ捨場の遺物）

遺物出土状況

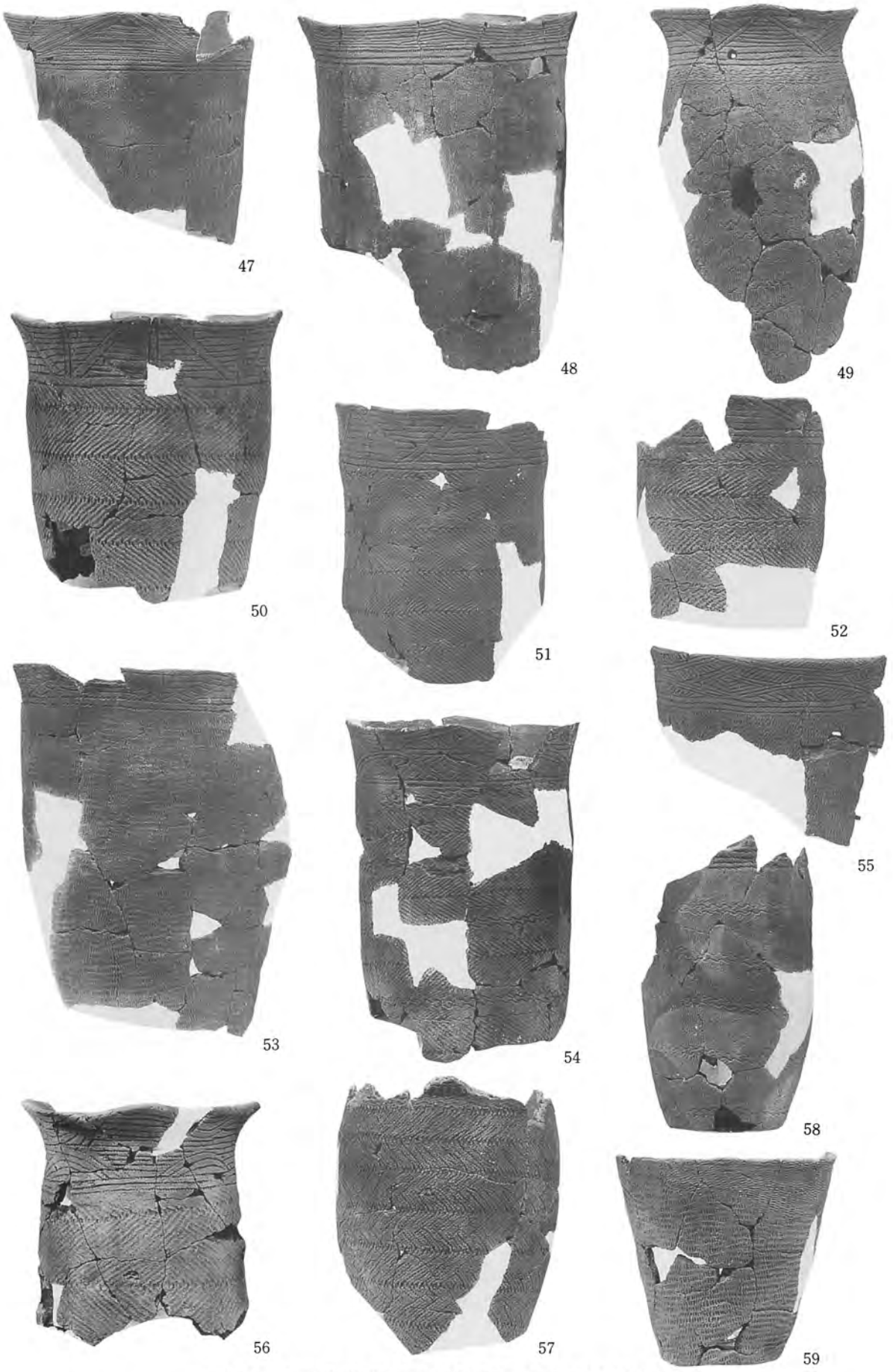


遺物出土状況

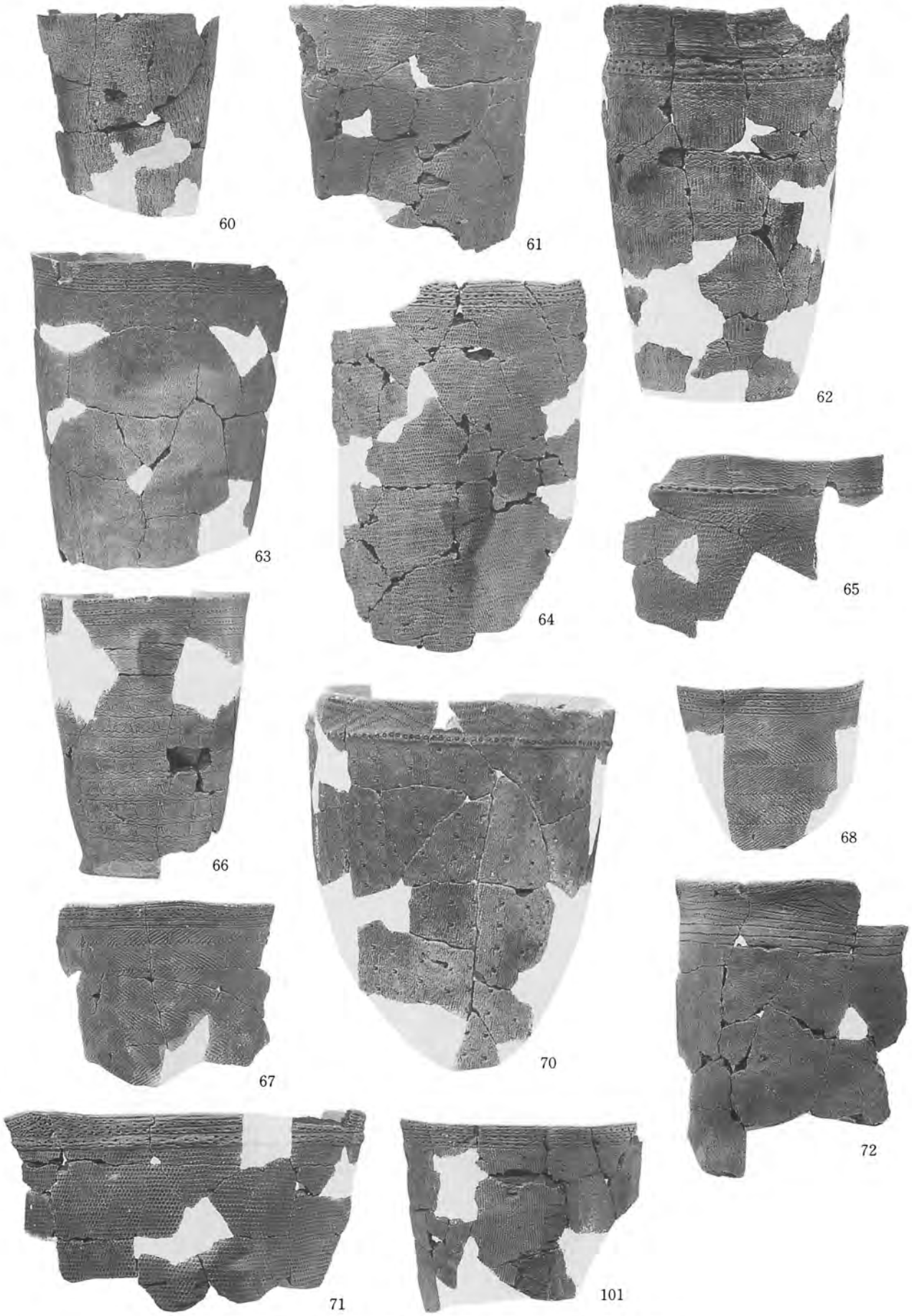
図 版 3

図版４　Ｃ捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(1)

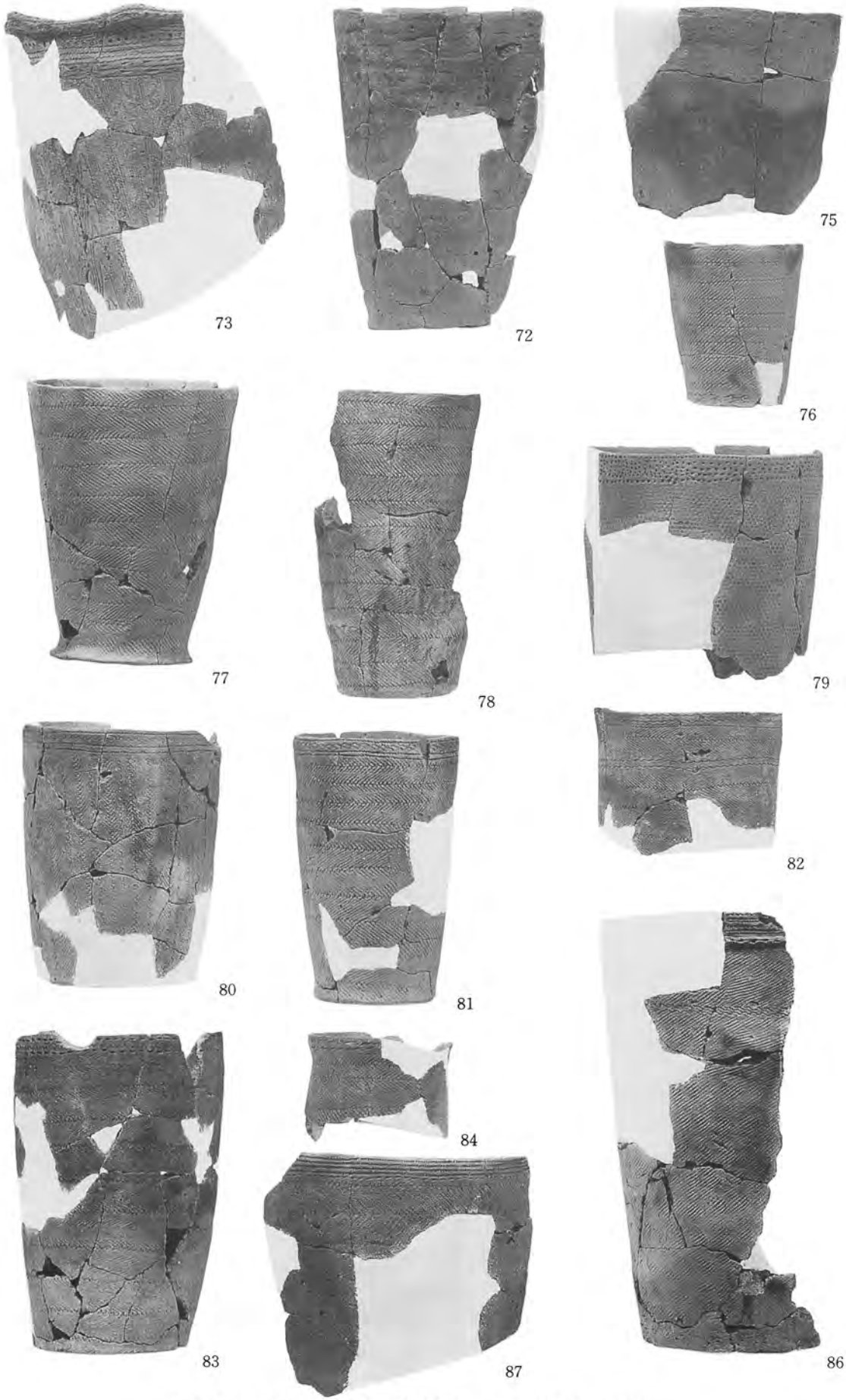
図版５　Ｃ捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(2)



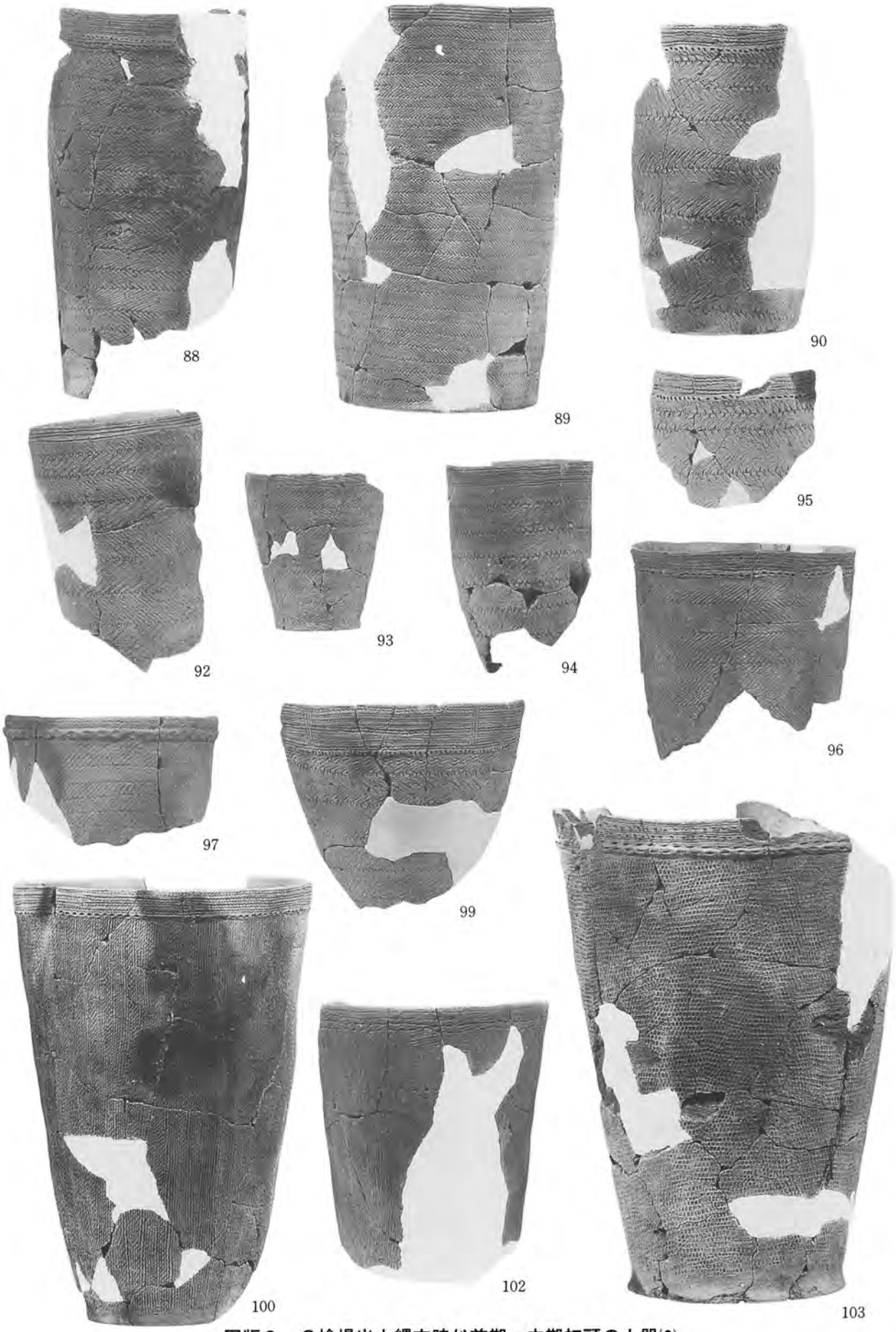
図版６　Ｃ捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(3)



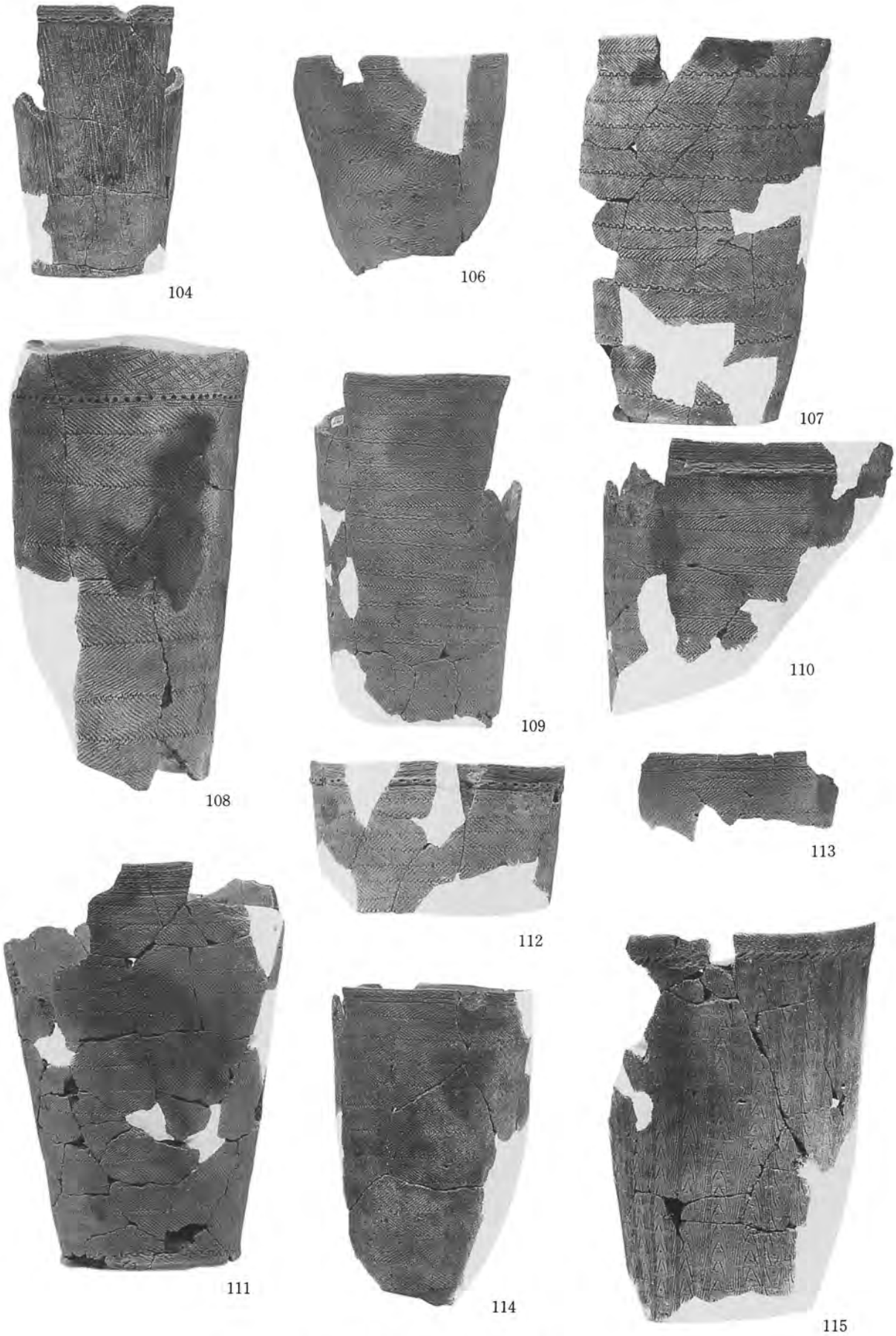
図版７　Ｃ捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(4)



図版８　Ｃ捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(5)

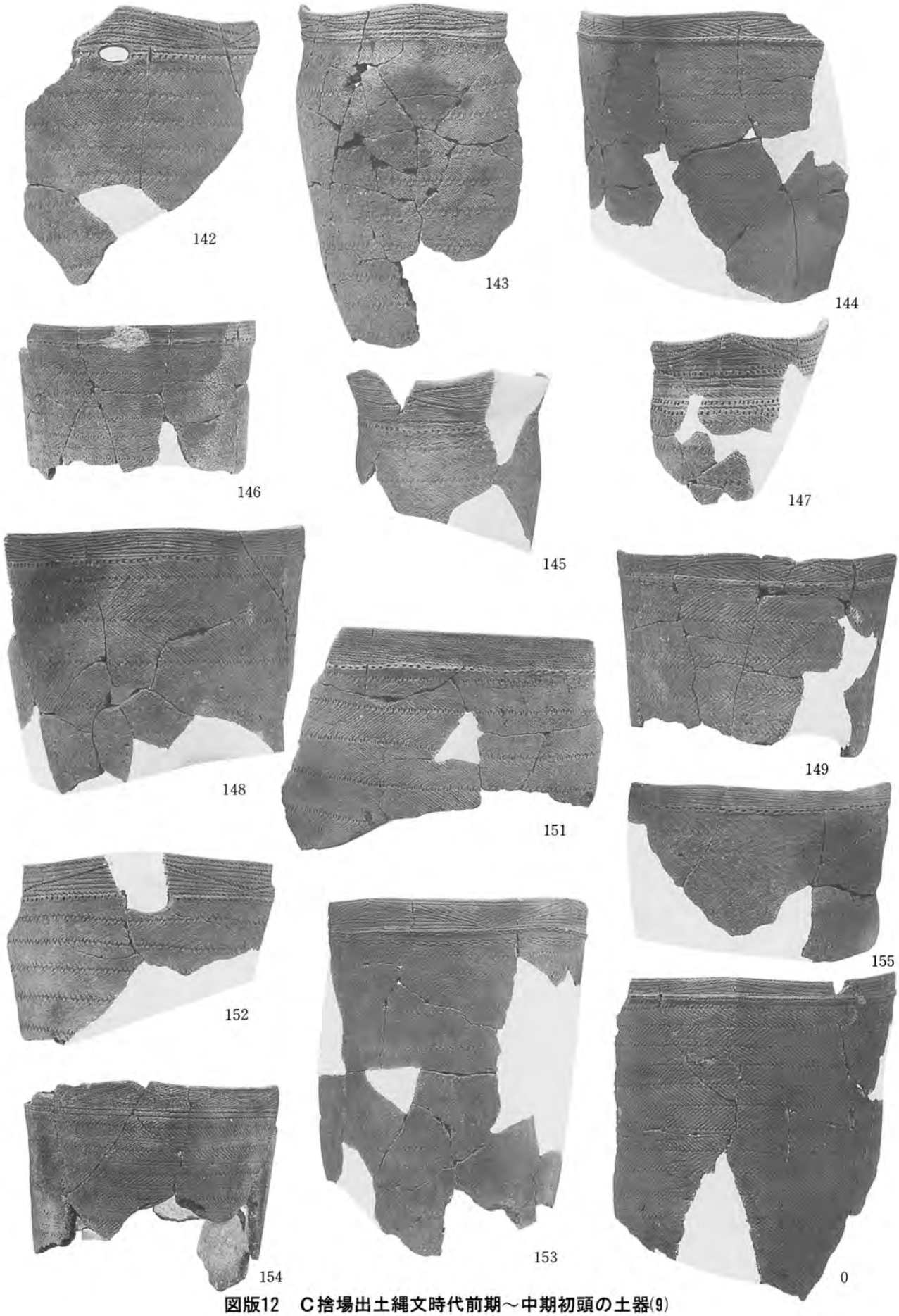


図版９　Ｃ捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(6)

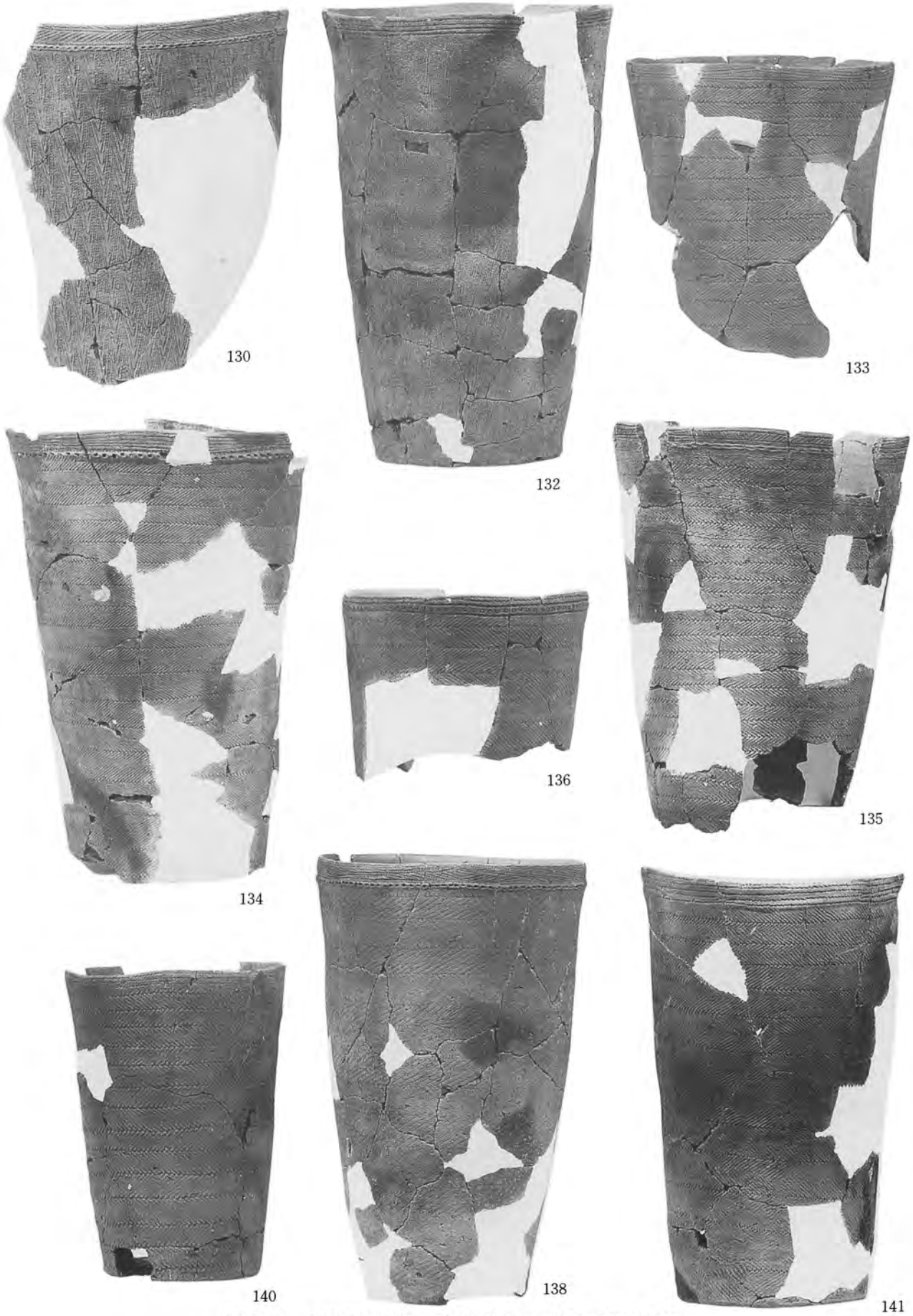


図版10　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(7)

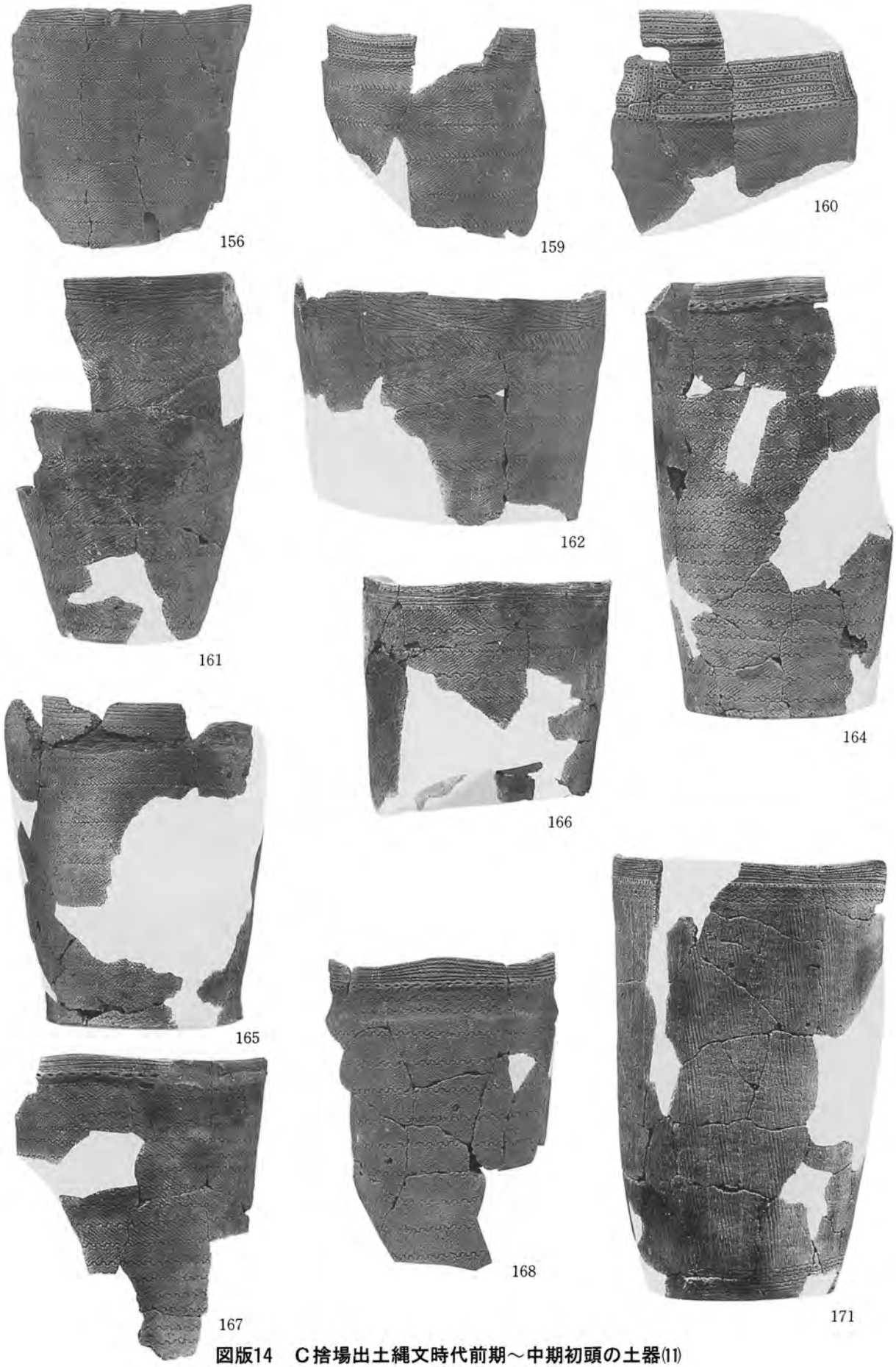
図版11　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(8)



図版12　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(9)



図版13　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(10)



図版14　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(11)

169

170

172

173

174

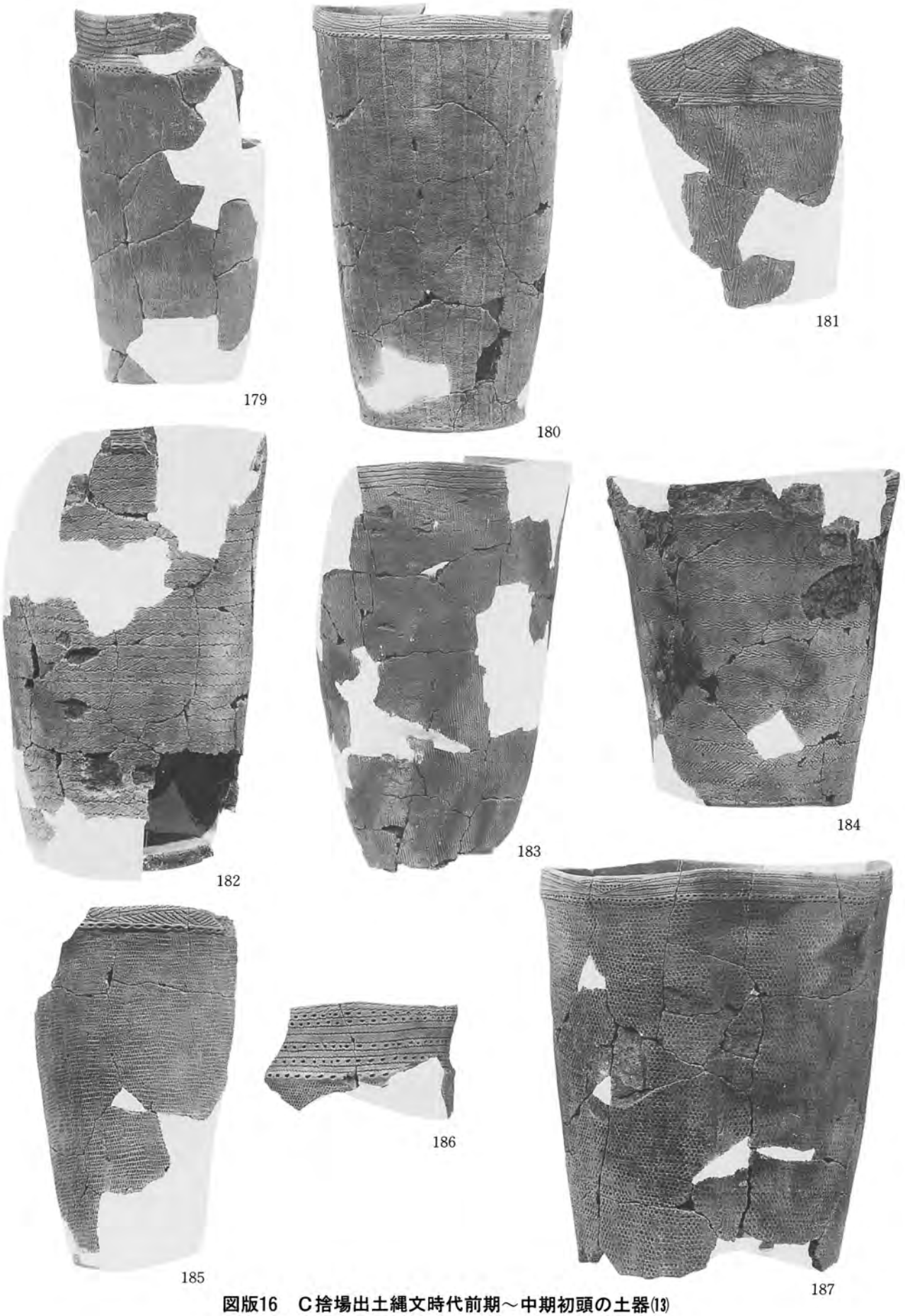
175

176

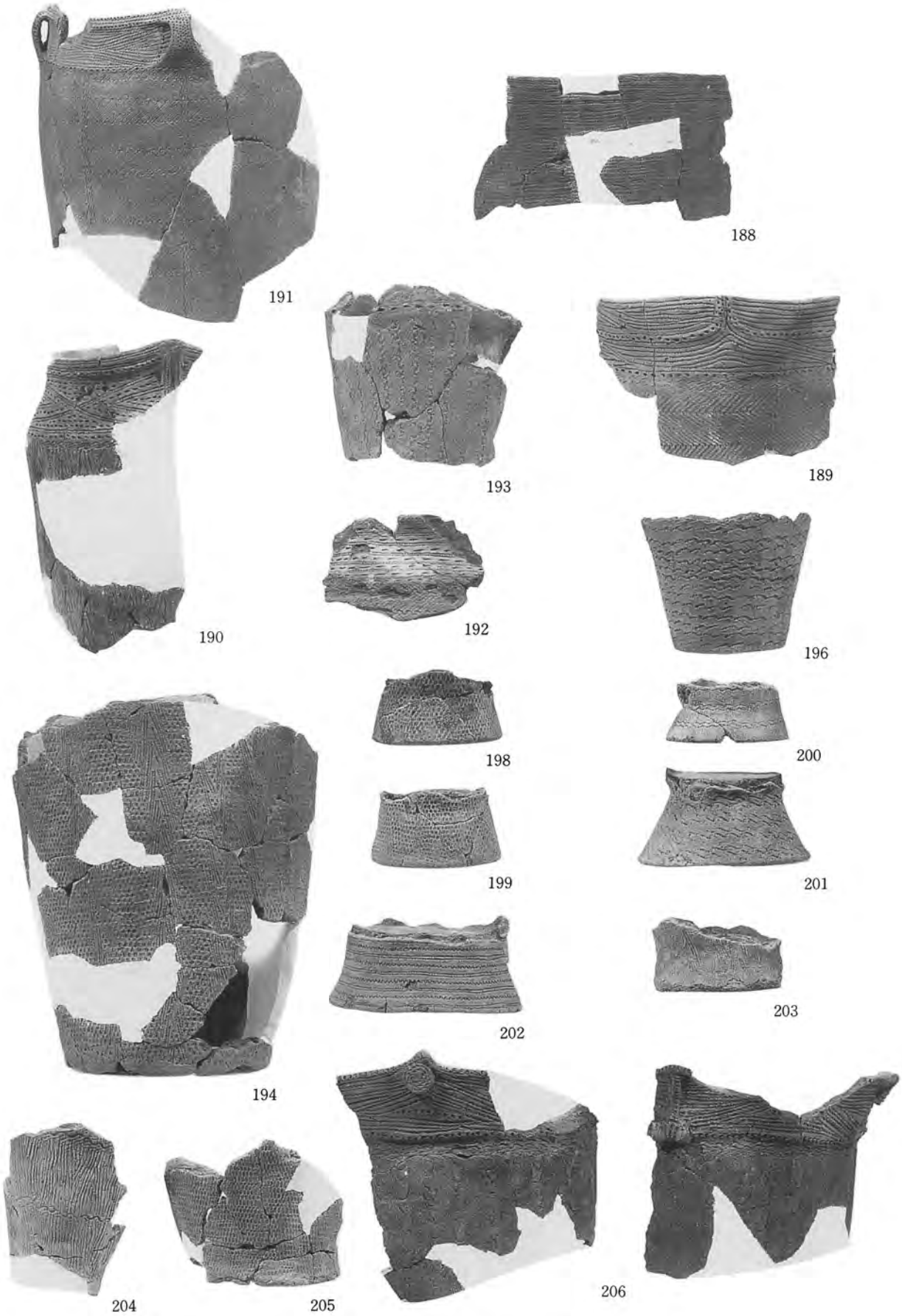
177

178

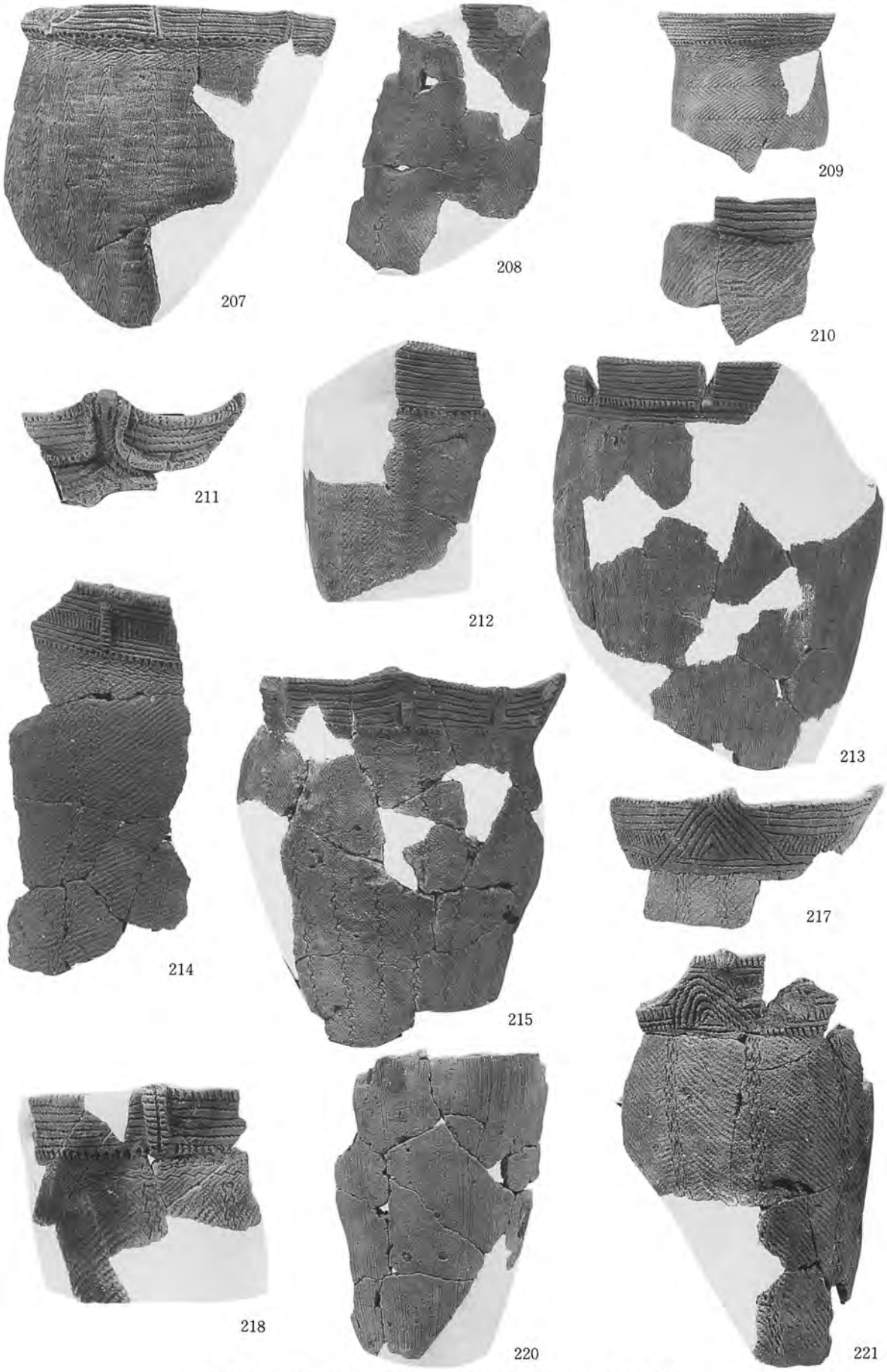
図版15　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(12)



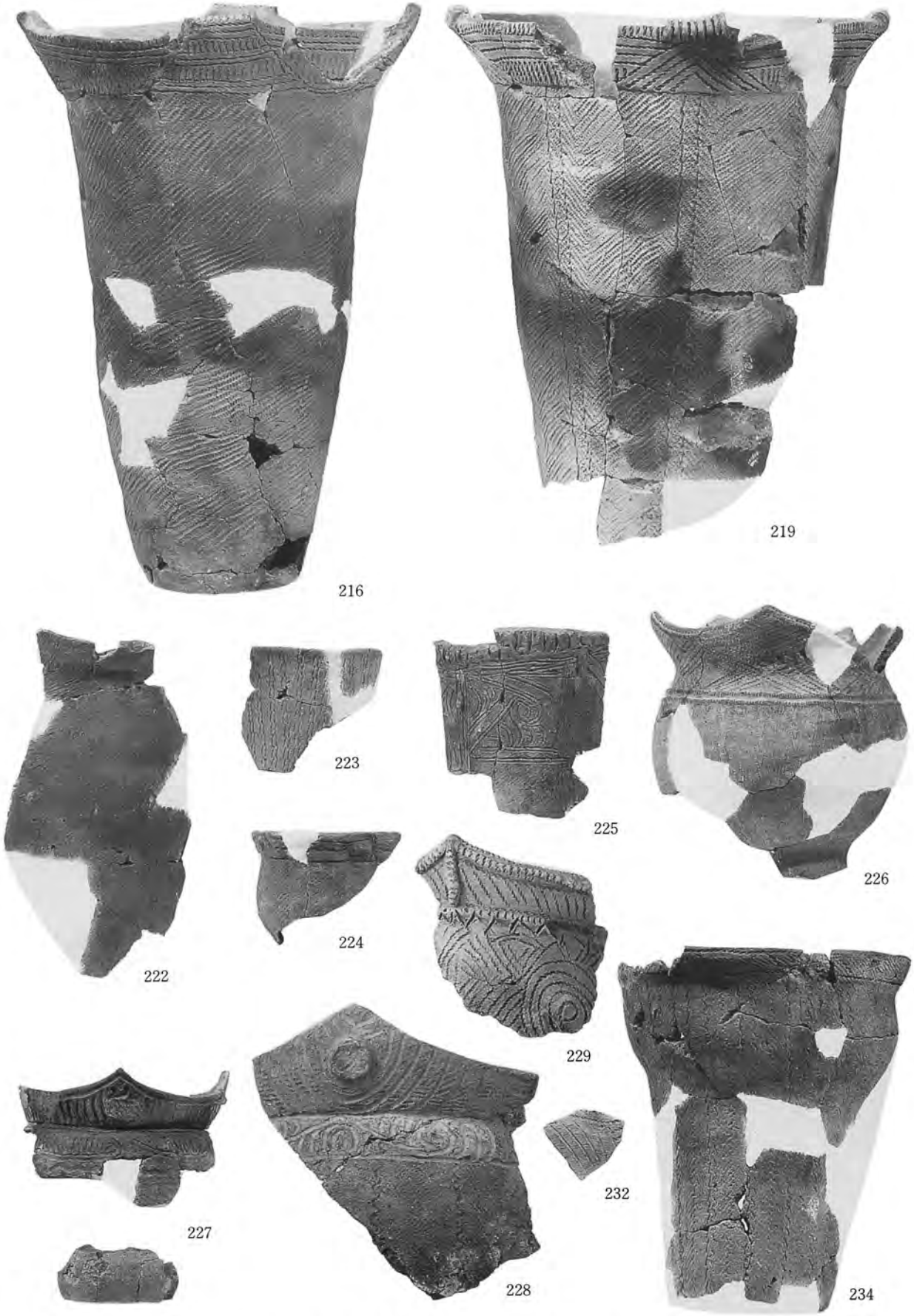
図版16　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(13)



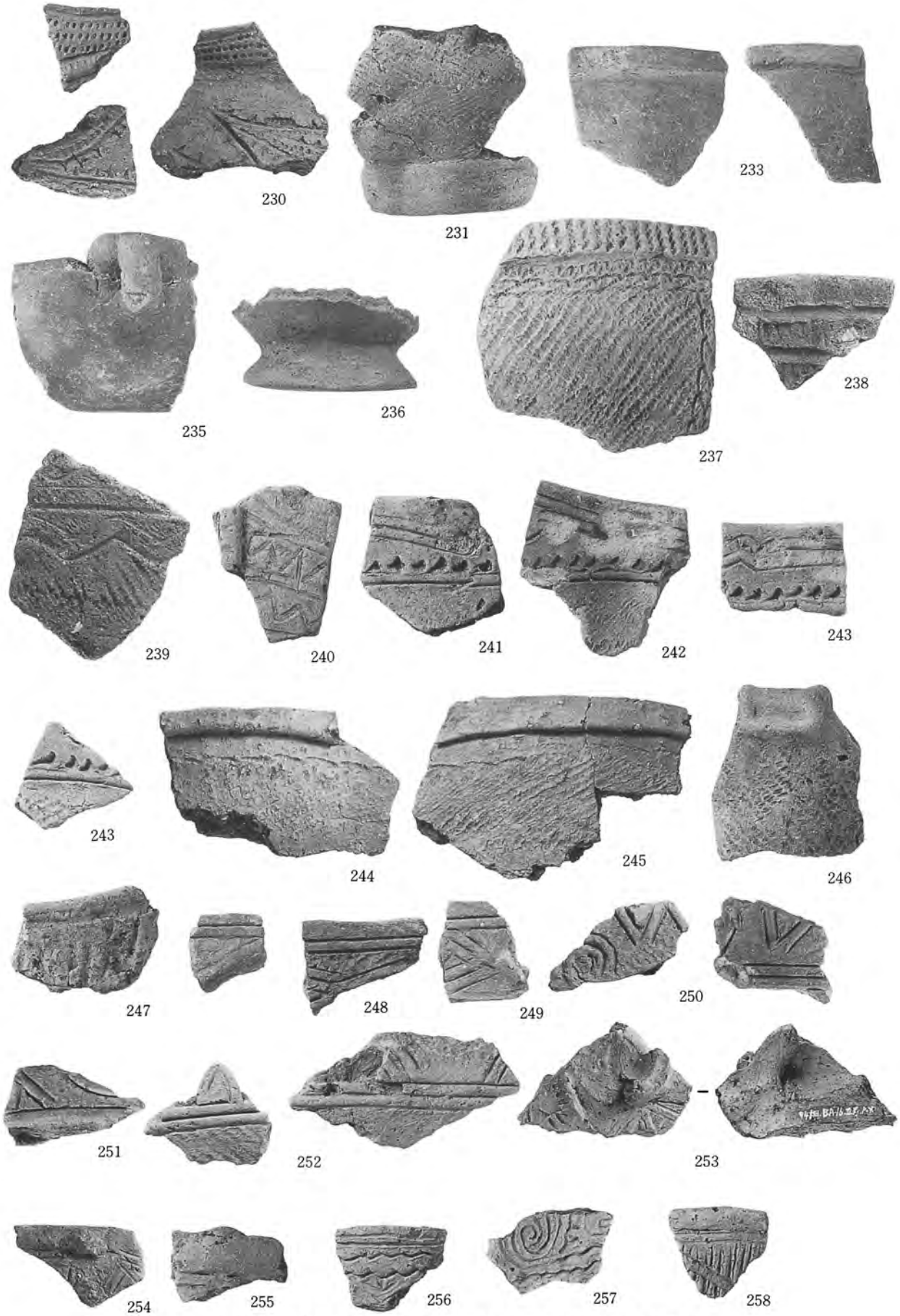
図版17　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(14)



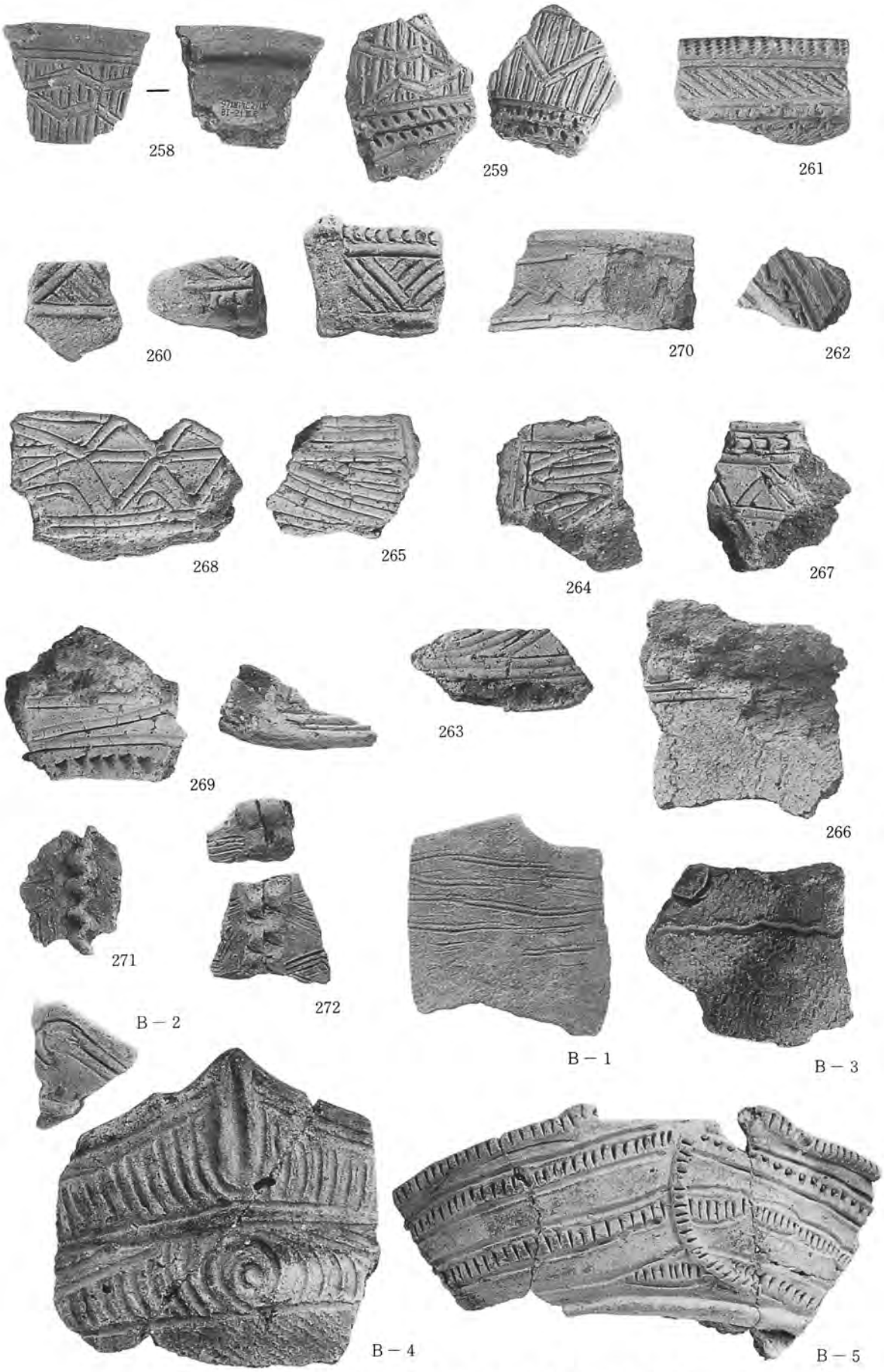
図版18　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(15)



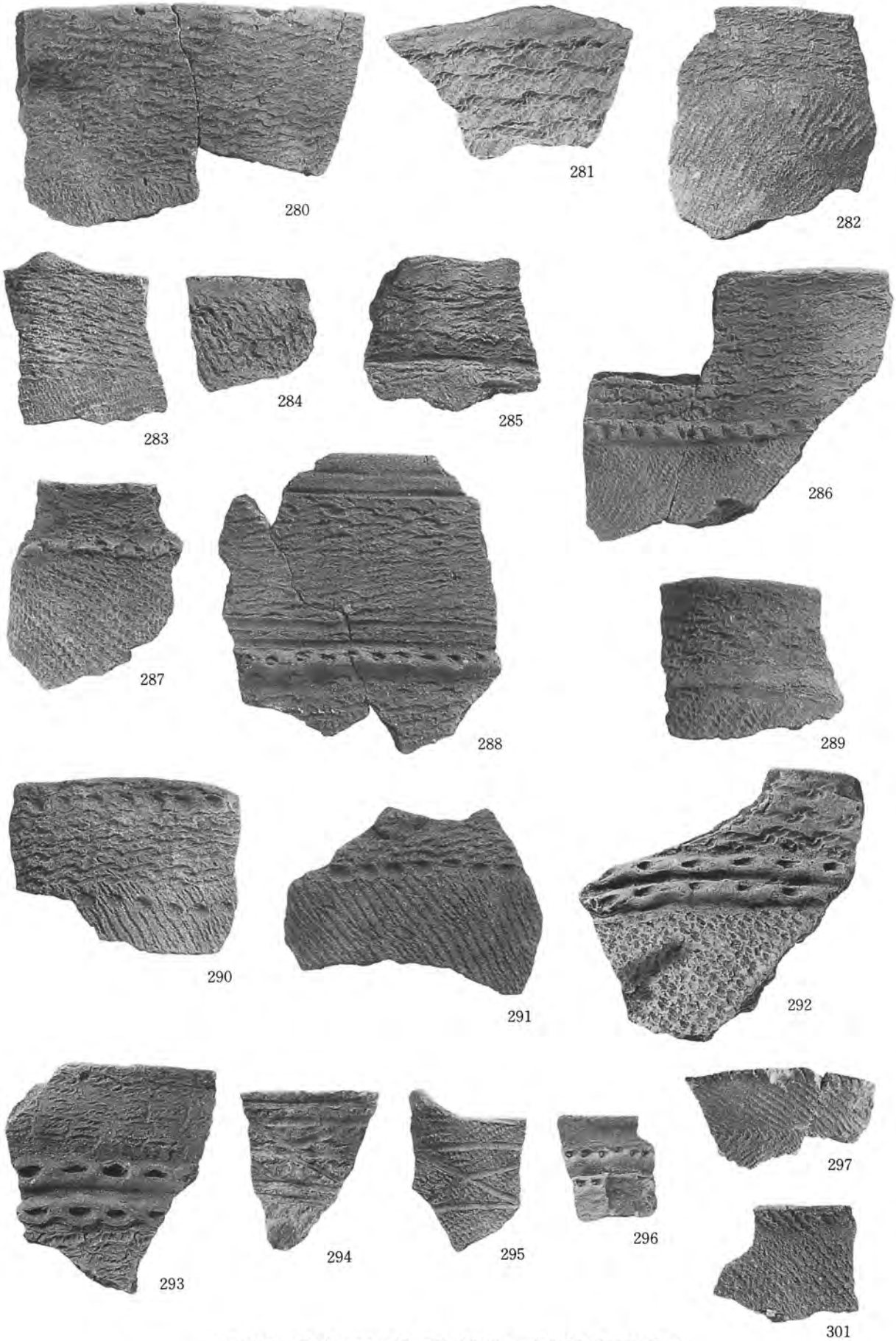
図版19　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(16)



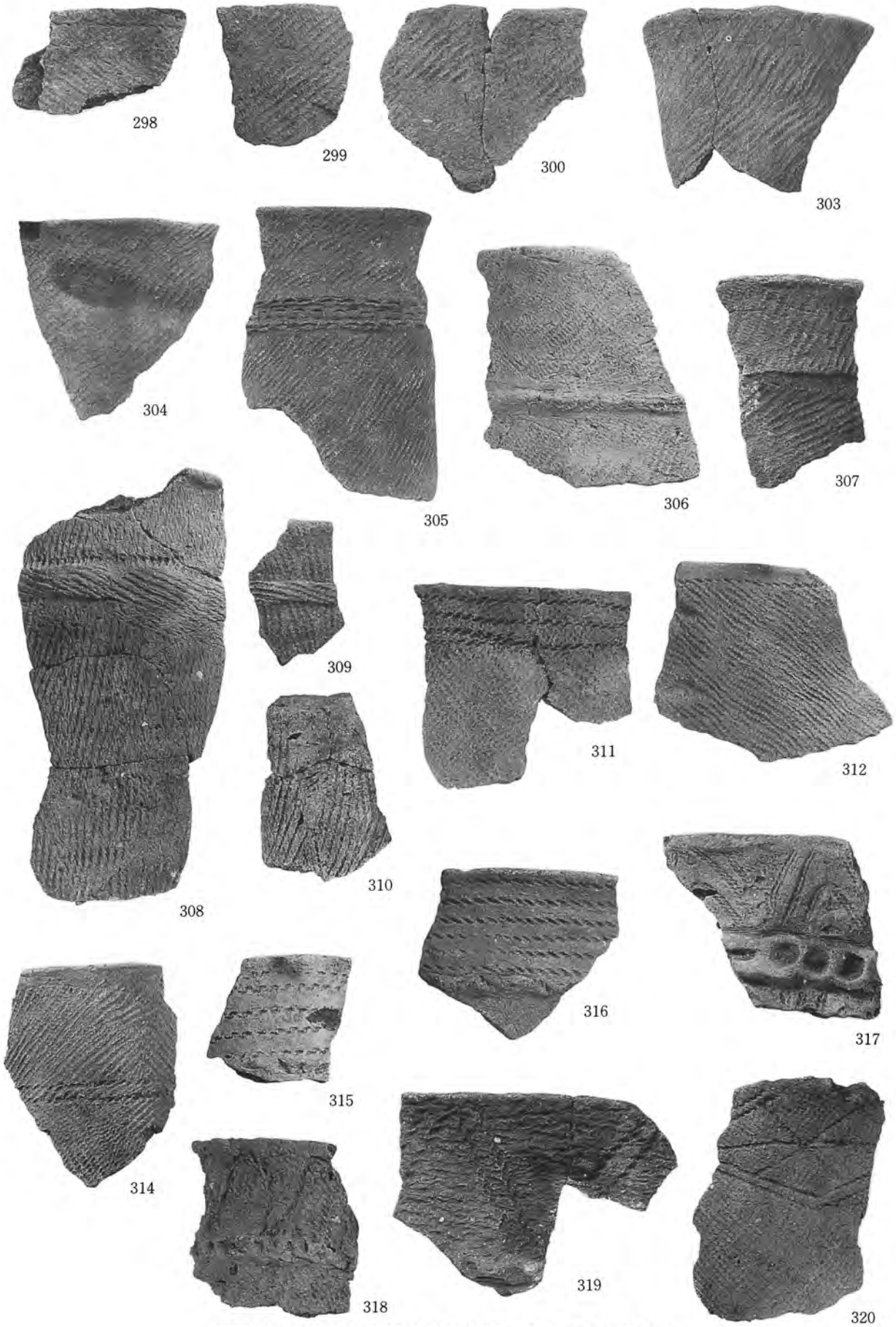
図版20　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(17)



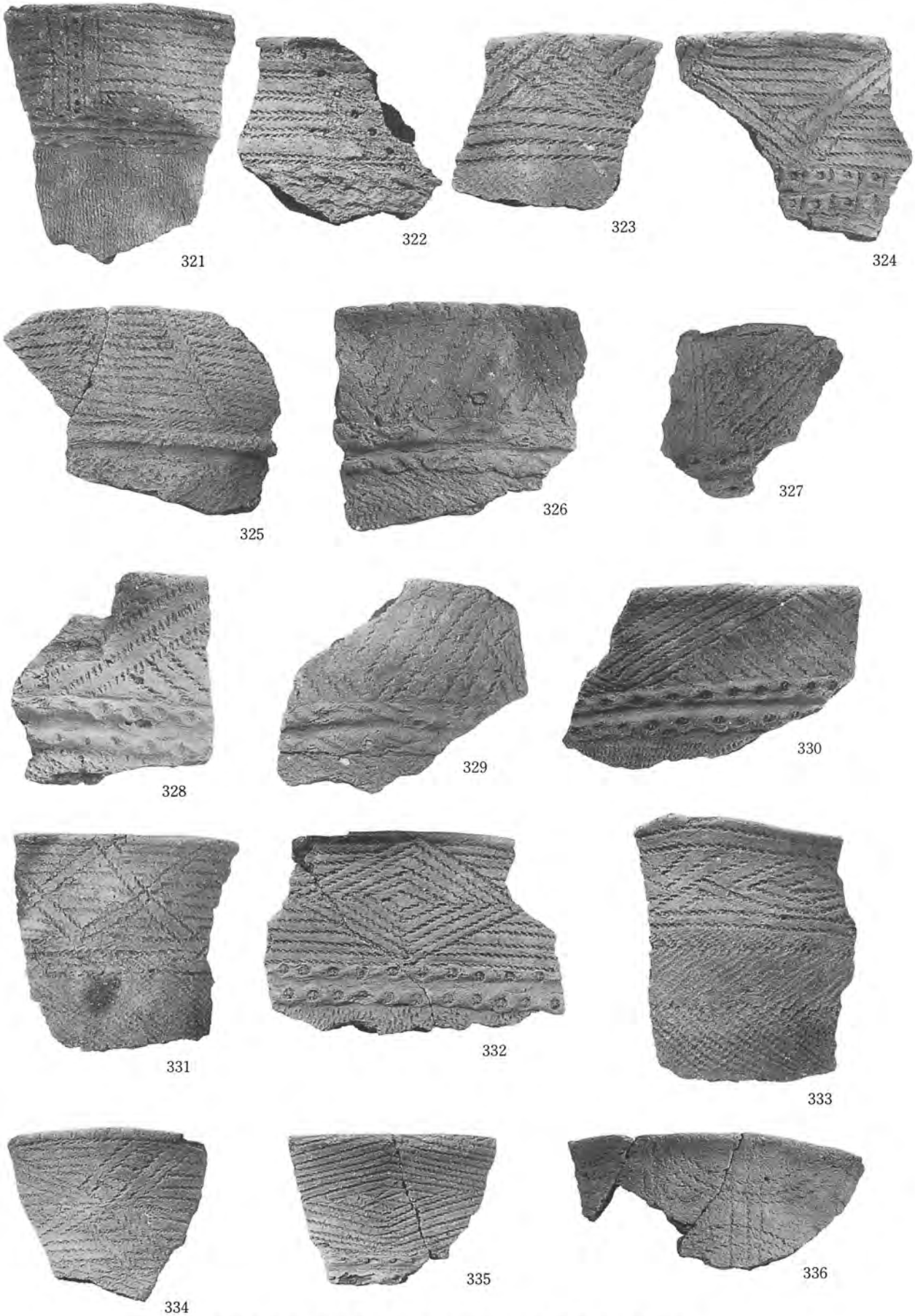
図版21　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(18)



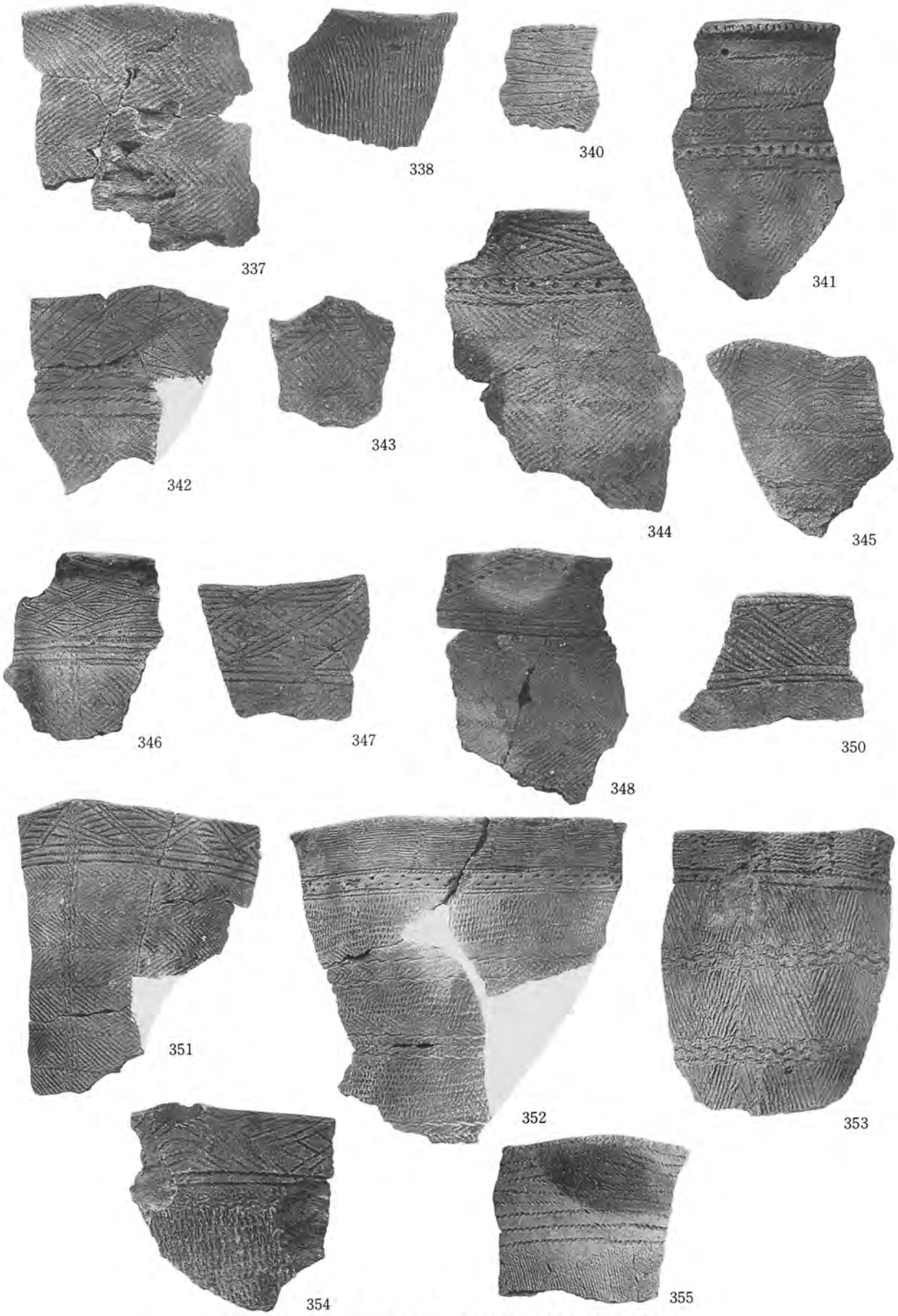
図版22　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(19)



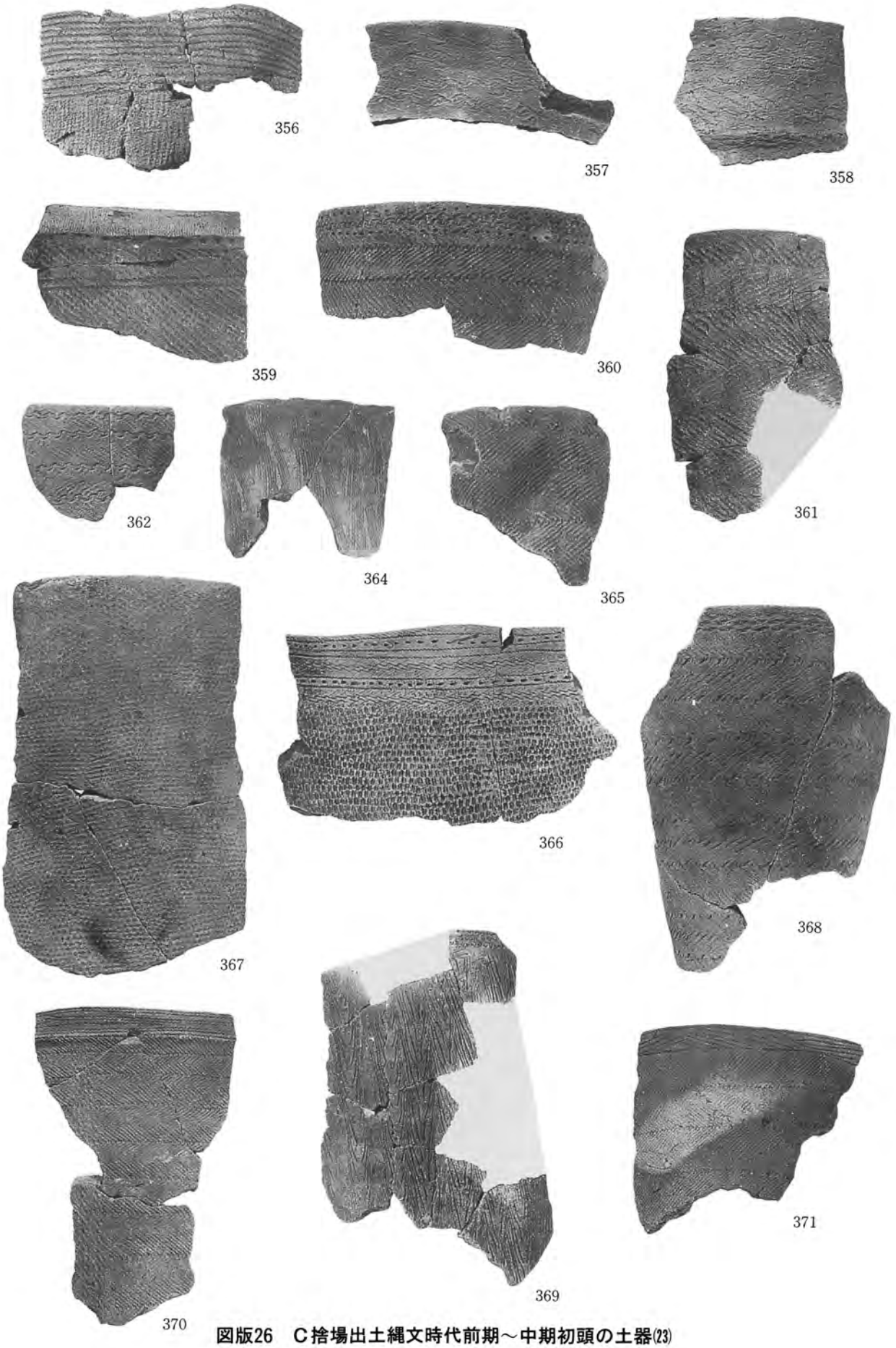
図版23　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(20)



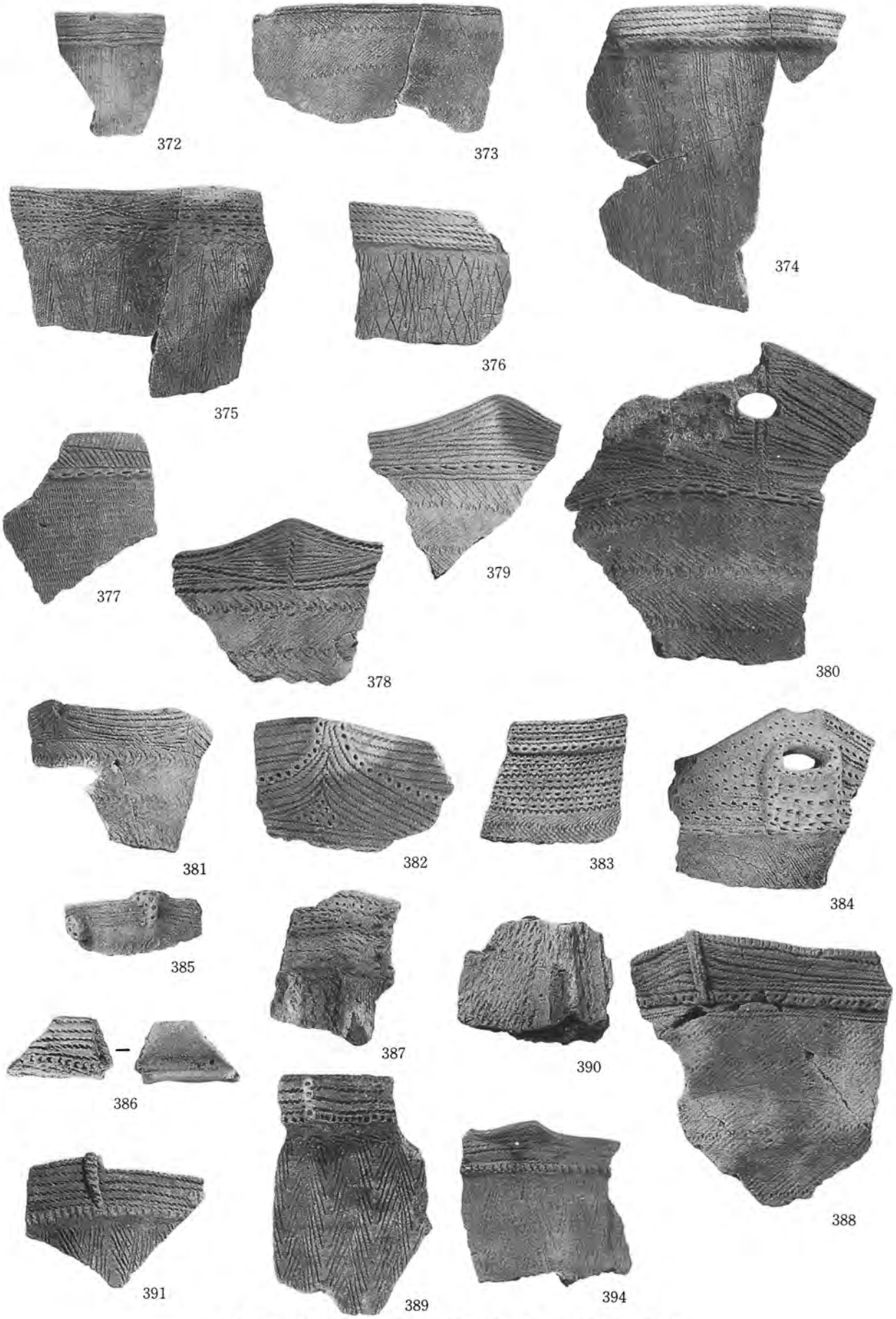
図版24　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(21)



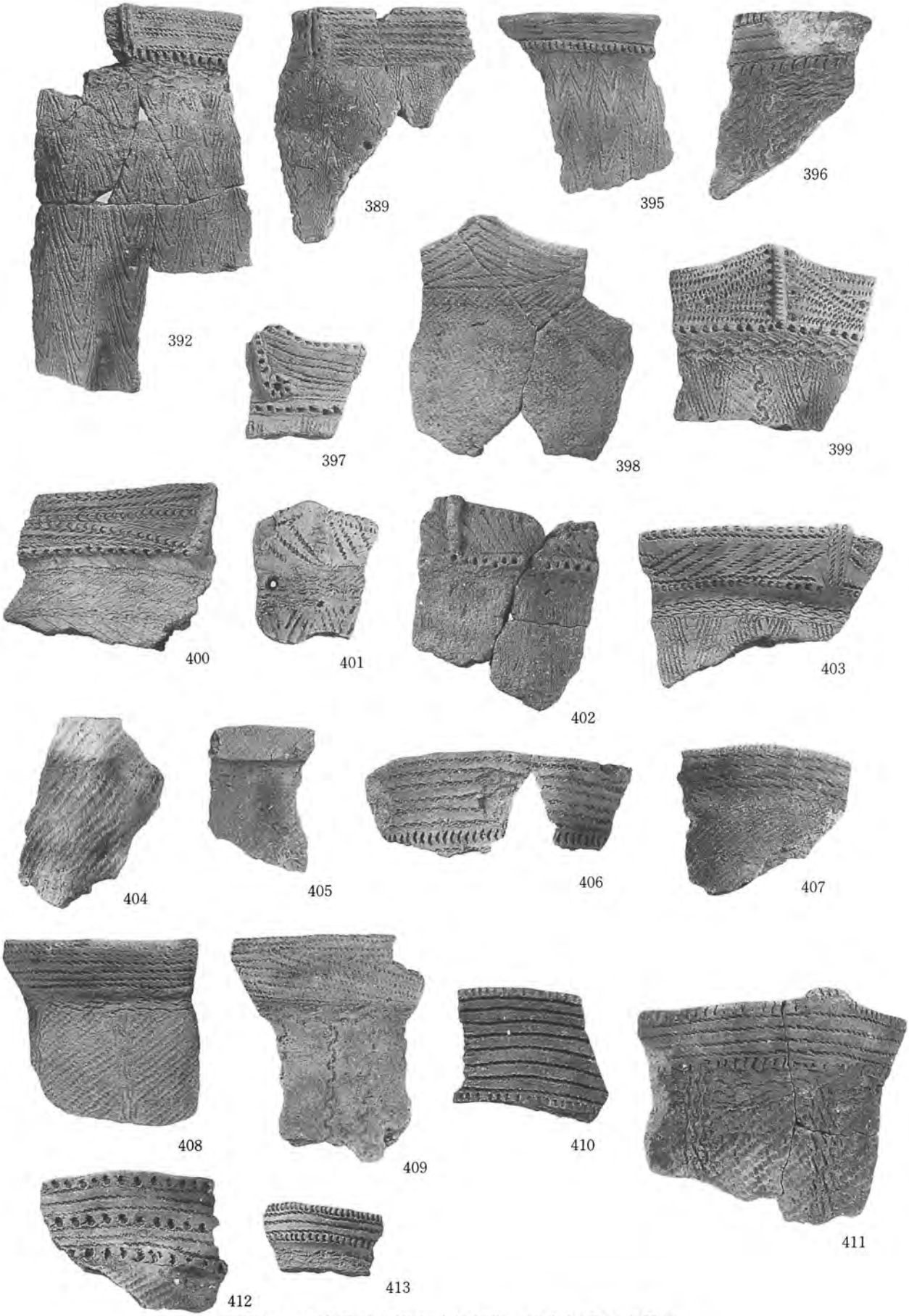
図版25　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(22)



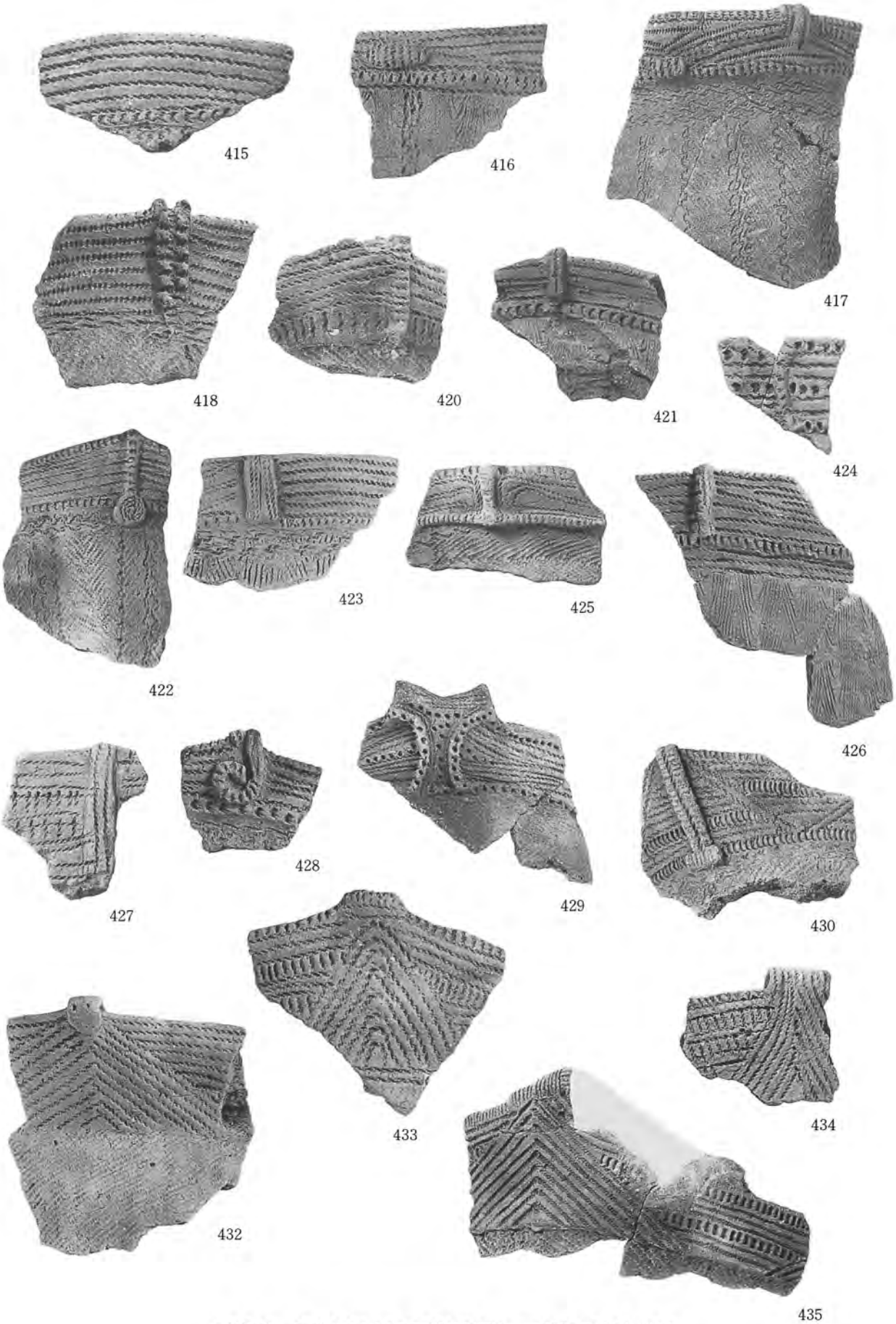
図版26　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(23)



図版27　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(24)



図版28　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(25)



図版29　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(26)

437

273

274

276

277

278

279

440

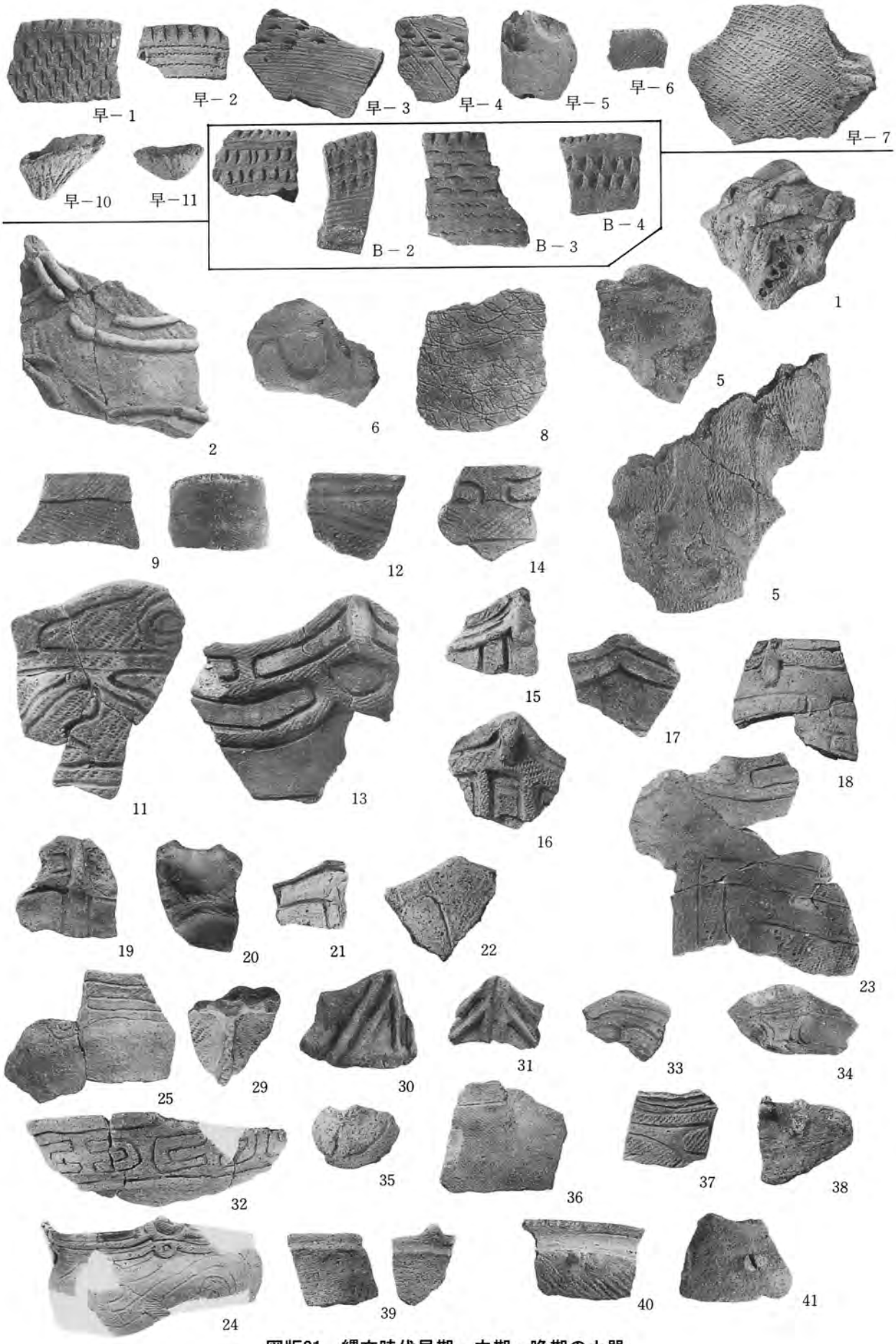
439

442

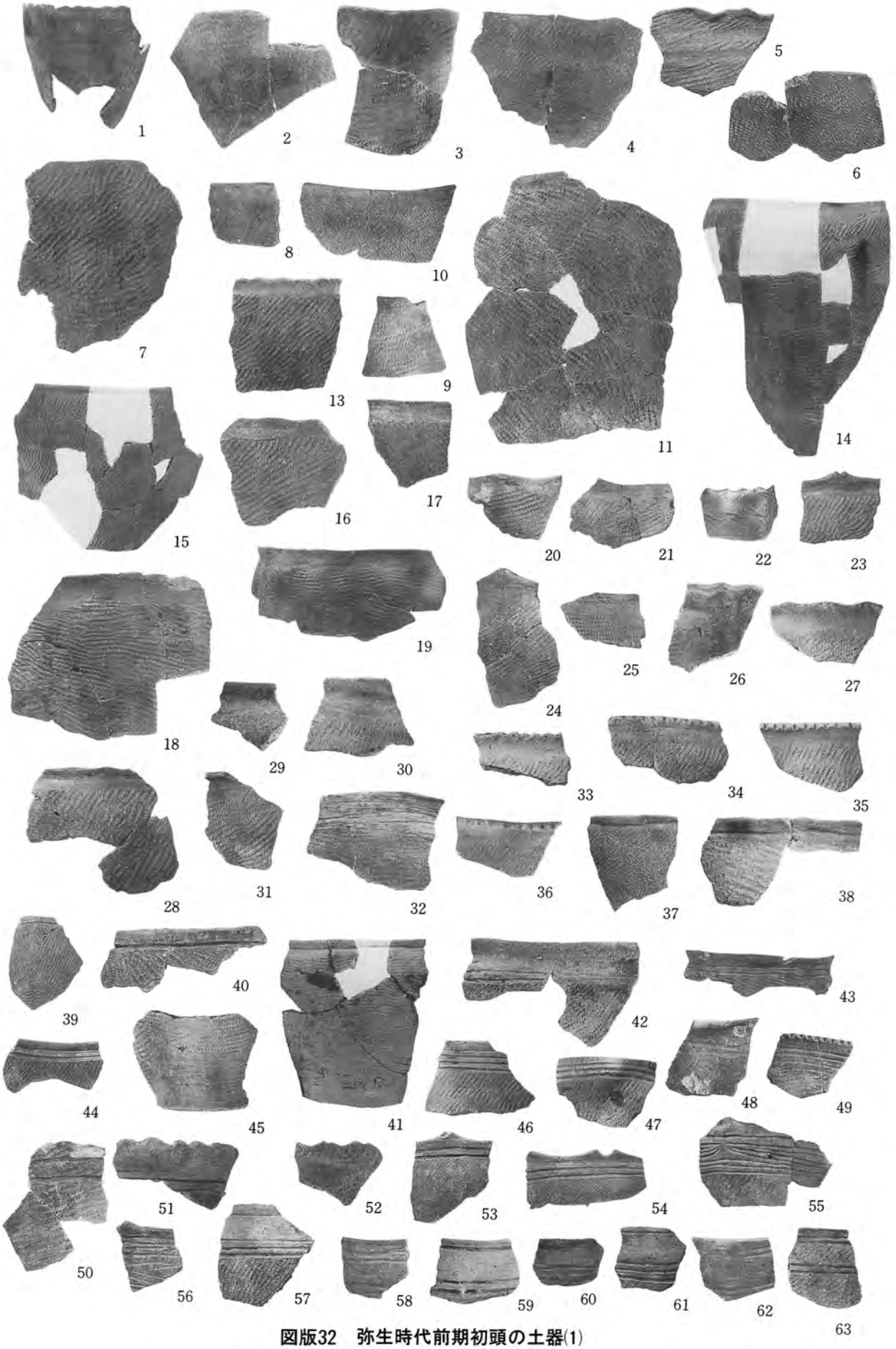
441

438

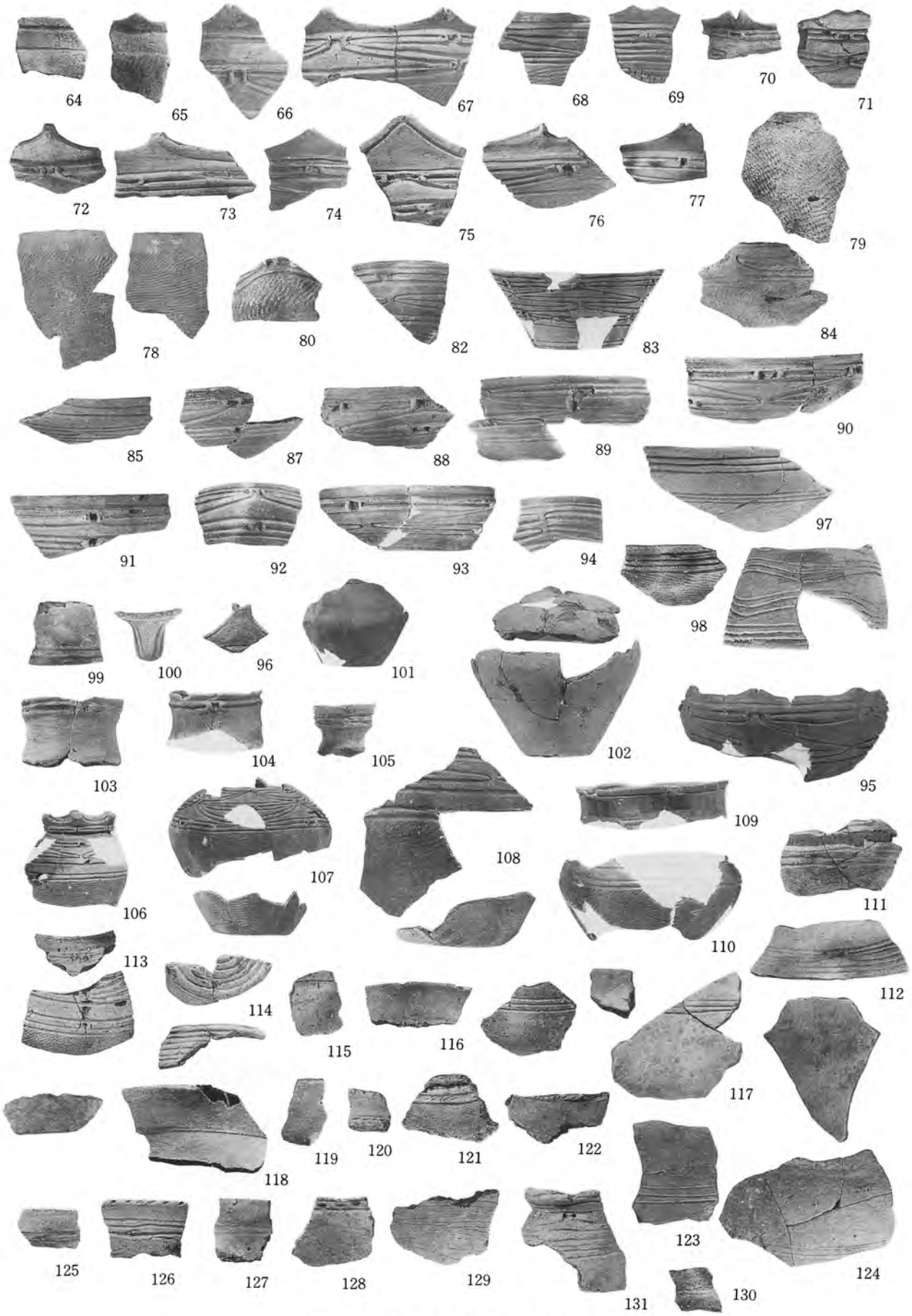
図版30　C捨場出土縄文時代前期～中期初頭の土器(27)



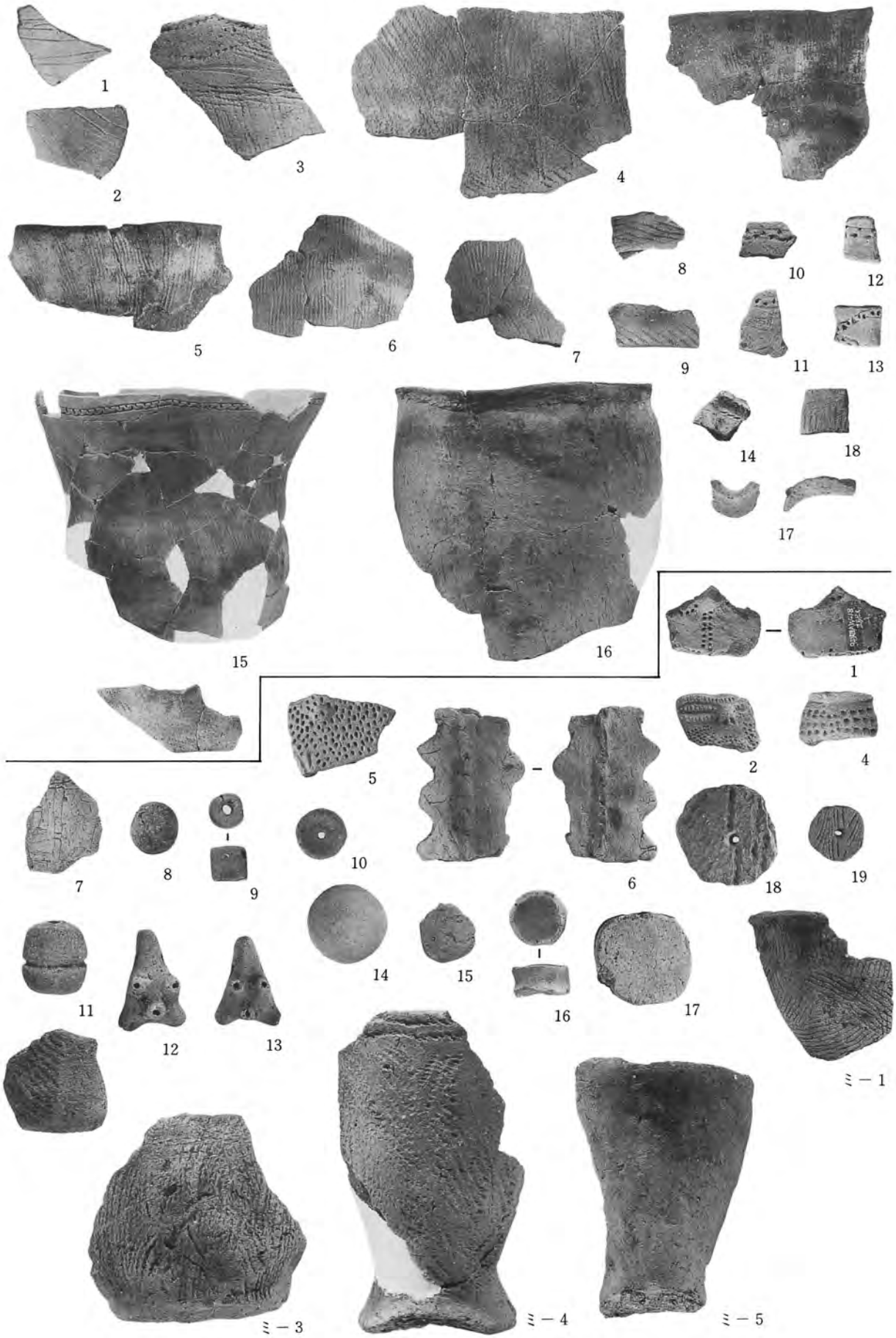
図版31　縄文時代早期・中期～晩期の土器



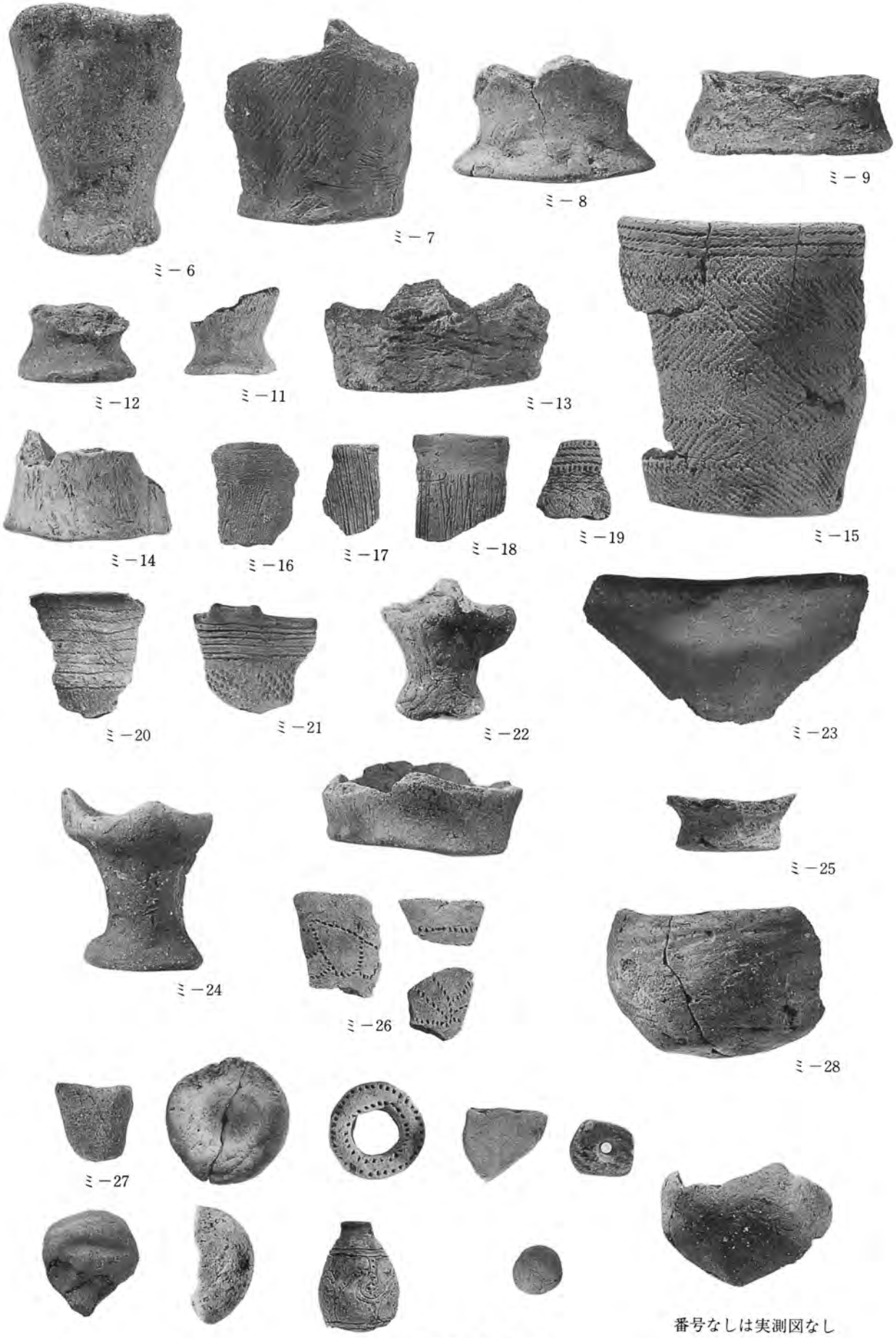
図版32　弥生時代前期初頭の土器(1)



図版33　弥生時代前期初頭の土器(2)

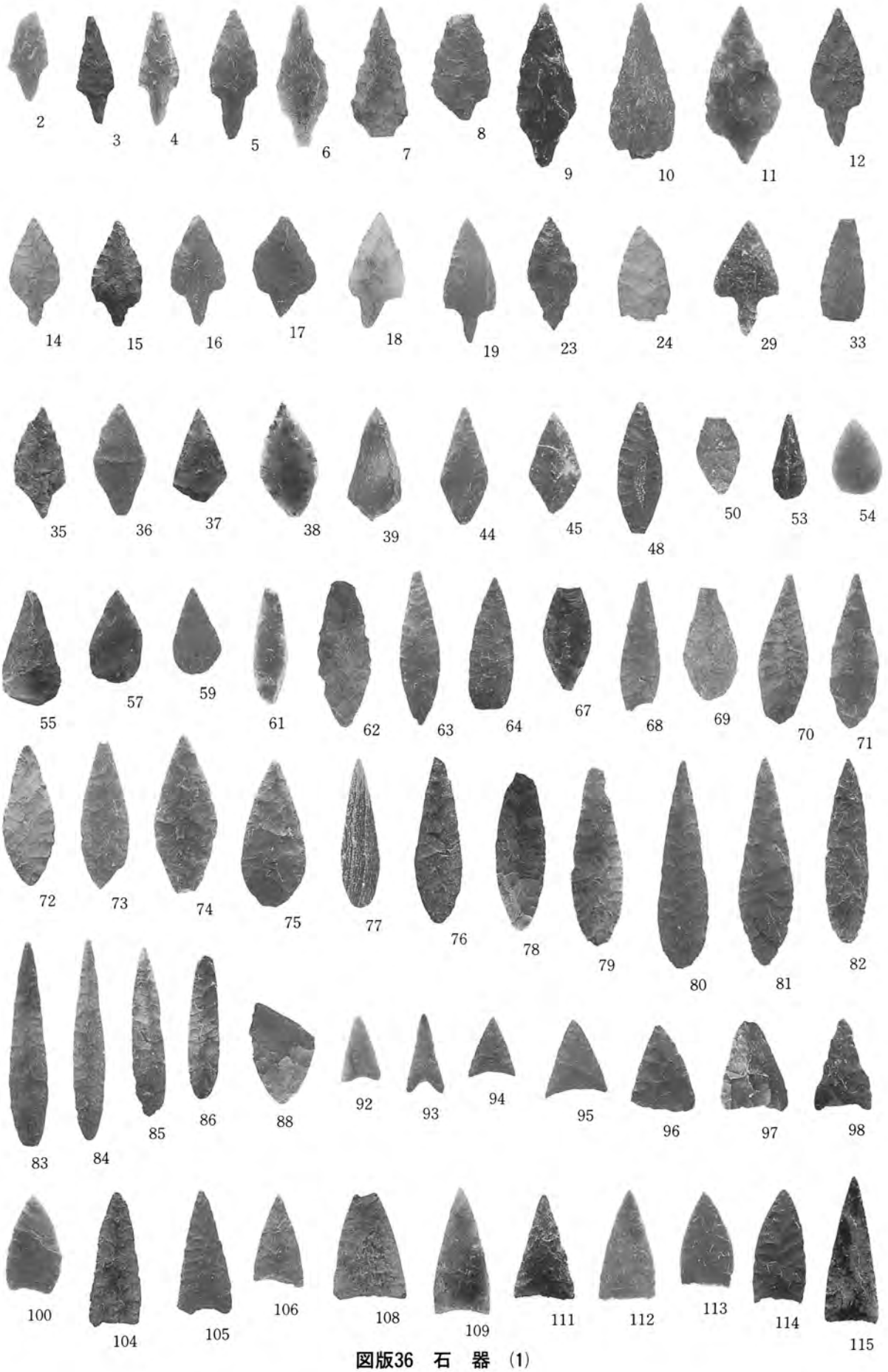


図版34　弥生時代後期以降の土器・土製品(1)

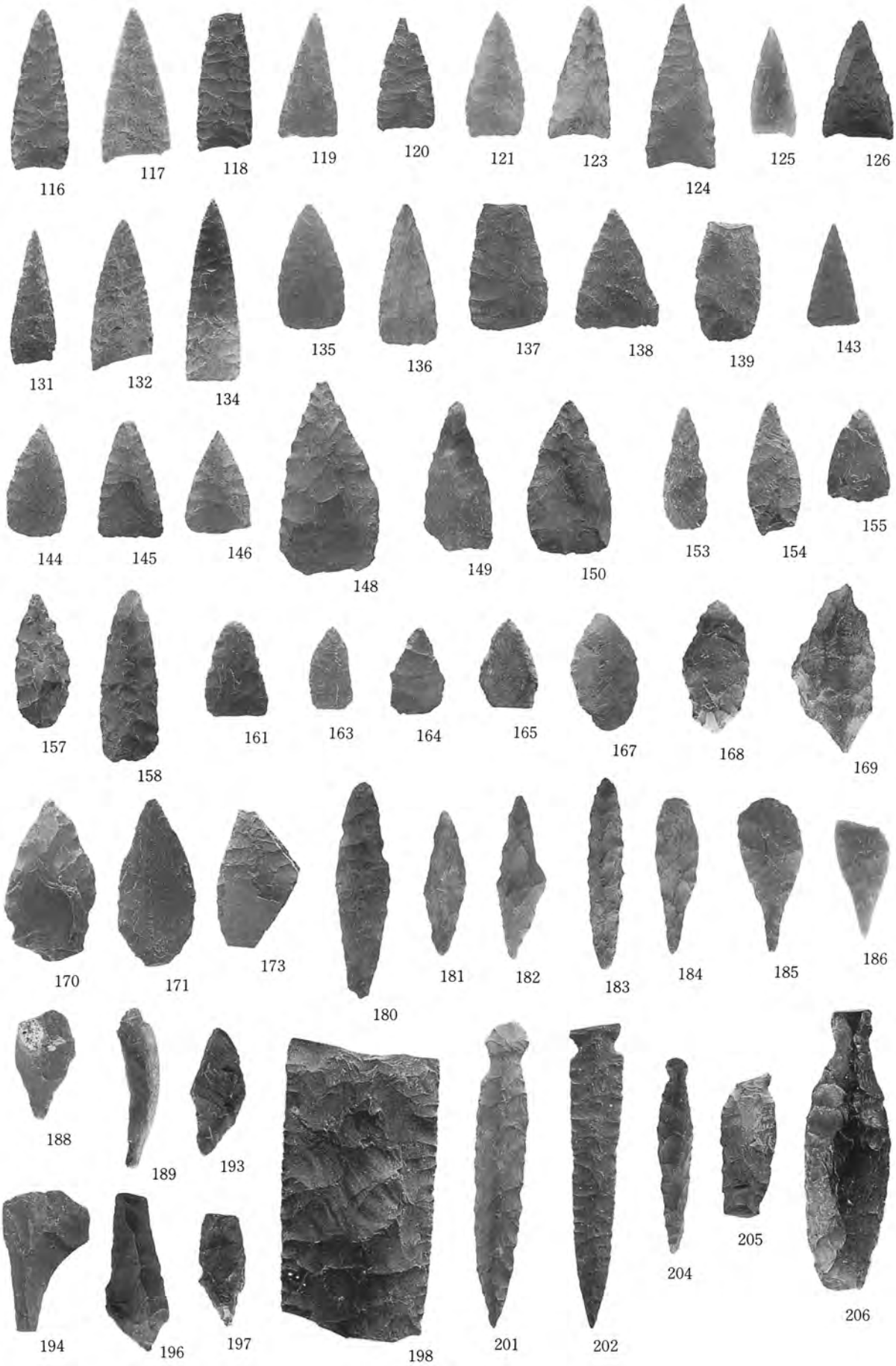


番号なしは実測図なし

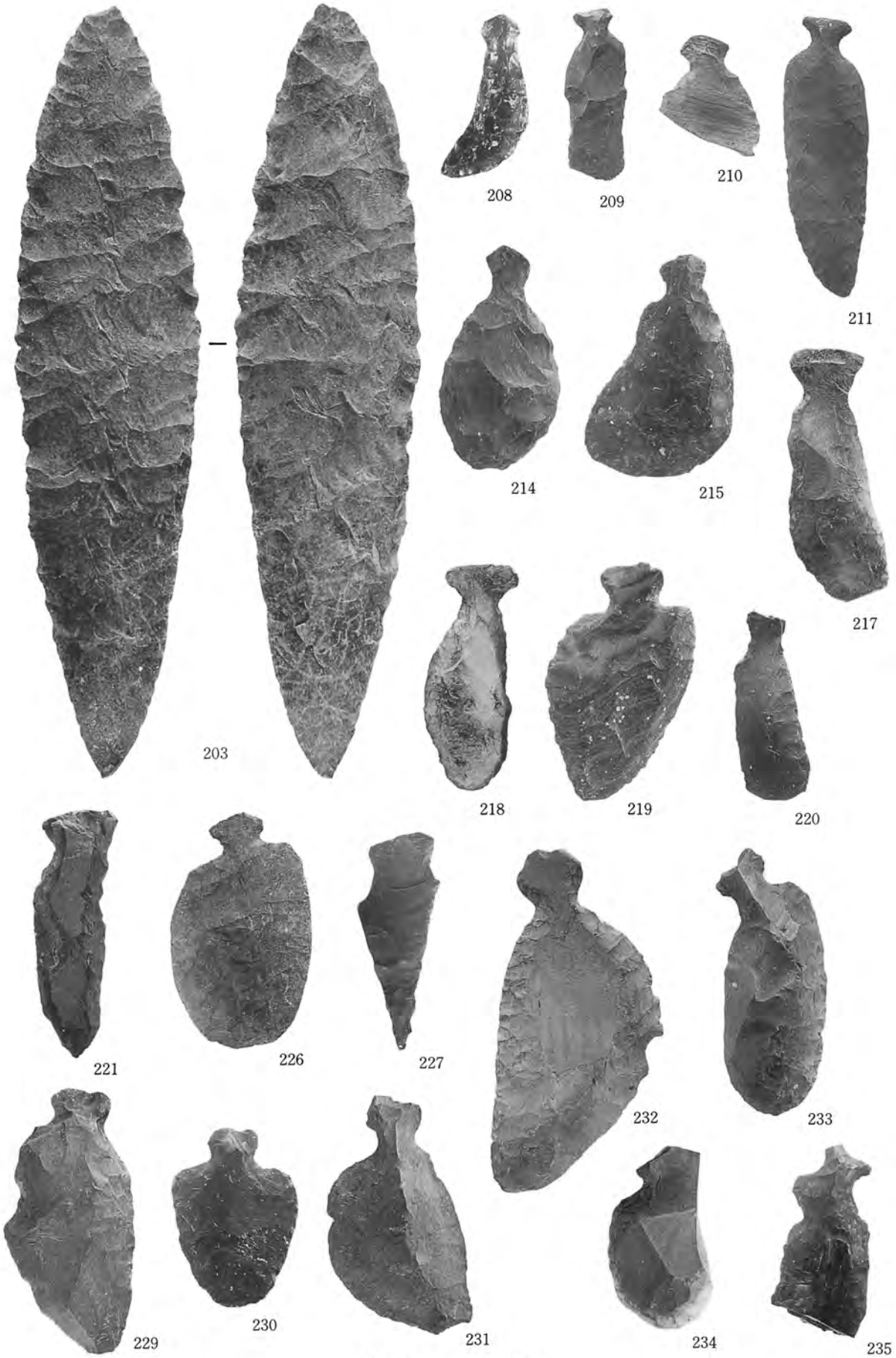
図版35　ミニ土製品２


2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
14
15
16
17
18
19
23
24
29
33
35
36
37
38
39
44
45
48
50
53
54
55
57
59
61
62
63
64
67
68
69
70
71
72
73
74
75
77
76
78
79
80
81
82
83
84
85
86
88
92
93
94
95
96
97
98
100
104
105
106
108
109
111
112
113
114
115

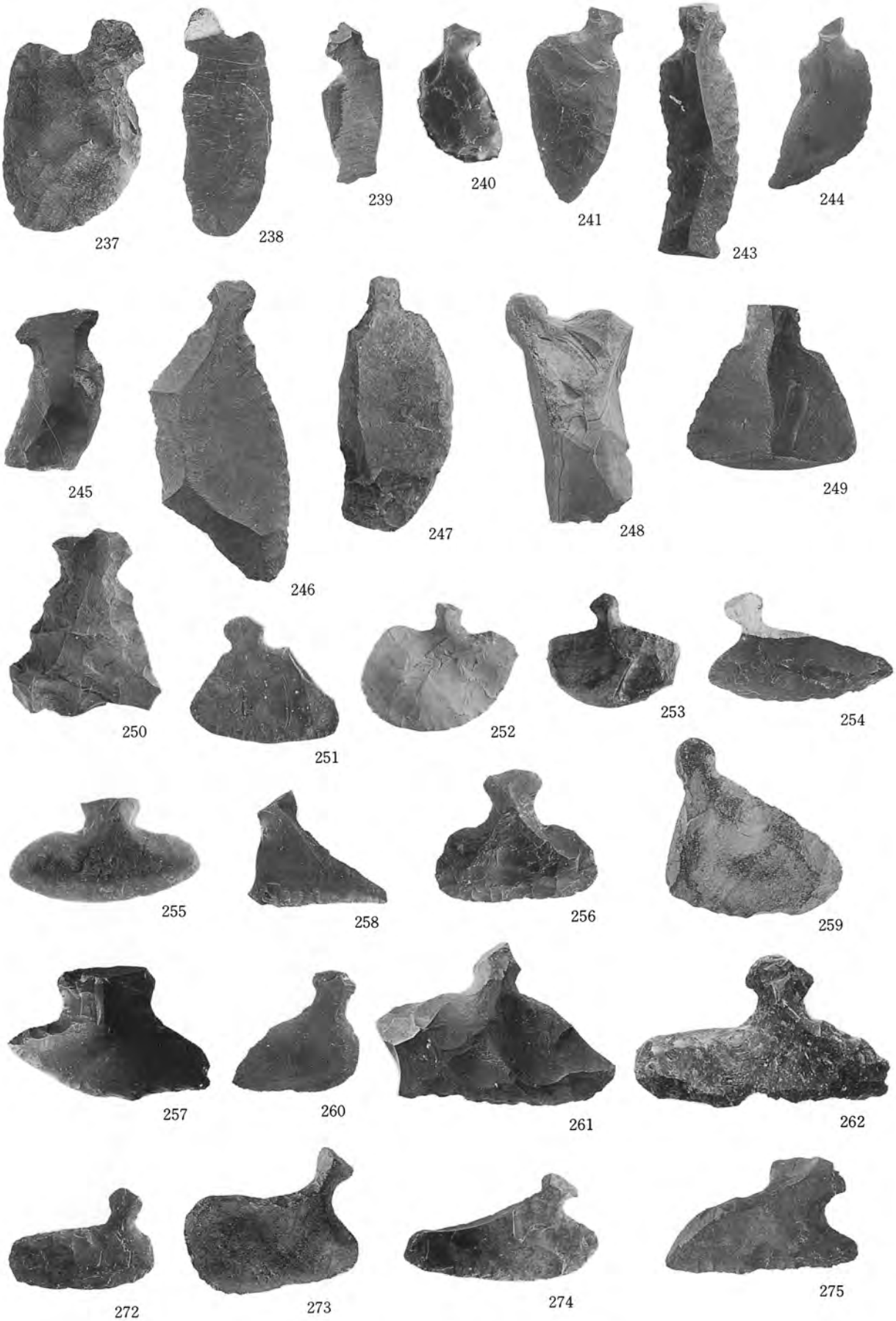
図版36　石　器　(1)


116
117
118
119
120
121
123
124
125
126
131
132
134
135
136
137
138
139
143
144
145
146
148
149
150
153
154
155
157
158
161
163
164
165
167
168
169
170
171
173
180
181
182
183
184
185
186
188
189
193
194
196
197
198
201
202
204
205
206

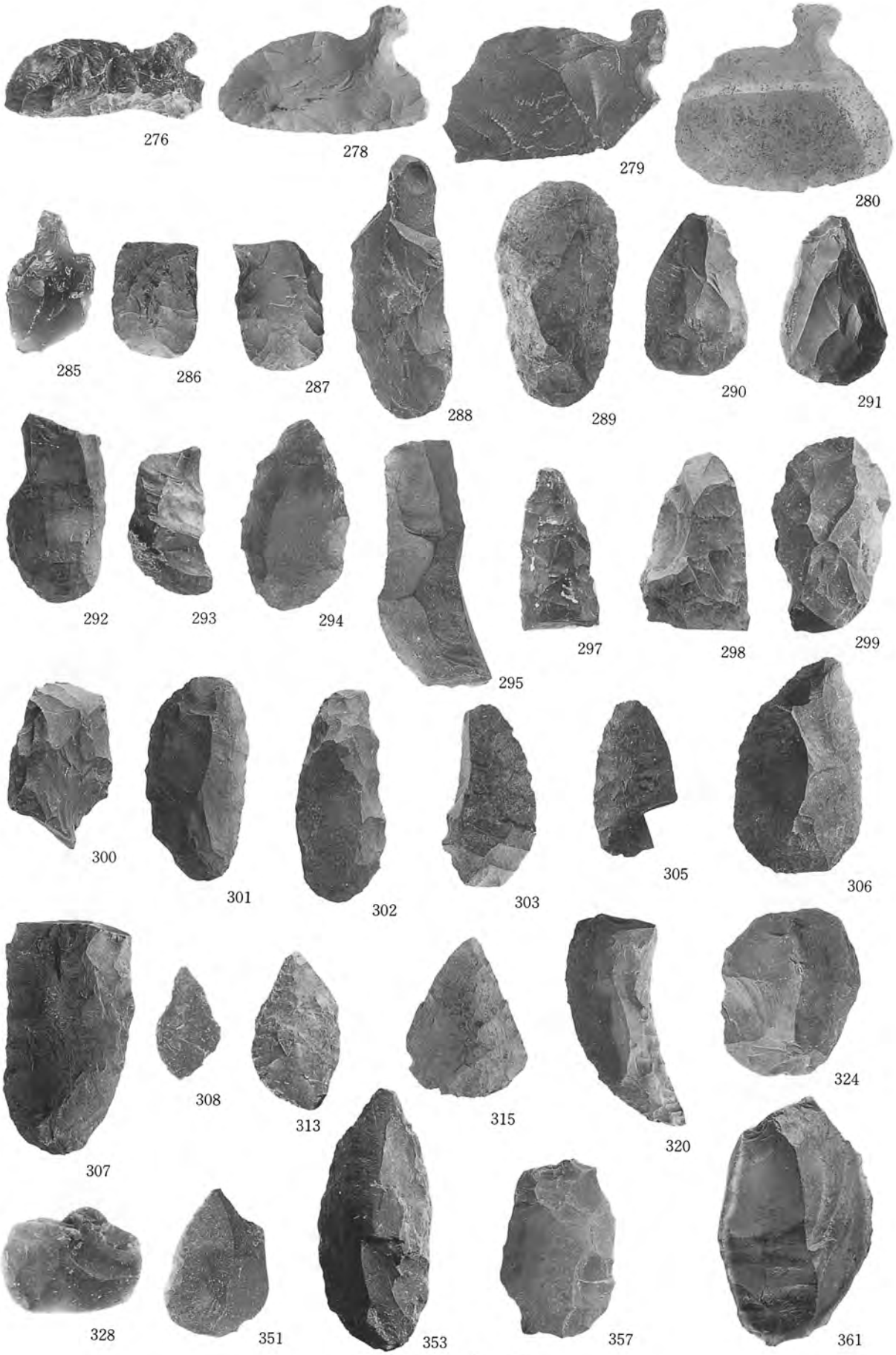
図版37　石　器　(2)


203
208
209
210
211
214
215
217
218
219
220
221
226
227
229
230
231
232
233
234
235

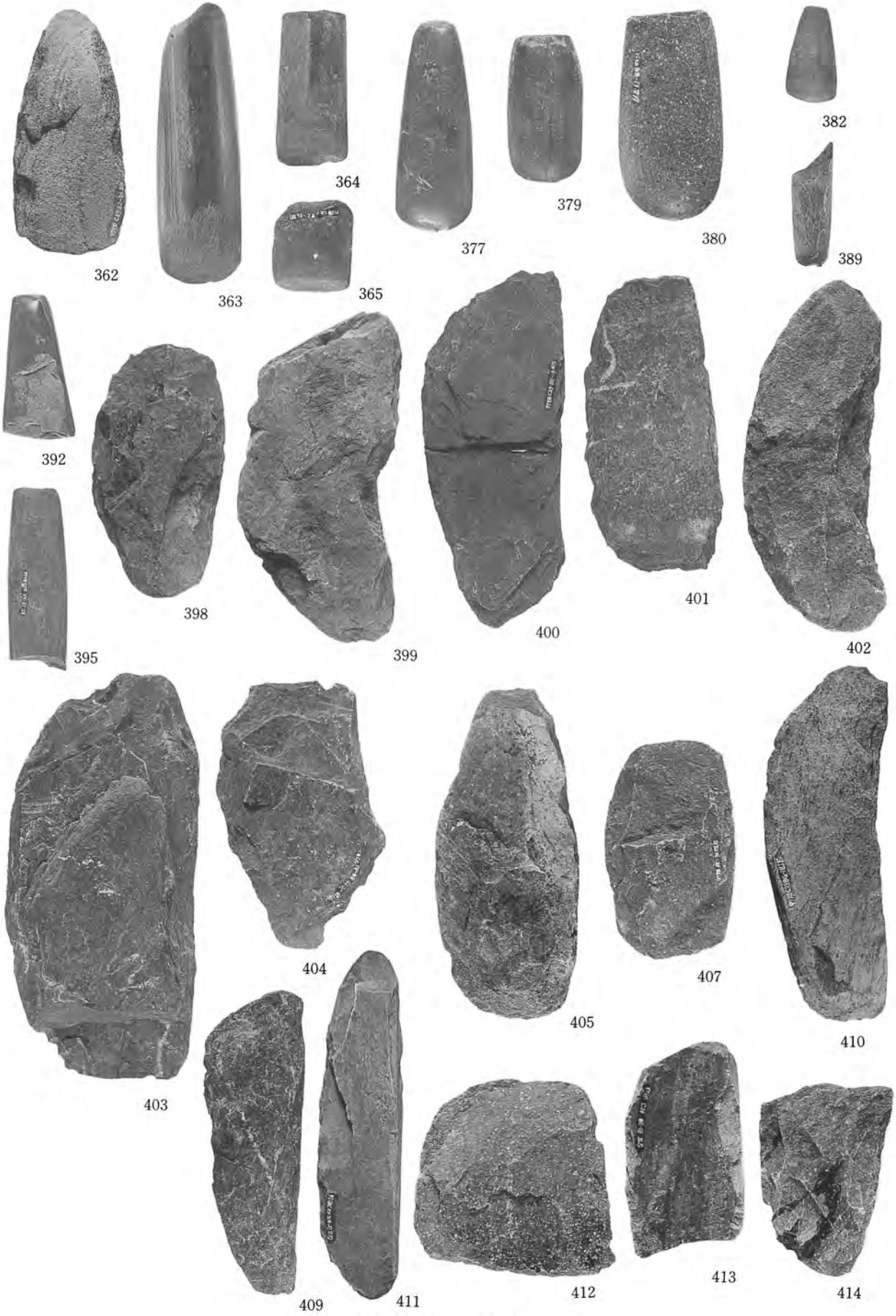
図版38　石　器　(3)


237
238
239
240
241
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
258
256
259
257
260
261
262
272
273
274
275

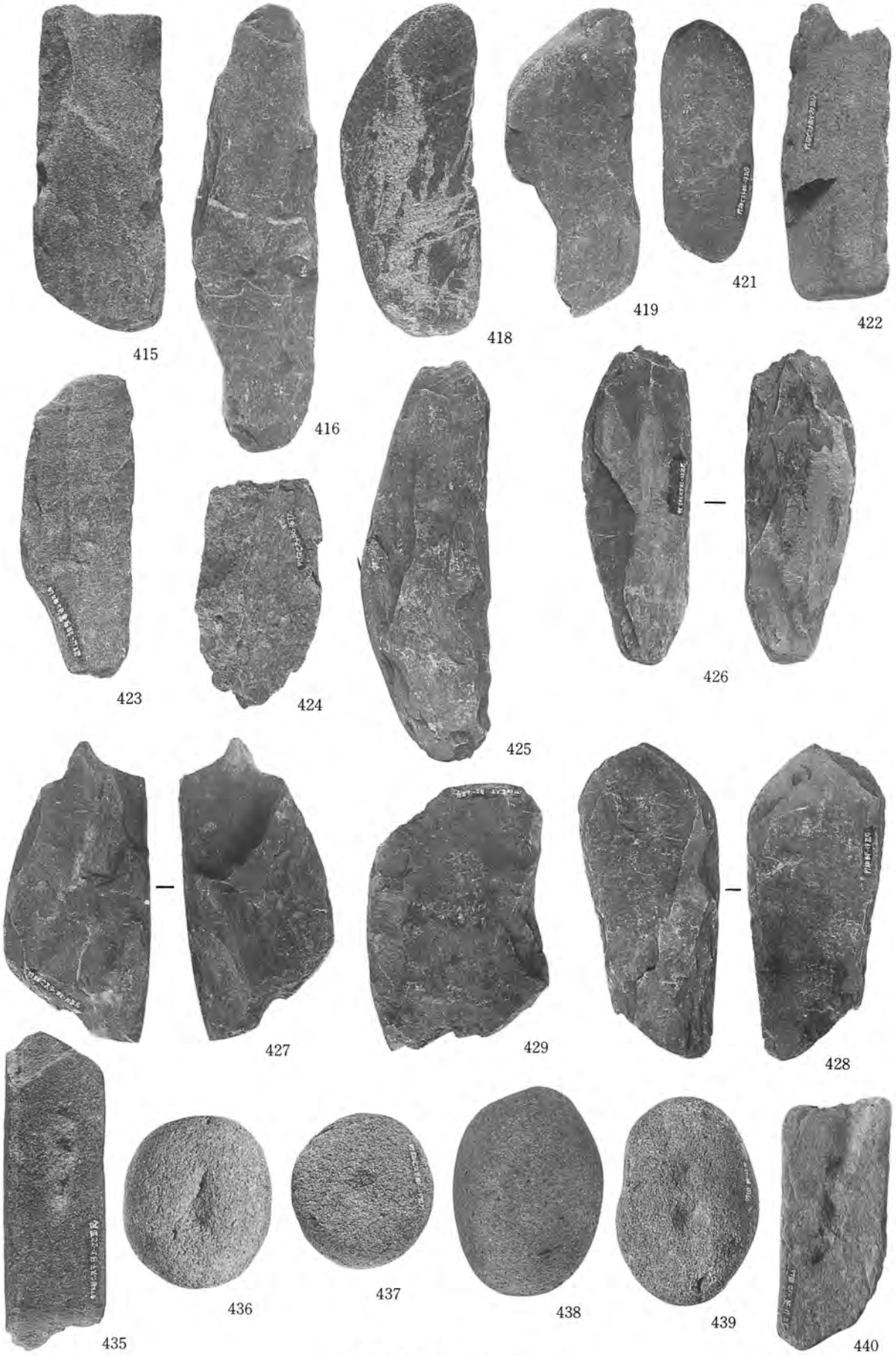
図版39　石　器　(4)


276
278
279
280
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
297
298
299
300
301
302
303
305
306
307
308
313
315
320
324
328
351
353
357
361

図版40　石　器　(5)


362
363
364
365
377
379
380
382
389
392
395
398
399
400
401
402
403
404
405
407
409
410
411
412
413
414

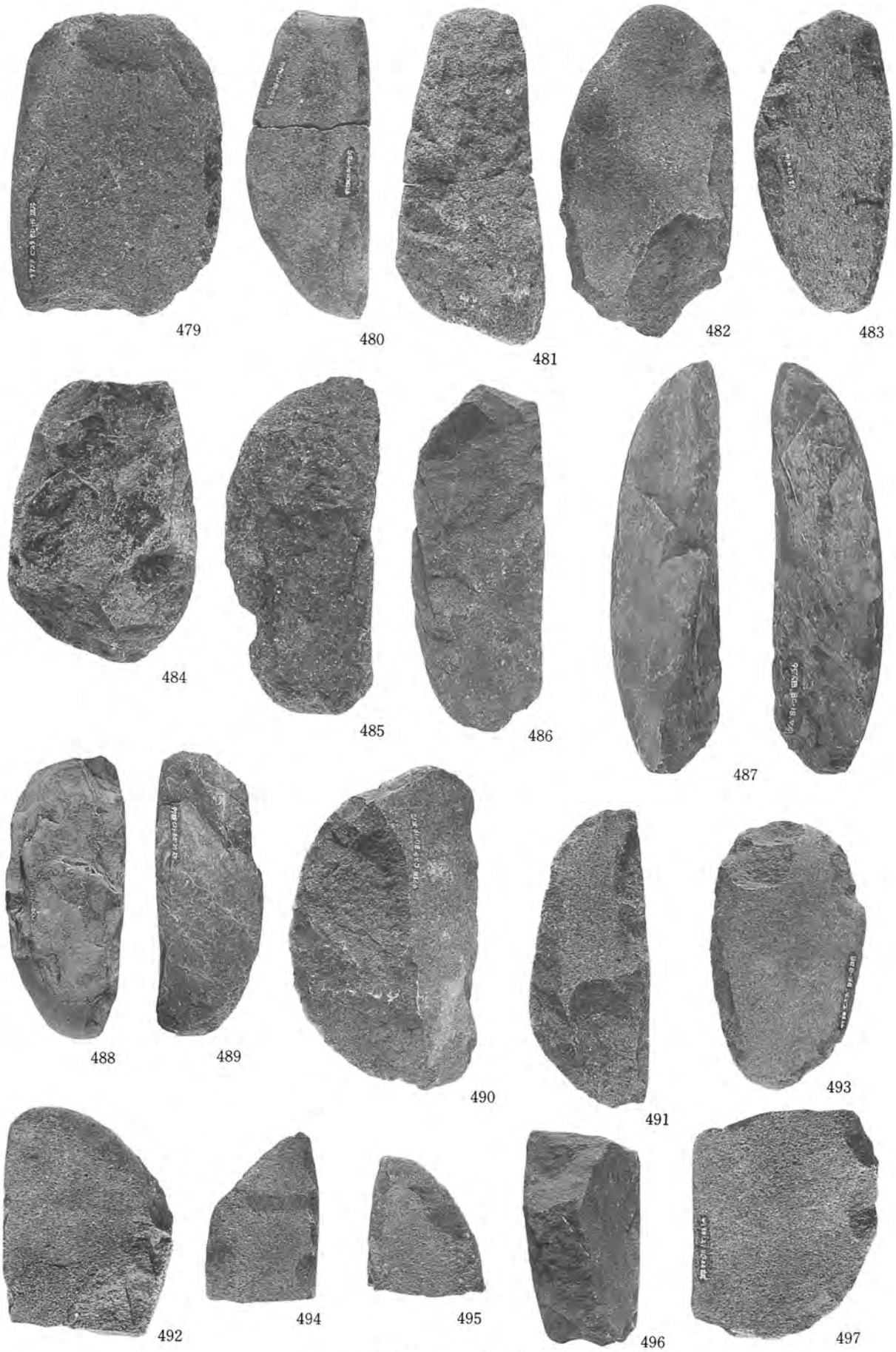
図版41　石　器　(6)


415
416
418
419
421
422
423
424
425
426
427
428
429
435
436
437
438
439
440

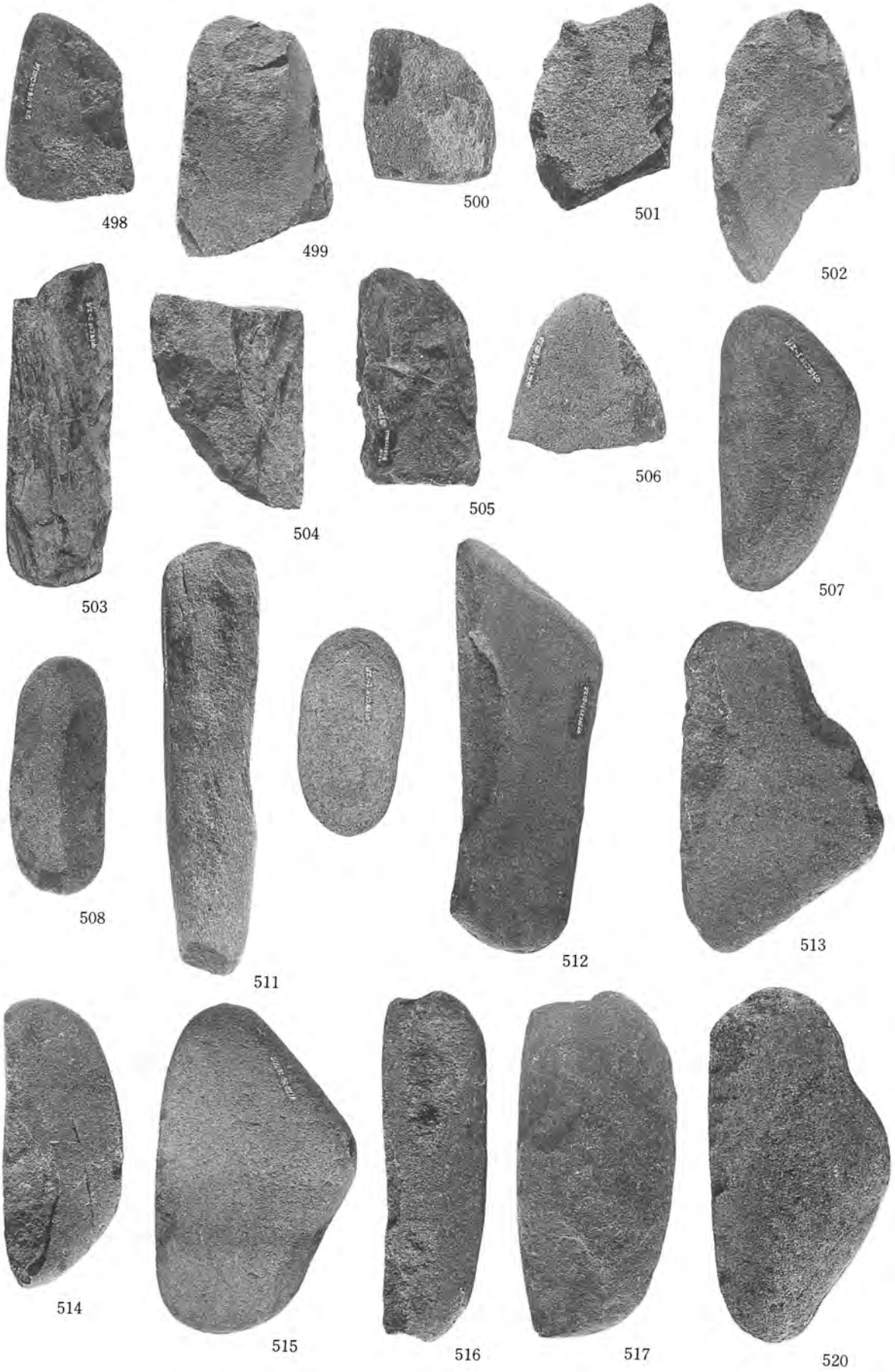
図版42　石　器　(7)

441
442
443
444
446
447
448
450
451
452
453
455
456
457
458
459
464
467
470
474
471
472
473
475
478
477

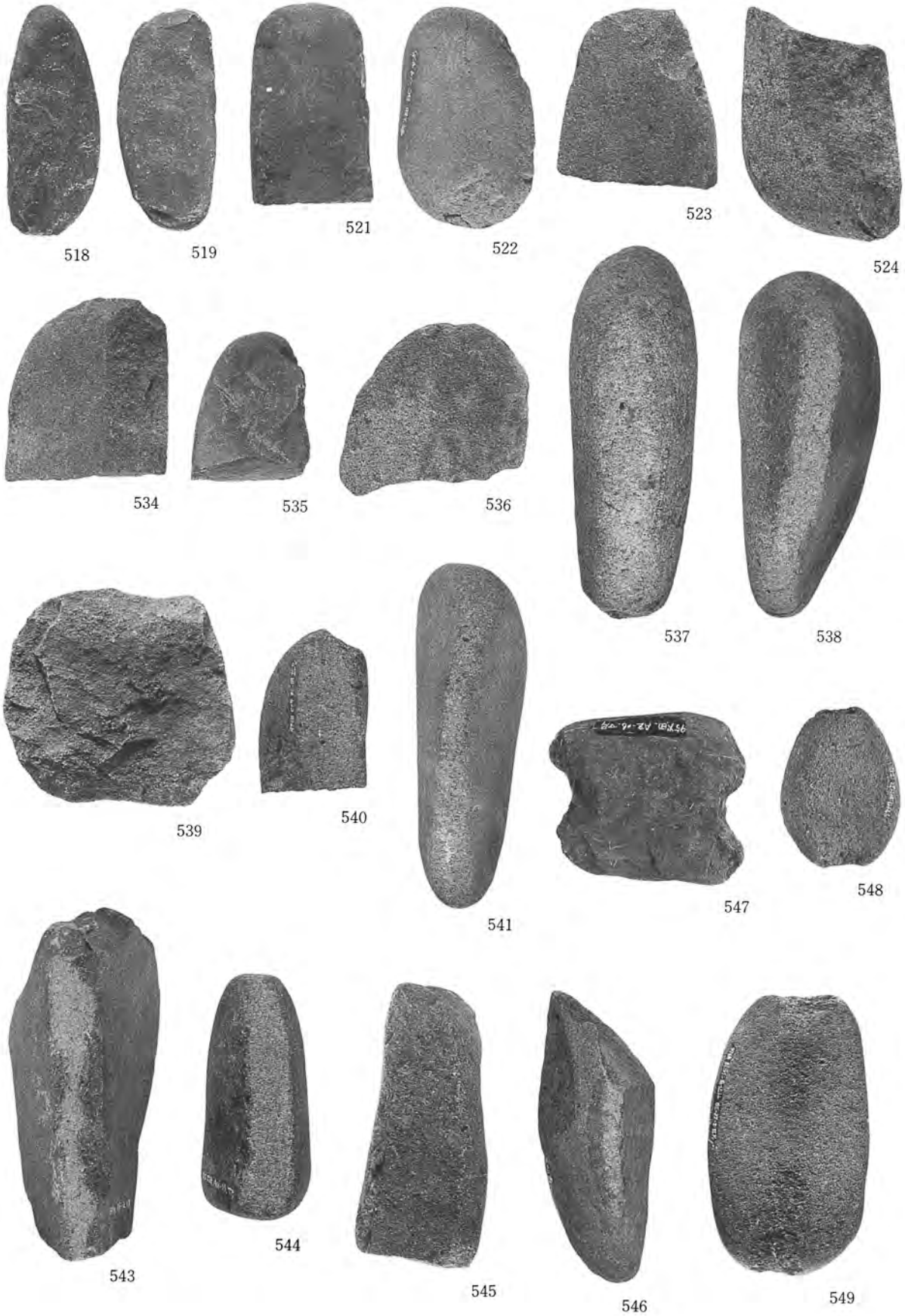
図版43　石　器　(8)


479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497

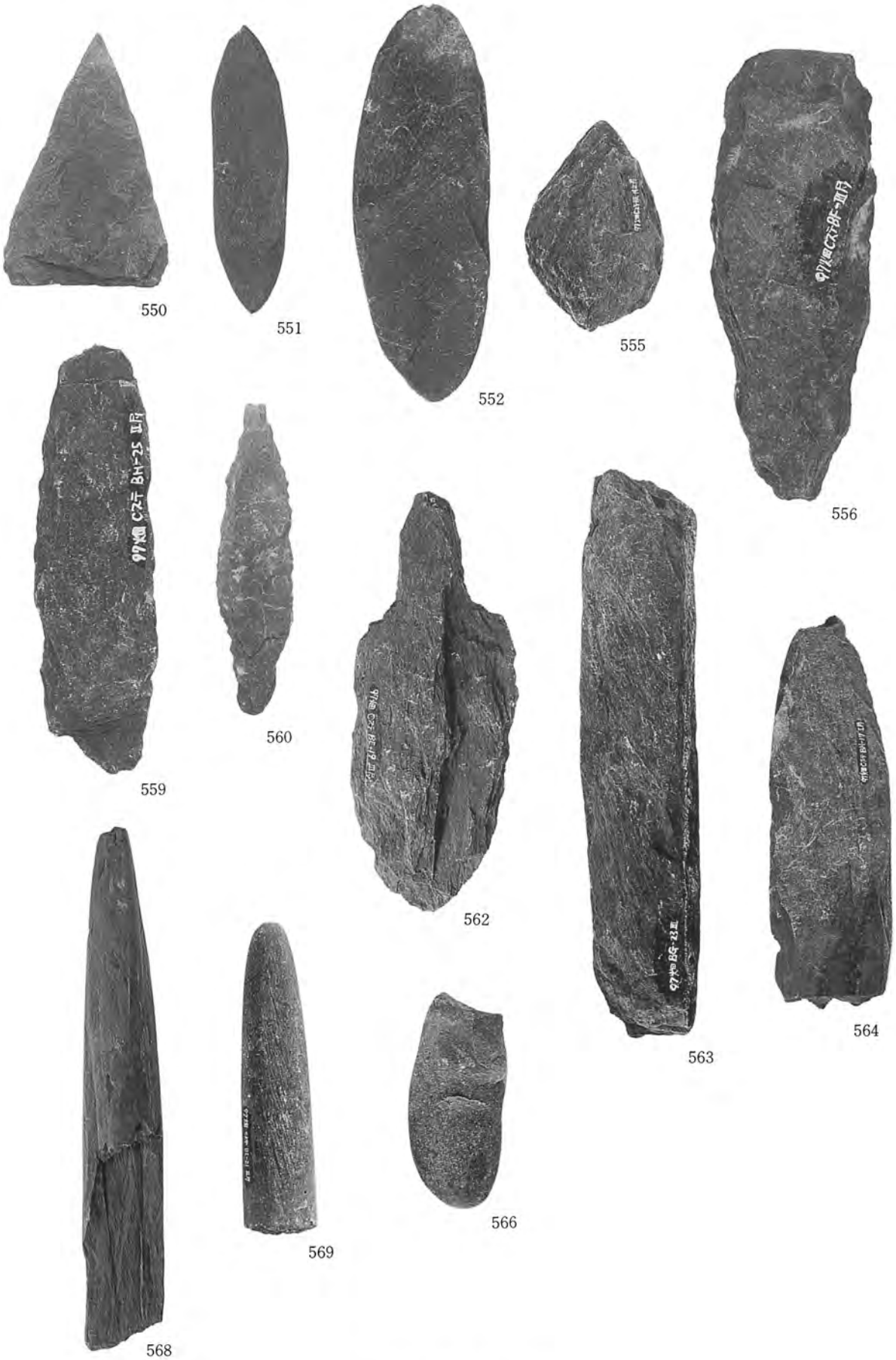
図版44　石　器　(9)


498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
511
512
513
514
515
516
517
520

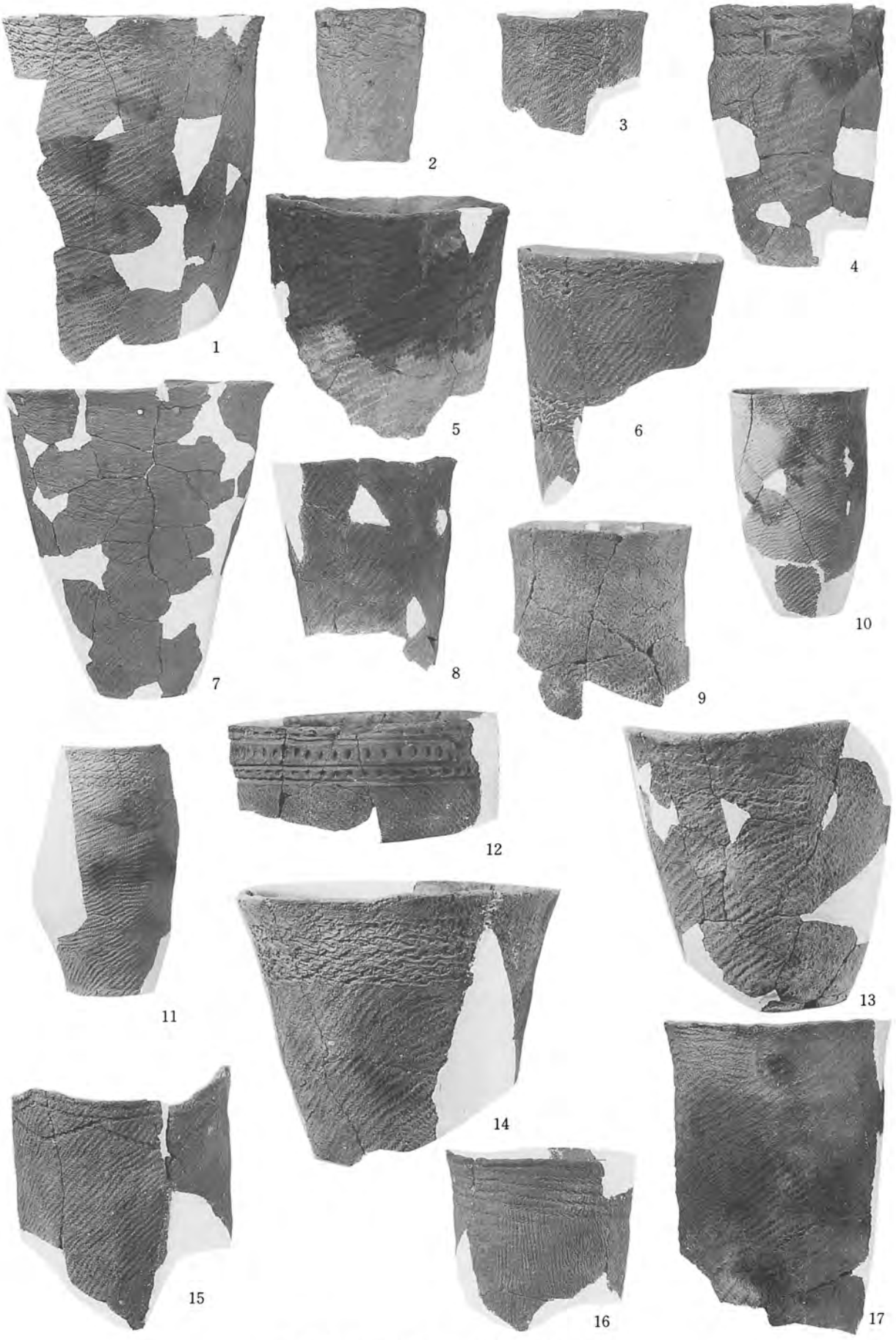
図版45　石　器 (10)


518
519
521
522
523
524
534
535
536
537
538
539
540
541
547
548
543
544
545
546
549

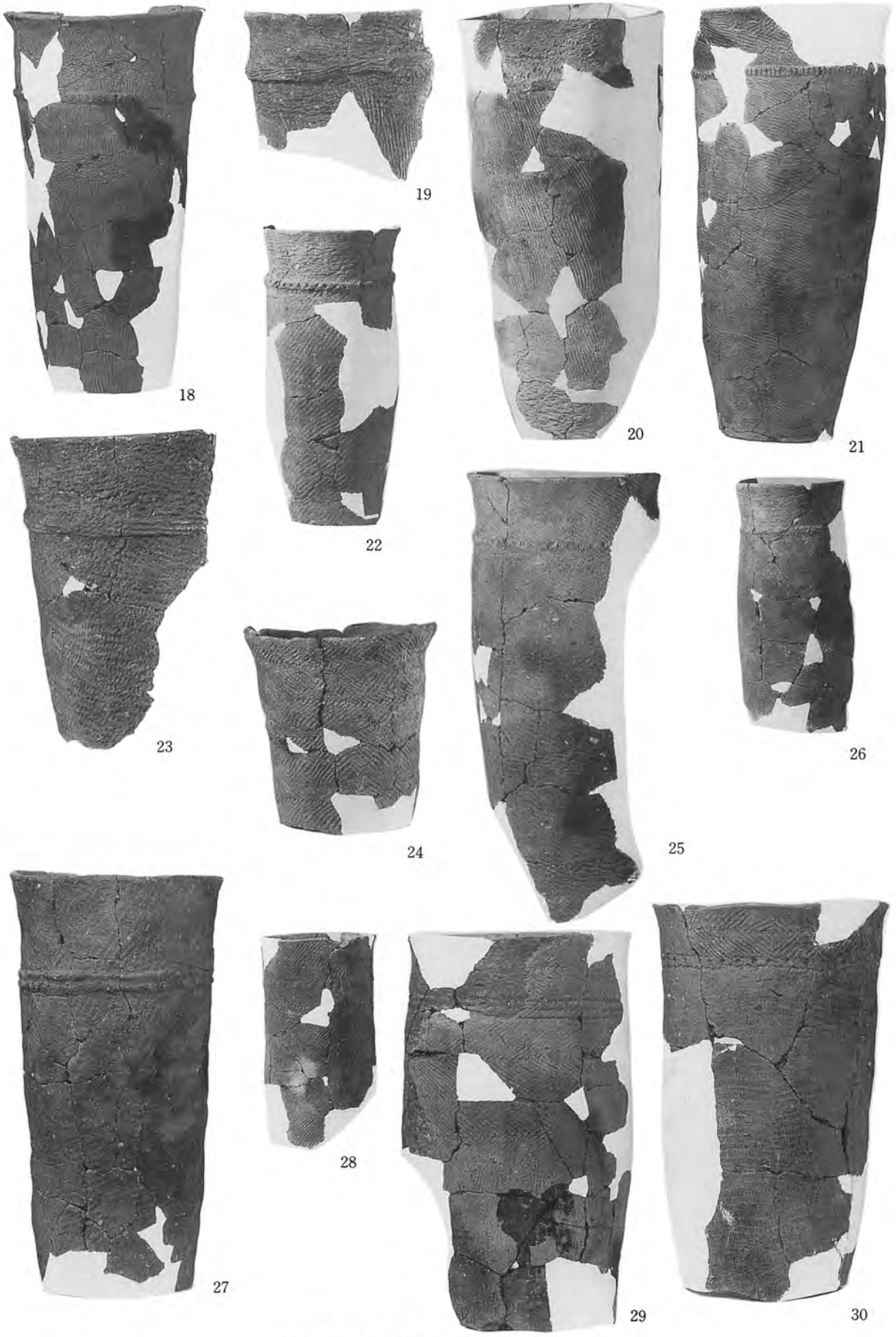
図版46　石　器 (11)



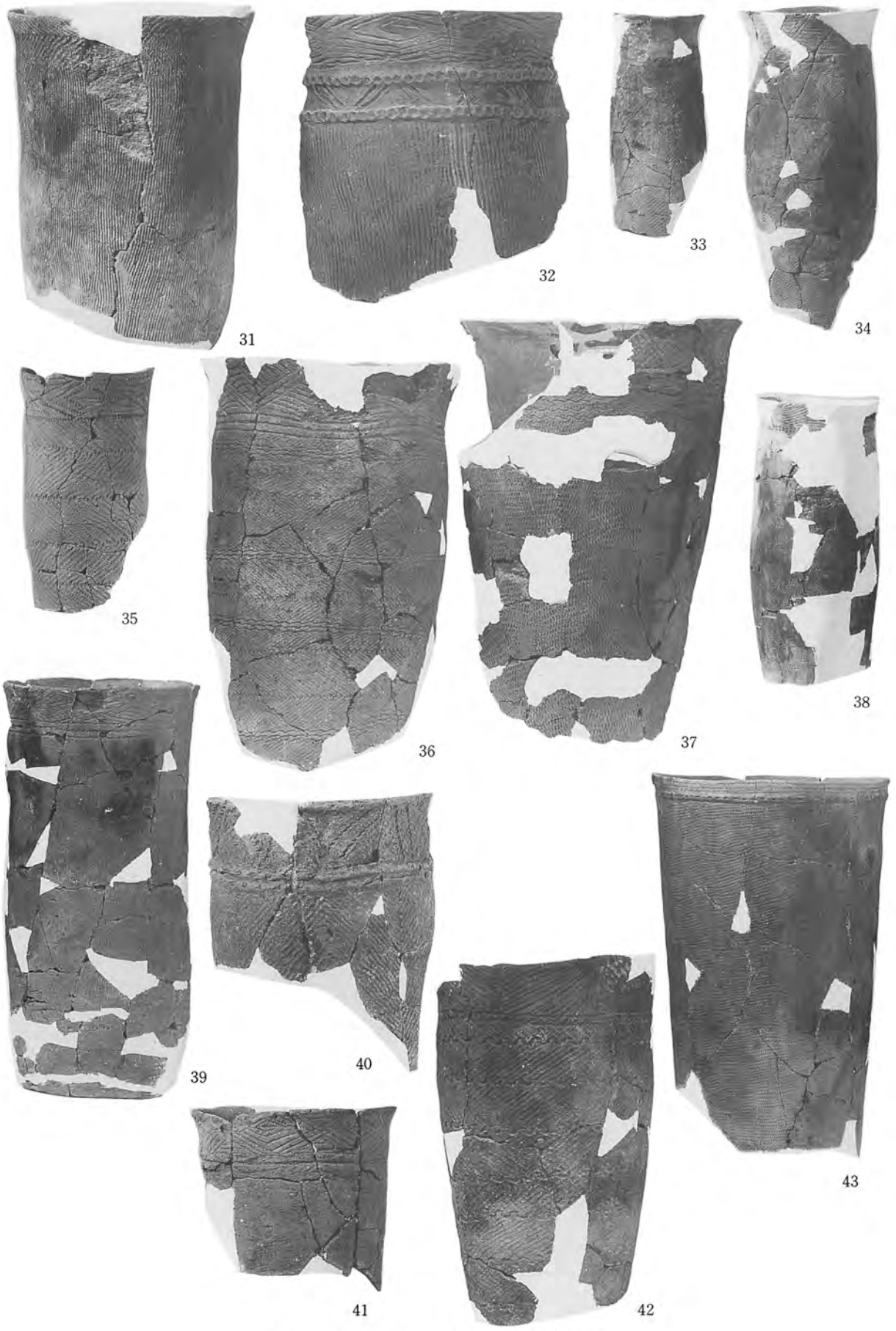
図版47　石　器 (12)



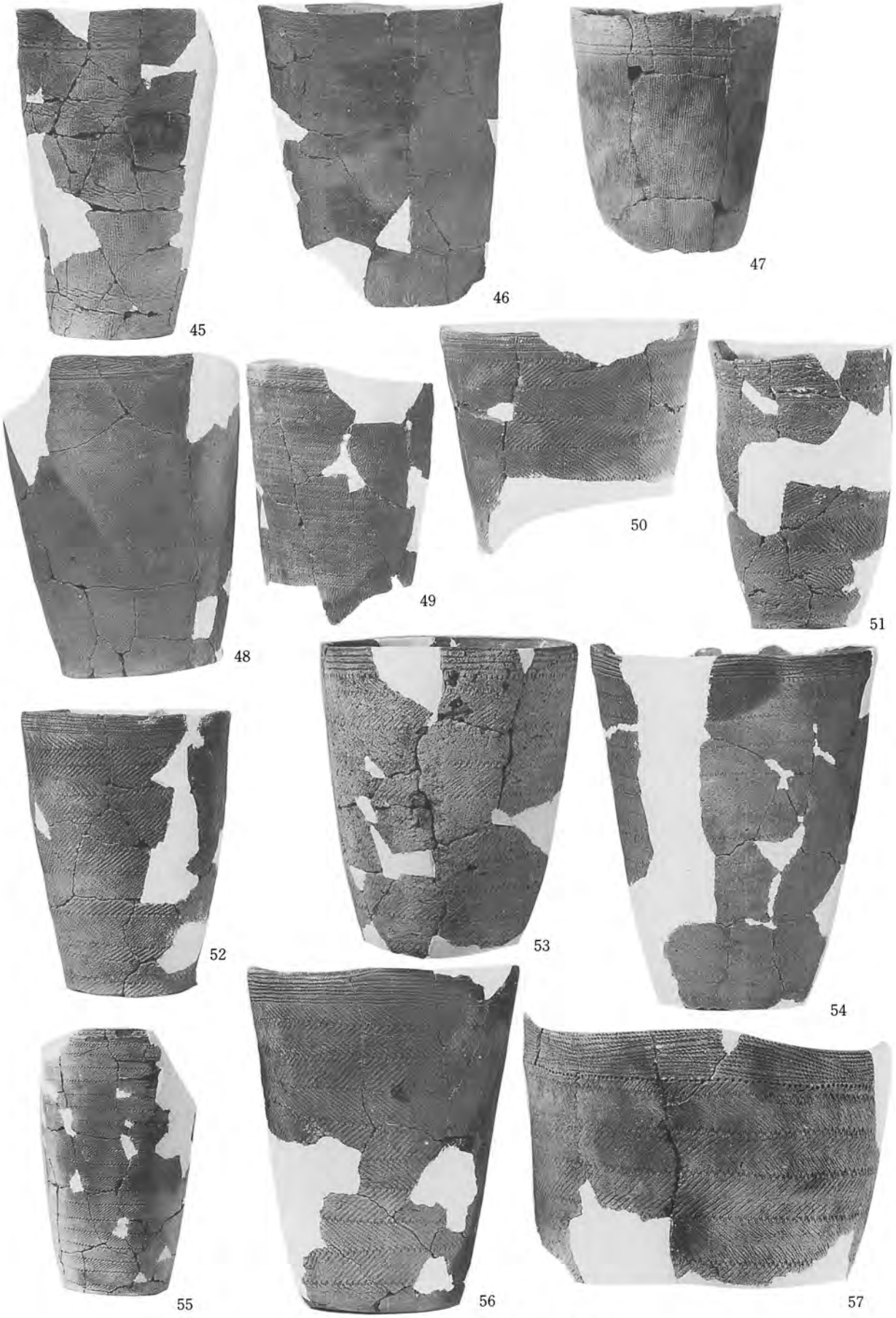
図版48　B捨場（西捨場）出土土器(1)



図版49　B捨場（西捨場）出土土器(2)



図版50　B捨場（西捨場）出土土器(3)



図版51　B捨場（西捨場）出土土器(4)

図版52　B捨場（西捨場）出土土器(5)

報告書抄録

ふりがな	はたないいせき
書名	畑内遺跡Ⅵ
副書名	八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第276集
編著者名	木村鐵次郎・笹森一朗・茅野嘉雄
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038－0042　青森県青森市新城字天田内152－15　TEL　017－788－5701
発行年月日	西暦2000年（平成12年）3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はたないいせき 畑内遺跡	あおもりけんさんのへぐん 青森県三戸郡 なんごうむらおおあざしま 南郷村大字島 もりあきはたない 守字畑内4、 ほか 外	02448	65002	40° 22′ 50″	141° 22′ 20″	19940926 ～ 19941111 19950703 ～ 19951102 19980501 ～ 19981114	2,500m² 9,200m² 15,000m²	八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑内遺跡	散布地	縄文時代 早期 前期 中期 後期 晩期 弥生時代 前期 後期 古代	縄文時代前期の捨て場 1箇所 遺物散布地 遺物散布地(平安時代)	縄文土器 （早・前・中・後・晩期） 弥生土器 （前・後期） 石器 石鏃・石槍・石錐・石篦・石匙・不定形石器・剥片・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・凹石 土製品 土偶・耳飾り・不明土製品・土玉・ミニチュア・円盤状土製品 石製品 石棒・石刀 土師器 ダンボール箱　650箱	○縄文時代前期末主体。（円筒下層d1～d2式） ○円筒土器に混じって東北南部の大木式土器（6～7a式並行）と北陸地方の土器（朝日下層式～新保式並行）が出土している。 ○弥生時代では前期初頭の砂沢式並行期の土器に伴って遠賀川式系土器が出土している。 ○弥生時代後期では広義の天王山式系土器と後北C2・D式土器が出土している。 ○敲磨器類の折れ面にミガキの痕跡のあるものが出土している。

青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第276集

畑内遺跡Ⅵ

－八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う遺跡発掘調査報告書－

発行年月日　平成12年３月30日
発　　行　青森県教育委員会
〒030-8540　青森市新町二丁目３－１
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042　青森市新城字天田内152-15
TEL 017－788－5701　FAX 017－788－5702
印 刷 所　高金印刷株式会社
〒038-0015　青森市千刈二丁目１－30
TEL 017－781－0519・2244

活彩あおもり
―輝くあおもり新時代―